茨城県教育財団文化財調査報告第74集

一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

柏木古墳群

平成4年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第74集

一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

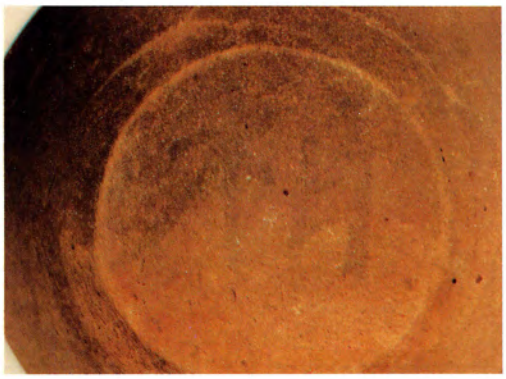
柏木古墳群（かしわぎこふんぐん）

平成4年3月

財団法人 茨城県教育財団

写真１　(上)遺跡遠景 － 調査後

　　(下)遺跡全景 － 調査後



第65号住居跡出土遺物

第 7 号住居跡
出土遺物墨書土器

第17号住居跡
出土遺物墨書土器

第31号住居跡
出土遺物墨書土器

第75号住居跡
出土遺物墨書土器

序

茨城県は，次の時代の到来を見越して長期的な展望のもとに，県土の基盤整備を行っておりますが，その一環として，農業生産性の向上と流通の合理化を図ることを目的とした広域営農団地農道の整備が着々と進められております。県道新川江戸崎線道路改良工事はこの整備事業に伴い計画されたもので，その予定地内には，埋蔵文化財の包蔵地である柏木古墳群が所在しております。

このたび，財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，昭和63年9月から平成元年9月にかけて県道新川江戸崎線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は，柏木古墳群の調査成果を収録したものであり，本書が学術的な研究資料としてはもとより，教育，文化向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会，桜川村教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成4年3月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，昭和63年度から平成元年度までに，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，発掘調査を実施した茨城県稲敷郡桜川村古渡2,515番地ほかに所在する柏木古墳群の発掘調査報告書である。

2　柏木古墳群の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

平成２年度初めの組織改正により，従来の調査課(企画管理班，調査第一・二・三班，整理班)は埋蔵文化財部となり，その下に企画管理課，調査課，整理課をおき，調査課には，調査第一・二・三の三つの班をおくこととなった。

理事長		川又友三郎	昭和61年４月～昭和63年５月
		礒田　勇	昭和63年６月～
副理事長		小林　元	昭和63年４月～平成３年７月
		角田芳夫	平成３年７月～
常務理事		滑川貞雄	昭和61年４月～平成元年３月
		小林　洋	平成元年４月～平成３年３月
		本田三郎	平成３年４月～
事務局長		坂場庸克	昭和62年４月～平成元年３月
		一木邦彦	平成元年４月～
埋蔵文化財部長		石井　毅	平成２年４月～
企画管理課	課長	北沢勝行	平成２年４月～
	課長代理	水飼敏夫	平成２年４月～，(昭和62年４月～平成２年３月企画管理班)
	主任調査員	山本静男	(昭和62年４月～平成元年３月企画管理班)
	主任調査員	小河邦男	(平成元年４月～平成２年３月企画管理班)
	主任調査員	小山映一	(平成２年４月～平成３年３月)
	主任調査員	根本康弘	平成３年４月～
	係長	園部昌俊	昭和63年４月～平成３年３月
	主事	山崎初雄	(昭和60年４月～平成元年３月企画管理班)
	主事	大部　章	(昭和61年４月～平成２年３月企画管理班)
	主事	飯島康司	平成３年４月～
	主事	吉井正明	平成元年４月～

企画管理課	主事	大貫吉成	平成2年4月～
	課長	青木義夫	昭和59年4月～平成元年3月
	課長（部長兼務）	石井毅	平成元年4月～
調査課	調査第一班長	倉本富美男	昭和63年4月～平成2年3月
	主任調査員	鈴木美治	昭和63年9月～平成元年9月調査
	主任調査員	鯉渕和彦	平成元年4月～9月調査
	調査員	松浦敏	平成元年4月～9月調査
	嘱託	黒沢春彦	昭和63年9月～平成元年3月調査
整理課	課長	沼田文夫	平成2年4月～
	調査員	松浦敏	平成3年度　整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，第4章第1節「遺構及び遺物の記載方法」の項を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，須恵器（湖西窯跡）については，湖西市教育委員会 後藤 建一氏の御指導をいただいた。

5　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

目　　次

序
例　言
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査経過 …… 2
第2章　位置と環境 …… 4
　第1節　地理的環境 …… 4
　第2節　歴史的環境 …… 5
第3章　調査方法 …… 9
　第1節　地区設定 …… 9
　第2節　基本層序の検討 …… 9
　第3節　遺構確認 …… 10
　第4節　遺構調査 …… 10
第4章　遺構と遺物 …… 11
　第1節　遺跡の概要と遺構及び遺物の記載方法 …… 11
　　1　遺跡の概要 …… 11
　　2　遺構及び遺物の記載方法 …… 12
　第2節　竪穴住居跡 …… 17
　第3節　掘立柱建物跡 …… 266
　第4節　土坑 …… 286
　第5節　溝 …… 298
　第6節　遺構外出土遺物 …… 301
第5章　考　察 …… 310
　第1節　柏木古墳群における出土遺物からみた住居跡の形態と集落について …… 310
　第2節　掘立柱建物跡について …… 328
　第3節　墨書土器について …… 330
結　語 …… 335

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡位置図…… 7
第２図　調査区呼称方法概念図…… 9
第３図　基本土層図…… 9
第４図　第１・２号住居跡実測図……18
第５図　第１号住居跡竈実測図……19
第６図　第１号住居跡出土遺物実測図……20
第７図　第３号住居跡実測図……22
第８図　第３号住居跡出土遺物実測・拓影図……23
第９図　第４号住居跡実測図……24
第10図　第４号住居跡出土遺物実測・拓影図……25
第11図　第５号住居跡実測図……26
第12図　第５号住居跡出土遺物実測・拓影図……27
第13図　第６号住居跡実測図……28
第14図　第６号住居跡出土遺物実測図……29
第15図　第７号住居跡実測図……30
第16図　第７号住居跡出土遺物実測図……31
第17図　第８号住居跡実測図……33
第18図　第８号住居跡出土遺物実測図……34
第19図　第９号住居跡実測図……35
第20図　第９号住居跡出土遺物実測図(1)……36
第21図　第９号住居跡出土遺物実測図(2)……37
第22図　第10・20号住居跡実測図……40
第23図　第10号住居跡竈実測図……41
第24図　第10号住居跡出土遺物実測図……42
第25図　北東部検出住居跡重複関係図……43
第26図　第11号住居跡実測図……45
第27図　第11号住居跡出土遺物実測図……46
第28図　第12号住居跡実測図……48
第29図　第12号住居跡出土遺物実測図……49
第30図　第13号住居跡実測図……50
第31図　第14号住居跡実測図……52
第32図　第14号住居跡出土遺物実測図……53
第33図　第15号住居跡実測図……54
第34図　第15号住居跡竈実測図……55
第35図　第15号住居跡出土遺物実測図(1)……56
第36図　第15号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)……57
第37図　第15号住居跡出土遺物実測図(3)……58
第38図　第16号住居跡実測図……60
第39図　第16号住居跡出土遺物実測図……62
第40図　第17・18号住居跡実測図……63
第41図　第17・18号住居跡竈実測図……64
第42図　第17号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)……65
第43図　第17号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)……66
第44図　第18号住居跡出土遺物実測・拓影図……68
第45図　第19号住居跡実測図……70
第46図　第19号住居跡竈実測図……71
第47図　第19号住居跡出土遺物実測・拓影図……71
第48図　第21号住居跡実測図……72
第49図　第21号住居跡出土遺物実測図……73
第50図　第22号住居跡実測図……74

第51図　第22号住居跡竈実測図……75
第52図　第22号住居跡出土遺物実測図(1)……77
第53図　第22号住居跡出土遺物実測図(2)……78
第54図　第23号住居跡実測図……80
第55図　第23号住居跡竈実測図……81
第56図　第23号住居跡出土遺物実測・拓影図……82
第57図　第24号住居跡実測図……83
第58図　第24号住居跡出土遺物実測・拓影図……84
第59図　第25号住居跡実測図……86
第60図　第25号住居跡出土遺物位置図……87
第61図　第25号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)……88
第62図　第25号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)……89
第63図　第25号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)……90
第64図　第25号住居跡出土遺物実測図(4)……91
第65図　第25号住居跡出土遺物実測・拓影図(5)……92
第66図　第26号住居跡実測図……95
第67図　第26号住居跡竈実測図……96
第68図　第26号住居跡出土遺物実測図(1)……97
第69図　第26号住居跡出土遺物実測図(2)……98
第70図　第27・28号住居跡実測図……100
第71図　第28号住居跡出土遺物実測図……101
第72図　第29号住居跡実測図……102
第73図　第29号住居跡出土遺物実測・拓影図……103
第74図　第30号住居跡実測図……104
第75図　第31号住居跡実測図……106
第76図　第31号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)……107
第77図　第31号住居跡出土遺物実測図(2)……108
第78図　第32号住居跡実測図……110
第79図　第32号住居跡竈実測図……111
第80図　第32号住居跡出土遺物実測図……112
第81図　第33号住居跡実測図……114
第82図　第33号住居跡竈実測図……115
第83図　第33号住居跡出土遺物実測図……116
第84図　第34号住居跡実測図……117
第85図　第34号住居跡竈実測図……118
第86図　第34号住居跡出土遺物実測図(1)……119
第87図　第34号住居跡出土遺物実測図(2)……120
第88図　第35号住居跡実測図……121
第89図　第35号住居跡竈A実測図……122
第90図　第35号住居跡出土遺物実測図(1)……124
第91図　第35号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)……125
第92図　第35号住居跡出土遺物実測図(3)……126
第93図　第36号住居跡実測図……128
第94図　第36号住居跡竈実測図……129
第95図　第36号住居跡出土遺物実測・拓影図……130
第96図　第37号住居跡実測図……132
第97図　第37号住居跡竈実測図……133
第98図　第37号住居跡出土遺物実測図……134
第99図　第38号住居跡実測図……135

第100図　第38号住居跡出土遺物
実測図……137
第101図　第39号住居跡実測図……138
第102図　第39号住居跡竈実測図……139
第103図　第39号住居跡出土遺物実測・
拓影図……140
第104図　第40・75号住居跡実測図……142
第105図　第40号住居跡出土遺物
実測図……143
第106図　第41号住居跡実測図……144
第107図　第42号住居跡実測図……146
第108図　第42号住居跡出土遺物
実測図……147
第109図　第43号住居跡実測図……148
第110図　第44号住居跡実測図……149
第111図　第44号住居跡出土遺物
実測図……150
第112図　第45号住居跡実測図……151
第113図　第45号住居跡出土遺物実測・
拓影図……152
第114図　第46号住居跡実測図……153
第115図　第46号住居跡出土遺物
実測図……154
第116図　第47号住居跡実測図……156
第117図　第47号住居跡竈実測図……157
第118図　第47号住居跡遺物出土
位置図……158
第119図　第47号住居跡出土遺物実測・
拓影図(1)……160
第120図　第47号住居跡出土遺物実測・
拓影図(2)……161
第121図　第47号住居跡出土遺物
実測・拓影図(3)……162
第122図　第48号住居跡実測図……164
第123図　第48号住居跡出土遺物実測・
拓影図……164
第124図　第49号住居跡実測図……165
第125図　第49号住居跡竈実測図……166
第126図　第49号住居跡出土遺物
実測図(1)……167
第127図　第49号住居跡出土遺物
実測図(2)……168
第128図　第50号住居跡実測図……170
第129図　第50号住居跡出土遺物
実測図……171
第130図　第51号住居跡実測図……172
第131図　第51号住居跡出土遺物実測・
拓影図(1)……173
第132図　第51号住居跡出土遺物
実測図(2)……174
第133図　第52号住居跡実測図……176
第134図　第52号住居跡出土遺物
実測図……177
第135図　第53・58号住居跡実測図……179
第136図　第58号住居跡竈実測・
遺物出土位置図……180
第137図　第54号住居跡実測図……181
第138図　第54号住居跡出土遺物
実測図……182
第139図　第55・56号住居跡実測図……184
第140図　第55・56号住居跡実測図……185
第141図　第55号住居跡出土遺物
実測図……186
第142図　第57号住居跡実測図……188

第143図　第57号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)……189
第144図　第57号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)……190
第145図　第58号住居跡出土遺物実測図(1)……193
第146図　第58号住居跡出土遺物実測図(2)……194
第147図　第58号住居跡出土遺物実測図(3)……195
第148図　第59・60・61号住居跡実測図……198
第149図　第59・60・61号住居跡竈実測図……199
第150図　第59号住居跡出土遺物実測図……200
第151図　第60号住居跡出土遺物実測図……201
第152図　第61号住居跡出土遺物実測・拓影図……203
第153図　第62・63号住居跡実測図……205
第154図　第62号住居跡出土遺物実測・拓影図……206
第155図　第63号住居跡出土遺物実測・拓影図……207
第156図　第64号住居跡実測図……208
第157図　第64号住居跡出土遺物実測・拓影図……209
第158図　第65号住居跡実測図……210
第159図　第65号住居跡出土遺物実測図(1)……212
第160図　第65号住居跡出土遺物実測図(2)……213
第161図　第66・68号住居跡実測図……214
第162図　第66号住居跡出土遺物実測・拓影図……216
第163図　第67号住居跡実測図……218
第164図　第67号住居跡出土遺物実測図……219
第165図　第69号住居跡実測図……220
第166図　第69号住居跡出土遺物実測・拓影図……221
第167図　第70号住居跡実測図……222
第168図　第70号住居跡出土遺物実測・拓影図……223
第169図　第71号住居跡実測図……225
第170図　第71号住居跡出土遺物実測・拓影図……226
第171図　第72号住居跡実測図……228
第172図　第72号住居跡竈実測図……229
第173図　第72号住居跡出土遺物実測図(1)……230
第174図　第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)……231
第175図　第72号住居跡出土遺物実測図(3)……232
第176図　第73号住居跡実測図……235
第177図　第73号住居跡出土遺物実測・拓影図……236
第178図　第74号住居跡実測図……238
第179図　第74号住居跡出土遺物実測・拓影図……239
第180図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)……241

第181図　第75号住居跡出土遺物
実測図(2)……243
第182図　第76・77号住居跡実測図……244
第183図　第76・77号住居跡竈実測図……245
第184図　第76号住居跡出土遺物
実測図……246
第185図　第77号住居跡出土遺物実測・
拓影図……248
第186図　第78号住居跡実測図……250
第187図　第78号住居跡出土遺物実測・
拓影図(1)……251
第188図　第78号住居跡出土遺物
実測図(2)……252
第189図　第79号住居跡実測図……253
第190図　第79号住居跡竈実測図……254
第191図　第79号住居跡出土遺物
実測図(1)……255
第192図　第79号住居跡出土遺物
実測図(2)……256
第193図　第80号住居跡実測図……257
第194図　第80号住居跡出土遺物
実測図……258
第195図　第81号住居跡実測図……260
第196図　第81号住居跡竈実測図……261
第197図　第81号住居跡出土遺物
実測図……262
第198図　第1・2号掘立柱建物跡
実測図(1)……267
第199図　第1・2号掘立柱建物跡
実測図(2)……268
第200図　第3号掘立柱建物跡実測図……270
第201図　第4号掘立柱建物跡実測図……272
第202図　第5号掘立柱建物跡実測図……273
第203図　第6号掘立柱建物跡実測図……275
第204図　第7号掘立柱建物跡実測図……276
第205図　第8号掘立柱建物跡実測図……278
第206図　第9号掘立柱建物跡実測図……279
第207図　第10号掘立柱建物跡実測図……281
第208図　第11号掘立柱建物跡実測図……282
第209図　第12号掘立柱建物跡実測図……283
第210図　第13号掘立柱建物跡実測図……284
第211図　第1～3・7・8号掘立柱建物跡
出土遺物実測図……285
第212図　土坑実測図(1)……289
第213図　土坑実測図(2)……290
第214図　土坑実測図(3)……291
第215図　土坑実測図(4)……292
第216図　土坑実測図(5)……293
第217図　土坑実測図(6)……294
第218図　土坑出土遺物実測・
拓影図(1)……295
第219図　土坑出土遺物実測図(2)……296
第220図　第1～3号溝実測図……299・300
第221図　遺構外出土遺物実測・
拓影図(1)……304
第222図　遺構外出土遺物実測・
拓影図(2)……305
第223図　遺構外出土遺物実測・
拓影図(3)……306
第224図　遺構外出土遺物実測・
拓影図(4)……307
第225図　遺構外出土遺物実測図(5)……308
第226図　Ⅰ期出土土器……310
第227図　Ⅱ期出土土器……311

第228図　Ⅲ期出土土器……312
第229図　Ⅳ期出土土器……312
第230図　Ⅴ期出土土器……313
第231図　Ⅵ期出土土器……313
第232図　Ⅶ期出土土器……314
第233図　Ⅷ期出土土器……314
第234図　Ⅸ期出土土器……315
第235図　Ⅹ期出土土器……316
第236図　Ⅺ期出土土器……317
第237図　集落変遷図(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期)……318
第238図　住居跡規模・主軸方向(1)……319
第239図　住居跡規模・主軸方向(2)……319
第240図　住居跡規模・主軸方向(3)……320
第241図　住居跡規模・主軸方向(4)……320
第242図　集落変遷図(Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期)……321
第243図　住居跡規模・主軸方向(5)……322
第244図　住居跡規模・主軸方向(6)……322
第245図　住居跡規模・主軸方向(7)……322
第246図　集落変遷図(Ⅶ・Ⅷ期)……323
第247図　住居跡規模・主軸方向(8)……324
第248図　住居跡規模・主軸方向(9)……324
第249図　住居跡規模・主軸方向(10)……324
第250図　集落変遷図(Ⅸ期)……325
第251図　集落変遷図(Ⅹ期)……326
第252図　集落変遷図(Ⅺ期)……326
第253図　住居跡規模・主軸方向(11)……327
第254図　墨書土器出土位置図……333・334
付　図　柏木古墳群遺構全体図

表　目　次

表1　周辺遺跡一覧表……8
表2　竪穴住居跡一覧表……263
表3　土坑一覧表……296
表4　出土遺構と墨書・刻書土器……332

写　真　図　版　目　次

ＰＬ1　柏木古墳群全景(調査後)
ＰＬ2　調査前全景(北から)，鍬入れ式，試掘風景
ＰＬ3　遺構確認状況(1)(中央から南)，遺構確認状況(2)(南から北)，遺構確認状況(3)(北から南)，遺構確認状況(4)(中央から北)
ＰＬ4　試掘状況，遺構確認作業，作業風景(1)
ＰＬ5　作業風景(2)，作業風景(3)，見学風景
ＰＬ6　第1・2号住居跡，第1号住居跡遺物出土状況，第3号住居跡
ＰＬ7　第3号住居跡竈遺物出土状況，第5号住居跡，第6号住居跡
ＰＬ8　第7号住居跡，第8号住居跡遺物出土状況，第9号住居跡遺物出土状況
ＰＬ9　第10・12号住居跡，第11号住居跡，第11号住居跡遺物出土状況
ＰＬ10　第13号住居跡，第14・26・30・31号住居跡，第15号住居跡

ＰＬ11　第15号住居跡遺物出土状況，第16号住居跡遺物出土状況(1)，第16号住居跡遺物出土状況(2)
ＰＬ12　第17・18号住居跡，第17号住居跡竈遺物出土状況，第19号住居跡
ＰＬ13　第21・27号住居跡，第22号住居跡，第23号住居跡
ＰＬ14　第22・23号住居跡遺物出土状況，第25号住居跡，第25号住居跡遺物出土状況
ＰＬ15　第26号住居跡，第29号住居跡，第32・33・34号住居跡
ＰＬ16　第32・33・34号住居跡遺物出土状況，第35号住居跡，第35号住居跡竈遺物出土状況(1)
ＰＬ17　第35号住居跡竈遺物出土状況(2)，第36・37・38号住居跡，第39号住居跡
ＰＬ18　第40号住居跡遺物出土状況，第42号住居跡，第43・44号住居跡
ＰＬ19　第47号住居跡，第47号住居跡遺物出土状況，第49号住居跡
ＰＬ20　第49号住居跡遺物出土状況，第50号住居跡，第51号住居跡
ＰＬ21　第51号住居跡遺物出土状況，第52号住居跡，第52号住居跡遺物出土状況
ＰＬ22　第54号住居跡遺物出土状況，第55号住居跡，第55・56号住居跡
ＰＬ23　第55・56号住居跡遺物出土状況，第57号住居跡，第57号住居跡遺物出土状況
ＰＬ24　第53・58号住居跡，第58号住居跡遺物出土状況，第59・60・61号住居跡遺物出土状況
ＰＬ25　第62・63号住居跡，第64号住居跡，第65号住居跡
ＰＬ26　第65号住居跡遺物出土状況(1)，第65号住居跡遺物出土状況(2)，第65号住居跡遺物出土状況(3)
ＰＬ27　第65号住居跡竈遺物出土状況，第66・67・68号住居跡，第69・70・71号住居跡
ＰＬ28　第72号住居跡，第72号住居跡竈遺物出土状況，第73号住居跡
ＰＬ29　第74号住居跡，第74号住居跡遺物出土状況，第75号住居跡
ＰＬ30　第75号住居跡遺物出土状況，第76号住居跡，第76・77号住居跡
ＰＬ31　第78号住居跡，第79号住居跡，第80号住居跡
ＰＬ32　第80号住居跡炭化材出土状況(1)，第80号住居跡炭化材出土状況(2)，第80号住居跡炭化材出土状況(3)
ＰＬ33　第80号住居跡炭化材出土状況(4)，第81号住居跡，第1・2号掘立柱建物跡
ＰＬ34　第4・8・13号掘立柱建物跡，第3・6・9号掘立柱建物跡，第5・11・12号掘立柱建物跡
ＰＬ35　第1号土坑(陥し穴)，第7号土坑(陥し穴)，第56号土坑(陥し穴)
ＰＬ36　第200号土坑(陥し穴)，第2・3号土坑，第4号土坑
ＰＬ37　第5号土坑，第6号土坑，第9号土坑
ＰＬ38　第10号土坑，第14号土坑，第15号土

坑
ＰＬ39　第16号土坑，第1・2号溝，第1号溝
ＰＬ40　調査後全景(中央から北)，調査後全景(南から北)
ＰＬ41　第1・3・5～7号住居跡出土土器
ＰＬ42　第8・9号住居跡出土土器
ＰＬ43　第10・11・14・15号住居跡出土土器
ＰＬ44　第15・16号住居跡出土土器
ＰＬ45　第16・17号住居跡出土土器
ＰＬ46　第18・19・21・22号住居跡出土土器
ＰＬ47　第22・23号住居跡出土土器
ＰＬ48　第23・25号住居跡出土土器
ＰＬ49　第25号住居跡出土土器
ＰＬ50　第25号住居跡出土土器
ＰＬ51　第25・26・29・31号住居跡出土土器
ＰＬ52　第29・31・32号住居跡出土土器
ＰＬ53　第32～34号住居跡出土土器
ＰＬ54　第35号住居跡出土土器
ＰＬ55　第35～38号住居跡出土土器
ＰＬ56　第38～40・42号住居跡出土土器
ＰＬ57　第42・45～47号住居跡出土土器
ＰＬ58　第46・47号住居跡出土土器
ＰＬ59　第47～49号住居跡出土土器
ＰＬ60　第47～50号住居跡出土土器
ＰＬ61　第50～52号住居跡出土土器
ＰＬ62　第52・54・55・57号住居跡出土土器
ＰＬ63　第58号住居跡出土土器
ＰＬ64　第57・58号住居跡出土土器
ＰＬ65　第59～61号住居跡出土土器
ＰＬ66　第62～65号住居跡出土土器
ＰＬ67　第65・66号住居跡出土土器
ＰＬ68　第66・67・69・70号住居跡出土土器
ＰＬ69　第70・72号住居跡出土土器
ＰＬ70　第72・73号住居跡出土土器
ＰＬ71　第72～76号住居跡出土土器
ＰＬ72　第75～78号住居跡出土土器
ＰＬ73　第77～81号住居跡，第18号土坑，第7・8号掘立柱建物跡，遺構外出土土器
ＰＬ74　第79～81号住居跡，第6・45号土坑，遺構外出土土器
ＰＬ75　第7・22号住居跡出土墨書土器
ＰＬ76　第17・22・25号住居跡出土墨書土器
ＰＬ77　第22・31・34・35号住居跡出土墨書土器
ＰＬ78　第42・74・75号住居跡，第7号土坑出土墨書・刻書土器
ＰＬ79　出土土器(1)
ＰＬ80　出土土器(2)
ＰＬ81　出土土器(3)
ＰＬ82　出土土器(4)
ＰＬ83　出土土製品(1)
ＰＬ84　出土土製品(2)
ＰＬ85　出土土製品(3)
ＰＬ86　出土石器・石製品(1)
ＰＬ87　出土石器・石製品(2)
ＰＬ88　出土金属製品

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

一般県道新川江戸崎線は,国道125号との分岐点である東村上須田地内を起点として，桜川村を横断し，主要地方道成田江戸崎線との分岐点である江戸崎町法蓮坊地内に至る，総延長16.752kmの稲敷地方の主要な道路である。昭和47年に，地域住民の生活福祉と営農の推進を図ることを目的として，東村から牛久市に至る総延長約25kmの区間を対象とする稲敷広域営農団地農道整備事業が計画されたが，現在，道路沿いには人家が立ち並び，この区間における道路の幅員の拡張は極めて困難なため，茨城県では，この整備事業の一環として，新たに桜川村浮島地区を起点に，江戸崎町佐倉地区を終点とする幅員12m，総延長12.435kmの一般県道新川江戸崎線道路改良工事を計画した。

茨城県は，工事に先立ち，昭和62年7月15日，桜川村，江戸崎町両教育委員会に対し，工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し，桜川村教育委員会は，工事予定地内に周知の遺跡である柏木古墳群が所在する旨，江戸崎町教育委員会も周知の遺跡である二の宮貝塚ほか１遺跡が所在する旨を回答し，併せてその取り扱いについて協議した。翌9月2日には，茨城県教育委員会が現地踏査を行い，上記３遺跡の所在を確認した。昭和62年10月1日，これを受けて，茨城県は，茨城県教育委員会と工事予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議し，10月28・29の両日，茨城県教育委員会は，調査範囲を確定するため工事予定地内の試掘を実施し，新たに江戸崎町に１遺跡の存在を確認した。

なお，茨城県教育委員会は，茨城県と文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきたが，現状保存が困難であることから，記録保存の措置を講ずることとし，11月17日，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。茨城県教育財団は，昭和63年6月1日，茨城県との間に埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し,同年6月1日から平成元年3月31日にかけて,桜川村に所在する柏木古墳群及び江戸崎町に所在する二の宮貝塚ほか２遺跡の,合わせて４遺跡について発掘調査を実施することになった。

調査は，江戸崎町の３遺跡から開始されたが，その過程でいずれも多数の遺構が確認された。他方，柏木古墳群からも同様に遺構が濃密に確認されたため，昭和63年11月2日,茨城県，茨城県教育委員会及び茨城県教育財団の三者間で調査計画の変更について協議が行われ，12月2日,埋蔵文化財発掘調査に係る委託契約の変更が行われた。この結果，柏木古墳群の調査に関しては，道路整備計画上早期着工が予定されている江戸崎町に所在する，３遺跡を終了させた後の平成元年4月から同年9月までの半年間で実施することとなった。

第2節　調査経過

柏木古墳群の調査は，江戸崎町に所在する二の宮貝塚ほか2遺跡の調査と併せて,昭和63年6月1日から翌平成元年3月末日までの期間内において実施する予定で開始されたが，前述の事情から，本調査は，平成元年4月1日から同年9月30日までの半年間にわたって実施された。以下，柏木古墳群の調査の経過について，その概要を記述する。

(昭和63年)

6　月　1日に江戸崎町に事務所を開設し，調査の諸準備を整えた。9日から発掘作業員を雇用し，事務所周辺の清掃及び鍬入れ式の準備を行った。13日に関係者列席の下，調査の円滑な推進と安全を祈願し，江戸崎町二の宮貝塚に於いて合同の鍬入れ式を挙行した。

9　月　2日から6日にかけてグリッドによる試掘を行った。その結果，遺跡全体に遺構が濃密に存在することが確認された。29日から，遺跡北東部について重機による表土除去を開始した。

10　月　前月に引き続き，1日から4日にかけて重機による表土除去を行い，4日から7日にかけて遺構確認調査を行った。その結果，遺構が濃密に分布していること，更に，複雑に重複していることが判明した。

12　月　茨城県，茨城県教育委員会，茨城県教育財団の三者で協議した結果，遺構の数が多く期間内での調査は困難であるため，本調査は平成元年度に実施することとなった。

(平成元年)

4　月　遺跡を再度踏査し，調査区域の確認と調査計画の検討を行った。11日から，既に表土除去の完了している調査区北東部の遺構確認作業を再度実施した。13日から，住居跡の調査を行ったが，重複が激しいため，調査は困難を極めた。

5　月　引き続き，住居跡の調査を行い，下旬までに22軒の調査を終了した。16日から22日にかけて，調査区南西部の表土除去を行った。遺構確認作業の結果，古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡を中心に，北東部とほぼ同数の遺構を確認した。

6　月　前月同様，住居跡の調査を行い，中旬には並行して土坑の調査を開始した。下旬には，北東部から確認された遺構のうち，掘立柱建物跡を除きほぼ調査を終了し，南西部の調査を開始した。

7　月　住居跡の調査も60番台に入り，並行して，掘立柱建物跡の掘り込みを開始した。

8　月　住居跡，掘立柱建物跡，土坑，溝の調査を行った。下旬には，住居跡73軒，掘立柱建物跡2棟及び土坑16基の調査を終了した。

9　月　2日に現地説明会を開催した。25日に航空写真撮影を行った。同日，桜川村・江戸崎町

両教育委員会等へ発掘調査の結果報告を行った。26日から補足調査及び撤収作業を行い，29日をもって全ての調査を終了した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

柏木古墳群は，茨城県稲敷郡桜川村大字古渡2,515番地ほかに所在している。

柏木古墳群の所在する桜川村は，県南地域の南東部に位置し，村域は東西約11.4km,南北約5.3km，面積約34.13㎢を測り，人口は8,130人，世帯数は1,965戸(平成3年10月1日現在)を擁する。北は我国第二の面積を誇る霞ケ浦，東及び南は東村，西は江戸崎町と境界を接している。村の東を新利根川が，西端を小野川が北流して霞ケ浦に注ぎ，南には東村を隔て坂東太郎の名で親しまれる利根川が東流する水郷地帯が広がっている。村の中央部を県道新川江戸崎線が東西に走り，西側を国道125号が南東から北西方向に走り，土浦市と結んでいる。昭和61年4月には，浮島地区と東村本新島を結ぶ稲敷大橋が開通した。

村の西部には，洪積層からなる稲敷台地の東端がせまり，台地は畑地や山林となっている。近年，企業誘致も積極的に行われ，工業用地としても広く利用されている。北東部は，霞ケ浦湖岸に沿って肥沃な水田地帯が開け，早場米の産地で穀倉稲敷の一翼を担っている。村の基幹産業は，稲作を中心として野菜(大根・野沢菜等)・たばこ栽培を主とする農業で，今日，全国市場で有名な〝浮島れんこん〟をはじめ，ハウス栽培による，すいか，メロン，ぶどう等も特産物となり，近郊型農業としての性格を強めつつある。

水郷筑波国定公園の一部に指定されている浮島・和田地区のある桜川村は，レジャー用地の開発も積極的に行われ，釣り場やキャンプ場のほかに5か所のゴルフ場をもち，多くのレジャー客を集めている。

柏木古墳群の所在する台地は，稲敷台地の東端にあたり，西側は小野川が北流し霞ケ浦に注ぎ，東側は霞ケ浦から南にのびる谷津に挟まれ，北側の霞ケ浦へ張り出している。

遺跡は，この台地の南部から東側の谷津に向かって張り出した小さな舌状台地に所在している。

また，当遺跡の所在する台地の西側は，小野川河口の古渡の集落で，南西約4.5kmには律令体制下信太郡の郡衙が存在したと言われており，古くからこの地域は水陸交通の要衝であったものと思われる。台地は畑地となっており，台地の南・北側の支谷は水田となっている。台地と支谷との比高は北側で16m前後である。

第2節　歴史的環境

霞ケ浦沿岸地方は，古くから数多くの遺跡が所在することで知られており，多くの研究者の関心を集めた地域である。桜川村もその例外ではなく，学史上著名な遺跡が存在している。ここでは，村内の主な遺跡について，時代をおって述べることにする。

縄文時代の遺跡としては，貝ケ窪貝塚〈26〉，広畑貝塚〈13〉及び前浦遺跡〈24〉等があり，いずれも学術上貴重な遺跡である。貝ケ窪貝塚(1)は，桜川村大字浮島字狭間久保の台地斜面に所在し，2か所の地点貝塚からなる縄文時代前期後葉の遺跡である。この貝塚は，ハマグリを主体とし，アサリ，シオフキ，アカニシ等を含む純鹹貝塚であり，自然遺物のほか，石器，骨角牙器，貝器，土器等が出土している。中でも，この貝塚から出土した土器は「浮島式」土器と呼ばれ，霞ケ浦沿岸を中心として関東地方から東北地方南部にかけて分布する土器の標式となる重要な土器となっている。広畑貝塚(2)は，桜川村大字飯出字ひろ畑ほかの丘陵斜面から沖積地にかけて所在し，東西75m，南北40mにおよぶ大規模な貝塚である。この貝塚は，ハマグリ，アカニシ等からなる純鹹貝塚で，縄文時代後期から晩期にかけての土器に伴い，土偶，ヤス等が出土している。出土した土器の中には，製塩に使用されたと考えられる土器が多量に含まれていることから，縄文時代の製塩遺跡として注目されている。昭和57年2月27日，国指定史跡となっている。前浦遺跡(3)は，桜川村大字浮島字前浦に所在する縄文時代後期から古墳時代にかけての複合遺跡である。昭和31年に，山内清男氏が発掘調査を行い，縄文時代晩期中葉における当地方の土器型式として「前浦式」土器が抽出され，今日，関東地方における晩期縄文式土器の一型式として全国に知られている。縄文後・晩期の製塩跡と考えられる遺構及び製塩土器が多出していることでも有名である。

弥生時代の遺跡としては，前述の前浦遺跡と同一地内に所在する殿内貝塚(4)〈37〉がある。この貝塚から，初期弥生式土器を埋設した土坑が，晩期縄文式土器を包含する層を掘り込んだ状態で検出されており，縄文時代と弥生時代の接点を知るうえで重要な遺跡である。弥生時代の再葬墓が10基検出されている。

古墳時代になると，桜川村にも，次々と古墳が築造され，現在，8か所の古墳群と7基の古墳が確認されている。中でも，桜川村大字浮島字追越に所在する原古墳群〈34〉の原1号墳(5)は，全長32mの前方後円墳で，4世紀後半に築造されたと考えられ，県内でも最古のクラスに位置づけられる古墳として知られている。柏木古墳群周辺の古墳及び古墳群をみると，1km四方内に塚原古墳〈14〉，柏木古渡古墳群〈45〉，前山古墳〈46〉，内道古墳群〈43〉，稲荷久保古墳〈44〉及び人形塚古墳〈12〉があり，北東約3km内には，小野川が貫流する水田地帯を挟んで，江戸崎町の楯の台古墳群(6)，佐倉原古墳群が対峙している。古墳時代の中期から後期の集落跡としては，桜川村大字浮島字宮の脇に所在する宮の脇遺跡(7)及び尾島貝塚(8)，後期の集落跡としては，同後九郎兵衛に所

在する後九郎兵衛遺跡[9]，今回調査を実施した柏木古墳群等がある。尾島貝塚からは，多量の祭祀遺物と共に祭祀跡，屋外工房跡が検出されている。

奈良・平安時代の遺跡としては，柏木古墳群のほか，前述の宮の脇遺跡，尾島貝塚等，5遺跡が確認されている。『常陸国風土記』のなかに「乗浜ノ里ノ東ニ浮島ノ里アリ。(中略)　居メル百姓,塩ヲ火キテ業ト為ス。(以下略)」とあるように,律令体制下の桜川村域は,常陸国信太郡(『新編常陸国誌』によると，現在の江戸崎町下君山付近に郡衙があったとされている。)乗浜郷に比定され，乗浜の里は海苔の産地，浮島は製塩の地であったことが窺える[10]。平安時代末期になると，この地方にも常陸平氏の勢力がおよび，東条忠幹(とうじょうただもと)によって治められて以来，鎌倉時代を通じてその子孫によって支配されることになる。

南北朝時代の遺跡としては，南朝の北畠親房(きたばたけちかふさ)が東国における南朝勢力の強化を図るための拠点とした神宮寺城跡(じんぐうじじょう)〈1〉が，桜川村大字神宮寺に所在する。同城は,暦応元年(延元三年 1338年)の親房入城後，間もなく北朝方の佐竹・鹿島勢の攻撃を受け落城している。城跡は，東西約200m，南北約400mの規模をもち，現在，本丸跡，外堀跡，土塁等が残っている[11]。城跡の北方には，南朝方に味方した地元有力者の墓と伝えられる十三塚がある。

中世以降，桜川村域は浮島城〈39〉を築いた浮島氏の支配をうけていたが，浮島氏は天正年間(1573年～1592年)，豊臣秀吉の関東平定の余波を受け，佐竹氏によって滅ぼされ，浮島城は廃城となっている[12]。

江戸時代から，関東各地の舟運業者によって多数の天狗面が奉納されるようになった桜川村大字阿波(あば)の大杉神社は，現在も「あんばさま」の名で親しまれ，多くの参拝者が訪れている。

以上のように，桜川村には霞ケ浦をはじめとする豊かな自然環境を背景に，原始，古代から著名な遺跡や史跡が数多く残されている。

※　文中の＜　＞の番号は，表1，第1図中の該当遺跡番号と同じである。

参考文献

茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』1987

(1)～(3)(5)　茨城県「原始古代編」『茨城県史』1985

(1)～(3)　茨城県「先土器・縄文時代」『茨城県史料　考古史料編』1979

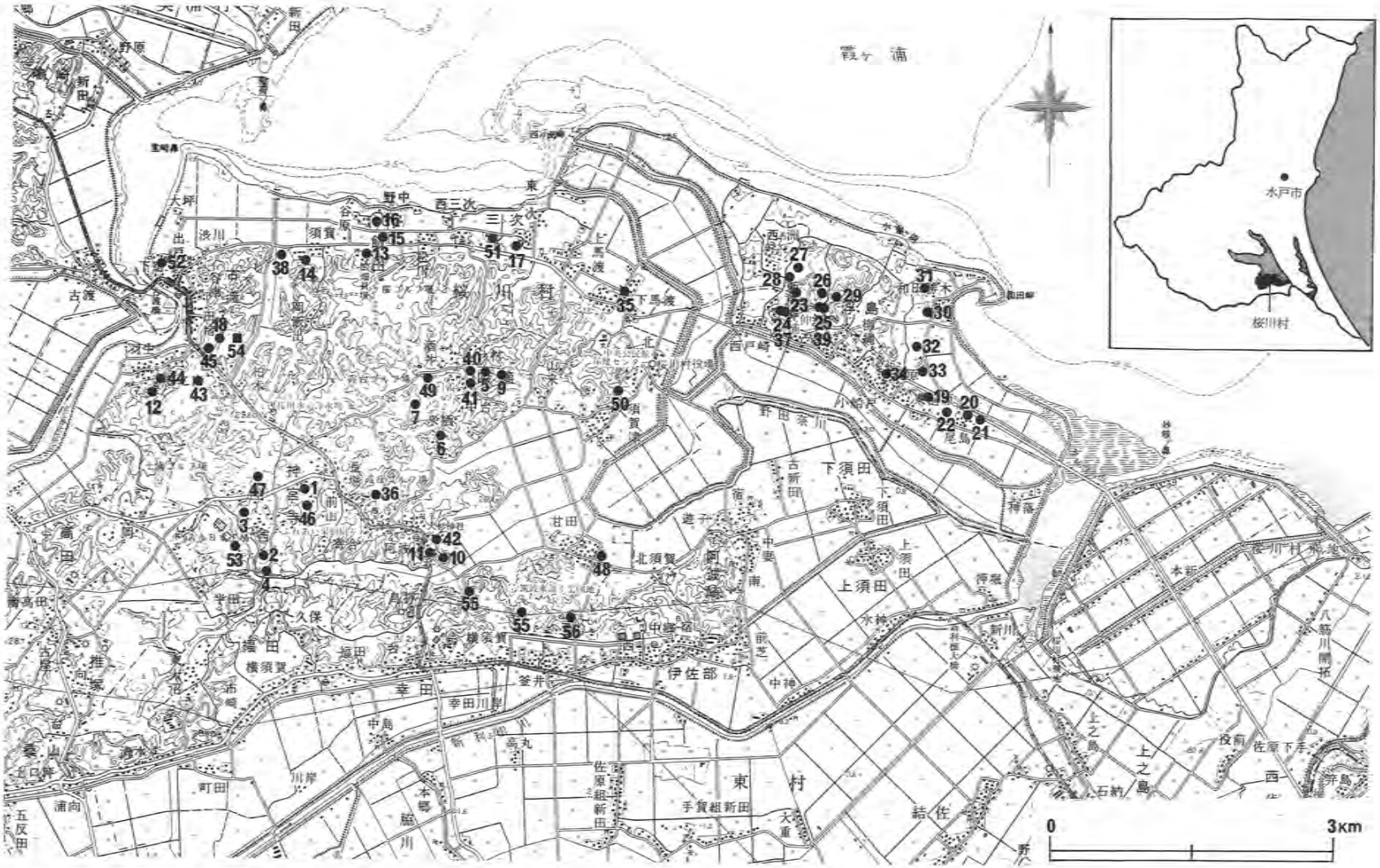
(4)　茨城県「弥生時代」『茨城県史料　考古史料編』1991

(6)　江戸崎町教育委員会『楯の台古墳群』1986

(7)～(9)　茨城県教育財団「尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第46集 1988

(10)　人見暁郎『常陸風土記入門』1980及び(5)と同じ

(11)(12)　茨城県「中世編」『茨城県史』1986



第１図　周辺遺跡位置図

表１　周辺遺跡一覧表

番号	名称	時代							番号	名称	時代						
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸			先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸
1	神宮寺城跡						○		29	上ノ台遺跡					○		
2	塔の前寺院跡					○			30	平山古墳群				○			
3	穴かまど跡				○				31	勝木古墳群				○			
4	西原古墳群				○				32	竹の下古墳群				○			
5	酒井古墳				○				33	寄縄原古墳群				○			
6	大室貝塚		○	○					34	原古墳群				○			
7	所作貝塚		○						35	下馬渡貝塚							
8	南貝塚		○						36	天神台貝塚							
9	大門貝塚		○						37	殿内貝塚		○					
10	竜貝貝塚		○						38	塚原貝塚							
11	石神下貝塚		○						39	浮島城跡						○	
12	人形塚古墳				○				40	村坪貝塚		○					
13	広畑貝塚		○						41	村坪遺跡		○					
14	塚原古墳				○				42	南貝塚							
15	飯出A貝塚								43	内道古墳群				○			
16	飯出B貝塚								44	稲荷久保古墳				○			
17	三次貝塚								45	柏木古渡古墳群				○			
18	柏木貝塚								46	前山古墳				○			
19	後九郎兵衛遺跡		○	○	○				47	穴かまど跡				○			
20	尾島祭祀遺跡		○	○	○				48	甘田古墳				○			
21	尾島貝塚		○	○	○				49	四箇古墳群				○			
22	宮の脇遺跡		○	○	○				50	大日塚				○			
23	前浦貝塚		○	○					51	三次古墳				○			
24	前浦遺跡		○						52	小谷城跡						○	
25	岡ノ内遺跡		○			○			53	迎山古墳							○
26	貝ケ窪貝塚		○						54	柏木古墳群		○	○	○	○		
27	年行地貝塚				○				55	立切遺跡				○	○		
28	年行地遺跡					○			56	東台古墳群				○			

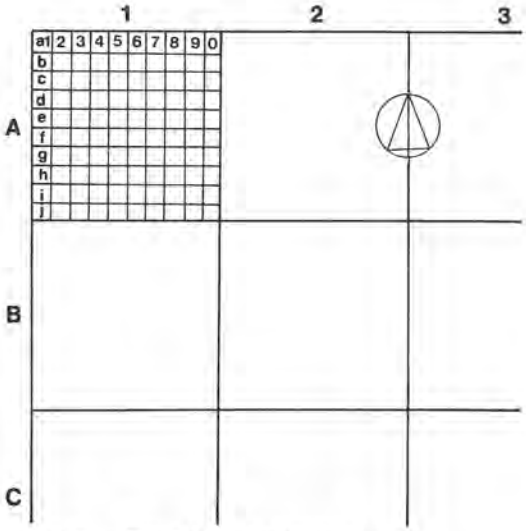
※8番の南貝塚は位置不明

第３章　調査方法

第１節　地区設定

柏木古墳群の発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は，日本平面直角座標第IX系座標のＸ軸(南北)－3,520m，Ｙ軸(東西)＋47,800ｍの交点(C3a₁区)を基準として40m方眼を設定し，この40m四方の区画を大調査区とした。さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分して，4m四方の小調査区を設定した。

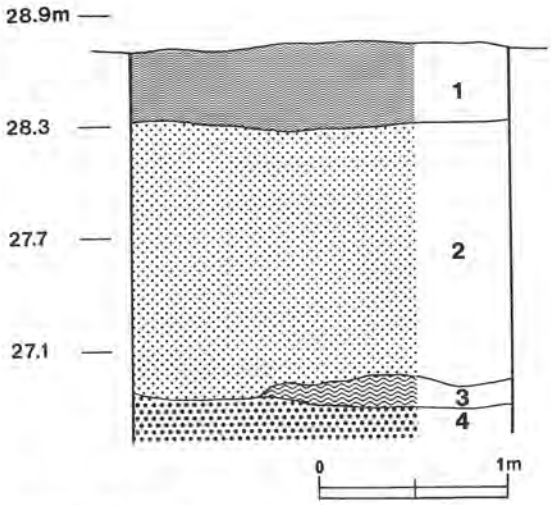


第２図　調査区呼称方法概念図

調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用いて表記した。大調査区は，北から南へA，B，C…，西から東へ１，２，３…とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へａ，ｂ，ｃ…ｊ，西から東へ1，2，3…0とし，小調査区の名称は，大調査区の名称を冠し，「A1a₁区」，「B2e₂区」のように呼称した。(第２図)

第２節　基本層序の検討

調査区域の北部B2a₈区にテストピットを設定し，第３図に示すような土層の堆積状況を確認した。



第３図　基本土層図

第１層は，暗褐色の表土層(耕作土)で，40～44cmの厚さを有し，ローム・炭化粒子を少量含んでいる。第２層は，ソフトローム層で，130～142cmの厚さを有し，粘性，締まりともに強い。色調は黄褐色である。第３層は，ハードローム層で，10～18cmの厚さを有する。色調はにぶい褐色である。第４層もハードローム層で，第３層

に比べてよく締まっている。色調は褐色である。

縄文時代及び古墳時代以降の遺構とも，第2層の上面ないし上面からやや下がった面から確認されている。古墳時代以降の遺構は第2層の中位程度まで，縄文時代の遺構(陥し穴)は第4層まで掘り込まれている。

第3節　遺構確認

遺構確認は，調査区域の16分の1にあたる面積の試掘を実施した。試掘開始当初から，土師器・須恵器片とともに，遺構と思われる落ち込みが確認された。この試掘結果をふまえ，担当者間で協議を行い，調査区全面の表土除去を実施することにしたが，遺構確認状況から判断して，かなりの遺構数が予想されることや，表土の厚さが40～50cmであることから，表土除去は重機で行うこと，さらに，調査期間の関係で調査区域を二分し，二期にわたって実施することとした。重機による表土除去後，遺構確認作業を人力で進め，住居跡(80軒)，掘立柱建物跡(8棟)，土坑(106基)，及び溝(2条)を確認した。

第4節　遺構調査

当遺跡における遺構の調査は，次のように実施した。

住居跡の調査は，長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設定し，四分割して掘り込む「四分割法」を基本とし，地区の名称は，北から時計回りに1～4区とした。重複している場合には，新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は，長径方向で二分して掘り込む「二分割法」で実施した。溝の調査は，適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し，掘り込みを実施した。

土層観察は，色相，含有物，混入物の種類や量及び粘性，締まり具合等を観察し，分類の基準とした。色相の判定は，『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社)を使用した。

遺構や遺物の平面実測は，水糸方眼地張り測量で実施した。

また，土層断面や遺構断面の実測は，遺跡内の水準点を基準とし，標高を測って水平にセットした水糸を基準にして実測した。遺物は，原位置を保ち，遺物番号，出土位置及びレベル等を遺物出土状況図や遺物台帳に記録して収納した。

調査の記録は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては，そのつど野帳に記録し，これを調査記録カードや遺構カードに整理した。

第４章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と遺構及び遺物の記載方法

１　遺跡の概要

柏木古墳群は，桜川村の北西部，稲敷台地東端の標高28m前後の小さな舌状台地上に立地する縄文時代早期から後期，弥生時代中・後期，古墳時代前・後期及び奈良・平安時代の複合遺跡である。現況は畑地で,調査区は，長さ南北に約195m，幅東西に約29m，面積5,683㎡である。

今回の調査によって検出された遺構は，古墳時代前・後期及び奈良・平安時代の竪穴住居跡81軒，古墳時代及びそれ以降の掘立柱建物跡13棟，土坑39基，陥し穴6基，溝3条である。

縄文時代の遺構は，陥し穴6基で，調査区の東側から入り込む小支谷を挟んで，北部と南部に検出されている。弥生時代の遺構は検出されていないが，中期及び後期と考えられる土器片が少量出土している。古墳時代の遺構は，竪穴住居跡29軒で，調査区全域から検出されている。竈が付設されている住居跡が大半を占め，炉をもつと考えられる住居跡は僅かに3軒である。本期に比定される掘立柱建物跡は4棟検出され,古墳時代後期のものと考えられる住居跡の床下から検出されている。奈良時代の遺構は竪穴住居跡5軒で，調査区の北部から2軒，南部から3軒検出されている。竈は南東向きに付設されるものがほとんどであるが，南西・西向きに付設されている住居跡も1軒ずつみられる。平安時代の遺構は，竪穴住居跡47軒で，調査区の全域から検出されている。これら古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡は，単独で検出される例は少なく，重複し合い，調査区中央部の小支谷を囲むように検出されている。溝は3条検出され，いずれも平安時代以降に構築された溝と考えられるが,性格は不明である。

遺物は，遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に68箱程出土している。縄文時代前期から後期及び弥生時代中・後期の遺物はいずれも土器片で，少量出土している。古墳時代の遺物は，土師器の坏，鉢，甕，甑，高坏を主に，須恵器の蓋，甕等が出土している。奈良・平安時代の遺物は，土師器の坏，甕，高台付坏，皿，甑，須恵器の坏，高台付坏，盤，高坏，蓋，甕，甑及び壺等で多量に出土している。土師器の坏，高台付坏及び皿の中には，現在の字名の柏木と関連があると考えられる「柏」や「柏木」と墨書されたものもみられる。土製品では，支脚，球状土錘，管状土錘，紡錘車，手捏土器等が，石製品では,勾玉，砥石，紡錘車，有孔円板等が，鉄製品では,鏃，刀子，鎌及び釘等が出土している。その他，金属製の環が出土している。

2　遺構及び遺物の記載方法

本書における遺構及び遺物の記載方法は，以下のとおりである。

(1) 使用記号

名称	住居跡	掘立柱建物跡	土　坑	溝	ピット	土　器	土製品	石器・石製品	金属製品	拓本土器
記号	ＳＩ	ＳＢ	ＳＫ	ＳＤ	P_1～	Ｐ	ＤＰ	Ｑ	Ｍ	ＴＰ

(2) 遺構及び遺物の実測図中の表示

焼土　竈・炉　粘土

●　土　器　○　土製品　□　石器・石製品　☆　金属製品

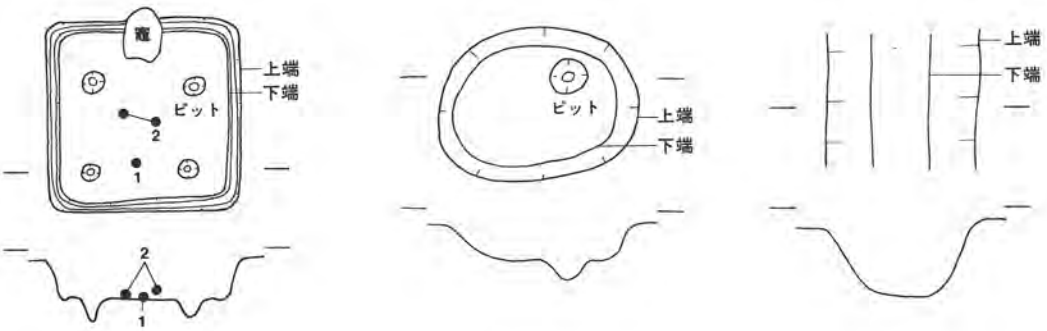
(3) 遺構番号

遺構番号については，調査の過程において遺構の種別毎，調査順に付したが，整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。また，整理の過程で新たに番号を付したものについては，旧番号を( )内に表示した。

(4) 土層の分類

土層観察における色相の判定は，『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社)を使用し，図版実測図中に記載した。撹乱層については「Ｋ」と表記した。

(5) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



<住居跡>　　<土坑>　　<溝>

① 各遺構の実測図は，縮尺20分の1の原図を浄書して版組し，それをさらに3分の1に縮小して掲載することを基本とした。

② 掘立柱建物跡は，縮尺20分の1の原図を2分の1に縮小し，浄書して版組し，それをさらに2分の1に縮小して掲載した。

③ 実測図中のレベルは標高であり，m単位で表示した。また同一図中で同一標高の場合に限り，一つの記載で表し，標高が異なる場合は各々表示した。

④ 本文中の記載について

○「位置」は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○「重複関係」は，他の遺構との切り合い関係を記した。

○「平面形」は，壁の上端部で判断し，方形，長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。

方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの），長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）

○「規模」は，壁の上端部の計測値であり，長軸(径)を短軸(径)をm単位で表記した。壁高は，残存壁高の計測値である。( )を付したものは現存値を示す。

○「主軸方向」は，炉または竈をとおる線を主軸とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。

○「壁」は，床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直，65°～80°を外傾，65°未満を緩斜，さらに90°以上を内傾とした。

○「壁溝」は，その形状や規模を表記した。規模は床面からの計測値とした。

○「床」は，傾斜や床質等を表記した。

○「ピット」は，その住居跡に伴うと考えられるピットをPで表示し，P_1，P_2はピット番号を表し，さらに，ピットの直径と深さを記述した。

○「貯蔵穴」は，その形状を記述し，数字は長径，短径，深さを示した。

○「覆土」は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」と記した。

○「遺物」は，主な遺物の種類や出土位置，出土状態等を記述した。

○「所見」は，当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

(6) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

① 土器の実測は，四分割法を用い，中心線の左側に外面，右側に内面及び断面を表した。

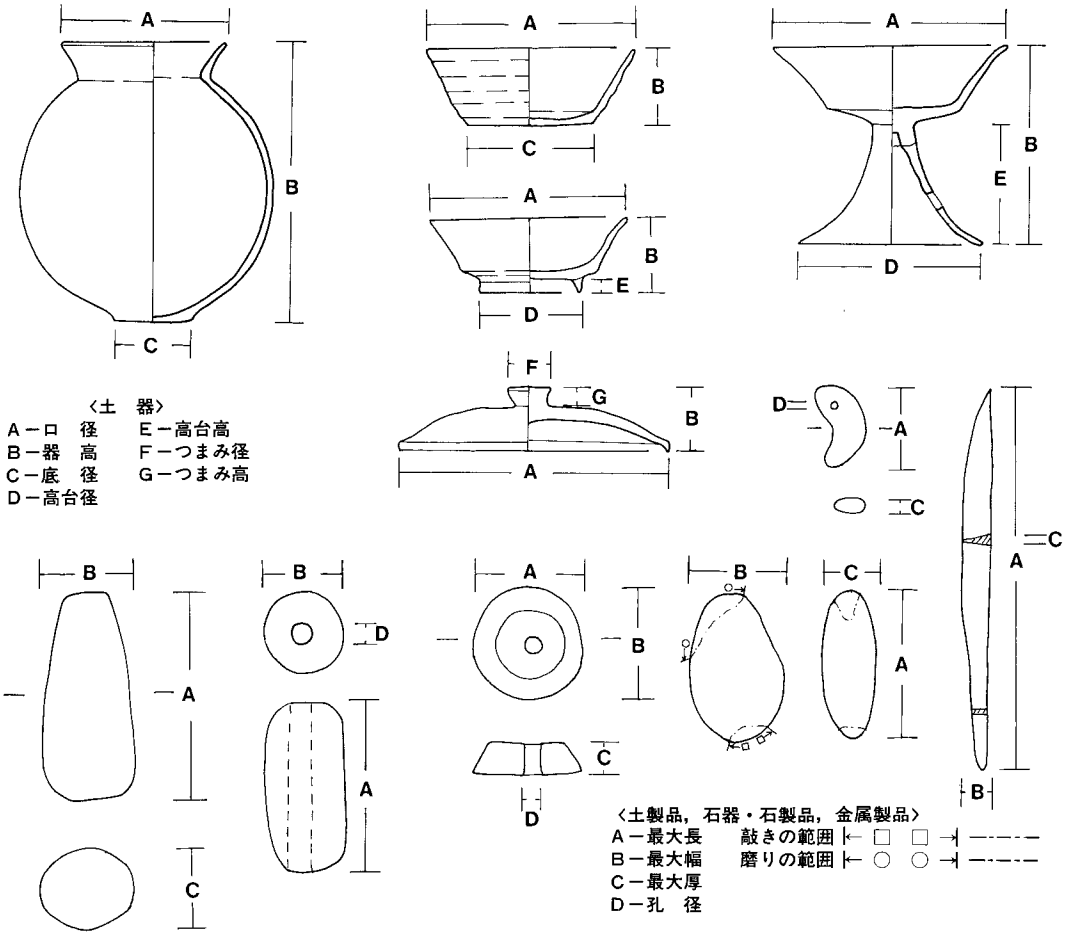
② 実測図中の表示方法

須恵器断面　黒色処理　施釉部分　赤彩　繊維土器

土器の拓影図は，右側に断面を表し，表裏２面を掲載したものは，断面を挟んで左側に外面，右側に内面を掲載した。

④　遺物は，原則として実測図を浄書したものを3分の1に縮小して掲載することを基本とした。

⑤　各部位の名称と法量表現



(7) 表の見方

＜住居跡一覧表＞

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	ピット	竈・炉	履土	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)						

○　住居跡番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。

○　位置は，小調査区(小グリッド)名で表示した。他の調査区にまたがる場合は，遺構の占める

割合が最も大きい小調査区をもって表示した。

○　方向は，竈または炉が座標北から見てどの方向にどれだけ傾いているかを，角度で表示した。（例　N－10°－E，N－10°－W）　［ ］を付したものは推定である。

○　平面形は，現存している形状の上端面で判断し，方形，長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。

方形……長軸：短軸＝1.1未満：1　　長方形……長軸：短軸＝1.1以上：1

○　規模の欄の長軸，短軸は，平面形の上端面の計測値であり，壁高は残存壁高の計測値である。

○　床面は凸凹，平坦等の様子を示し，締まり等は解説の項で述べた。

○　ピット数は，住居跡に伴うものと考えられる総数を表示した。

○　竈・炉の欄は，竈が付設されている住居跡については「竈」，炉が検出されている住居跡については「炉」と表示した。

○　貯蔵穴が有る場合は備考の欄に「貯蔵穴」と記した。

○　出土遺物は，実測個体数を除いた遺物の種類と出土土器片の数を記した。

○　備考は，重複関係や特徴等を記した。

＜土坑一覧表＞

土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　模(m)			壁　面	底　面	履　土	出土遺物	備　考
				長径	短径	深さ					

○　土坑番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また，整理の過程で土坑でないと判断したものは欠番とした。

○　平面形は，円形・楕円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。

円形（短径：長径＝1：1.1未満のもの），楕円形（短径：長径＝1：1.1以上のもの）

○　規模の欄の長径・短径は上端部の計測値(m)で表した。

○　規模の欄の深さは，遺構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値(m)で表した。

○　壁面は，坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。

81°～90°の傾き　　65°～80°の傾き　　65°未満の傾き

垂直　　外傾　　緩斜

○　底面は，下記の基準で分類し表示した。

1　平坦　　2　皿状　　3　凸凹

＜出土遺物観察表＞

図版番号	器　種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考

○　図版番号は，実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○　法量は，A…口径，B…器高，C…底径，D…高台径，E…高台高，F…つまみ径，G…つまみ高とし，( )は現存値，[ ]は復元推定値を表す。

○　器形の特徴は，底部，体部等の各部位について土器観察の結果を記した。

○　手法の特徴は，土器の成形，整形について記した。

○　胎土・色調・焼成の順で述べ，色調は『新版標準土色帖』を使用した。焼成については，「良好」，「普通」，「不良」に分類し，硬く焼き締まっているものは良好，焼きがあまく器面が剝離しやすいものは不良とし，その中間のものを普通とした。

○　備考は，特徴・完存率等を記した。

＜土製品，石器・石製品，金属製品＞

図版番号	器　種	法　量（cm）			孔径（mm）	重量（g）	現存率（%）	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					

○　図版番号は，実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○　重量の欄で，(　)を付した数値は，一部を欠損しているものの現存値である。

第2節　竪穴住居跡

当遺跡からは，調査区の東側から侵入する小支谷を取り囲むように，81軒の竪穴住居跡(古墳時代前期3軒，古墳時代後期26軒，奈良時代5軒，平安時代47軒)が検出されている。これらの竪穴住居跡は，重複し合っているものが大半を占め，遺構が削平され遺存状態が悪い。

以下，検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載していくことにする。

第1号住居跡(第4・5図)

位置　調査区の北東部，B2g8区を中心に確認されている。本跡の南西コーナー付近から南東部は調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の南西部が，第2号住居跡の北東部を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸6.36m，短軸6.50mの方形を呈するものと推定される。

主軸方向　N-5°-W。

壁　壁高は8～20cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　西壁中央部から40cm程内側の床下からは，西壁に沿うように長さ2.24mで上幅28～50cm，深さ10cm前後を測る落ち込みが検出され，本跡が拡張される以前の壁溝と考えられる。

床　中央部は平坦で，踏み固められ堅緻である。壁際は，ロームブロックを多量に含む貼床で，あまり踏み固められていない。南東部は，調査区域外の農道下にのびているため検出されていない。

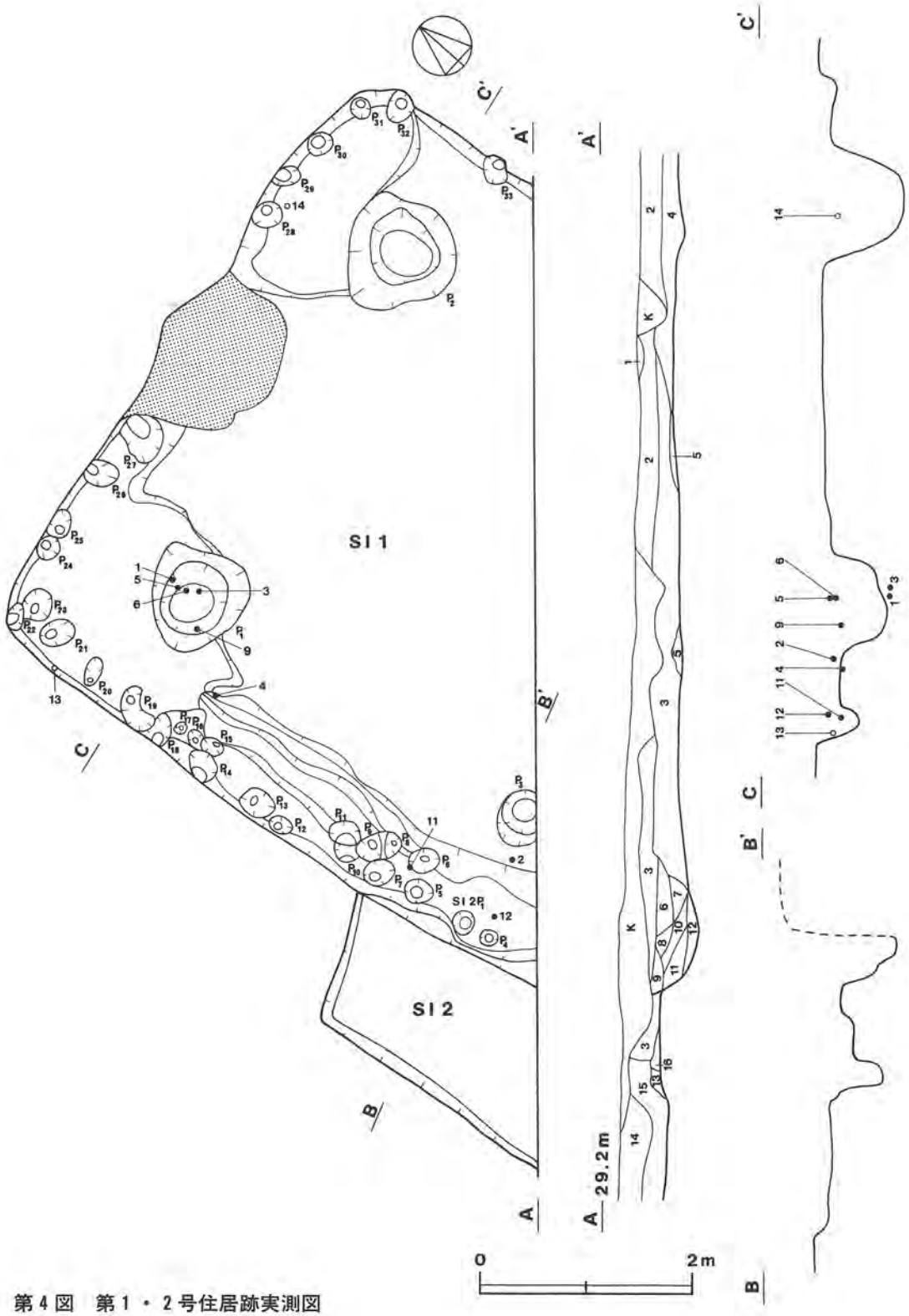
ピット　33か所(P_1～P_{33})検出されている。P_1～P_3は，径54～114cm，深さ54～73cmで，規模及び配列から主柱穴である。残り1か所の主柱穴は，調査区域外にあるものと推定される。P_4～P_{33}は壁柱穴で，径16～48cm，深さ14～35cmを測り，床面中央部に向かって傾いた状態で検出されている。

竈　北壁中央部の壁を11cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ147cm，幅142cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は遺存している。火床は床面を10cm程掘り窪めているが，さほど熱をうけていない。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

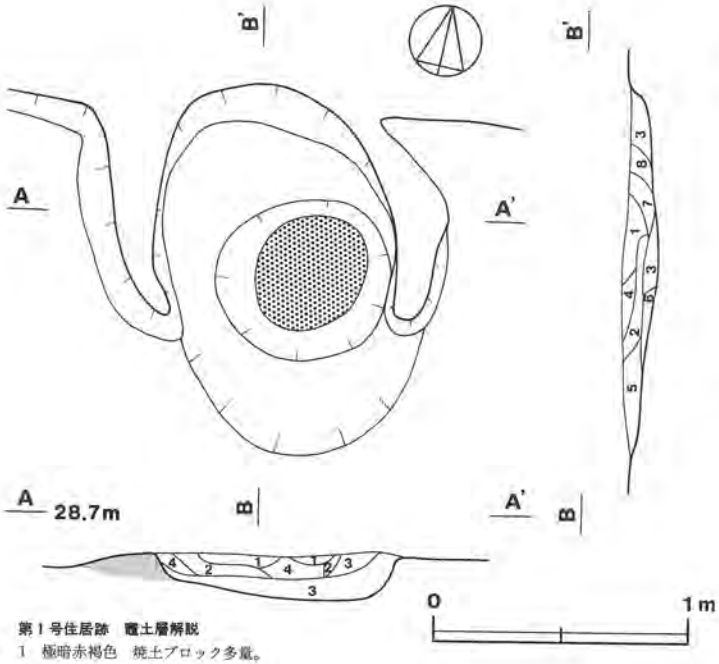
覆土　自然堆積。

遺物　覆土及び床面からは，多量の土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片等が出土している。北西部の床面からは，9の須恵器の高台付坏と，4から6の須恵器の坏が逆位の状態で出土している。1の土師器の甕はP_3の底面から正位の状態で，3の須恵器の坏も，同じくP_3の底面から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第2号住居跡より新しい時期に構築されている。本跡の西部床下からは，拡張前の壁溝の一部が検出されており，西側へ40cm程拡張されたことが窺える。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第4図　第1・2号住居跡実測図



第1・2号住居跡　土層解説

1 暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。
2 暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化物少量。
3 暗 褐 色　ローム粒子・焼土ブロック中量，ロームブロック少量。
4 極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
5 暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量。
6 暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量。
7 暗 褐 色　焼土ブロック・焼土粒子多量，ロームブロック・ローム粒子中量。
8 暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子・炭化物少量。
9 褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量。
10 極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
11 暗 褐 色　ロームブロック中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
12 暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量。
13 暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
14 褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，炭化粒子少量。
15 褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。
16 暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。

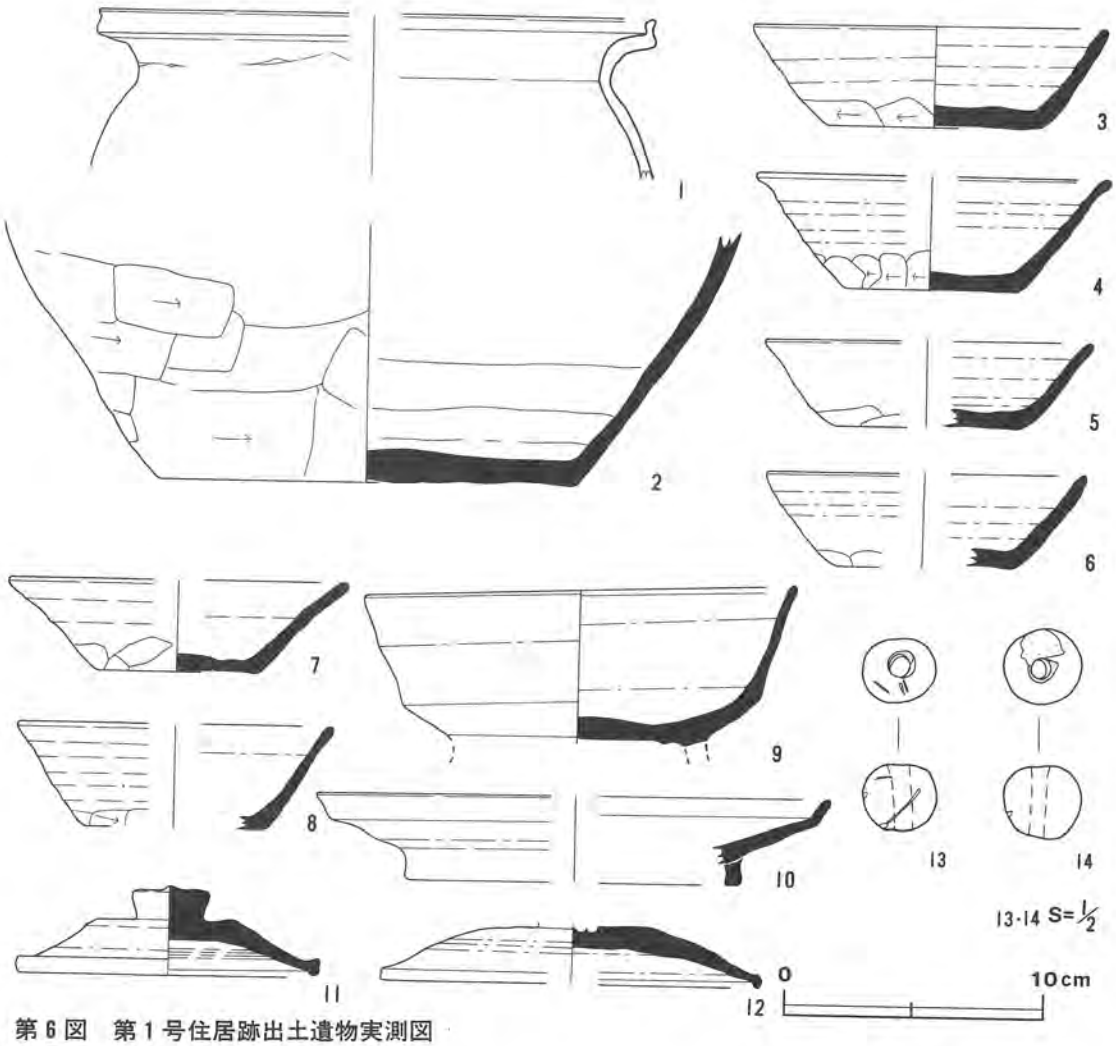
第1号住居跡　竈土層解説

1 極暗赤褐色　焼土ブロック多量。
2 黒 褐 色　焼土ブロック中量。
3 暗 褐 色　焼土ブロック少量。
4 暗赤褐色　焼土ブロック中量。
5 極暗赤褐色　焼土ブロック中量。
6 暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック中量。
7 暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量。
8 にぶい赤褐色　焼土ブロック・炭化物少量。

第5図　第1号住居跡竈実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	甕 土師器	A (21.6) B [6.3]	やや張りのある胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口唇部を上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P1　5% P_3底面
2	甕 須恵器	B (10.2) C 16.4	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び胴部内面剥離。胴部外面下位手持ちヘラ削り。	砂粒・礫・長石 灰黄褐色 普通	P3　30% 北西部床面
3	坏 須恵器	A 13.6 B 4.0 C 8.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	底部及び体部下端一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P4　70% P_3底面
4	坏 須恵器	A [13.8] B 4.5 C 6.7	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸い。	底部及び体部下端一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 黄灰色 普通	P5　60% 北西部床面
5	坏 須恵器	A [12.6] B 3.4 C [7.2]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸い。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 良好	P6　30% 北西部床面
6	坏 須恵器	A [12.3] B 3.7 C [6.7]	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに内彎する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 良好	P7　30% 北西部床面
7	坏 須恵器	A [13.2] B 3.6 C 6.4	上げ底気味。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P8　20% 北西部覆土



第6図　第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	坏 須恵器	A [12.4] B 4.1 C [7.2]	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がり，口縁部は，僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P9 5% 北西部覆土上層
9	高台付坏 須恵器	A 16.8 B (6.4)	平底。高台剝離。体部下位で屈曲した後，外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面丁寧なナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P10 90% 北西部床面
10	盤 須恵器	A (20.0) B 3.4 D [13.0] E 1.2	直立する高台がつく。体部は大きく直線的に外傾し，口縁部で短く屈曲する。	体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・礫・長石 灰色 普通	P11 10% 南西部覆土中層
11	蓋 須恵器	A 11.8 B 3.5 F 3.0 G 1.3	天井部は低い。天頂部はほぼ平坦で，口縁部は屈曲し，短く垂下する。つまみは腰高で宝珠形を呈する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・礫・長石 オリーブ黒色 良好	P12 100% 南西部床面
12	蓋 須恵器	A [14.6] B (2.4)	天井部は低く，緩やかに傾斜して口縁部に至り，端部は短く垂下する。つまみ欠損。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・礫・長石 暗灰褐色 普通	P13 60% 南西部覆土中層

図版番号	器　種	法　量 (cm)			孔　径	重　量	現存率	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
13	球状土錘	1.8	2.0	---	6.0	4.9	100	北西部覆土下層	DP1
14	球状土錘	2.0	2.0	---	5.0	6.7	100	北東部床面	DP2

第2号住居跡(第4図)

位置　調査区の北東部，B2h_8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西部から東部中程にかけては調査区域外で，北東部は第1号住居跡の南西部に掘り込まれており，調査できる範囲は全体の3分の1程である。

規模と平面形　長軸(2.60)m，短軸(1.36)m。検出部分が少なく規模，平面形の推定はできない。

主軸方向　不明。

壁　北壁と西壁の一部のみ僅かに残存している。壁高は14cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　残存している床面は凸凹しているが，踏み固められ堅緻である。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，重複する第1号住居跡の南西部の床下から検出されている。径20～24cm，深さ51cmで，主柱穴である。

竈　東壁に付設されていたものと考えられるが，本跡の大半は調査区域外にのびているうえ，第1号住居跡に掘り込まれているため検出されていない。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から土師器の坏片が2点，須恵器の甕の胴部片が1点出土している。

所見　本跡は，重複関係から第1号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第3号住居跡(第7図)

位置　調査区の北東部，B2g_2区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西コーナーは，第4号住居跡の北東コーナーを掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.06m，短軸3.00mの方形を呈している。

主軸方向　N-5°-W。

壁　壁高8～12cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅16～24cm，深さ8～12cmで，断面形はU字状を呈している。

床　全体的にやや凸凹で，中央部及び竈の前方が特に踏み固められ堅緻である。

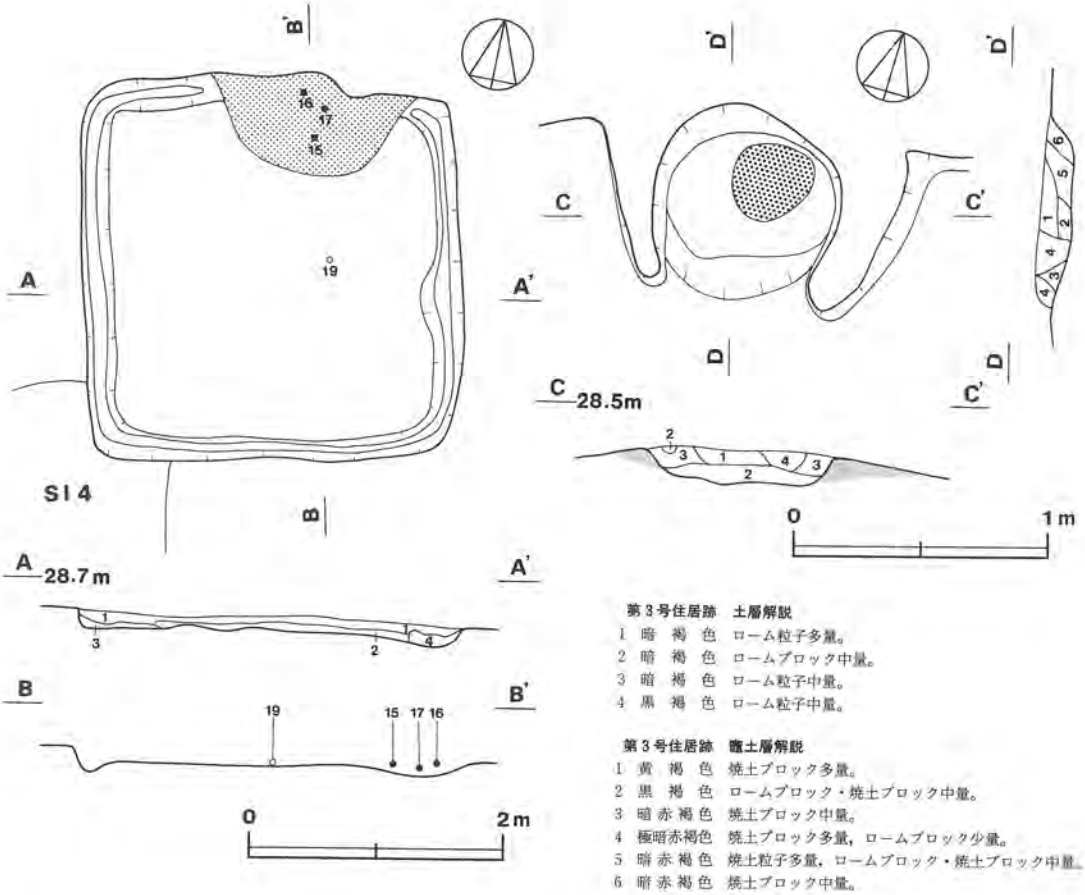
竈　北壁中央からやや東寄りの壁を13cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。

規模は，長さ78cm，幅117cm 程を測る。大半が撹乱を受け，袖部が僅かに遺存している程度である。火床及び袖部の内側は焼土化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　床面及び覆土下層から，土師器(坏)片，須恵器(坏，甕)片が少量出土している。15から17の須恵器の坏は竈内から，19の支脚はほぼ北東部の床面から横位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第4号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

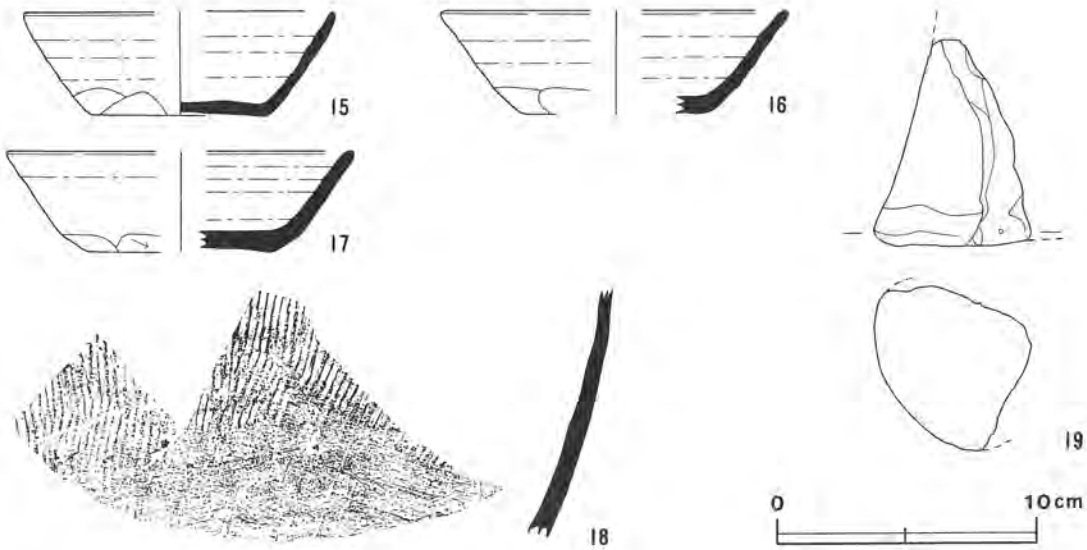


第7図　第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

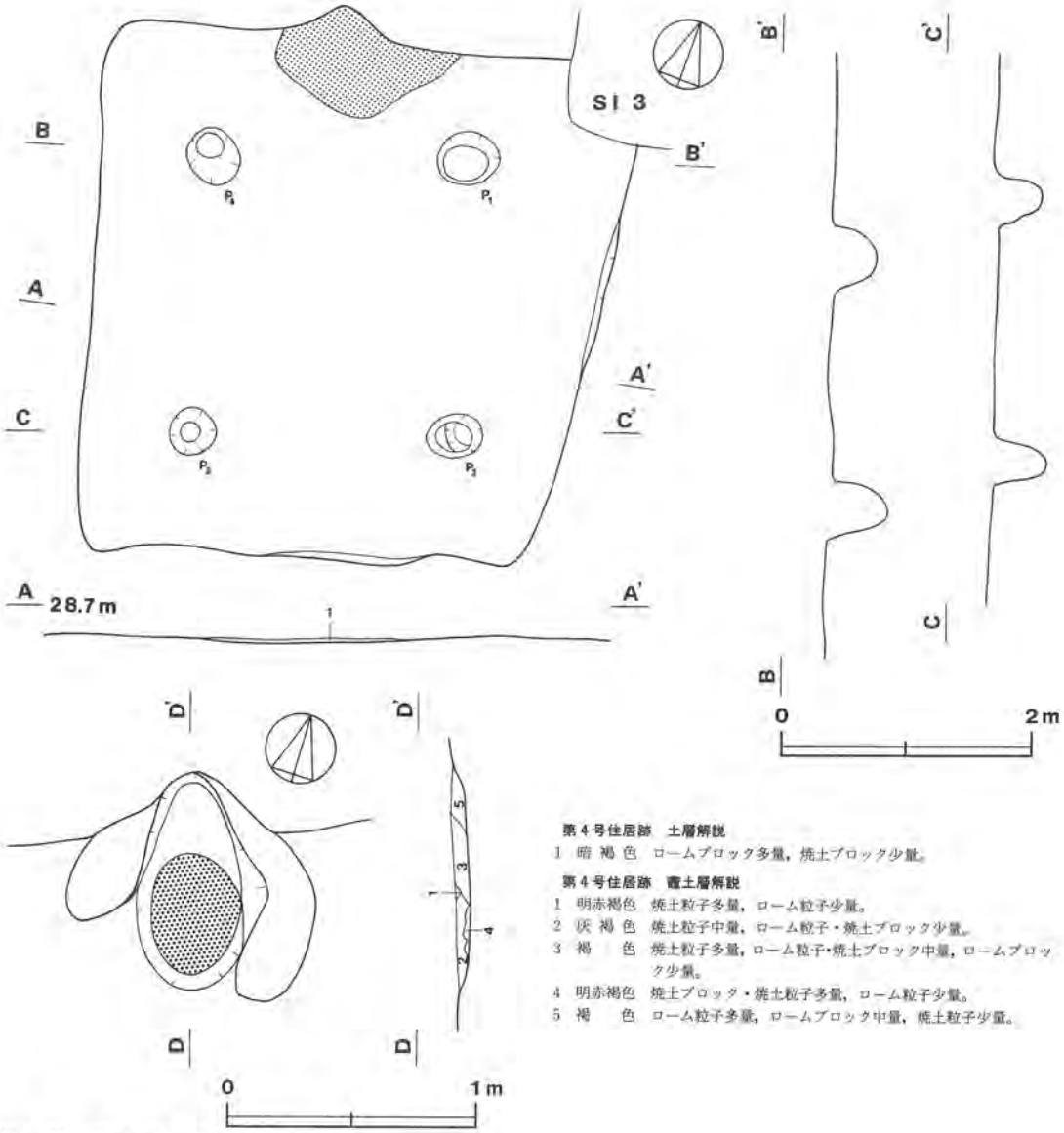
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第8図 15	坏 須恵器	A [12.2] B 4.1 C 6.8	上げ底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P15 40% 竈
16	坏 須恵器	A [13.5] B 4.1 C [7.0]	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P16 30% 竈
17	坏 須恵器	A [13.6] B 4.0 C [7.2]	上げ底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P17 30% 竈
18	甕 須恵器		甕の胴部片。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。上位にかけて平行叩き目。	砂粒・雲母・礫 黄灰色 普通	TP1 5% 南東部覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
19	支脚	(8.2)	(6.0)	—	—	(175.9)	60	北東部床面	DP3



第8図　第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

第4号住居跡(第9図)



第9図　第4号住居跡実測図

位置　調査区の北東部，B3h_1区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東コーナーは，第3号住居跡の南西コーナーに掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.32m，短軸3.92mの方形を呈している。

主軸方向　N-14°-W。

壁　削平され検出されていない。

床　全体的に平坦で，踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径40～50cm，深さ36～48cmで，いずれも

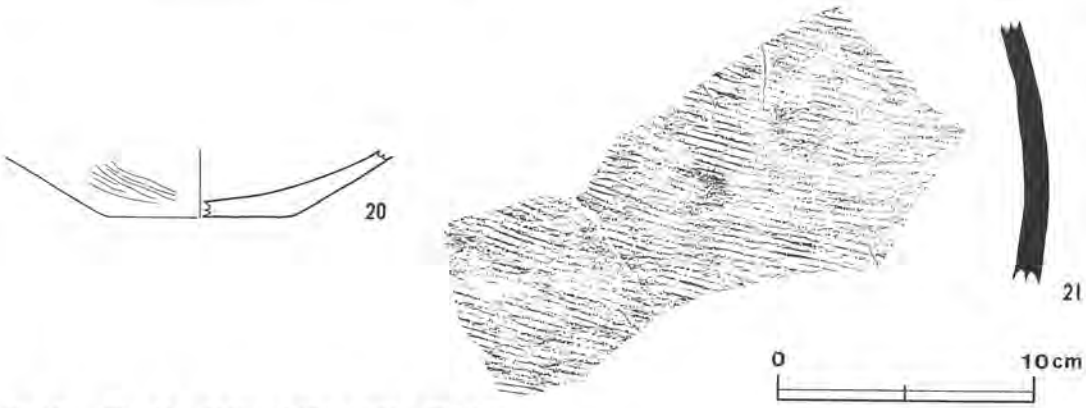
主柱穴である。

竈　北壁中央からやや西寄りに付設されている。壁を20cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ88cm，幅100cmを測る。天井部は崩落し，袖部は僅かに遺存している。火床は床面を6cm程掘り窪め，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　大半が削平され，中央部床面上に暗褐色土が薄く遺存しているが，堆積状況は不明である。

遺物　覆土中から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，蓋)片が少量出土している。20は土師器の甕で，覆土から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第3号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第10図　第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 20	甕 土師器	B（2.7） C［7.0］	平底。	胴部下位にヘラ磨き。	砂粒・礫 浅黄橙色 普通	P19　5% 覆土
21	甕 須恵器		甕の胴部片。	胴部外面平行叩き目。	砂粒・礫 にぶい黄橙色 普通	TP2　5% 竈付近覆土上層

第5号住居跡(第11図)

位置　調査区のほぼ中央部，D2a₂区を中心に確認されている。本跡の西コーナー付近は調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の北西壁中央部は第27号土坑に，南西部は第23号土坑に，東部は第8号掘立柱建物跡に掘り込まれ，床面下からは第4号掘立柱建物跡が検出されている。

規模と平面形　長軸5.14m，短軸5.10mの方形を呈している。

主軸方向　N-27°-W。

壁　壁高は12cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

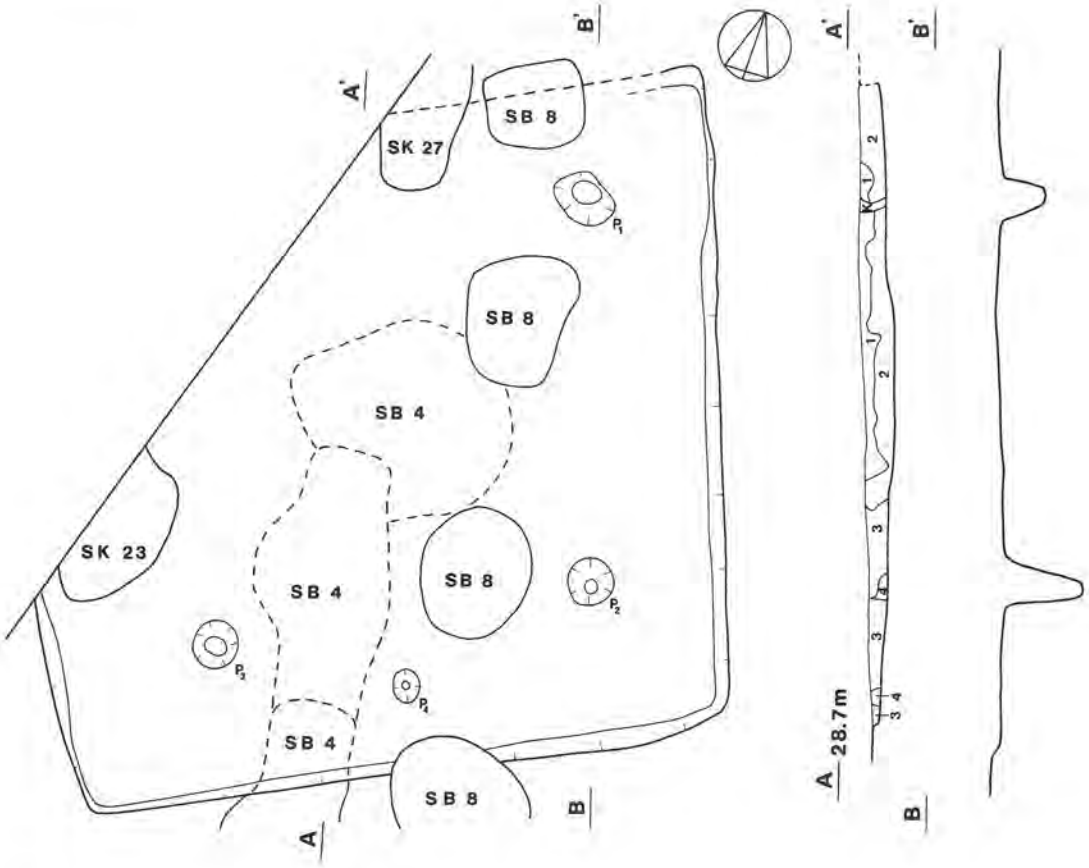
床　ほぼ平坦で，硬く踏み固められている。重複する掘立柱建物跡の上位には貼床をしている。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_3は，径34～54cm，深さ39～57cmで主柱穴，P_4は，径20～28cm，深さ22cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北西壁中央部付近が，第27号土坑に掘り込まれているため検出されていない。

覆土　自然堆積。

遺物　土師器(坏，甕)片，須恵器(甕)片が極少量出土している。25の砥石は南西部の覆土中層から出土している。22の土師質土器(小皿)は南東部の覆土上層から出土しているが，流れ込みと考えられる。



第5号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
2　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　褐　色　ローム粒子・ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。

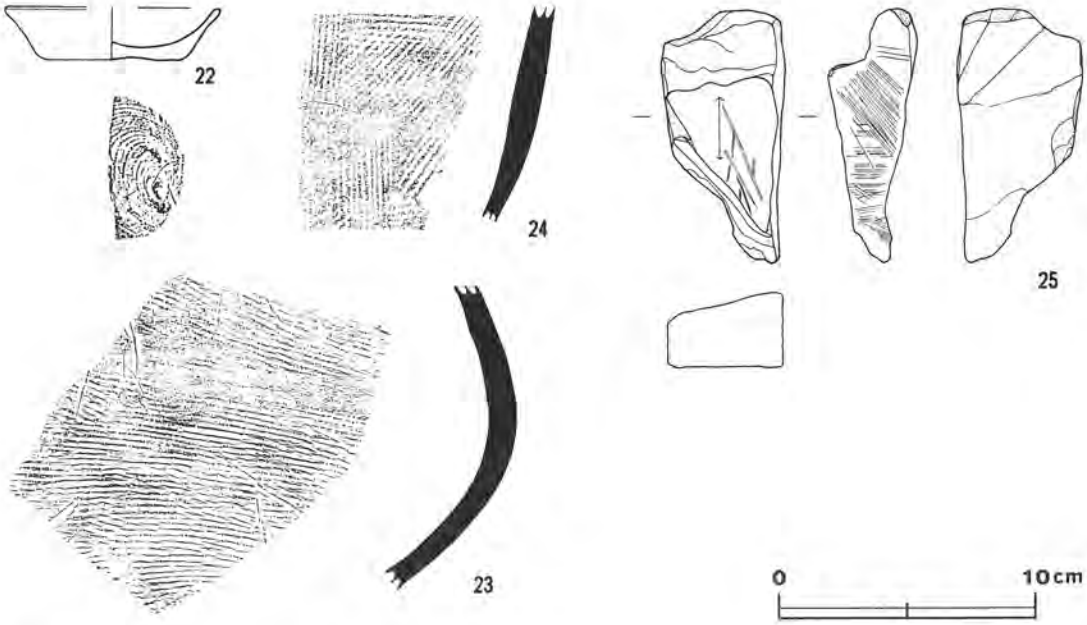
第11号　第5号住居跡実測図

所見　本跡は，重複関係から第4号掘立柱建物跡より新しく，第23・27号土坑，第8号掘立柱建物跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

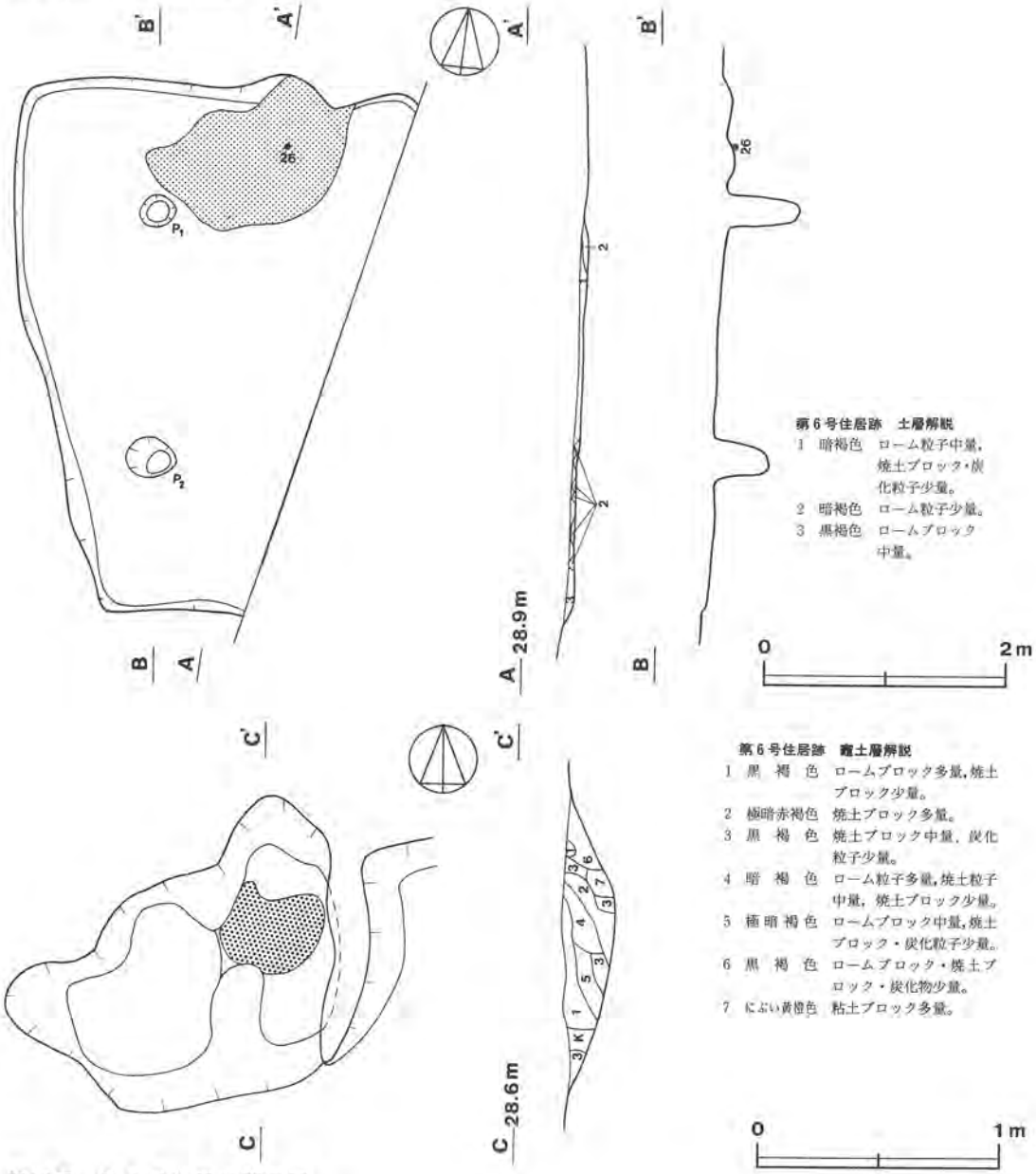
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 22	皿 土師質土器	A [8.3] B 2.1 C 5.4	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P20 10% 南東部覆土上層
23	甕 須恵器		甕の胴部片。	胴部外面平行叩き目。	砂粒・礫 灰色 良好	TP3 10% 北東部覆土上層
24	甕 須恵器		甕の胴部片。	胴部外面平行叩き目。	砂粒・礫 灰白色 良好	TP4 5% 北東部覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
25	砥石	10.0	4.9	3.5	—	138.5	100	南西部覆土	Q2 粘板岩



第12図　第5号住居跡出土遺物実測・拓影図

第6号住居跡(第13図)



第13図　第6号住居跡実測図

位置　調査区の北東部，B3i_{IV}区を中心に確認されている。本跡の東側2分の1程は，調査区域外にのびている。

規模と平面形　長軸4.50m，短軸(3.16)mで，方形状を呈するものと推定される。

主軸方向　N-2°-E。

壁　壁高は7～18cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　桑の根によって撹乱されている。全体的には凸凹であるが硬く踏み固められている。

ピット　2か所(P_1，P_2)検出されている。P_1，P_2は，径30～32cm，深さ44～62cmで，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央部付近の壁を18cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。天井部は崩落し，左袖部は木の根によって撹乱されているが，右袖部は比較的良好に遺存している。火床は床面を12cm程掘り窪め，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

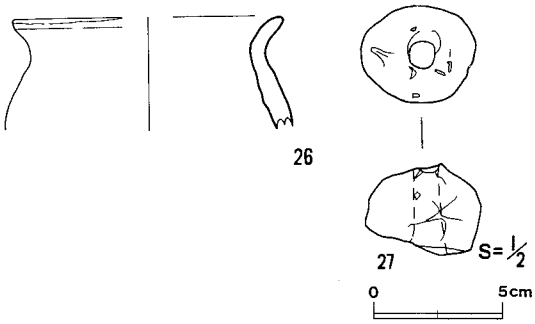
遺物　覆土中から土師器(甕)片，須恵器(坏)片が少量出土している。26は土師器の甕で竈内から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 26	甕 土師器	A [10.6] B (4.5)	頸部はくびれ，口縁部は外反して立ち上がる。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P21　5% 竈

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
27	球状土錘	2.5	3.1	---	10.0	13.7	100	覆土	DP4



第14図　第6号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡(第15図)

位置　調査区の北東部，B2i_0区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西コーナー付近は第7号土坑に掘り込まれ，南東部は第8号住居跡の北西部を掘り込んでいる。

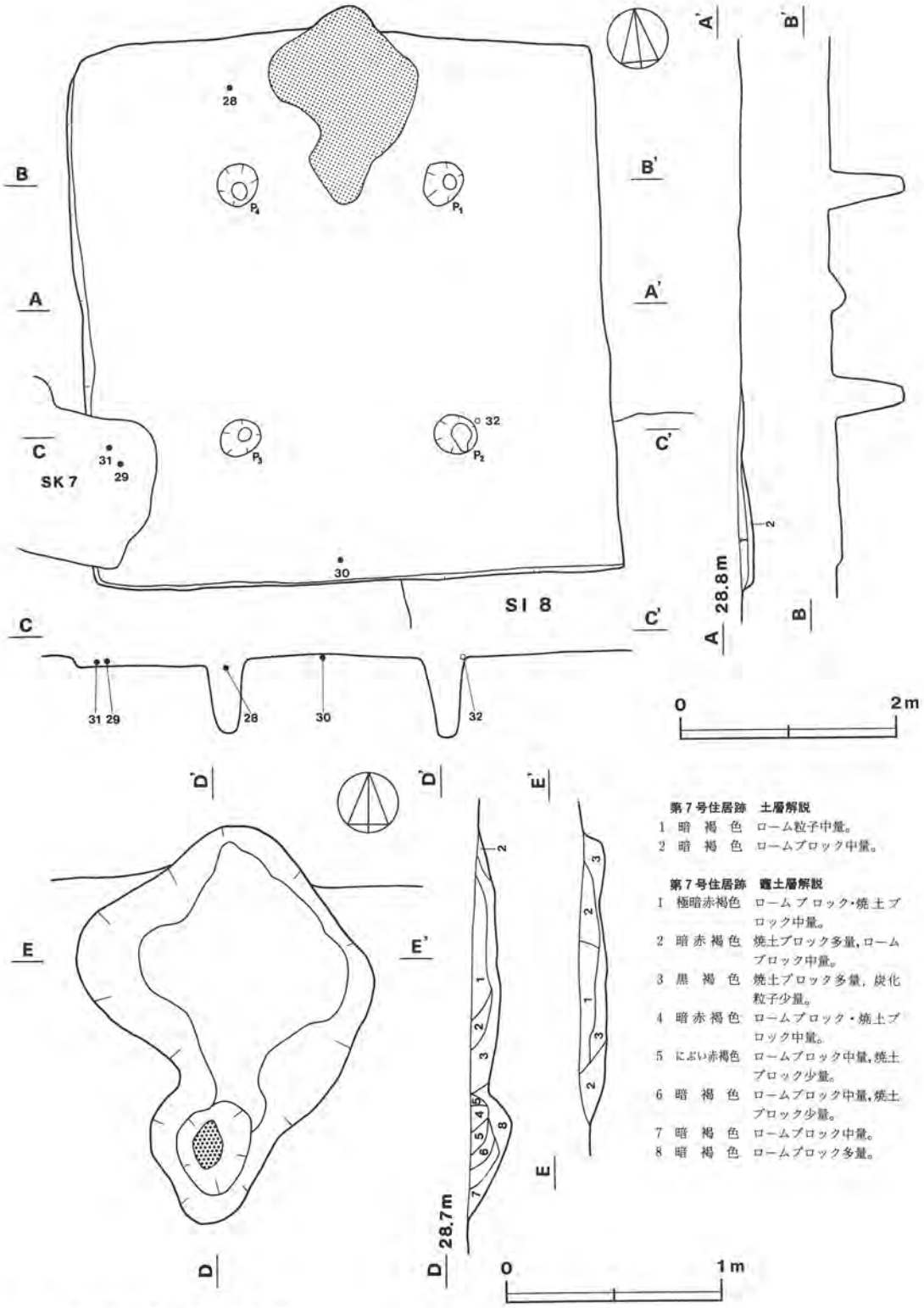
規模と平面形　長軸5.10m，短軸4.92mの方形を呈している。

主軸方向　N-0°。

壁　南壁と西壁は僅かに立ち上がりが検出されたが，北壁と東壁は削平され検出されていない。壁高は10cm前後で，南壁は外傾して，西壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　全体的に平坦で，中央部は踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径38～40cm，深さ67～74cmで，いずれも主



第15図　第７号住居跡実測図

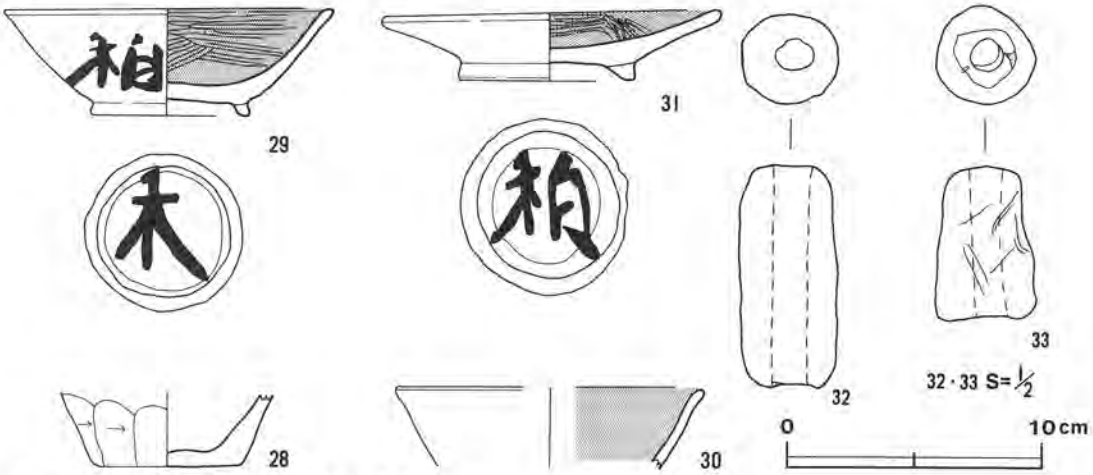
柱穴である。

竈　北壁中央部の壁を24cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。遺存状態は悪く，火床が僅かに検出されたにすぎない。

覆土　大半が削平され，南壁，西壁付近に10cm程の厚さで暗褐色土が堆積しているが，堆積状況は不明である。

遺物　床面から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が少量出土している。30は土師器の坏で南壁中央部付近の床面から，28は土師器の甕で竈西側の床面から横位の状態で，32と33の管状土錘は南東部床面及び覆土からそれぞれ出土している。29の土師器の高台付坏及び31の土師器の高台付皿は西壁際の覆土下層から正位の状態で出土し，それぞれ底部及び体部に「柏木」「柏」の墨書がみられる。

所見　本跡は，重複関係から第8号住居跡より新しく，第7号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第16図　第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 28	甕 土師器	B (3.0) C 5.6	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部下位一方向の手持ちヘラ削り。底部に木葉痕。	砂粒・礫 橙色 普通	P22 5% 北西部床面
29	高台付坏 土師器	A 12.8 B 4.3 D 6.3 E 0.5	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転糸切り後，ナデ。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 浅黄色 普通	P24 80% 南西部覆土下層 墨書「柏木」
30	坏 土師器	A [12.0] B (3.2)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。	体部外面横ナデ。体部内面横ナデ後，黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P26 5% 南西部床面
31	高台付皿 土師器	A 13.4 B 2.9 C 0.7	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は大きく外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P23 100% 南西部覆土下層 墨書「柏」

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
32	管状土錘	5.9	2.6	---	10.0	36.4	100	南東部床面	DP5
33	管状土錘	4.1	2.7	---	9.0	23.0	100	覆土	DP6

第8号住居跡(第17図)

位置　調査区の北東部，B2j_0区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西部は第7号住居跡の南東部に掘り込まれ，南西部は第5号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.66m，短軸4.50mの方形を呈している。

主軸方向　N-8°-W。

壁　壁高は18～22cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅14～20cm，深さ6～12cmで，断面形はU字状を呈している。

床　P_5と南壁との間はやや凹んでいるが，全体的には平坦で，特に中央部及び竈の前方が堅緻である。

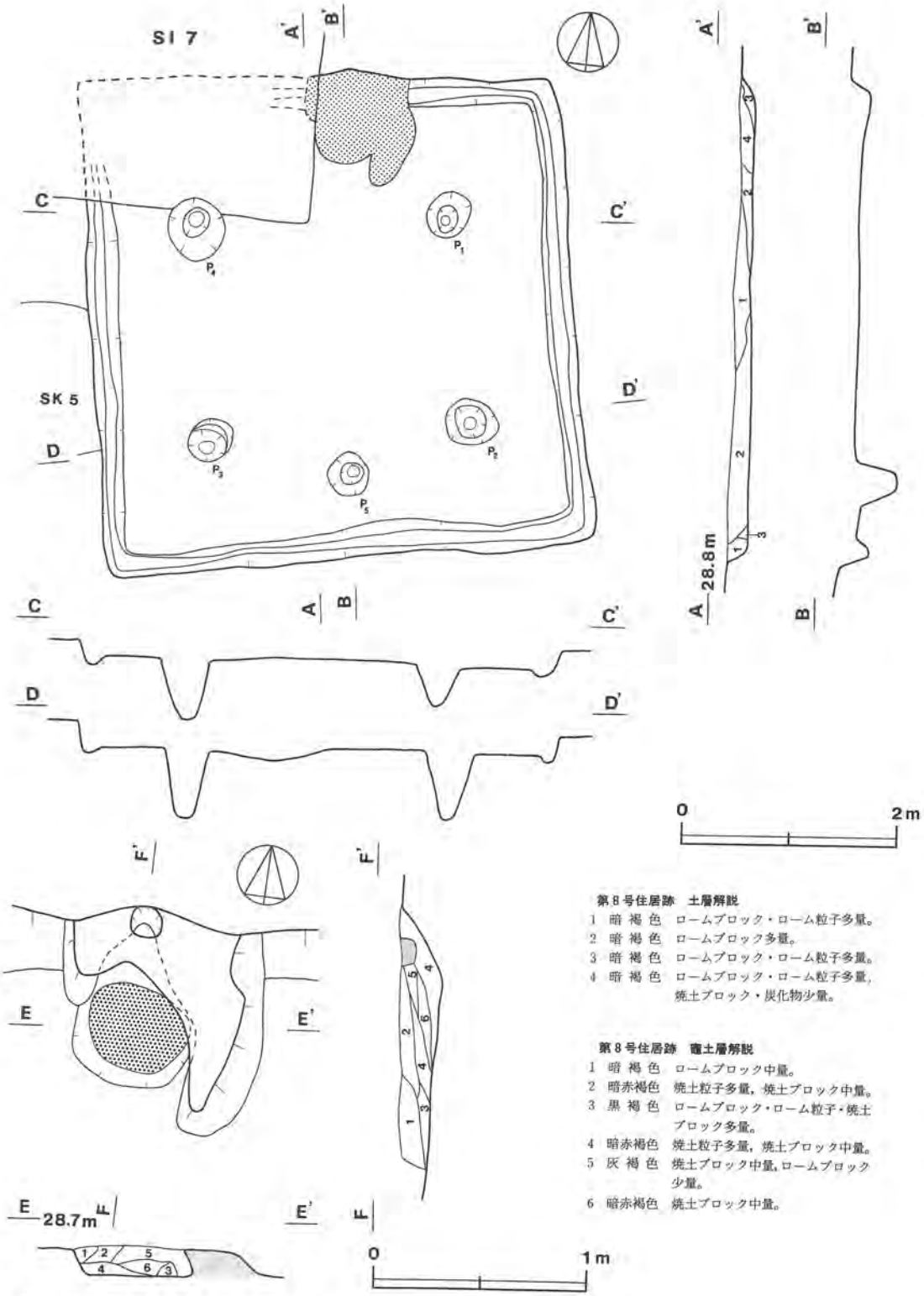
ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径38～60cm，深さ42～64cmで主柱穴，P_5は，径38～40cm，深さ42cmで，出入口の施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央からやや東寄りの壁を10cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ103cm，幅122cm程を測る。左袖部は第7号住居跡によって壊されているが，天井部の一部と右袖部は比較的良好に遺存している。火床は床面を4cm程掘り窪め，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は緩やかに外傾して立ち上がり，煙出口に至っている。

覆土　自然堆積。

遺物　土師器(坏，甕)片，須恵器(甕，盤，蓋)片が少量出土している。34の土師器のは南西部の覆土から，35の須恵器の坏は北西部の覆土から，36の手捏土器は南東部の覆土からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第5号土坑より新しく，第7号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から奈良時代の住居跡と考えられる。



第8号住居跡　土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量。
2　暗 褐 色　ロームブロック多量。
3　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量。
4　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。

第8号住居跡　竈土層解説

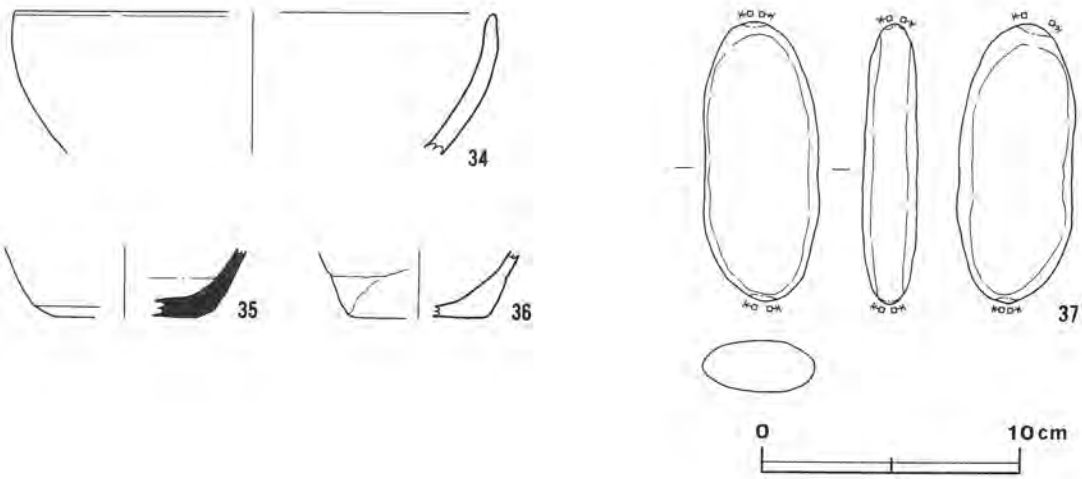
1　暗 褐 色　ロームブロック中量。
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量。
3　黒 褐 色　ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック多量。
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量。
5　灰 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量。
6　暗赤褐色　焼土ブロック中量。

第17図　第8号住居跡実測図

第 8 号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 34	埦 土師器	A [18.8] B (5.6)	体部は内彎しながら立ち上がり口縁部との境に弱い稜をもつ。	体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P27 10% 南西部覆土中層
35	坏 須恵器	B (2.8) C [5.6]	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P29 10% 北西部覆土中層
36	手捏土器	B (2.7) C [5.4]	平底。体部は外傾して立ち上がる。体部下位に雑な沈線を施す。	体部内・外面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P28 30% 南東部覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
37	敲石	11.1	4.6	2.1	—	173.5	100	北東部覆土	Q3 流紋岩



第18図　第 8 号住居跡出土遺物実測図

第 9 号住居跡(第19図)

位置　調査区の北東部，C2b₀区を中心に確認されている。

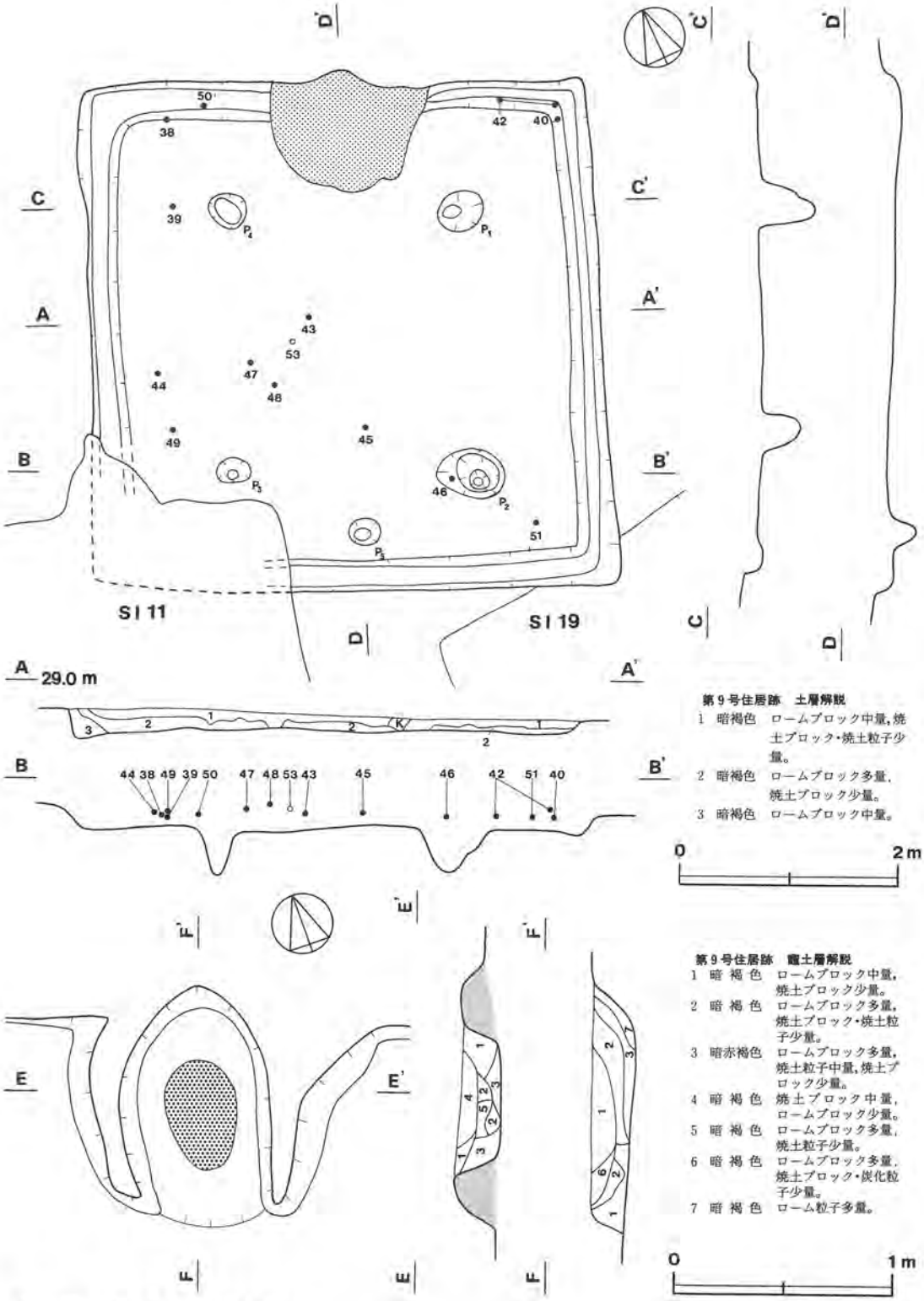
重複関係　本跡の南西コーナー付近は第11号住居跡の北東部に掘り込まれ，南東コーナーは第19号住居跡の北壁の一部を僅かに掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.76m，短軸4.72mの方形を呈している。

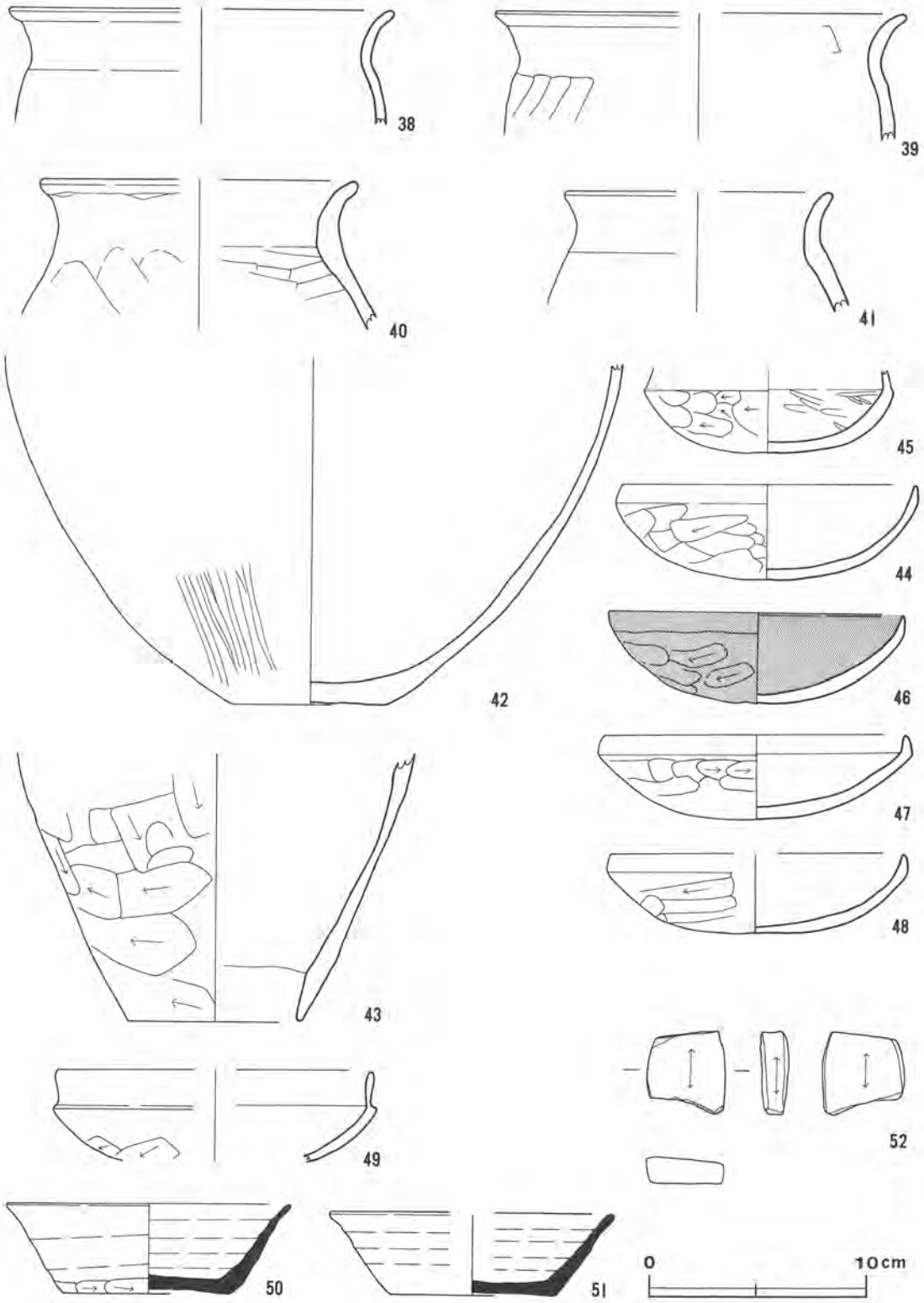
主軸方向　N-19°-E。

壁　壁高は8～16cm を測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　南西コーナー付近は第11号住居跡に掘り込まれているため検出できないが，壁下を全周し



第19図　第9号住居跡実測図



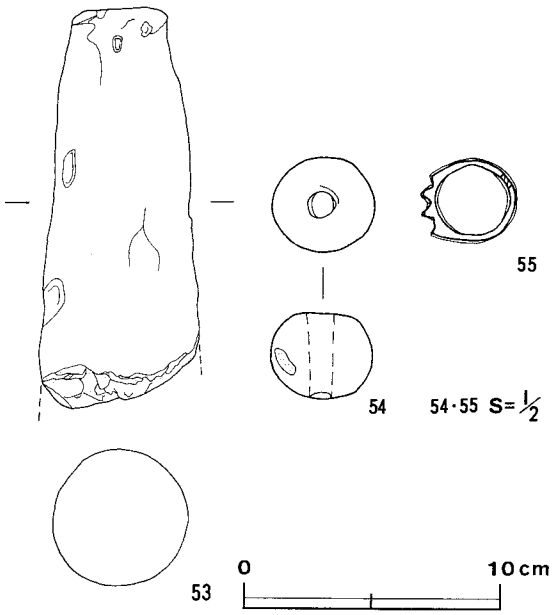
第20図　第９号住居跡出土遺物実測図（1）

ているものと考えられる。上幅10～12cm，深さ1～2cmで，断面形は皿状を呈している。

床　ほぼ平坦で，中央部から竈前方にかけては，硬く踏み固められている。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径22～62cm，深さ39～49cmで主柱穴，P_5は，径26～30cm，深さ24cmで，出入口の施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央からやや東寄りの壁を17cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ113cm，幅122cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は比較的良好に遺存し，内側は熱をうけて赤変硬化している。火床は床面を2cm程掘り窪め，煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。



第21図　第9号住居跡出土遺物実測図（2）

覆土　自然堆積。

遺物　出土量は少ないが，北東コーナー及び南西部付近からまとまって土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，高坏)片等が出土している。47から49の土師器の坏は，南西部の覆土上層及び中層から正位の状態で，43の土師器の甑は中央部の覆土中層から潰れた状態で，51の須恵器の坏は，南東コーナー付近の覆土から正位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第19号住居跡より新しく，第11号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20・21図38	甕 土師器	A [17.8] B (5.4)	胴部と頸部との境に弱い稜をもつ。頸部はくびれ，口縁部は大きく外反する。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄橙色 普通	P31　10% 南西部覆土中層
39	甕 土師器	A [18.8] B (6.0)	胴部と頸部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外反して立ち上がる。	胴部上位手持ちヘラ削り。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P32　5% 南西部覆土中層
40	甕 土師器	A [14.5] B (7.0)	頸部は器厚を増して立ち上がり口縁部は大きく外反する。口縁部は丸い。	胴部外面手持ちヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P33　5% 北東コーナー覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
41	甕 土師器	A [12.2] B (5.7)	胴部と頸部との境に弱い稜をもつ。頸部はくびれ，口縁部は僅かに外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P34 5% 竈
42	甕 土師器	B (16.3) C 7.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面下位ヘラ磨き。底部及び胴部内面ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P35 30% 北東コーナー 覆土上層
43	甑 土師器	B (12.7) C 8.1	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面及び内部下位は手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 良好	P36 20% 中央部覆土中層
44	坏 土師器	A 13.5 B 4.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P37 100% 南西部覆土上層
45	坏 土師器	B (4.0)	丸底。体部は器厚を増しながら内彎気味に立ち上がり，口縁部は内傾する。体部との境に稜をもつ。	体部外面手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P38 90% 中央部覆土上層
46	坏 土師器	A 13.7 B 4.2	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部及び内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 赤黒色 普通	P39 70% 南東部覆土中層
47	坏 土師器	A 14.1 B 4.0	丸底。内部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は内傾する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部及び内面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良好	P40 60% 南西部覆土上層
48	坏 土師器	A [12.6] B 3.8	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良好	P41 30% 南西部覆土上層
49	坏 土師器	A [14.6] B (4.3)	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立する。体部との境に強い稜をもつ。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 良好	P42 10% 南西部覆土中層
50	坏 須恵器	A 13.2 B 4.2 C 7.8	上げ底気味。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。体部下端一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P43 70% 北西コーナー 覆土中層
51	坏 須恵器	A [13.2] B 4.2 C [7.6]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 良好	P44 30% 南東コーナー 覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
52	砥石	(3.9)	3.7	1.4	---	(24.8)	80	覆土	Q4 凝灰岩
53	支脚	(15.9)	(6.3)	---	---	(523.7)	80	南西部覆土上層	DP8
54	球状土錘	2.3	2.8	---	8.0	14.0	100	覆土	DP9
55	指輪	2.5	---	---	内径1.9	5.4	100	覆土	M1

第10号住居跡(第22・23図)

位置　調査区の北東部，C2a$_8$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西部は第12号住居跡の北コーナーを，北壁は第41号住居跡の南東コーナー付近を掘り込んでいる。本跡の南壁中央部付近の上位には第20号住居跡の床が貼られている。

規模と平面形　長軸4.86m，短軸4.70mの方形を呈している。

主軸方向　N-15°-W。

壁　北西コーナーは削平され検出されていないが，その他の壁は，壁高16～18cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北西コーナー付近を除き検出されている。上幅8～16cm，深さ2～6cmで，断面形は皿状を呈している。

床　平坦で，踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径32～44cm，深さ45～62cmで，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央からやや東寄りの壁を40cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ126cm，幅134cmを測る。天井部は崩落し，袖部は僅かに遺存している。火床は床面を12cm程掘り窪めているが，さほど熱を受けていない。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

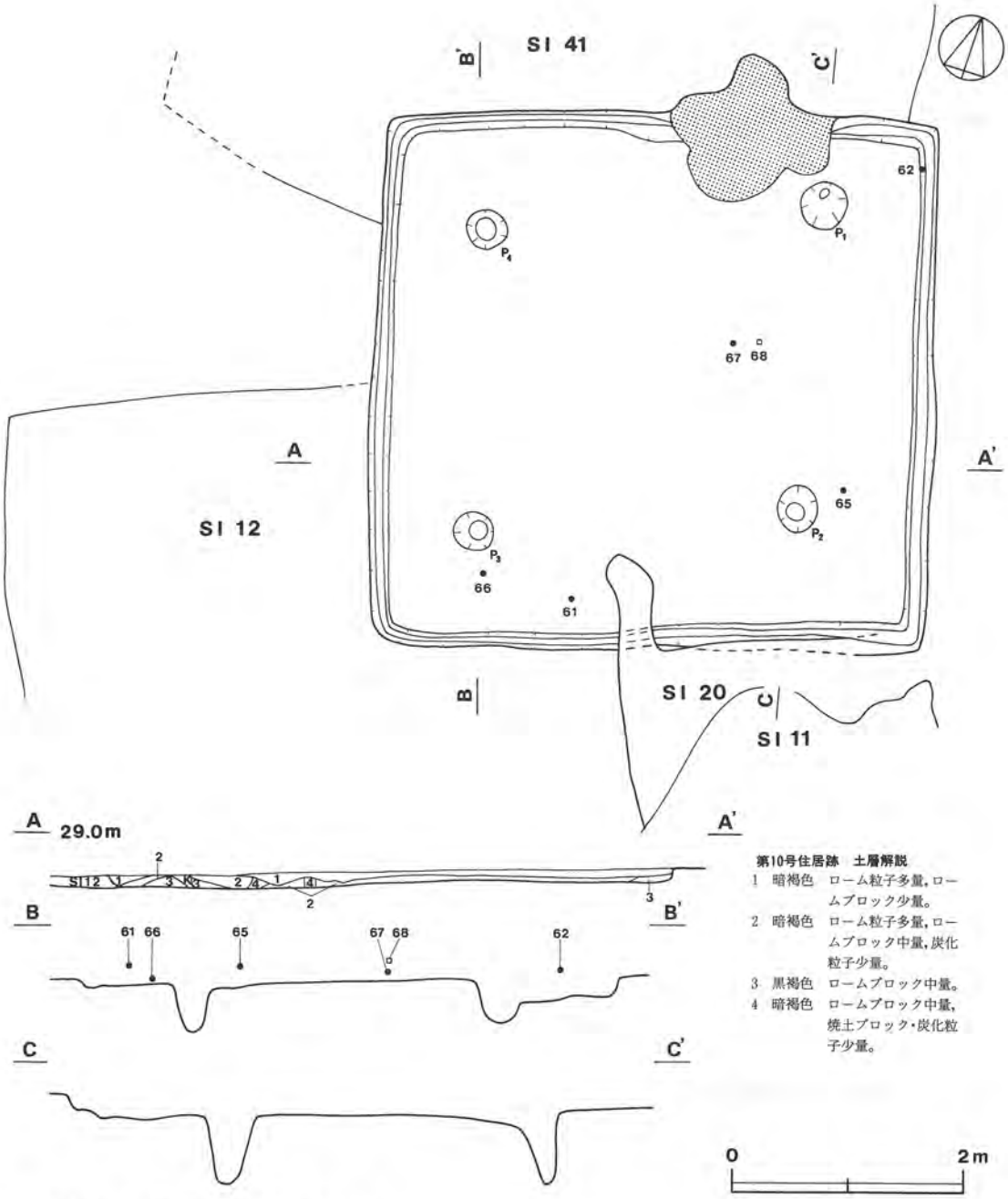
覆土　自然堆積。

遺物　東部の覆土を中心に，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，蓋)片が少量出土している。56と57の土師器の甕は竈右袖部から，67の須恵器の坏は中央部からやや東寄りの覆土から正位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第12・41号住居跡より新しく，第20号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

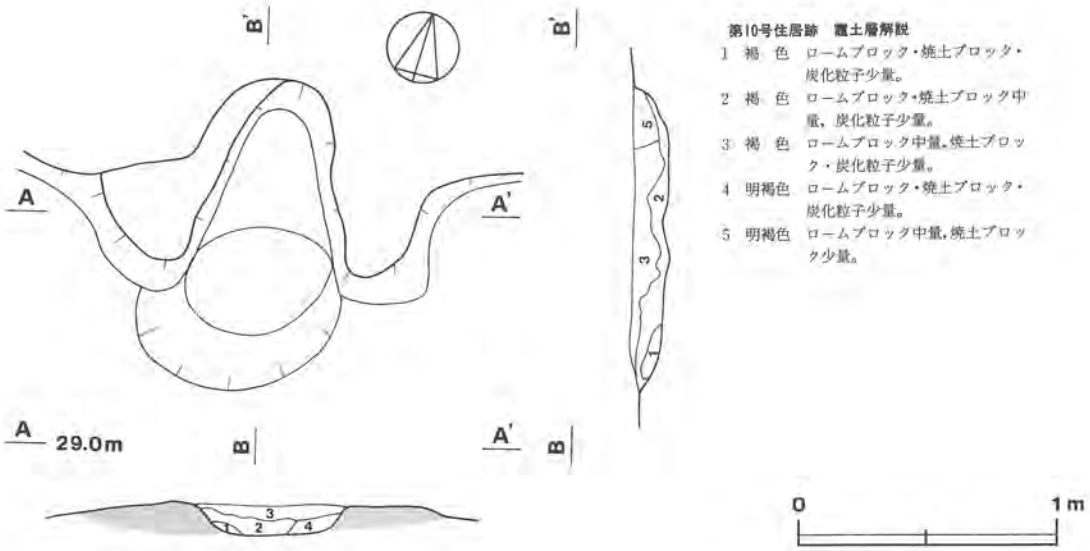
第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 56	甕 土師器	A [22.6] B (6.3)	頸部はくびれ，口縁部は外反する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 明赤褐色 普通	P45　5% 竈
57	甕 土師器	A [16.0] B (9.5)	張りの弱い胴部で，頸部はくびれ，口縁部は外反する。口唇部を外上方につまみ出す。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P46　5% 竈
58	甕 土師器	A [13.8] B (5.9)	頸部から口縁部は器厚を増して「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P47　10% 北東部覆土上層



第22図　第10・20号住居跡実測図

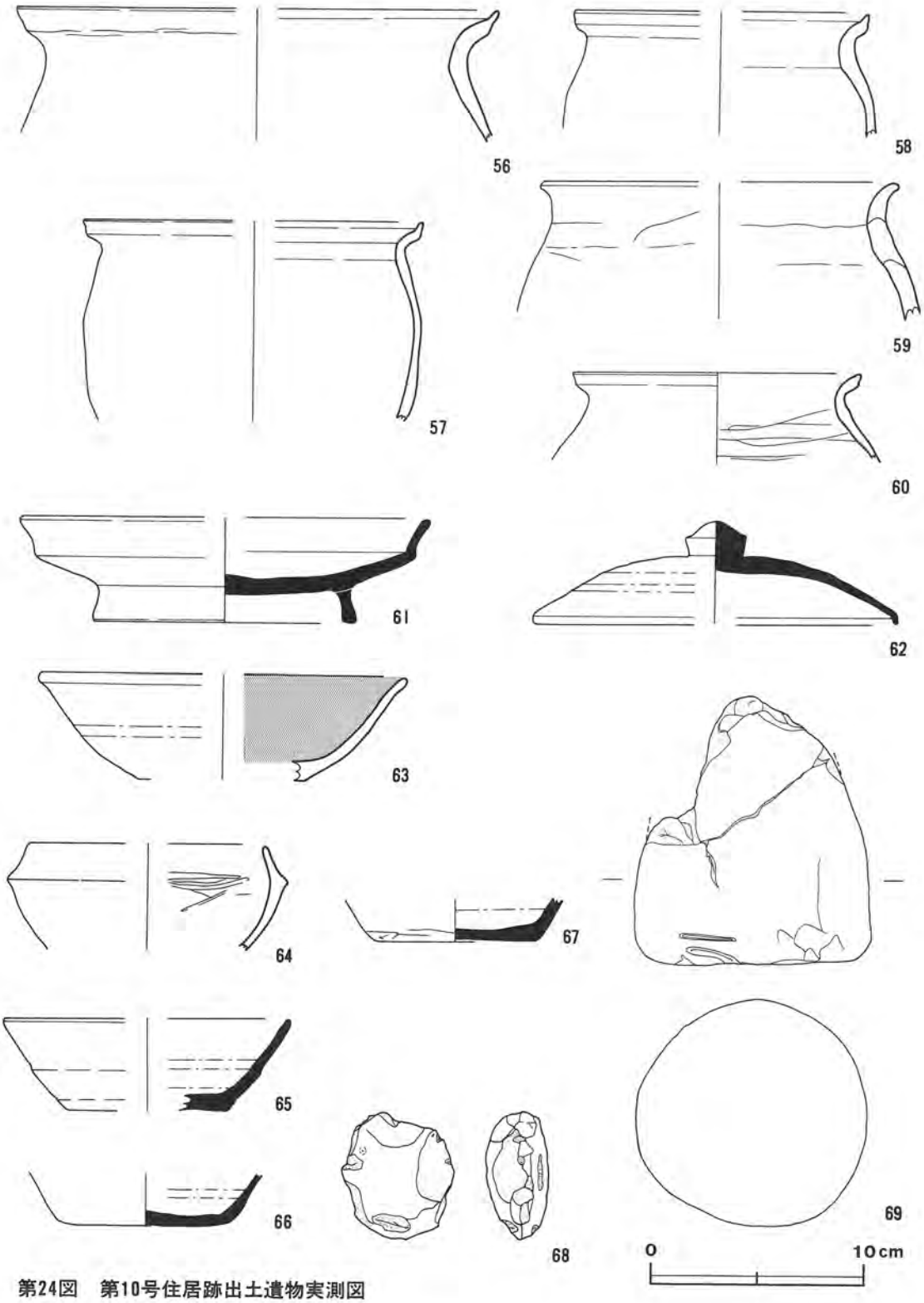
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
59	甕 土師器	A [16.8] B (6.5)	口縁部は器厚を減じ，外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P48　10% P_3覆土
60	甕 土師器	A [13.5] B (4.2)	頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方に僅かにつまみ出す。	口頸部内・外面横ナデ。胴部外面摩耗。	砂粒 橙色 不良	P49　10% 北東部覆土上層



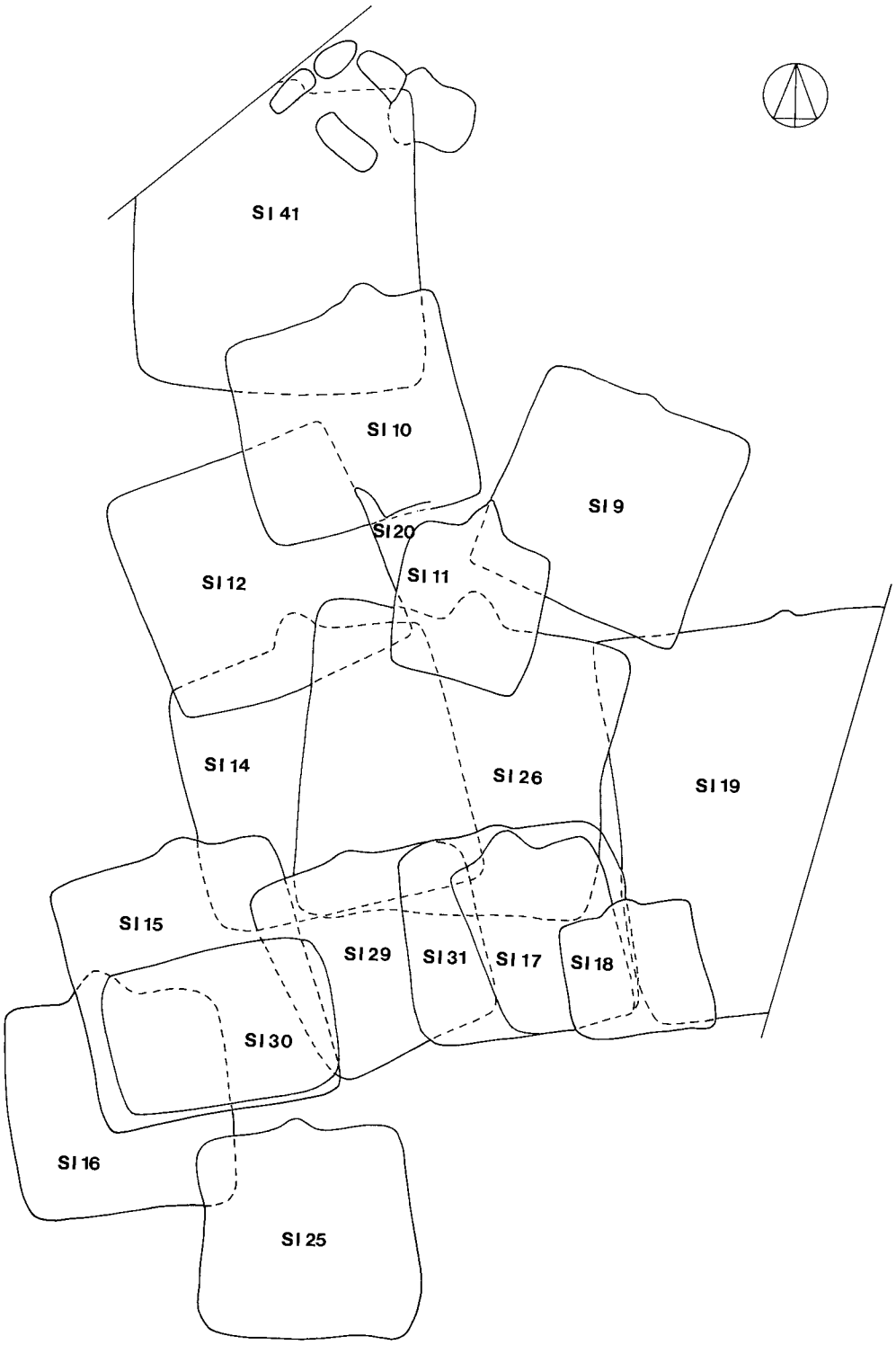
第23図　第10号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
61	盤 須恵器	A [19.4] B 5.0 D [12.4] E 1.7	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は大きく外傾し，口縁部は体部から外上方に僅かに外反して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。口縁部及び体部内・外面横ナデ。高台貼り付け。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P55　40% 南西部覆土上層
62	蓋 須恵器	A [16.9] B 4.9 F 2.9 G 1.7	天井部は浅く，緩やかに傾斜して口縁部に至る。口縁部はほぼ直角に屈曲する。つまみは腰高で宝珠形を呈する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P56　30% 北東部覆土上層
63	坏 土師器	A [17.2] B 5.0 C [7.8]	体部は外傾して立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。	体部外面横ナデ。体部内面ヘラ削り後，黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P50　10% P_4覆土
64	坏 土師器	A [11.0] B (5.0)	体部は内彎して立ち上がり，口縁部で内傾する。体部との境に強い稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 明褐色 普通	P51　20% P_3覆土
65	坏 須恵器	A [13.4] B 4.4 C [7.4]	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P52　20% 南東部覆土上層
66	坏 須恵器	B (2.5) C [7.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部内・外面摩耗。	砂粒 灰白色 普通	P53　20% 南西部覆土上層
67	坏 須恵器	B (2.1) C 7.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 灰オリーブ色 普通	P54　30% 中央部覆土上層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
68	軽石	6.0	5.3	2.9	—	16.7	100	北東部覆土上層	Q5
69	支脚	(12.8)	(11.2)	—	—	(1206.1)	70	覆土	DP11



第24図　第10号住居跡出土遺物実測図



第25図　北東部検出住居跡重複関係図

第11号住居跡(第26図)

位置　調査区の北東部，C2b_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東部は第9号住居跡の南西コーナーを,本跡の西壁の一部は第12号住居跡の東コーナーを，本跡の南西コーナーは第14号住居跡の北東コーナーを，本跡の南部は第26号住居跡の北壁中央部を掘り込んでいる。本跡の北西部の上位には第20号住居跡の床が構築されている。

規模と平面形　長軸3.28m，短軸3.06mの方形を呈している。

主軸方向　N-11°-E。

壁　壁高は16～20cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　西壁下だけに検出されている。上幅14～20cm,深さ6cmで,断面形はU字状を呈している。

床　東部から西部にかけて僅かに傾斜している。中央部は踏み固められ堅緻である。

竈　北壁中央からやや西寄りの壁を壁外に56cm程掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ137cm，幅98cmを測る。天井部の一部と袖部は，比較的良好に遺存している。火床は床面を6cm程掘り窪め，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

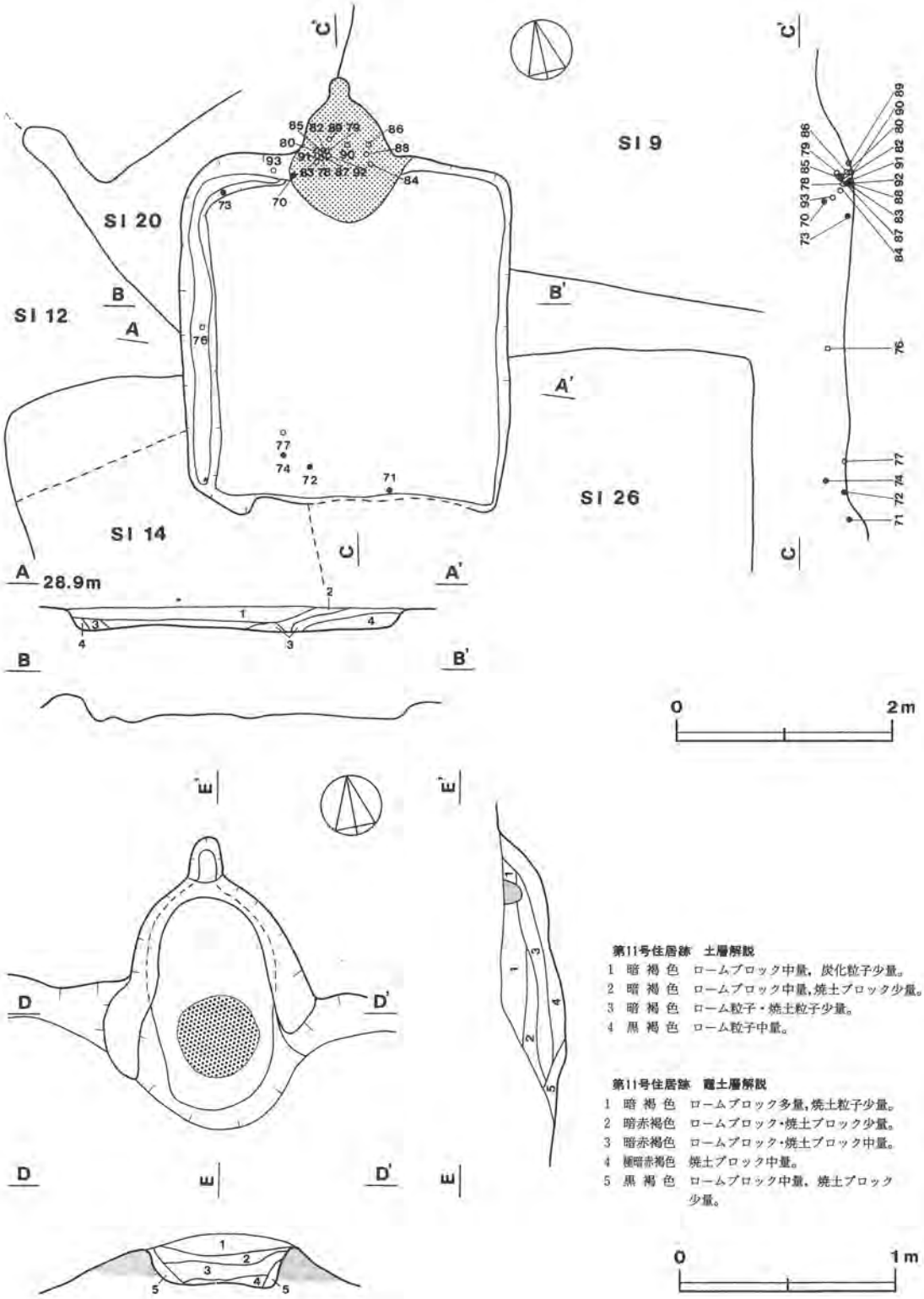
覆土　自然堆積。

遺物　覆土下層及び床面からは土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が少量出土している。72の土師器の坏は南西部床面から，73の土師器の坏は北西コーナー付近の床面から逆位の状態でそれぞれ出土している。竈の燃焼部からは球状土錘が18点出土している。

所見　本跡は，重複関係から第9・12・14・26号住居跡より新しく，第20号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 70	坏 土師器	A [12.7] B 4.5 C 5.8	平底。体部は内彎気味に立ち上がり,口縁部で僅かに外反する。口唇部は丸い。	底部糸切り後ナデ。体部下端回転ヘラ切り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P58　60% 竈
71	坏 土師器	A [12.2] B (3.9) C [5.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり,口縁部で僅かに外反する。	体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P59　30% 南壁中央際床面
72	坏 土師器	A 13.7 B 4.2 C 7.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。体部外面摩耗。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P60　90% 南西部床面
73	坏 土師器	A [16.0] B 4.6 C [7.6]	平底。体部は器厚を増しながら内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P61　60% 北西部床面
74	坏 土師器	A 11.8 B 4.0 C 5.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P62　70% 北東部覆土上層



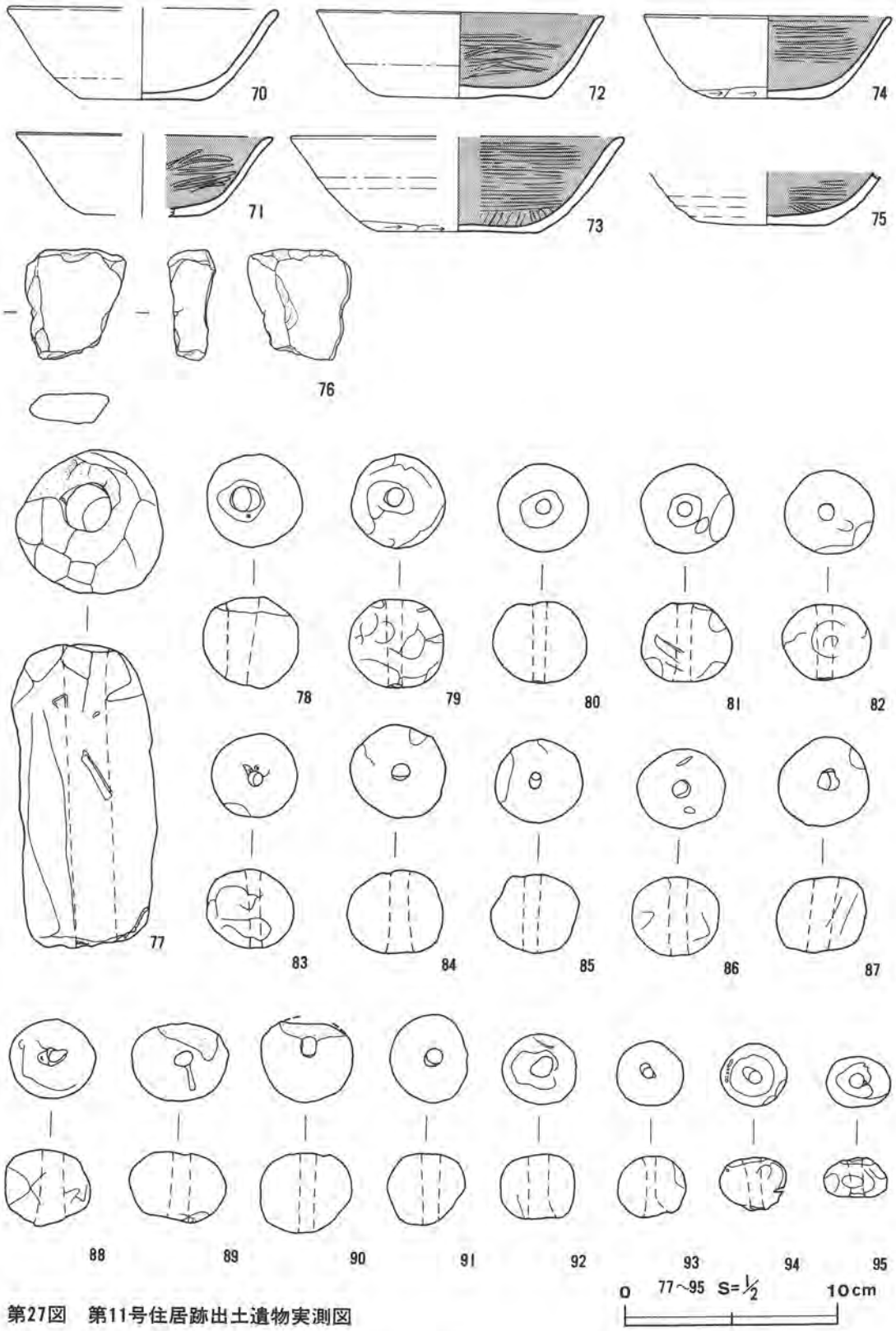
第11号住居跡　土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化粒子少量。
2　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
3　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量。
4　黒 褐 色　ローム粒子中量。

第11号住居跡　竈土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック多量，焼土粒子少量。
2　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量。
3　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量。
4　極暗赤褐色　焼土ブロック中量。
5　黒 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量。

第26図　第11号住居跡実測図



第27図　第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
75	坏 土師器	B (2.6) C 5.8	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P63 30% 覆土

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
76	砥石	(5.3)	4.9	2.3	--	(59.3)	80	西壁中央際	Q6 凝灰岩
77	管状土錘	9.7	4.8	--	15.0	193.4	100	南西部床面	DP12
78	球状土錘	2.9	3.0	--	10.0	20.2	100	竈	DP13
79	球状土錘	2.8	3.0	--	6.0	22.9	100	竈	DP14
80	球状土錘	2.6	3.0	--	5.0	19.8	100	竈	DP15
81	球状土錘	2.5	3.0	--	6.0	19.6	100	覆土	DP16
82	球状土錘	2.4	2.9	--	6.0	16.5	100	竈	DP17
83	球状土錘	2.5	2.8	--	6.0	16.9	100	竈	DP18
84	球状土錘	2.7	3.1	--	9.0	22.1	100	竈	DP19
85	球状土錘	2.6	2.9	--	5.0	16.9	100	竈	DP20
86	球状土錘	2.5	2.8	--	6.0	16.2	100	竈	DP21
87	球状土錘	2.5	2.9	--	8.0	18.0	100	竈	DP22
88	球状土錘	2.5	2.8	--	9.0	14.5	100	竈	DP23
89	球状土錘	2.3	3.1	--	7.0	(14.6)	90	竈	DP24
90	球状土錘	2.7	2.9	--	5.0	(15.4)	80	竈	DP25
91	球状土錘	2.3	2.5	--	6.0	12.6	100	竈	DP26
92	球状土錘	2.1	2.4	--	9.0	10.9	100	竈	DP27
93	球状土錘	2.0	2.2	--	8.0	8.3	100	竈	DP28
94	球状土錘	1.7	2.1	--	6.0	5.5	100	覆土	DP29
95	球状土錘	1.3	2.0	--	5.0	3.4	100	覆土	DP30

第12号住居跡(第28図)

位置　調査区の北東部，C2b_8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北コーナー付近は第10号住居跡の南西部に，東コーナー付近は第11号住居跡の西壁と第26号住居跡の北西コーナーにそれぞれ掘り込まれ，北東壁の南東側上位には第20号住居跡が構築されている。本跡の南コーナー付近は第14号住居跡の上位に貼床をして構築されている。

規模と平面形　長軸5.22m，短軸5.16mの方形を呈している。

主軸方向　N-23°-W。

壁　北西壁，南東壁及び南西壁の一部は重複する遺構に削平されているが，北東壁及び遺存している壁の壁高は6～20cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，南西部の貼床の部分を除き，硬く踏み固められている。

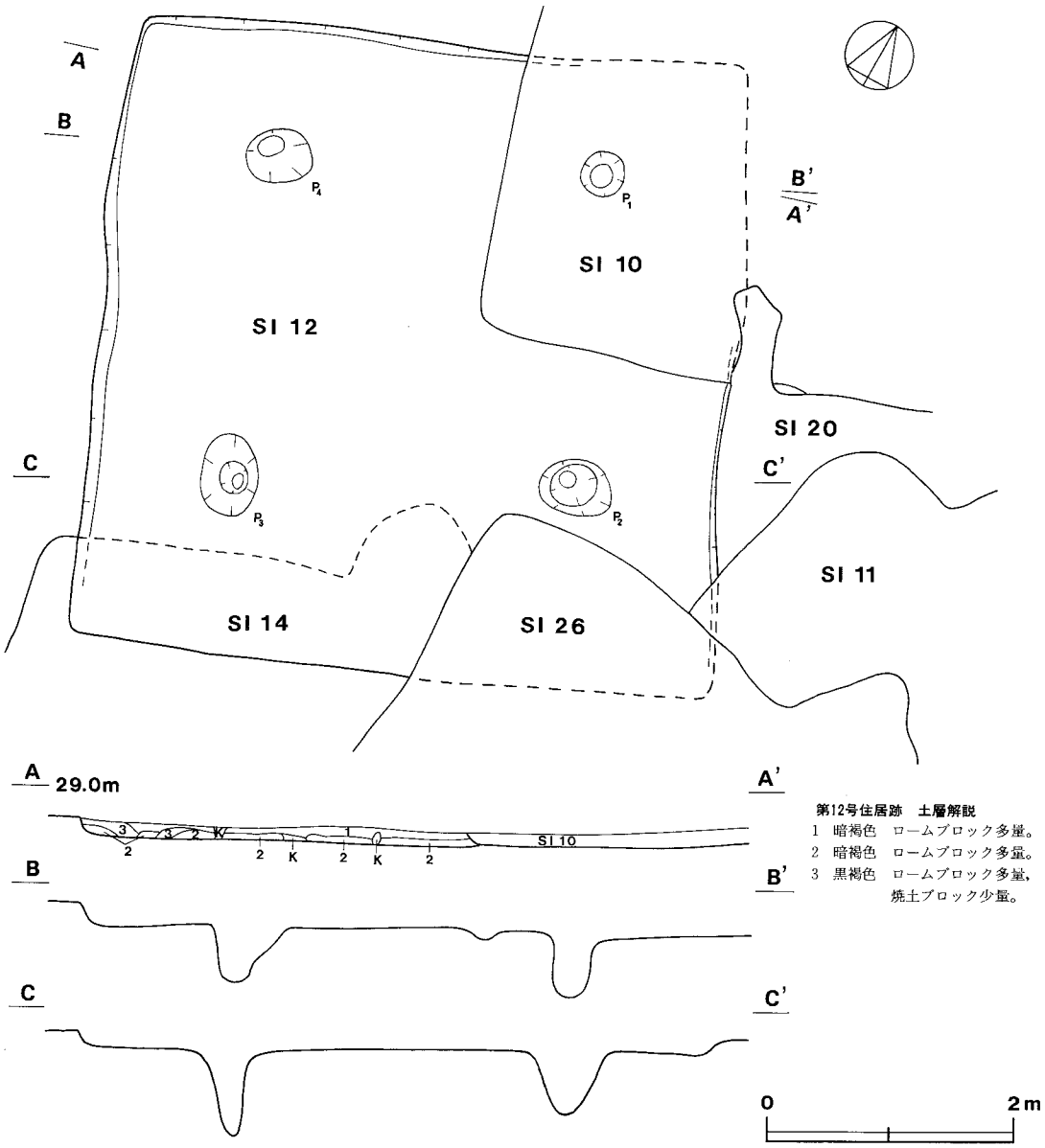
ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径38～64cm，深さ48～70cmで，いずれも主柱穴である。

竈　第10号住居跡に北西壁から北東壁にかけて掘り込まれているため検出されていない。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片が少量出土している。96の土師器の坏と97の須恵器の高台付坏は，北西部の覆土から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第14号住居跡より新しく，第10・11・20・26号より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

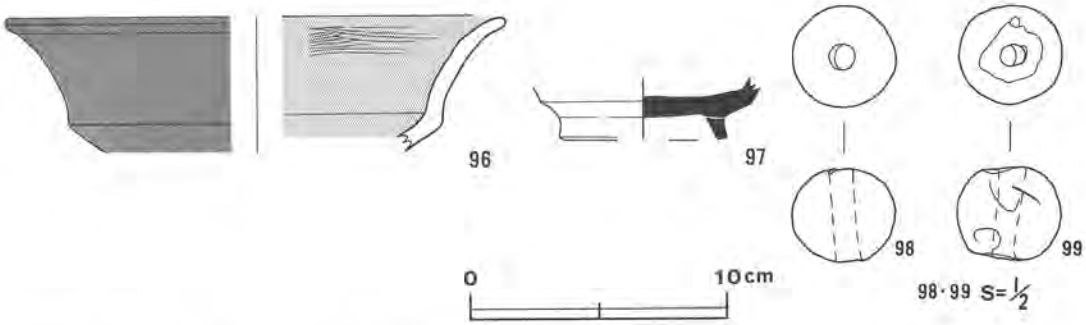


第28図　第12号住居跡実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 96	坏 土師器	A [19.4] B (5.4)	体部は内彎しながら立ち上がり口縁部は外反する。体部との境に強い稜をもつ。	口縁部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後,黒色処理。外面赤彩。	砂粒 明赤褐色 良好	P64 10% 北西部覆土
97	高台付坏 須恵器	B (2.5) D [6.4] E 0.9	平底で,「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部回転ヘラ切り後,回転ヘラ削り。高台貼り付け後,ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P65 30% 北西部覆土

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
98	球状土錘	2.5	2.7	—	7.0	15.0	100	南西部覆土	DP32
99	球状土錘	2.0	2.7	—	8.0	15.7	100	南西部覆土	DP33



第29図　第12号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡(第30図)

位置　調査区の北部，C2c$_5$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南東コーナー付近は第22号住居跡の北東コーナーに僅かに掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.46m，短軸4.46mの方形を呈している。

主軸方向　N-17°-E。

壁　北壁及び西壁の一部と南壁は削平され遺存していないが，他の壁は壁高4～12cm を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　東部から西部にかけて僅かに傾斜している。中央部は踏み固められ堅緻である。

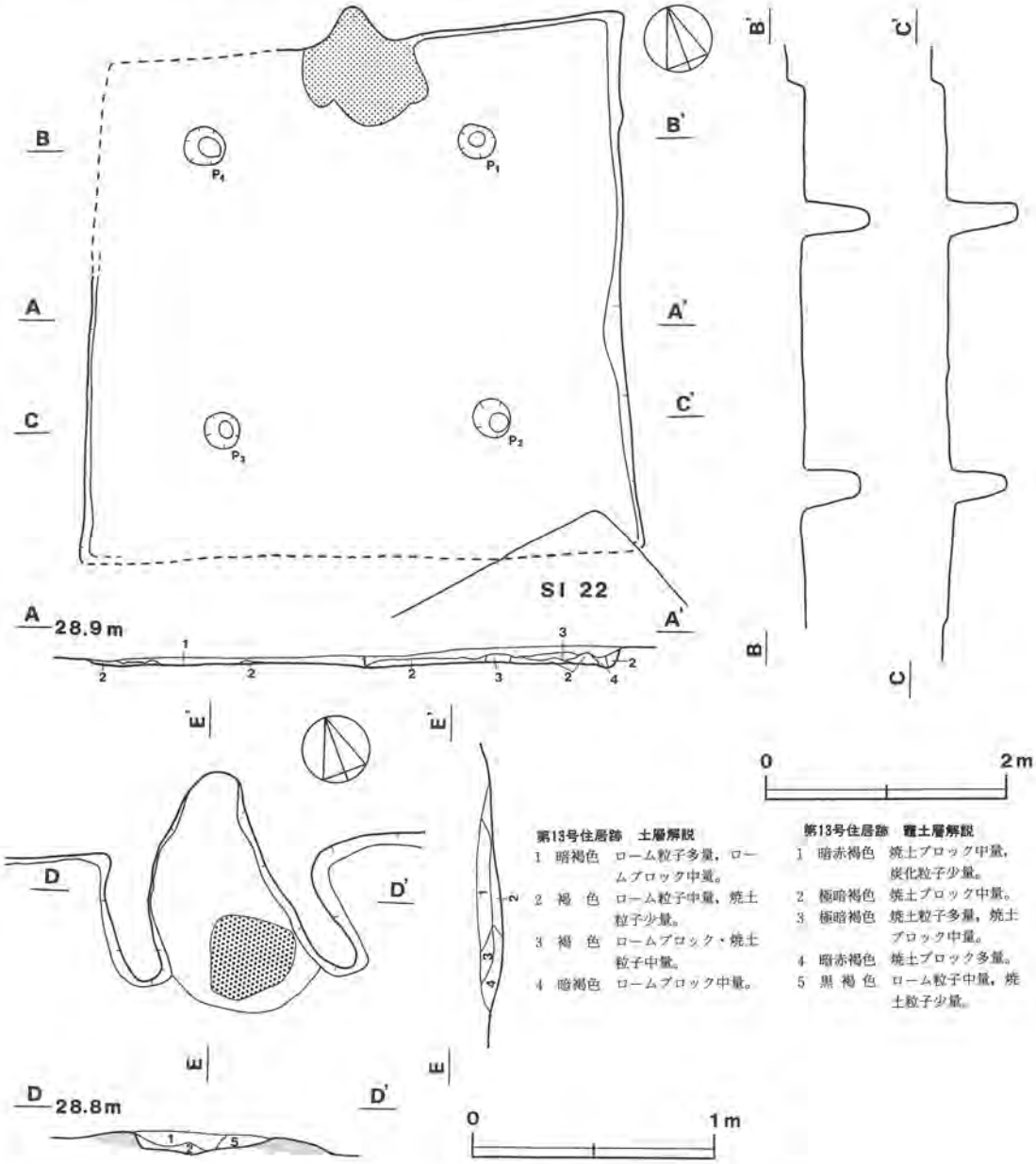
ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径28～34cm，深さ46～58cm で，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央部の壁を30cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ101cm，幅95cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を僅かに掘り窪め，よく焼けている。煙道は火床から急角度で外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層から土師器(坏，甕)片，須恵器(甕)片が少量出土している。

所見　本跡は，重複関係から第22号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第30図　第13号住居跡実測図

第14号住居跡(第31図)

位置　調査区の北東部，C2c_8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の東部は第26号住居跡の西部に，北東コーナーは第11号住居跡の南西コーナーにそれぞれ掘り込まれている。南西コーナーは第15号住居跡の北東コーナーに，南壁中央部は第29号住居跡の北西壁に，南東コーナーは第31号住居跡と第17号住居跡の北西コーナー付近に掘り込まれている。本跡の北西コーナー付近の上位には第12号住居跡の南コーナー付近が貼床をしている。

規模と平面形　長軸5.98m，短軸5.86mの方形を呈している。

主軸方向　N-11°-W。

壁　北壁の立ち上がりは重複する第12号住居跡の貼床の下から検出されている。壁高は18～40cmを測り，北壁は緩やかに外傾して，西壁は外傾して立ち上がっている。

壁溝　北壁，西壁及び南壁下から検出されている。上幅18～20cm，深さ8～10cmで，断面形は皿状を呈している。

床　ほぼ平坦で，竈付近が硬く踏み固められている。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径32～46cm，深さ32～66cmで主柱穴，P_5は，径18～24cm，深さ31cmで，出入口の施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部付近に僅かな痕跡が検出されている。

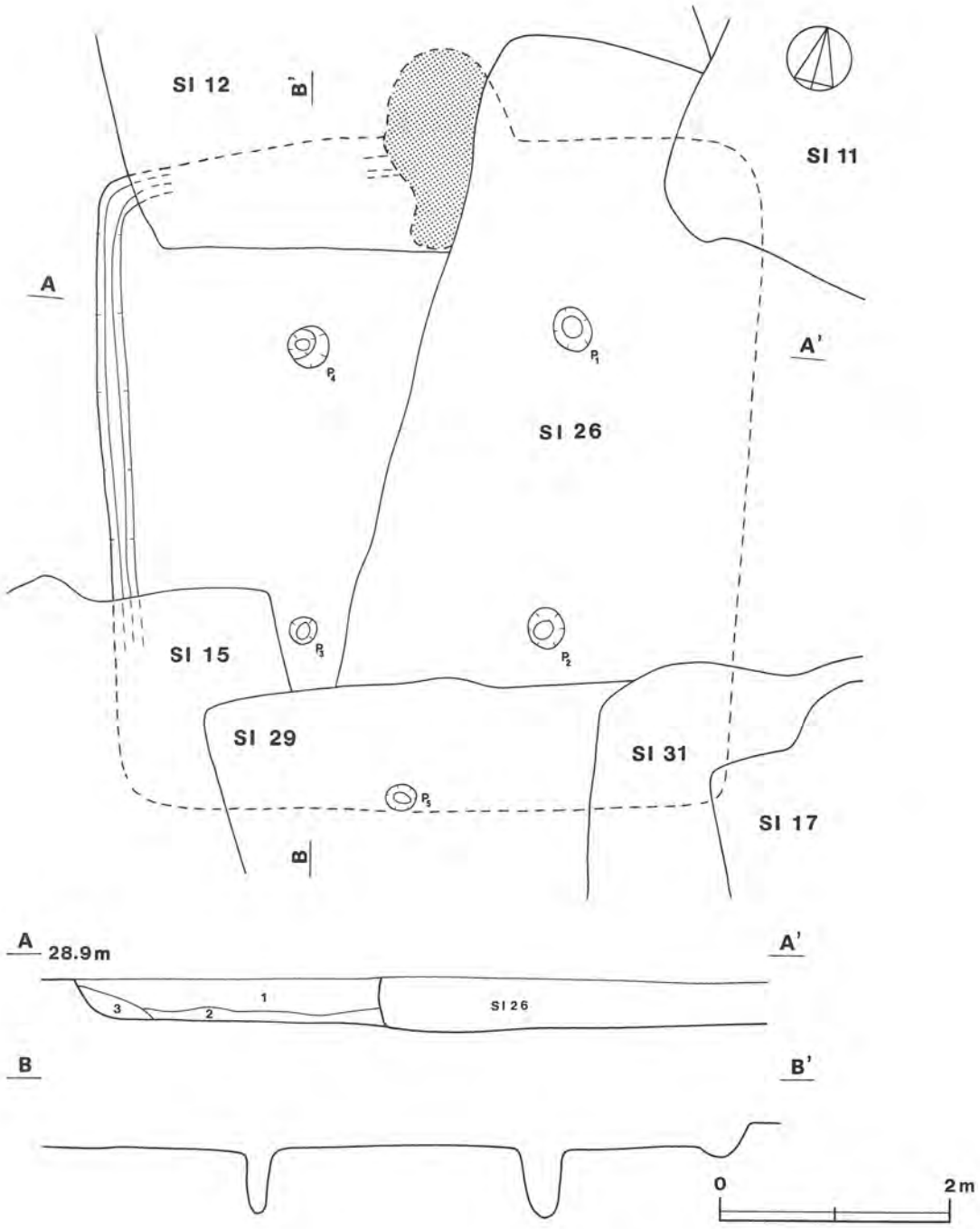
覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層から中層にかけて土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が少量出土している。100の須恵器の坏と102の須恵器の高坏は北西部覆土から，101の須恵器の坏は南西部覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第11・12・15・17・26・29・31号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

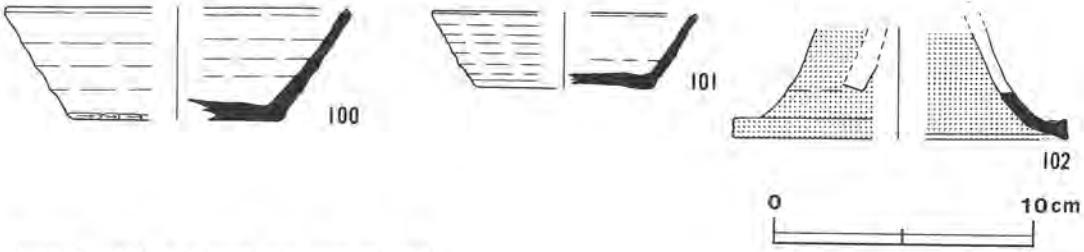
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 100	坏 須恵器	A [13.3] B 4.5	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P66 40% 北西部覆土
101	坏 須恵器	A [10.2] B (3.0) C [6.8]	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 良好	P67 40% 南西部覆土中層
102	高坏 須恵器	D [13.0] E (4.4)	脚部は緩やかに外反して裾部に至る。端部は段をなしほぼ直角に屈曲する。	裾部内・外面横ナデ。透かしヘラ切り。全面施釉。	砂粒 灰オリーブ色 普通	P68 5% 北西部覆土



第14号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量。
2　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子多量，焼土ブロック少量。
3　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子多量，炭化物少量。

第31図　第14号住居跡実測図



第32図　第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡(第33・34図)

位置　調査区の北東部，C2d_8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東コーナーは第14号住居跡の南西コーナー付近を掘り込み，南西部は第16号住居跡の北東部の上位から検出されている。東壁の一部は第29号住居跡の南西壁に掘り込まれ，南部の上位には第30号住居跡が構築されている。

規模と平面形　長軸5.68m，短軸5.00mの長方形を呈している。

主軸方向　N-12°-W。

壁　壁高は8～14cm を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　南西部は第16号住居跡の上位に床を貼って構築している。竈の前方は硬く踏み固められている。

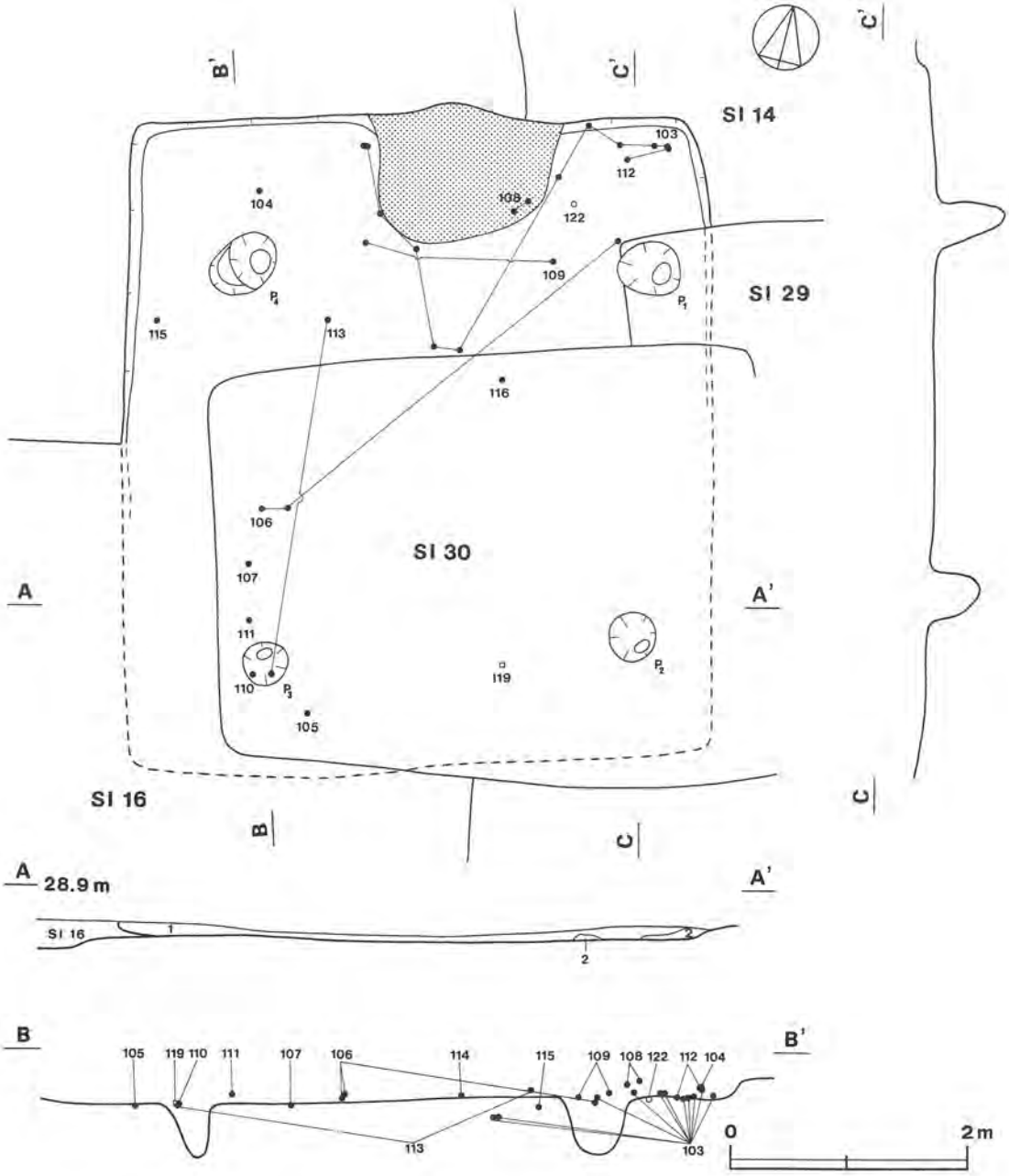
ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径34～62cm，深さ44～64cm で，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央からやや西寄りの壁を15cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ116cm，幅149cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を4cm 程掘り窪め，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　北部の覆土下層から床面にかけて比較的多量の土師器(坏,甕)片,須恵器(坏,甕)片等が出土している。103と104は土師器の甕で竈付近の床面及び覆土から出土している。105の土師器の小形甕，106の土師器の甑は南西部床面及び覆土下層から出土している。110の須恵器の坏は南西部覆土下層から正位の状態で，112の須恵器の坏は北東部の床面からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第14・16号住居跡より新しく，第29・30号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

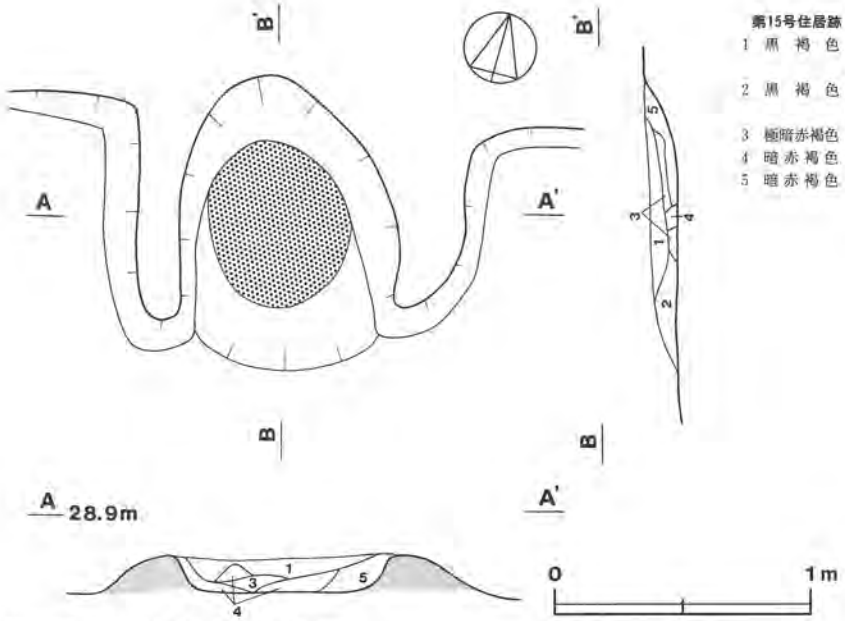


第15号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子少量。

2　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量。

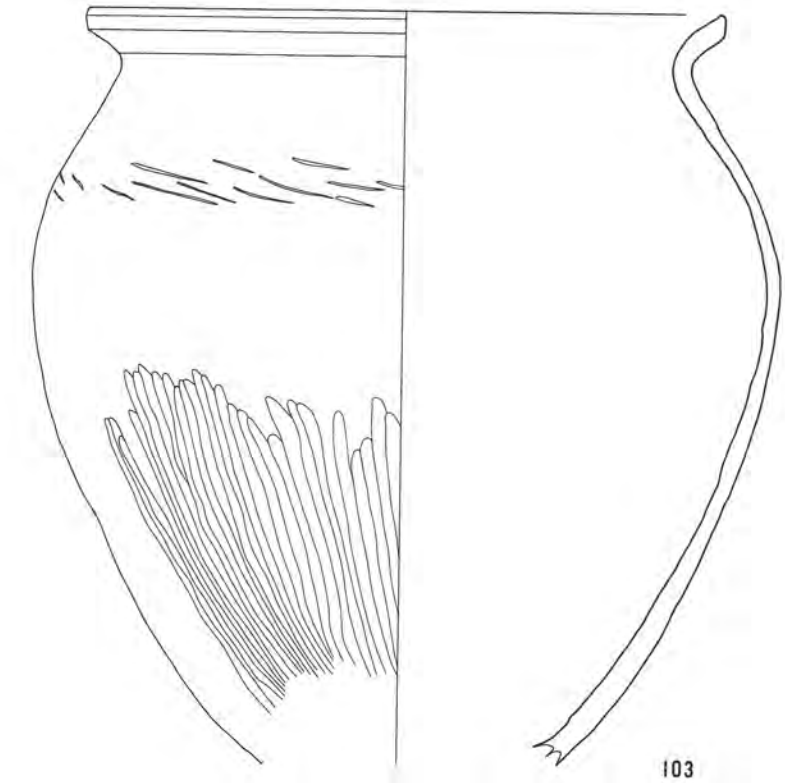
第33図　第15号住居跡実測図

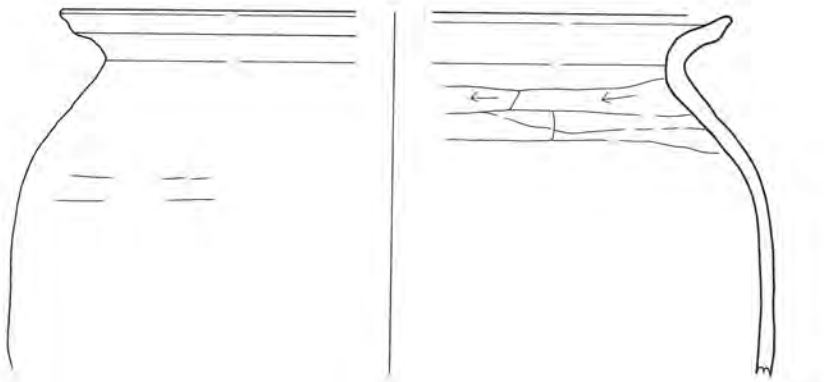


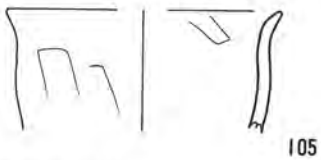
第34図　第15号住居跡竈実測図

第15号住居跡出土遺物観察表

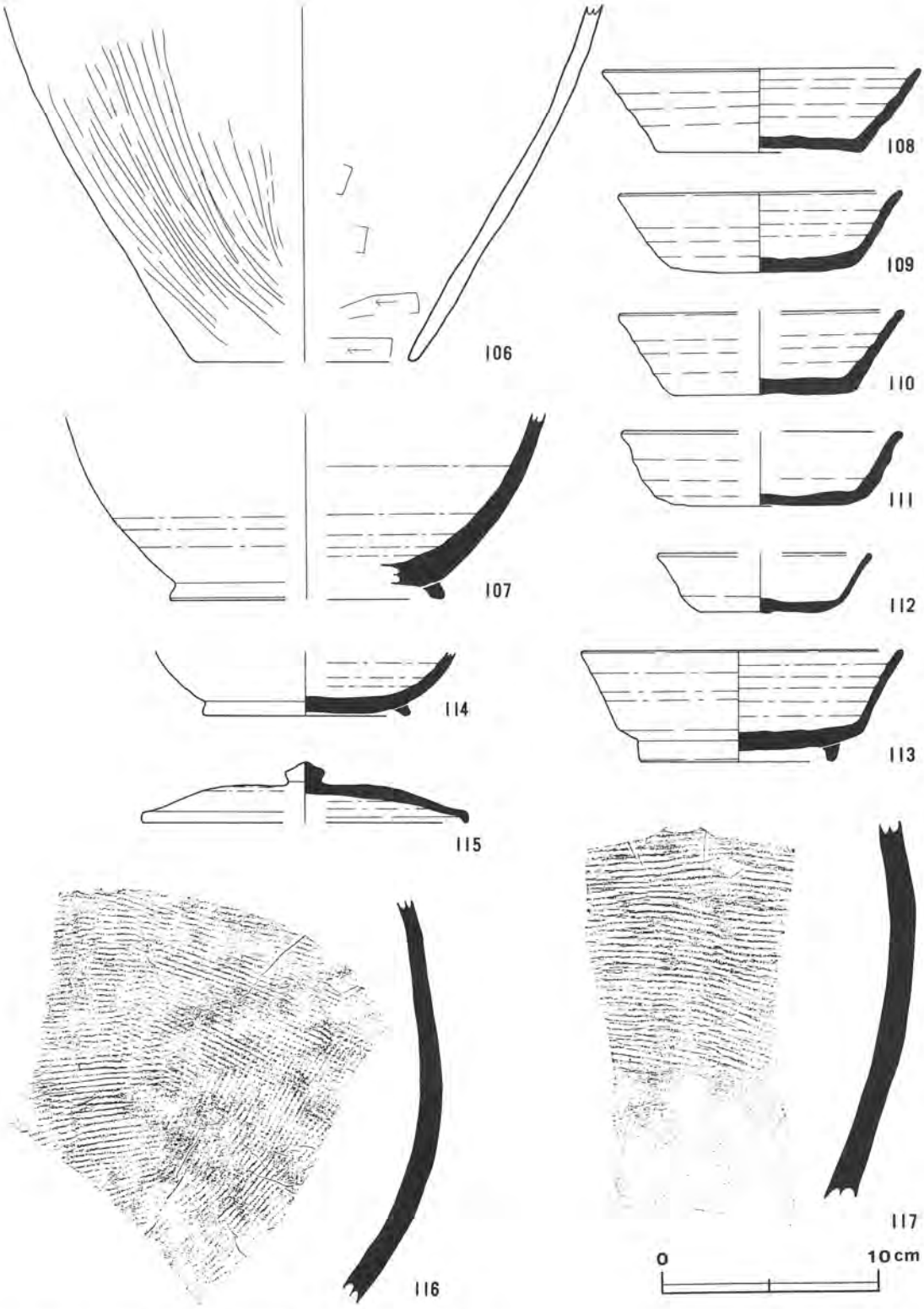
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35～37図 103	甕 土師器	A [24.8] B (29.8)	胴部は内彎気味に立ち上がり，上位に最大径をもつ。口縁部は器厚を増しながら外反する。口唇部を上方に僅かにつまみ出す。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P69 70% 竈東側床面
104	甕 土師器	A [26.0] B (14.2)	張りのある胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部外面及び口縁部内・外面横ナデ。胴部内面上位横位のヘラナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P70 20% 竈西側覆土下層
105	甕 土師器	A [10.6] B (4.8)	胴部上位はほぼ直立し，口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	胴部外面上位縦位のヘラ削り。胴部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P71 20% 南西部床面
106	甑 土師器	B (16.7) C [10.4]	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。胴部内面横位のヘラ削り。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P72 20% 南西部覆土下層
107	壺 須恵器	B (8.6) D [12.6] E 0.9	平底。「ハ」の字状に開く高台がつく。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P81 30% 南西部床面
108	坏 須恵器	A 14.6 B 3.9 C 9.4	上げ底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削り。体部・内外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 良好	P73 80% 竈
109	坏 須恵器	A 13.0 B 3.7 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P74 80% 竈前方床面
110	坏 須恵器	A [13.2] B 3.9 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P75 40% 南西部覆土下層



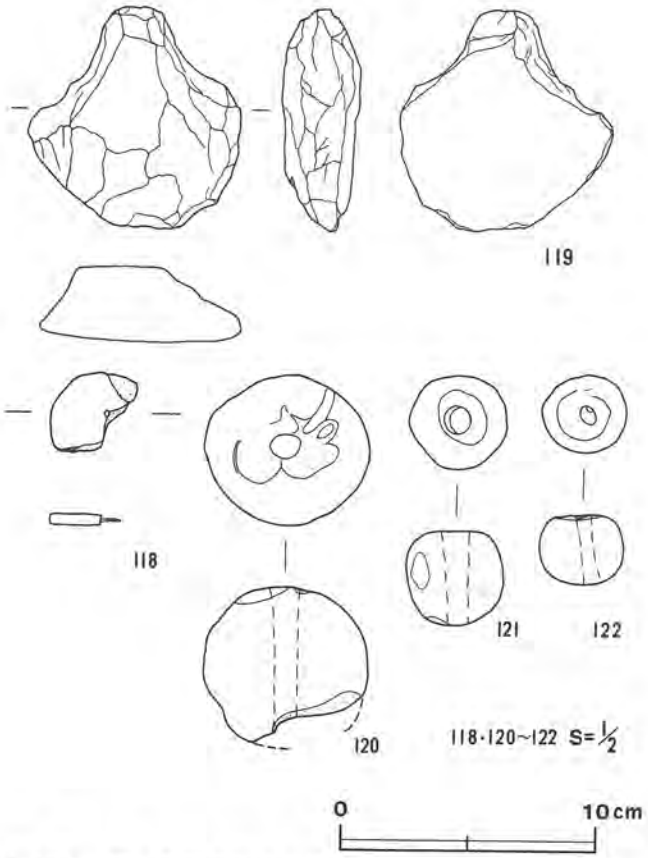




第35図　第15号住居跡出土遺物実測図（1）



第36図　第15号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）



第37図　第15号住居跡出土遺物実測図（3）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
111	坏 須恵器	A [12.8] B 3.5 C 8.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部で器厚を減じて僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 暗灰黄色 普通	P76 50% 南西部覆土中層
112	坏 須恵器	A [9.8] B 2.8 C 5.6	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P77 60% 竈東側床面
113	高台付坏 須恵器	A 14.8 B 5.2 D 9.2 E 0.9	平底で，直立する高台がつく。体部は外反気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 灰色 普通	P78 70% 中央部覆土下層
114	高台付坏 須恵器	B (3.0) D 9.5 E 0.7	底部は皿状を呈し，「ハ」の字け状に開く短い高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。高台貼りけ後，ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P79 30% 竈前方床面
115	蓋 須恵器	A [15.0] B 2.8 F [1.8] G 0.9	天井部は浅く，緩やかに傾斜し口縁部で僅かに外反する。端部は屈曲し短く垂下する。つまみは宝珠形を呈する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P79 20% 北西部床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
116	甕 須恵器		甕の胴部片。	外面平行叩き目。内面ヘラナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	TP6 5% 北西部床面
117	甕 須恵器		甕の胴部片。	外面下位横位の手持ちヘラ削り。上位平行叩き目。内面ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	TP5 5% 北西部床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
118	有孔円板	(2.3)	(2.1)	0.3	15.0	(2.2)	20	覆土	Q7 滑石
119	礫器	8.7	8.4	3.1	---	226.8	100	南東部床面	Q8 雲母片岩
120	球状土錘	(4.1)	4.3	---	8.0	(55.6)	80	覆土	DP34
121	球状土錘	2.5	2.6	---	7.0	15.4	100	覆土	DP35
122	球状土錘	1.9	2.2	---	5.0	7.4	100	北東部床面	DP36

第16号住居跡(第38図)

位置　調査区の北東部，C2e_7区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東部の上位には第15号住居跡の南西部と第30号住居跡の西部が構築されている。南東コーナー付近は第25号住居跡の北西コーナーに掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.72m，短軸4.64mの方形を呈している。

主軸方向　N-7°-W。

壁　東壁は一部を除き重複遺構に掘り込まれ遺存していないが，他の壁は壁高24～32cm を測り，外傾または垂直に近い傾斜で立ち上がっている。

床　凸凹で，西部は硬く踏み固められている。

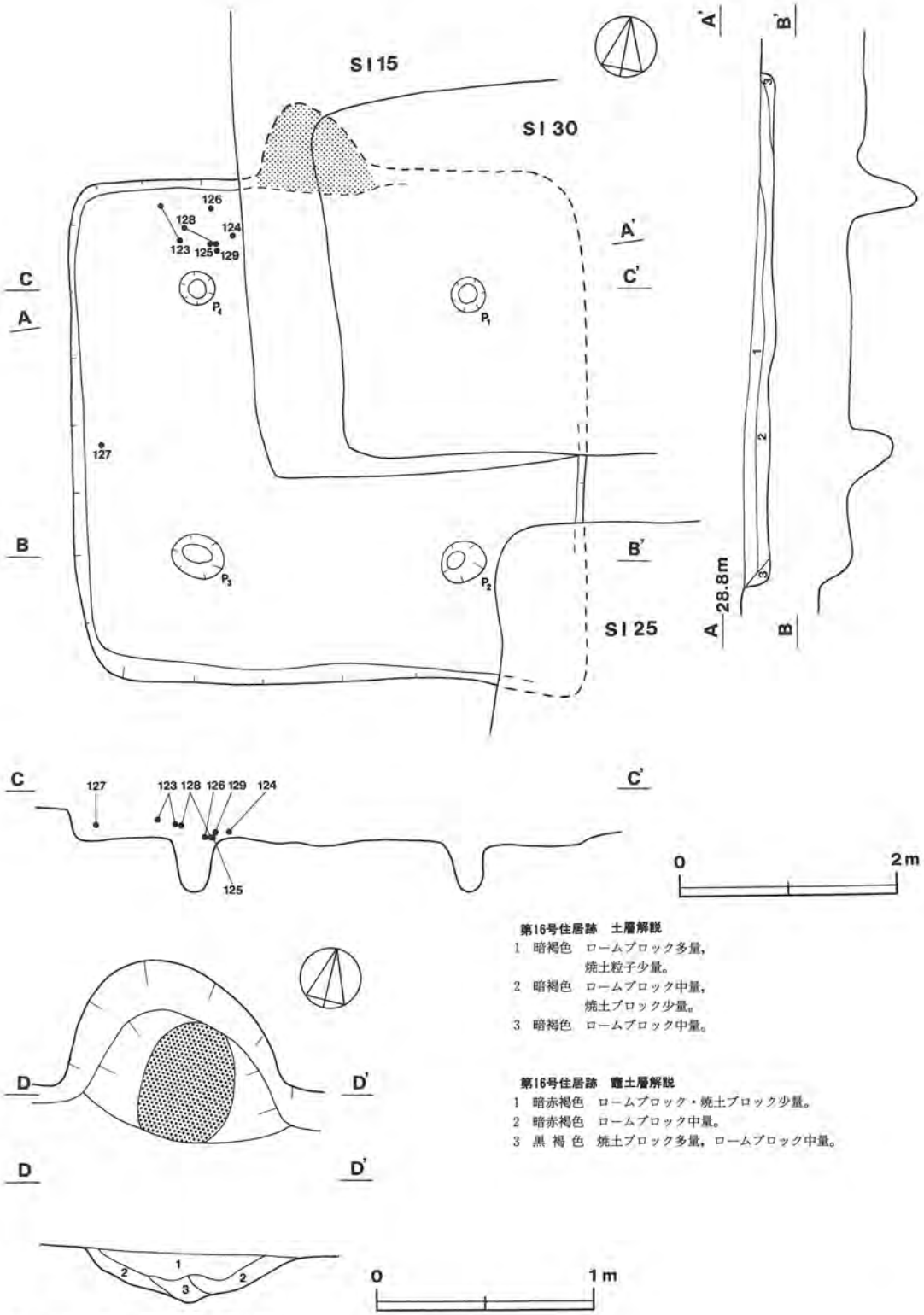
ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径30～50cm，深さ46～60cm でいずれも主柱穴である。

竈　北壁中央部の壁を62cm 程壁外に掘り込んで構築されているが，第15号住居跡に削平され，火床の一部が遺存している。

覆土　自然堆積。

遺物　竈付近の覆土中から，まとまって土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，高台付坏)片が出土している。128と129の土師器の坏は竈西側の覆土下層から逆位の状態で，125の土師器の鉢は同じく竈西側の床面から正位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第15・25・30号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

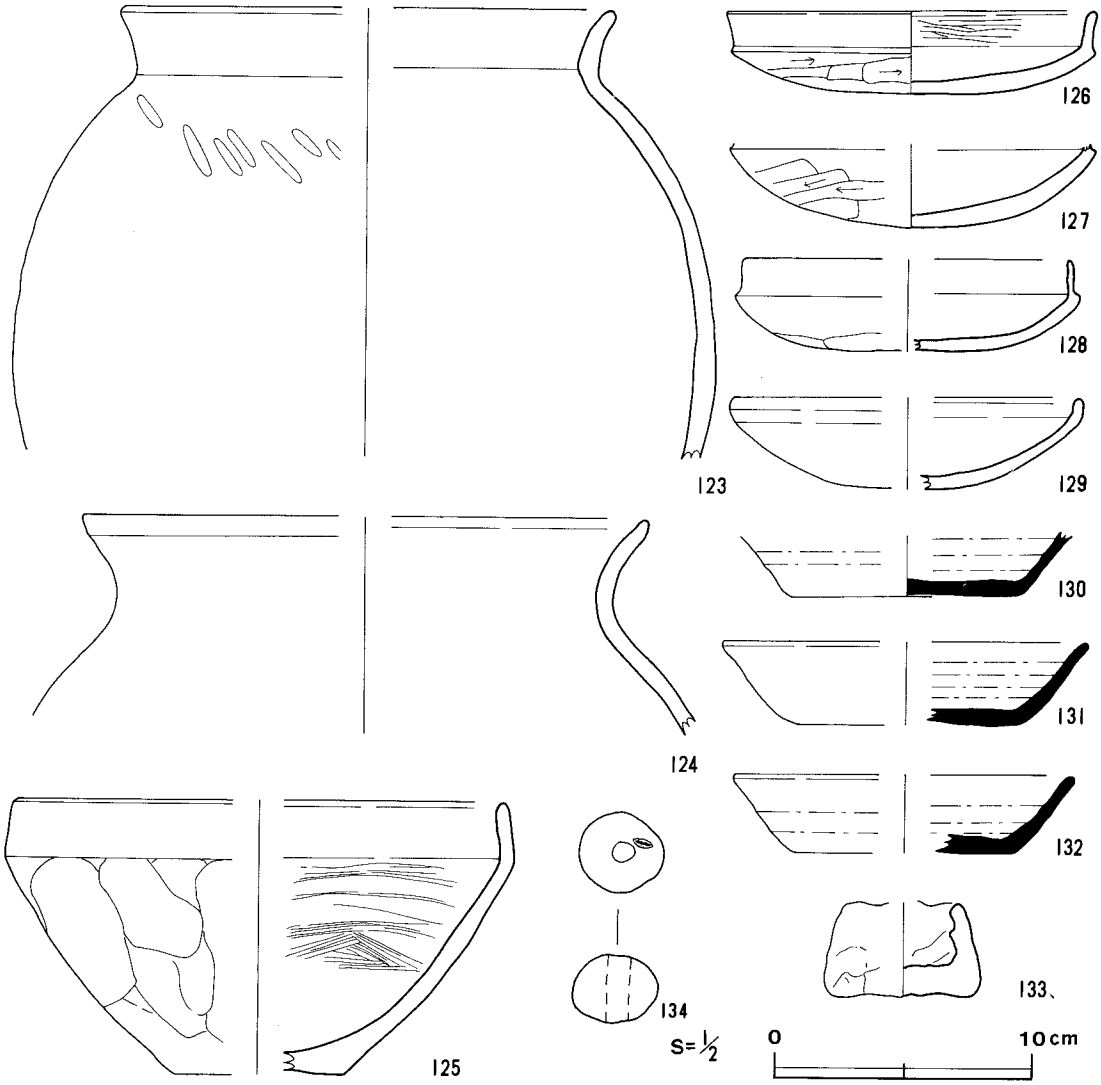


第38図　第16号住居跡実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 123	甕 土師器	A [19.2] B (17.7)	胴部は球状を呈し，口縁部は僅かに外反して立ち上がる。口唇部は丸い。	胴部外面手持ちヘラ削り後，粗いヘラ磨き。胴部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P82 20% 北西部覆土上層
124	甕 土師器	A [22.0] B (8.6)	頸部はくびれ，口縁部は外反する。口唇部は僅かに外上方につまみ出す。	内・外面摩耗。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P83 5% 北西部覆土下層
125	鉢 土師器	A [19.1] B 10.9	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は内傾する。	胴部外面手持ちヘラ削り。胴部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P88 30% 北西部床面
126	坏 土師器	A 14.2 B 3.3	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P84 90% 北西部床面
127	坏 土師器	B (3.3)	丸底。体部との境に稜をもつ。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P85 80% 南西部覆土上層
128	坏 土師器	A [12.8] B 3.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P86 40% 北西部覆土下層
129	坏 土師器	A [13.5] B 3.6	丸底。体部は内彎気味立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。	体部外面摩耗。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P87 40% 北西部覆土下層
130	坏 須恵器	B (2.6) C 8.8	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。	砂粒 褐灰色 普通	P90 50% 北西部覆土
131	坏 須恵器	A [14.2] B 3.3 C [8.4]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり,口縁部は僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。体部外面摩耗。体部内面横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P91 30% 南東部覆土
132	坏 須恵器	A [13.2] B 3.2 C [8.4]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P92 20% 覆土
133	手捏土器	A [4.4] B 3.7 C [5.4]	平底。底部は内傾して立ち上がる。	底部及び体部外面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P89 40% 南西部覆土

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
134	球状土錘	1.8	2.3	---	6.0	7.5	100	覆土	DP38



第39図　第16号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡(第40・41図)

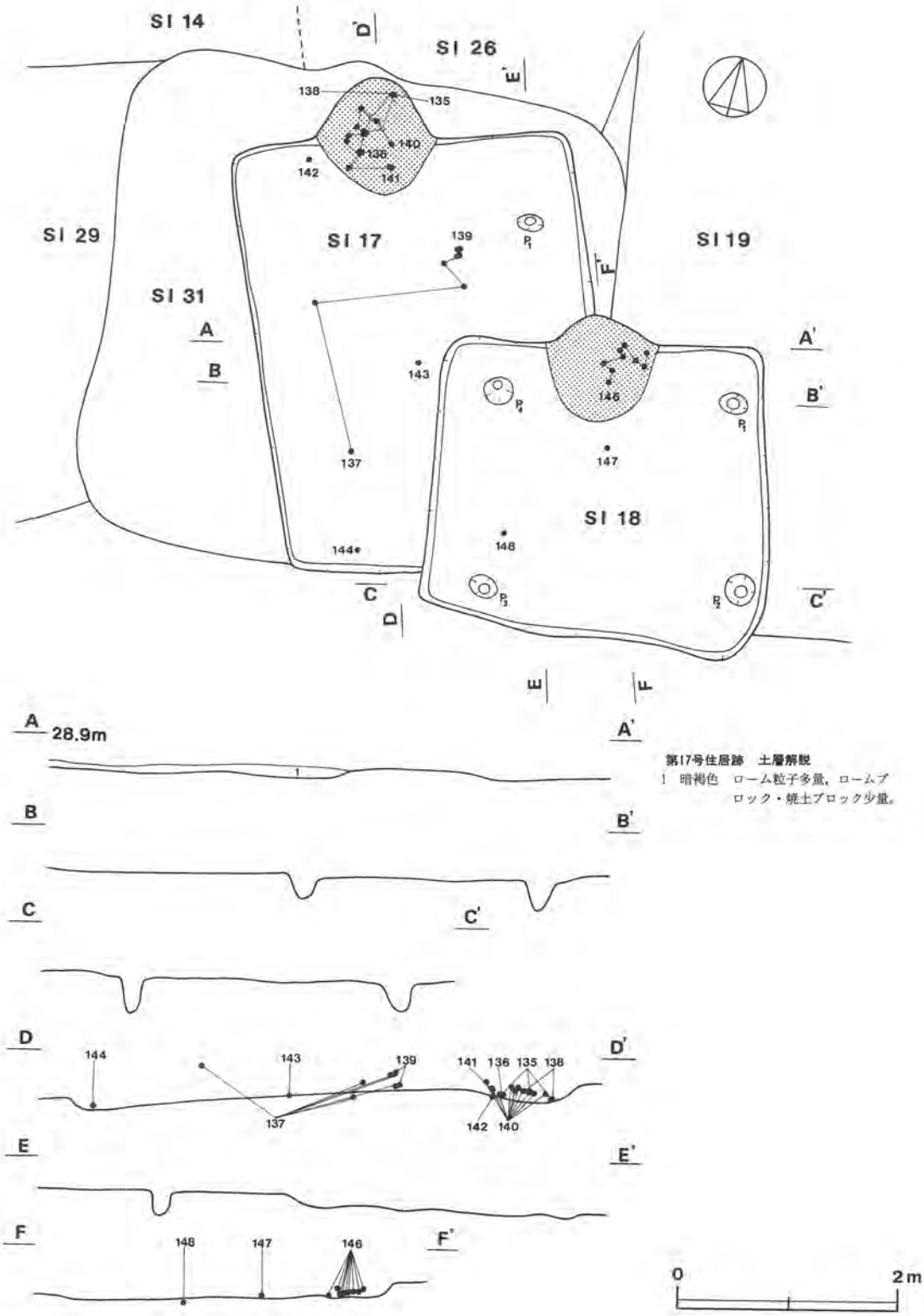
位置　調査区の北東部，C2d₀区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西コーナーは第14号住居跡の南東コーナー付近を，北東コーナーは第26号住居跡の南東部を，西壁は第29号住居跡の北東壁を，本跡のほぼ全域は第31号住居跡の大半を掘り込み，南東部は第18号住居跡の北西部に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.08m，短軸3.12mの長方形を呈している。

主軸方向　N-19°-W。

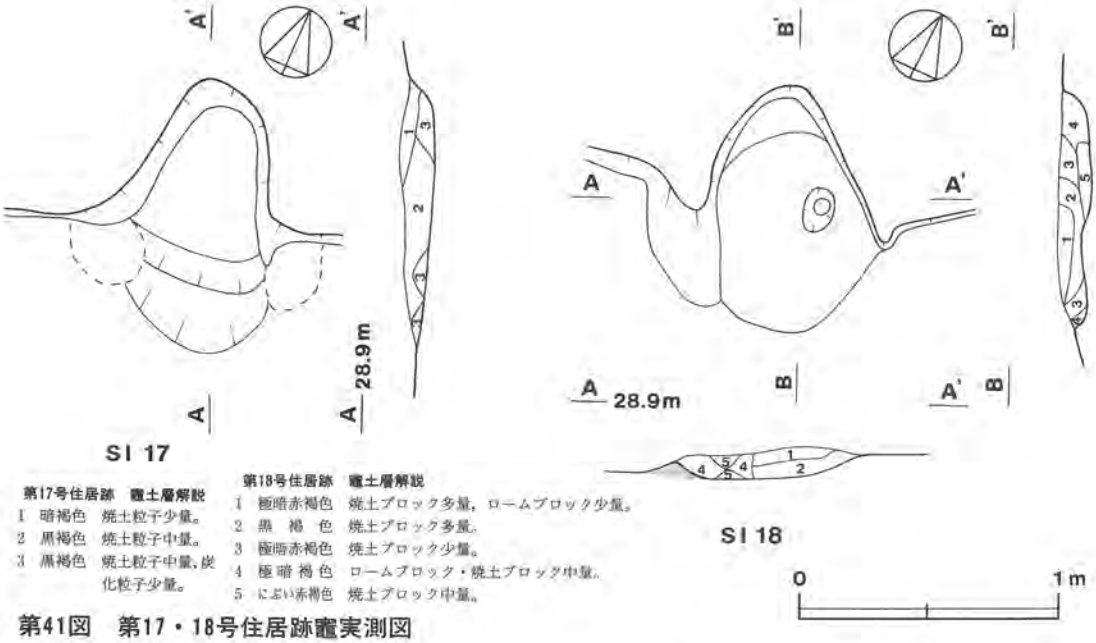
壁　南東コーナーの壁は第18号住居跡に削平されている。他の壁は壁高10cm 前後で，緩やかに外傾して立ち上がっている。



第17号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック少量。

第40図　第17・18号住居跡実測図



第41図　第17・18号住居跡竈実測図

床　凸凹で，中央部及び竈の前方は硬く踏み固められている。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径12～22cm，深さ22cm で，主柱穴である。

竈　北壁中央からやや西寄りの壁を60cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し，袖部が僅かに痕跡をとどめているにすぎない。火床は一部遺存しているが，あまり熱をうけていない。

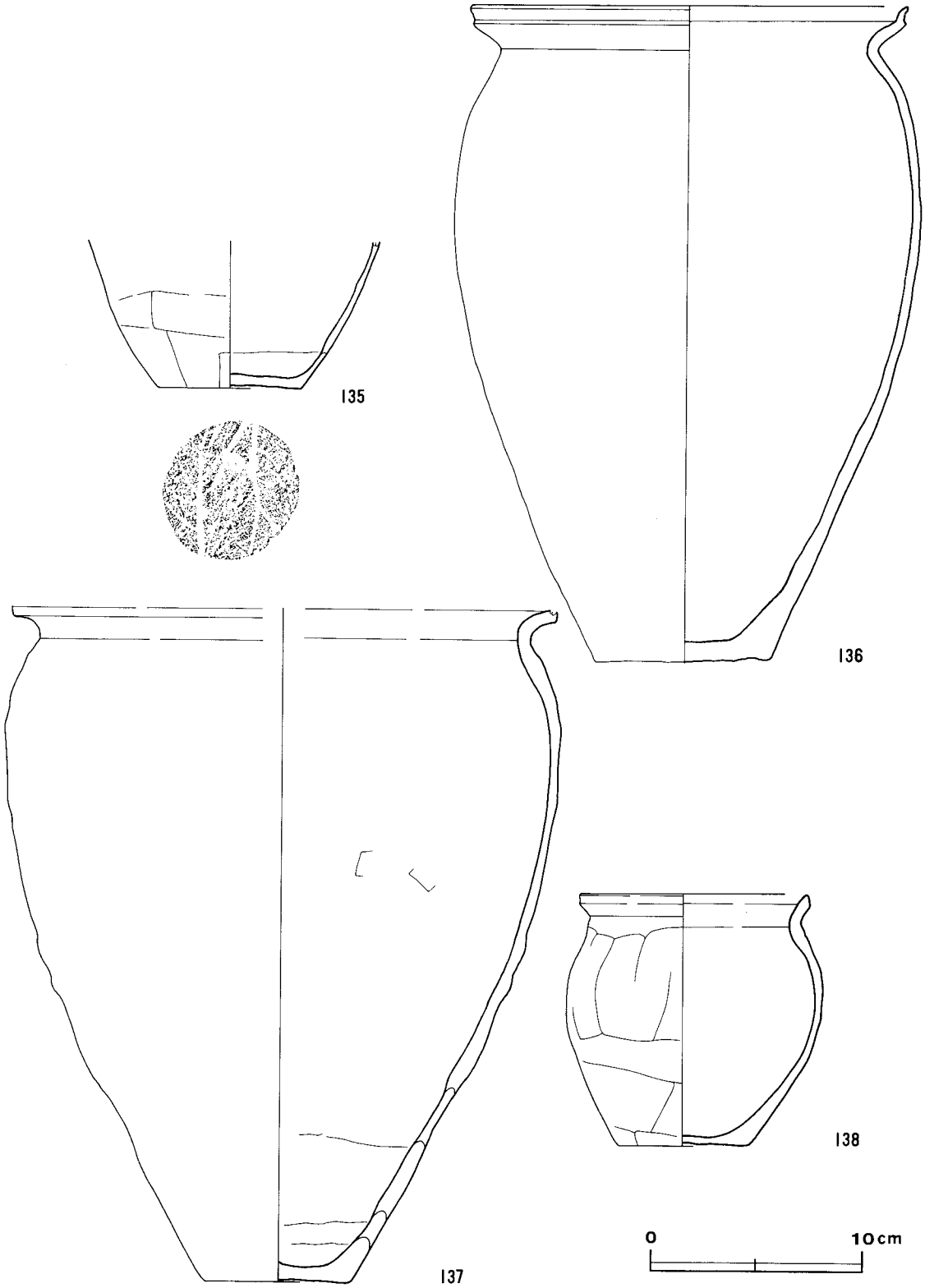
覆土　自然堆積。

遺物　竈及び竈周辺から土師器(坏，甕)，須恵器(坏，甕，蓋)片が出土している。135・136・138・139の土師器の甕と140の須恵器の甕が竈内から出土している。144は須恵器の坏で南西部床面から出土しており，底部に「柏」の墨書がみられる。143は土師器の坏で中央部覆土下層から正位の状態で出土している。

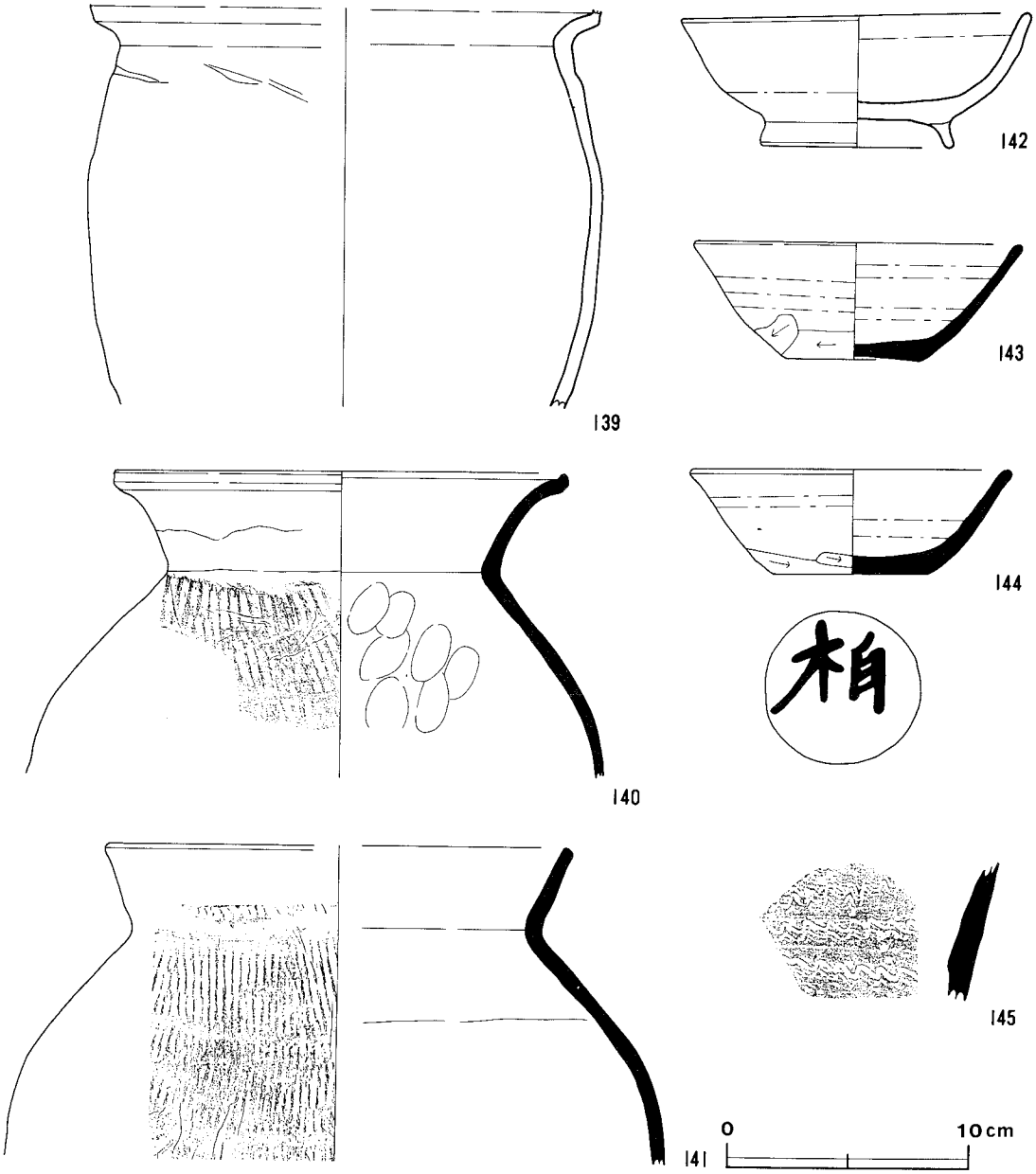
所見　本跡は，重複関係から第14・26・29・31号住居跡より新しく，第18号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42・43図 135	甕 土師器	B (7.1) C 6.8	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位横位の手持ちヘラ削り。胴部内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・礫 橙色 普通	P101 40% 竈
136	甕 土師器	A 20.6 B 31.7 C 8.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部外面摩耗。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 浅黄橙色 普通	P97 70% 竈



第42図　第17号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）



第43図　第17号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
137	甕 土師器	B 32.4 C 6.9	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を僅かにつまみ出す。	底部ナデ。胴部外面剝離。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面ナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P98　40% 覆土上層
138	甕 土師器	A 10.8 B 12.1 C 6.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，中位に最大径をもつ。頸部は外傾する。	胴部外面手持ちヘラ削り。胴部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P100　90% 竈

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
139	甕 土師器	B (16.6)	張りの弱い胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲する。	胴部上位内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P99-1 20% 竈
140	甕 須恵器	A 18.6 B (12.8)	やや張りのある胴部で，口縁部は外反する。口唇部はほぼ垂直に短く立ち上がる。	胴部外面平行叩き目。頸部及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P102 30% 竈
141	甕 須恵器	A [19.0] B (13.1)	やや張りのある胴部で，口縁部は外傾して立ち上がる。	胴部外面平行叩き目。胴部内面ヘラナデ。頸部及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P103 20% 竈
142	高台付坏 土師器	A 14.3 B 5.7 D 7.8 E 1.0	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸い。	底部及び体部下端回転ヘラ削り後，高台貼り付け。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P106 90% 北西部覆土下層
143	坏 須恵器	A 13.4 B 4.9 C 5.5	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 明褐灰色 普通	P104 100% 中央部覆土下層
144	坏 須恵器	A 13.0 B 4.4 C 6.5	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。底部に墨書。	砂粒 灰赤色 普通	P105 100% 南西部床面 墨書「柏」
145	壺 須恵器		壺の頸部片。外面4本一条の波状文。	内面剝離。	砂粒・雲母 灰色 普通	TP7 5% 覆土

第18号住居跡(第40・41図)

位置　調査区の北東部，C2d_0区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西部は第17号住居跡の南東部及び第31号住居跡の南東コーナー付近を，東部は第19号住居跡の南西コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.26m，短軸2.92mの長方形を呈している。

主軸方向　N-15°-W。

壁　壁高は4～12cmを測り，北壁は外傾して，南壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　凸凹で，西部は硬く踏み固められている。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径20～28cm，深さ24～34cmで主柱穴である。

竈　北壁中央部の壁を45cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ96cm，幅116cmを測る。天井部は崩落し，右袖部は削平されているが，左袖部は遺存している。火床は床面を4cm程掘り窪め，火床から煙道にかけて焼土が厚く堆積している。煙道は火床からほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

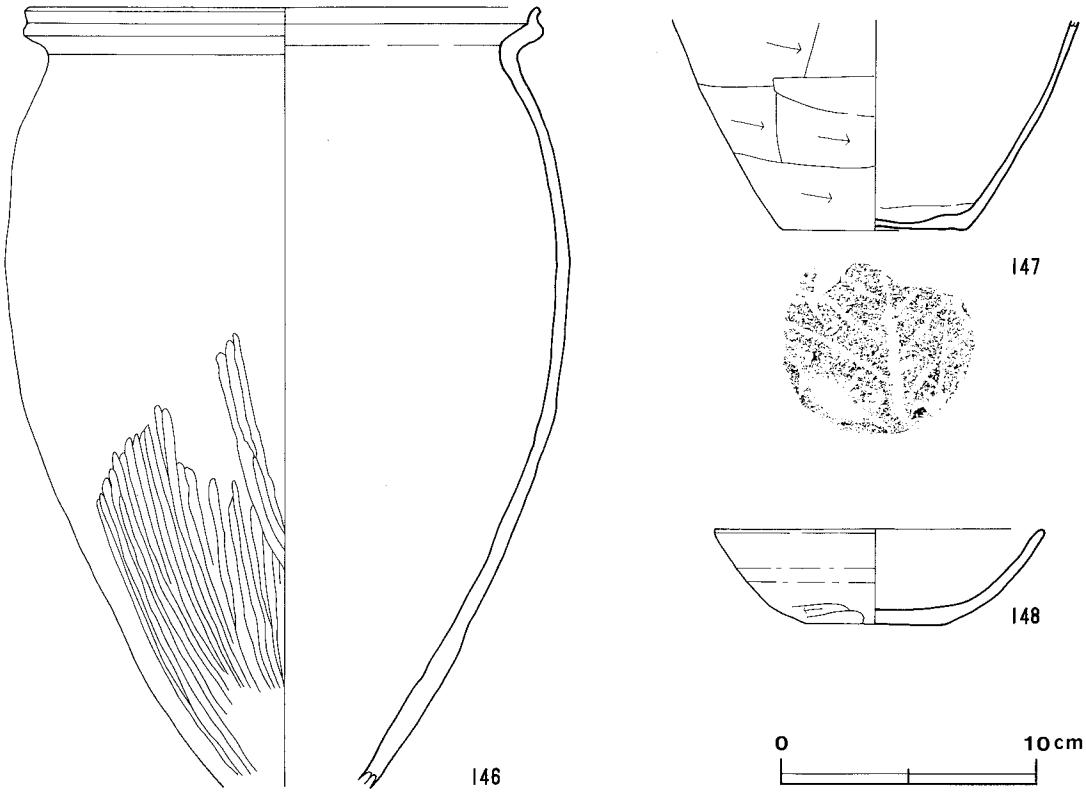
遺物　覆土中層から下層にかけて，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片が少量出土してい

る。146の土師器の甕は竈内から出土している。148は土師器の坏で南西部の覆土中層から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第17・19・31号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第44図 146	甕 土　師　器	A　19.8 B　(30.7)	胴部は内彎気味に立ち上がり，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P99-2 40% 竈
147	甕 土　師　器	B　(8.3) C　7.4	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面横位の手持ちヘラ削り。底部に木葉痕。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P94　30% 竈前方覆土下層
148	坏 土　師　器	A　12.9 B　3.8 C　5.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P95　70% 南西部床面



第44図　第18号住居跡出土遺物実測・拓影図

第19号住居跡(第45・46図)

位置　調査区の北東部，C3c1区を中心に確認されている。本跡の東部は調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の北壁の一部は第9号住居跡の南東コーナーに，北西コーナー付近は第26号住居跡の北東コーナーに，西壁の一部は第31号住居跡の東壁に，南西コーナー付近は第18号住居跡の東部にいずれも掘り込まれている。

規模と平面形　長軸8.50m，短軸(6.40)mで，方形を呈するものと推定される。

主軸方向　N-10°-W。

壁　東壁は調査区域外のため検出されないが，他の残存している壁は壁高20～38cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　南部は一部凸凹しているが，全体的に硬く踏み固められている。

ピット　2か所(P_1，P_2)検出されている。P_1，P_2は，径52～64cm，深さ62～68cmで，いずれも主柱穴である。残りの主柱穴は調査区域外に存在するものと考えられる。

竈　北壁中央部付近の壁を20cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ138cm，幅184cm程を測る。遺存状態は悪く，左袖部の一部が遺存している程度である。火床は18cm程掘り窪められ，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。煙道部は熱をうけ焼土化している。

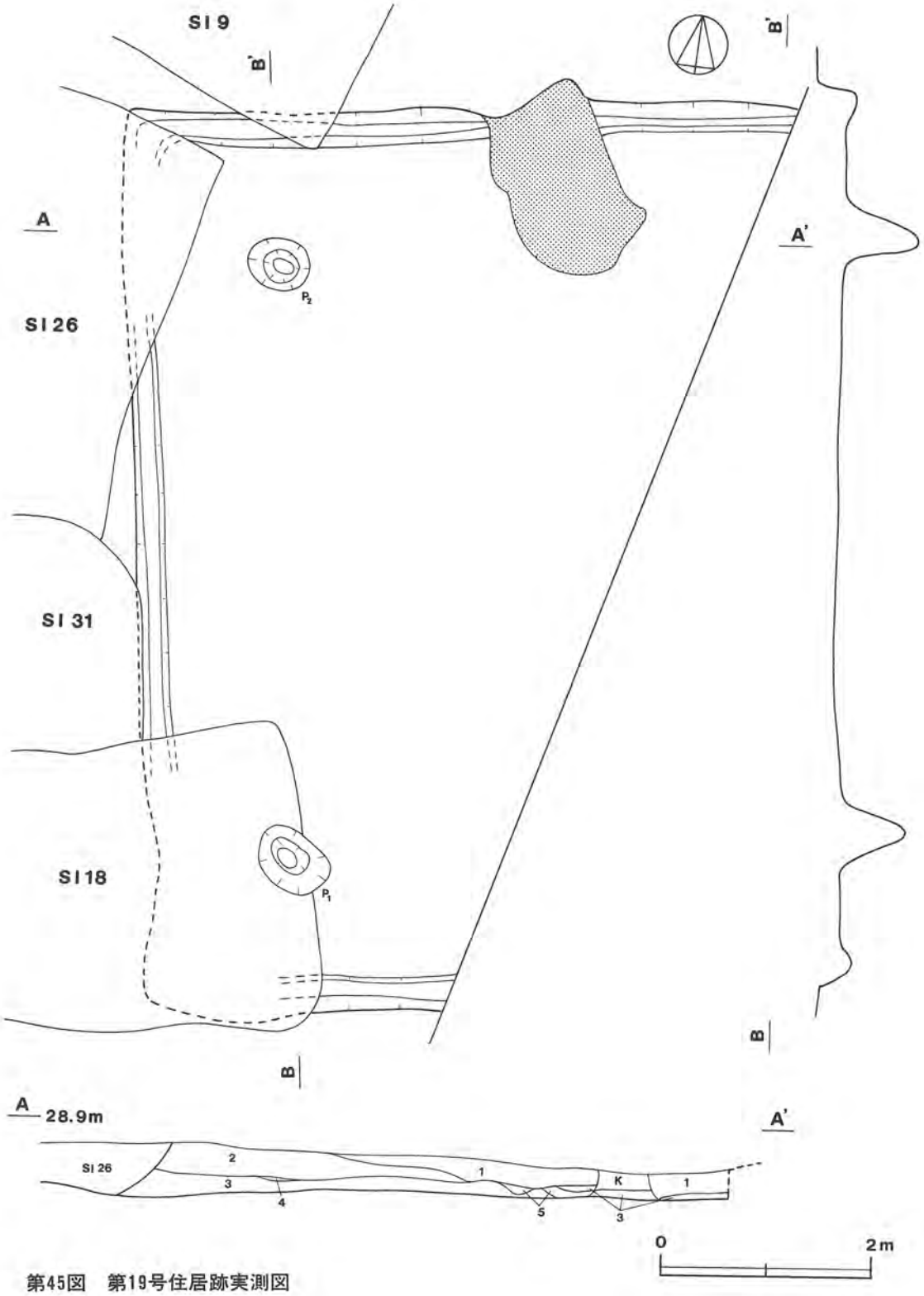
覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から，土師器(坏，甕)，須恵器(坏，甕)片等が少量出土している。149は土師器の甕で竈内東部の覆土下層から，150は土師器の坏でP_1の覆土からそれぞれ出土している。

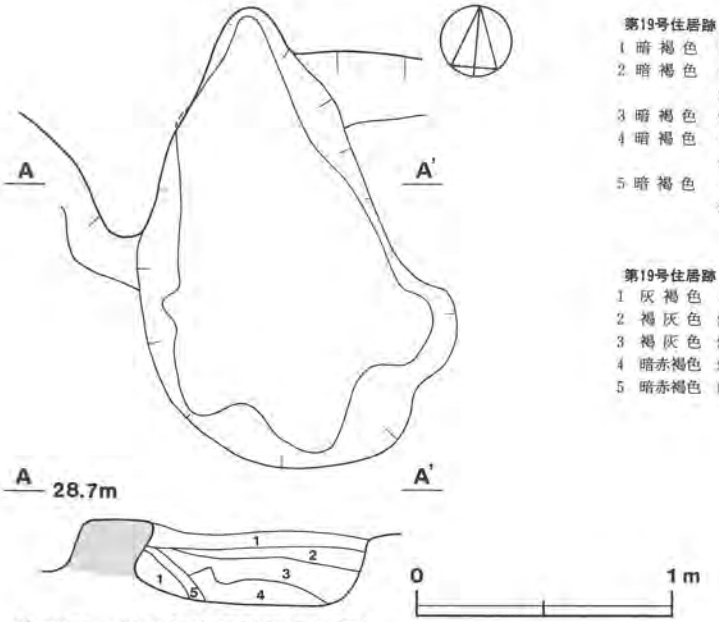
所見　本跡は，重複関係から第9・18・26・31号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 149	甕 土師器	A 16.0 B (13.8)	張りの弱い胴部で，頸部は器厚を増して，ほぼ直立して立ち上がる。口縁部は大きく外反する。	胴部外面剥離。胴部内面ヘラナデ。頸部及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 不良	P107 30% 竈
150	坏 土師器	A 12.8 B 5.2	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P108 70% P_1覆土
151	高台付坏 須恵器	A [10.3] B 4.9 D 6.4 E 0.9	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P109 30% 南西部覆土上層
152	手捏土器	A [7.6] B 3.5 C 6.0	平底。体部は外傾して立ち上がり，口唇部は尖る。	体部外面雑な手持ちヘラ削り。底部に木葉痕。	砂粒 浅黄橙色 普通	P93 60% 覆土



第45図　第19号住居跡実測図



第19号住居跡　土層解説

1 暗 褐 色　ロームブロック多量，焼土粒子少量。
2 暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
3 暗 褐 色　焼土ブロック多量。
4 暗 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
5 暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック少量。

第19号住居跡　竈土層解説

1 灰 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量。
2 褐 灰 色　焼土ブロック中量。
3 褐 灰 色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
4 暗赤褐色　焼土ブロック多量。
5 暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量。

第46図　第19号住居跡竈実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備　考
153	円 面 硯 須 恵 器		透かしのある脚部で，裾部は外反した後，内傾する。端部は尖る。	透かしと透かしの間に3条の縦位の沈線。内・外面ナデ。自然釉付着。	砂粒 灰色 良好	TP8　5% 覆土

図版番号	器　種	法　量　(cm)			孔 径	重 量	現存率	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
154	管 状 土 錘	(5.1)	2.3	---	7.0	(24.6)	70	覆　土	DP41
155	球 状 土 錘	2.4	3.0	—	7.0	17.8	100	北西部覆土	DP42

第47図　第19号住居跡出土遺物実測・拓影図

第20号住居跡(第22図)

位置　調査区の北東部，C2b_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡は，第10号住居跡の南壁中央部付近，第11号住居跡の北西部付近，第12号住居跡の北東壁の南東部の上位に構築されている。

壁　耕作によって撹乱をうけ，検出されていない。

床　一部分が検出されただけであるが，第10・11・12号住居跡の上位に貼床をして構築されている。平坦で，硬く踏み固められている。

所見　本跡は，床面の一部が検出されただけで，規模及び主軸方向はとらえられない。遺物は出土していないが，重複遺構との関係から，平安時代前期以降の住居跡と考えられる。

第21号住居跡(第48図)

位置　調査区の北西部，C2f_3区を中心に確認されている。北西部から南西部の一部は調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の南コーナー付近は第28号住居跡の北東部を掘り込み，南西部は第27号住居跡の南東コーナー付近の上位に構築されている。

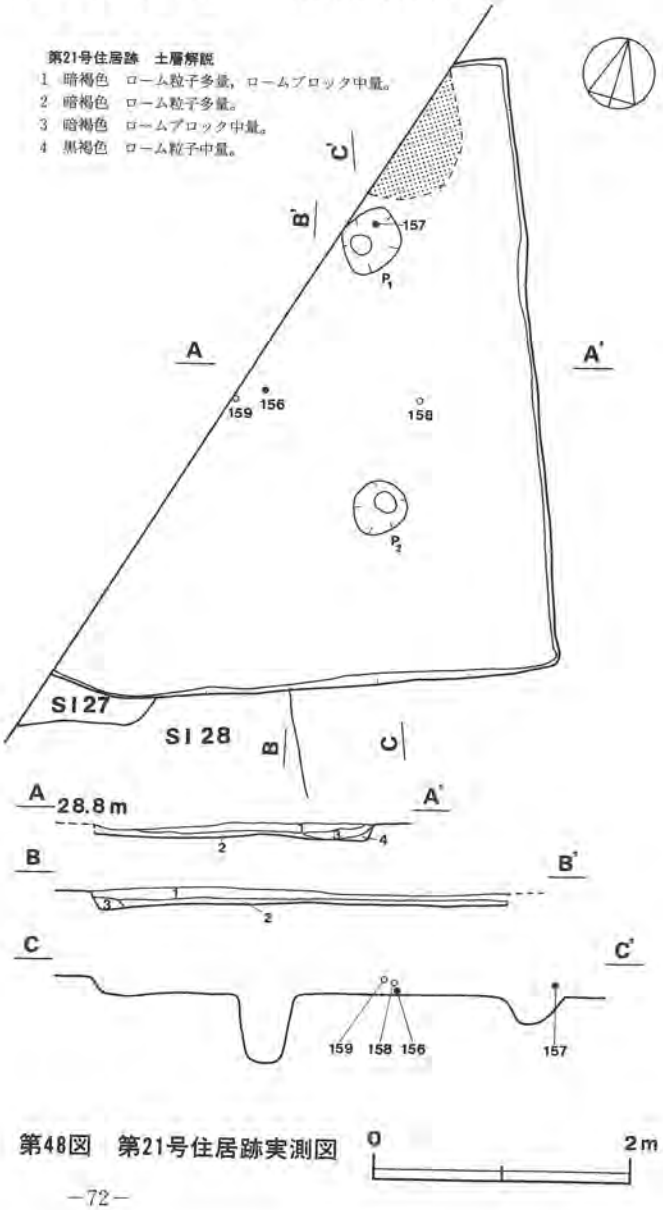
規模と平面形　長軸4.78m，短軸(3.96)mで，方形を呈するものと推定される。

主軸方向　N-23°-W。

壁　南東壁及び残存している壁は14cm前後で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部付近は踏み固められ堅緻である。

ピット　2か所(P_1，P_2)検出されている。P_1，P_2は，径40～58cm，深さ22～54cmで，い



第48図　第21号住居跡実測図　0　2m

ずれも主柱穴である。

竈　北西壁に付設されているものと考えられるが，調査区域外のため検出されていない。

覆土　自然堆積。

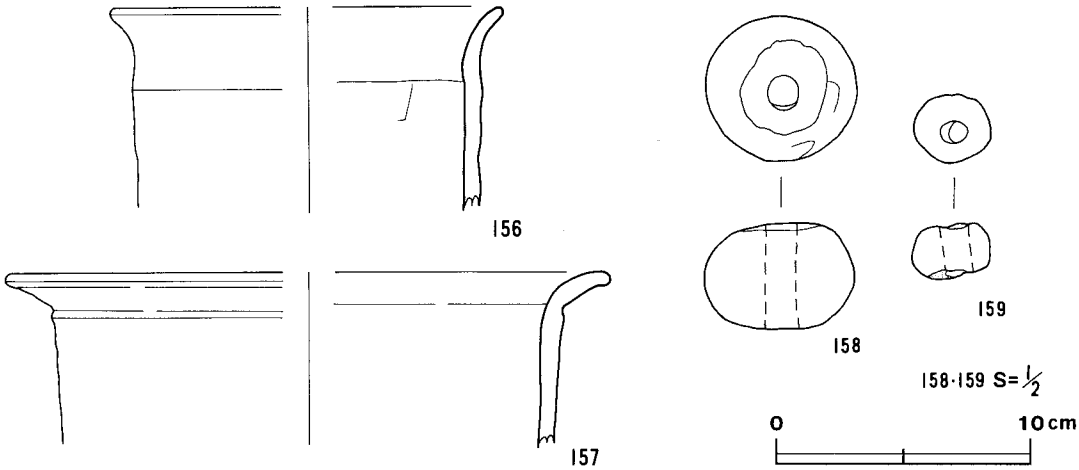
遺物　北コーナー付近からは，竈から流出したと考えられる焼土が検出されている。156と157の土師器の甕は北東部覆土下層から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第27・28号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 156	甕 土師器	A [15.2] B (8.1)	胴部はほぼ直立し，口縁部は外反して立ち上がる。口唇部は丸い。	胴部外面摩耗。胴部内面上位はヘラナデ。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P110　20% 北東部覆土下層
157	甕 土師器	A [23.4] B (6.9)	胴部との境に稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	胴部内・外面縦位のヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P111　5% 北東部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
158	球状土錘	2.9	4.0	---	9.0	42.1	100	南東部覆土上層	DP44
159	球状土錘	1.5	2.1	---	8.0	3.8	100	南西部覆土上層	DP45

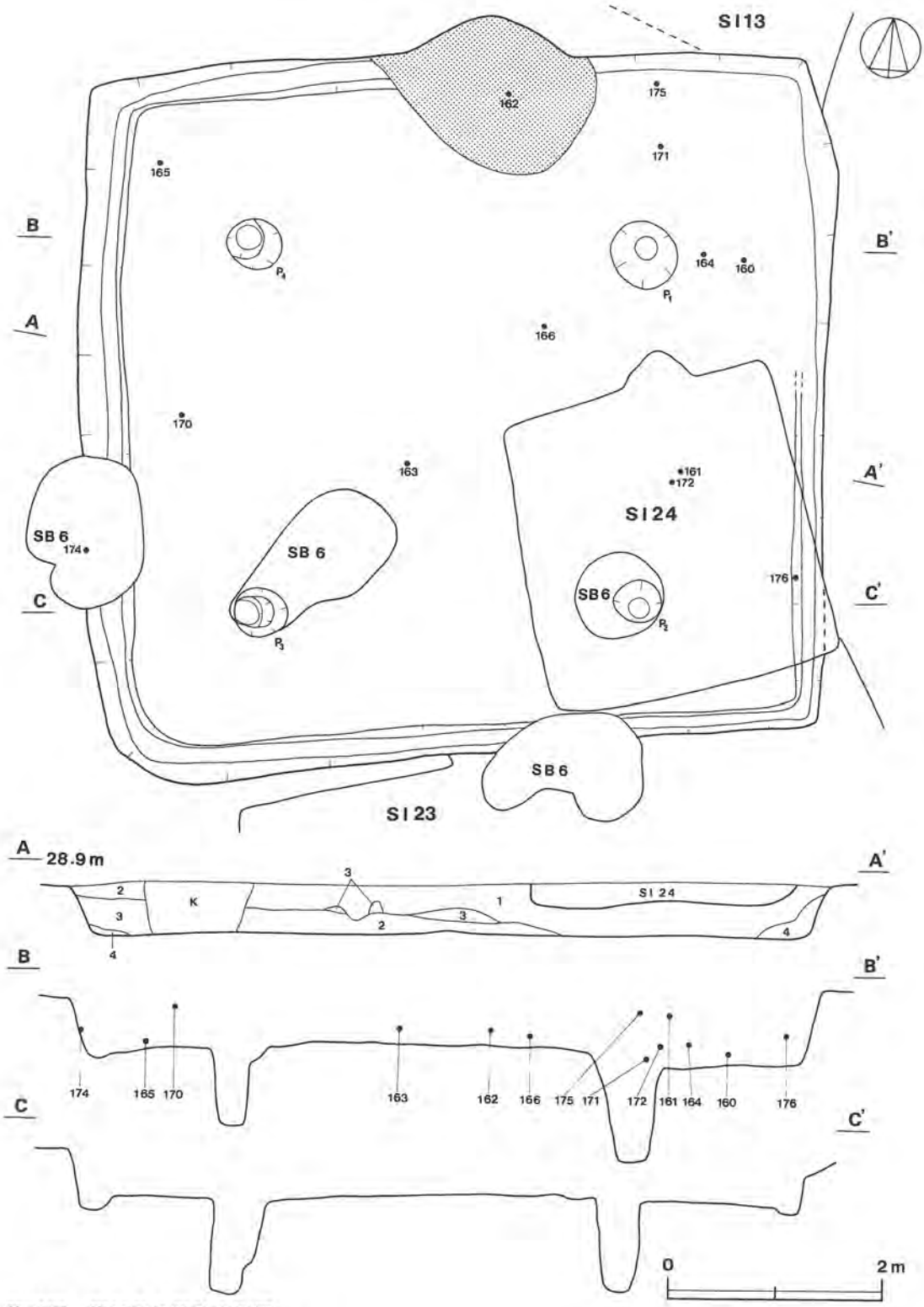


第49図　第21号住居跡出土遺物実測図

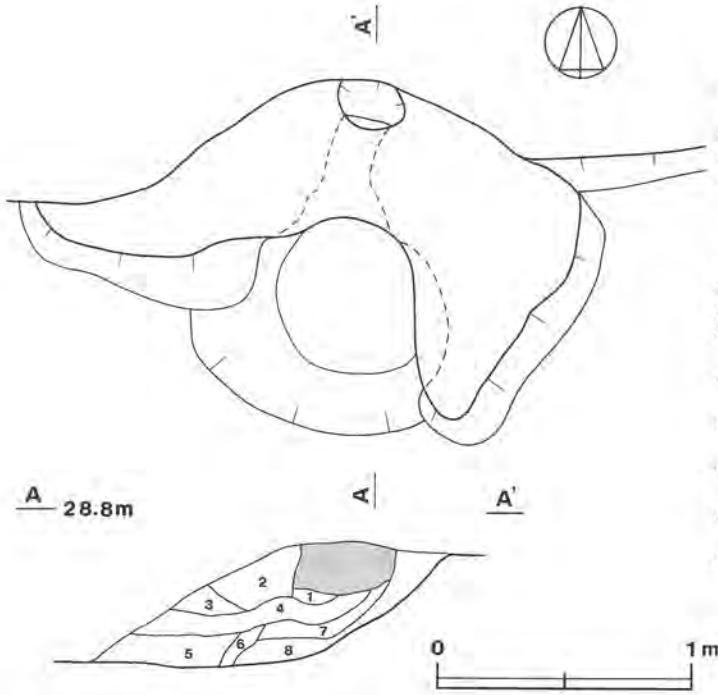
第22号住居跡(第50・51図)

位置　調査区の北部，C2d_5区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東コーナーは第13号住居跡の南東コーナー付近を，南壁は第23号住居跡の北西壁を掘り込み，本跡の南西部は第6号掘立柱建物跡に掘り込まれ,本跡の南東部の上位には第24



第50図　第22号住居跡実測図



第22号住居跡　土層解説

1 暗　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック・焼土粒子少量。
2 暗　褐　色　ロームブロック多量，炭化物少量。
3 極暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量。
4 褐　　色　ロームブロック多量。

第22号住居跡　竈土層解説

1 明　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
2 明　褐　色　ロームブロック ・焼土ブロック少量。
3 明　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量，炭化物少量。
4 明　褐　色　焼土ブロック多量，炭化物中量，ロームブロック少量。
5 褐　　色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物中量。
6 褐　　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量。
7 褐　　色　焼土ブロック・炭化物多量，ロームブロック中量。
8 褐　　色　焼土ブロック多量，ロームブロック・炭化物中量。

第51図　第22号住居跡竈実測図

号住居跡が構築されている。

規模と平面形　長軸7.02m，短軸6.66mの方形を呈している。

主軸方向　N-7°-W。

壁　壁高は32～70cm を測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　北東部を除いて回っている。上幅22～32cm，深さ5～12cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　北東コーナー付近はやや窪んでいるが，他はほぼ平坦で，中央部から竈の前方にかけては踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径44～64cm，深さ88～92cm で，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央部の壁を36cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ141cm，幅170cm 程を測る。左袖部は欠損しているが，天井部の一部と右袖部は比較的良好に遺存している。火床は床面を4cm 程掘り窪め，さほど熱をうけていない。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がり，煙出口に至っている。

覆土　自然堆積。

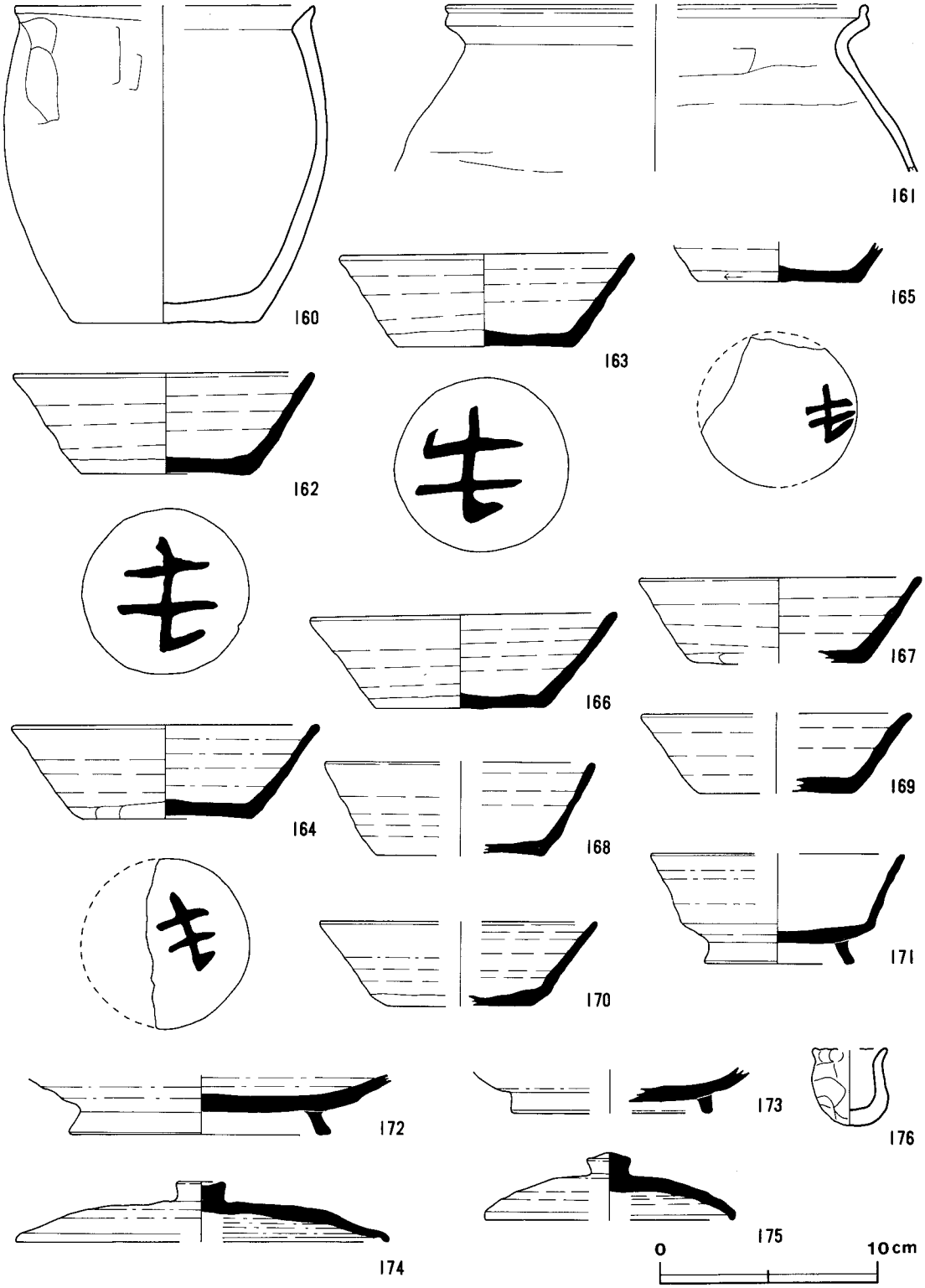
遺物　東部を中心に土師器(坏，甕)，須恵器(坏，甕，蓋)片が多量に出土している。162の須恵器の坏は竈内から正位の状態で，163と164の須恵器の坏は中央部付近の覆土下層から逆位の状態で，

165の須恵器の坏は北西部の覆土下層から逆位の状態でそれぞれ出土している。いずれも底部に「七」の墨書がなされている。

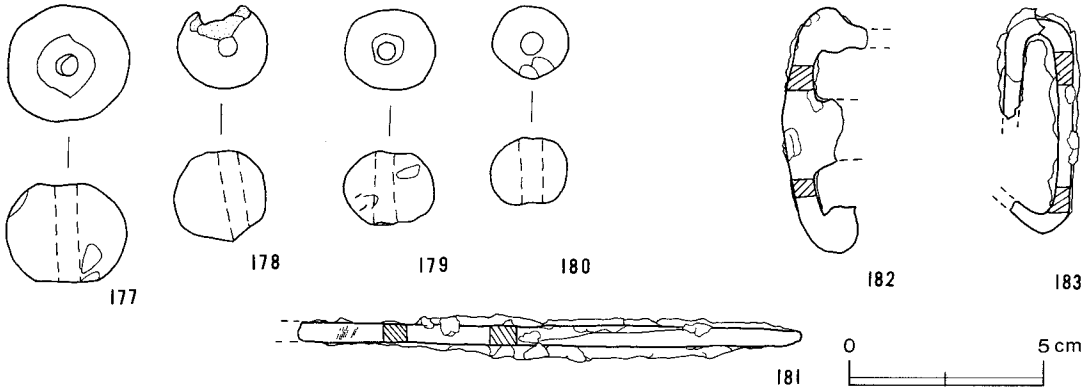
所見　本跡は，重複関係から第13・22号住居跡より新しく，第24号住居跡及び第6号掘立柱建物跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52・53図 160	甕 土師器	A [14.0] B 15.0 C 8.6	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は短く外傾する。口唇部は尖る。	底部ナデ。胴部外面手持ちヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P112 40% 北東部覆土下層
161	甕 土師器	A [19.4] B (7.9)	張りのある胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を上方につまみ出す。	胴部内面上位横位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 明褐灰色 普通	P114 5% 南東部覆土上層
162	坏 須恵器	A 13.9 B 4.8 C 7.9	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P116 100% 竈 墨書「七」
163	坏 須恵器	A 13.6 B 4.4 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P118 80% 中央部覆下層 墨書「七」
164	坏 須恵器	A 14.2 B 4.4 C 8.0	上げ底気味。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P119 50% 北東部覆土中層 墨書「七」
165	坏 須恵器	B (1.9) C 7.4	平底。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。	砂粒 灰白色 普通	P124 30% 北西部覆土下層 墨書「七」
166	坏 須恵器	A 14.1 B 4.5 C 7.8	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P117 100% 北東部覆土中層
167	坏 須恵器	A 13.0 B 4.1 C [7.6]	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P120 50% 覆土
168	坏 須恵器	A [12.4] B 4.5 C [7.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，中位で器厚を減ずる。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P121 40% 北東部覆土
169	坏 須恵器	A [12.4] B 3.8 C [7.0]	平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P122 30% 覆土
170	坏 須恵器	A [12.8] B 4.0 C [6.8]	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 良好	P123 30% 南西部覆土上層
171	高台付坏 須恵器	A [11.6] B 5.2 D 6.8 E 1.1	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外反気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ	砂粒・礫 灰色 普通	P125 50% 北東部床面



第52図　第22号住居跡出土遺物実測図（1）



第53図　第22号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
172	盤 須恵器	B（2.8） D 12.2 E 1.0	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P115 50% 北東部覆土下層
173	盤 須恵器	B（2.2） D［9.4］ E 1.0	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P126 20% 南西部覆土
174	蓋 須恵器	A［17.6］ B 2.8 F 2.3 G 0.9	天井部は低く，緩やかに傾斜して口縁部に至る。口縁部は器厚を減じ外反した後，垂直に屈曲する。つまみの中央部はくぼむ。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P127 30% 南西部覆土上層
175	蓋 須恵器	A［11.6］ B 3.2 F 2.2 G 1.1	天井部は丸く低い。口縁部は短く垂直に屈曲する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P128 50% 北東部覆土上層
176	ミニチュア土器	A［3.4］ B 3.7	丸底。体部は直立し，口縁部は外反する。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部外面ヘラナデ。口縁部内面ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P113 80% 南東部覆土

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
177	球状土錘	2.6	3.2	---	6.0	25.6	100	覆土	DP46
178	球状土錘	2.4	2.4	---	5.0	(10.4)	60	覆土	DP47
179	球状土錘	2.0	2.4	---	6.0	8.5	100	覆土	DP48
180	球状土錘	1.8	2.1	---	6.0	5.5	100	覆土	DP49
181	釘	(13.1)	0.6	0.7	---	(26.8)	70	覆土	M2
182	鉸具	6.4	(2.3)	0.7	---	(15.3)	70	覆土	M3　鉄製品
183	鉸具	6.0	2.0	0.9	---	(14.9)	80	覆土	M4　鉄製品

第23号住居跡(第54・55図)

位置　調査区の北部，C2f_5区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西壁付近は第22号住居跡の南壁に，南西コーナーは第119号土坑に,北西壁中央部から北コーナーにかけては第24号住居跡に,南西部は第6号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸6.12m，短軸6.00mの方形を呈している。

主軸方向　N-22°-W。

壁　北西壁は第22号住居跡に掘り込まれ遺存していないが，他の壁は壁高32～40cm を測り，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部は踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径44～72cm，深さ40～56cm で，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央部の壁を壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。壁外へのびている煙道部は第22号住居跡に掘り込まれている。天井部は崩落し，左袖部が僅かに遺存している程度である。火床は15cm 程床面を擂鉢状に掘り窪めているが，さほど熱を受けていない。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

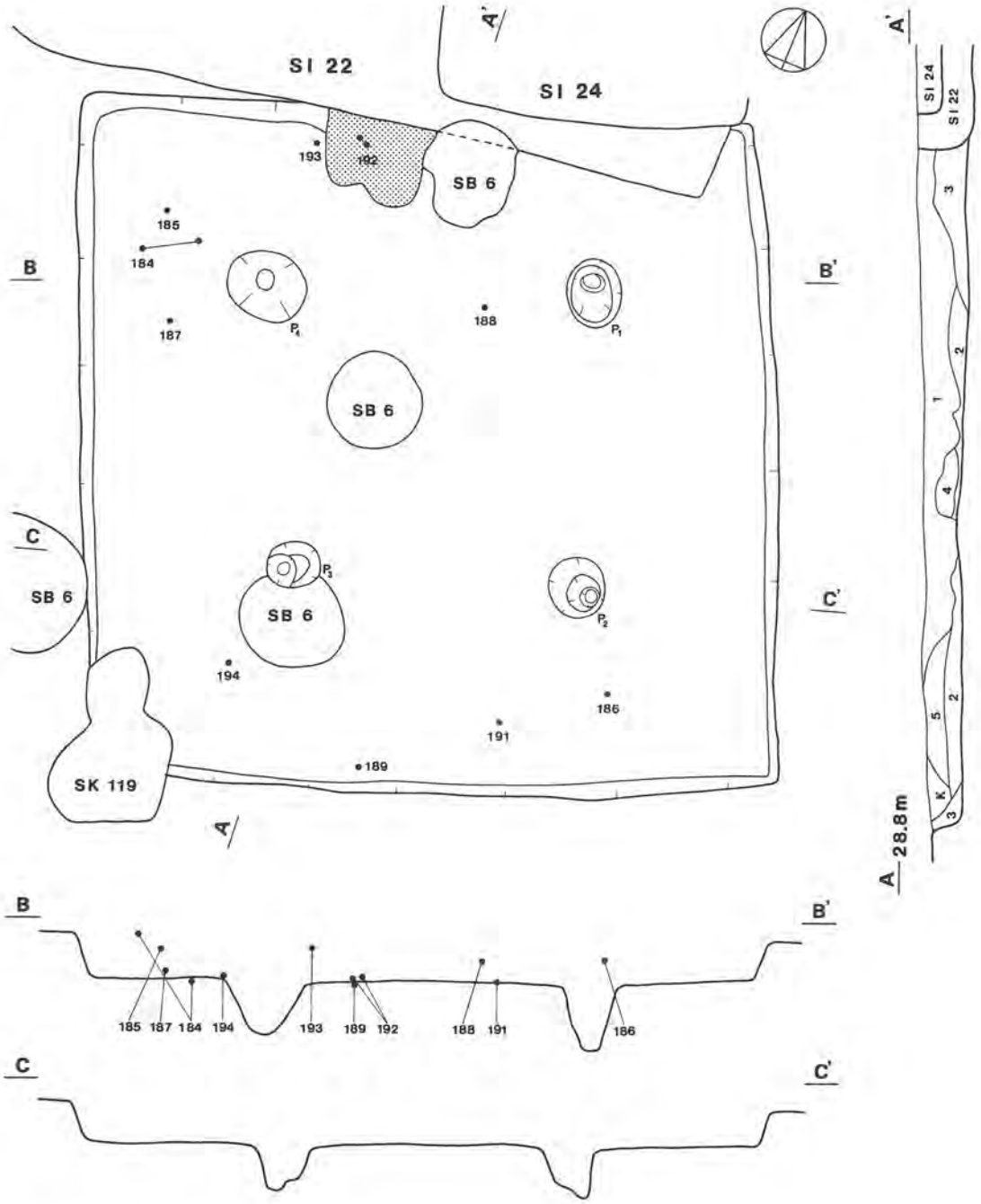
覆土　自然堆積。

遺物　覆土及び床面から，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，盤)片が少量出土している。189と191の土師器の坏は南東壁中央部付近の床面から正位の状態で，192の須恵器の高台付坏は竈内から，194のミニチュア土器は南西部の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第22・24号住居跡，第6号掘立柱建物跡，第119号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 184	鉢 土師器	A [13.5] B (7.3)	胴部との境に稜をもつ。口縁部は外上方に僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄褐色 普通	P129 20% 北西部覆土
185	坏 土師器	A 13.7 B 4.1	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P130 90% 北西部覆土上層
186	坏 土師器	A 16.0 B 3.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部外面横ナデ。口縁部内面横位のヘラ磨き。底部にヘラ記号。	砂粒 にぶい橙色 良好	P131 40% 南東部覆土
187	坏 土師器	A [13.6] B 4.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に強い稜をもつ,口縁部はほぼ直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ後，口縁部内面一部ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒 黒褐色 普通	P132 40% 北西部覆土下層

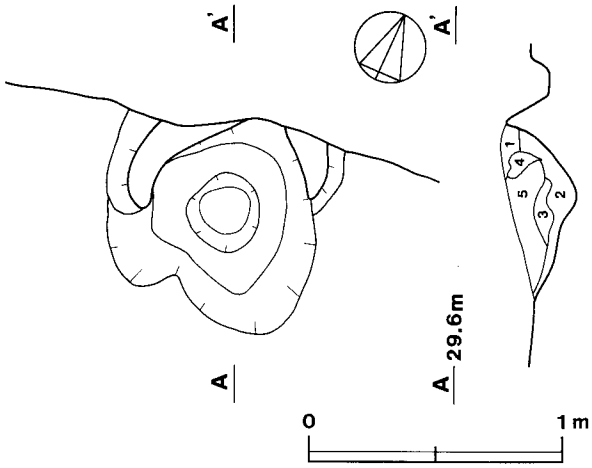


第23号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック多量。
2　黒褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
3　暗褐色　ロームブロック多量，ローム粒子少量。
4　黒褐色　ロームブロック多量。
5　暗褐色　ロームブロック多量，ローム粒子中量。

0　2m

第54図　第23号住居跡実測図



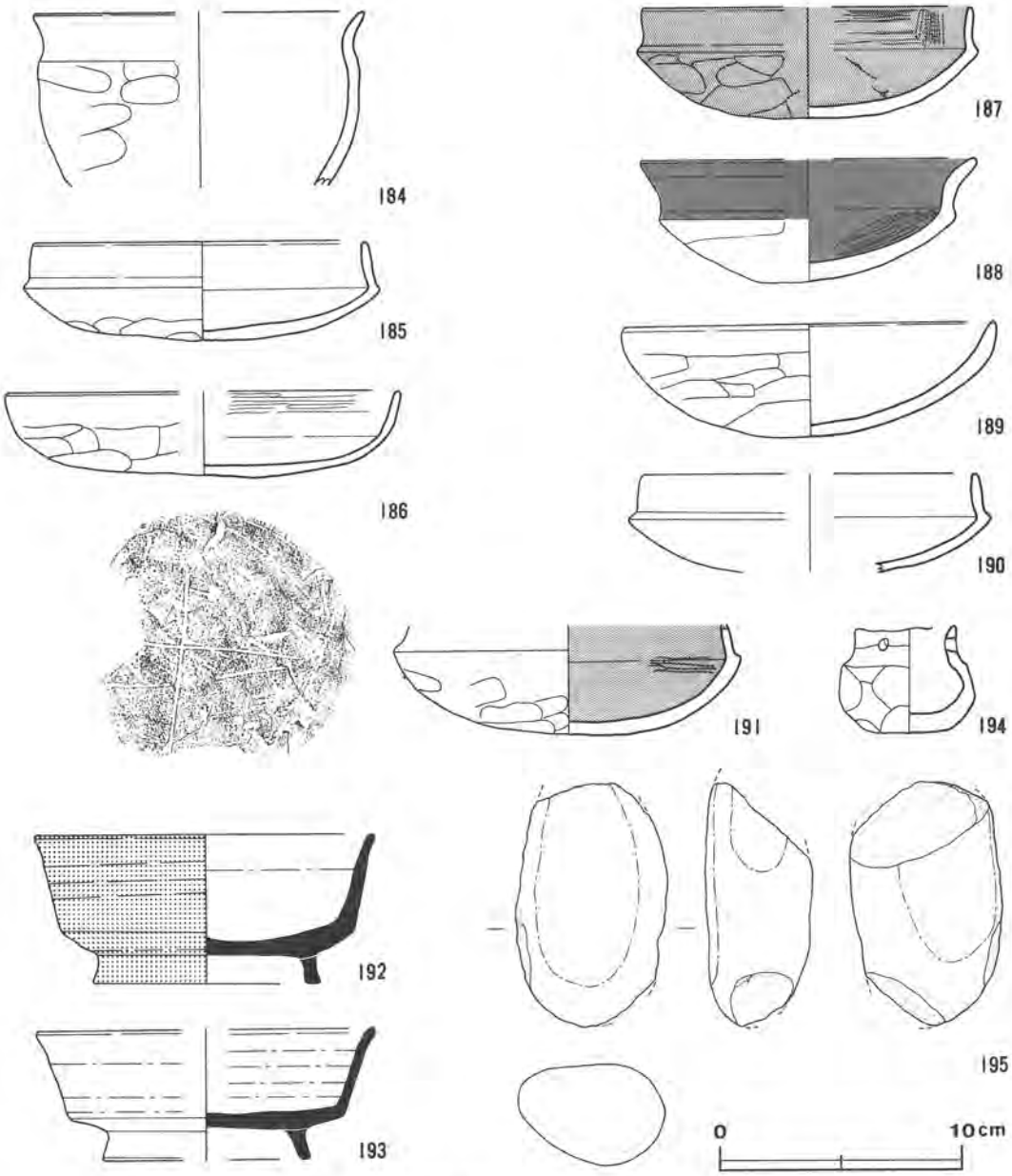
第23号住居跡　竈土層解説

1　明赤褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2　明赤褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量，炭化物少量。
3　明赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化物少量。
4　褐　　色　ロームブロック少量。
5　にぶい赤褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量。

第55図　第23号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
188	坏 土師器	A [13.8] B 5.1	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ後，赤彩。	砂粒 赤色 普通	P134 30% 竈前方覆土中層
189	坏 土師器	A 15.2 B 4.7	丸底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P136 100% 南東部床面
190	坏 土師器	A [13.8] B (4.1)	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面摩耗。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P133 100% P_3覆土
191	坏 土師器	B (4.7)	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒 黒褐色 普通	P135 90% 南東部床面
192	高台付坏 須恵器	A 14.0 B 6.2 D 9.4 E 1.3	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。体部外面に自然釉付着。高台貼り付け。	砂粒・礫 灰色 普通	P137 80% 竈覆土
193	高台付坏 須恵器	A [13.8] B 5.4 D [8.5] E 1.3	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 黄灰色 良好	P138 40% 北西部覆土上層
194	ミニチュア土器	A 4.0 B 4.4 C 3.2	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部に2か所孔を穿つ。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P139 100% 南西部床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
195	磨石	(10.1)	6.3	4.4	---	(336.0)	70	覆土	Q9 砂岩



第56図　第23号住居跡出土遺物実測・拓影図

第24号住居跡(第57図)

位置　調査区の北部，C2e_5区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の全域は第22号住居跡の南東部の上位に，南東壁付近は第23号住居跡の北西壁中央部から北コーナーにかけての上位に構築され，南西部は第6号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸2.86m，短軸2.68mの方形を呈している。

主軸方向　N-20°-W。

壁　壁高は14cm前後を測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

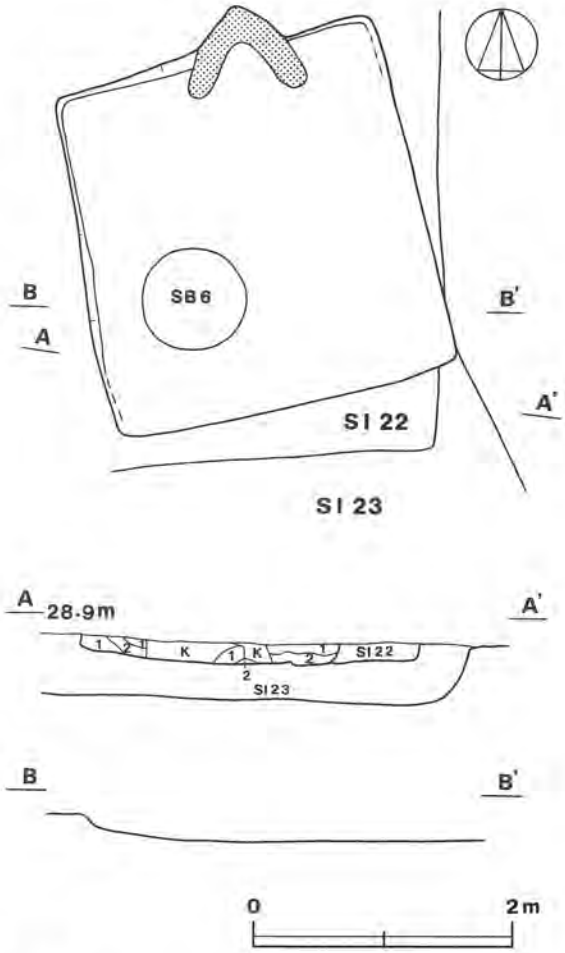
床　ほぼ平坦で，第22・23号住居跡の上位に，ロームを貼って構築されている。

竈　北西壁中央部からやや北東寄りの壁を30cm程壁外へ掘り込んで，砂まじりの粘土で構築されているが，竈は潰れて砂まじりの粘土が床中央部に向かって流出し，火床の一部が遺存しているだけである。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片と土製品が少量出土している。197の須恵器の甕と198の球状土錘は北東壁中央部付近の覆土中から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第22・23号住居跡より新しく，第6号掘立柱建物跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期以降の住居跡と考えられる。



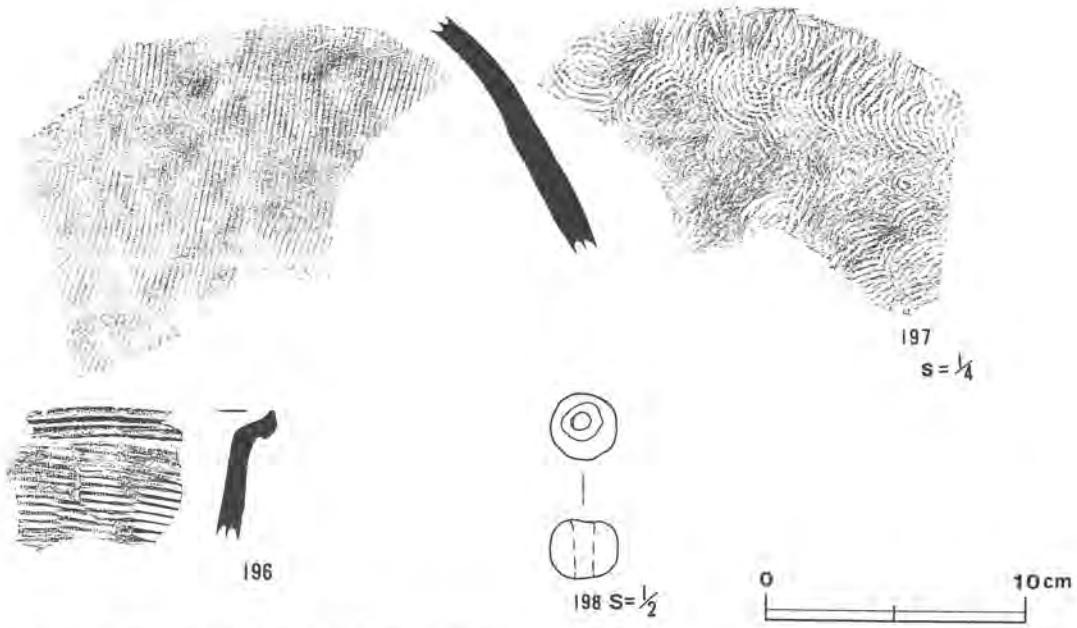
第24号住居跡　土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。

第57図　第24号住居跡実測図

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 196	甕 須恵器		甕の口頸部片。	外面平行叩き目。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	TP10 5% 北西部覆土
197	甕 須恵器		甕の胴部片。	外面平行叩き目。内面同心円文の当て具痕。	砂粒・礫 灰白色 普通	TP11 5% 北東部覆土

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
198	球状土錘	1.6	1.8	---	6.0	4.0	100	北東部	DP50



第58図　第24号住居跡出土遺物実測・拓影図

第25号住居跡(第59・60図)

位置　調査区の北東部，C2f_8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西コーナーは第16号住居跡の南東コーナーを掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.74m，短軸4.50mの方形を呈している。

主軸方向　N-8°-W。

壁　壁高は34～36cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅20～22cm，深さ4～7cmで，断面形はU字状を呈している。

床　北部から南部にかけて，僅かに傾斜している。中央部は踏み固められ堅緻である。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径22～52cm，深さ38～60cmで主柱穴，P_5は，径22～26cm，深さ30cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部の壁を45cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ136cm，幅163cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を6cm程掘り窪め，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

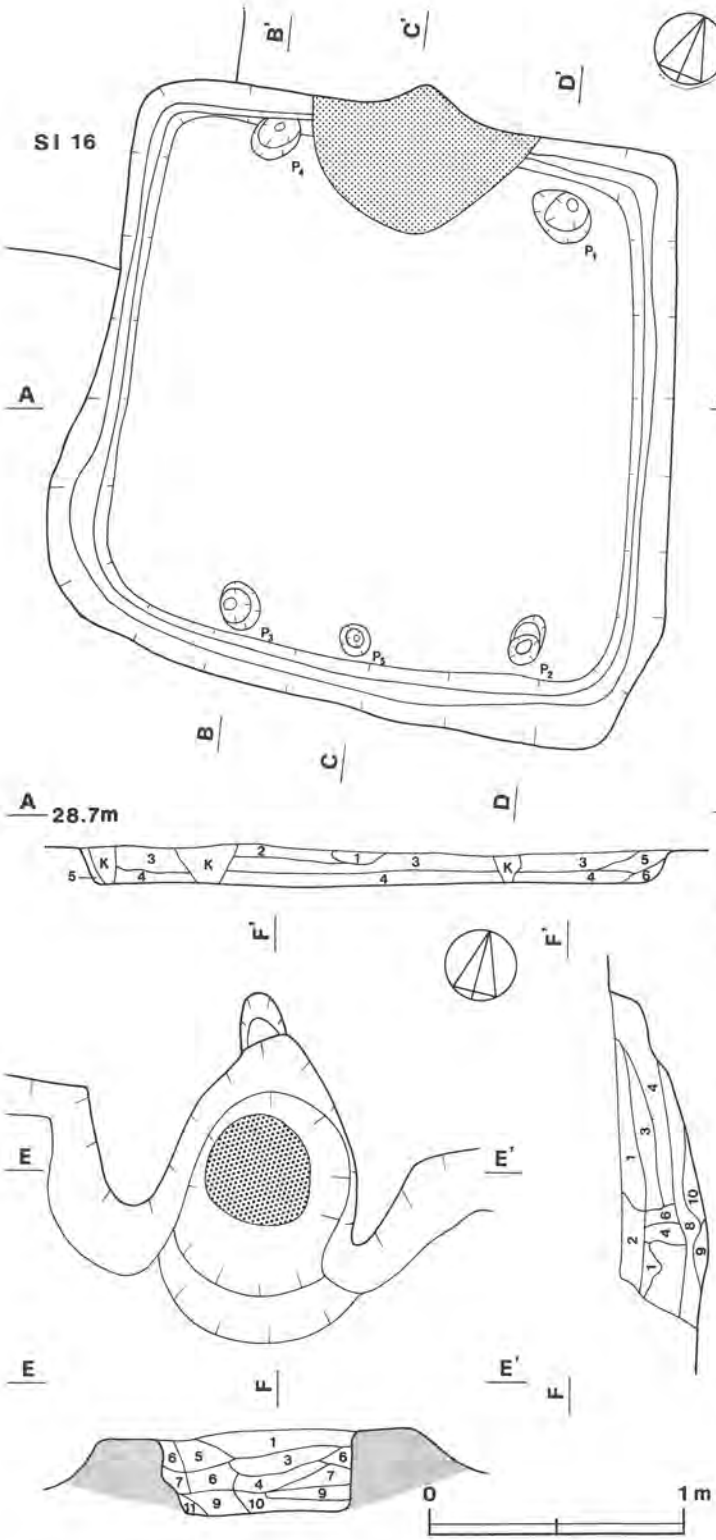
遺物　覆土及び床面からは，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋，甑，高台付坏)片，鉄製品(鎌)等が多量に出土している。225から228の須恵器の坏は北西部の床面から正位の状態で出土し，221と223の須恵器の坏は同じく北西部覆土下層から正位の状態で出土している。222の須恵器の坏

は南西部床面から逆位の状態で，243と244の鎌は覆土及び南西部床面から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第16号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第61～65図 199	甕 土師器	A (20.8) B 31.9 C 8.4	平底。胴部は内彎し，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を上方につまみ出す。	胴部外面中位から下位ヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P140 60% 北東部床面
200	甕 土師器	A 22.0 B (10.9)	張りのある胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P141 10% 北西部覆土下層
201	甕 土師器	A 14.2 B (4.9)	やや張りのある胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を僅かに外上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P142 10% 竈
202	甕 土師器	A [12.4] B (4.5)	やや張りのある胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を上方につまみ出す。	胴部内面横位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P143 10% 覆土
203	甕 土師器	A [15.8] B (5.9)	やや張りのある胴部で，頸部は「コ」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	頸部外面横位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P144 10% 南西部床面
204	甕 土師器	A [20.2] B (5.0)	やや張りのある胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を上方につまみ出す。	胴部内面横位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P145 5% 覆土
205	甕 土師器	B (10.3) C 7.0	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位横位のヘラ削り。胴部内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・礫 橙色 普通	P146 30% 覆土下層
206	甕 土師器	B (5.2) C [7.4]	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。胴部内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・礫 にぶい黄橙色 普通	P147 10% 覆土
207	甑 須恵器	A 36.0 B 30.1 C 15.0	5孔式。胴部は外傾して立ち上がり，頸部は短く屈曲する。口唇部は僅かに突出する。	胴部外面平行叩き目。胴部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P159 70% 覆土上層
208	甑 須恵器	A [38.0] B (20.2)	胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は大きく外反する。口唇部をつまみ出す。	胴部外面平行叩き目。胴部内面横位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P160-2 20% 覆土中層
209	甑 須恵器	A [38.0] B 30.3 C 15.5	胴部は外傾して立ち上がり，頸部から口縁部は強く屈曲する。口唇部は外上方に突出する。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。中位から上位平行叩き目。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P160-1 30% 覆土下層
210	甑 須恵器	A [25.6] B 22.2 C 11.0	5孔式。胴部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は大きく外傾し段をなす。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。下位上方から上位平行叩き目。胴部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P161 30% 覆土中層
211	鉢 須恵器	A [25.2] B 13.9 C 12.6	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は短く外傾する。口唇部は外上方に突出する。	底部及び胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P162 50% 覆土下層



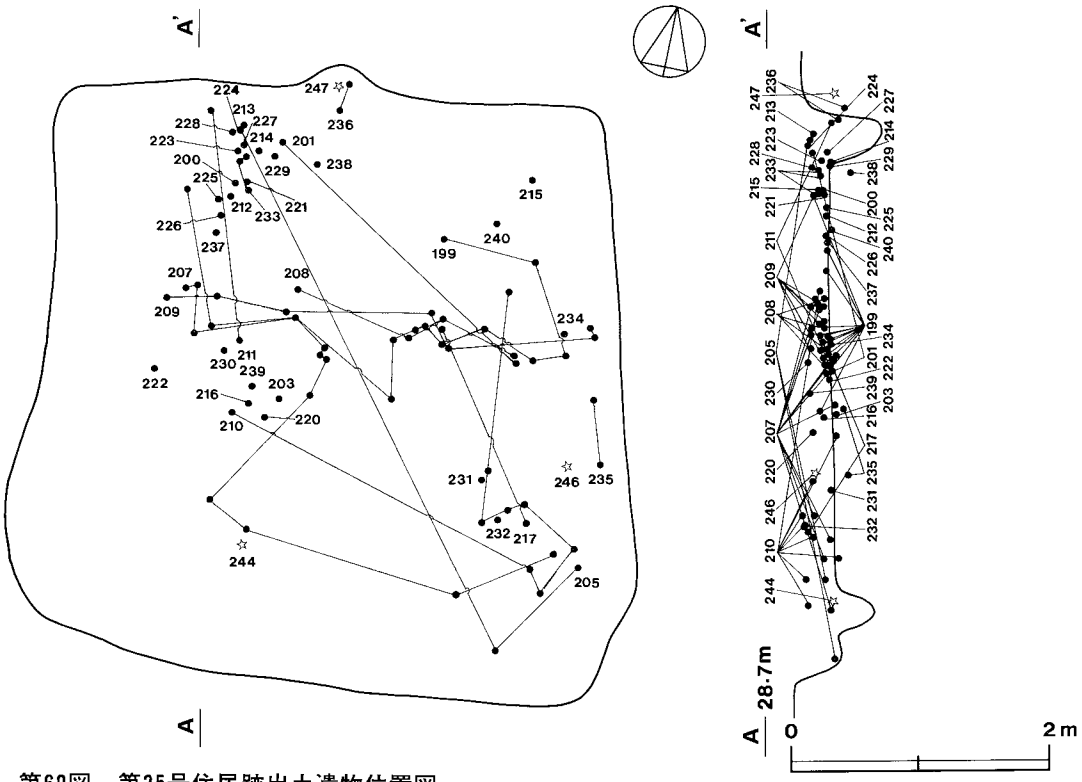
第25号住居跡　土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
2　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
4　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
5　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
6　暗　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。

第25号住居跡　竈土層解説

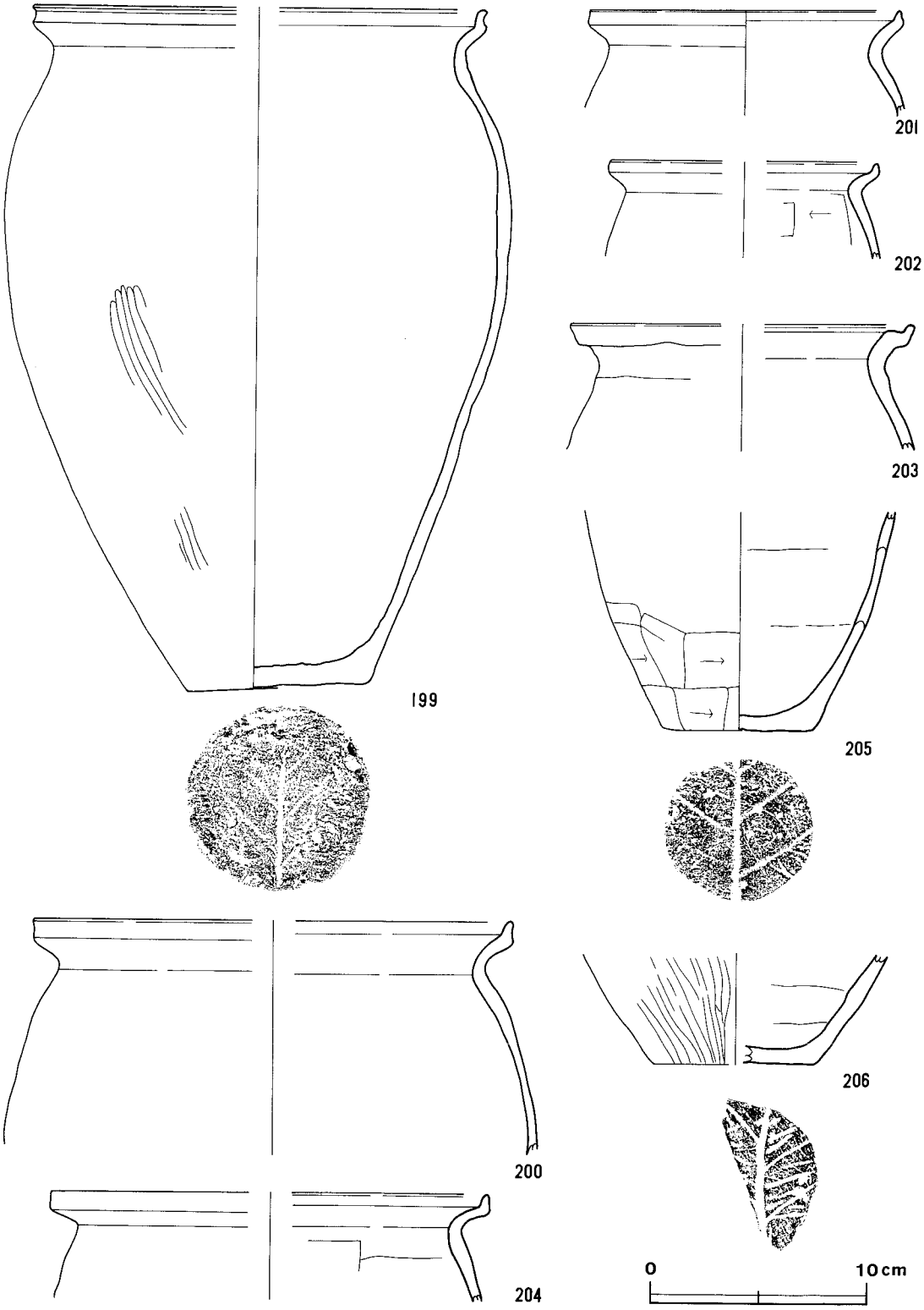
1　極暗赤褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量。
2　暗赤褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量。
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，・炭化粒子少量。
5　明　褐　色　焼土ブロック少量。
6　暗　褐　色　焼土粒子中量，焼土ブロック少量。
7　黒　褐　色　焼土ブロック多量，炭化物少量。
8　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化材中量。
9　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量。
10　にぶい褐色　焼土粒子少量。
11　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量。

第59図　第25号住居跡実測図

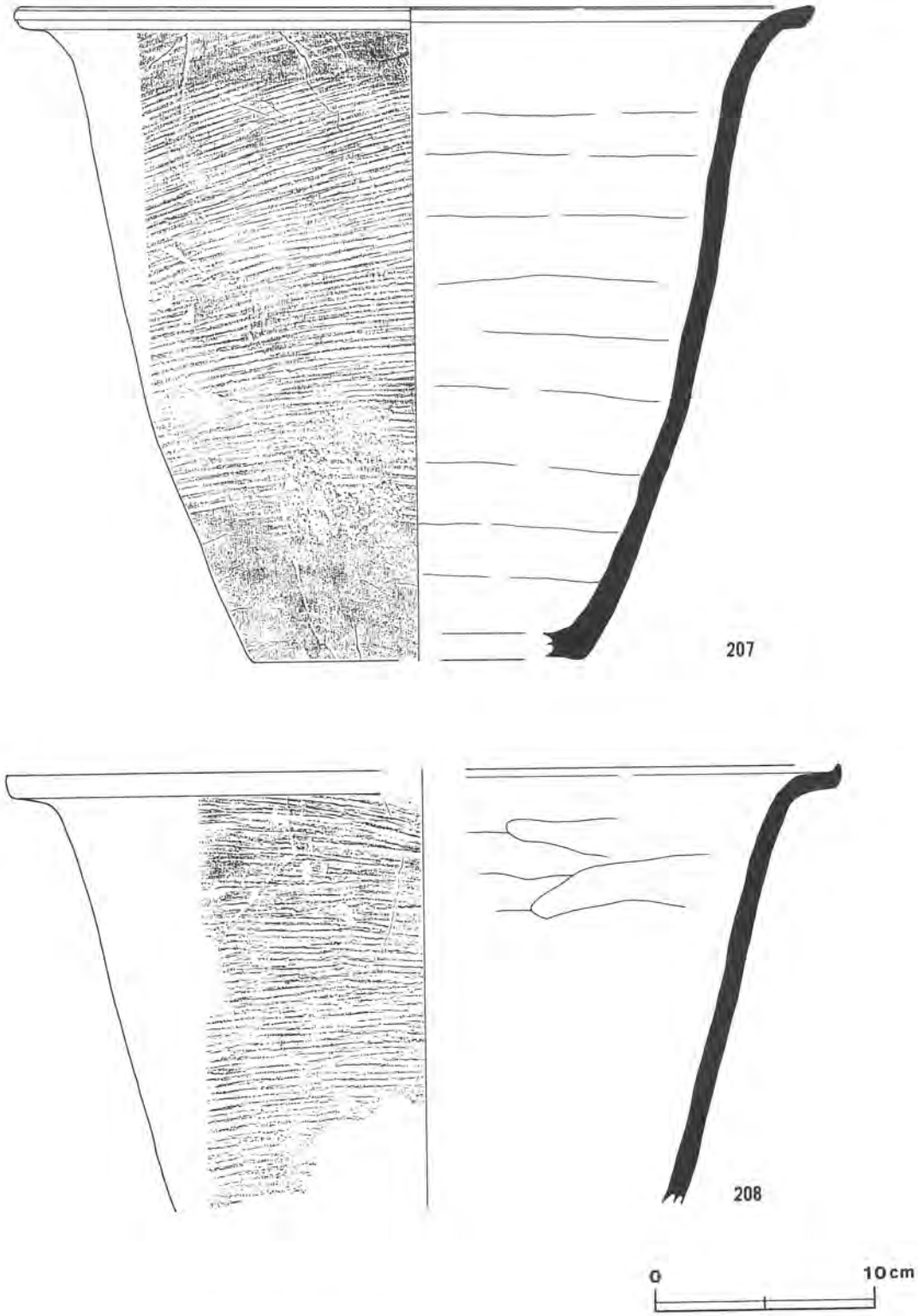


第60図　第25号住居跡出土遺物位置図

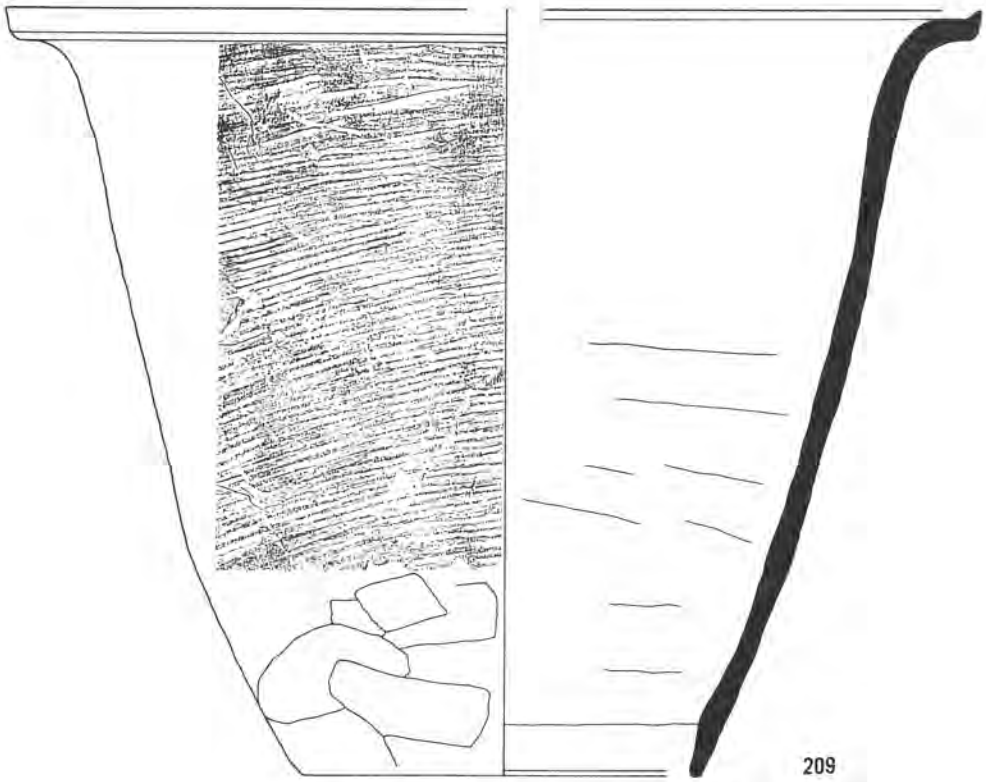
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
212	坏 須恵器	A 12.2 B 4.3 C 6.6	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。歪んでいる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P150 90% 北西部床面
213	坏 須恵器	A 13.2 B 4.6 C 6.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P148 100% 北西部覆土中層
214	坏 須恵器	A 13.2 B 4.3 C 6.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P149 100% 北西部床面
215	坏 須恵器	A 13.4 B 4.8 C 6.5	平底。体部は外傾して立ち上がり，中位から僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P151 80% 北東部覆土下層
216	坏 須恵器	A 13.3 B 5.2 C 6.9	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P152 80% 南西部覆土下層
217	坏 須恵器	A 13.7 B 4.7 C 6.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい黄橙色 普通	P153 70% 覆土中層
218	坏 須恵器	A 14.3 B 4.2 C 6.7	平底。体部は大きく外傾して立ち上がる。口縁部は外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄褐色 普通	P154 70% 覆土
219	坏 須恵器	A [13.0] B 4.3 C [6.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄褐色 普通	P155 20% 覆土

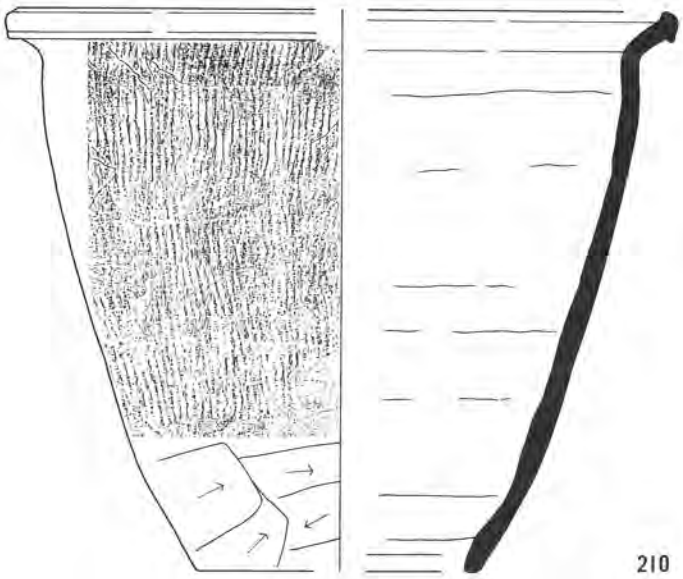


第61図　第25号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）

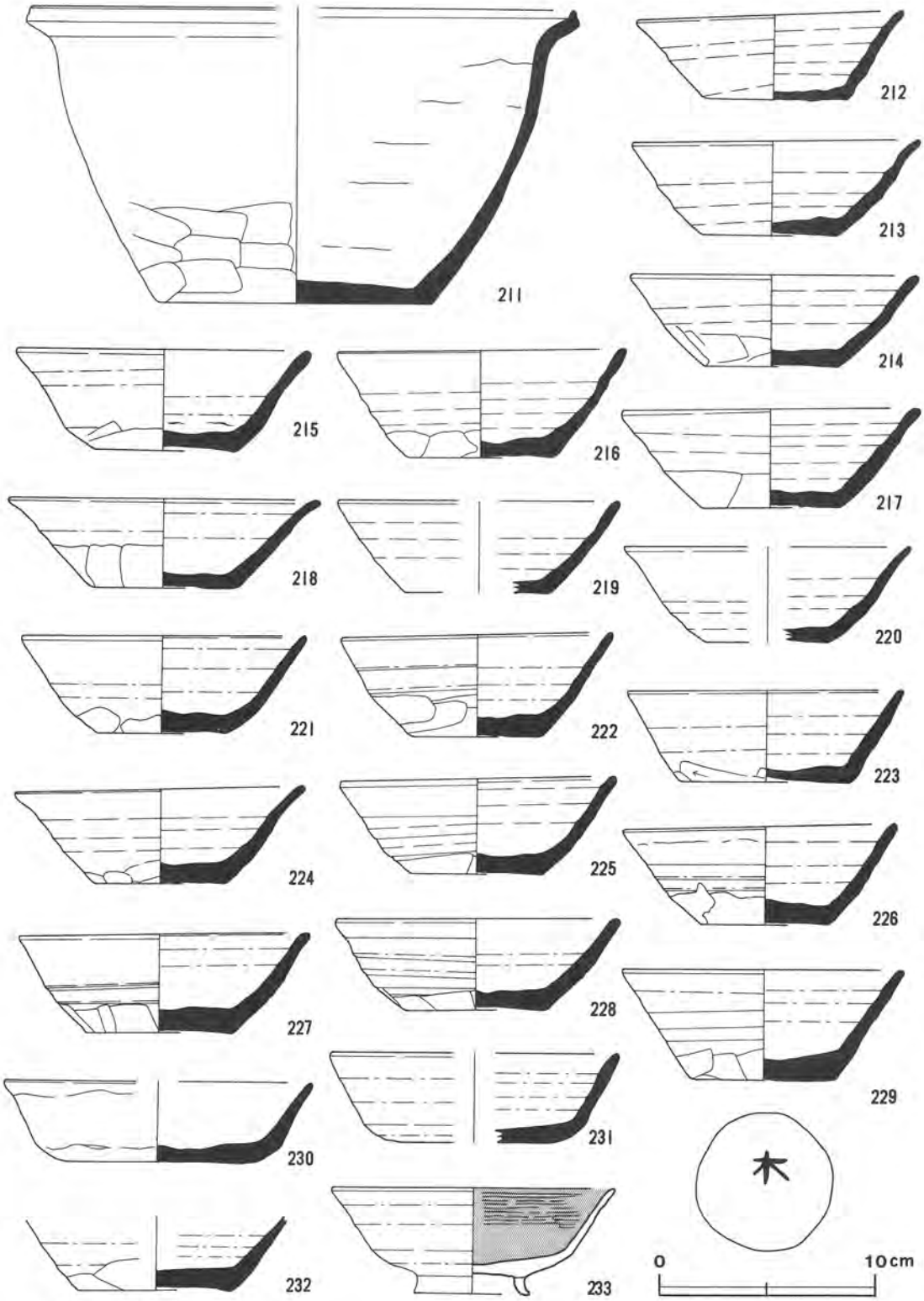


第62図　第25号住居跡出土遺物実測・実測図（2）

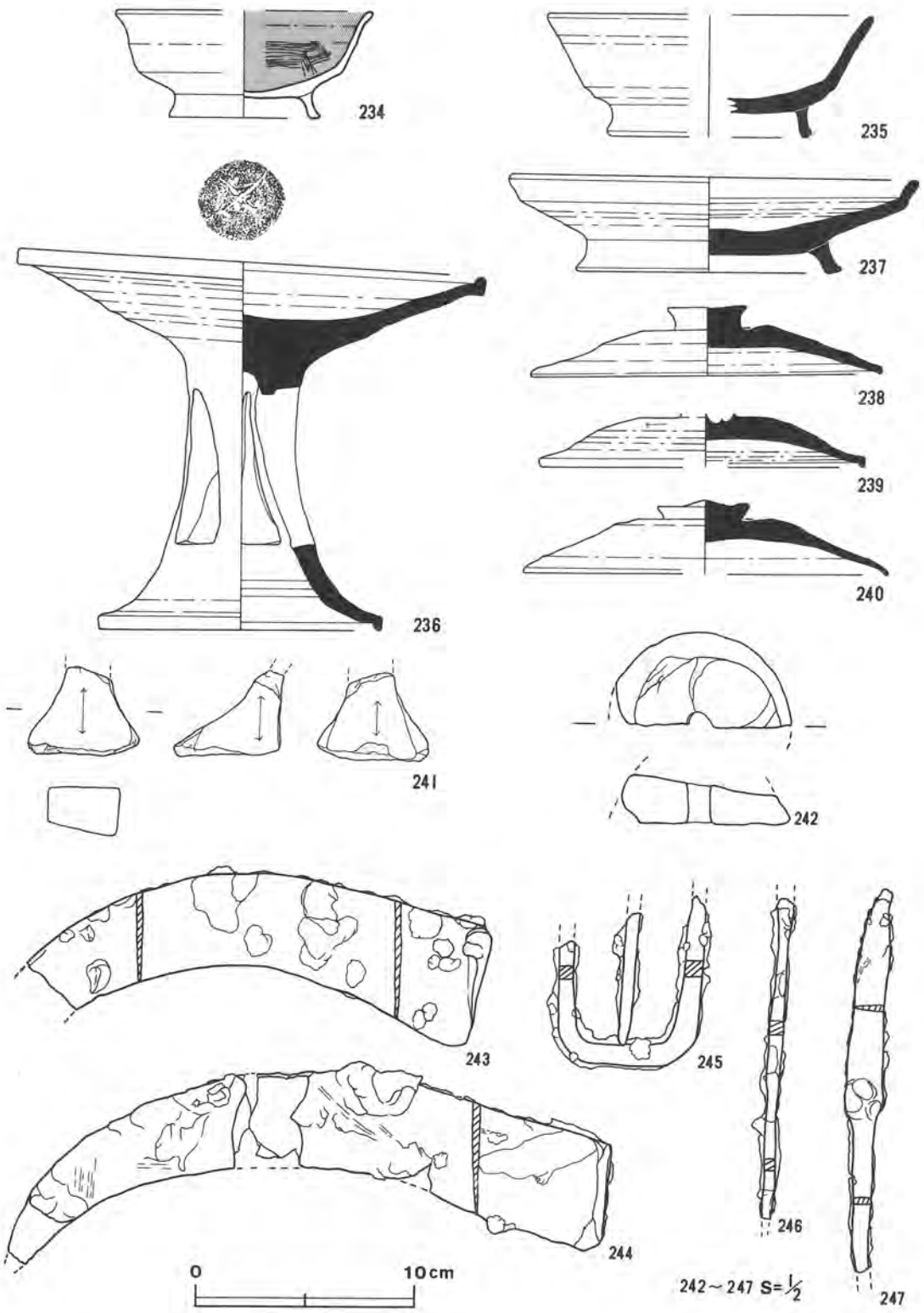




第63図　第25号住居跡出土遺物実測・拓影図（3）



第64図　第25号住居跡出土遺物実測図（4）



第65図　第25号住居跡出土遺物実測・拓影図（5）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
220	坏 須恵器	A 13.2 B 4.5 C [5.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P156 20% 南西部覆土上層
221	坏 須恵器	A 13.1 B 4.6 C 6.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P163 100% 北西部覆土下層
222	坏 須恵器	A 12.6 B 4.9 C 6.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 暗灰黄色 普通	P164 100% 南西部床面
223	坏 須恵器	A 12.6 B 4.4 C 7.7	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り，体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P165 100% 北西部覆土下層
224	坏 須恵器	A 13.3 B 4.6 C 6.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P166 100% 北西部覆土上層
225	坏 須恵器	A 12.7 B 4.7 C 6.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P167 100% 北西部床面
226	坏 須恵器	A 12.6 B 4.8 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P168 90% 北西部床面
227	坏 須恵器	A 13.3 B 4.7 C 6.7	平底。体部は器厚を減じながら内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P169 70% 北西部床面
228	坏 須恵器	A 13.0 B 4.3 C 6.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は丸い。	底部及び体部下端一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P170 70% 北西部床面 墨書判読不能
229	坏 須恵器	A 12.9 B 5.2 C 6.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部及ぶ体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P171 70% 竈 墨書「木」
230	坏 須恵器	A [14.2] B 3.8 C [9.0]	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P173 30% 南西部覆土上層
231	坏 須恵器	A [13.4] B 4.2 C [7.2]	平底。体部は外傾して立ち上がる。	全体的に摩耗。	砂粒・雲母・礫 黄灰色 普通	P174 20% 南東部床面
232	坏 須恵器	B (3.6) C 7.0	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P172 60% 南東部覆土上層
233	高台付坏 土師器	A 13.0 B 5.0 D 5.4 E 0.8	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転糸切り。体部下端回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き後黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P157 60% 北西部覆土下層
234	高台付坏 土師器	A [11.6] B 5.0 D 6.8 E 1.2	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き，後黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P158 70% 北東部覆土下層
235	高台付坏 須恵器	A [14.8] B 5.7 D 9.2 E 1.6	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P175 50% 南東部床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
236	高坏 須恵器	A 21.4 B 17.7 D 12.9 E 12.2	脚部に3か所の透かしをもつ。裾部は大きく反り，端部は段をなして短く垂下する。坏部は外上方に大きく開き，口縁部はほぼ垂直に屈曲する。	脚部及び坏部内・外面横ナデ。透かしヘラ切り後，ナデ。坏部内面ほぼ中央にヘラ記号。	砂粒・礫 灰色 普通	P180 90% 竈 ヘラ記号「メ」
237	盤 須恵器	A 18.6 B 4.4 D 12.2 E 1.4	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は大きく外傾して立ち上がり，口縁部は短く屈曲する。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P179 90% 北西部床面
238	蓋 須恵器	A 16.2 B 3.4 F [3.5] G 1.2	天井部は低く，ほぼ直線的に傾斜して口縁部に至る。端部は僅かに垂下する。腰高で中央部が僅かに凹むつまみがつく。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P176 70% 竈
239	蓋 須恵器	A [14.7] B (2.5) F [2.3] G (0.1)	天井部は低く平坦で，丸味をもって口縁部に至る。口縁部は僅かに外反し，端部は短く垂下すする。つまみ欠損。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。内面研磨。	砂粒 紫灰色 良好	P177 40% 南西部覆土下層 転用硯か
240	蓋 須恵器	A [16.8] B 3.5 F 4.2 G 1.1	天井部は低く，器厚を減じながら緩やかに傾斜して口縁部に至る。端部は僅かに内彎する。つまみは扁平で中央が突出する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P178 40% 北東部床面

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
241	砥石	(4.1)	5.1	5.0	---	(63.7)	80	覆土	Q10 凝灰岩
242	紡錘車	(5.4)	(3.0)	(1.5)	8.0	(28.6)	40	覆土	Q11 粘板岩
243	鎌	(14.4)	(4.0)	(0.2)	---	(58.0)	60	覆土	M8
244	鎌	(18.8)	(3.5)	(0.2)	---	(65.1)	70	南西部床面	M9
245	不明鉄製品	(5.3)	(4.5)	(0.5)	---	(19.3)	70	覆土	M5
246	釘	(10.0)	(1.1)	(0.4)	---	(9.8)	60	南東部覆土上層	M6
247	刀子	(12.0)	(0.2)	(0.2)	---	(12.6)	80	竈	M7

第26号住居跡(第66・67図)

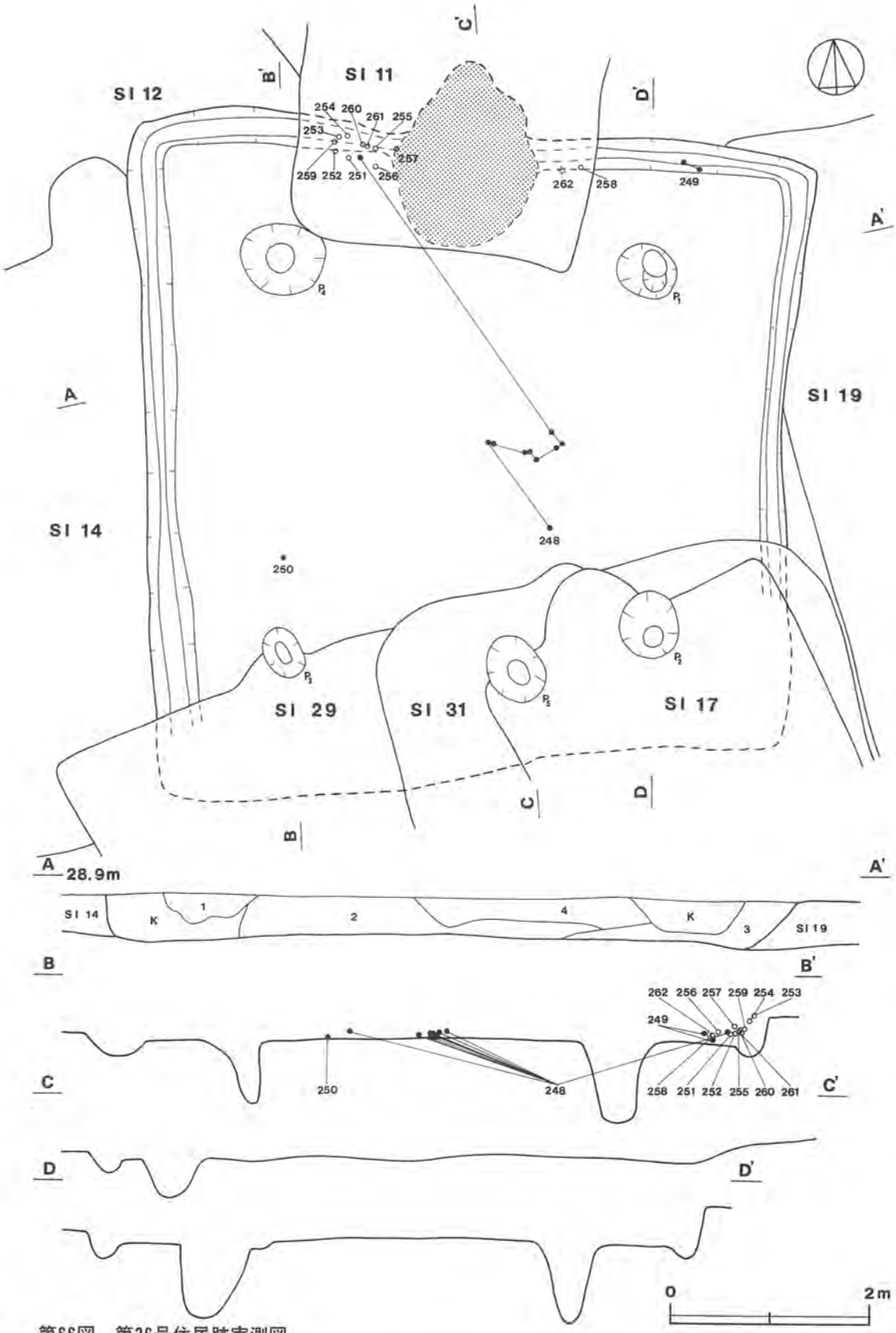
位置　調査区の北東部，C2c9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の西部は第14号住居跡の東部を，北西コーナーは第12号住居跡の東コーナー付近を，北東コーナーは第19号住居跡の北西コーナー付近をそれぞれ掘り込んでいる。本跡の北壁中央付近は第11号住居跡の南部に，南東部は第17号住居跡の北東コーナーに掘り込まれ，南部の上位には第29号住居跡の北西壁と第31号住居跡の北西部が構築されている。

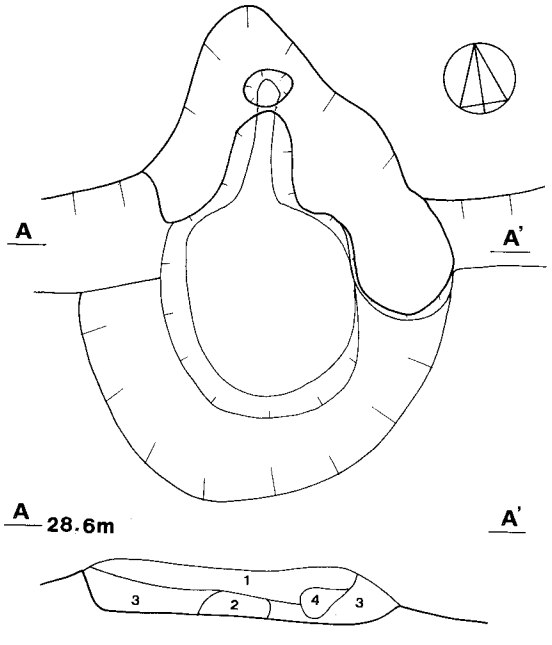
規模と平面形　長軸6.46m，短軸6.22mの方形を呈している。

主軸方向　N-5°-E。

壁　西壁は僅かに立ち上がりが検出されただけであるが，その他の壁は壁高10～38cm を測り，外傾して立ち上がっている。



第66図　第26号住居跡実測図



第26号住居跡　土層解説

1 暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
2 暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
3 褐　色　ロームブロック中量。
4 暗赤褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。

第26号住居跡　竈土層解説

1 黒褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
2 黒褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
3 暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
4 黒褐色　ロームブロック少量。

第67図　第26号住居跡竈実測図

壁溝　壁下を全周している。上幅26～28cm，深さ12～14cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　ほぼ平坦で，踏み固められ堅緻である。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径60～86cm，深さ68～82cm で主柱穴，P_5は，径50～60cm，深さ18cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　第11号住居跡の南部の床下から検出されている。北壁中央部の壁を70cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ195cm，幅146cm 程を測る。天井部の一部は遺存している。火床は床面を6cm 程掘り窪めているが，さほど熱をうけていない。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がり，煙出口に至っている。

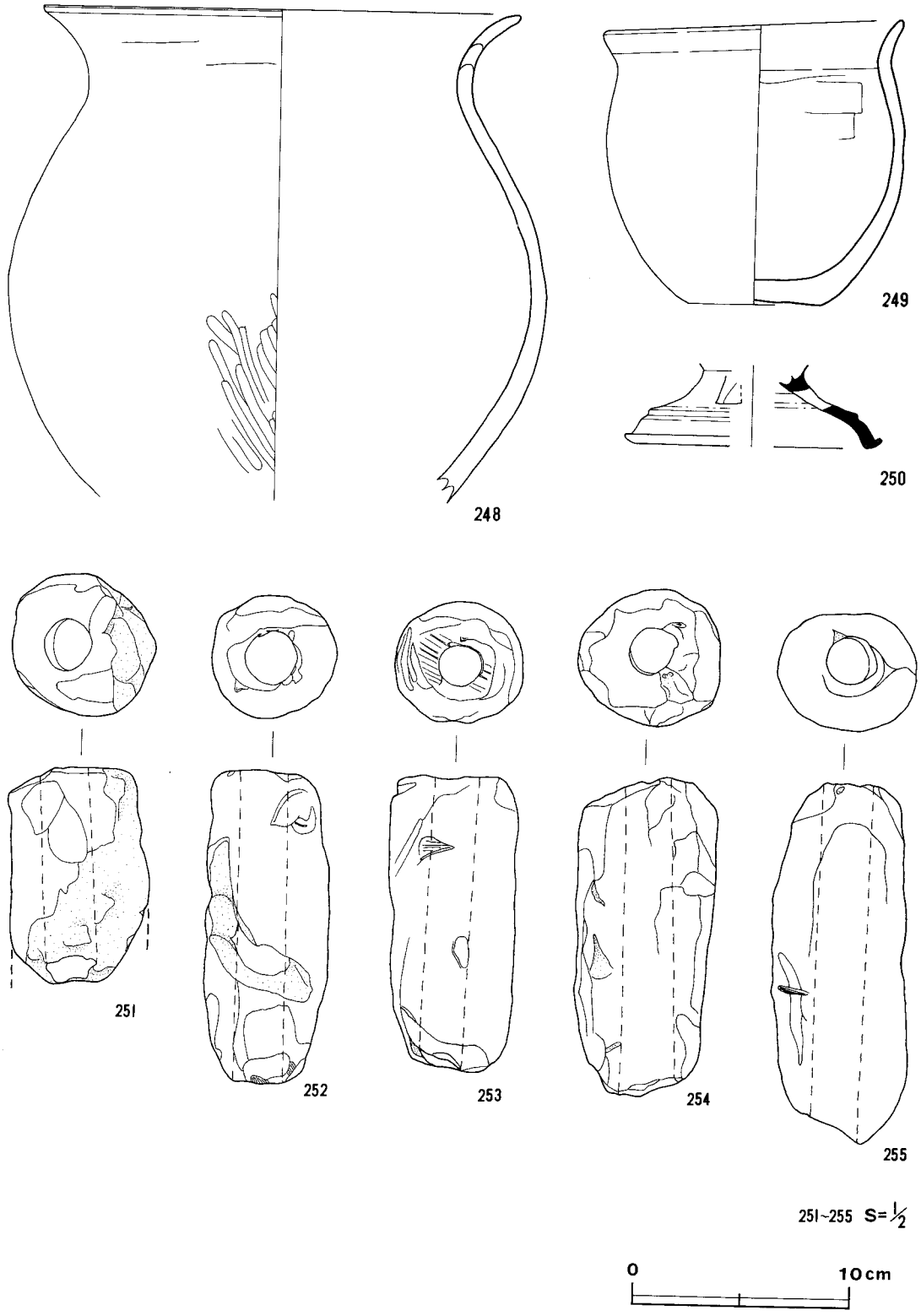
覆土　自然堆積。

遺物　覆土下層及び床面から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が少量出土している。248の土師器の甕は覆土から正位の状態で，249の土師器の小形甕は北東部覆土下層から正位の状態で，250の土師器の高坏は南西部の床面から横位の状態でそれぞれ出土し，251から261の管状土錘は，竈西側覆土からまとまって出土している。

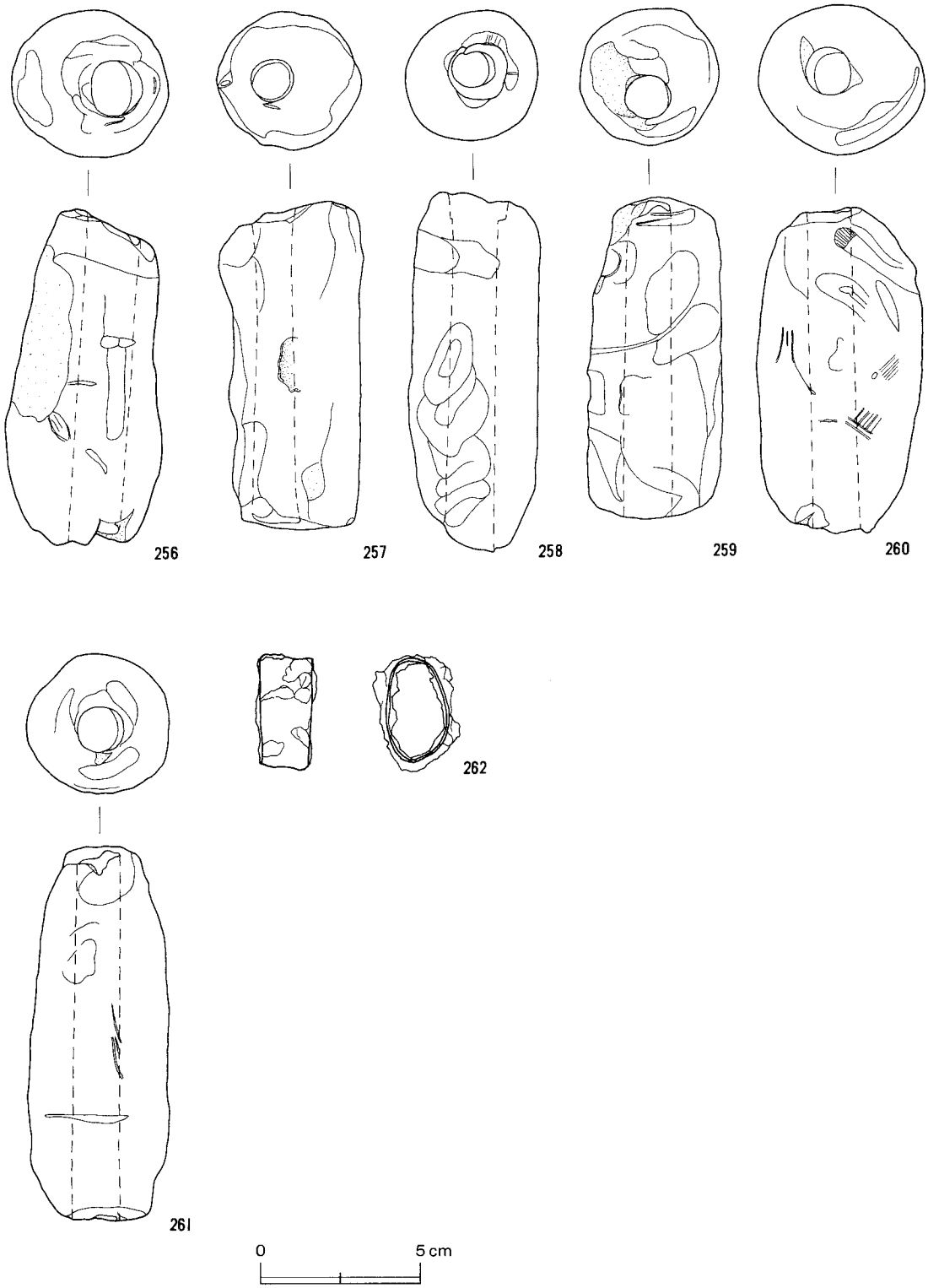
所見　本跡は，重複関係から第12・14・19号住居跡より新しく，第11・17・29・31号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68・69図 248	甕 土師器	A 22.0 B (23.0)	胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部はくびれ，口縁部は大きく外反する。	胴部外面下位ヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫にぶい橙色 普通	P181 30% 覆土



第68図　第26号住居跡出土遺物実測図（1）



第69図　第26号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
249	甕 土師器	A 13.6 B 13.5 C 6.2	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，中位に最大径をもつ。頸部は僅かに外反する。	底部ナデ。胴部外面剝離。胴部内面上位ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P182 90% 北東部覆土下層
250	高坏 須恵器	D [10.8] E (3.8)	透かしのある脚部で，裾部は段をなして端部に至る。端部は外上方に短く屈曲する。	内・外面横ナデ。透かしヘラ切り。	砂粒・礫 灰色 良好	P183 10% 南西部床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
251	管状土錘	(6.9)	4.5	---	16.0	(111.1)	60	竈西側覆土	DP51
252	管状土錘	9.8	3.9	---	16.0	(115.0)	70	竈西側覆土	DP52
253	管状土錘	9.3	4.0	---	13.0	142.8	100	竈西側覆土	DP53
254	管状土錘	10.0	4.5	---	20.0	181.1	100	竈西側覆土	DP54
255	管状土錘	11.4	4.3	---	15.0	166.3	100	竈西側覆土	DP55
256	管状土錘	10.5	4.9	---	16.0	(201.2)	90	竈西側覆土	DP56
257	管状土錘	10.3	4.5	---	15.0	195.3	100	竈西側覆土	DP57
258	管状土錘	11.3	4.1	---	22.0	162.5	100	竈西側覆土	DP58
259	管状土錘	10.1	4.3	---	15.0	180.0	100	竈西側覆土	DP59
260	管状土錘	10.3	5.1	---	15.0	215.8	100	竈西側覆土	DP60
261	管状土錘	11.7	4.5	---	15.0	198.5	100	竈西側覆土	DP61
262	不明鉄製品	3.6	1.8	---	33.0	7.9	100	竈西側覆土	M10

第27号住居跡(第70図)

位置　調査区の北東部，C2f_3区を中心に確認されている。南東部を除き，大半が調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の南東コーナー付近の上位には第21号住居跡の南西部の床が貼られている。南東部は第28号住居跡の北コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸(2.20)m，短軸(0.94)mで，平面形状は明確ではない。

主軸方向　[N-5°-W]。

壁　壁高は南壁で10cm前後を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

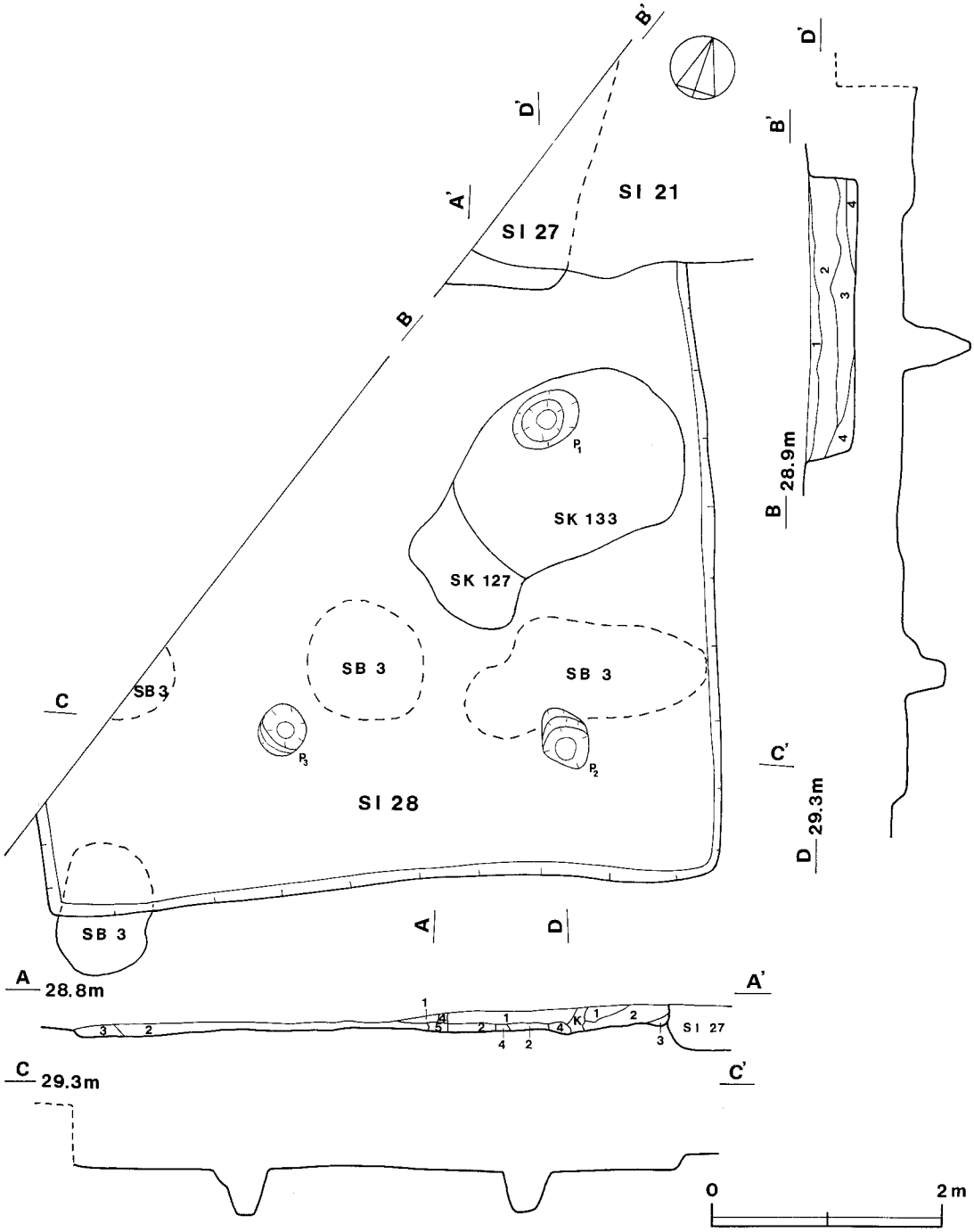
床　ほぼ平坦で，硬く踏み固められている。

竈　竈が付設するものと考えられるが，住居跡の大半は調査区域外にのびているため検出されていない。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から土師器(坏，甕)片が10点，須恵器(甕)片が7点出土している。

所見　本跡は，重複関係から第28号住居跡より新しく，第21号住居跡より古い時期に構築されている。重複関係及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第27号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量。
2　暗褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子少量。
3　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量。
4　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子少量。

第28号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
3　暗褐色　ロームブロック中量。
4　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量。
5　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量。

第70図　第27・28号住居跡実測図

第28号住居跡(第70図)

位置　調査区の北東部，C2g3区を中心に確認されている。本跡の北西部の一部と南西部にかけては調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の北コーナー付近は第21号住居跡の南コーナーと第27号住居跡の南東部に，東部は第127・133号土坑に掘り込まれ，南東部から南西部にかけては第3号掘立柱建物跡の上位に構築されている。

規模と平面形　長軸5.88m，短軸5.44mで，方形を呈するものと推定される。

主軸方向　N-22°-W。

壁　北西・南西壁は重複遺構及び調査区域外のため検出されていないが，他の壁の壁高は14cm前後を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

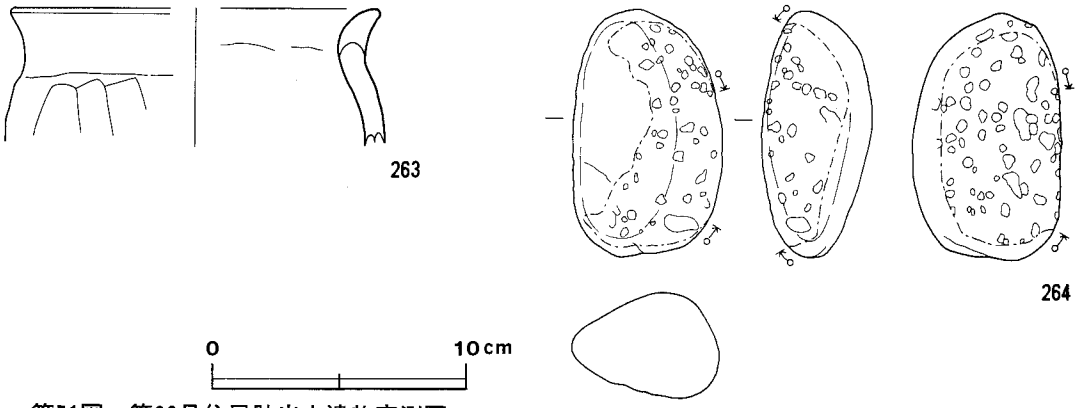
床　全体的にほぼ平坦で，踏み固められ堅緻である。

竈　北西壁は重複する第21・27号住居跡に掘り込まれているうえ，調査区域外にのびているため，竈は検出されていない。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が少量出土している。

所見　本跡は，重複関係から第3号掘立柱建物跡より新しく，第21・27号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



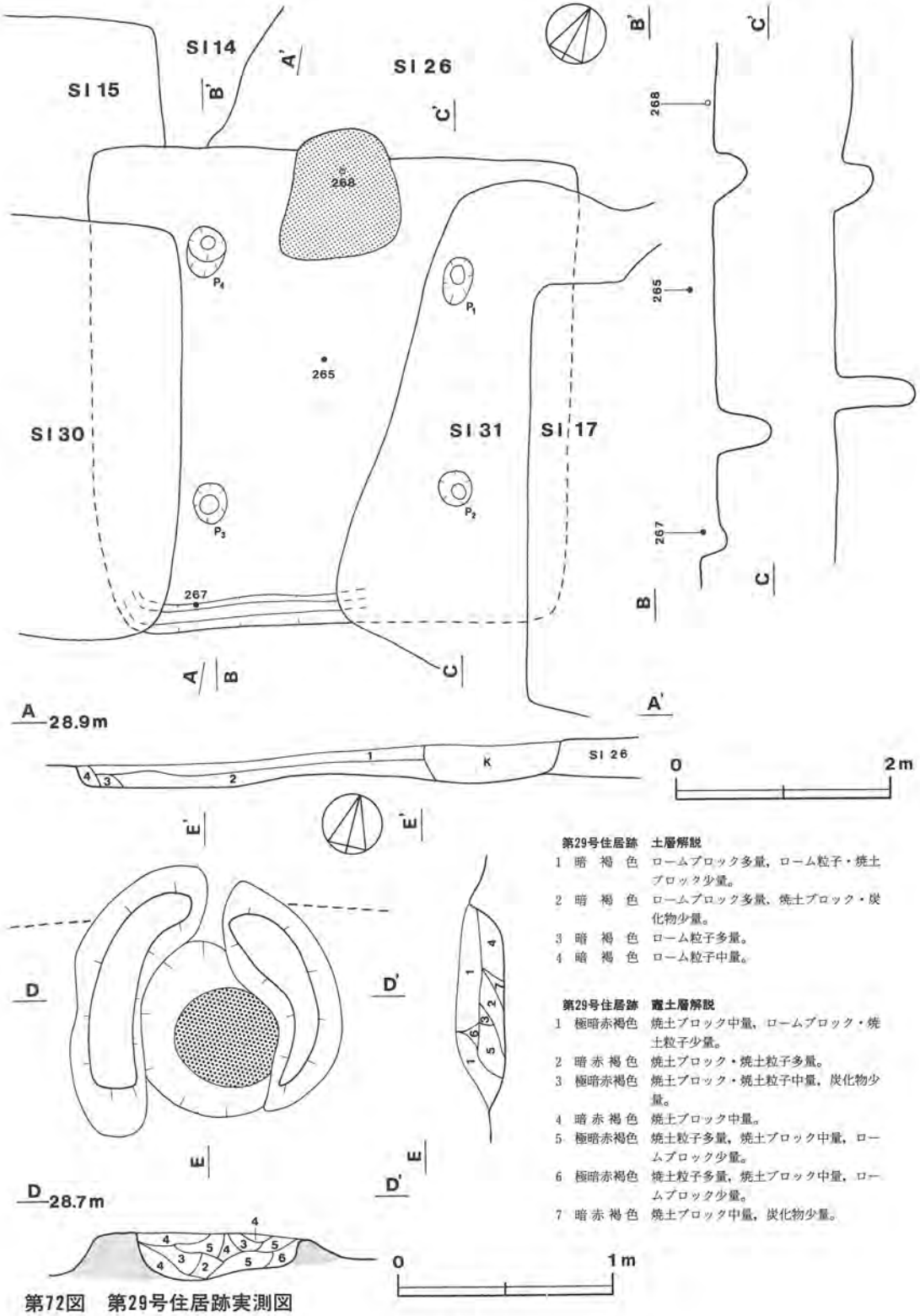
第71図　第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 263	甕 土師器	A [14.2] B (5.5)	張りの弱い胴部で，口縁部は外反して立ち上がる。	胴部外面上位縦位のヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P184　10% 北東部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
264	磨石	9.7	5.9	4.3	---	322.1	100	覆土	Q12　粘板岩

第29号住居跡（第72図）



第29号住居跡　土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック多量，ローム粒子・焼土ブロック少量。
2　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
3　暗　褐　色　ローム粒子多量。
4　暗　褐　色　ローム粒子中量。

第29号住居跡　竈土層解説

1　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・焼土粒子少量。
2　暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量。
3　極暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量。
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量。
5　極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量，ロームブロック少量。
6　極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量，ロームブロック少量。
7　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量。

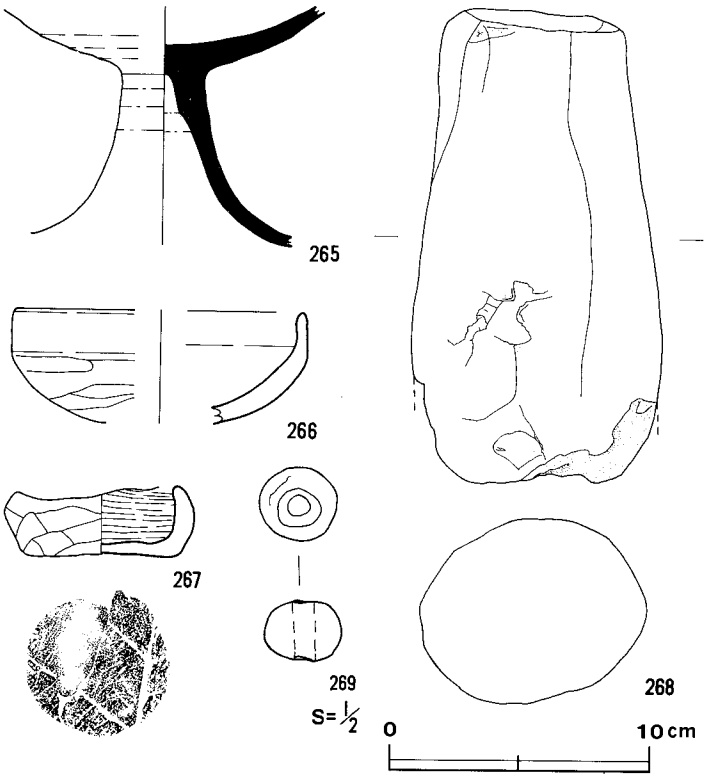
第72図　第29号住居跡実測図

位置　調査区の北東部，C2d_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西壁は第14号住居跡の南壁中央部を，南西壁は第15号住居跡の東壁の一部をいずれも掘り込み，第26号住居跡の南西コーナー付近の上位に竈が構築されている。本跡の北東壁部分は第17号住居跡の西壁に，北東壁付近は第31号住居跡の西部に掘り込まれている。本跡の南西壁付近の上位には，第30号住居跡の北東コーナー付近が構築されている。

規模と平面形　長軸4.74m，短軸4.48mの方形を呈している。

主軸方向　N-22°-W。



第73図　第29号住居跡出土遺物実測・拓影図

壁　壁高は14～18cm を測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　南西壁下からだけ検出されている。上幅18～20cm，深さ6～8cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　ほぼ平坦で，特に竈の前方は踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径34～50cm，深さ26～76cm で，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央部の壁を25cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ116cm，幅122cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を9cm 程掘り窪めている。火床及び袖部の内側は，熱をうけて赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土全域から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，高台付坏，甕)片等が少量出土している。266の土師器の坏と268の支脚は竈内から，267の手捏土器は南西部覆土下層から，265の須恵器の高坏は，床面中央部付近の覆土上層からそれぞれ出土している。

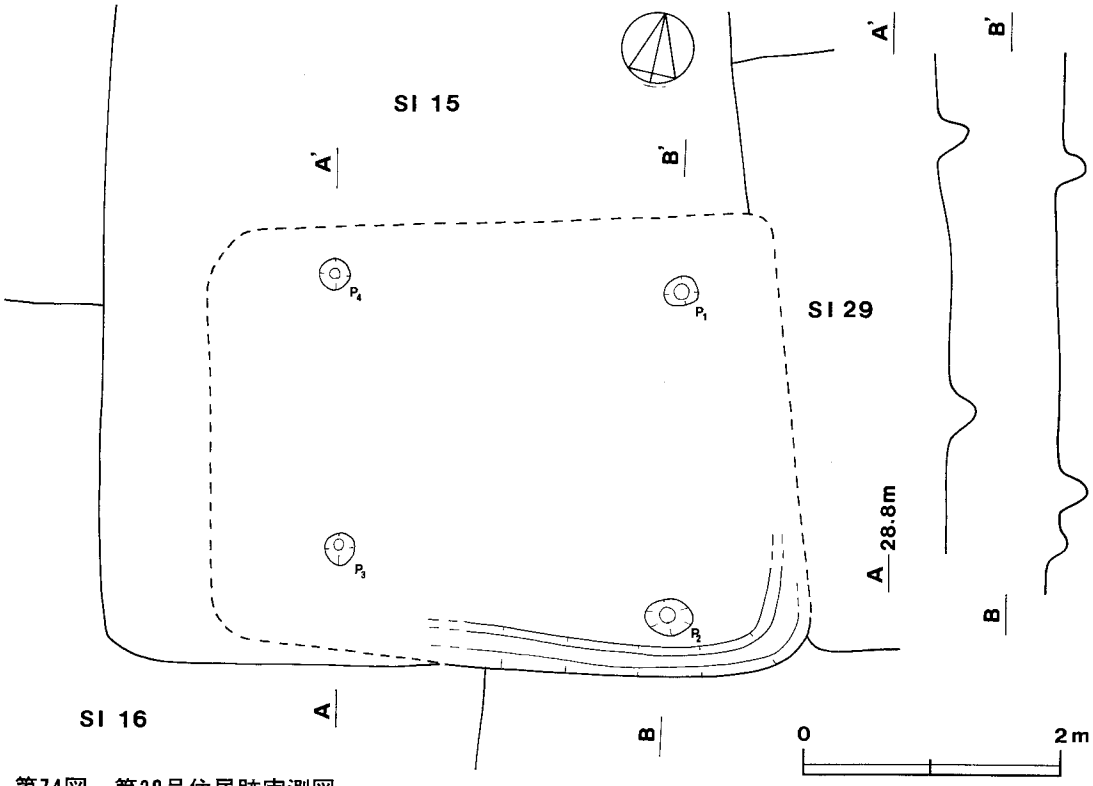
所見　本跡は，重複関係から第14・15・26号住居跡より新しく，第17・30・31号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 265	高坏 須恵器	B (9.5) E (6.8)	裾部は大きく外反する。坏部は内彎気味に立ち上がる。	内・外面摩耗。	砂粒 灰白色 普通	P187 40% 中央部覆土上層
266	坏 土師器	A [11.2] B (4.5)	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は器厚を減じ，ほぼ直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P185 20% 竈
267	手捏土器	A 6.3 B 2.9 C 5.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・雲母 橙色 普通	P186 70% 南西部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
268	支脚	(18.8)	(9.7)	---	---	(1242.0)	80	竈	DP62
269	球状土錘	1.7	2.1	---	6.0	4.9	100	覆土	DP63

第30号住居跡(第74図)



第74図　第30号住居跡実測図

位置　調査区の北東部，C2e8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の大半は第15号住居跡の南部，西部は第16号住居跡の北東部，北東コーナー付近は第29号住居跡の南西壁付近の上位に構築されている。

規模と平面形　長軸(4.56)m，短軸(3.02)m。平面形は明確ではないが，方形を呈するものと推定される。

主軸方向　N-10°-W。

床　第15・16・29号住居跡の上位に構築された貼床部分しか検出されていない。ほぼ平坦で，硬く踏み固められている。

所見　本跡は，削平され，床面しか検出されていない。出土遺物はなく，重複関係から奈良時代以降の住居跡と考えられる。

第31号住居跡(第75図)

位置　調査区の北東部，C2d_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西コーナーは第14号住居跡の南東コーナー付近を，西部は第29号住居跡の北東壁付近を，東壁は第19号住居跡の西壁の一部をいずれも掘り込み，第26号住居跡の南部上面に竈が構築されている。本跡の大半は第17号住居跡のほぼ全域に，南東コーナー付近は第18号住居跡の北西部に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.68m，短軸4.52mの方形を呈している。

主軸方向　N-20°-W。

壁　壁高は16～20cm を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　北東壁を除き検出されている。上幅18～20cm，深さ6～7cm で，断面形はU字状を呈している。

床　第17・18号住居跡に大半を掘り込まれているが，残存している部分は，ほぼ平坦で，硬く踏み固められている。

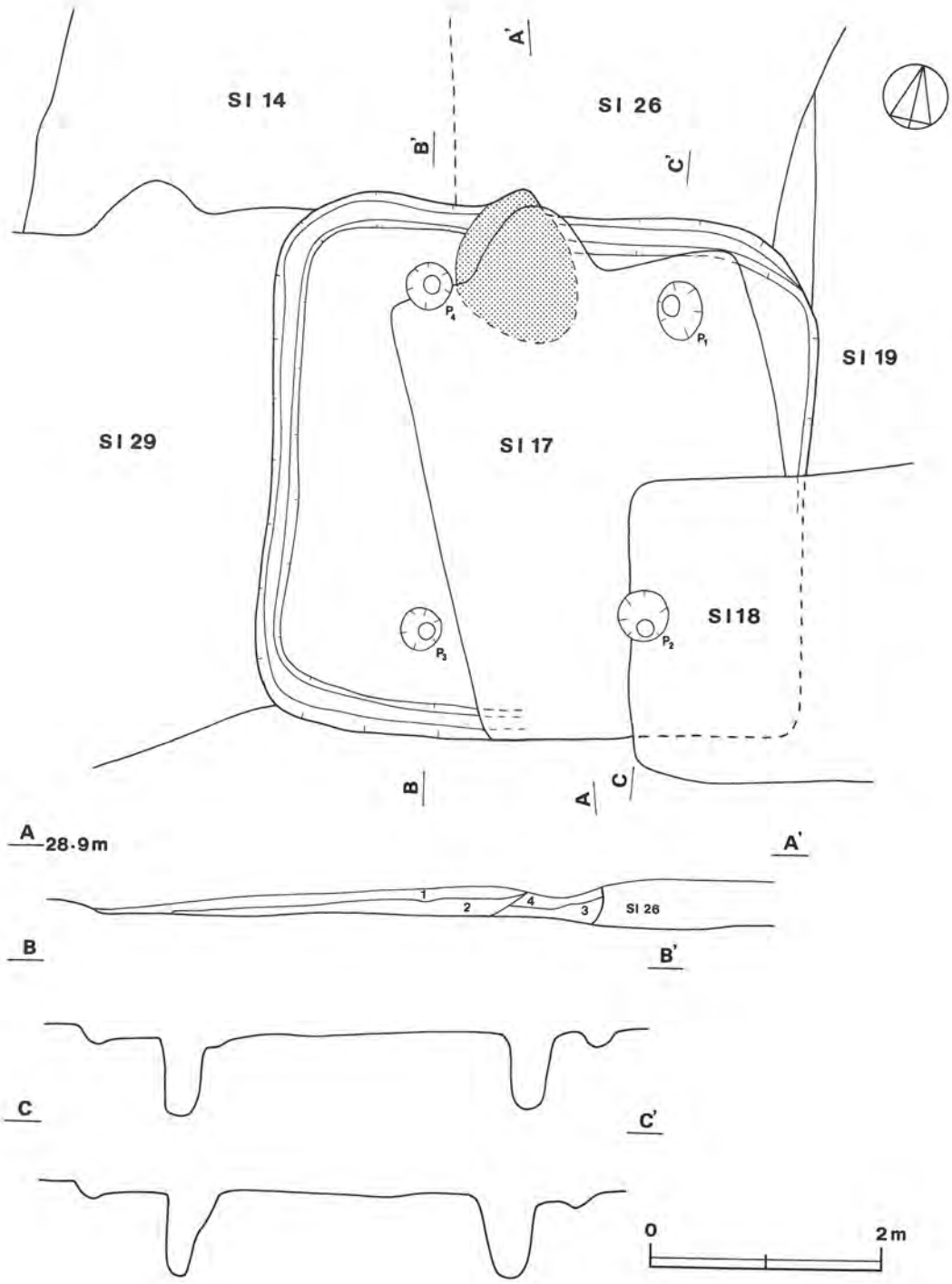
ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径36～50cm，深さ74～80cm で，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央からやや西寄りの壁際に，火床の一部が遺存している。竈の構築材料と考えられる砂まじりの粘土が火床付近に散乱している。

覆土　自然堆積。

遺物　竈及び竈周辺を中心に土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が多量に出土している。276の土師器の高台付皿と275の須恵器の坏は竈周辺の覆土から逆位の状態で，279の紡錘車は南西コーナー付近の覆土下層から正位の状態でそれぞれ出土している。底部に「柏木」と墨書された273の土師器の坏は南東部の覆土下層から逆位の状態で出土している。

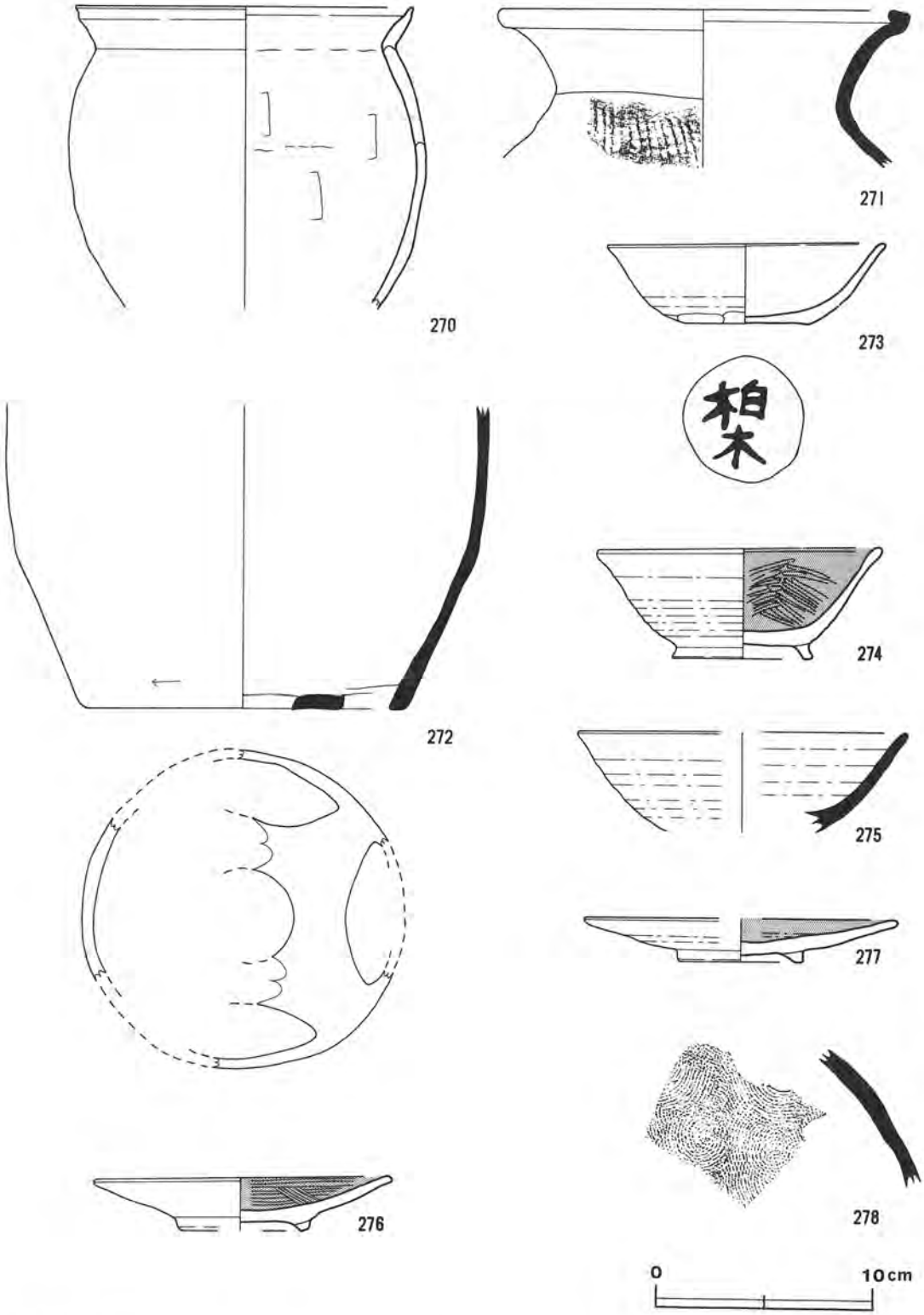
所見　本跡は，重複関係から第14・19・26・29号住居跡より新しく，第17・18号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



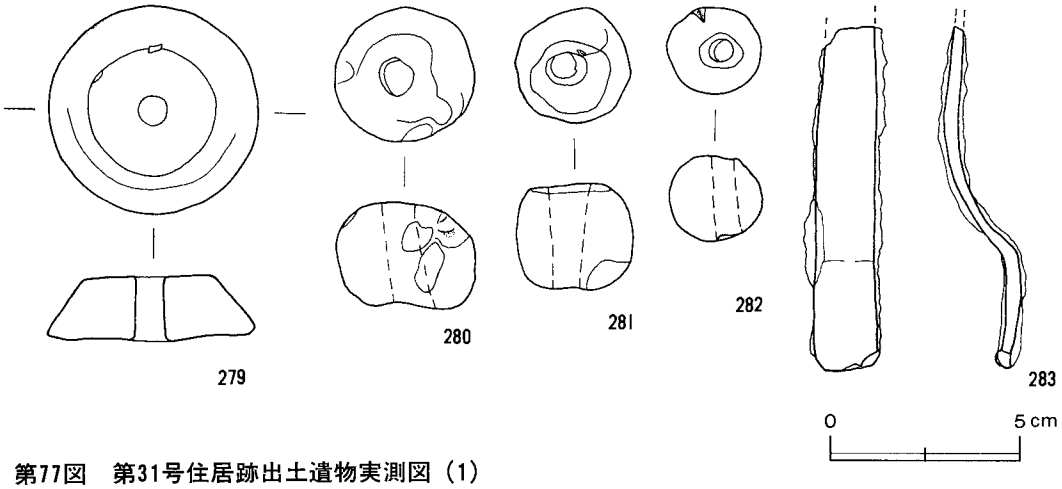
第31号住居跡　土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック少量。
2　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量。
3　褐　　色　ロームブロック多量。
4　暗赤褐色　焼土ブロック多量。

第75図　第31号住居跡実測図



第76図　第31号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）



第77図　第31号住居跡出土遺物実測図（1）

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76・77図 270	甕 土師器	A 15.5 B (14.0)	胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は短く外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部外面上位及び口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P188 40% 北西部覆土下層
271	壺 須恵器	A 18.7 B (7.3)	頸部は外反して立ち上がる。口縁部は段をなし，内側に折り曲がる。	胴部外面上位格子目叩き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰黄色 普通	P192 20% 南東部床面
272	甑 須恵器	B (14.0) C [15.0]	5孔式。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部下位手持ちヘラ削り。	砂粒 灰白色 普通	P96 20% 南東部覆土下層
273	坏 土師器	A (12.8) B 3.8 C 5.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。底部に墨書。	砂粒 浅黄橙色 普通	P193-2 100% 南東部覆土下層 墨書「柏木」
274	高台付坏 土師器	A 13.1 B 5.2 D 6.5 E 0.8	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は丸い。	底部回転ヘラ削り。体部外面横ナデ。内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P189 100% 南東部覆土下層
275	坏 須恵器	A [15.2] B (4.7)	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 浅黄橙色 普通	P193-1 30% 覆土
276	高台付皿 土師器	A 13.8 B 2.5 D 5.9 E 0.5	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台がつく。体部は大きく外傾して立ち上がる。	底部ナデ。体部外面横ナデ。内面ヘラ磨き後，黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 橙色 普通	P190 90% 竈前方覆土下層
277	高台付皿 土師器	A 14.4 B 2.0 D 5.8 E 0.5	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台がつく。体部は大きく外傾して立ち上がる。	外面摩耗。体部内面横ナデ後，黒色処理。高台貼り付け。	砂粒 浅黄橙色 普通	P191 30% 南西部覆土
278	甕 須恵器		甕の胴部片。	外面同心円文叩き目。内面手の平による押さえ痕。	砂粒・礫 灰色 普通	TP12 5% 南西部覆土

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
279	紡錘車	5.6	5.5	1.8	9.0	45.1	100	南西部覆土下層	DP67
280	球状土錘	2.8	3.7	---	10.0	30.3	100	北西部覆土	DP64
281	球状土錘	2.8	3.1	---	11.0	23.4	100	南西部覆土	DP65
282	球状土錘	2.3	2.5	---	7.0	10.2	100	南西部覆土	DP66
283	不明鉄製品	(9.1)	(1.7)	0.4	---	(24.1)	60	北東部覆土	M12

第32号住居跡(第78・79図)

位置　調査区のほぼ中央部，C2j_4区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西壁付近は第33号住居跡の東部及び第185号土坑に，南コーナー付近は第34号住居跡の北部に，竈の東側は第177号土坑に，北東壁は第5・10号掘立柱建物跡に，北部は第9号掘立柱建物跡に，南西壁は第8号掘立柱建物跡に掘り込まれ，第38号土坑の上位に構築されている。

規模と平面形　長軸6.78m，短軸6.72mの方形を呈している。

主軸方向　N-23°-W。

壁　壁高は北西壁で45cm前後，北東・南東壁で10～18cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北東・北西壁下から検出されている。上幅18～22cm，深さ6～9cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　北東部はやや窪むが，全体的にほぼ平坦で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

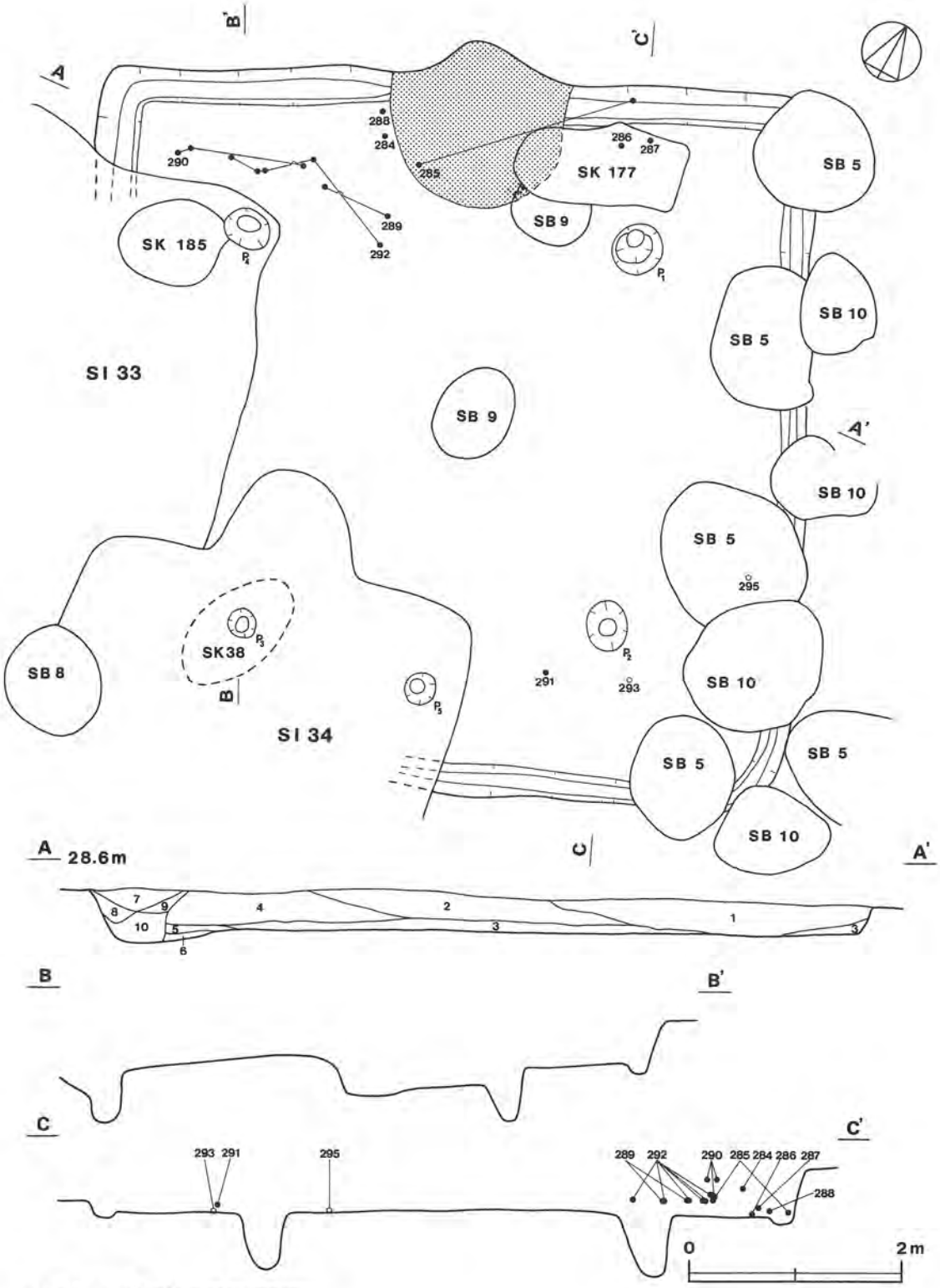
ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径32～48cm，深さ52～62cmで主柱穴，P_5は，径30～32cm，深さ38cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部の壁を32cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ139cm，幅157cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床はほぼ平坦で，僅かに熱をうけている程度である。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

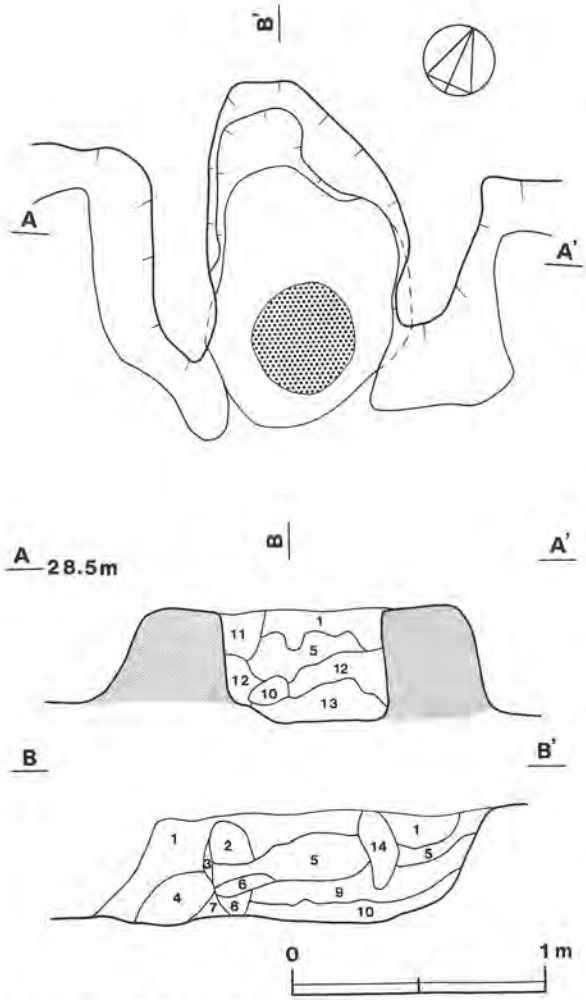
覆土　自然堆積。

遺物　竈周辺の覆土及び床面から土師器(坏，甕，甑)片，土製品(球状土錘)等が少量出土している。289・290・292の土師器の坏は北西部の覆土下層から正位の状態で，285の土師器の鉢は覆土中層から逆位の状態で，286の土師器の高坏は竈の北東部の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第38号土坑より新しく，第33・34号住居跡及び第5・8・9・10号掘立柱建物跡，第177・185号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第78図　第32号住居跡実測図



第32号住居跡　土層解説

1 暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
2 極暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
3 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土ブロック少量。
4 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック少量。
5 黒褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
6 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子多量。
7 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
8 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量。
9 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
10 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。

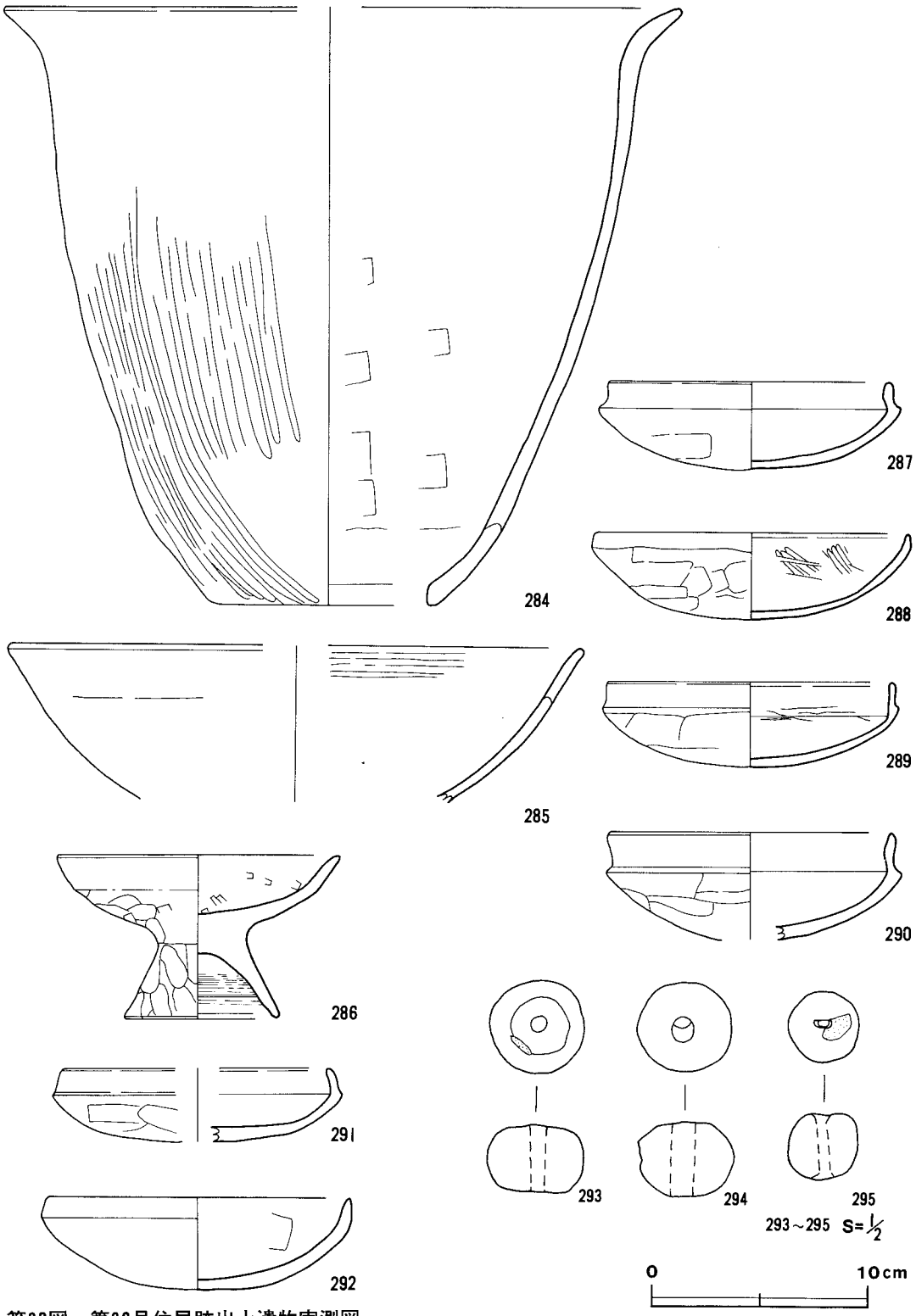
第32号住居跡　覆土層解説

1 明褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2 褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
4 褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量。
5 褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
6 褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量。
7 明褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
8 褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
9 褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
10 褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化粒子少量。
11 褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
12 褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
13 赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量。
14 明褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。

第79図　第32号住居跡竈実測図

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 284	甕 土師器	A [31.3] B 28.0 C 10.4	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	胴部外面中位から下位縦位のヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P194 50% 竈
285	鉢 土師器	A [26.6] B (7.3)	胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P201 20% 覆土中層
286	高坏 土師器	A 13.0 B 7.6 D 7.1 E 3.5	脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は内彎気味に立ち上がる。	脚部外面及び坏部外面下位手持ちヘラ削り。脚部内面及び坏部上位内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P202 90% 北東部床面
287	坏 土師器	A 13.2 B 4.1	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は僅かに内傾する。口唇部は丸い。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P195 100% 北東部覆土下層



第80図　第32号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
288	坏 土師器	A 14.7 B 4.1	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は短く直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P196 100% 竈西側覆土下層
289	坏 土師器	A 13.3 B 4.0	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面上位から口縁部内面ヘラ磨き。口縁部外面横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P197 90% 北西部覆土下層
290	坏 土師器	A 12.9 B (5.0)	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は外反気味に直立する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P198 30% 北西部覆土下層
291	坏 土師器	A [12.3] B 3.4	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P199 30% 南東部覆土下層
292	坏 土師器	A 14.0 B 4.4	丸底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり，口縁部は直立する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P200 60% 北西部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
293	球状土錘	2.2	3.0	---	5.0	18.9	100	南西部床面	DP68
294	球状土錘	2.3	3.0	---	7.0	18.0	100	覆土	DP69
295	球状土錘	2.1	2.2	---	8.0	10.8	100	南東部床面	DP70

第33号住居跡(第81・82図)

位置　調査区のほぼ中央部，C2j_3区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の東部は第32号住居跡の南西壁付近を掘り込み，本跡の南東コーナー付近は第34号住居跡の北西コーナー及び第8号掘立柱建物跡に，北東部は第9号掘立柱建物跡及び第185号土坑に，南西部は第186・187号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸5.18m，短軸4.78mの方形を呈している。

主軸方向　N-16°-W。

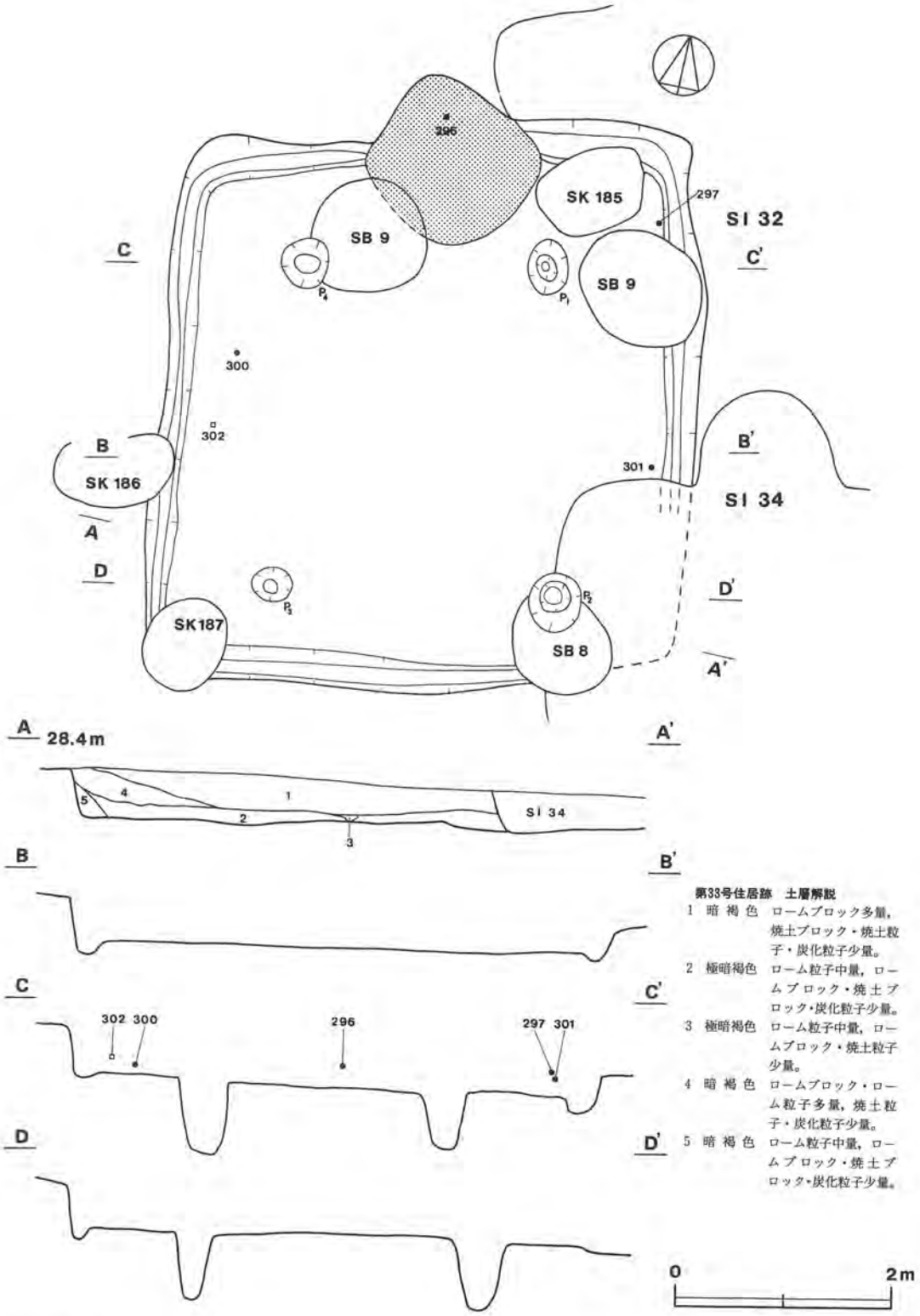
壁　壁高は20～22cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅16～26cm，深さ4～14cmで，断面形は逆台形状を呈している。

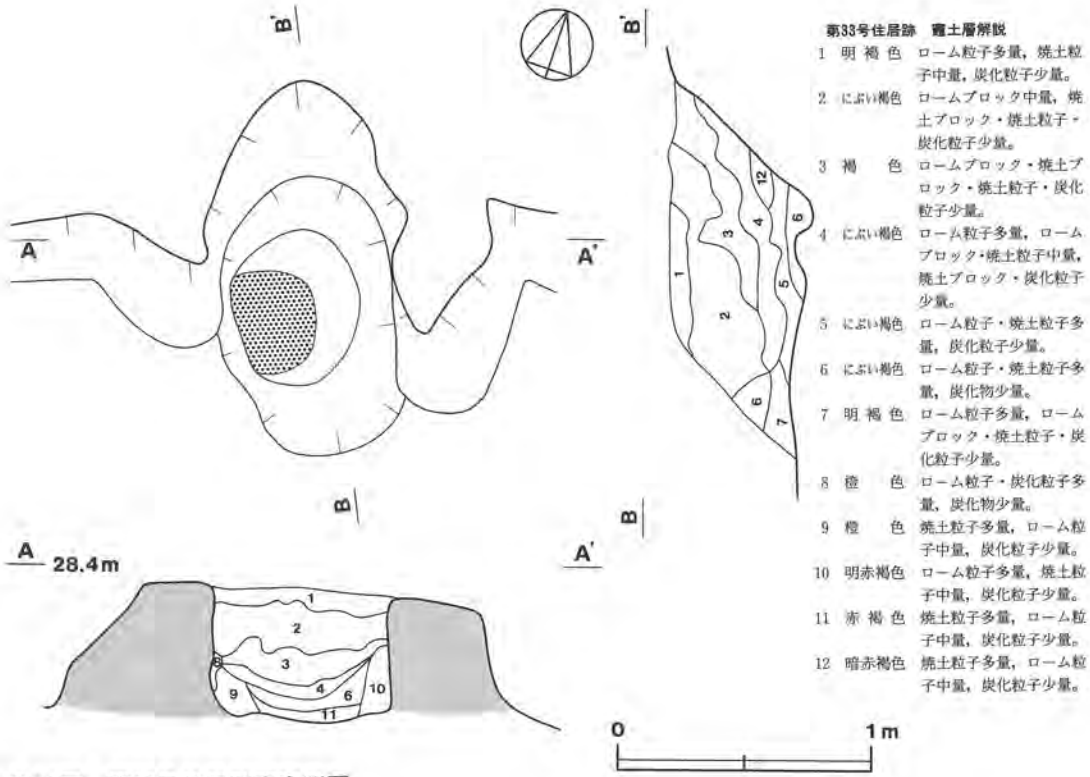
床　ほぼ平坦で，中央部は踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径30～56cm，深さ58～72cmで，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央部の壁を50cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ149cm，幅116cmを測る。天井部は崩落し，左袖部が欠損している。火床は床を12cm程擂鉢状に掘り窪めてあり，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。



第81図　第33号住居跡実測図



第82図　第33号住居跡竈実測図

覆土　自然堆積。

遺物　竈内と覆土の全域から，少量ではあるが土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が出土している。297の須恵器の坏は北東部の覆土上層から逆位の状態で，300の須恵器の坏は北西部の覆土下層から逆位の状態でそれぞれ出土している。296は土師器の甕で竈内から出土している。

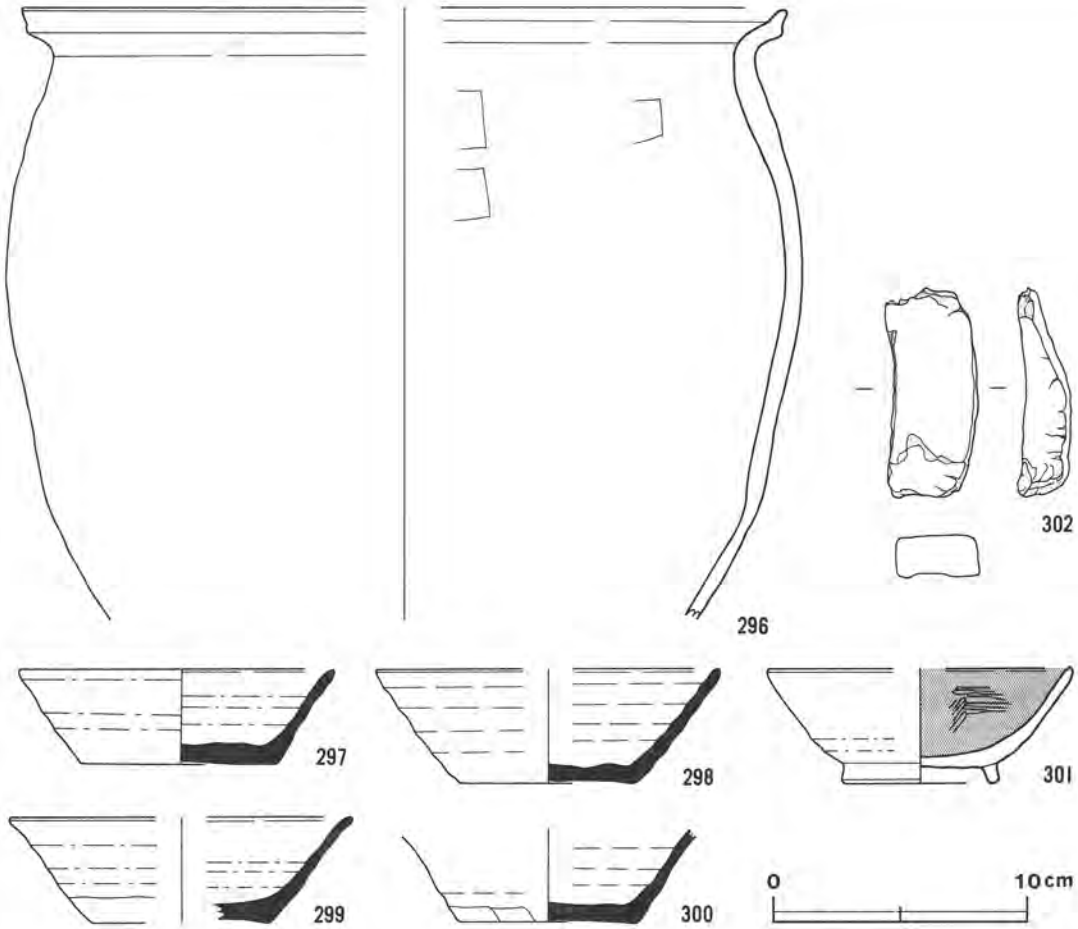
所見　本跡は，重複関係から第32号住居跡より新しく，第34号住居跡及び第8・9号掘立柱建物跡，第185・186・187号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 296	甕 土師器	A [30.0] B (24.2)	胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部は「く」の字状に屈曲する。	胴部内面上位横位のヘラナデ。口頸部内・外面横ナデ。口唇部を外上方につまみ出す。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P203　40% 竈
297	坏 須恵器	A　12.5 B　3.8 C　7.7	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰色 普通	P205　90% 北東部覆土上層
298	坏 須恵器	A [13.6] B　4.5 C [7.0]	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部回転ヘラ切り後ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P204　30% 覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
299	坏 須恵器	A [13.6] B 4.2 C [7.0]	上げ底気味。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P208 20% 覆土
300	坏 須恵器	B (3.7) C [7.0]	平底。体部は外傾し，中位から僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P207 30% 北西部覆土下層
301	高台付坏 土師器	A 12.0 B 4.5 D 6.0 E 0.9	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部ナデ。体部外面横ナデ。内面ヘラ磨き後，黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 橙色 普通	P206 20% 南東部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
302	砥石	8.3	3.6	2.1	---	71.8	100	南西部覆土下層	Q13 凝灰岩



第83図　第33号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡(第84・85図)

位置　調査区のほぼ中央部，D2a₄区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北部は第32号住居跡の南西コーナー付近を，北西コーナーは第33号住居跡の南東コーナー付近を掘り込み,本跡の西部は第8号掘立柱建物跡に掘り込まれている。竈周辺は第38号土坑の上位に構築されている。

規模と平面形　長軸4.20m，短軸4.02mの方形を呈している。

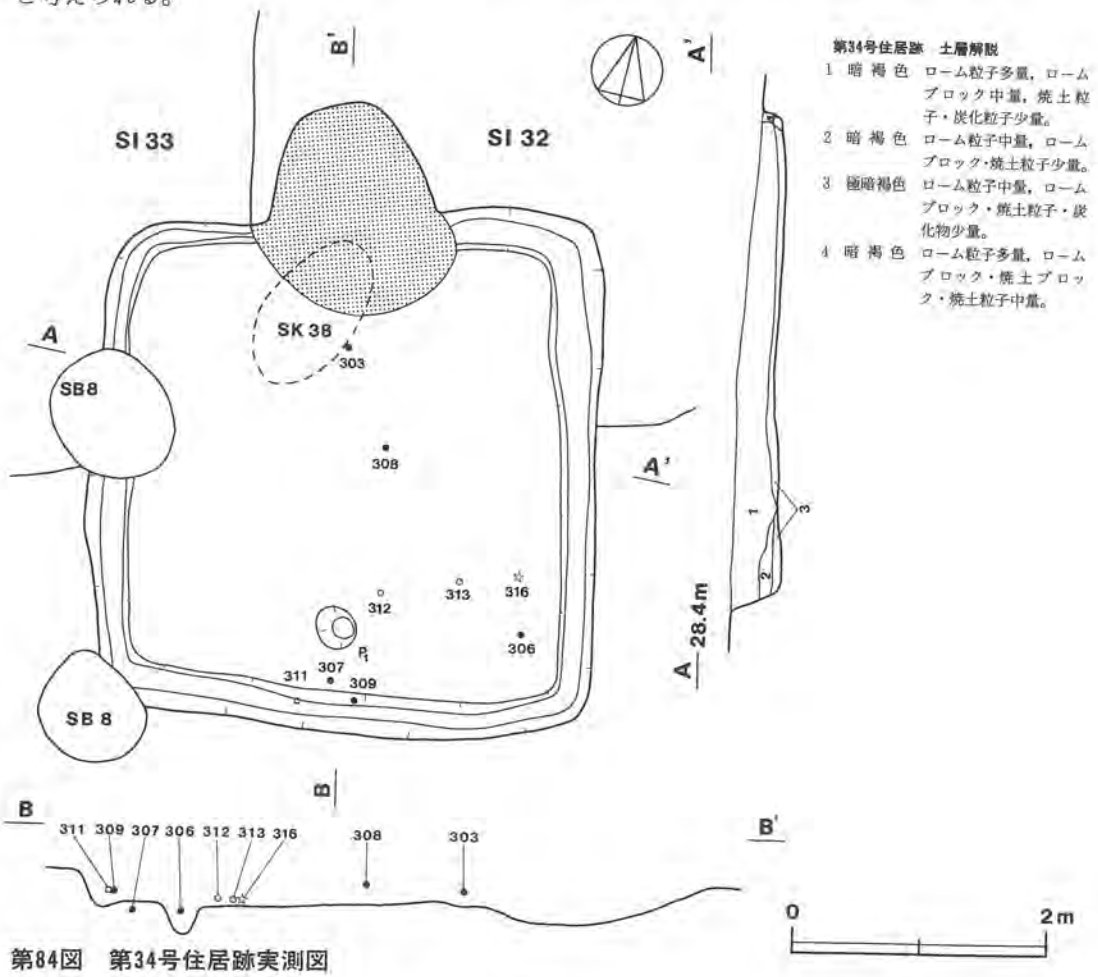
主軸方向　N-12°-W。

壁　壁高は24～26cm を測り，外傾して立ち上がっている。

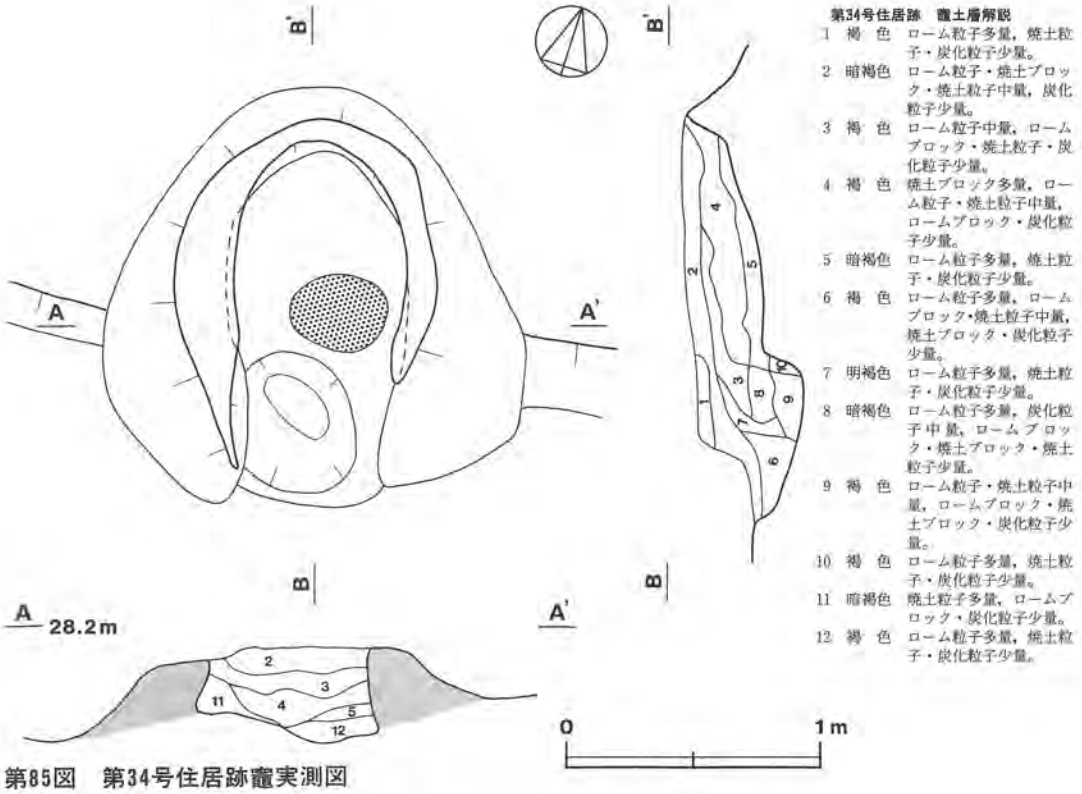
壁溝　壁下を全周している。上幅20～22cm，深さ8～10cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　北西部は第33号住居跡の上位に床を貼っている。ほぼ平坦で，全体的に硬く踏み固められている。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径30～36cm，深さ28cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。



第84図　第34号住居跡実測図



第85図　第34号住居跡竈実測図

竈　北壁中央部の壁を50cm 程壁外へ掘り込み，第32号住居跡の床面上に，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ167cm，幅175cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床はほとんど掘り窪めていない。火床及び袖部の内側は，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

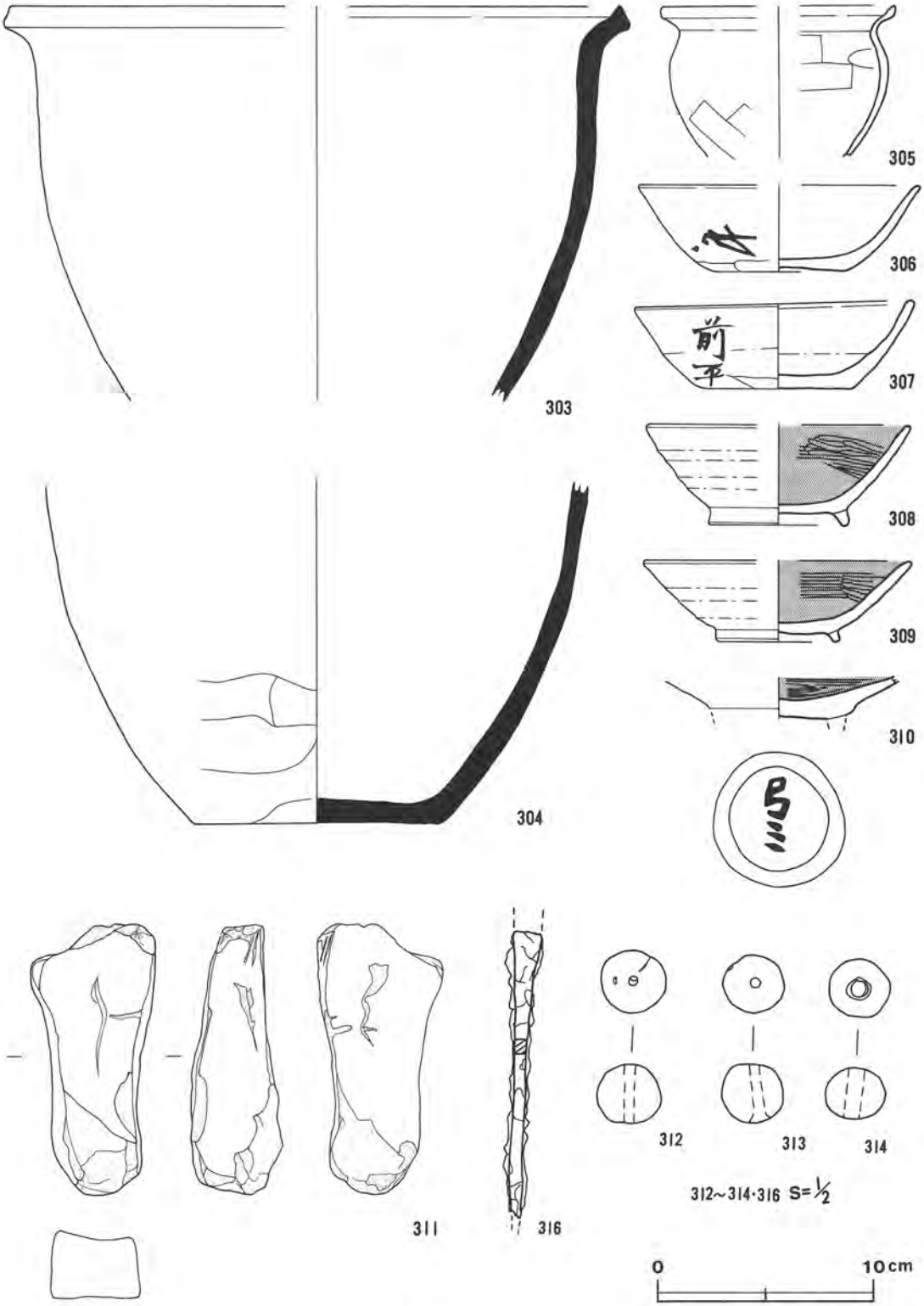
覆土　自然堆積。

遺物　覆土の全域から土師器(坏，甕，高坏)片，須恵器(坏，甕，盤，蓋)片が少量出土している。302の砥石は南西部の覆土下層から出土している。309の土師器の高台付坏は南壁中央際の覆土下層から逆位の状態で，306の土師器の坏は南東部の床面から正位の状態でそれぞれ出土している。307の坏と310の高台付坏は墨書土器で，それぞれ体部外面に「前平」，底部に「弓三」の文字がみられる。

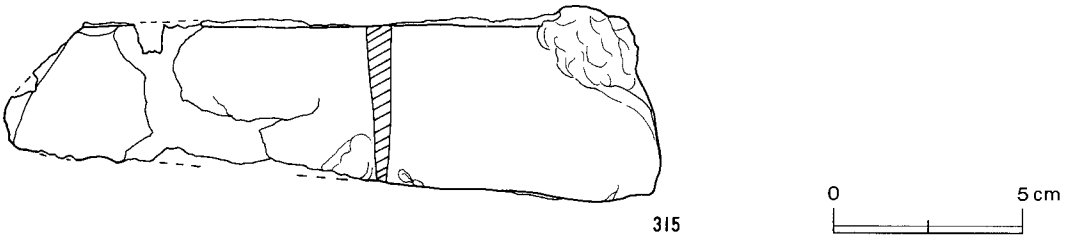
所見　本跡は，重複関係から第32・33号住居跡，第38号土坑より新しく，第8号掘立柱建物跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第86・87図 303	甕 須　恵　器	A [28.4] B (18.4)	胴部最大径を上位にもつ。口縁部は短く外反する。口唇部は尖る。	胴部内・外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P210-A　20% 竈



第86図　第34号住居跡出土遺物実測図（1）



第87図　第34号住居跡出土遺物実測図（2）

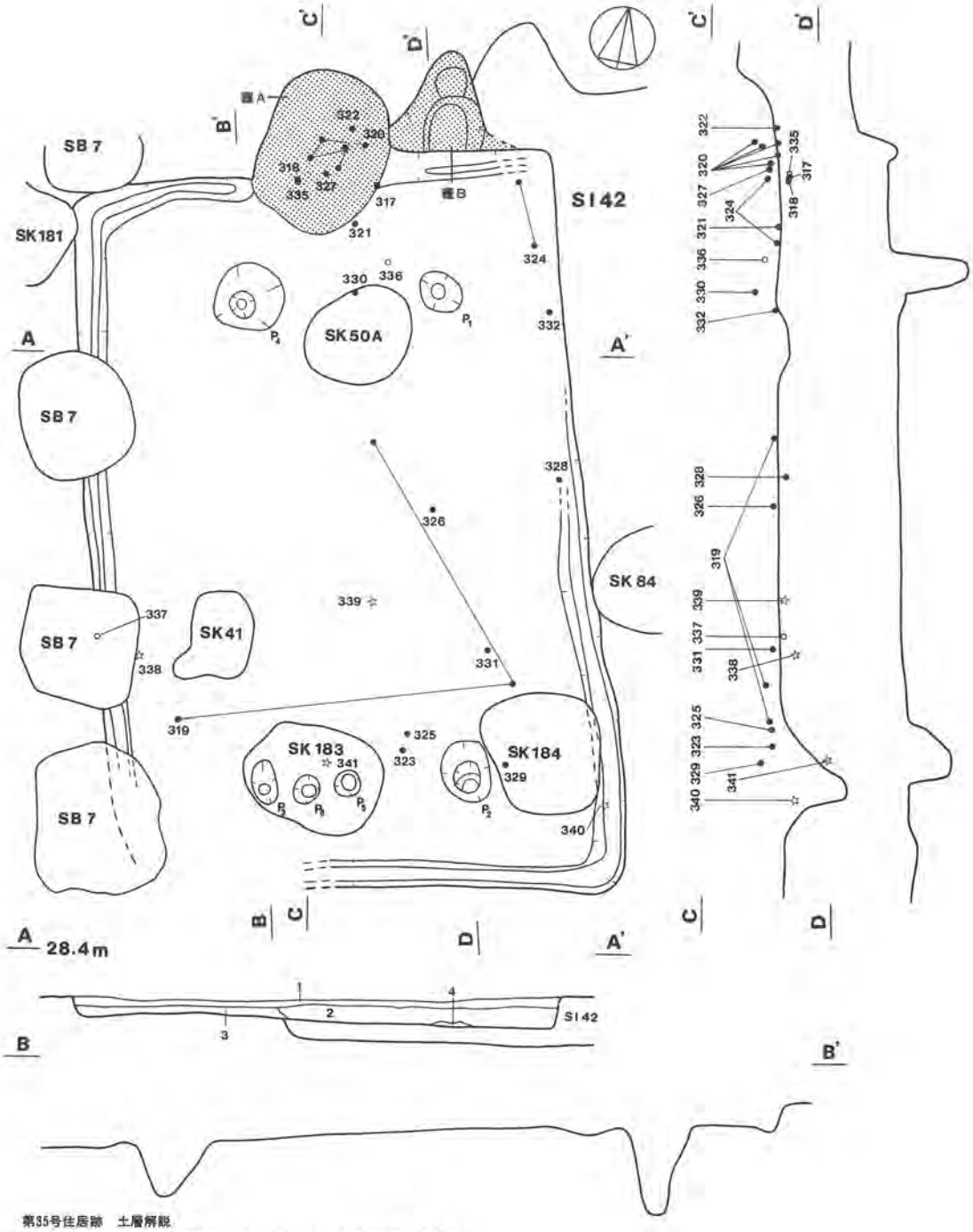
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
304	甕 須恵器	B (15.9) C [11.6]	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部ナデ。胴部外面下位横位の手持ちヘラ削り。胴部内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P210-B 20% 覆土
305	甕 土師器	A [10.8] B (7.1)	胴部最大径を上位にもつ。口縁部は外反し，口唇部は外上方に僅かにつまみ出す。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面上位ヘラナデ。口唇部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P211 20% 覆土
306	坏 土師器	A [13.0] B 4.0 C [6.0]	上げ底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部ナデ。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P212 20% 南東部床面 墨書(判読不能)
307	坏 土師器	A 12.9 B 4.2 C 6.8	体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は丸い。	底部糸切り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。体部外面に墨書。	砂粒 浅黄橙色 普通	P216 100% 南壁中央際床面 墨書「前平」
308	高台付坏 土師器	A [12.1] B 4.7 D 6.4 E 0.8	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部ナデ。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P213 60% 中央部覆土上層
309	高台付坏 土師器	A [12.4] B 3.8 D 5.6 E 0.5	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部ナデ。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P214 60% 南壁中央際覆土下層
310	高台付皿 土師器	B (1.9)	平底。高台剝離。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P215 30% 覆土 墨書「弓三」

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
311	砥石	12.6	5.8	4.3	---	292.5	100	南壁中央際	Q14 凝灰岩
312	球状土錘	1.8	2.0	---	3.0	6.8	100	南東部覆土下層	DP71
313	球状土錘	1.8	1.9	---	7.0	5.9	100	南東部覆土下層	DP72
314	球状土錘	1.6	1.9	---	5.0	4.9	100	覆土	DP73
315	鎌	(17.4)	4.7	0.7	---	(199.3)	40	覆土	M13
316	釘	(8.9)	(1.0)	(0.5)	---	(10.3)	60	南東部覆土下層	M14

第35号住居跡(第88・89図)

位置　調査区の北東部，C2h_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東部は第42号住居跡の西部を掘り込み，西壁付近は第7号掘立柱建物跡に，竈の前方は第50A号土坑に，北西コーナー付近は第181号土坑に，東壁の一部は第84号土坑に，南東



第35号住居跡　土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子中量，焼土ブロック少量。

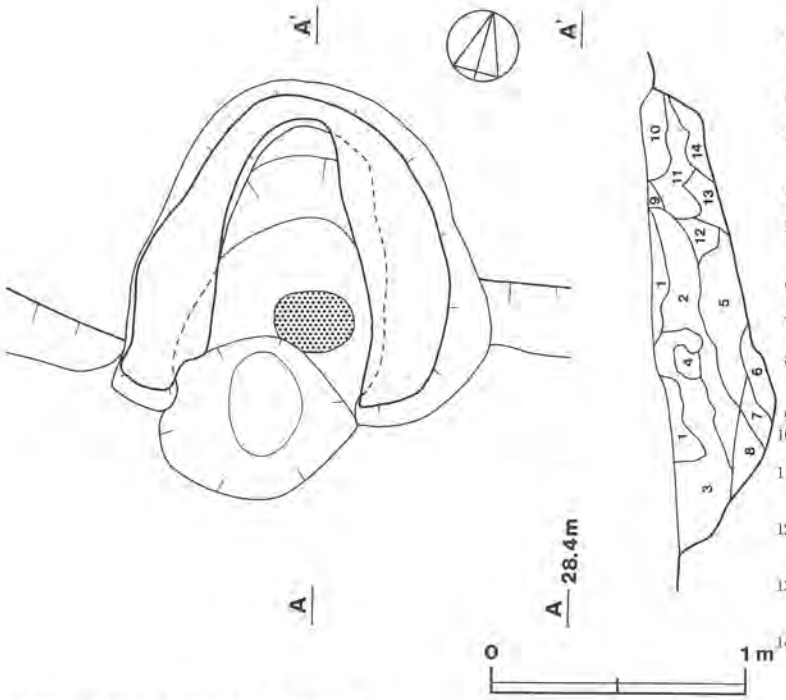
2　極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。

3　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量。

4　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子少量。

0　2m

第88図　第35号住居跡実測図



第35号住居跡　竈A土層解説

1	褐　色	ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3	赤褐色	ローム粒子多量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
4	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
5	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量，ロームブロック少量。
6	暗赤褐色	焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子少量。
7	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
8	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量。
9	にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子少量。
10	暗褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・ローム粒子少量。
11	暗褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量。
12	暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
13	極暗褐色	焼土粒子多量，焼土ブロック中量，ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。
14	暗褐色	ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。

第89図　第35号住居跡竈A実測図

コーナー付近は第184号土坑に、南壁中央際は第183号土坑，南西部は第41号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸6.58m，短軸4.50mの長方形を呈している。

主軸方向　N-11°-W。

壁　壁高は20～52cm を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　北東コーナー付近を除き検出されている。上幅18～20cm，深さ6～8cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　凸凹で，北東部は第42号住居跡の上面に貼床をしている。貼床部分を除き，硬く踏み固められている。

ピット　6か所(P_1～P_6)検出されている。P_1～P_4は，径34～60cm，深さ43～78cm で，規模及び配列から主柱穴である。P_5は，径22～24cm，深さ58cm で，出入口施設に伴うピットである。P_6は，径22～26cm，深さ54cm で，P_5の補助柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部(A)と北壁中央部からやや東寄り(B)に2か所検出され，竈の造り替えが行われたことが窺われる。Aの竈は，壁を84cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ167cm，幅141cm を測る。天井部は崩落し，袖部が遺存している。袖部の内側からは，袖部を補強するために用いられたと考えられる土師器の甕が逆位に置かれた状態で検出されている。火床は床面を6cm 程掘り窪め，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩

やかに外傾して立ち上がっている。Bの竈は，壁を55cm程掘り込んで構築されている。火床は埋め戻され貼床されていることからBの竈の方が古い。

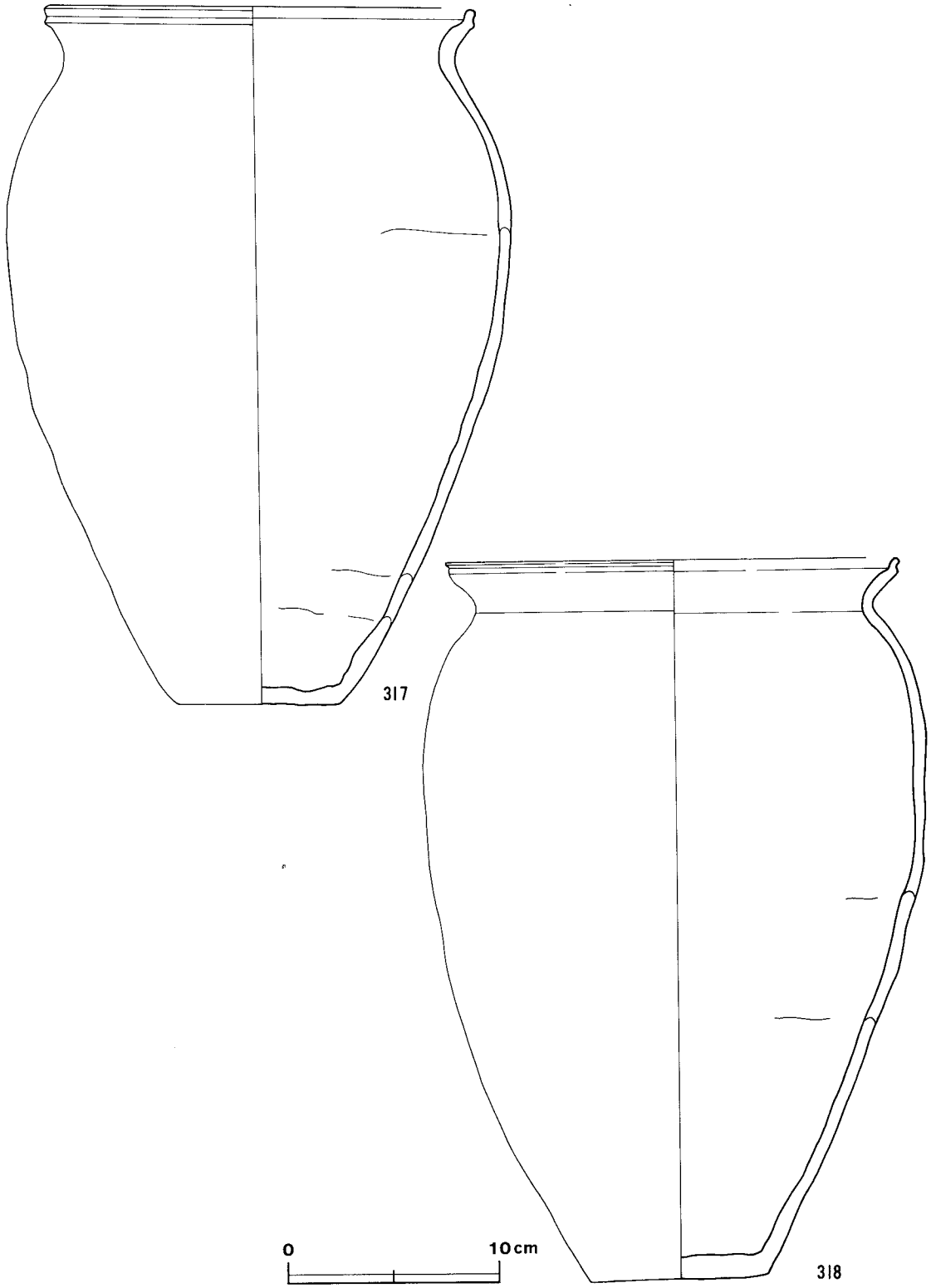
覆土　自然堆積。

遺物　東部の覆土と竈内から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片，手捏土器，鉄製品(釘)等が多量に出土している。317と318の土師器の甕は竈内から逆位の状態で，319と320の須恵器の甕も同じく竈内から出土している。338の釘は南西部床面から，339の釘は南東部床面から，それぞれ出土している。

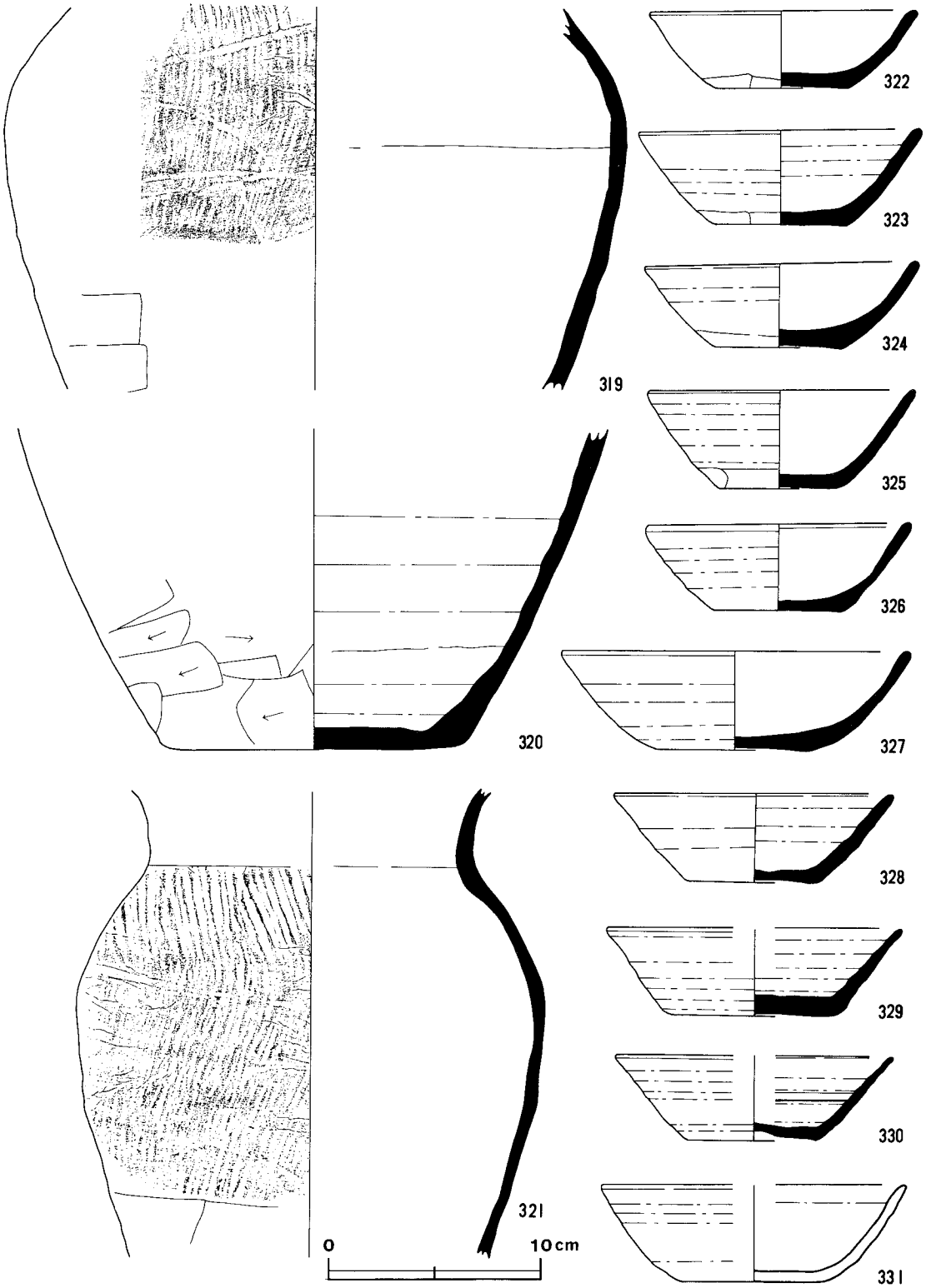
所見　本跡は，重複関係から第42号住居跡より新しく，第7号掘立柱建物跡及び第41・50A・84・181・183・184号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表

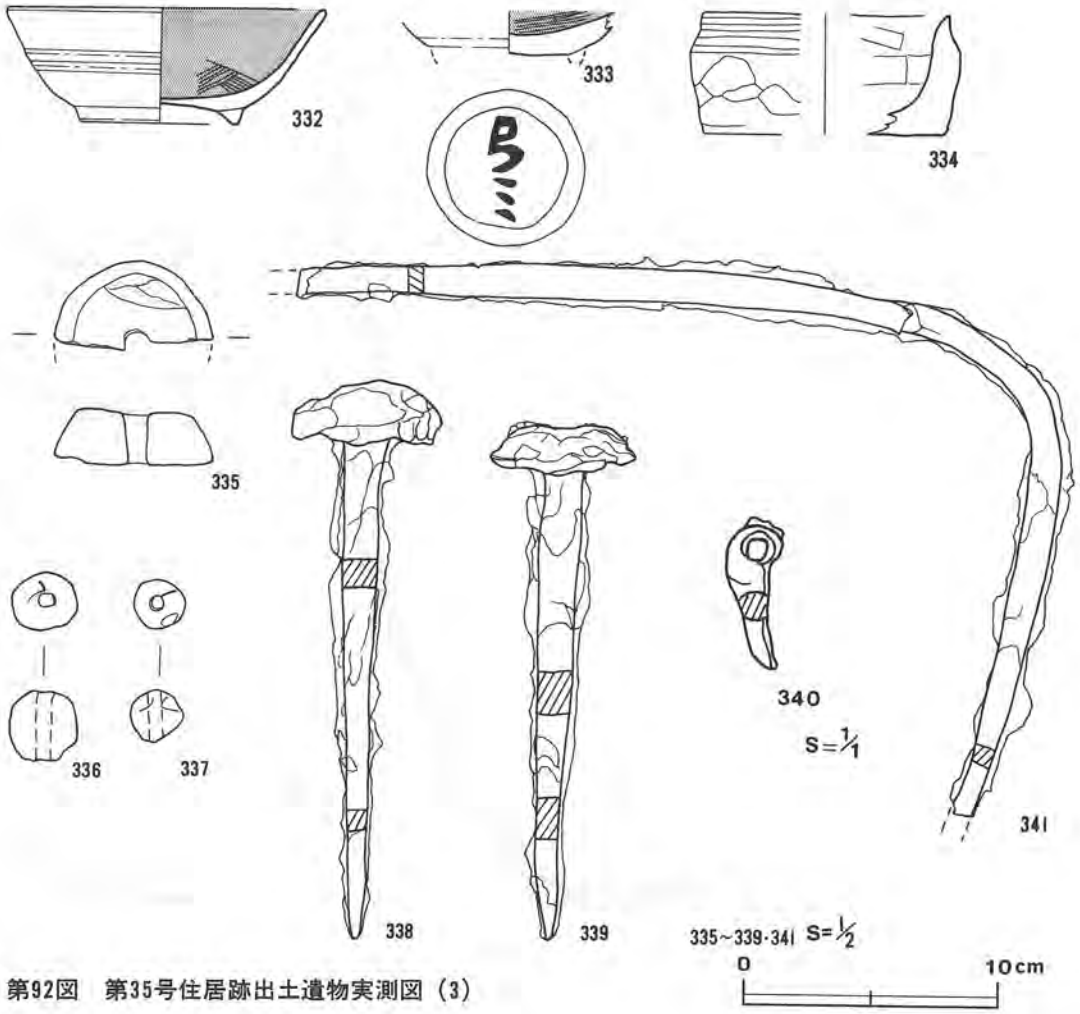
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90～92図 317	甕 土師器	A 20.0 B 33.3 C 7.6	平底。胴部は内彎し，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部外面剝離。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	P217 60% 竈
318	甕 土師器	A 21.4 B 34.3 C 8.4	平底。胴部は内彎し，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P218 60% 竈
319	甕 須恵器	B (18.1)	胴部最大径を上位にもつ。	胴部下位手持ちヘラ削り。上位叩き目を施した後，横走する沈線を巡らす。内面横位の横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P219 20% 竈
320	甕 須恵器	B (15.2) C 14.0	平底。内部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P228 30% 竈
321	甕 須恵器	B (22.2)	胴部最大径を上位にもつ。口縁部は外反気味に立ち上がる。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。中位から上位平行叩き目。	砂粒・礫 にぶい黄色 普通	P229 20% 竈前方床面
322	坏 須恵器	A 12.4 B 3.7 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P220 100% 竈
323	坏 須恵器	A 13.2 B 4.6 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P221 80% 南東部床面
324	坏 須恵器	A 12.9 B 4.2 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P222 60% 北東コーナー付近床面
325	坏 須恵器	A 12.6 B 4.7 C 5.7	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P223 80% 南東部床面
326	坏 須恵器	A 12.4 B 4.3 C 6.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は丸い。	底部ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P224 70% 北東部床面
327	坏 須恵器	A 16.2 B 4.7 C 7.2	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は丸い。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P230 70% 竈



第90図　第35号住居跡出土遺物実測図（1）



第91図　第35号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）



第92図　第35号住居跡出土遺物実測図（3）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
328	坏 須恵器	A 13.1 B 4.4 C 6.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 黄灰色 普通	P231 90% 北東部床面
329	坏 須恵器	A [13.8] B 4.1 C 8.0	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P232 60% 南東部覆土下層
330	坏 須恵器	A [13.1] B 4.0 C 6.2	上げ底気味。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい黄橙色 普通	P233 50% 北東部覆土上層
331	坏 土師器	A [14.4] B 4.7 C 6.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部外面摩耗。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい黄橙色 普通	P234 30% 南東部覆土下層
332	高台付坏 土師器	A 12.4 B 4.6 D 6.2 E 0.7	上げ底で，直立する短い高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部ナデ。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P225 70% 北東部床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
333	高台付坏 土師器	B (1.8)	平底。高台剝離。	底部ナデ。内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 浅黄色 普通	P226 10% 北西部覆土 墨書「弓三」
334	手捏土器	A [9.6] B 4.8 C [9.4]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口唇部は尖る。	体部外面雑な手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P227 20% 覆土

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
335	紡錘車	4.2	(2.4)	1.5	7.0	(15.3)	50	竈	Q23 凝灰岩
336	球状土錘	1.9	1.8	---	5.0	4.2	100	北東部覆土中層	DP74
337	球状土錘	1.4	1.4	---	4.0	1.8	100	南西部床面	DP75
338	釘	14.8	4.0	0.8	---	89.7	100	南西部床面	M15
339	釘	13.7	3.8	1.2	---	79.4	100	南東部床面	M16
340	不明鉄製品	2.0	0.8	0.4	---	1.9	100	南東部床面	M17
341	不明鉄製品	(32.5)	(0.9)	(0.6)	---	(84.5)	50	南西部床面	M18

第36号住居跡(第93・94図)

位置　調査区の北東部，C$2i_7$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南東コーナーは第39号住居跡の北西コーナー付近に掘り込まれ，北壁は第37号住居跡の南壁付近を掘り込んでいる。南壁付近は第38号住居跡の北部と第1・2号掘立柱建物跡の上位に構築され，南西コーナー付近は第5・10号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸8.02m，短軸7.48mの方形を呈している。

主軸方向　N-7°-W。

壁　壁高は18～54cm を測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

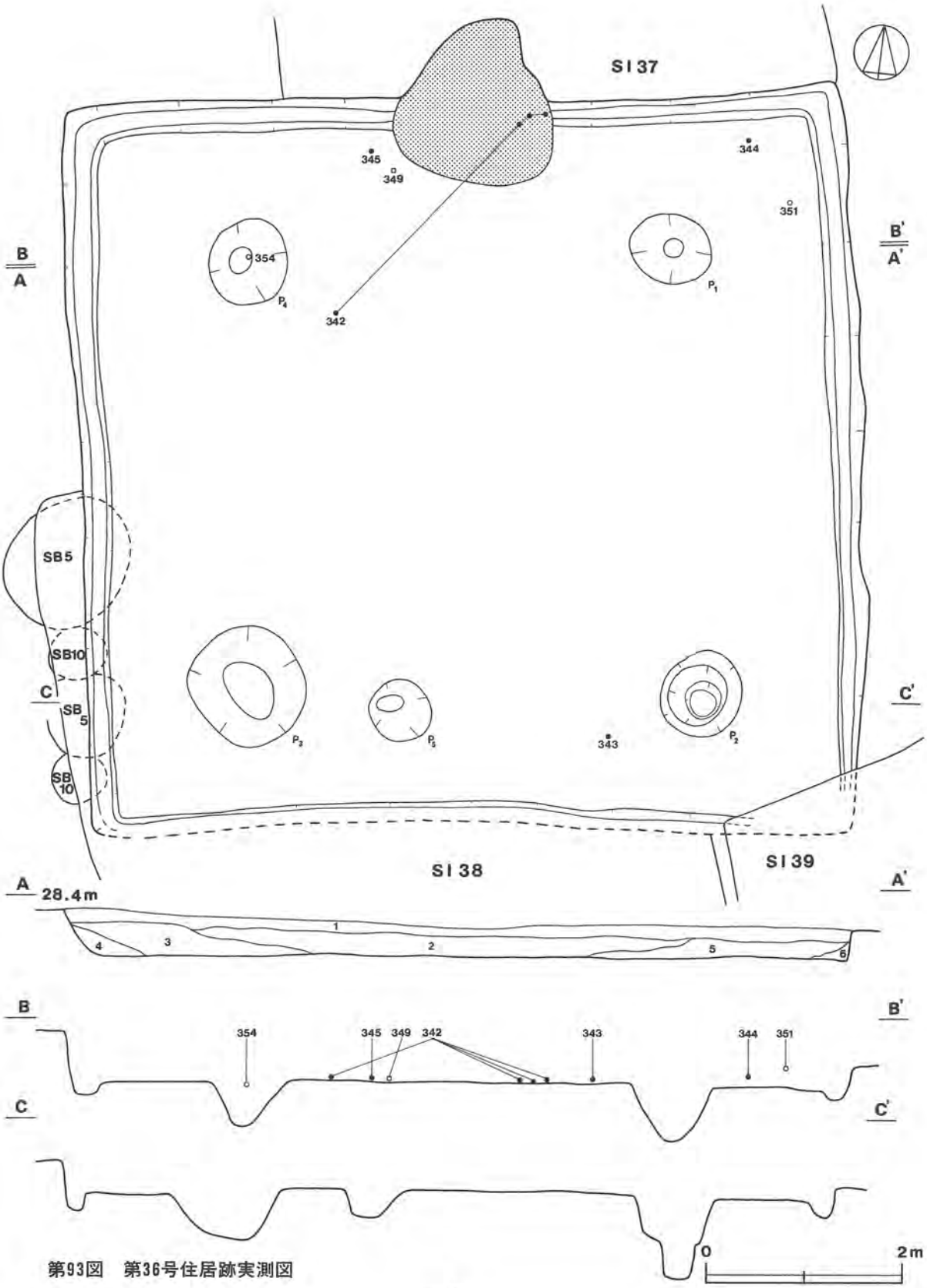
壁溝　南部を除き，壁下を全周している。上幅20～26cm，深さ10～20cm で，断面形はU字状を呈している。

床　南西部は第38号住居跡の上面に，ロームと黒色土で貼床をしている。ほぼ平坦で，中央部から竈の前面にかけては硬く踏み固められ堅緻である。

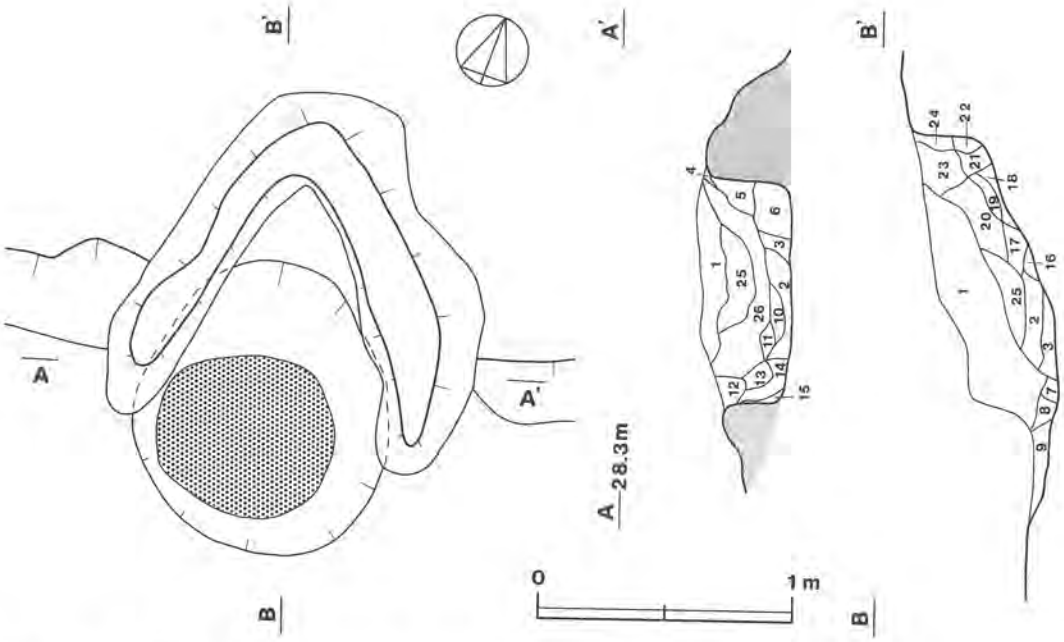
ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径70～90cm，深さ50～90cm で主柱穴，P_5は，径64～66cm，深さ30cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部の壁を95cm 程壁外へ掘り込み，第37号住居跡の南西部の床面上に，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ186cm，幅142cm を測る。天井部は崩落し，僅かに袖部が遺存している。火床は床面を10cm 程掘り窪め，焼土と灰が厚く堆積している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。



第93図　第36号住居跡実測図



第36号住居跡　土層解説

1 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量。
2 黒褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3 黒褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4 黒褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量。
5 極暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
6 極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。

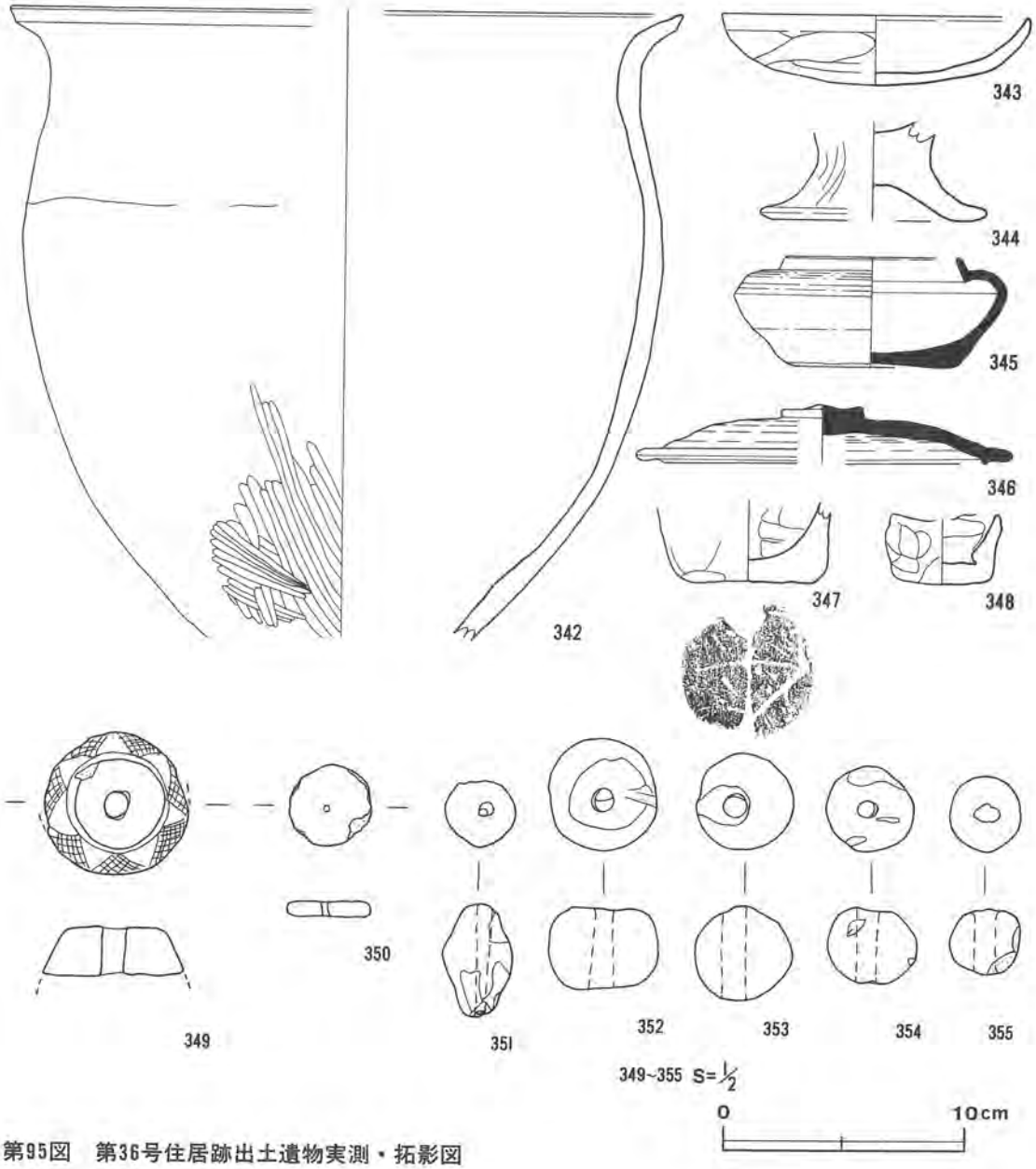
第36号住居跡　竈土層解説

1 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量。
2 極暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量，ロームブロック・ローム粒子少量。
3 にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量，ロームブロック・ローム粒子少量。
4 褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
5 にぶい褐色　ローム粒子・炭化粒子少量。
6 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量。
7 明褐色　ロームブロック・ローム粒子多量。
8 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
9 褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
10 暗褐色　焼土粒子中量，焼土ブロック少量。
11 極暗褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
12 暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量。
13 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
14 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量。
15 暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
16 褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
17 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
18 暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
19 暗褐色　ロームブロック中量，ローム粒子・焼土粒子少量。
20 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量。
21 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
22 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
23 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
24 暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量。
25 暗褐色　ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
26 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。

第94図　第36号住居跡竈実測図

遺物　北部の覆土を中心に土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片等が少量出土している。342の土師器の甕は竈内と床面から，343の土師器の坏は南東部の床面から出土している。350の有孔円板は覆土中から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第39号住居跡及び第5・10号掘立柱建物跡より古く，第37・38号住居跡及び第1・2号掘立柱建物跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から奈良時代の住居跡と考えられる。



第95図　第36号住居跡出土遺物実測・拓影図

第36住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 342	甕 土師器	A 28.1 B (26.7)	胴部は内彎し，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方に僅かにつまみ出す。	胴部外面下位ヘラ磨き。胴部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P235 40% 床面
343	坏 土師器	A 12.8 B 3.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P236 20% 南東部床面
344	高坏 土師器	D [9.4] E (4.2)	脚部は「ハ」の字状に大きく開き端部はほぼ水平に屈曲する。	脚部外面手持ちヘラ削り。内面ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P241 10% 北東部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
345	壺 須恵器	A 7.2 B 4.7 C 6.5	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，上位で大きく内彎する。頸部は短く「ハ」の字状に開く。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。胴部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P239 70% 竈西側床面
346	蓋 須恵器	A [15.8] B 2.5 F 3.4 G 0.6	天井部は低く，緩やかな傾斜で口縁部に至る。口縁部はほぼ水平に屈曲する。内側に短く垂下するかえりがつく。扁平なつまみがつく。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい黄橙色 普通	P240 30% 覆土
347	手捏土器	B (3.5) C 5.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下位手持ちヘラ削り。体部内面ヘラナデ。底部に木葉痕。	砂粒 橙色 普通	P237 50% 覆土
348	手捏土器	A [4.4] B 3.0 C 3.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部ナデ。底部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P238 70% 覆土

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
349	紡錘車	4.1	4.1	(1.4)	7.0	(29.2)	90	竈西側床面	Q16 粘板岩
350	有孔円板	2.4	2.3	0.4	2.0	(3.6)	70	覆土	Q15 滑石
351	管状土錘	3.2	2.0	1.9	4.0	8.6	100	北東部覆土上層	DP76
352	球状土錘	2.3	3.1	---	7.0	24.6	100	覆土	DP77
353	球状土錘	2.7	2.8	---	7.0	18.1	100	覆土	DP78
354	球状土錘	2.2	2.5	---	6.0	(12.1)	90	北西部床面	DP79
355	球状土錘	1.9	2.0	---	8.0	(7.3)	80	覆土	DP80

第37号住居跡(第96・97図)

位置　調査区の北東部，C2h_7区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南壁付近は第36号住居跡の北壁に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸5.56m，短軸5.54mの方形を呈している。

主軸方向　N-12°-W。

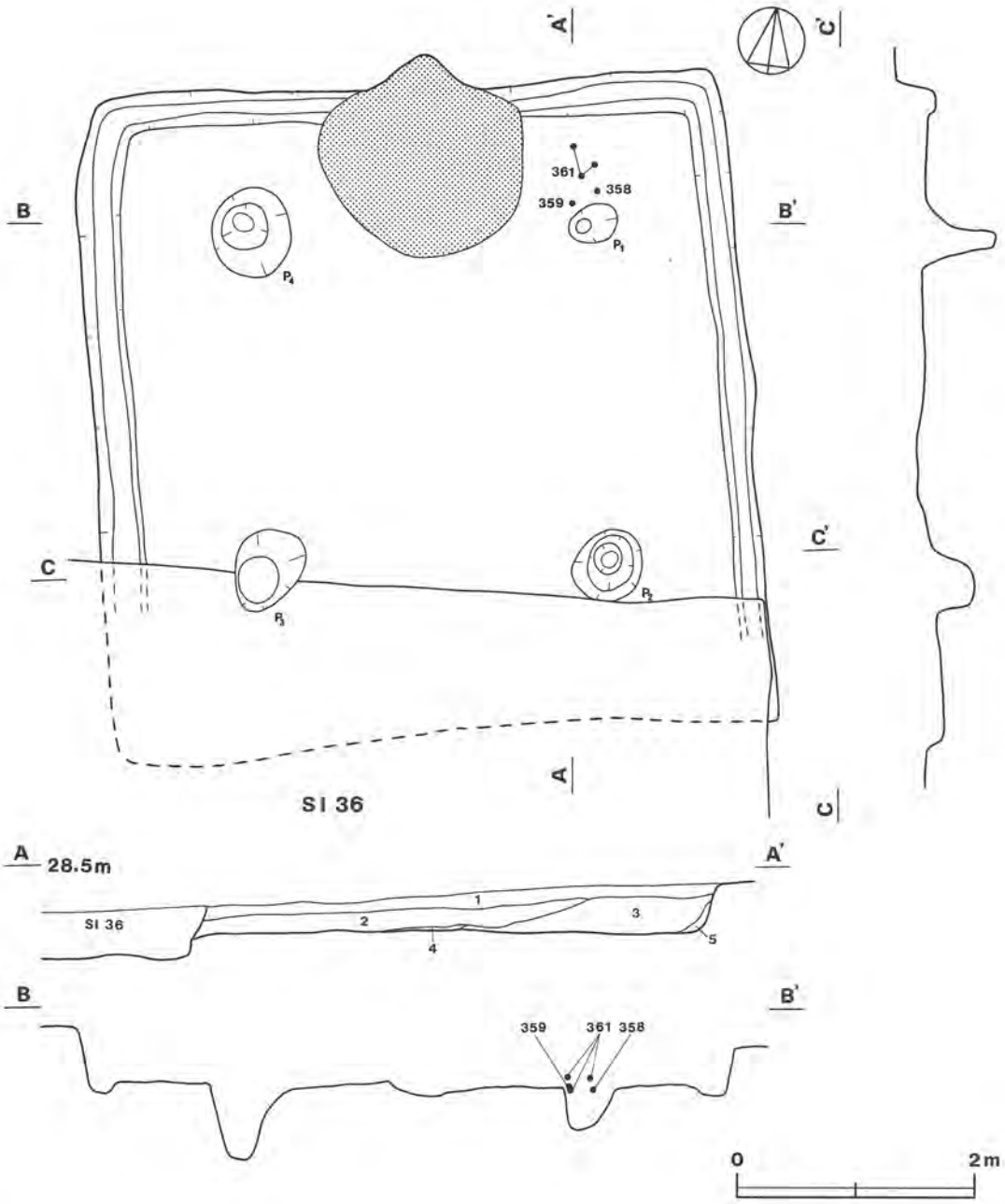
壁　壁高は26～44cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　南壁下を除き検出されている。上幅22～32cm，深さ8～14cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　ほぼ平坦で，中央部から竈の前方にかけて踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は，径34～74cm，深さ39～64cmで，いずれも主柱穴である。

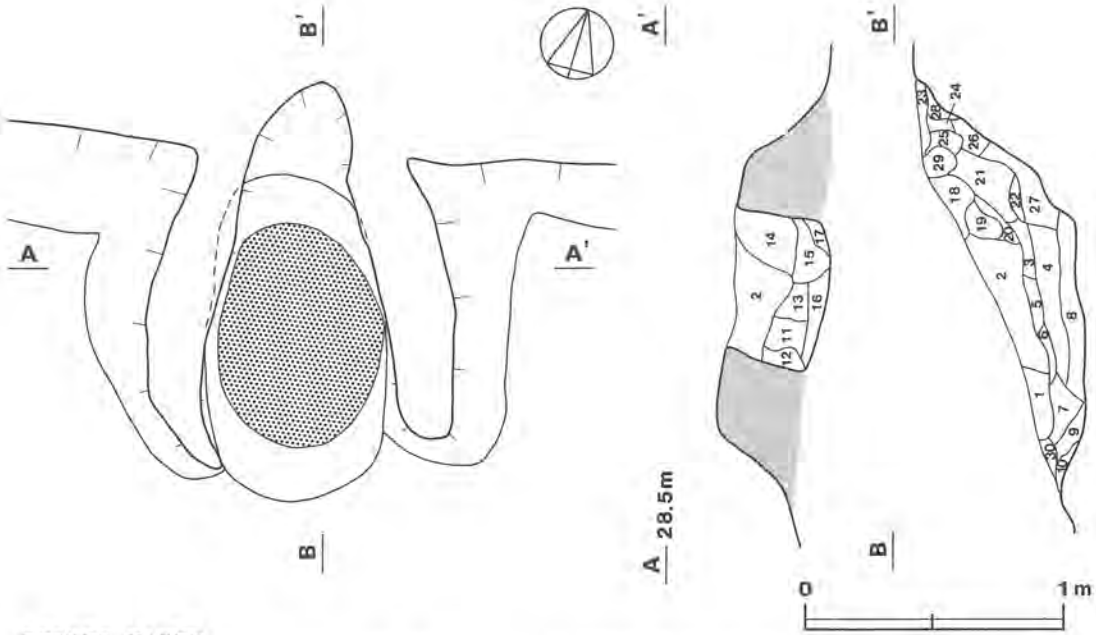
竈　北壁中央部の壁を31cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ167cm，幅165cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を



第37号住居跡　土層解説

1 暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック・焼土粒子少量。
2 暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3 暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量。
4 褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
5 暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック少量。

第96図　第37号住居跡実測図



第37号住居跡　竈土層解説

1　にぶい褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
2　暗 褐 色　焼土ブロック・焼土粒子中量、ロームブロック・ローム粒子少量。
3　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子少量。
4　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量。
5　暗 褐 色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
6　黒 褐 色　焼土粒子・炭化粒子中量，ロームブロック少量。
7　黒 褐 色　焼土粒子・炭化粒子少量。
8　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
9　暗 褐 色　焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
10　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量。
11　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子少量。
12　暗赤褐色　焼土粒子多量。
13　極暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量。
14　暗 褐 色　焼土粒子中量，ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック少量。
15　極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量，炭化物少量。
16　極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量，ロームブロック少量。
17　暗 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化物少量。
18　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子少量。
19　褐　　色　ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量。
20　暗 褐 色　焼土粒子中量，ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。
21　暗 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量。
22　極暗褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量。
23　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量。
24　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
25　暗赤褐色　焼土粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック少量。
26　暗 褐 色　ローム粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量。
27　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量。
28　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。
29　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子中量。
30　にぶい褐色　ローム粒子・炭化粒子少量。

第97図　第37号住居跡竈実測図

10cm 程掘り窪めている。火床及び袖部の内側は，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

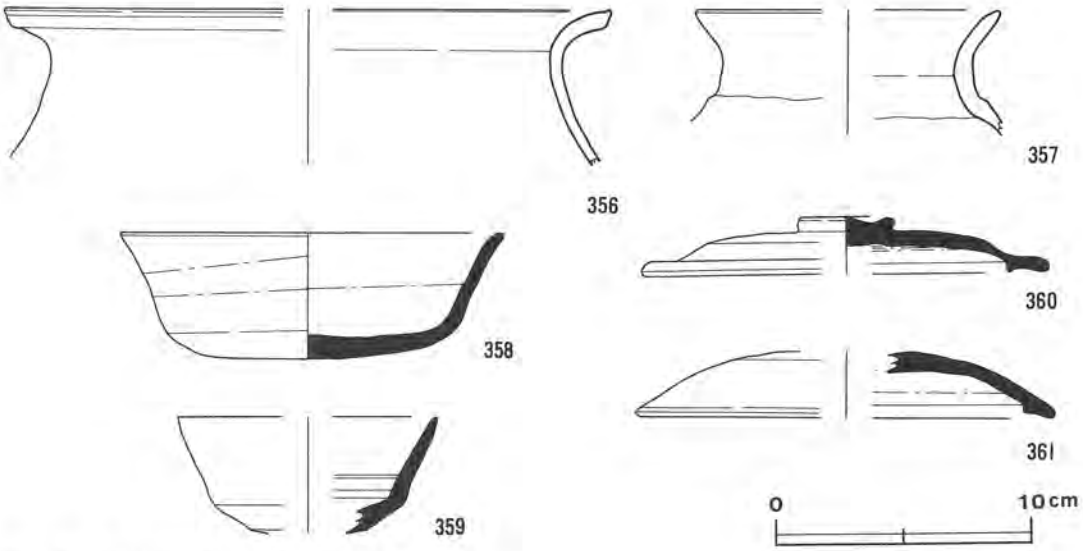
覆土　自然堆積。

遺物　竈周辺から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が少量出土している。357の土師器の甕は竈内から出土している。358の須恵器の坏及び359の須恵器の高坏は北東部の床面から逆位の状態で，361の須恵器の蓋は北東部の覆土下層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第36号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 356	甕 土師器	A [23.7] B (6.1)	口縁部は大きく外反して立ち上がる。口唇部を外上方に僅かにつまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	P242 5% 北東部覆土
357	甕 土師器	A [11.9] B (4.9)	胴部と頸部との境に稜をもつ。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P243 10% 竈
358	坏 須恵器	A 14.9 B 5.0 C 8.4	丸底気味。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰白色 普通	P244 70% 北東部床面
359	高坏 須恵器	A [10.2] B (4.7)	坏部は下位で短く外上方に外傾した後，角度を緩め外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	坏部下端手持ちヘラ削り。坏部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P245 20% 北東部床面
360	蓋 須恵器	A [15.8] B 2.2 F 3.7 G 0.5	天井部はほぼ平坦で，口縁部は水平で，内側に内傾気味に垂下するかえりがつく。扁平なつまみがつく。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P246 20% 竈
361	蓋 須恵器	A [16.4] B (2.6)	天井部は丸く，内彎気味に口縁部に至る。内側にかえりをもつ。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P247 30% 北東部覆土下層

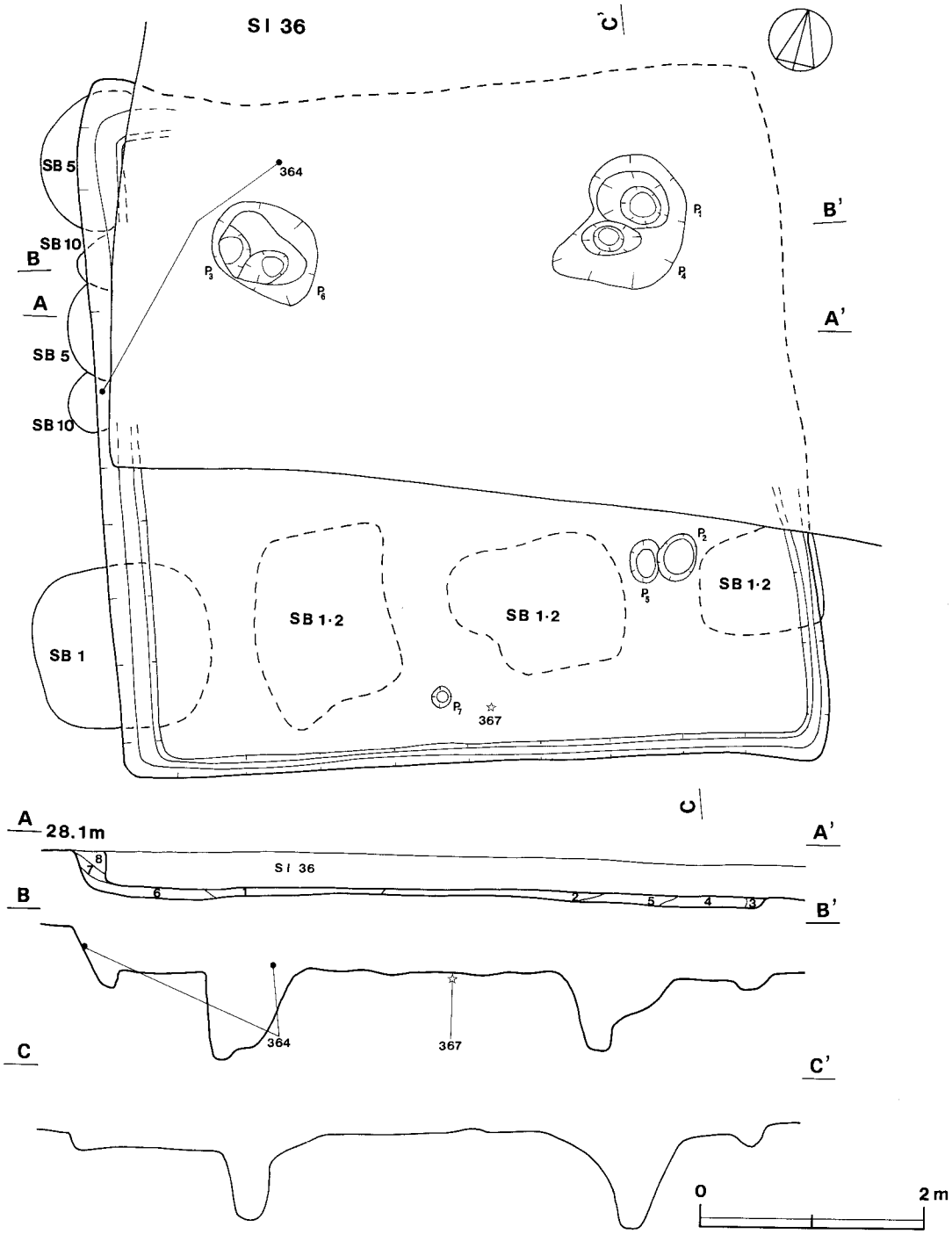


第98図　第37号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡(第99図)

位置　調査区の北東部，C2j_6区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北部の上位には第36号住居跡の南壁付近が構築され，東壁は第5・10号掘立柱建物跡に掘り込まれている。本跡の南部は第1・2号掘立柱建物跡の上位に構築されている。



第38号住居跡　土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2　黒褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
3　暗褐色　焼土ブロック・炭化物少量。
4　暗褐色　ローム粒子多量，炭化物少量。
5　灰褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
6　暗褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
7　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子少量。
8　暗褐色　ロームブロック中量，ローム粒子・焼土粒子少量。

第99図　第38号住居跡実測図

規模と平面形　長軸6.18m，短軸6.18mの方形を呈している。

主軸方向　N-11°-W。

壁　壁高は16～38cm を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　南西コーナーの壁下は不明瞭であるが，壁下を全周するものと考えられる。上幅18～22cm，深さ8～17cm で，断面形はU字状を呈している。

床　第36号住居跡の床下から検出されている。ほぼ平坦で，北部から南部にかけて僅かに傾斜している。中央部は踏み固められ堅緻である。

ピット　7か所(P_1～P_7)検出されてる。北東部，南東部及び北西部からそれぞれ2か所ずつ検出されているが，南西部からは重複遺構との関係で検出されていない。いずれも主柱穴と考えられるが，規模及び 配列からP_1～P_3は，P_4～P_6を建て替えたものと思われる。P_1～P_3は，径24～94cm 深さ77～84cm，P_4～P_6は，径26～84cm，深さ62～80cm を測る。P_7は径16～20cm，深さ25cm で出入口施設と考えられる。

覆土　自然堆積。

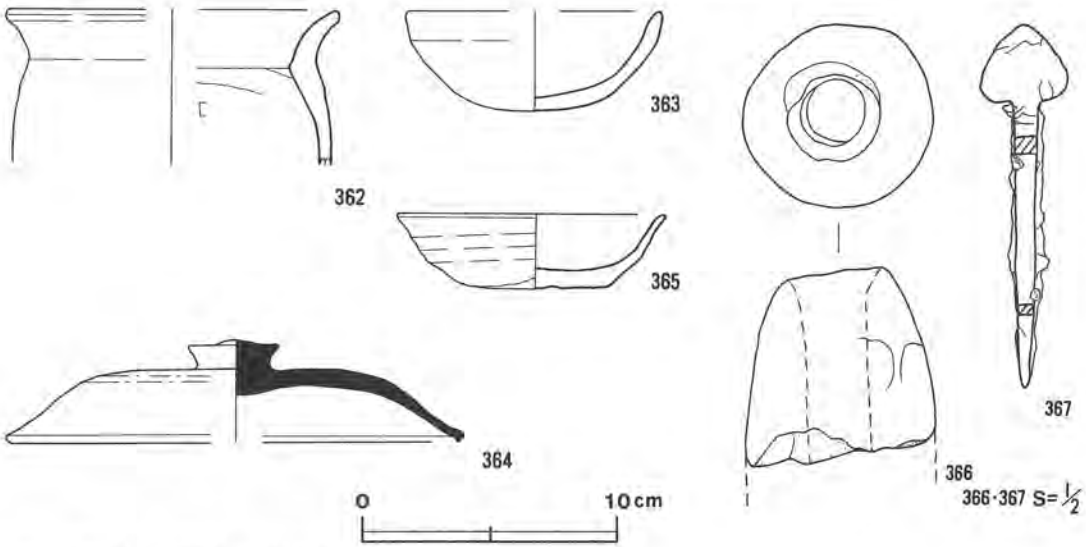
遺物　覆土から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片等が少量出土している。363の土師器の坏はP_1の覆土中から，362の土師器の小形甕はP_3の覆土中から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第1・2号掘立柱建物跡より新しく，第36号住居跡，第5・10号掘立柱建物跡より古い時期に構築され，遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第38号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 362	甕 土師器	A [12.9] B (6.2)	張りの弱い胴部で，頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P248 10% P_3覆土
363	坏 土師器	A [10.0] B 4.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は尖る。	体部外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P249 40% P_1覆土
364	蓋 須恵器	A [17.7] B 4.1 F [3.4] G 1.1	天井部は平坦で，内彎しながら口縁部に至る。口縁部は僅かに外反し，端部は短く屈曲する。中央部が僅かに突出する腰高のつまみがつく。	天井部回転ヘラ削り。内・外面ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P251 30% 北西部覆土下層
365	皿 土師質土器	A 10.5 B 3.0 C 5.8	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P250 90% 覆土

図版番号	器種	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
366	管状土錘	(5.3)	5.0	—	24.0	(29.3)	70	覆土	DP81
367	鉄鏃	9.6	2.3	0.5	—	11.1	100	南壁中央際床面	M19



第100図　第38号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡(第101・102図)

位置　調査区の北東部，C2j_8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の西部は第1・2号掘立柱建物跡の上位に構築され，北東コーナー部は第7号掘立柱建物跡，南壁中央部付近は第33号土坑に掘り込まれている。北西コーナー付近は第36号住居跡の南東コーナーを掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.30m，短軸4.14mの方形を呈している。

主軸方向　N-18°-W。

壁　壁高は16～32cm を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　南壁下の一部を除き検出されている。上幅22～26cm，深さ6～7cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　凸凹で，南部に向かってなだらかに傾斜している。踏み固められ堅緻である。

ピット　2か所(P_1, P_2)検出されている。P_1は，径24～30cm，深さ73cm で主柱穴，P_2は，径24～28cm，深さ35cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

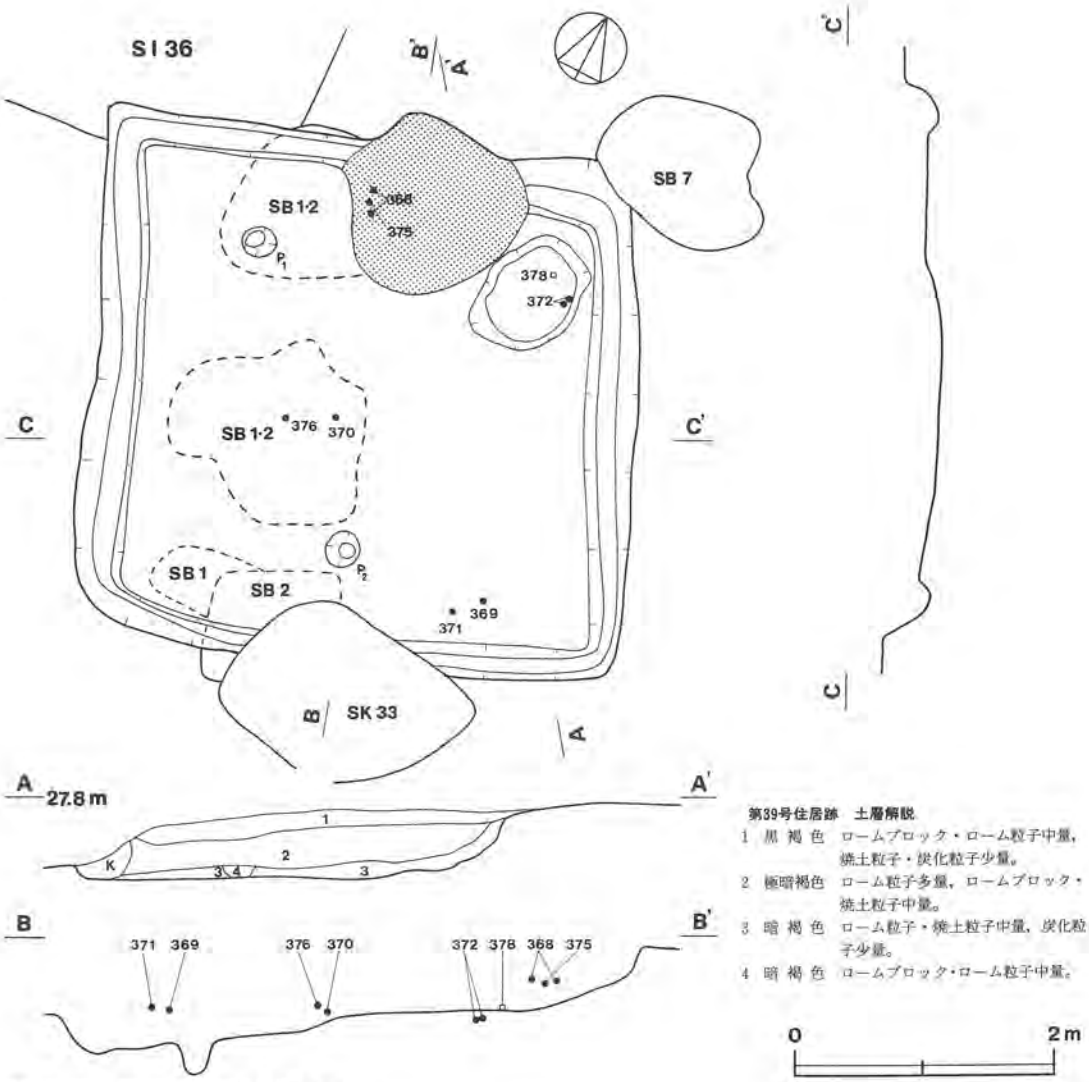
竈　北壁中央からやや東寄りの壁を30cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ139cm，幅165cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は遺存している。火床は

掘り窪められていない。火床及び袖部の内側は，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

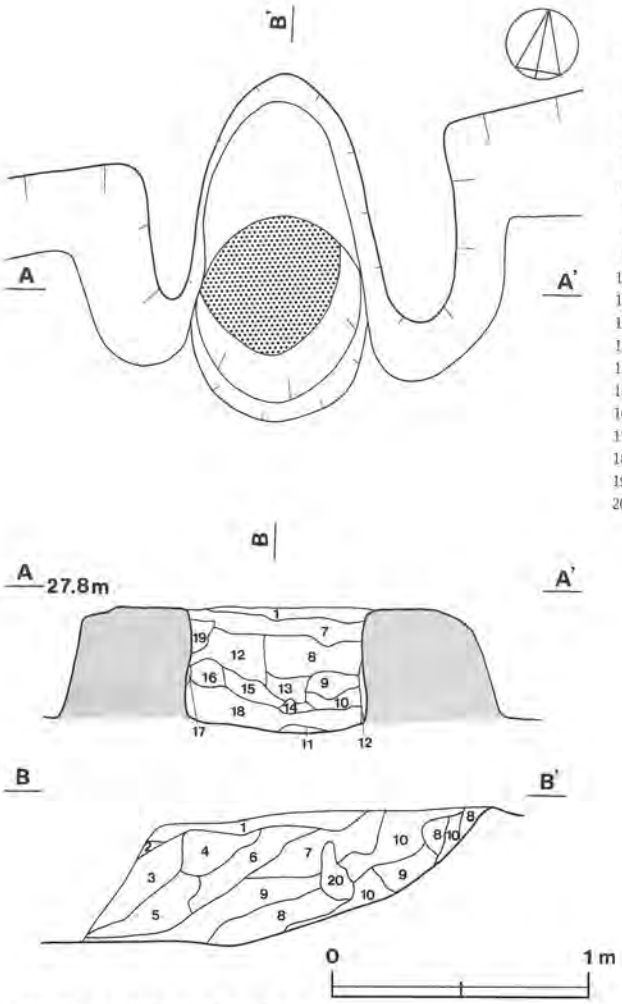
覆土　自然堆積。

遺物　竈周辺から少量ではあるがまとまって土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片が出土している。368の土師器の甕及び375の須恵器の坏は竈内から出土している。369の長頸壺及び371の須恵器の坏は南東部の覆土下層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第36号住居跡及び第1･2号掘立柱建物跡より新しく，第7号掘立柱建物跡及び第33号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第101図　第39号住居跡実測図



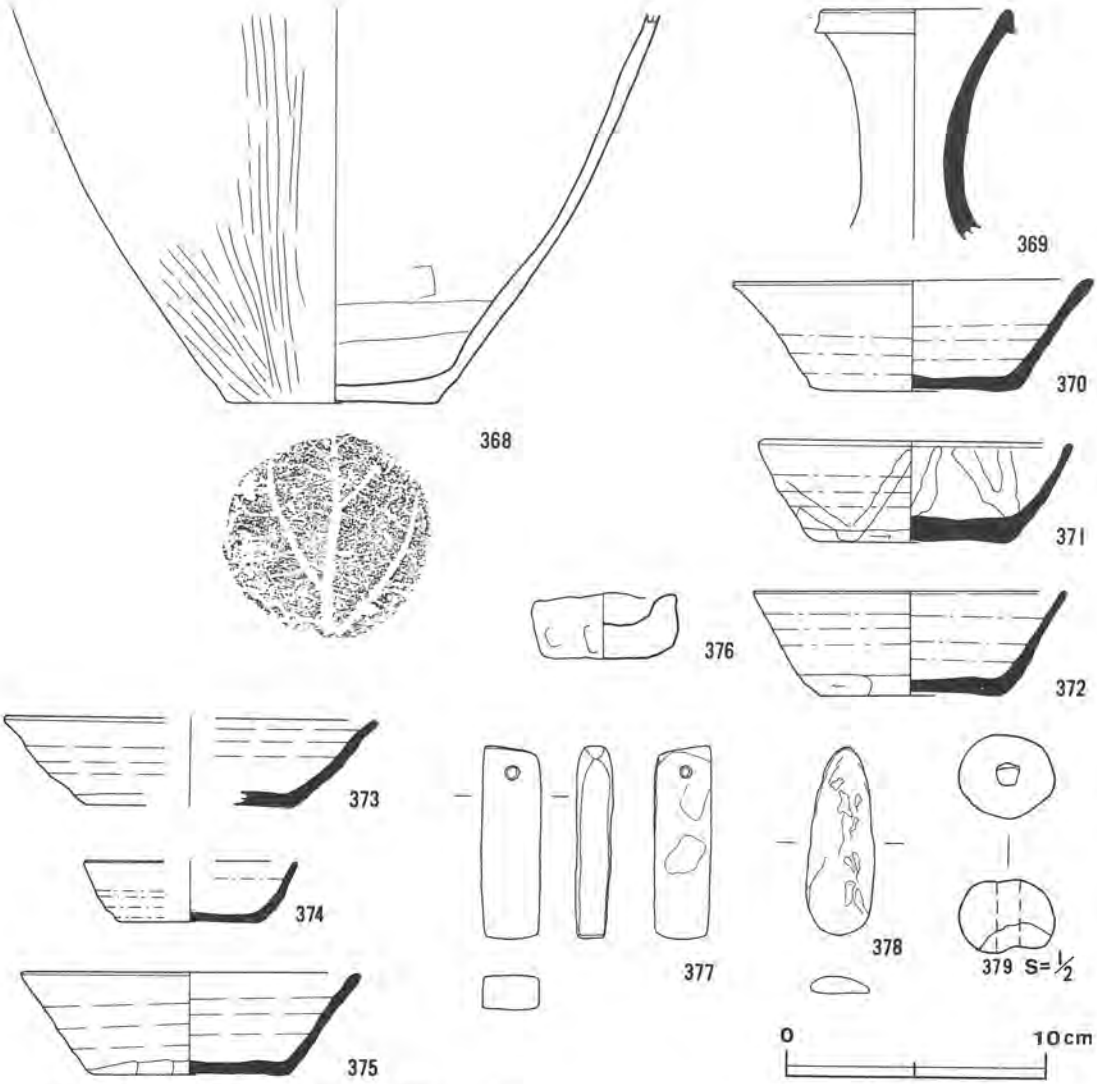
第39号住居跡　覆土層解説

1 黒褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2 極暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物少量。
4 暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
5 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物少量。
6 暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量。
7 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック少量。
8 極暗褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化粒子少量。
9 にぶい褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
10 暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子少量。
11 暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量。
12 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
13 暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量。
14 暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土ブロック少量。
15 暗褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量。
16 にぶい褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物少量。
17 赤褐色　焼土粒子多量。
18 黒褐色　ローム粒子少量。
19 褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
20 暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量。

第102図　第39号住居跡竈実測図

第39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 368	甕 土師器	B (15.6) C 8.2	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部下位縦位のヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P259 20% 竈
369	長頸壺 須恵器	A 7.2 B (9.1)	頸部は外反しながら立ち上がり口縁部は外下方に屈曲する。	頸部及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい黄色 良好	P253 5% 南東部覆土上層
370	坏 須恵器	A 13.7 B 4.4 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P254 80% 中央部覆土下層
371	坏 須恵器	A 11.8 B 4.0 C 7.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P255 80% 南東部覆土上層
372	坏 須恵器	A 12.0 B 4.2 C 7.1	上げ底気味。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P256 70% 北東部床面



第103図　第39号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
373	坏 須恵器	A [14.6] B 3.5 C [8.2]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P257 20% 覆土
374	坏 須恵器	A [8.3] B 2.4 C 5.5	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰白色 普通	P258 30% 覆土
375	坏 須恵器	A 13.2 B 4.0 C 7.8	平底。体部は中位まで外傾し，中位から僅かに外反して立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P260 80% 竈
376	手捏土器	A 5.1 B 2.7 C 4.6	平底。体部はほぼ垂直に立ち上がる。口唇部はほぼ平坦。	底部ナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P252 80% 南西部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
377	砥石	7.6	2.3	1.4	---	51.2	100	覆土	Q17 頁岩
378	不明石製品	7.4	2.7	1.1	---	22.0	100	北東部床面	Q24 砂岩
379	球状土錘	(1.9)	2.5	---	6.0	(8.0)	80	覆土	DP82

第40号住居跡(第104図)

位置　調査区の南西部，E1i_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の西部は第75号住居跡の北東部に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.66m，短軸2.82mの隅丸長方形を呈している。

主軸方向　N-0°。

壁　壁高は14～15cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　西壁下を除き検出されている。上幅16～18cm,深さ5～6cmで,断面形は皿状を呈している。

床　ほぼ平坦で，硬く踏み固められている。

竈　北壁中央部の壁を48cm程壁外へ掘り込んで構築されているが，天井部と袖部は遺存していない。火床はあまり熱をうけていない。

覆土　自然堆積。

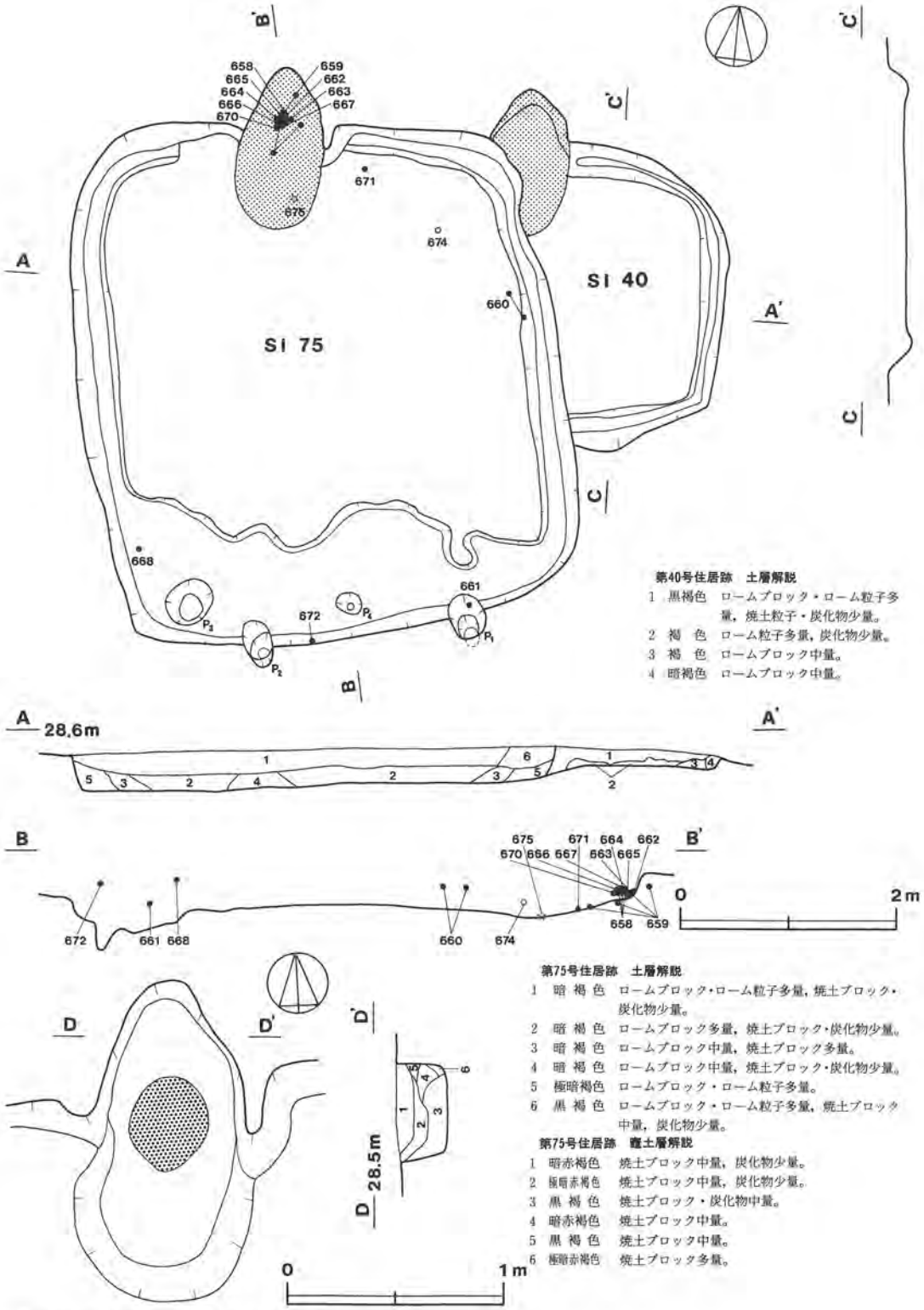
遺物　北東部の覆土から土師器(坏，甕，高台付坏)片，須恵器(甕，蓋)片が極少量出土している。381の土師器の坏は覆土下層から逆位の状態で，380の土師器の**椀**は竈内から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第75号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から奈良時代の住居跡と考えられる。

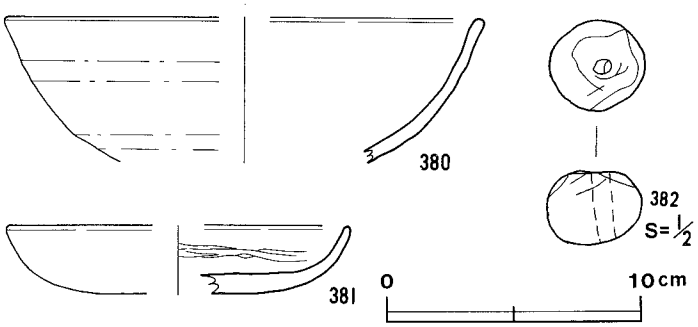
第40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 380	椀 土師器	A [18.6] B (5.8)	体部は内彎しながら立ち上がり口縁部は僅かに外反する。	内・外面研磨。	砂粒 にぶい橙色 良好	P261 10% 竈
381	坏 土師器	A [13.4] B (2.7)	平底気味。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面摩耗。口縁部内面ヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P262 10% 覆土

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
382	球状土錘	2.0	2.5	---	5.0	11.5	100	北東部床面	DP83



第104図　第40・75号住居跡実測図



第105図　第40号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡(第106図)

位置　調査区の北東部，B2j_8区を中心に確認されている。北西コーナー付近は，調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の北東部は第7号土坑の上位に構築され，第9・14号土坑に掘り込まれている。竈付近は第15・16号土坑に，南東コーナー付近は第10号住居跡の北壁にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸(6.80)m，短軸6.10mの長方形を呈するものと推定される。

主軸方向　N-0°。

壁　削平をうけ，僅かな立ち上がりが部分的にとらえられる程度で，不明瞭である。

壁溝　東・西・南壁の一部に検出されている。上幅28～34cm，深さ8～14cmで，断面形は逆台形状を呈している。

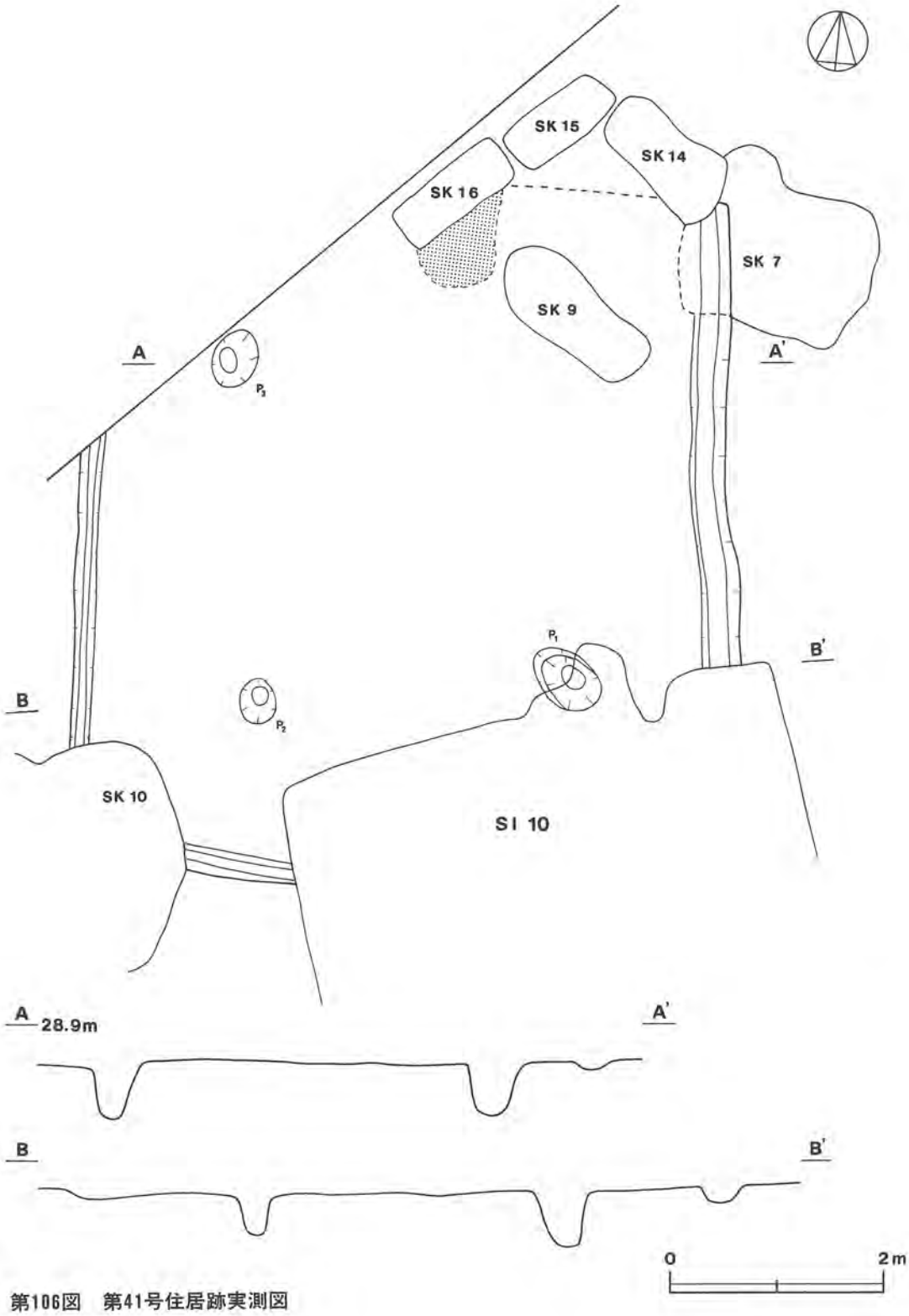
床　木の根に撹乱され，凸凹している。

ピット　3か所(P_1～P_3)検出されている。P_1～P_3は，径34～72cm，深さ38～56cmで主柱穴である。北東部からは第9号土坑に掘り込まれているため検出されていない。

竈　北壁中央部に僅かに痕跡が検出されている。

覆土　大半が削平されているため，不明である。

所見　本跡は，重複関係から第7号土坑より新しく，第10号住居跡及び第9・10・14・15・16号土坑より古い時期に構築されている。出土遺物はないが，遺構の形態及び重複関係等から古墳時代後期以降の住居跡と考えられる。



第106図　第41号住居跡実測図

第42号住居跡(第107図)

位置　調査区の北東部，C2h9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡は，第7号掘立柱建物跡と重複している。本跡の西部は第35号住居跡の北東部に，北西部は第50A号土坑に，南東部は第83・84号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.62m，短軸4.56mの方形を呈している。

主軸方向　N-17°-W。

壁　壁高は22～56cmを測り，北壁側で垂直に，南壁側で外傾して立ち上がっている。

壁溝　北西コーナーの壁下を除き検出されている。上幅16～18cm，深さ4～6cmで，断面形は皿状を呈している。

床　ほぼ平坦で，硬く踏み固められている。

ピット　7か所(P_1～P_7)検出されている。P_1～P_6は，径24～42cm，深さ29～51cmで，規模及び配列から主柱穴である。P_7は径20～22cm，深さ29cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部の壁を93cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されているが，遺存状態は悪い。火床は床面を2cm程掘り窪めてあり，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

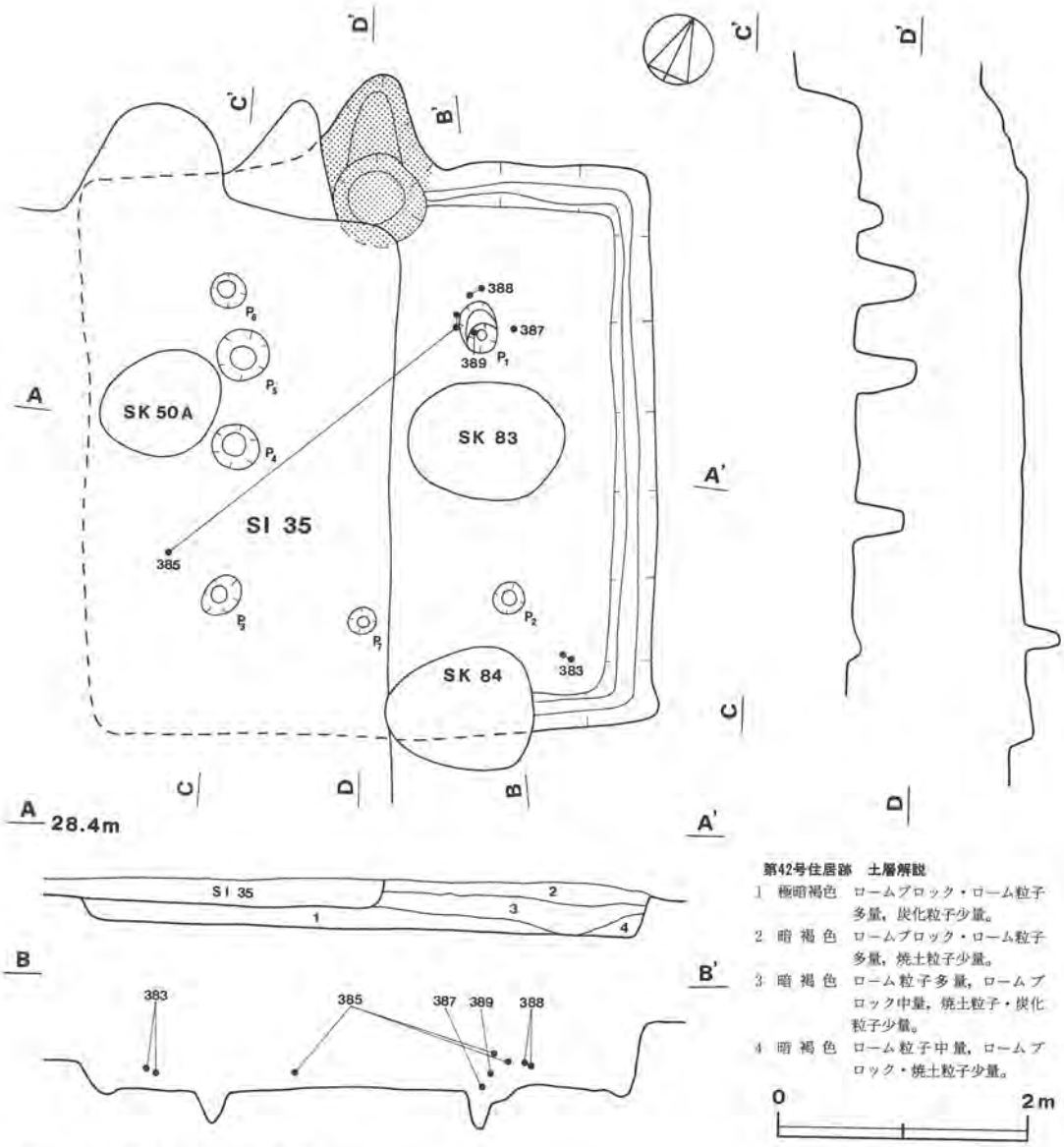
覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が多量に出土している。387の土師器の坏は北東部の床面から逆位の状態で，384の土師器の小形甕は南東コーナー部の覆土から逆位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第35号住居跡及び第7号掘立柱建物跡，第50A・83・84号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

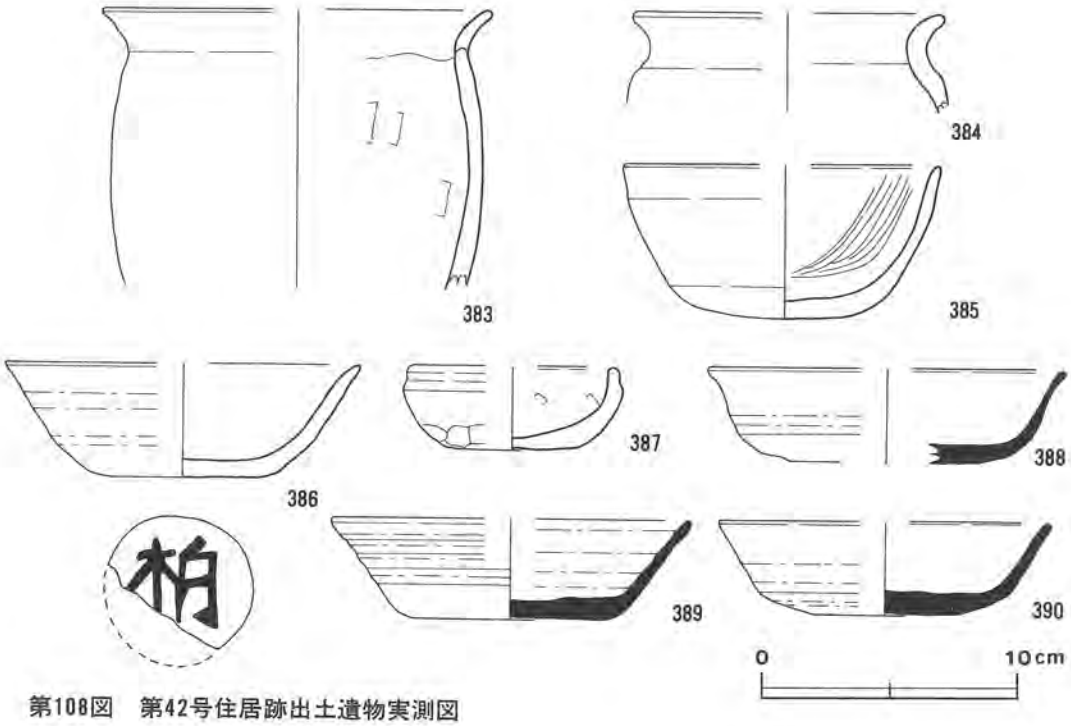
第42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 383	甕 土師器	A [15.0] B (11.0)	胴部は内彎しながら立ち上がり頸部はくびれる。	胴部外面剝離。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P263 30% 南西部覆土上層
384	甕 土師器	A [12.0] B (4.0)	頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P264 5% 覆土
385	坏 土師器	A [12.3] B 6.1	丸底。体部と口縁部との境に弱い稜をもつ。口唇部は尖る。	体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 良好	P265 40% 覆土中層
386	坏 土師器	A [13.8] B 4.5 C [5.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P266 30% 覆土 墨書「柏」



第107図　第42号住居跡実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
387	坏 土師器	A [8.0] B 3.3 C 5.2	平底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口唇部は丸い。	底部及び体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P267 40% 北東部床面
388	坏 須恵器	A [13.8] B (3.9) C [7.4]	平底で体部との境は不明瞭。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P268 60% 北東部覆土下層
389	坏 須恵器	A [14.0] B 4.0 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P269 50% 北東部覆土下層
390	坏 須恵器	A [12.8] B 3.7 C [6.0]	平底で体部との境は不明瞭。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P270 30% 覆土



第108図　第42号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡(第109図)

位置　調査区の南西部，D2e1区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南コーナー付近は，第44号住居跡の北コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸5.84m，短軸5.26mの長方形を呈している。

主軸方向　N-55°-E。

壁　北東壁は撹乱され不明瞭であるが，他の壁は壁高8～16cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　木の根に撹乱され，全体的に凸凹している。南東部はやや盛り上がり，堅緻である。

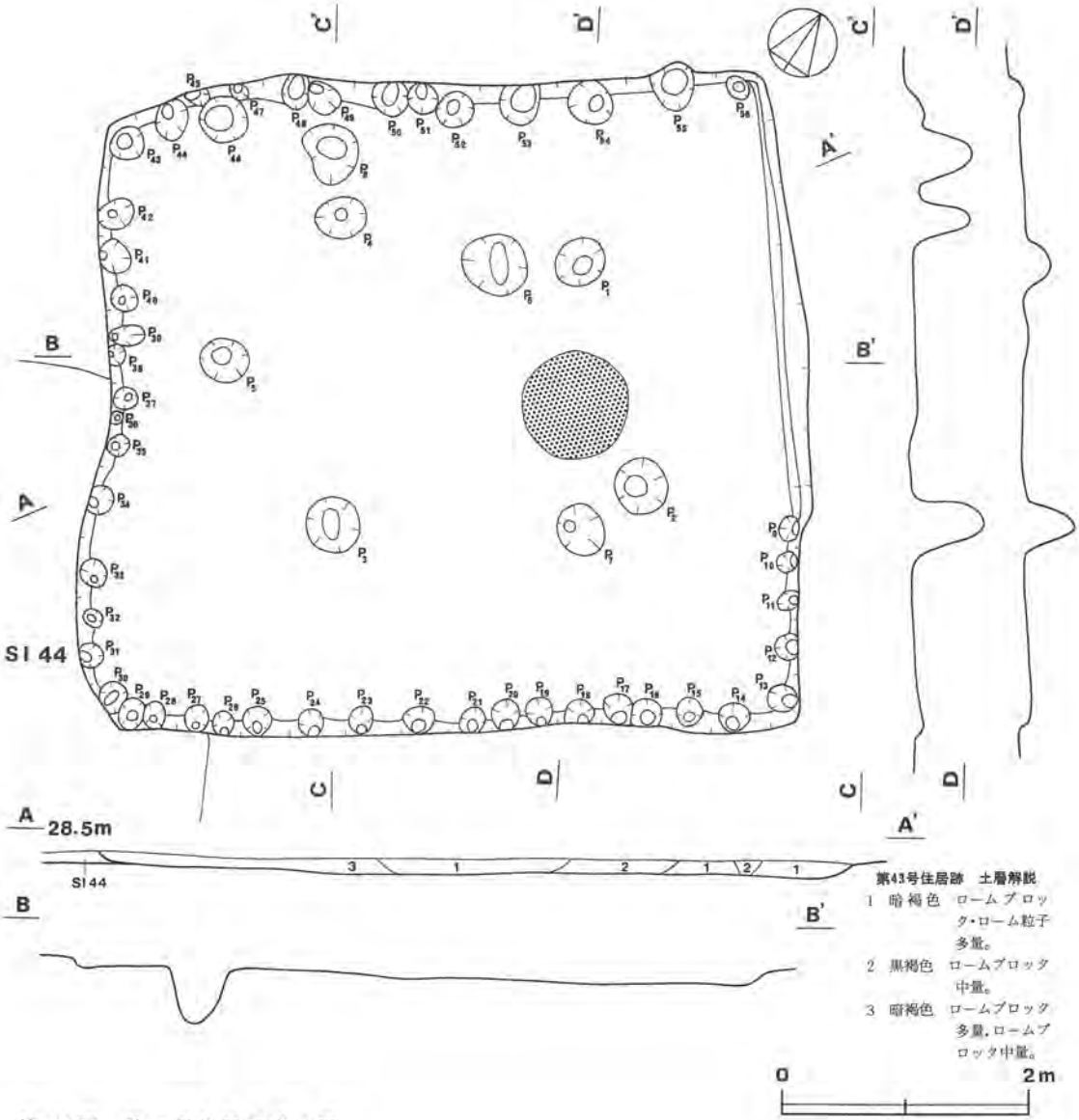
ピット　56か所(P_1～P_{56})検出されている。P_1～P_4は，径34～48cm，深さ24～58cmで，規模及び配列から主柱穴である。P_5は，径40cm，深さ46cmで，出入口施設に伴うピットである。P_9～P_{56}は，壁下を全周していることから，壁柱穴と考えられる。

炉　北東壁中央部寄り，P_1とP_2のほぼ中間に検出されている。平面形は，長径90cm，短径84cmのほぼ円形を呈している。炉床は床面を僅かに掘り窪めており，熱をうけて焼土化している。

覆土　上面が削平されているうえ，撹乱が激しいため，堆積状況は不明である。

遺物　覆土中から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が極少量出土している。

所見　本跡は，重複関係から第44号住居跡より新しい時期に構築されている。本跡に伴う遺物は出土していないが，遺構の形態等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第109図　第43号住居跡実測図

第44号住居跡(第110図)

位置　調査区の南西部，D2f₁区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北コーナー付近は第43号住居跡の南コーナーに掘り込まれている。

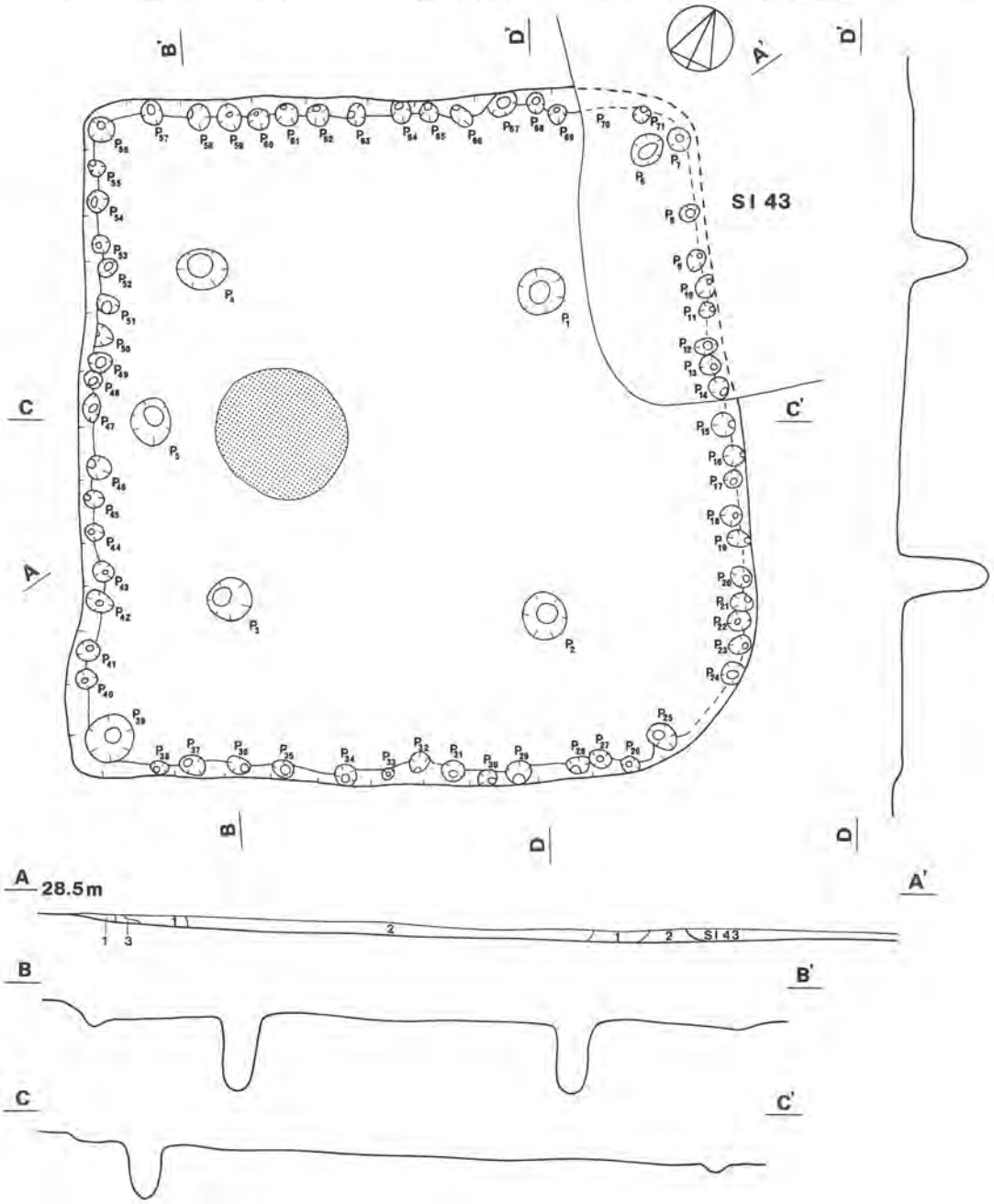
規模と平面形　長軸5.68m，短軸5.94mの方形を呈している。

主軸方向　N-65°-E。

壁　耕作によって上位は，削平されている。北西壁の壁高は4～8cmで，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　木の根によって撹乱され，全体的に凸凹している。南西部はやや盛り上がり，堅緻である。

ピット　71か所(P_1～P_{71})検出されている。P_1～P_4は，径40～42cm，深さ50～75cmで，規模及び配列から主柱穴である。P_5は，径32～40cm，深さ52cmで，出入口施設に伴うピットである。



第44号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
2　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
3　黒褐色　ロームブロック・ローム粒子多量。

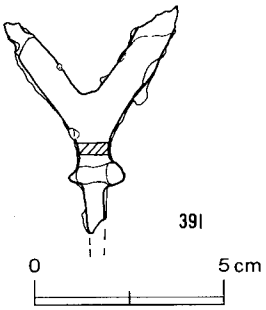
第110図　第44号住居跡実測図

P_6～P_{71}は，壁下を全周していることから，壁柱穴と考えられる。

炉　南東壁のほぼ中央部寄り，P_5の北東40cmの位置に検出されている。平面形は，長径114cm，短径110cmのほぼ円形を呈している。炉床は床面を僅かに掘り窪められ，焼土が薄く堆積している。

覆土　上面が削平されているため，堆積状況は不明である。

遺物　覆土中から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片が極少量出土している。



第111図　第44号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡は重複関係から第43号住居跡より古い時期に構築されている。本跡に伴う遺物はないが，遺構の形態等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第111図 391	鉄鏃	(6.0)	(4.6)	(0.3)	---	(14.5)	60	覆土	M20

第45号住居跡(第112図)

位置　調査区の北西部，$D1h_0$区を中心に確認されている。北西部は調査区域外にのびている。

規模と平面形　長軸6.48m，短軸6.28mの方形を呈している。

主軸方向　N-40°-W。

壁　壁高は18～24cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　木の根による撹乱で，全体的に凸凹している。

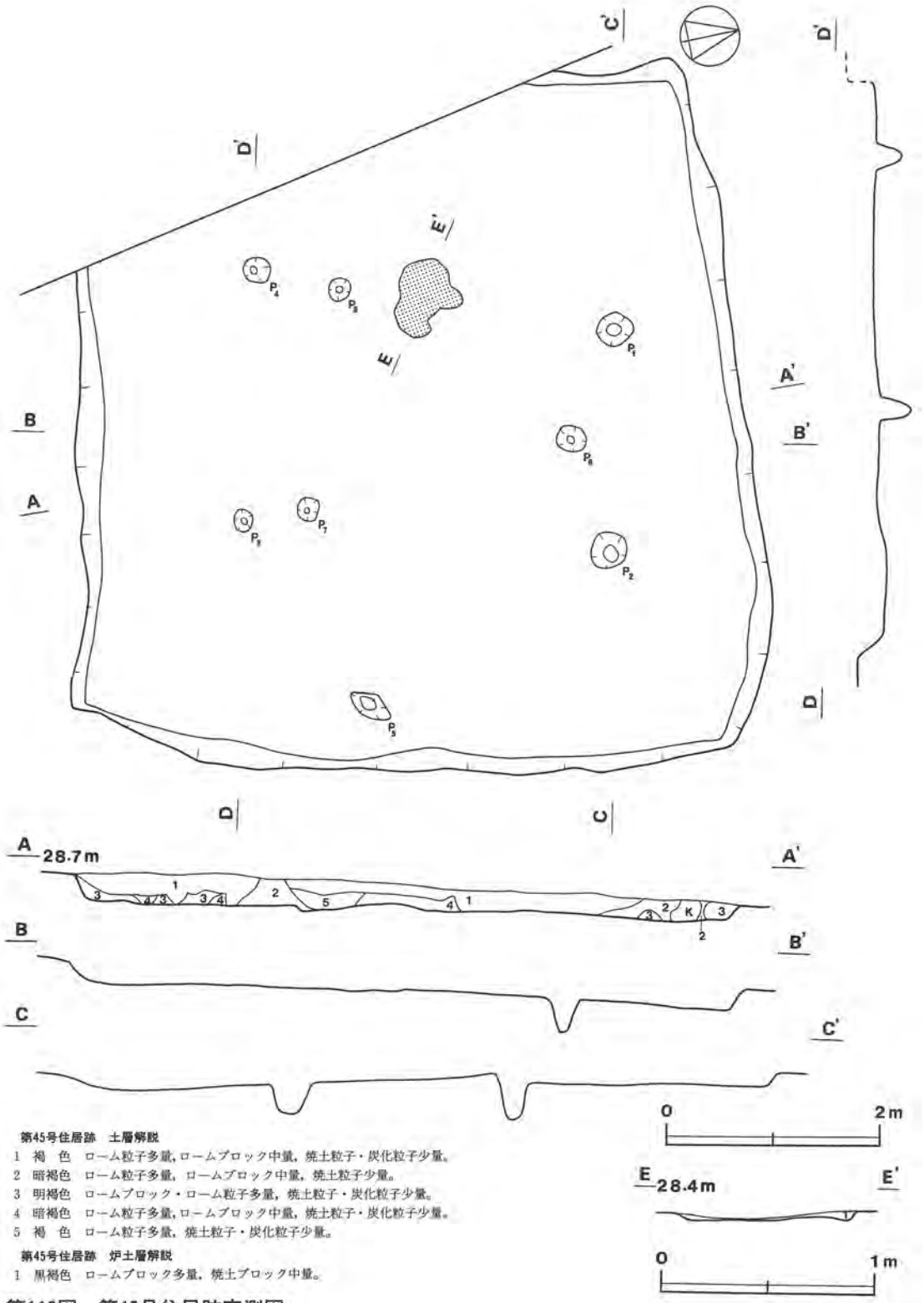
ピット　8か所(P_1～P_8)検出されている。P_1～P_4は，径20～38cm，深さ26～37cmで，規模及び配列から主柱穴である。P_5は径22～42cm，深さ47cmで，出入口施設に伴うピットである。P_6～P_8は，径18～28cm，深さ25～37cmで性格は不明である。

炉　北西壁のほぼ中央部寄り，P_1とP_4のほぼ中間に検出されている。平面形は，長径74cm，短径60cmの楕円形を呈し，床面を8cm程掘り窪めた地床炉である。炉床はあまり熱をうけていない。

覆土　各層にロームブロックが混入していることから，人為堆積と考えられる。

遺物　覆土から土師器(甕，器台)片が極少量出土している。392の土師器の壺と393の土師器の高坏が東コーナー付近の覆土下層から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から，古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第45号住居跡　土層解説

1　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量。
3　明褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
5　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。

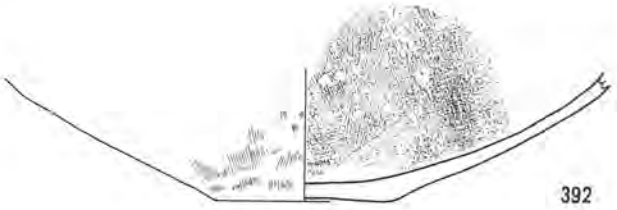
第45号住居跡　炉土層解説

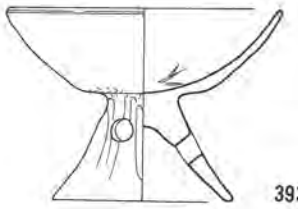
1　黒褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量。

第112図　第45号住居跡実測図

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 392	壺 土師器	B (5.3) C 7.0	平底。胴部は大きく外傾して立ち上がる。	胴部内・外面下位ハケ目。	砂粒・礫 橙色 普通	P271 5% 東コーナー付近 覆土下層
393	高坏 土師器	A 10.6 B 7.6 D 7.0 E 4.2	脚部はほぼ直線的に下方へ開き裾部は僅かに外反する。3孔を穿つ。坏部は内彎しながら立ち上がる。	脚部外面縦位の手持ちヘラ削り。脚部内面ナデ。坏部外面下位及び内面ヘラナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P272 70% 東コーナー付近 覆土下層





第113図　第45号住居跡出土遺物実測・拓影図

第46号住居跡(第114図)

位置　調査区の南西部，E1b7区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸(4.38)m，短軸(3.42)m。東コーナー付近を除き，大半が調査区域外となっているため，全容は把握できないが，方形あるいは長方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　[N-25°-W]。

壁　壁高は34～36cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　本跡の大半は調査区域外にのびているため，東コーナーの壁下からだけ検出されているが，壁下を全周するものと考えられる。上幅20～32cm，深さ3～6cmで，断面形は皿状を呈している。

床　全体的に平坦で，踏み固められ堅緻である。

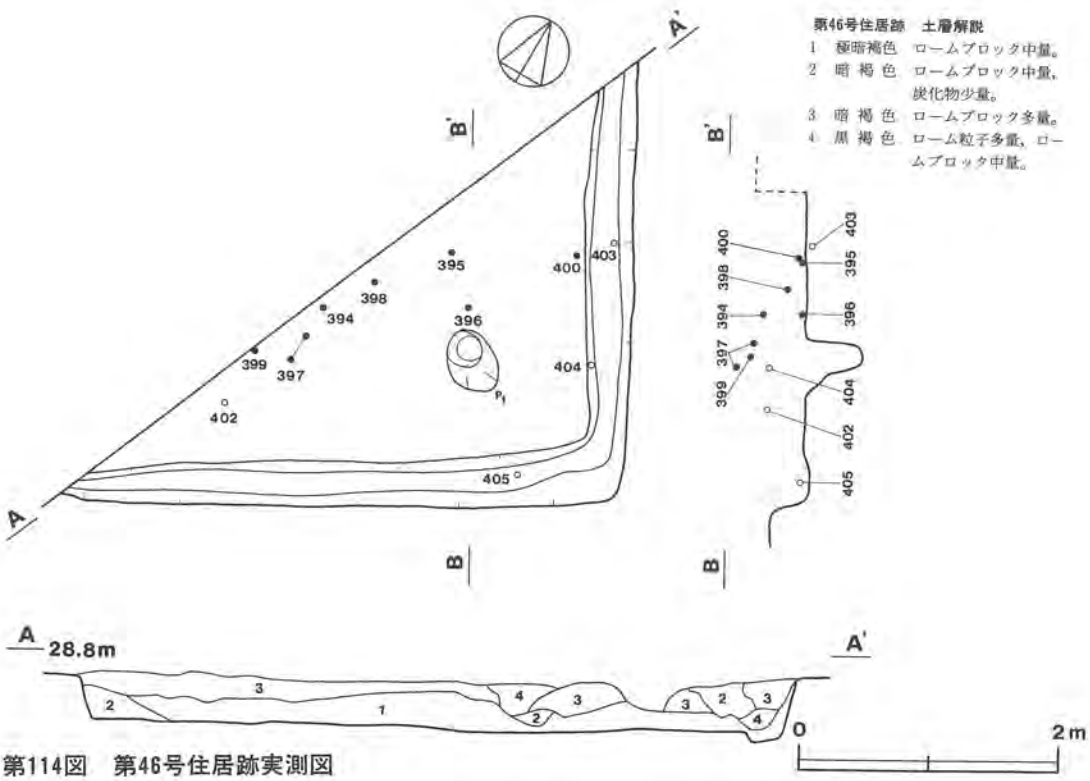
ピット　1か所(P_1)。P_1は，径52cm，深さ48cmを測り，主柱穴の一部と考えられる。

竈　本跡の大半が調査区域外にのびているため検出されていない。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土及び床面から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片等が少量出土している。395と396の土師器の坏は南東部床面から正位の状態で出土している。394の土師器の小形甕は南東部覆土上層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

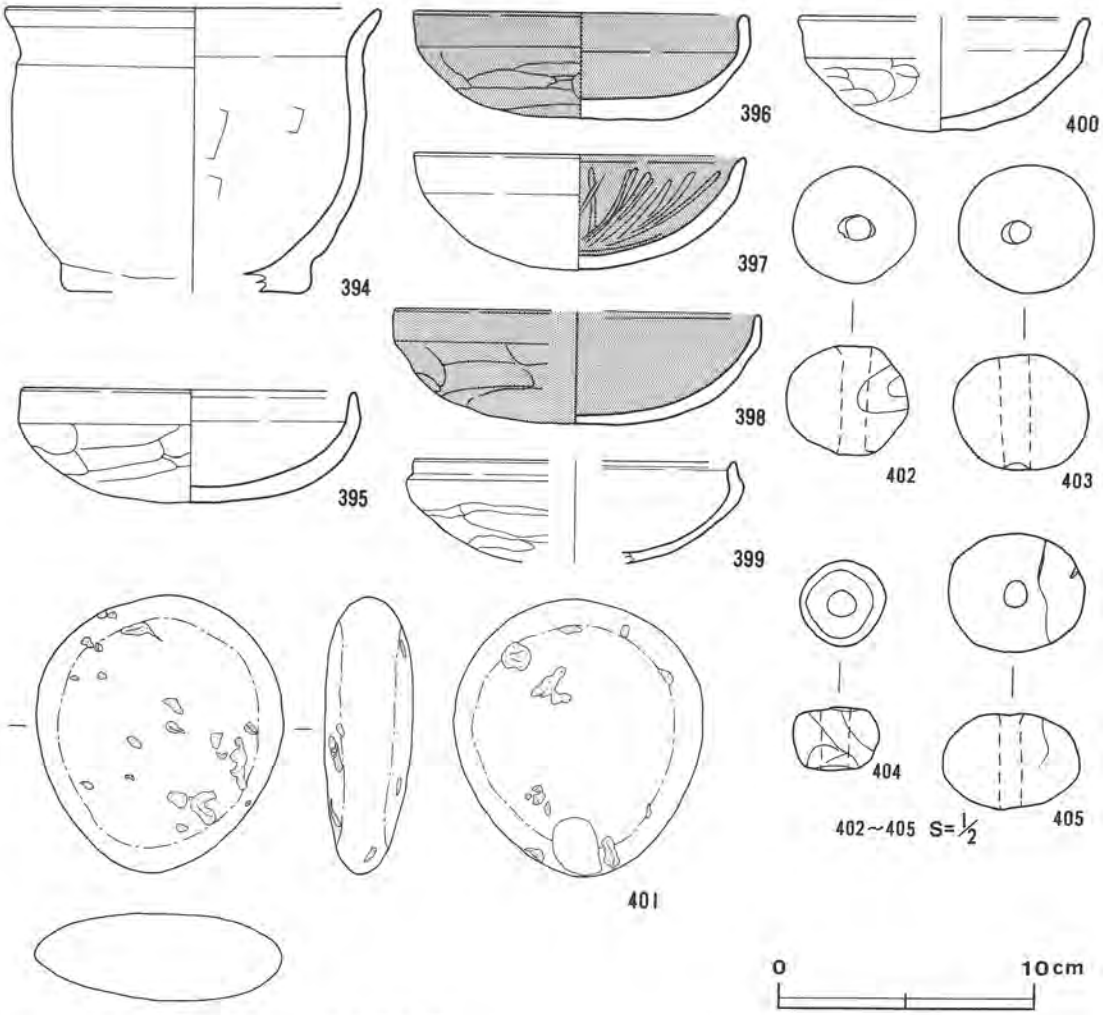


第114図　第46号住居跡実測図

第46号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 394	甕 土師器	A 14.6 B 11.3 C [9.6]	胴部は中位まで内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外反する。	胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P274　60% 南東部覆土上層
395	坏 土師器	A 13.0 B 4.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P275　90% 南東部床面
396	坏 土師器	A 12.7 B 4.2	平底気味。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 灰褐色 普通	P276　100% 南東部床面
397	坏 土師器	A 12.8 B 4.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面摩耗。体部内面縦位のヘラ磨き後，黒色処理。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P277　80% 南東部覆土上層
398	坏 土師器	A [14.2] B 4.5	丸底。体部と口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 黒褐色 良好	P278　30% 南東部覆土中層
399	坏 土師器	A [12.4] B (4.0)	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は僅かに内傾し，内側直下に一条の沈線が巡る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 良好	P279　30% 南壁中央際覆土上層
400	坏 土師器	A [11.2] B 4.5	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は僅かに外反する	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P280　30% 南東部覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
401	磨石	11.0	9.7	3.5	—	527.5	100	覆土	Q18 砂岩
402	球状土錘	3.0	3.3	—	10.0	25.4	100	南西部覆土上層	DP84
403	球状土錘	3.0	3.5	—	8.0	30.1	100	南西部床面	DP85
404	球状土錘	1.6	2.3	—	8.0	7.4	100	南東部覆土上層	DP86
405	球状土錘	2.6	3.5	—	7.0	25.7	100	南東部覆土下層	DP87



第115図　第46号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡（第116・117・118図）

位置　調査区の南西部，D2j_3区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸5.24m，短軸5.00mの方形を呈している。

主軸方向　N-17°-W。

壁　壁高は58～64cm を測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅18～28cm，深さ10～14cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　中央部はやや盛り上がり，踏み固められ堅緻である。南西部はやや窪んでいる。

ピット　6か所(P_1～P_6)検出されている。P_1～P_4は，径44～74cm，深さ54～62cm で，規模及び配列から主柱穴である。P_6は，径24～38cm，深さ32cm でP_3の補助柱穴，P_5は，径26～32cm，深さ40cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央からやや西寄りの壁を52cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土と礫で構築されている。規模は，長さ199cm，幅187cm を測る。天井部の一部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は15cm 程掘り窪められ，焼土，灰が厚く堆積している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がり，煙出口に至っている。

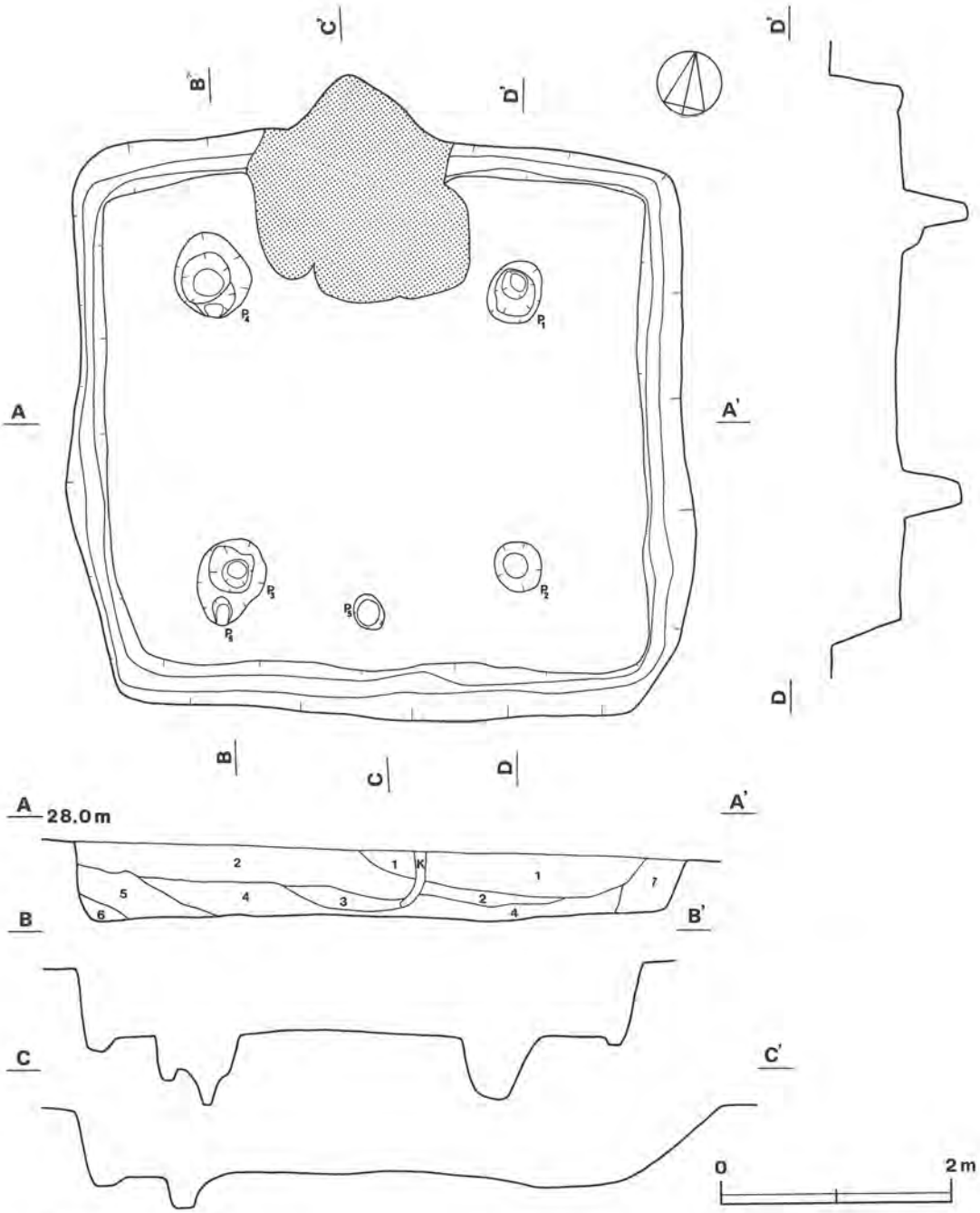
覆土　自然堆積。

遺物　東壁際から中央部に向けて，投棄されたと考えられる土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片等が多量に出土している。419の須恵器の坏は南東部床面から，418の須恵器の盤は北西部床面からいずれも逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第47号住居跡出土遺物観察表

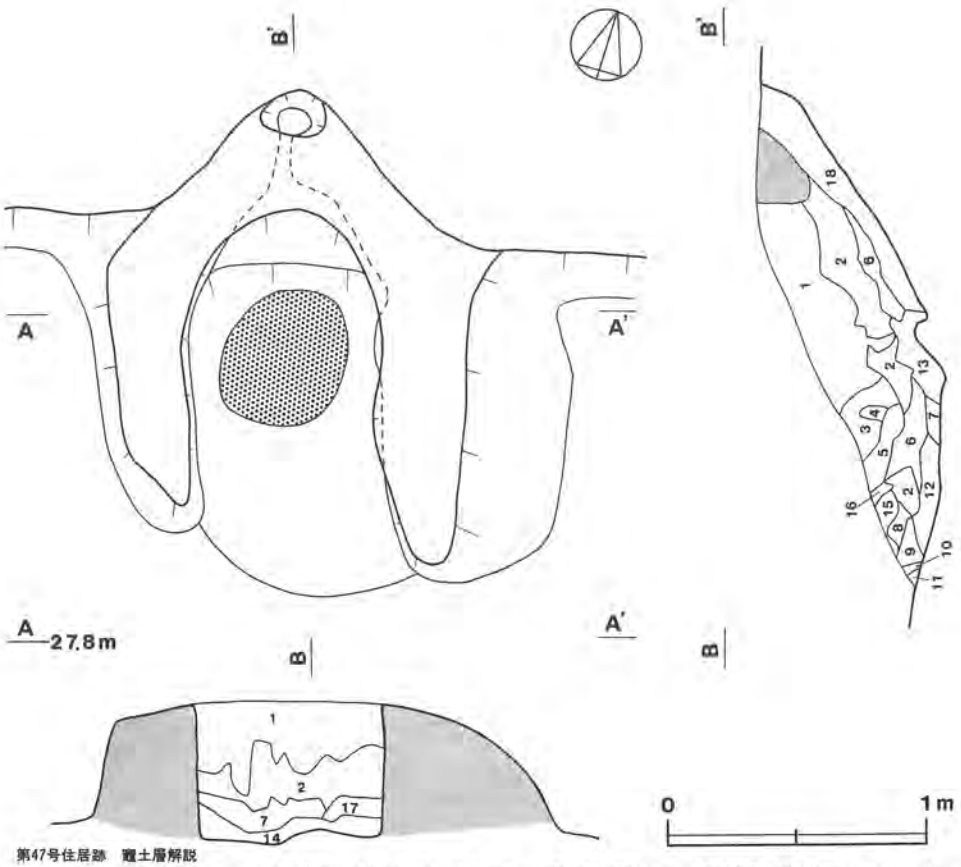
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119～121図 406	甕 土師器	A [10.7] B 8.8 C 6.0	上げ底気味。胴部は内彎しながら立ち上がり，中位に最大径をもつ。口縁部は外反し，口唇部を外上方につまみ出す。	底部及び胴部外面下位手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P282 60% 覆土中層
407	甕 土師器	A [13.4] B (6.6)	頸部は外反して口縁部に至る。口唇部は外上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P283 20% 覆土中層
408	甕 土師器	A [11.0] B (5.7)	頸部は「く」の字状に屈曲して立ち上がり，口唇部を外上方に僅かにつまみ出す。	胴部外面剝離。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P284 10% 南東部覆土上層
409	甕 土師器	B (5.9) C 5.6	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び胴部外面下位手持ちヘラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P285 40% 覆土
410	鉢 須恵器	A [29.9] B 18.5 C 12.2	平底。胴部は内彎気味に立ち上上がり，頸部は大きく外反する。	底部ナデ。胴部外面下位手持ちヘラ削り。上位にかけて平行叩き目。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黒褐色 普通	P287 40% 南西部覆土下層



第47号住居跡　土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
2　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
5　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
6　極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量。
7　極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。

第116図　第47号住居跡実測図

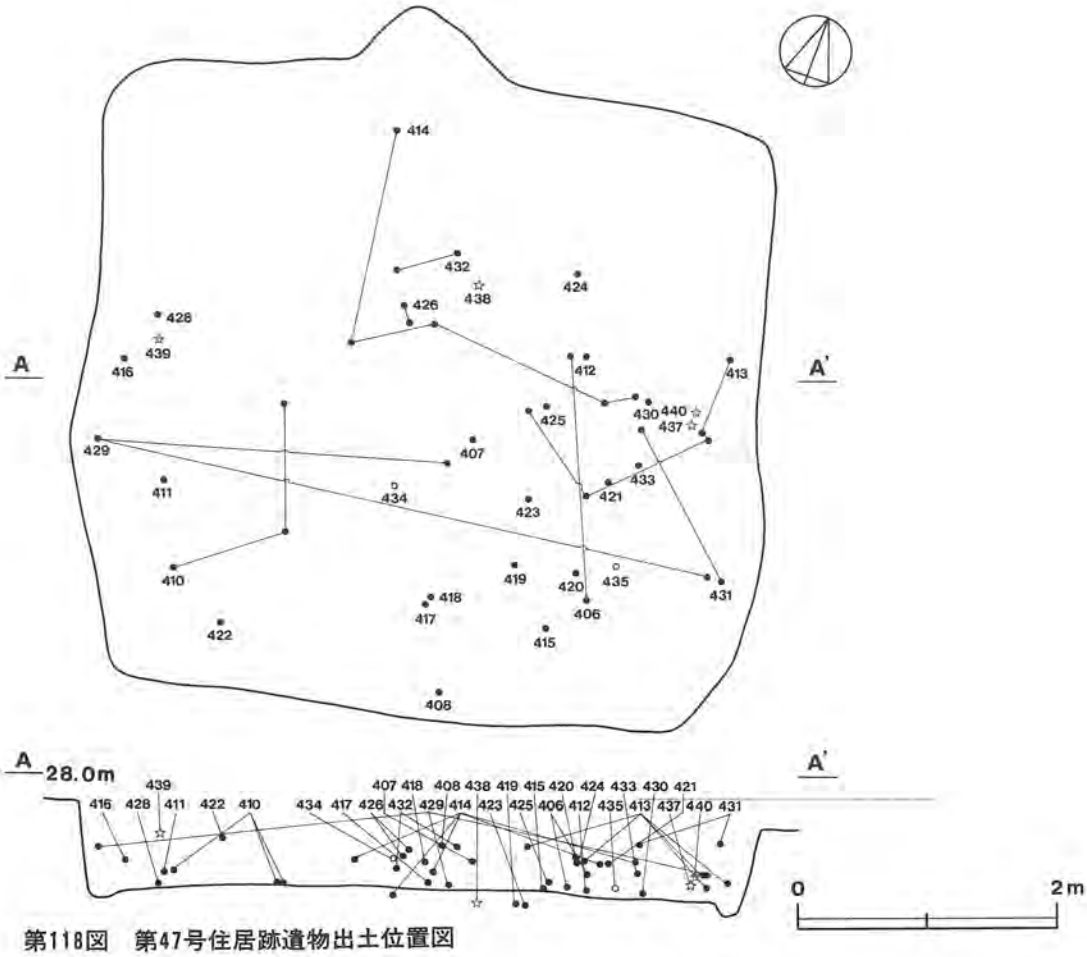


第47号住居跡　竈土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　にぶい橙色　焼土粒子多量，ローム粒子・焼土ブロック中量。
3　にぶい橙色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
5　にぶい赤褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子・焼土ブロック少量。
6　にぶい赤褐色　炭化粒子多量，ローム粒子・焼土粒子中量。
7　暗赤褐色　炭化粒子多量，焼土ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量。
8　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
9　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子少量。
10　にぶい赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，焼土ブロック少量。
11　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
12　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・焼土ブロック中量。
13　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
14　にぶい赤褐色　ロームブロック・焼土粒子多量，炭化粒子中量。
15　明 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
16　明 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
17　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子中量。
18　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，炭化物少量。

第117図　第47号住居跡竈実測図

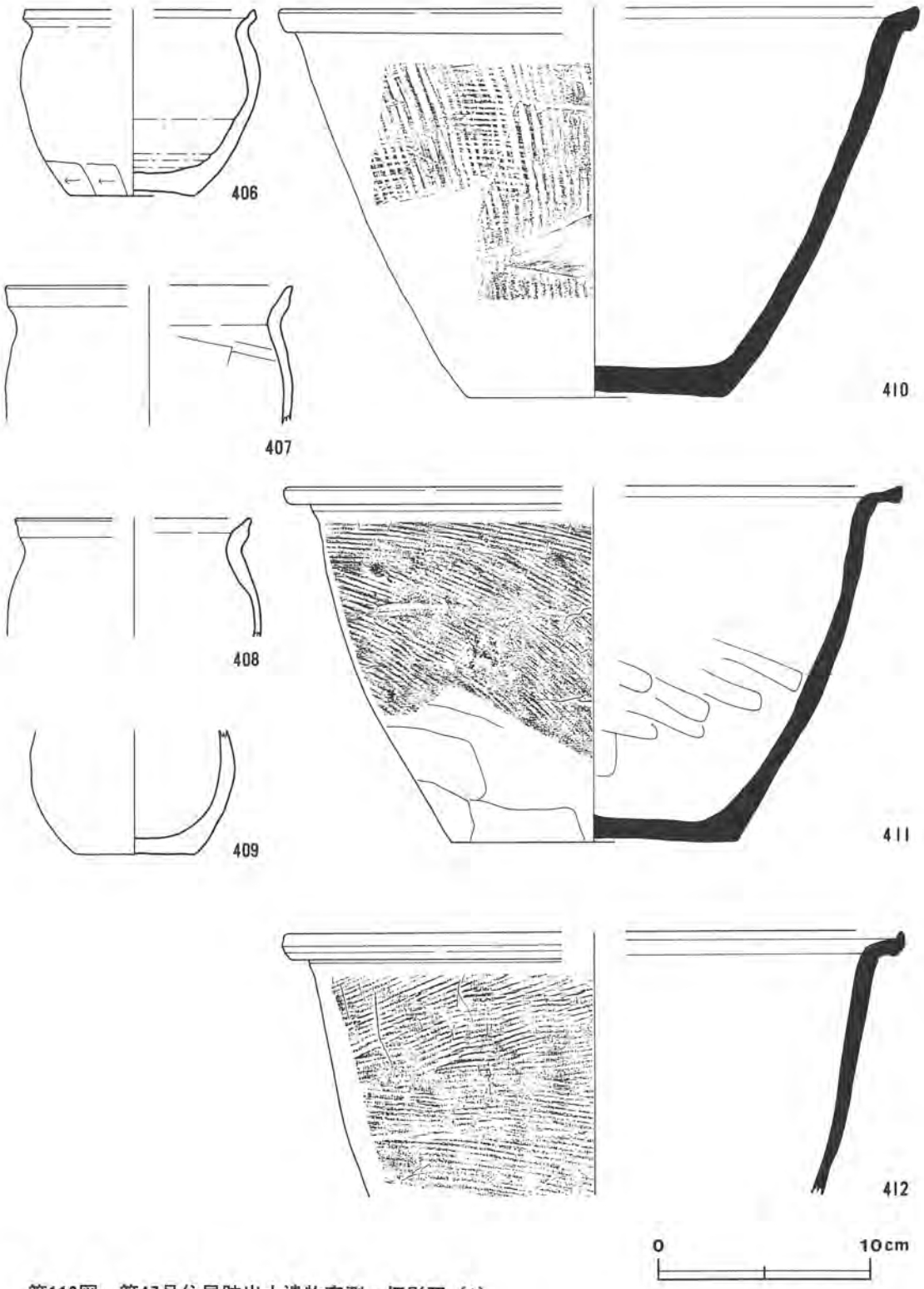
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
411	鉢 須恵器	A [29.2] B 16.8 C [13.6]	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，頸部はほぼ水平に屈曲する。	底部ナデ。胴部外面下位手持ちヘラ削り。上位にかけて平行叩き目。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P288　50% 南西部覆土下層
412	鉢 須恵器	A [29.2] B (12.5)	胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は大きく外反する。口唇部は上方に立ち上がる。	胴部外面平行叩き目。胴部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P289　10% 覆土
413	鉢 須恵器	A [30.0] B (13.2)	胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はほぼ水平に屈曲する。口唇部は上方に立ち上がる。	胴部外面平行叩き目。胴部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P290　10% 南東部覆土上層
414	甑 須恵器	B (15.5) C [13.4]	5孔式。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。上位にかけて平行叩き目。胴部内面下位手持ちヘラ削り，上位にかけて横ナデ。	砂粒・礫 黒褐色 普通	P291　30% 覆土上層



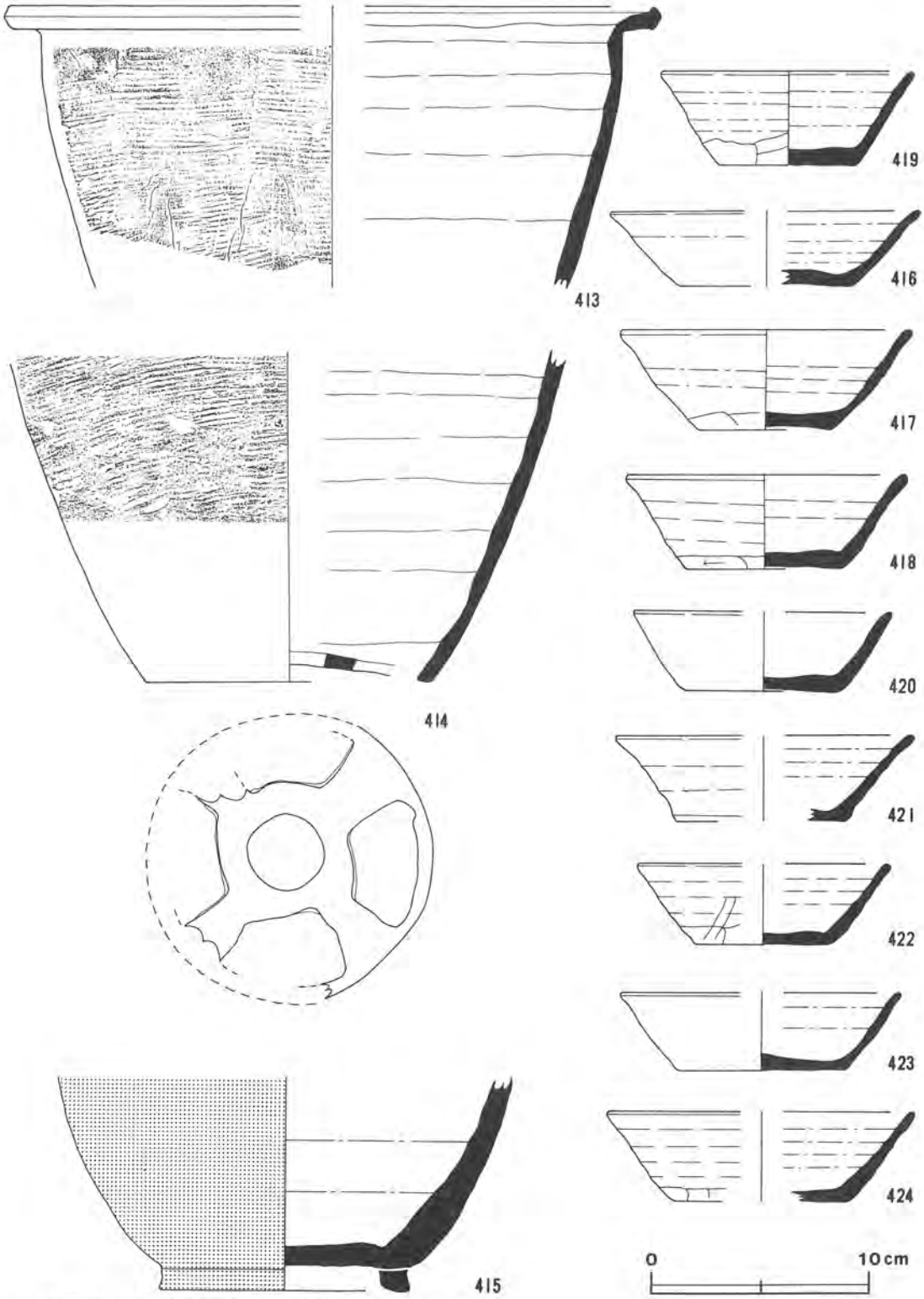
第118図　第47号住居跡遺物出土位置図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
415	壺 須恵器	B (10.0) D 11.4 E 1.1	平底で，『ハ』の字状に開く高台がつく。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。胴部外面釉付着。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P309 30% 南東部床面
416	坏 須恵器	A [14.2] B 3.5 C [7.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P286 30% 南西部覆土中層
417	坏 須恵器	A 13.3 B 4.7 C 6.2	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P292 70% 南東部覆土下層
418	坏 須恵器	A 12.8 B 4.4 C 7.0	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P293 70% 南東部覆土中層
419	坏 須恵器	A 11.5 B 4.4 C 6.2	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P294 70% 南東部床面
420	坏 須恵器	A [11.8] B 3.7 C 7.0	平底。体部は内彎気味に立ち上り，口唇部は尖る。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部内・外面摩耗。	砂粒 灰黄色 普通	P295 60% 南東部覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
421	坏 須恵器	A [13.6] B 4.0 C [7.7]	平底。体部は外反気味に立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P296 30% 南東部覆土中層
422	坏 須恵器	A [11.5] B 3.8 C 6.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P297 40% 南西部覆土上層
423	坏 須恵器	A [12.8] B 3.7 C 7.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P298 40% 南東部覆土
424	坏 須恵器	A [14.0] B 4.2 C [7.8]	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P299 30% 北西部覆土中層
425	坏 須恵器	A [13.8] B 3.7 C [7.4]	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部回転ヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	P300 30% 南東部覆土下層
426	坏 須恵器	A [11.4] B 3.0 C 6.8	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	底部回転ヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P301 30% 中央部覆土上層
427	坏 須恵器	A [10.8] B 3.7 C [6.8]	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P302 20% 南東部覆土
428	盤 須恵器	A 19.2 B 4.2 D 11.5 E 1.0	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は大きく外傾し口縁部は角度を緩めて屈曲する。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P308 70% 北西部床面
429	蓋 須恵器	A 15.1 B 3.3 F 3.4 G 1.2	天井部は低く，緩やかに内彎して口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。端部は短く垂下する。つまみは腰高で中央部が突出する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P304 70% 覆土下層
430	蓋 須恵器	A [14.2] B 3.2 F [3.2] G 1.2	天井部は低く，外反気味に口縁部に至る。口縁部は僅かに内彎し，端部は短く垂下する。つまみは腰高で中央部は突出する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P305 60% 南東部床面
431	蓋 須恵器	A [14.0] B 3.3 F 3.1 G 1.2	天井部は凹み，緩やかに内彎しながら口縁部に至る。口縁部は僅かに外反し，端部は短く垂下する。つまみは腰高で中央部は僅かに突出する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P306 40% 覆土上層
432	蓋 須恵器	A [19.6] B 4.0 F 2.3 G 1.2	天井部は低く，丸味をもって口縁部に至る。口縁部は僅かに外反し，端部は短く垂下する。つまみは宝珠形を呈する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P307 30% 中央部覆土上層
433	蓋 須恵器	A 14.4 B 3.6 G 1.0	天井部は低く平坦で，緩やかに内彎して口縁部に至る。口縁部は僅かに外反し，端部は短く垂下する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰黄色 普通	P303 80% 南東部覆土上層

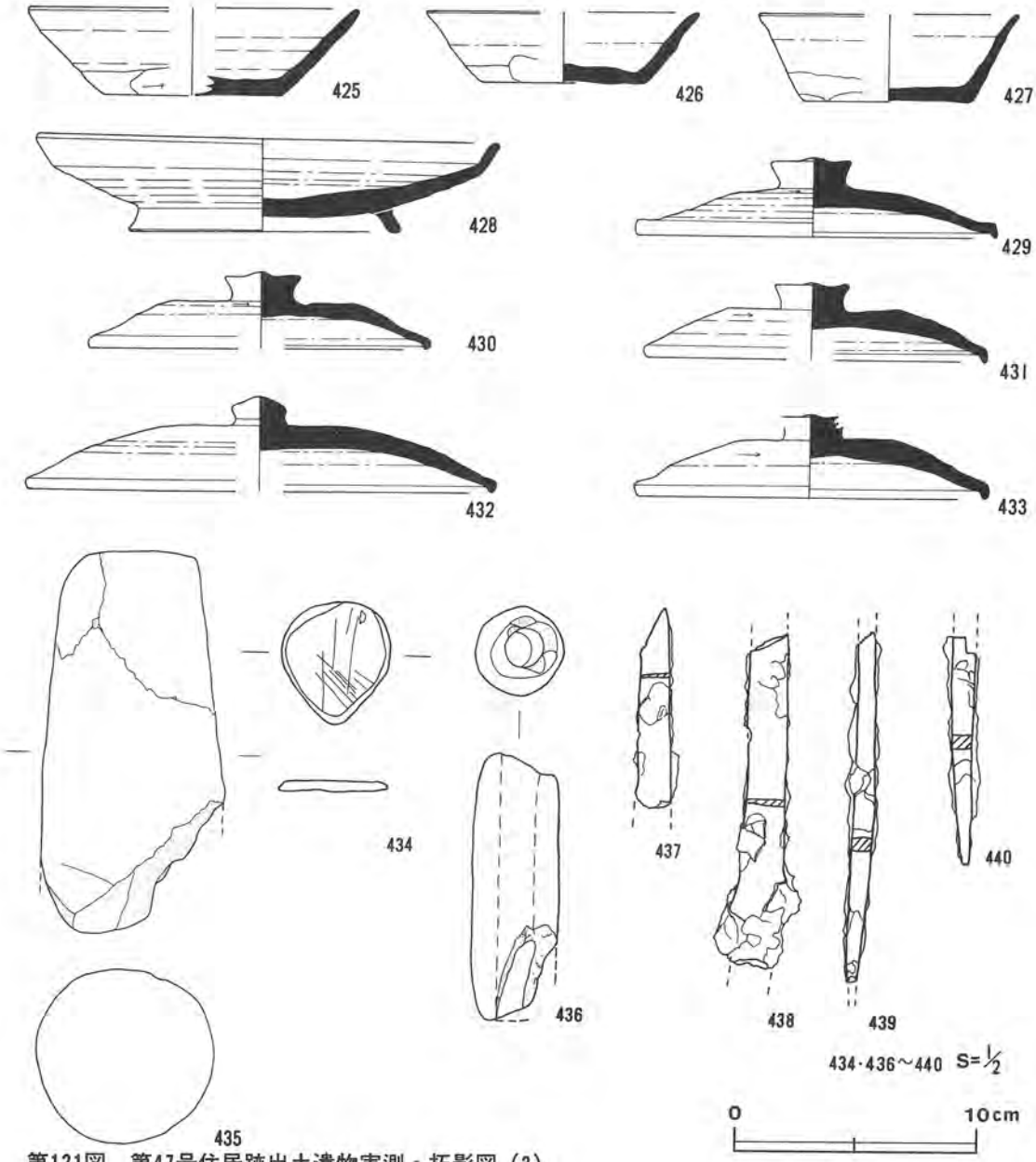


第119図　第47号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）



第120図　第47号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）

図版番号	器種	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
434	石製模造品	3.5	3.1	0.6	—	5.5	100	南西部覆土上層	Q19 頁岩
435	支脚	(16.3)	(7.7)	—	—	(986.7)	70	南東部覆土下層	DP147
436	管状土錘	(7.6)	2.5	—	11.0	(36.5)	80	覆土	DP88
437	刀子	(5.7)	(1.1)	(0.2)	—	(3.5)	40	南東部覆土下層	M21
438	刀子	(9.5)	(1.3)	(0.2)	—	(13.6)	50	北東部床面	M23
439	不明鉄製品	(9.9)	(0.7)	(0.4)	—	(11.3)	50	北西部覆土下層	M24
440	不明鉄製品	(6.5)	(0.7)	(0.4)	—	(5.4)	30	南東部覆土下層	M22



第121図　第47号住居跡出土遺物実測・拓影図（3）

第48号住居跡(第122図)

位置　調査区の南西部，E2a5区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸(3.60)m，短軸(2.20)m。本跡の竈の一部をかけて南東側のほぼ3分の2は，調査区域外にのびているため，平面形はとらえられないが，方形あるいは長方形を呈するものと推定される。

主軸方向　N-0°。

壁　壁高は，北壁で36cm前後を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　本跡の3分の2程は調査区域外にのびているため，北壁下及び西壁下の一部だけしか検出されていないが，壁下を全周するものと考えられる。上幅18～26cm，深さ4～6cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　平坦で，竈の前方は硬く踏み固められている。

竈　北壁中央部付近の壁を36cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ139cm，幅116cmを測る。天井部は崩落している。東袖部の一部は調査区域外で不明であるが，西袖部は良好に遺存している。火床は12cm程掘り窪められ，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

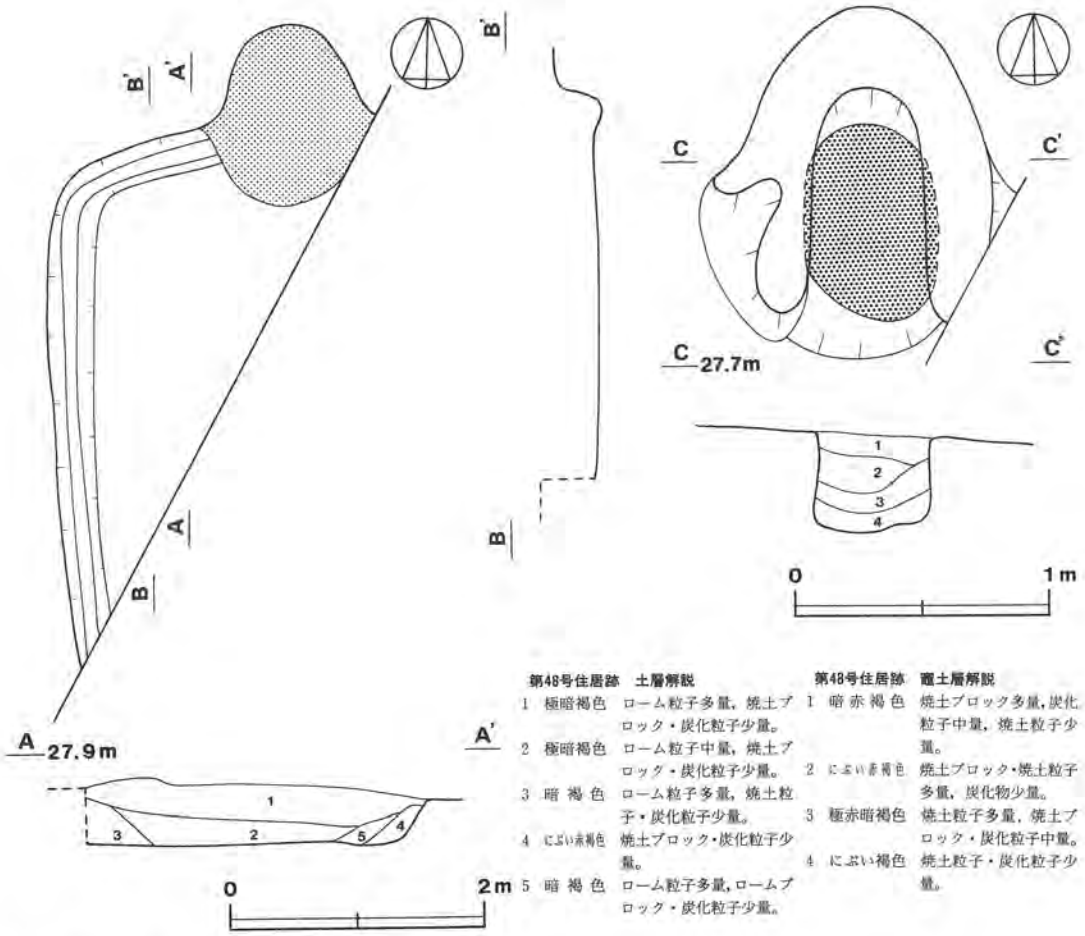
遺物　竈内及び北西部の覆土から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，盤)片が少量出土している。441の土師器の甕と442の須恵器の坏は竈内から，逆位の状態で出土している。443の土師器の高台付坏は北西コーナー付近の覆土中層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図 441	甕 土師器	B (8.4) C 7.6	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面下位ヘラ磨き。胴部内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P310 40% 竈
442	坏 須恵器	A [12.8] B 3.8 C [6.0]	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P312 10% 竈
443	高台付坏 土師器	A 12.7 B 4.9 D 6.2 E 0.5	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部ナデ。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P311 80% 北西部覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
444	球状土錘	2.1	3.1	---	5.0	17.0	100	竈	DP90



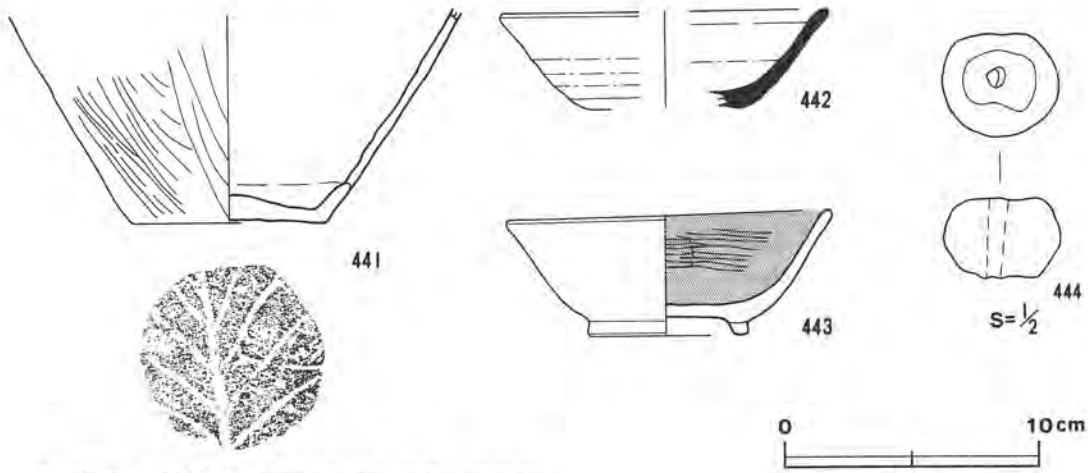
第48号住居跡　土層解説

1	極暗褐色	ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
2	極暗褐色	ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
3	暗褐色	ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4	にぶい赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量。
5	暗褐色	ローム粒子多量，ロームブロック・炭化粒子少量。

第48号住居跡　覆土層解説

1	暗赤褐色	焼土ブロック多量，炭化粒子中量，焼土粒子少量。
2	にぶい赤褐色	焼土ブロック・焼土粒子多量，炭化物少量。
3	極赤暗褐色	焼土粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子中量。
4	にぶい褐色	焼土粒子・炭化粒子少量。

第122図　第48号住居跡実測図



第123図　第48号住居跡出土遺物実測・拓影図

第49号住居跡(第124・125図)

位置　調査区の南東部，E2b_1区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸4.46m，短軸4.18mの方形を呈している。

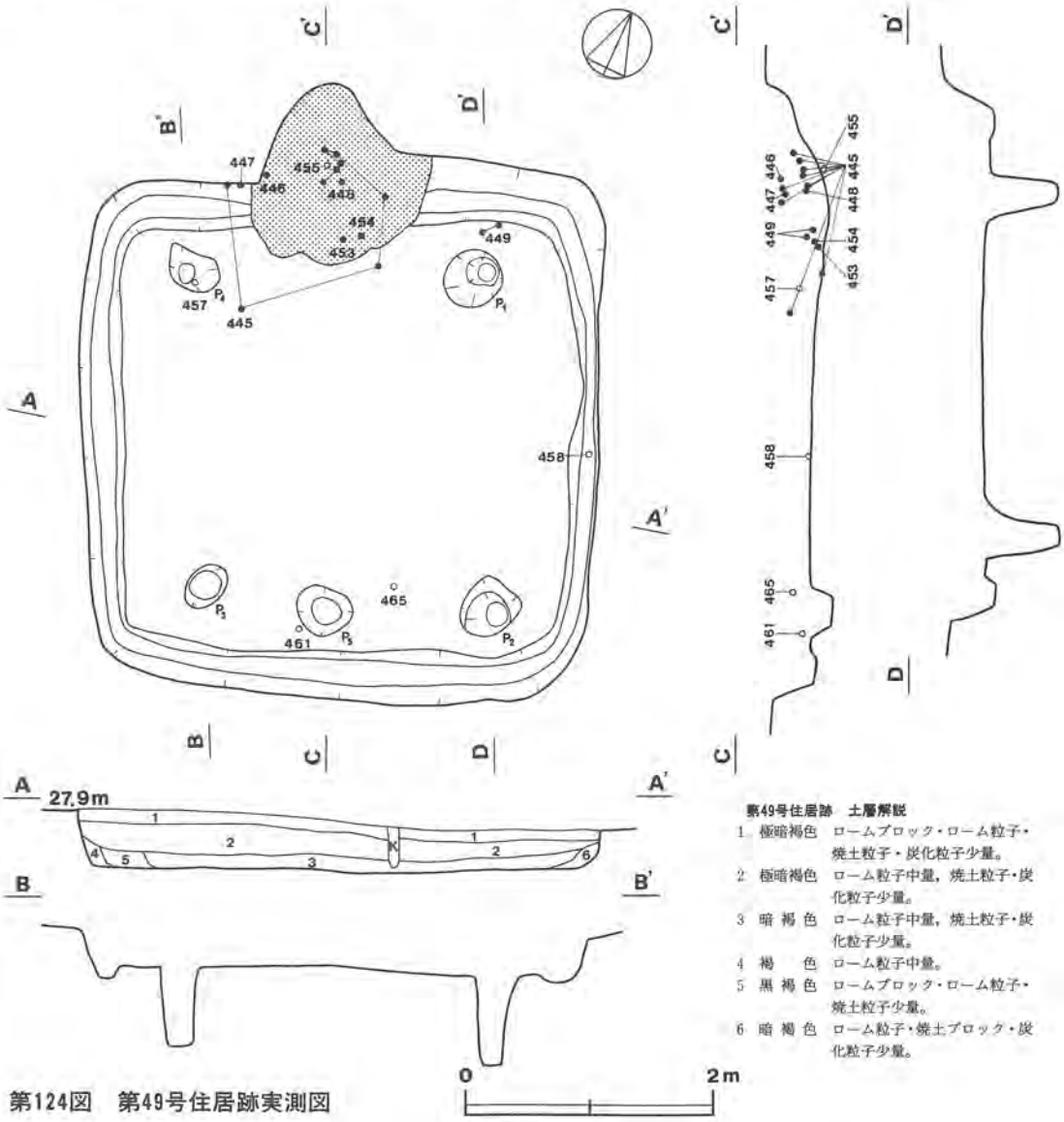
主軸方向　N-23°-W。

壁　壁高は24～34cmを測り，北東・北西壁は垂直に，南東・南西壁は外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅18～28cm，深さ6～10cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　ほぼ平坦で，中央部は踏み固められ堅緻である。

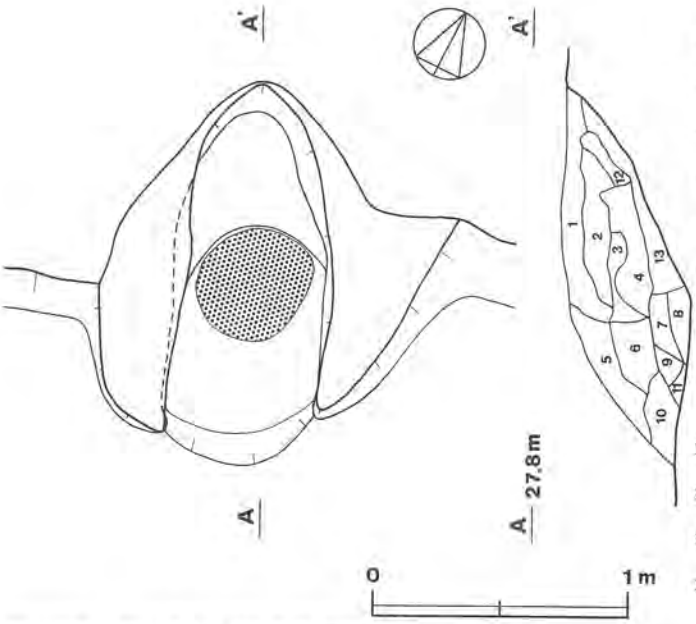
ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径28～52cm，深さ54～74cmで主柱穴，P_5



第49号住居跡　土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
2　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　褐色　ローム粒子中量。
5　黒褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
6　暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量。

第124図　第49号住居跡実測図



第49号住居跡　竈土層解説

1　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量，焼土ブロック少量。
2　褐　　色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量。
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量。
4　暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
5　暗 褐 色　ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量。
6　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
7　暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子少量。
8　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
9　にぶい褐色　焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子少量。
10　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
11　極暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子中量。
12　極暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子中量。
13　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量，ロームブロック少量。

第125図　第49号住居跡竈実測図

は，径44～46cm，深さ18cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北西壁中央からやや南西寄りの壁を69cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土と礫で構築されている。規模は，長さ151cm，幅129cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を6cm 程掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

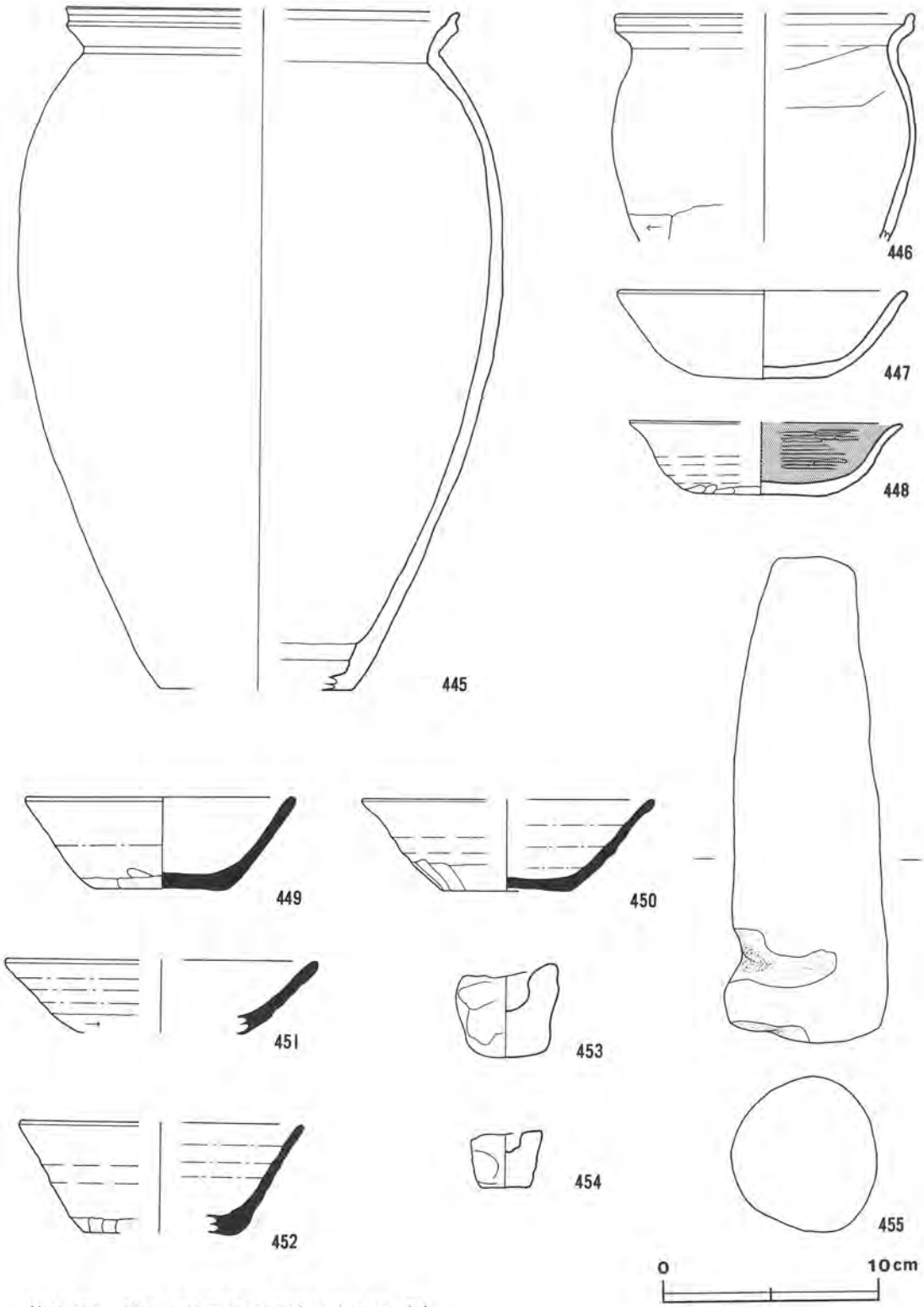
覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層及び下層から，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片等が少量出土している。445と446の土師器の甕と448の土師器の坏はいずれも竈内から逆位の状態で，447の土師器の坏は竈西側の覆土上層から出土している。

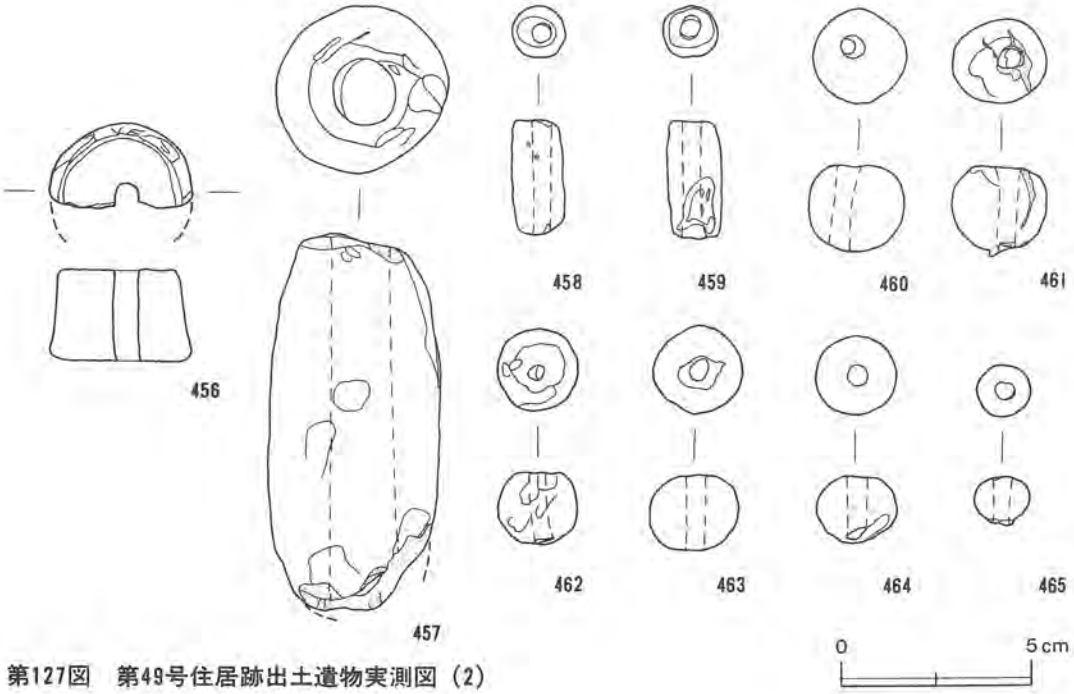
所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第126・127図 445	甕 土　師　器	A［18.1］ B　31.9 C［ 8.8］	胴部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部内・外面剥離。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P313　20% 竈
446	甕 土　師　器	A［13.6］ B（10.7）	胴部は内彎しながら立ち上がり頸部は僅かに外反する。口唇部を上方につまみ出す。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面上位ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 赤褐色 普通	P314　20% 竈



第126図　第49号住居跡出土遺物実測図（1）



第127図　第49号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
447	坏 土師器	A 13.3 B 4.3 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 良好	P315 90% 竈西側覆土上層
448	坏 土師器	A [12.6] B 3.5 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 橙色 良好	P317 70% 竈
449	坏 須恵器	A 12.3 B 4.4 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P316 80% 北東部覆土下層
450	坏 須恵器	A [13.4] B 4.3 C [6.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰色 普通	P320 30% 覆土
451	坏 須恵器	A [14.4] B 3.4 C [7.6]	体部は下位で内彎気味に立ち上がった後，外傾する。	体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P318 10% 覆土
452	坏 須恵器	A [13.0] B 5.2 C [6.8]	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P319 40% 南東部覆土
453	手捏土器	A 4.2 B 4.4 C 3.0	丸底気味。体部は円筒状を呈する。	体外面ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P321 100% 竈
454	手捏土器	A 3.3 B 2.7 C 2.4	平底。体部は円筒状を呈する。	体部外面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P322 100% 竈

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
455	支脚	(22.8)	(7.7)	---	---	(1137.5)	80	竈	DP91
456	紡錘車	3.8	(2.3)	2.4	6.0	(20.6)	50	覆土	DP101
457	管状土錘	(10.0)	4.5	---	18.0	(173.0)	80	北西部覆土中層	DP92
458	管状土錘	3.1	1.4	---	5.0	5.4	100	南東部床面	DP93
459	管状土錘	3.2	1.4	---	7.0	5.7	100	覆土	DP94
460	球状土錘	2.3	2.5	---	6.0	13.5	100	覆土	DP95
461	球状土錘	2.4	2.5	---	7.0	12.0	100	南西部床面	DP96
462	球状土錘	1.9	2.1	---	6.0	8.5	100	覆土	DP97
463	球状土錘	2.0	2.4	---	5.0	8.9	100	覆土	DP98
464	球状土錘	1.8	2.2	---	5.0	6.7	100	覆土	DP99
465	球状土錘	1.4	1.5	---	5.0	1.9	100	南東部覆土中層	DP100

第50号住居跡(第128図)

位置　調査区の南西部，El_{as}区を中心に確認されている。

重複関係　本跡は，第51号住居跡の竈に南西コーナー付近を掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.02m，短軸3.86mの方形を呈している。

主軸方向　N-5°-W。

壁　壁高は32～58cmを測り，東・西壁はほぼ垂直に，北・南壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅20～24cm，深さ4～14cmで，断面形は逆台形状を呈している。南壁側は他より掘り込みが深い。

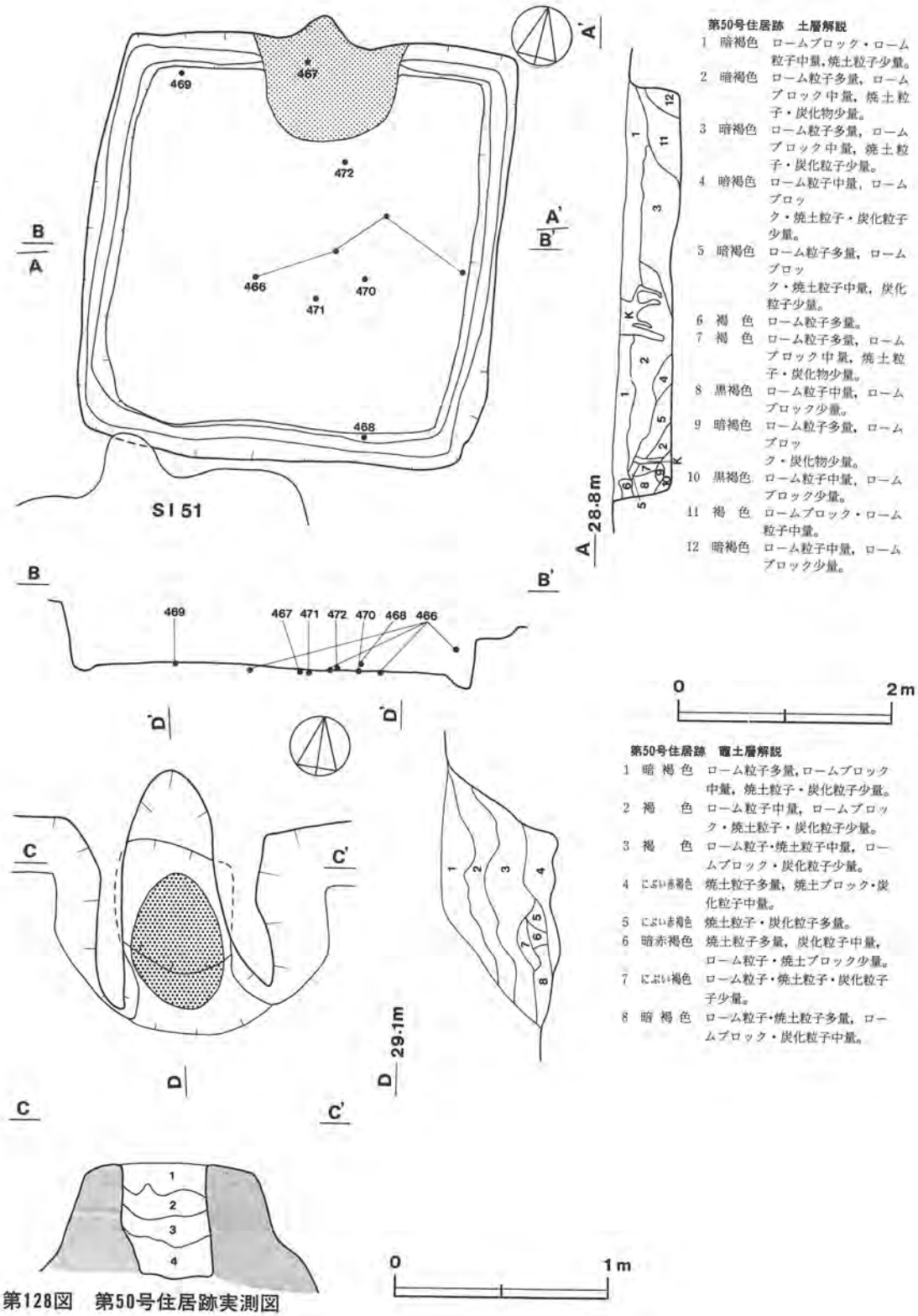
床　平坦で，中央部は踏み固められ堅緻である。

竈　北壁中央部の壁を25cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ125cm，幅129cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は8cm程掘り窪められている。火床及び袖部の内側は，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈周辺及び床面中央部から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，蓋，甑)片等が少量出土している。470の須恵器の坏と471の手捏土器はいずれも南東部床面から横位の状態で，469の須恵器の坏は北西部床面から，472の手捏土器は竈前方の床面からいずれも正位の状態で出土している。467の土師器の甕は竈内から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第51号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第50号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量。
3　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロッ
ク・焼土粒子・炭化粒子少量。
5　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロッ
ク・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
6　褐　色　ローム粒子多量。
7　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量。
8　黒褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
9　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロッ
ク・炭化物少量。
10　黒褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
11　褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量。
12　暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。

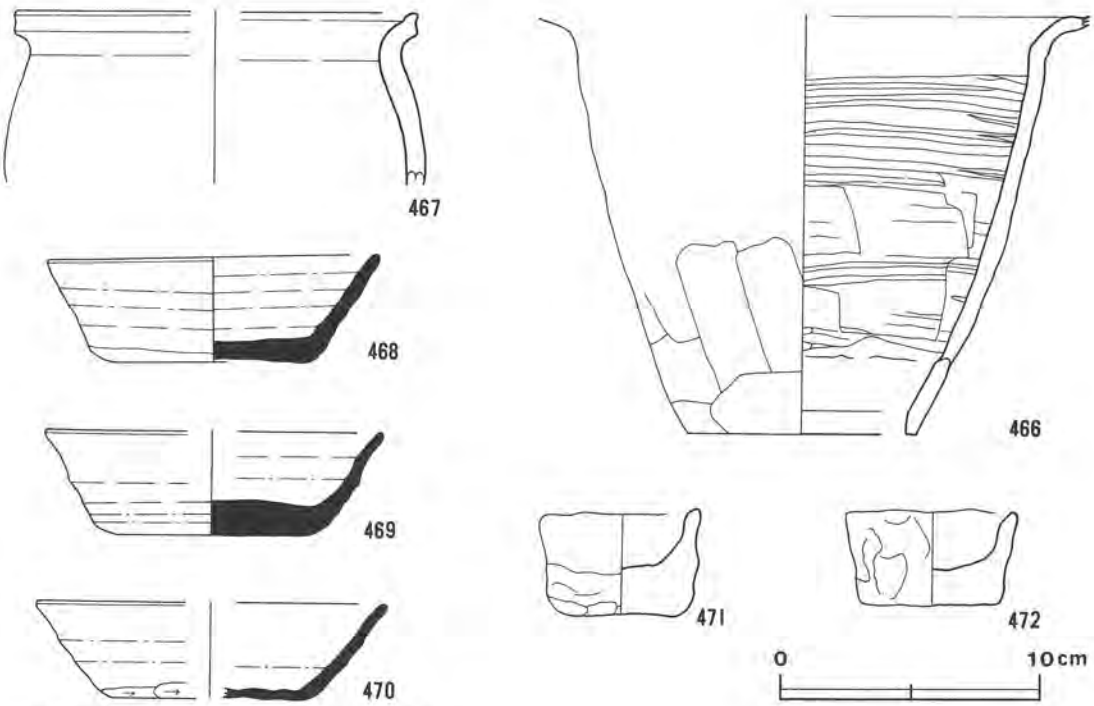
第50号住居跡　竈土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
3　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量。
4　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子中量。
5　にぶい赤褐色　焼土粒子・炭化粒子多量。
6　暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量。
7　にぶい褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
8　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，ロームブロック・炭化粒子中量。

第128図　第50号住居跡実測図

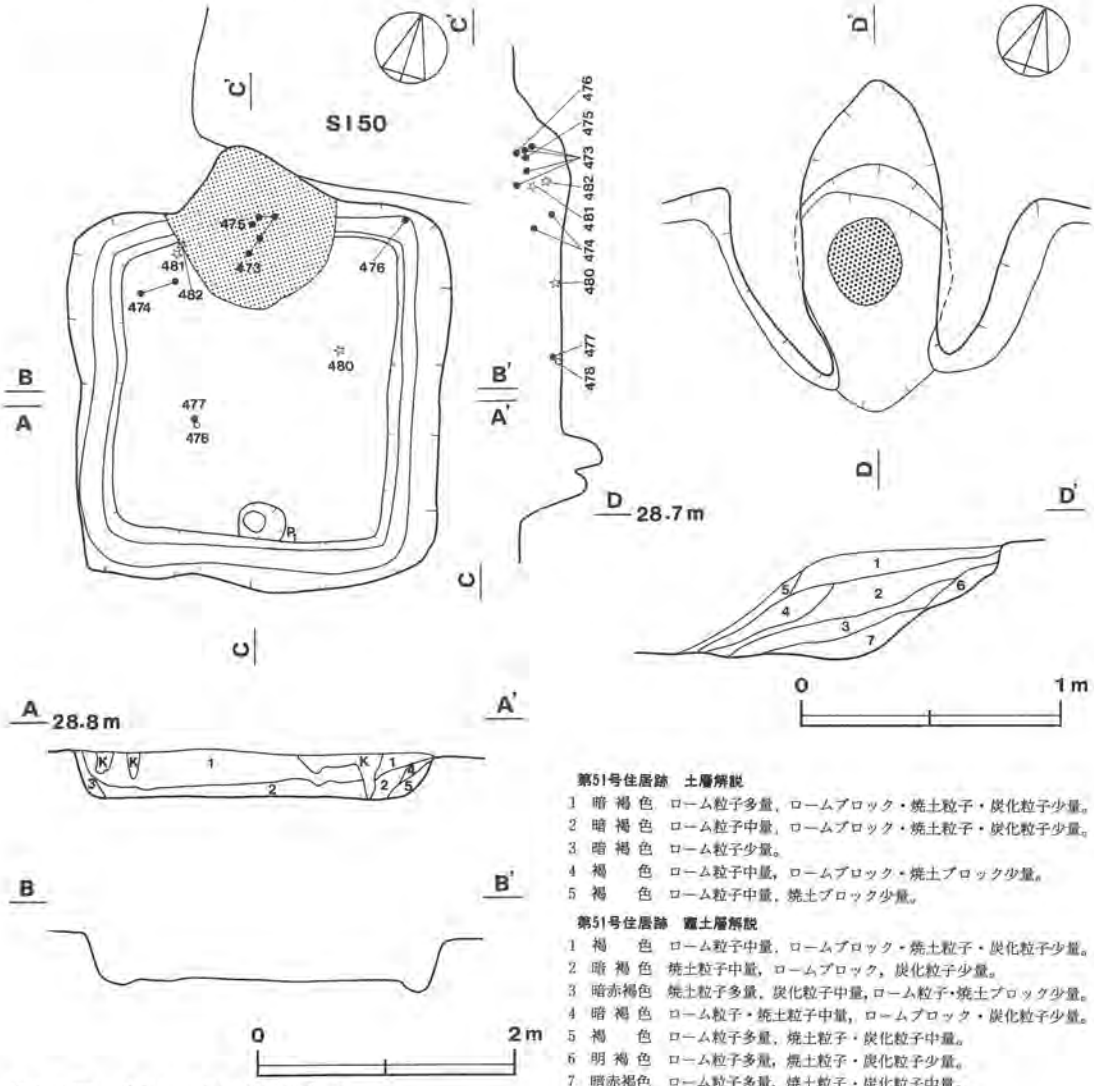
第50号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 466	甑 土師器	B 16.5 C 8.8	無底式。胴部は外傾して立ち上がる。頸部から口縁部にかけ強く外反する。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P324 80% 床面及び覆土上層
467	甕 土師器	A [15.6] B (6.8)	張りの弱い胴部で，頸部は外反して立ち上がる。口唇部を外上方に僅かにつまみ出す。	胴部上位内・外面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P323 10% 竈
468	坏 須恵器	A 13.0 B 4.2 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P325 90% 覆土
469	坏 須恵器	A [13.1] B 4.1 C 8.0	厚い平底。体部は内彎気味に立ち上がり，中位から外反する。	底部一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黒褐色 普通	P326 60% 北西部床面
470	坏 須恵器	A [13.6] B 3.8 C [7.8]	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰白色 普通	P327 40% 南東部床面
471	手捏土器	A 6.0 B 4.3 C 4.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は丸い。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P328 100% 南東部床面
472	手捏土器	A [6.4] B 3.7 C [5.2]	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部及び体部内・外面ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P329 60% 竈前方床面



第129図　第50号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡（第130図）



第51号住居跡　土層解説

1 暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
2 暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
3 暗 褐 色　ローム粒子少量。
4 褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量。
5 褐　　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量。

第51号住居跡　竈土層解説

1 褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
2 暗 褐 色　焼土粒子中量，ロームブロック，炭化粒子少量。
3 暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量。
4 暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量。
5 褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量。
6 明 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
7 暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量。

第130図　第51号住居跡実測図

位置　調査区の南西部，E1b$_9$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の竈は，第50号住居跡の南西コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.08m，短軸2.98mの方形を呈している。

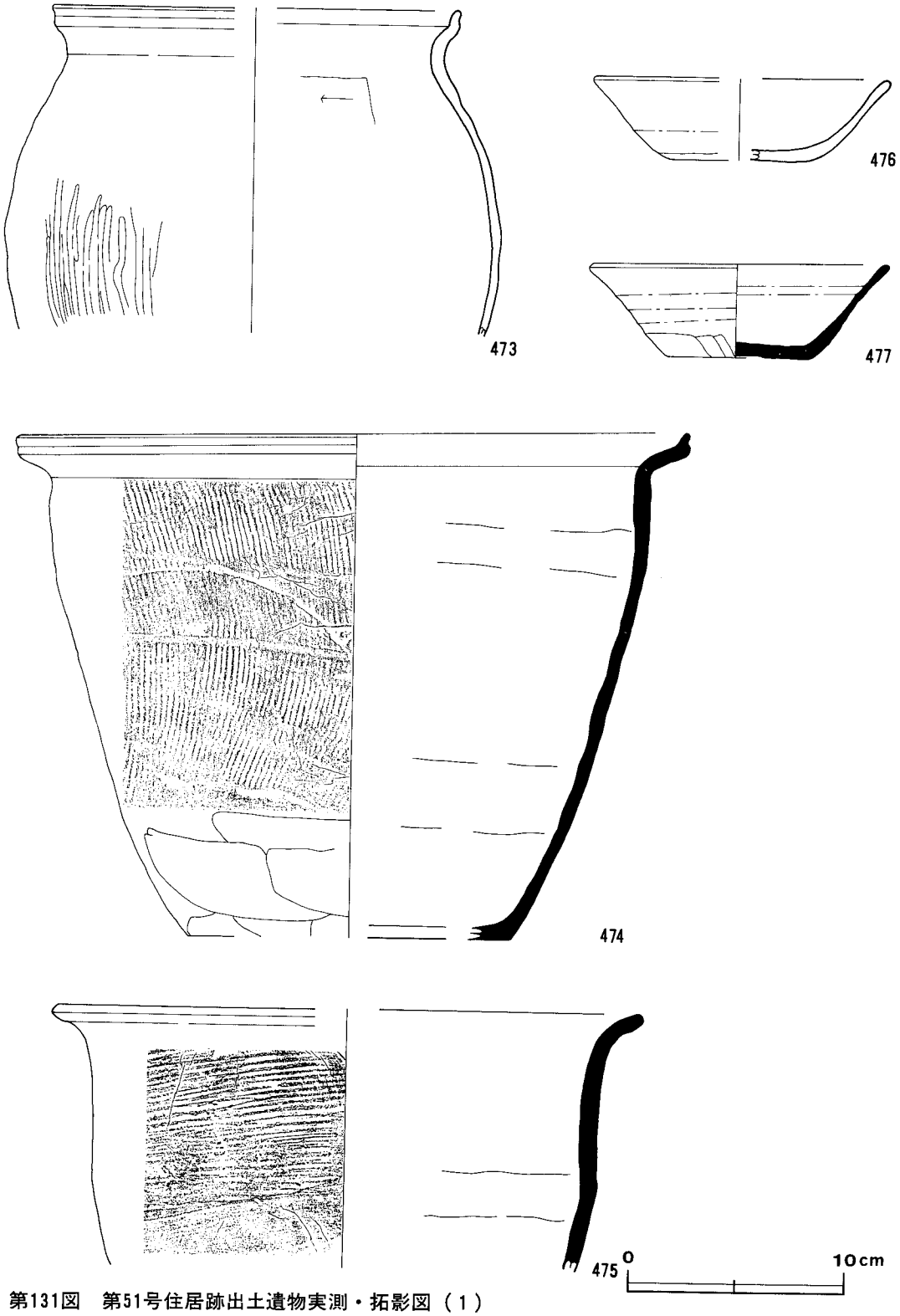
主軸方向　N-19°-W。

壁　壁高は34～38cmを測り，外傾して立ち上がっている。

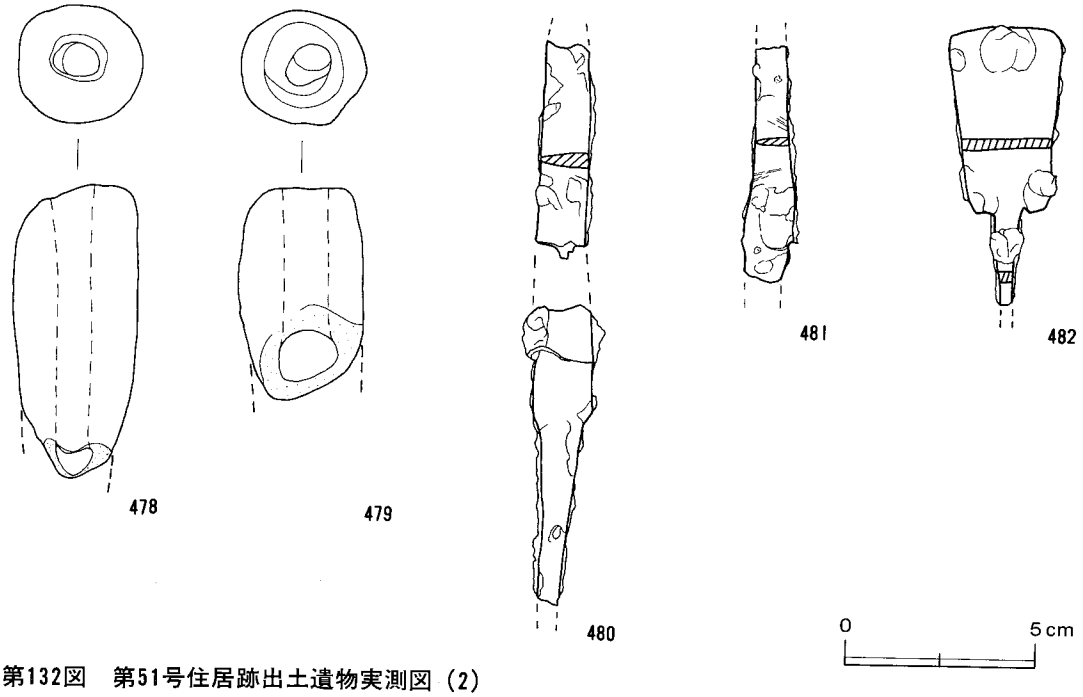
壁溝　壁下を全周している。上幅20～24cm，深さ8～10cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　ほぼ平坦で，硬く踏み固められ堅緻である。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径28～38cm，深さ34cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。



第131図　第51号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）



第132図　第51号住居跡出土遺物実測図（2）

竈　北壁中央部の壁を42cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ131cm，幅120cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を僅かに掘り窪めており，熱をうけて焼土化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈内及び竈周辺を中心に，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，高台付坏)片，鉄製品等が少量出土している。474の須恵器の甑は北西部の覆土下層から出土している。473の土師器の甕は竈内から出土した破片を接合したものである。476の土師器の坏は北東コーナー覆土上層から，477の須恵器の竈は南西部覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第50号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第51号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第131・132図 473	甕 土師器	A [18.8] B (15.3)	胴部は内彎しながら立ち上がり頸部は「く」の字状に外反する。口唇部は外上方につまみ出す。	胴部内面中位から下位縦位のヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P330 10% 竈
474	甑 須恵器	A 31.2 B 23.8 C 15.1	5孔式。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は大きく屈曲する。口唇部は外上方に突出する。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。中位から上位平行叩き目。胴部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P332 80% 北西部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
475	鉢 須恵器	A [27.4] B (12.2)	胴部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口縁部は大きく外反する。	胴部外面平行叩き目。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P333 10% 竈
476	坏 土師器	A [13.6] B 4.0 C [6.4]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，中位で僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P331 40% 北東コーナー 覆土上層
477	坏 須恵器	A 13.6 B 4.5 C 6.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，中位で一旦器厚を減じて外反する。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	P334 70% 南西部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
478	管状土錘	(7.8)	3.3	---	11.0	(65.1)	80	南西部床面	DP102
479	管状土錘	(5.6)	3.3	---	12.0	(39.1)	70	覆土	DP103
480	刀子	(15.0)	(1.6)	(0.4)	---	(23.5)	60	北東部床面	M25
481	刀子	(6.3)	(1.3)	(0.2)	---	(7.5)	50	北西部覆土上層	M26
482	不明鉄製品	(7.4)	3.1	(0.3)	---	(20.0)	90	竈	M27

第52号住居跡(第133図)

位置　調査区の南西部，E1c$_7$区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸2.90m，短軸2.68mの方形を呈している。

主軸方向　N-13°-W。

壁　壁高は34～38cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅17～20cm，深さ3～4cmで，断面形は皿状を呈している。

床　全体的に凸凹で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

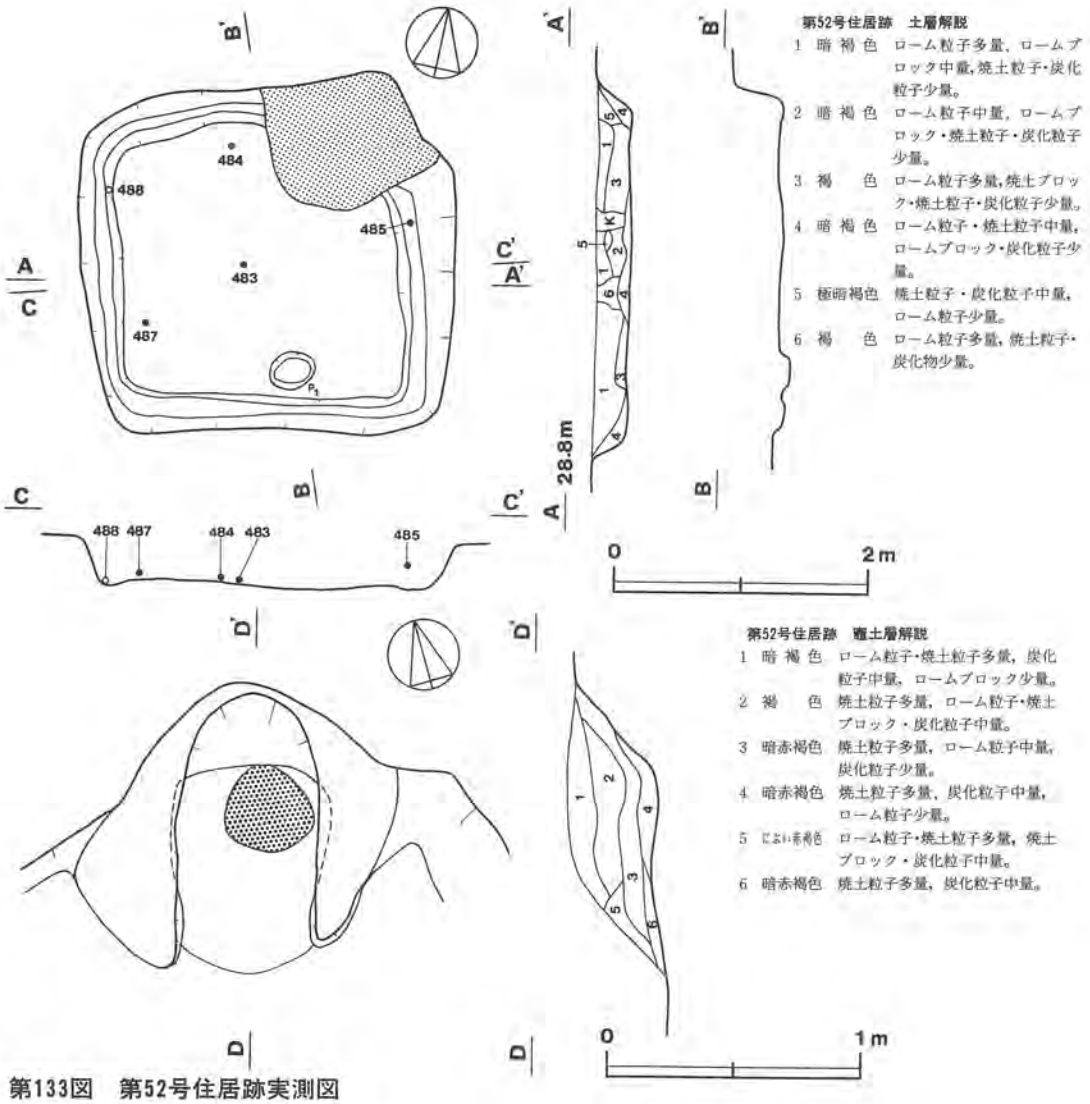
ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径30～40cm，深さ8cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北東コーナー部を15cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ110cm，幅123cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を3cm程掘り窪めており，熱をうけて赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土全域から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が少量出土している。483と484の土師器の甕が中央部床面及び北西部床面からそれぞれ出土している。485は須恵器の坏で北東部覆土上層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，当遺跡で，唯一北東コーナー部に竈を付設する住居跡である。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



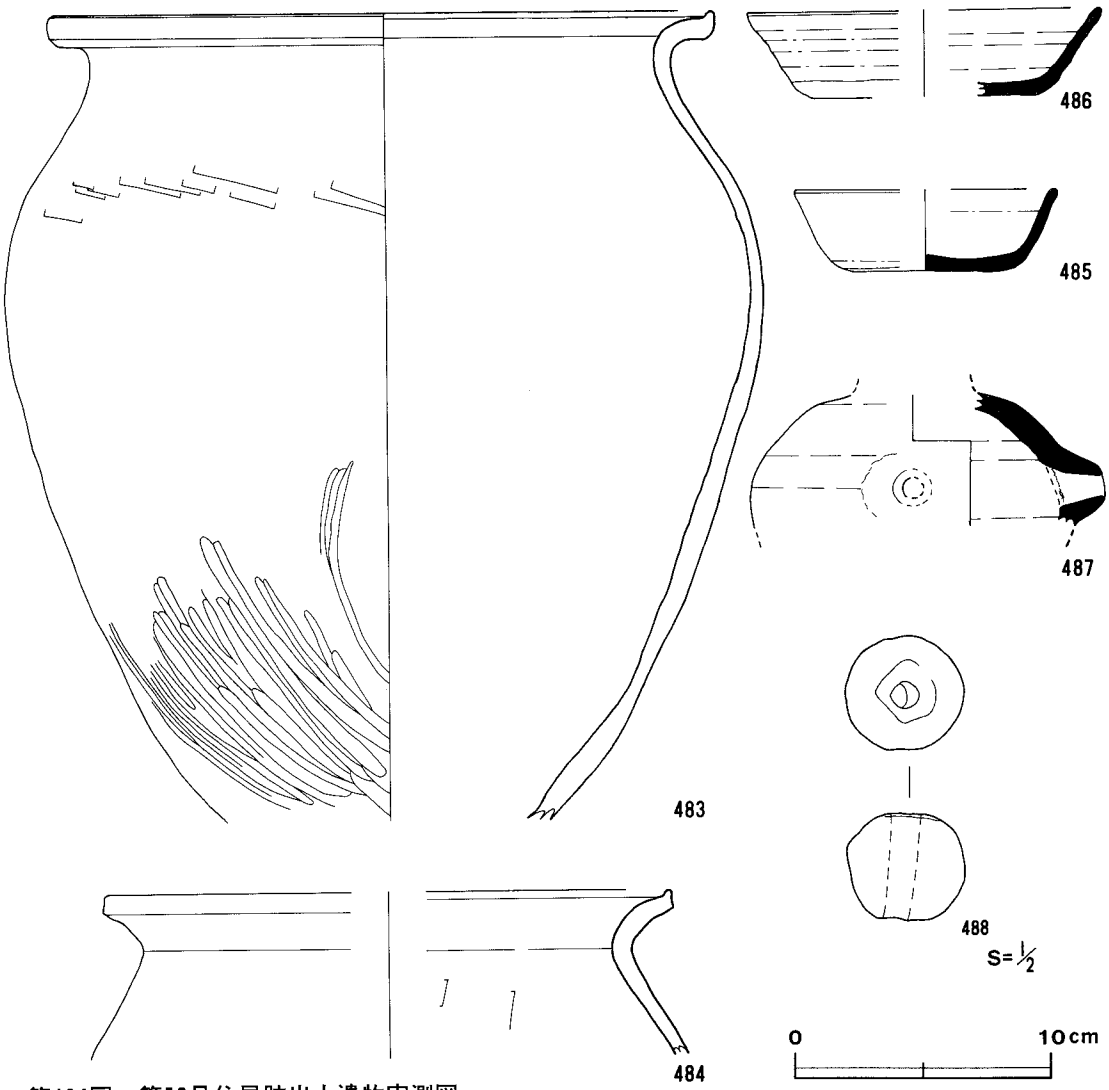
第133図　第52号住居跡実測図

第52号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 483	甕 土師器	A 25.6 B (31.9)	胴部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を僅かにつまみ出す。	胴部外面下位ヘラ磨き。上位ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P335 60% 中央部床面
484	甕 土師器	A [22.0] B (6.6)	頸部は「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口唇部を上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	P336 10% 北西部床面
485	坏 須恵器	A [10.0] B 3.2 C [6.0]	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄褐色 良好	P337 30% 北東部覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
486	坏 須恵器	A [13.8] B 3.4 C [8.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P338 10% 南西部覆土
487	甕 須恵器	B (5.3)	1cm程つき出た注口部をもつ。	内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P339 10% 南西部床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
488	球状土錘	2.8	3.2	---	8.0	25.5	100	北西部床面	DP104



第134図　第52号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡(第135図)

位置　調査区の南西部，E1d$_6$区を中心に確認されたが，北東部の一部を除いて，大半が調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の南東部は第58号住居跡の北西壁に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡の大半は調査区域外にのびているうえ，第58号住居跡に掘り込まれているため，規模及び平面形はとらえられない。

主軸方向　不明。

壁　東壁の一部だけが，検出されている。壁高は15cm を測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　検出されている部分は，上幅10～16cm，深さ4～5cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　凸凹で，硬く踏み固められている。

竈　東壁を僅かに掘り込んで構築されているが，全体の2分の1程は調査区域外にのびている。遺存状態は悪く，痕跡をとどめる程度である。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から，土師器片6点と須恵器片2点が出土している。

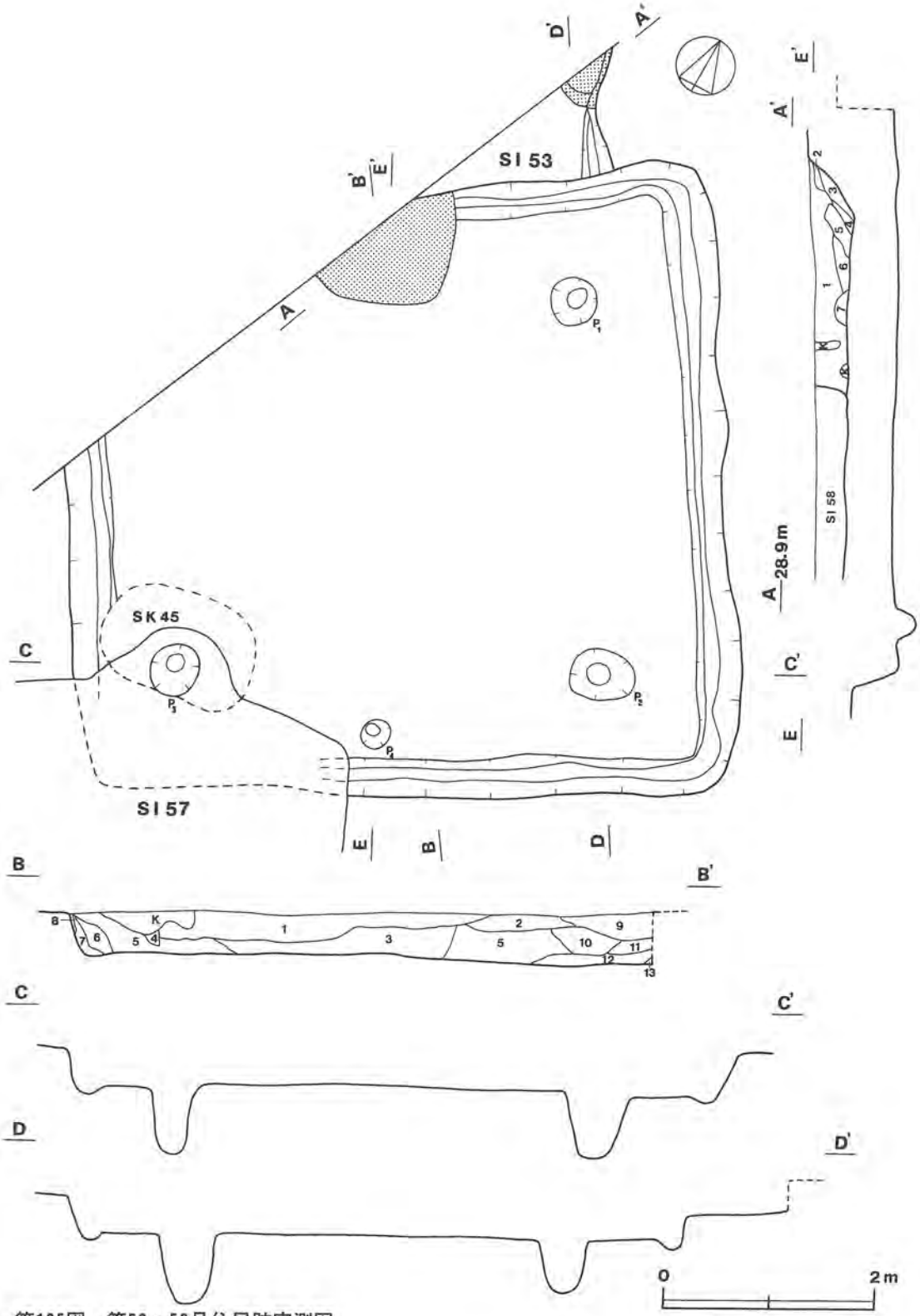
所見　本跡は，一部分しか検出されていないが，重複関係から第58号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第53号住居跡　土層解説

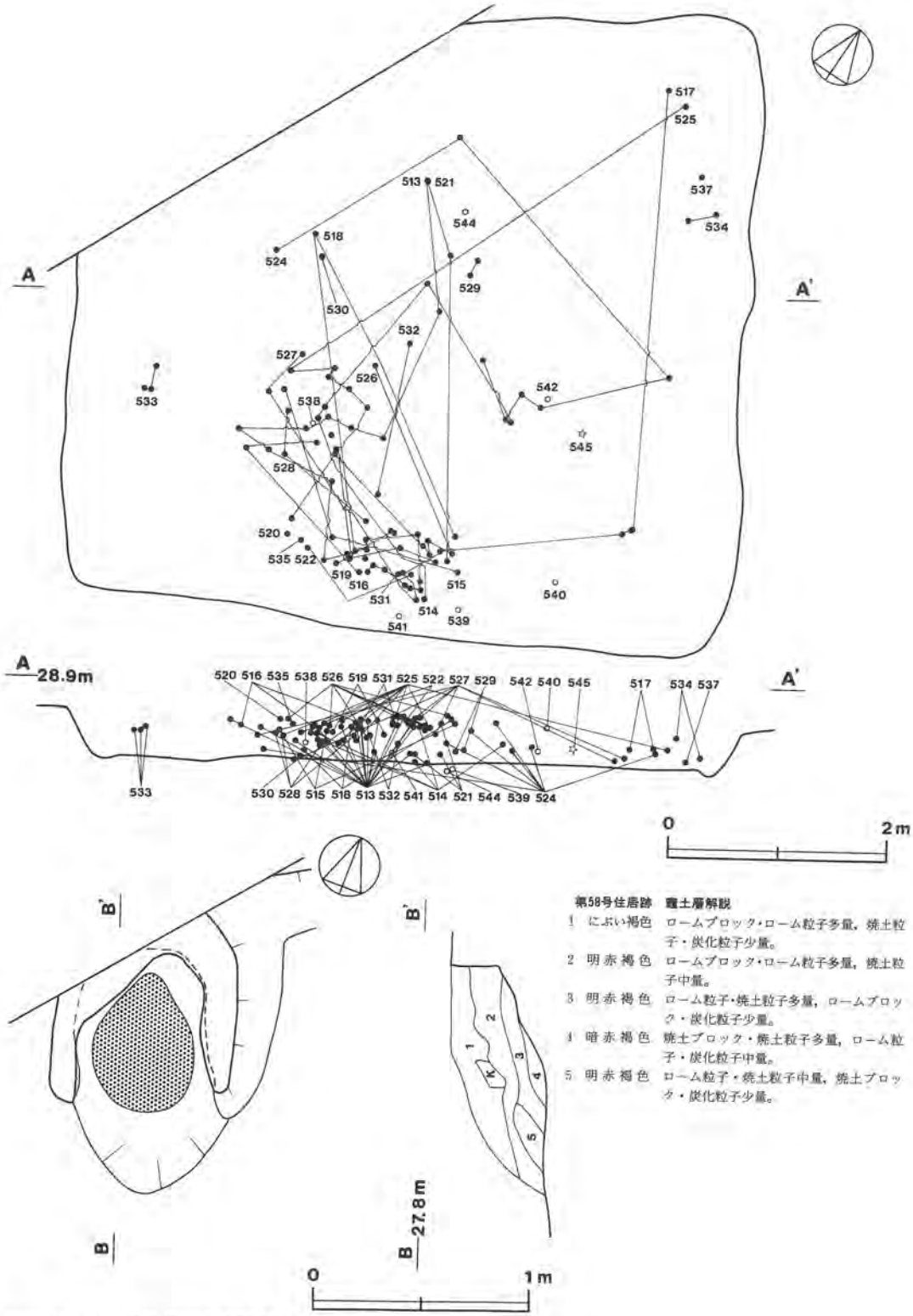
1　褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
2　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
3　赤 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
4　明赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
5　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量。
6　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
7　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。

第58号住居跡　土層解説

1　極明褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量。
2　極明褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
4　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
5　明 褐 色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
6　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子中量。
7　褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
8　明 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。
9　極暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
10　極暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
11　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子少量。
12　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子中量。
13　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。



第135図　第53・58号住居跡実測図



第58号住居跡　竈土層解説

1　にぶい褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。

2　明赤褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子中量。

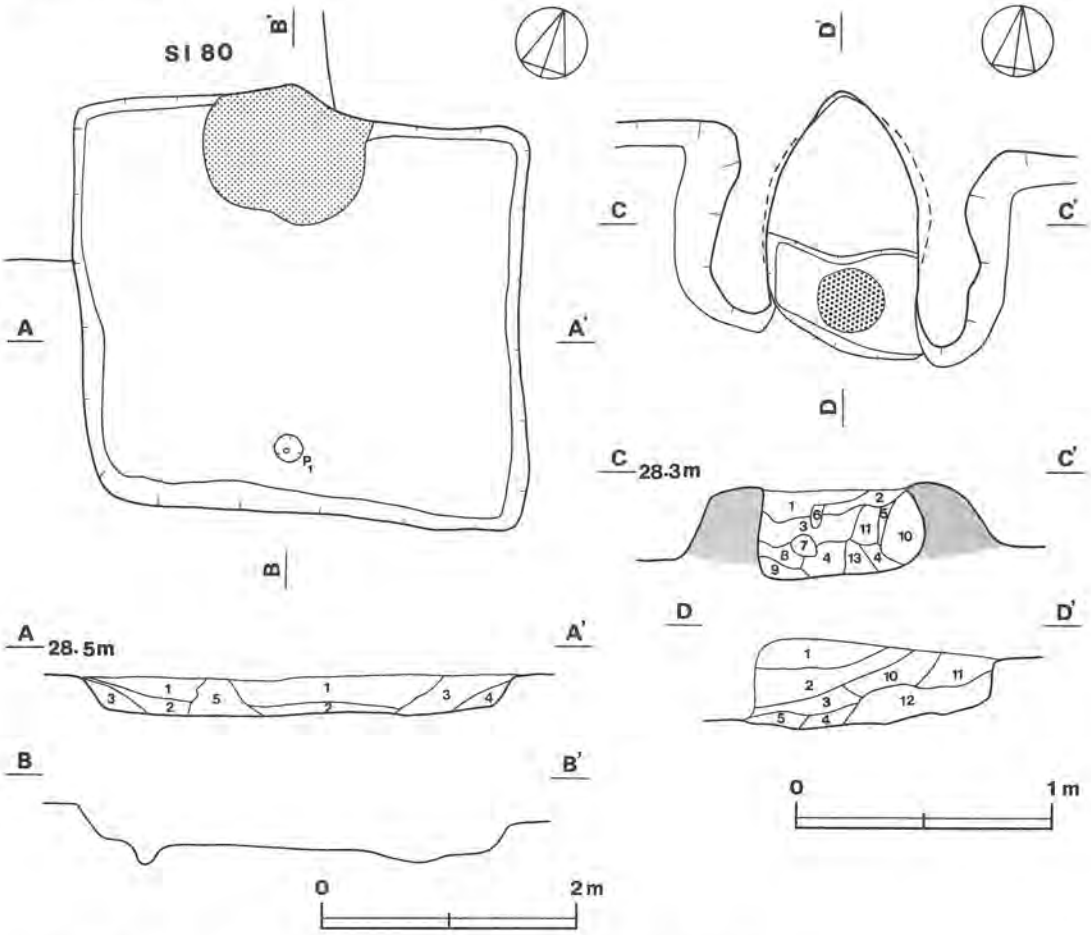
3　明赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，ロームブロック・炭化粒子少量。

4　暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子中量。

5　明赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。

第136図　第58号住居跡竈実測・遺物出土位置図

第54号住居跡（第137図）



第54号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量。
3　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
4　褐　色　ロームブロック多量。
5　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。

第54号住居跡　竈土層解説

1　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子多量，炭化粒子少量。
2　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子中量。
4　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子中量。
5　赤 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
6　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
7　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子・炭化物少量。
8　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子中量。
9　にぶい赤褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子中量。
10　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量，ロームブロック少量。
11　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量。
12　にぶい暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子中量。
13　褐　　色　ロームブロック中量。

第137図　第54号住居跡実測図

位置　調査区の南西部，E2g_2区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西部は，第80号住居跡の南東コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.44m，短軸3.12mの方形を呈している。

主軸方向　N-10°-W。

壁　壁高は32～36cm を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　全体的に凸凹で，踏み固めら堅緻であるが，北東部はやや窪んでいる。

竈　北壁中央部の壁を19cm 程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ100cm，幅130cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を7cm 程掘り窪めており，熱をうけて赤変硬化している。煙道は火床からほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

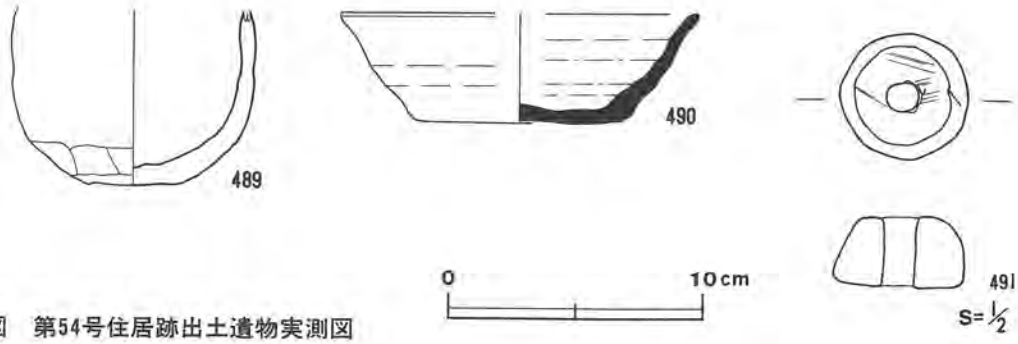
遺物　覆土中から，土師器(坏，甕，高台付坏)片，須恵器(坏，甕，蓋，高台付坏)片，石製品(紡錘車)が少量出土している。489の土師器の小形甕と490の須恵器の坏は竈内から，それぞれ逆位及び正位の状態で出土している。491の紡錘車は北西部の覆土下層から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第80号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第54号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 489	甕 土師器	B (6.9) C 3.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び胴部下位手持ちヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P340 30% 竈
490	坏 須恵器	A [14.2] B 4.3 C [8.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 褐灰色 普通	P341 60% 竈

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
491	紡錘車	3.4	3.3	1.9	10.0	37.9	100	北西部 覆土下層	Q20 滑石



第138図　第54号住居跡出土遺物実測図

第55号住居跡(第139・140図)

位置　調査区の南西部，E$\mathrm{I}h_6$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東コーナー付近は第46号土坑に，南東コーナーは第2号溝に掘り込まれている。北西コーナー付近を除き，本跡の大半は第56号住居跡の北西部を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.96m，短軸4.68mの方形を呈している。

主軸方向　N-13°-W。

壁　壁高は18～34cm を測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅16～18cm，深さ4～10cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　全体的に凸凹で，踏み固められ堅緻である。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径28～44cm，深さ21～22cm で主柱穴，P_5は，径24～26cm，深さ21cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部からやや西寄りの壁を5cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ120cm，幅122cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を10cm 程掘り窪めており，焼土，灰が厚く堆積している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

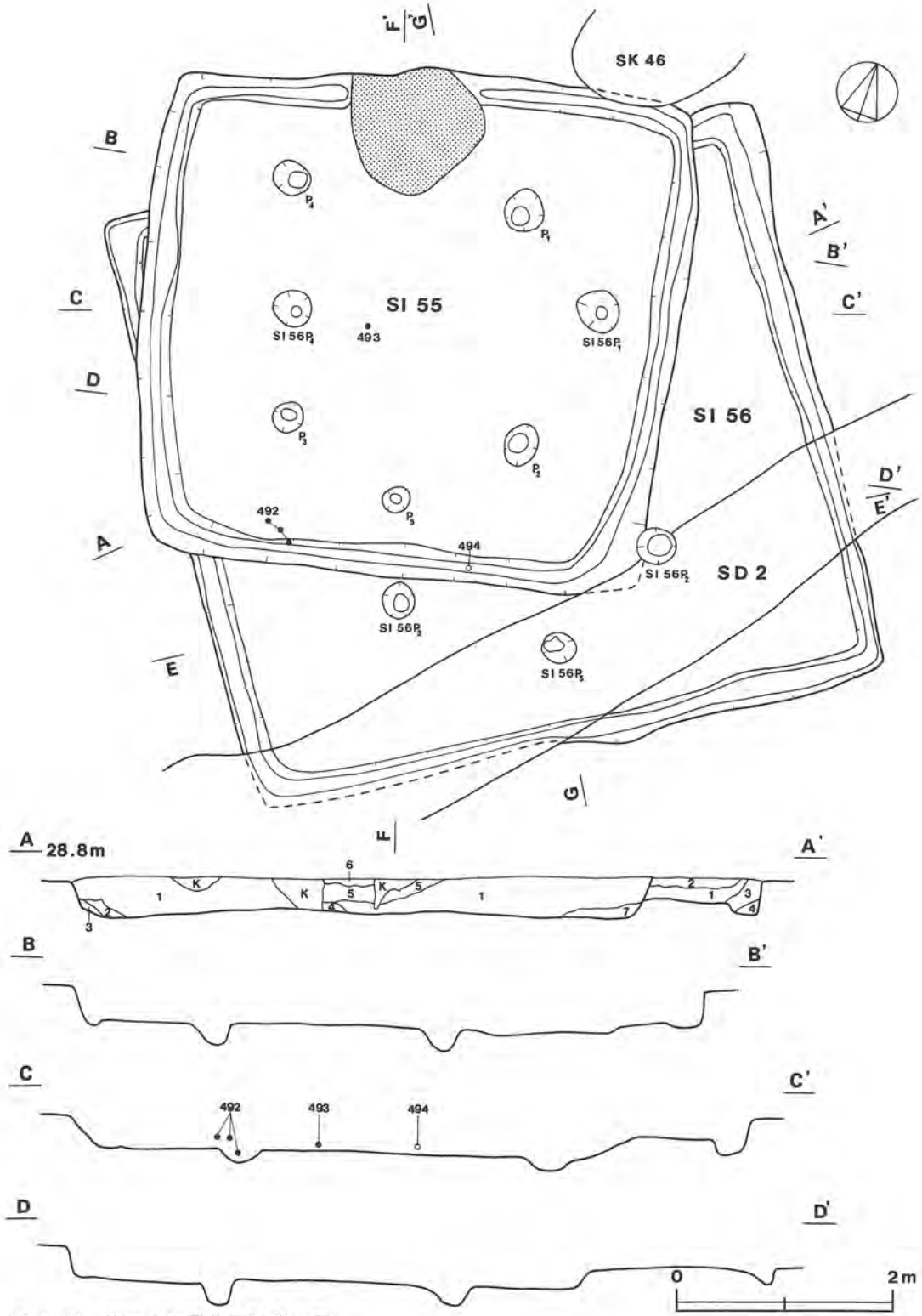
遺物　覆土下層及び床面から，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片，土製品(紡錘車，球状土錘)等が多量に出土している。493の須恵器の坏は中央部床面から，494の紡錘車は南東部覆土下層からそれぞれ正位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第56号住居跡より新しく，第46号土坑及び第2号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

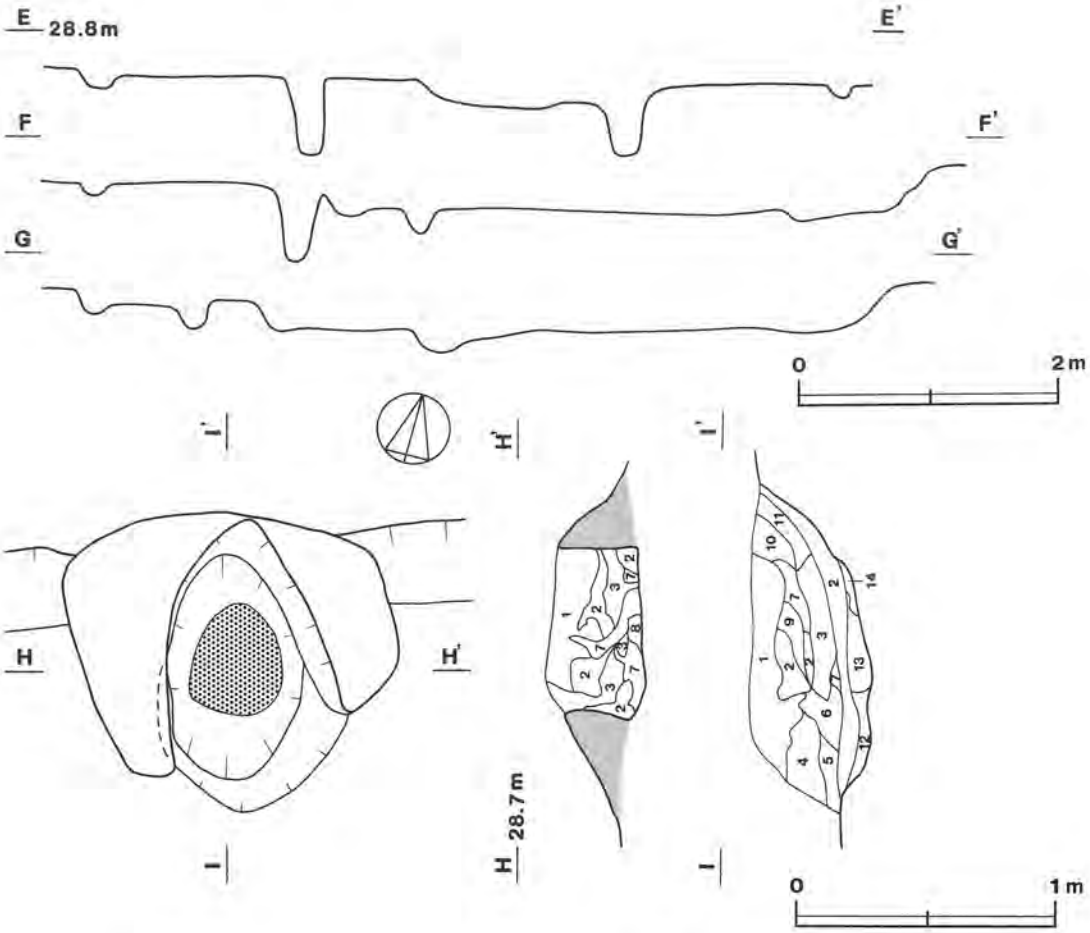
第55号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第141図 492	甑 土師器	B (22.7) C [11.0]	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。胴部内面下位手持ちヘラ削り後ヘラ磨き。中位ヘラナデ。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P344　30% 南西部覆土下層
493	坏 須恵器	B (2.7) C [9.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P343　20% 中央部床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
494	紡錘車	4.8	4.5	2.4	8.0	58.3	100	南東部 覆土下層	DP107
495	球状土錘	2.2	2.5	---	7.0	11.0	100	覆土	DP106



第139図　第55・56号住居跡実測図



第55号住居跡　土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量。
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量。
3　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。
4　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。
5　極暗褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
6　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子少量。
7　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。

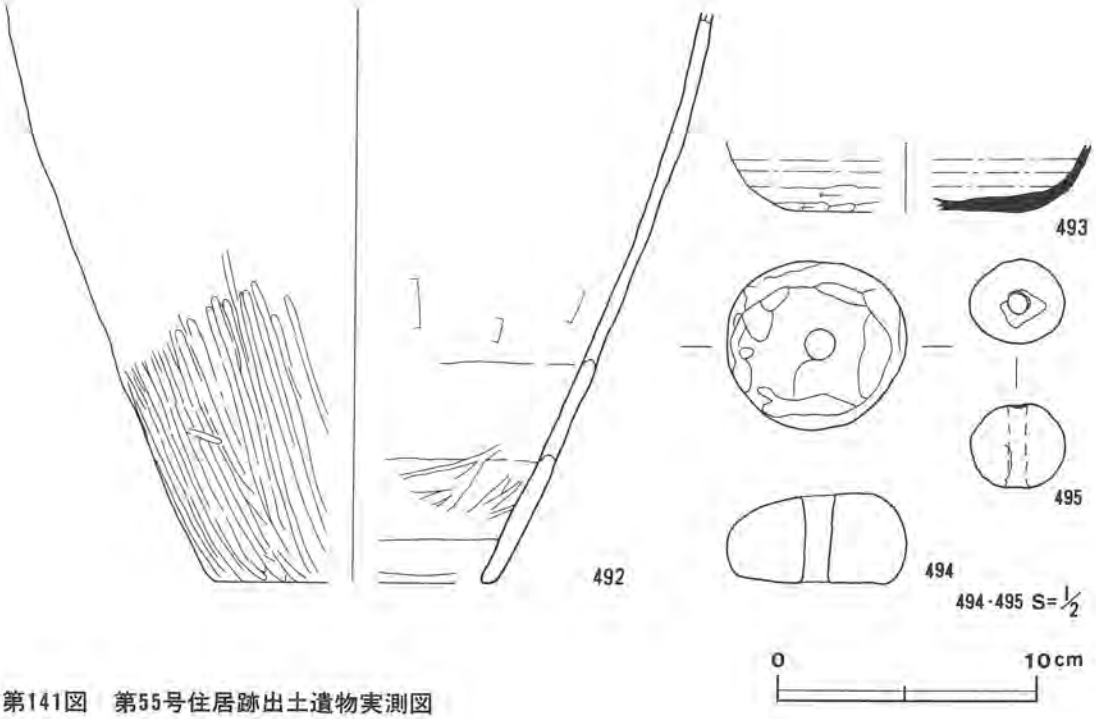
第55号住居跡　覆土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　にぶい褐色　焼土ブロック中量。
3　暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量。
4　褐　　色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量，炭化物少量。
5　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量。
6　灰 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量。
7　暗赤褐色　ロームブロック・焼土粒子多量，焼土ブロック少量。
8　暗赤褐色　焼土ブロック多量，焼土粒子中量，炭化物少量。
9　灰 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック中量。
10　暗赤褐色　ロームブロック・焼土粒子多量，焼土ブロック少量。
11　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子多量，焼土ブロック中量，炭化物少量。
12　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
13　にぶい赤褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量。
14　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。

第56号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
2　暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量。
3　暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
4　黒褐色　ローム粒子中量。

第140図　第55・56号住居跡実測図



第141図　第55号住居跡出土遺物実測図

第56号住居跡(第139・140図)

位置　調査区の南西部，Elh_6区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西部は第55号住居跡に，東コーナー付近から南コーナー付近にかけては，第2号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸6.02m，短軸5.46mの長方形を呈している。

主軸方向　N-30°-W。

壁　上位の大半は削平されている。壁高は5～18cm を測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　北東壁下，南東壁下及び南西壁下の一部から検出されており，壁下を全周するものと考えられる。上幅18～26cm，深さ12～14cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　凸凹で，踏み固められている。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1とP_4は第55号住居跡の床下から検出されている。上位が削平されているため深さは13～21cm と浅い。P_2とP_3は径30～34cm，深さ61～64cm を測る。P_1～P_4は主柱穴，P_5は径28～32cm，深さ26cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北西壁の中央部付近に付設されていたものと考えられるが，第55号住居跡に掘り込まれ，検出されていない。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から土師器片24点，竈内から支脚の代用と考えられる粘土塊が1点出土している。

所見　本跡は，重複関係から第55号住居跡及び第2号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第57号住居跡(第142図)

位置　調査区の南西部，$E1f_6$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡は，東壁のほぼ中央部を第44号土坑に，南壁の中央部付近を第46号土坑に掘り込まれている。本跡の北東部は第58号住居跡の南コーナー付近を掘り込み，第45号土坑と竈付近で重複している。

規模と平面形　長軸3.88m，短軸3.74mの方形を呈している。

主軸方向　N-17°-W。

壁　壁高は20～36cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅22～24cm，深さ4～10cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　中央部付近は僅かに盛り上がり，特に踏み固められ堅緻である。

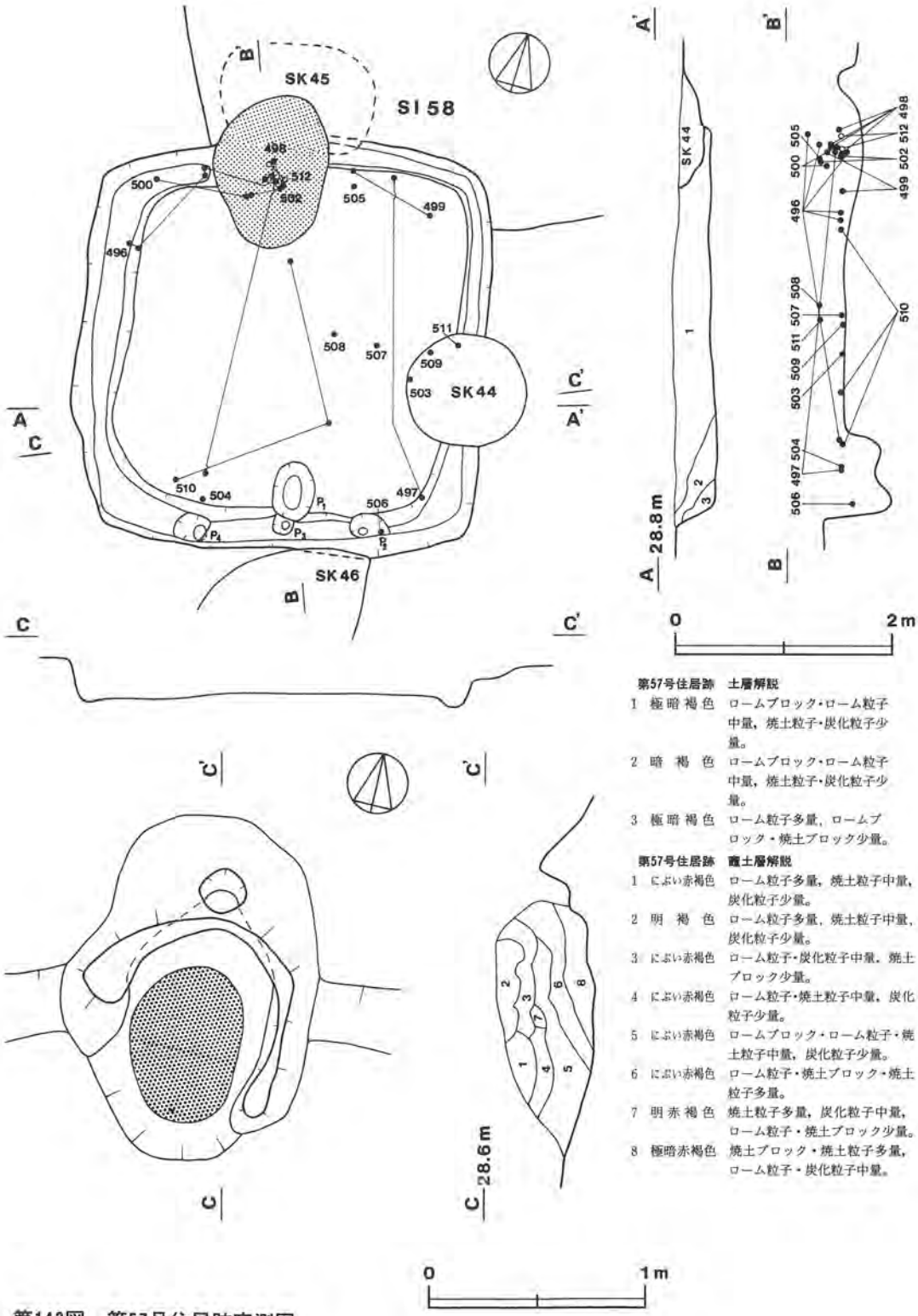
ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1は，径40～56cm，深さ36cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。P_2～P_4は径18～36cm，深さ31～38cmで，いずれも南壁際に掘られているが，性格は不明である。

竈　第58号住居跡の上位から検出されている。北壁中央からやや西寄りの壁を25cm程壁外に掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ160cm，幅115cmを測る。天井部の一部は崩落し，袖部の一部は欠損している。火床は床面を10cm程掘り窪めており，熱をうけて赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がり，煙出口に至っている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈周辺及び東部覆土下層からまとまって，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，盤，蓋)片が多量に出土している。506・507・509の須恵器の坏は南東部床面から逆位の状態で，504の須恵器の坏は南西部床面から逆位の状態で，503の須恵器の坏は北東部床面から正位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第58号住居跡及び第45号土坑より新しく，第44・46号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第57号住居跡　土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。

2　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。

3　極暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック少量。

第57号住居跡　竈土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。

2　明　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。

3　にぶい赤褐色　ローム粒子・炭化粒子中量，焼土ブロック少量。

4　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。

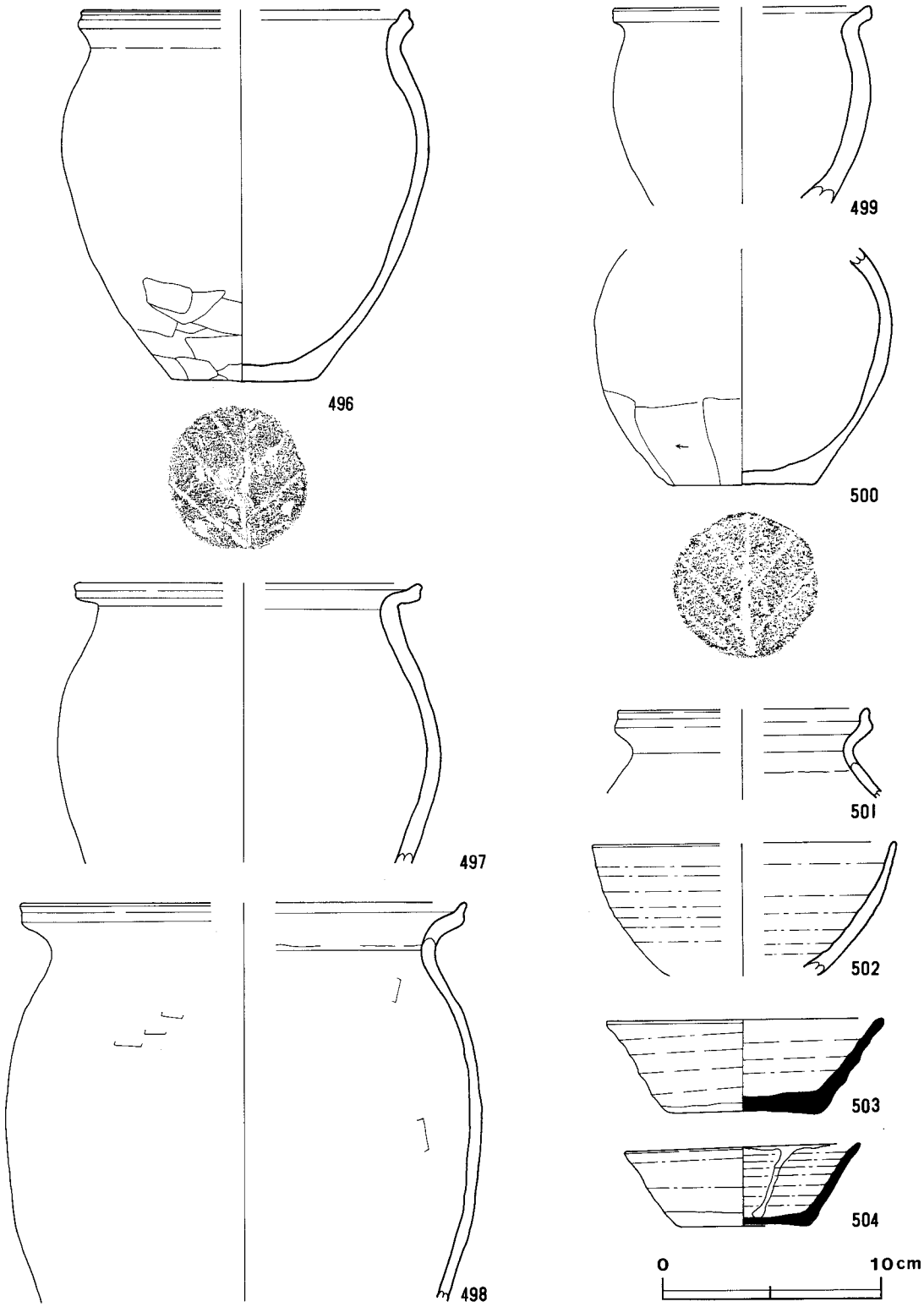
5　にぶい赤褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。

6　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子多量。

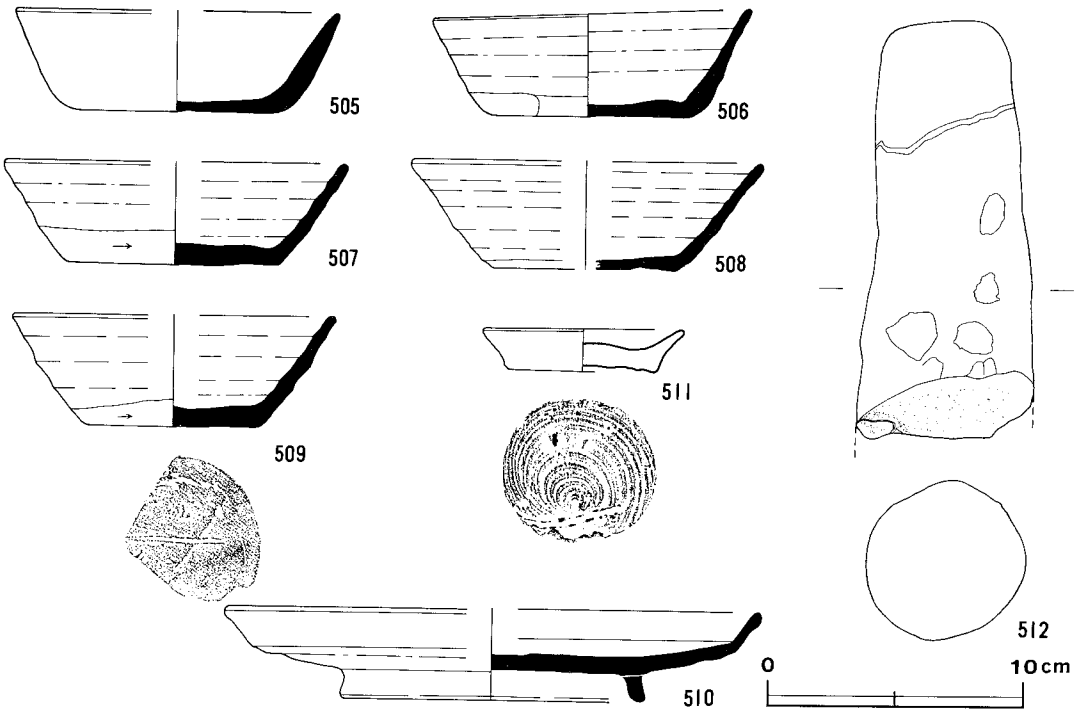
7　明赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量。

8　極暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子中量。

第142図　第57号住居跡実測図



第143図　第57号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）



第144図　第57号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）

第57号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143・144図 496	甕 土師器	A [15.0] B 17.4 C 6.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は僅かに外反し口唇部を上方につまみ出す。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P345 60% 北西部覆土上層
497	甕 土師器	A [15.8] B (13.1)	胴部は内彎しながら立ち上がり上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方に僅かにつまみ出す。	胴部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P346 30% 覆土上層
498	甕 土師器	A [20.6] B (18.5)	胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部は「く」の字状に外反する口唇部を外上方につまみ出す。	胴部内・外面上位ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P348 20% 竈
499	甕 土師器	A [11.8] B (9.2)	胴部は内彎しながら立ち上がり上位に最大径をもつ。頸部は短く屈曲する。	胴部内・外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 赤褐色 普通	P349 20% 北東部覆土下層
500	甕 土師器	B (11.0) C 6.8	平底。胴部は大きく内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。	胴部外面下位横位の手持ちヘラ削り。胴部内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・礫 褐色 普通	P347 40% 北西部覆土上層
501	甕 土師器	A [11.4] B (4.2)	頸部は「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P352 10% 南東部覆土
502	埦 土師器	A [13.8] B (6.2)	体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	体部内・外面ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P353 20% 竈

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
503	坏 須恵器	A 12.8 B 4.4 C 6.8	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部一方向の手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P355 80% 北東部床
504	坏 須恵器	A 10.8 B 3.9 C 6.0	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 良好	P356 90% 南西部床面
505	坏 須恵器	A [12.4] B 4.0 C [7.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P357 60% 北東部覆土上層
506	坏 須恵器	A 12.4 B 4.3 C 7.8	平底。体部は器厚を減じながら内彎気味に立ち上がり，中位で僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 褐灰色 普通	P358 70% 南東部床面
507	坏 須恵器	A [13.6] B 4.1 C 8.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 明褐灰色 普通	P359 60% 南東部床面
508	坏 須恵器	A [13.6] B 4.3 C [7.2]	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後,ナデ。体部下端回転ヘラ削り。	砂粒 灰色 普通	P360 40% 北東部覆土上層
509	坏 須恵器	A [12.6] B 4.4 C [6.8]	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。底部にヘラ記号。	砂粒 灰色 普通	P361 30% 南東部床面 ヘラ記号「✗」
510	盤 須恵器	A [20.8] B 3.6 D 11.6 E 1.2	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。口縁部は体部から外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P354 40% 床面
511	皿 土師質土器	A 7.6 B 1.7 C 5.8	上げ底。体部は大きく外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部回転糸切り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P362 100% 南東部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
512	支脚	(16.6)	(6.9)	---	---	(703.8)	80	竈	DP108

第58号住居跡(第135図)

位置　調査区の北西部，E1e6区を中心に確認されたが，本跡の西コーナー付近は，調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の北西壁付近は，第53号住居跡の南東部を掘り込んでいる。本跡の南コーナー付近は，第45号土坑の上位に構築され，第57号住居跡の北東部に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸6.18m，短軸5.88mの方形を呈している。

主軸方向　N-23°-W。

壁　壁高は34～46cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　西コーナー付近を除き検出されている。上幅16～20cm，深さ5～6cmで，断面形はU字状

を呈している。

床　ほぼ平坦で，中央部は踏み固められ堅緻である。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_3は，径44～60cm，深さ54～66cmで主柱穴，P_4は径26～28cm，深さ17cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央からやや西寄りの壁を壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されているが，北西部は調査区域外にのびているため，全容はとらえられない。火床はほぼ平坦であるが，熱をうけ焼土化している。

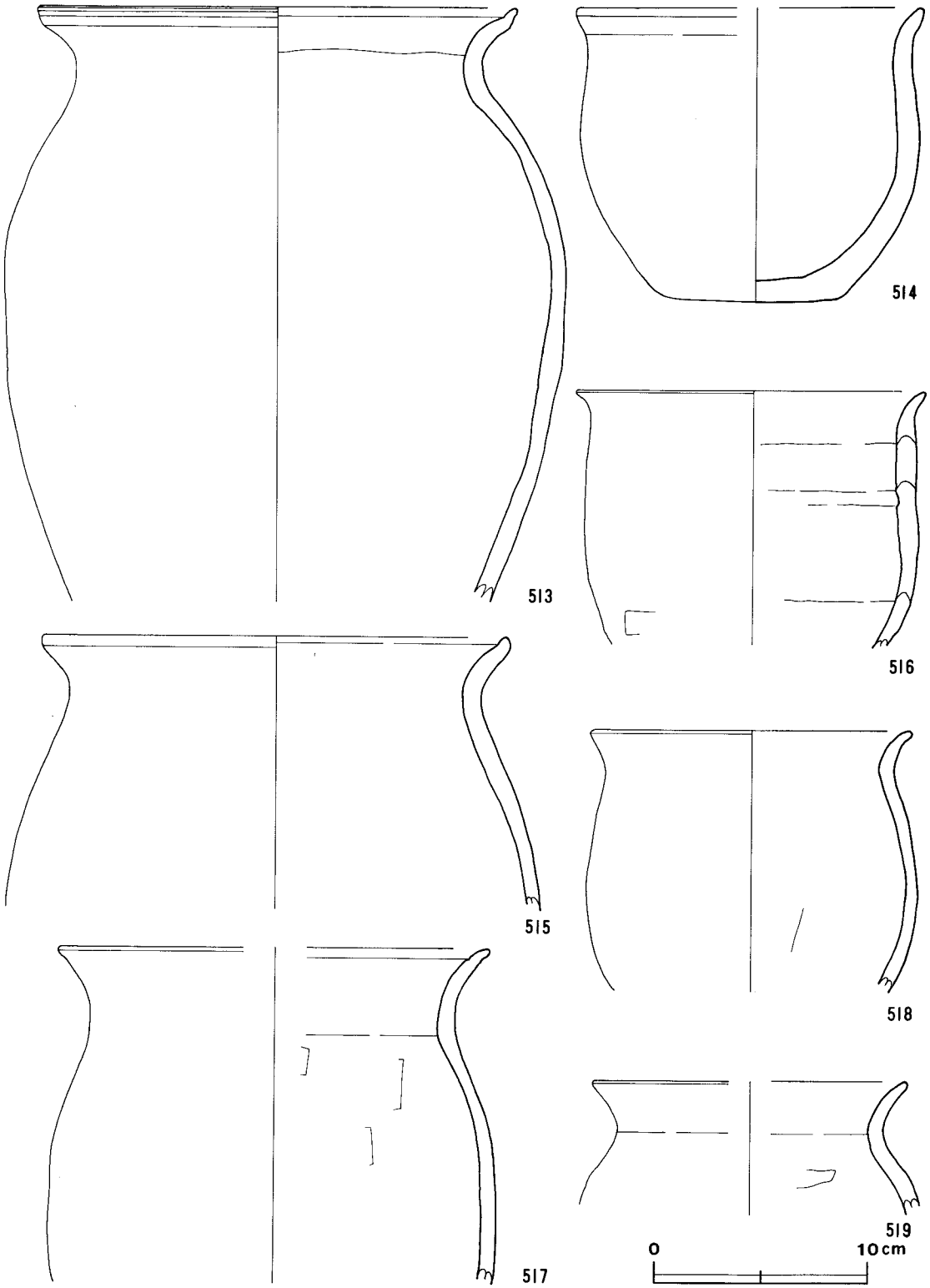
覆土　自然堆積。

遺物　中央部覆土下層及び南壁際の覆土下層から，土師器(坏，甕，甑)片，須恵器(甕)片等が多量に出土している。527の土師器の鉢は覆土下層から，513の土師器の甕は覆土下層から正位の状態で出土している。531・534・535の土師器の坏は南東部の覆土上層から,537の手捏土器は北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。

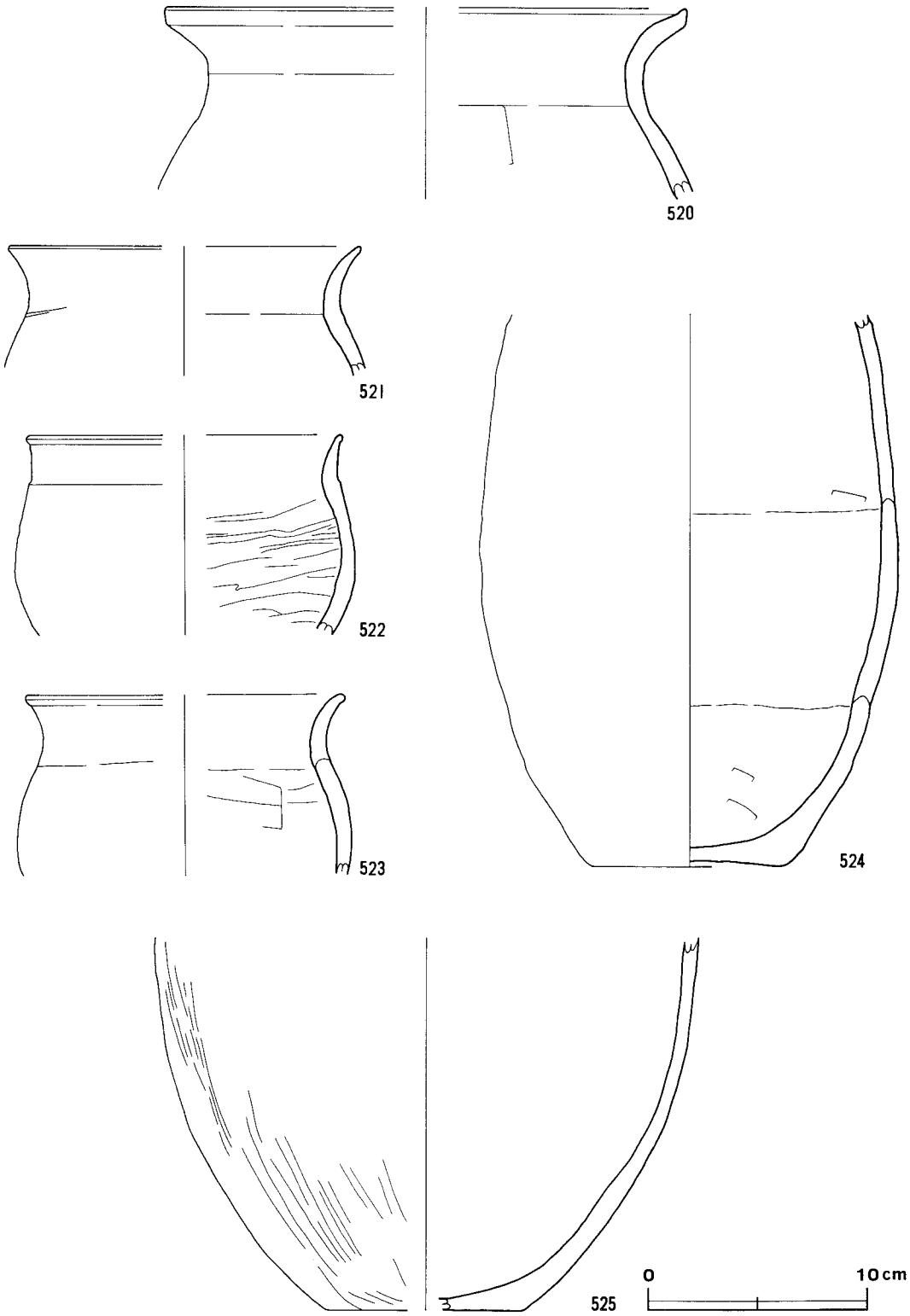
所見　本跡は，重複関係から第53号住居跡及び第45号土坑より新しく，第57号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第58号住居跡出土遺物観察表

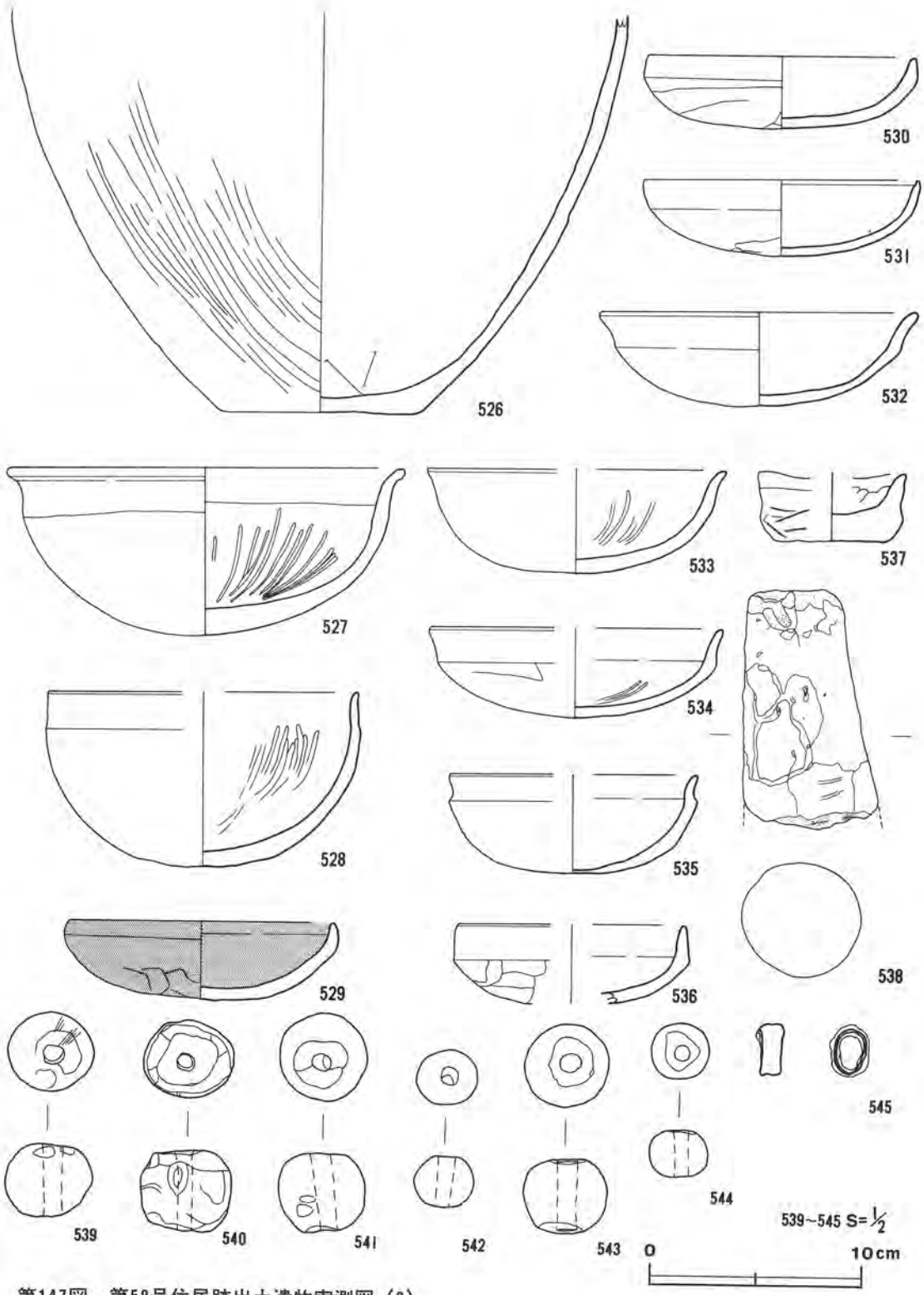
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145～147図 513	甕 土師器	A 22.2 B (28.2)	胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部は「く」の字状に屈曲する口唇部を外上方につまみ出す。	胴部内・外面摩耗。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 浅黄橙色 普通	P363 30% 覆土中層
514	甕 土師器	A [16.0] B 14.0 C 7.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，中位からほぼ直立する。口縁部は僅かに外反する。	底部ナデ。胴部内・外面摩耗。口縁部内面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P366 60% 覆土上層
515	甕 土師器	A 21.6 B (12.9)	張りの弱い胴部で，頸部は「く」の字状に外反する。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P365 20% 覆土上層
516	甕 土師器	A 16.4 B (12.0)	胴部下位は内彎気味に立ち上がり，中位からほぼ直立する。口縁部は短く外反する。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P367 30% 覆土上層
517	甕 土師器	A [20.2] B (15.8)	張りの弱い胴部で，口縁部は大きく外反して立ち上がる。	胴部外面摩耗。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P368 10% 覆土上層
518	甕 土師器	A 14.8 B (12.4)	胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は短く外反する。	胴部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P369 30% 覆土上層
519	甕 土師器	A [14.6] B (6.3)	口縁部は，外反して立ち上がる。	胴部内面上位ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P370 10% 覆土上層



第145図　第58号住居跡出土遺物実測図（1）



第146図　第58号住居跡出土遺物実測図（2）



第147図　第58号住居跡出土遺物実測図（3）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
520	甕 土師器	A [23.6] B (8.9)	頸部は「く」の字状に外反して立ち上がる。口唇部を外上方に僅かにつまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 良好	P371 10% 南東部覆土上層
521	甕 土師器	A [16.0] B (6.0)	頸部は外反して口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P372 10% 覆土上層
522	甕 土師器	A [14.2] B (9.3)	胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部との境に弱い稜をもつ。頸部は外反し，口縁部に至る。	胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P373 20% 南東部覆土上層
523	甕 土師器	A [14.4] B (8.4)	口縁部は外反する。	胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 赤褐色 普通	P374 10% 覆土
524	甕 土師器	B (25.5) C 8.8	胴部は内彎気味に立ち上がり，長胴を呈する。	底部ナデ。胴部外面摩耗。胴部内面ヘラナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P350 30% 覆土上層
525	甕 土師器	B (17.2) C [8.8]	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P351 10% 覆土上層
526	甕 土師器	B (19.0) C 9.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部ナデ。胴部外面下位ヘラ磨き。胴部内面下位ヘラナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P364 20% 覆土上層
527	鉢 土師器	A 18.5 B 8.1	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸い。	胴部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P384 90% 覆土下層
528	埦 土師器	A [14.6] B 8.3	丸底。体部と口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	胴部外面ナデ。胴部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P378 40% 南西部覆土上層
529	坏 土師器	A 12.4 B 3.8	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は直立し，口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P375 100% 北西部覆土中層
530	坏 土師器	A 12.6 B 3.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は直立し，口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P376 90% 北西部床面
531	坏 土師器	A 13.0 B 3.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部内側直下に一条の沈線が巡る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P377 80% 南東部覆土上層
532	坏 土師器	A 14.8 B 4.5	丸底。体部は器厚を増しながら内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	全体的に摩耗。体部内面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P379 60% 覆土中層
533	坏 土師器	A [14.2] B 5.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	全体的に摩耗。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P380 30% 覆土
534	坏 土師器	A [13.8] B 4.3	丸底。体部と口縁部との境に稜をもち，口縁部はほぼ直立する。口唇部は僅かに外反する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き，口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P381 30% 南東部覆土上層
535	坏 土師器	A [11.6] B 4.7	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P382 20% 南東部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
536	坏 土師器	A [10.6] B (3.8)	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は僅かに内傾する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 淡赤橙色 良好	P383 10% 覆土
537	手捏土器	A [6.8] B 3.3 C [5.5]	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。	底部及び口縁部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P385 20% 南東部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
538	支脚	(11.3)	(6.5)	---	---	(335.4)	80	南西部覆土下層	DP109
539	球状土錘	2.3	2.8	---	7.0	14.8	100	南東部床面	DP110
540	球状土錘	2.6	2.9	---	6.0	20.8	100	南東部覆土上層	DP111
541	球状土錘	2.6	2.8	---	7.0	18.8	100	南壁中央際	DP112
542	球状土錘	1.7	2.0	---	6.0	5.0	100	南東部覆土下層	DP113
543	球状土錘	2.4	2.7	---	7.0	16.1	100	覆土	DP114
544	球状土錘	1.5	1.9	---	5.0	5.0	100	北東部覆土床面	DP115
545	不明鉄製品	1.6	0.7	---	最大径 1.4	0.9	100	南東部覆土中層	M28

第59号住居跡(第148・149図)

位置　調査区の南西部，Flc_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北部は第60号住居跡の南西部及び第61号住居跡の南東部を掘り込み，西壁のほぼ中央から南壁のほぼ中央にかけては第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.58m，短軸3.50mの方形を呈している。

主軸方向　N-19°-W。

壁　壁高は36～38cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅14～24cm，深さ6～8cmで，断面形は逆台形状を呈している。

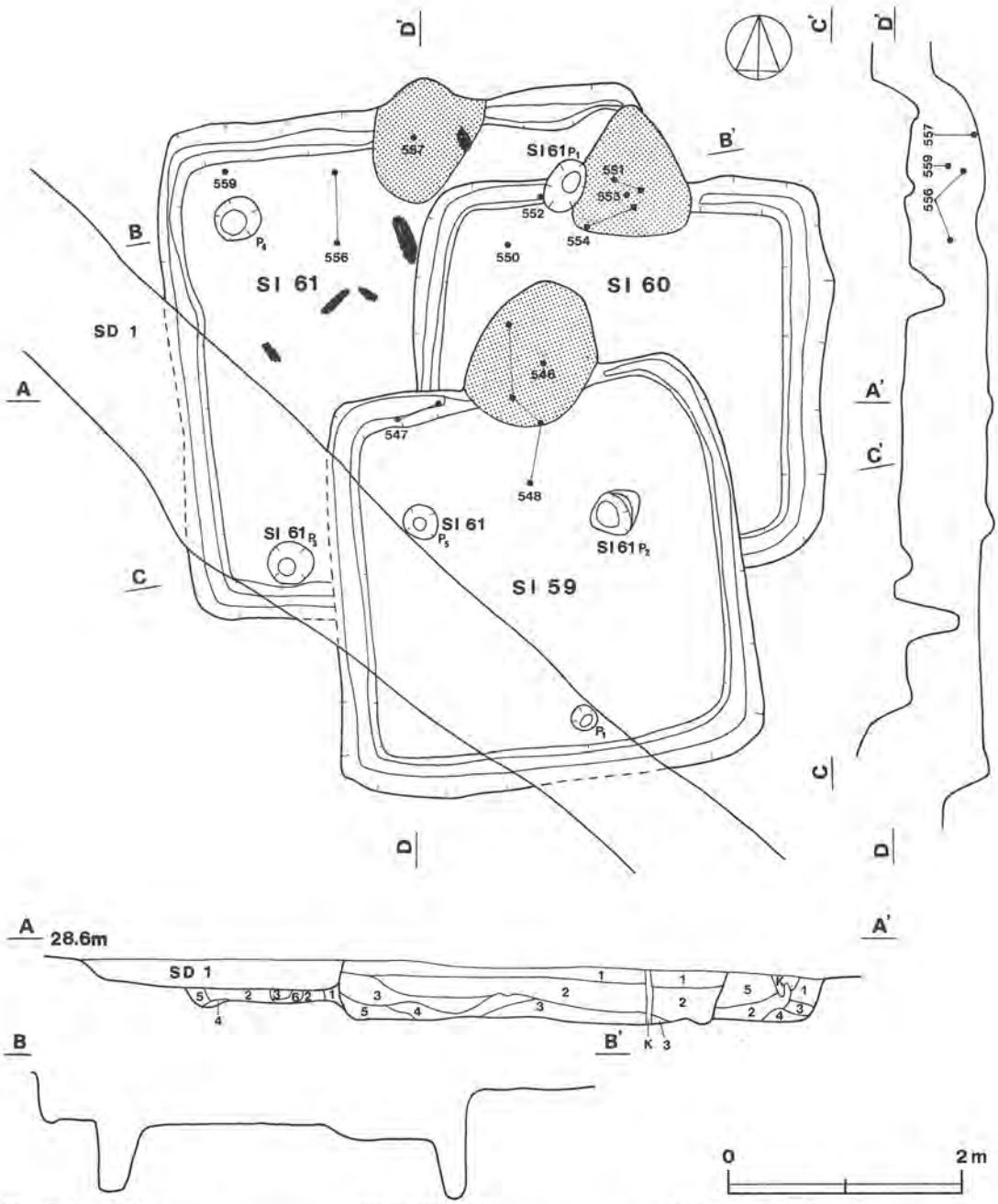
床　中央部は踏み固められ堅緻である。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径22～24cm，深さ22cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　第60号住居跡の中央部の西側の上位から検出されている。北壁中央部の壁を75cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ121cm，幅103cmを測る。天井部は崩落しているが，左袖部は良好に遺存している。火床は床面を僅かに掘り窪めており，あまり熱をうけていない。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈付近を中心に土師器(坏，高台付坏，甕)片，須恵器(坏，蓋，甕)片が少量出土している。547の須恵器の坏は北西部の覆土から出土している。546の須恵器の坏及び548の須恵器の盤は竈内



第59号住居跡　土層解説

1 暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2 暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量。
3 暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック中量。
4 極暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック中量，炭化物少量。
5 黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック中量。

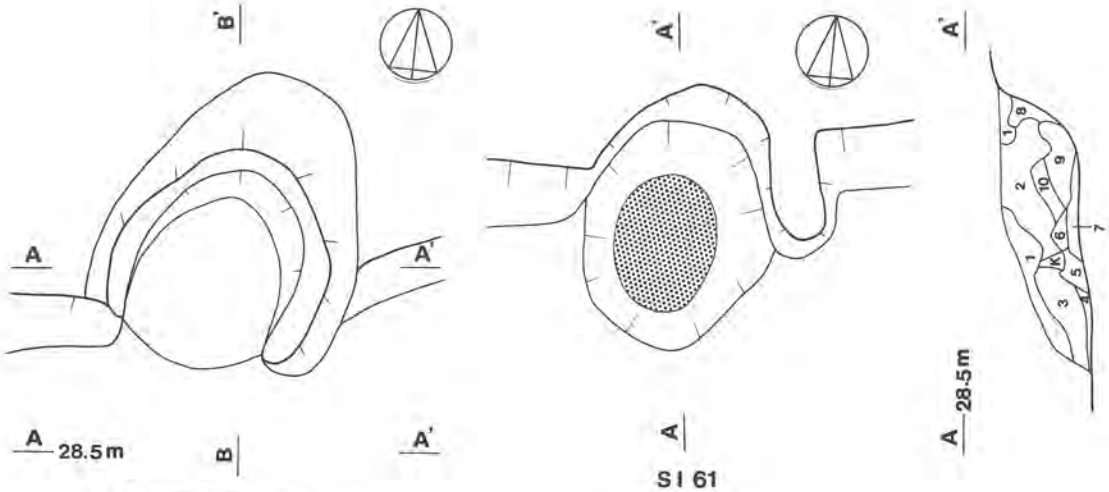
第60号住居跡　土層解説

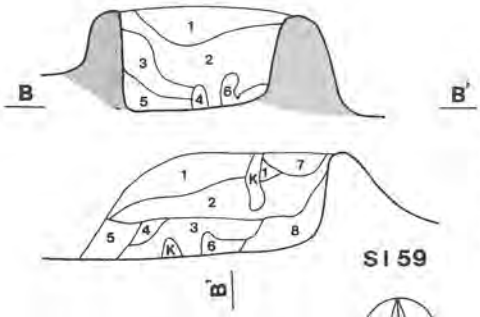
1 黒　褐　色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
2 黒　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック少量。
3 明　褐　色　ローム粒子多量。
4 にぶい褐色　ローム粒子多量。
5 黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。

第61号住居跡　土層解説

1 黒　褐　色　ローム粒子多量。
2 黒　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量。
3 黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物多量。
4 暗　褐　色　ローム粒子多量。
5 暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量。
6 極暗褐色　炭化物多量，焼土ブロック中量。

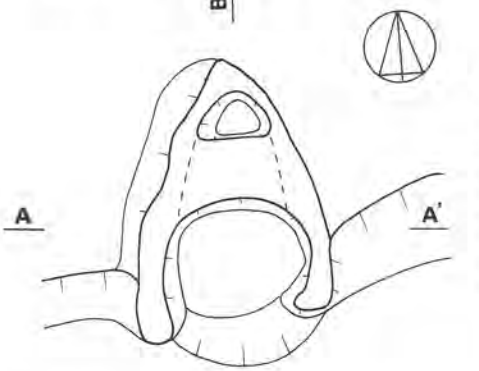
第148図　第59・60・61号住居跡実測図





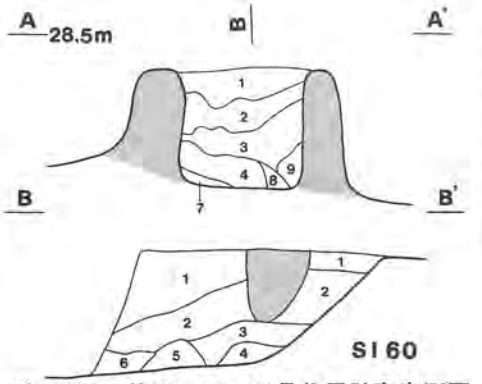
第59号住居跡　竈土層解説

1　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　暗赤褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子中量。
3　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量。
4　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，焼土ブロック少量。
5　極暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量。
6　極暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子少量。
7　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量。
8　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。



第60号住居跡　竈土層解説

1　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
2　暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
5　暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子少量。
6　暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量。
7　暗赤褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
8　赤　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子少量。
9　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック少量。



第61号住居跡　竈土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
2　赤　褐　色　ローム粒子・焼土粒子多量，炭化粒子中量，焼土ブロック少量。
3　赤　褐　色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　極暗赤褐色　炭化粒子多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量。
5　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量。
6　赤　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量。
7　暗赤褐色　焼土粒子多量・焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
8　明　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
9　にぶい赤褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック中量。
10　赤　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。

第149図　第59・60・61号住居跡竈実測図

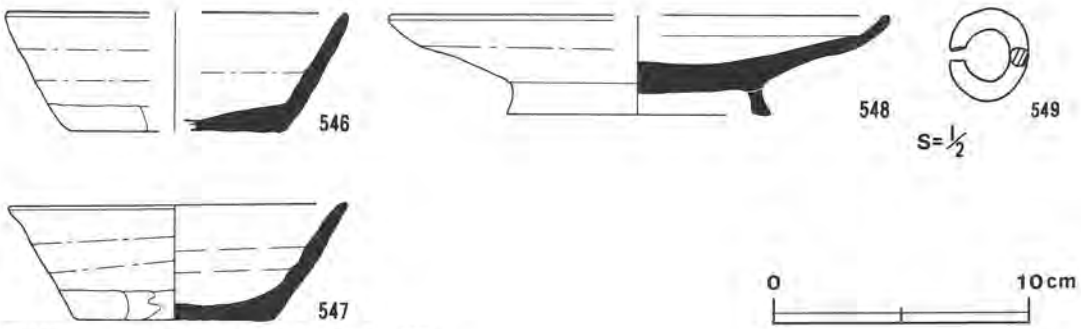
から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第60・61号住居跡より新しく，第1号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第59号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 546	坏 須恵器	A [13.2] B 4.7 C [8.4]	平底で，中央部は器厚を減じる。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 明褐灰色 普通	P387 20% 竈
547	坏 須恵器	A 13.2 B 4.6 C 7.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P386 80% 北西部覆土
548	壁 須恵器	A [19.6] B 3.9 D 10.4 E 1.2	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は直線的に大きく外傾し口縁部は僅かに内彎する。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P388 70% 竈

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
549	環	(2.4)	—	(0.5)	内径0.5	9.4	100	覆土	M29 銅製品



第150図　第59号住居跡出土遺物実測図

第60号住居跡(第148・149図)

位置　調査区の北西部，F1b$_9$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の西部は第61号住居跡の東部を掘り込み，南西部は第59号住居跡の北部に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.56m，短軸3.36mの方形を呈している。

主軸方向　N-2°-W。

壁　壁高は18～40cm を測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　南西コーナーの壁下を除き検出されている。上幅14～20cm，深さ5～10cm で，断面形は逆

台形状を呈している。

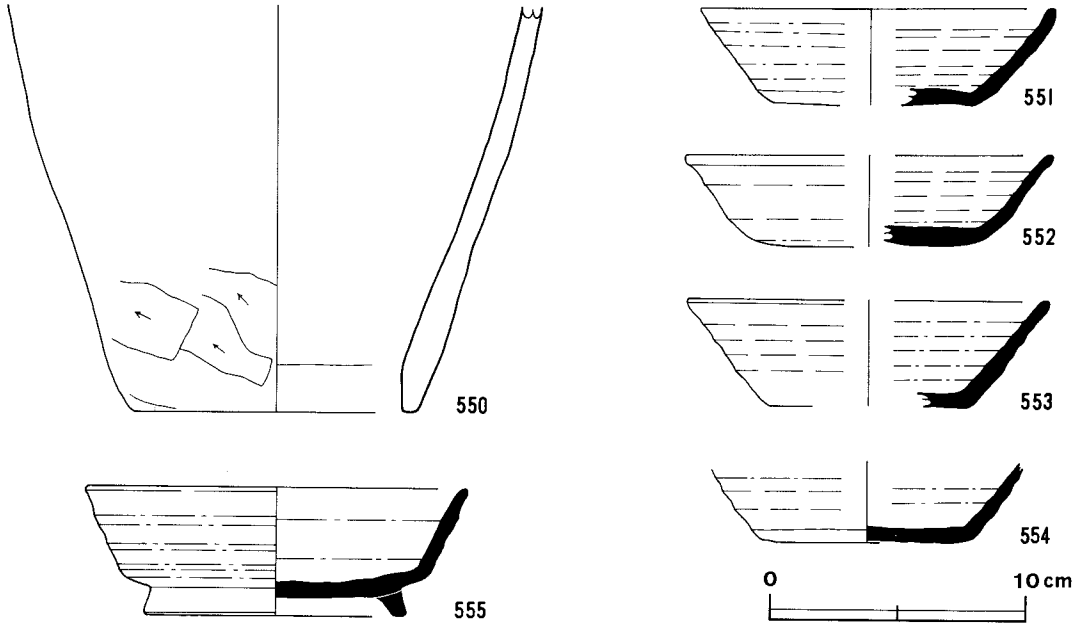
床　ほぼ平坦で，竈の前方は踏み固められ堅緻である。

竈　北壁中央部の壁を74cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。西部の2分の1程は，第61号住居跡の上位から検出されている。規模は，長さ110cm，幅83cm を測る。天井部は一部崩落しているが，遺存状態は良好である。火床は床面を4cm 程掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度で立ち上がり，煙出口に至っている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈内及び竈周辺の覆土下層から，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，蓋，盤)片が少量出土している。551・553・554の須恵器の坏は竈内から逆位の状態で，552の須恵器の坏は北西部の覆土から正位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第61号住居跡より新しく，第59号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第151図　第60号住居跡出土遺物実測図

第60号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第151図 550	甑 土師器	B (16.0) C 11.0	無底式。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部内・外面下位手持ちヘラ削り。	砂粒・礫 浅黄橙色 良好	P394 40% 北西部覆土
551	坏 須恵器	A 13.8 B 3.8 C [8.0]	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。口唇部は丸い。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P389 60% 竈

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
552	坏 須恵器	A [14.2] B 3.6 C [7.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P391 30% 北西部覆土
553	坏 須恵器	A [13.8] B 4.2 C [7.6]	体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P392 30% 竈
554	坏 須恵器	B (3.2) C 8.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	底部手持ちヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰黄色 普通	P390 30% 竈
555	高台付坏 須恵器	A 14.7 B 5.1 D 10.0 E 1.2	平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰黄色 普通	P393 50% 覆土

第61号住居跡(第148・149図)

位置　調査区の南西部，Flb_8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の東部は第60号住居跡の西部に，南東部は第59号住居跡の北部に，更に，南西コーナー付近は第1号溝にいずれも掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.32m，短軸4.08mの方形を呈している。

主軸方向　N-4°-W。

壁　南壁，東壁及び西壁の大半は，第59・60号住居跡と第1号溝に掘り込まれ，検出されていない。北壁は壁高34～38cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北壁下及び西壁下の一部からだけ検出されているが，壁下を全周するものと考えられる。上幅14～16cm，深さ6～9cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　ほぼ平坦で，中央部は踏み固められ堅緻である。

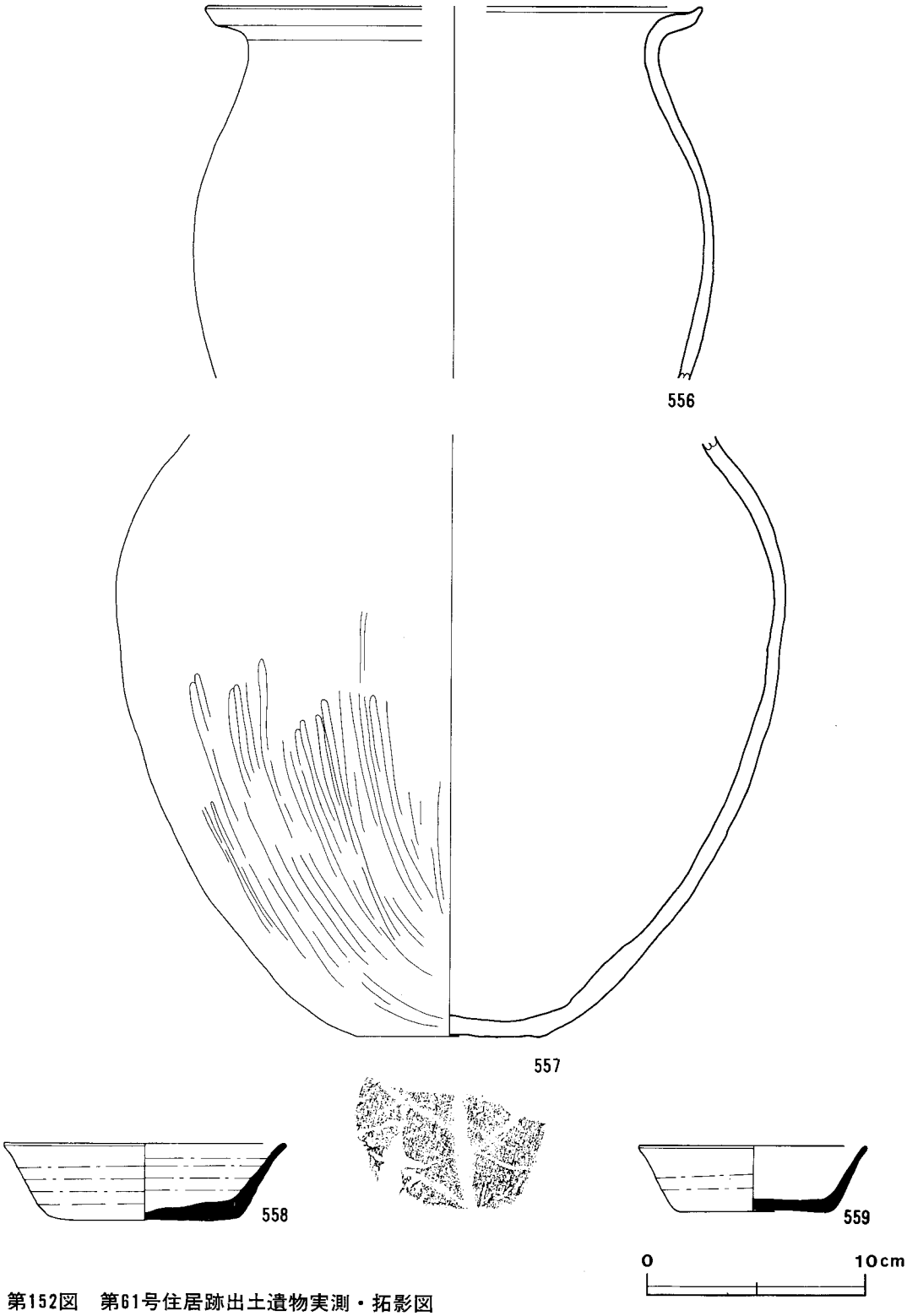
ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径30～48cm，深さ56～63cmで主柱穴，P_5は，径28～30cm，深さ18cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。P_3とP_5は，第59号住居跡の床下から検出されている。

竈　北壁中央部の壁を23cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。遺存状態は悪く，右袖部と床面を浅く掘り窪めた火床が検出されたにすぎない。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈の前方から中央部にかけて，焼土，炭化材が散在している。557の土師器の甕は竈内から逆位の状態で，559の須恵器の坏は北西部の覆土上層から正位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，覆土下層及び床面から，焼土や炭化材が検出されていることから焼失家屋であり，重複関係から第59・60号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から



第152図　第61号住居跡出土遺物実測・拓影図

平安時代前期の住居跡と考えられる。

第61号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 556	甕 土師器	A [22.8] B (17.4)	胴部は内彎しながら立ち上がり頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P395 10% 北西部覆土上層
557	甕 土師器	B (28.1) C [8.8]	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。	胴部中位から下位にかけて縦位のヘラ磨き。胴部内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P398 30% 竈
558	坏 須恵器	A 13.0 B 3.6 C 8.8	平底。体部は外反気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。二次焼成。	砂粒・雲母・礫 淡赤橙色 普通	P396 70% 覆土
559	坏 須恵器	A 10.4 B 3.1 C 7.0	平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰黄色 普通	P397 100% 北西部覆土上層

第62号住居跡(第153図)

位置　調査区の南西部，$F1a_0$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南壁は第63号住居跡の北壁に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸2.58m，短軸2.52mの方形を呈している。

主軸方向　N-0°。

壁　壁高は16～24cmを測り，西壁側はほぼ垂直に，東壁側は外傾して立ち上がっている。

壁溝　上幅14～16cm，深さ6～9cmで，断面形は逆台形状を呈している。

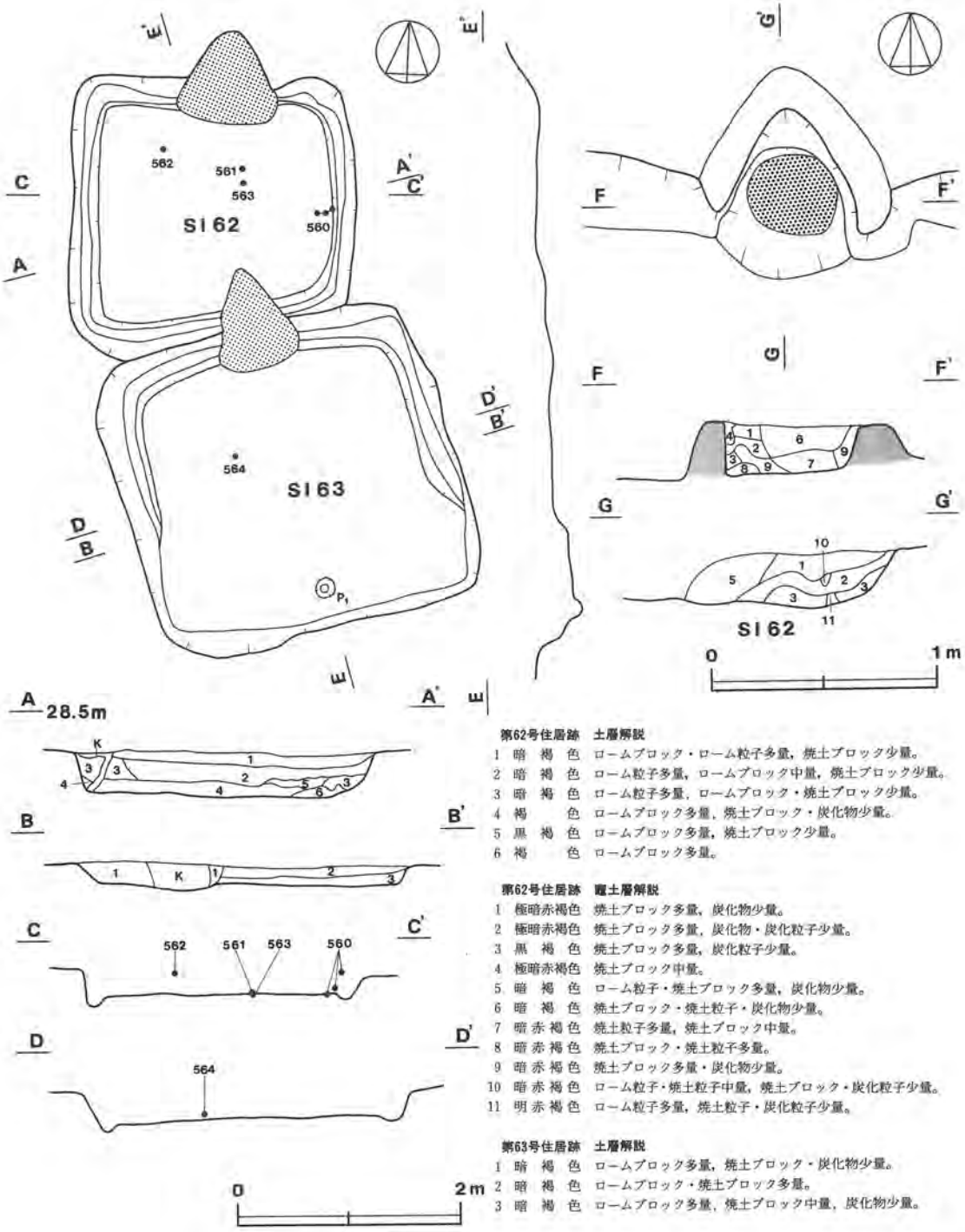
床　ほぼ平坦で，中央部は踏み固められ，竈の前方は特に堅緻である。南壁中央付近は第63号住居跡に掘り込まれている。

竈　北壁中央からやや東寄りの壁を53cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ96cm，幅86cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を6cm程掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中から流れ込みと考えられる縄文式土器片と土師器(坏，甕)片及び須恵器(坏，甕)片が少量出土している。561と563の須恵器の坏は北東部の覆土から正位の状態で，562の須恵器の坏は北西部の覆土上層から逆位の状態で出土している。560の土師器の小形甕は南東部の覆土から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，当遺跡内で最も小規模な住居跡で，重複関係から第63号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第62号住居跡　土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック少量。
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
3　暗　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック少量。
4　褐　　色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
5　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
6　褐　　色　ロームブロック多量。

第62号住居跡　竈土層解説

1　極暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量。
2　極暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物・炭化粒子少量。
3　黒　褐　色　焼土ブロック多量，炭化粒子少量。
4　極暗赤褐色　焼土ブロック中量。
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック多量，炭化物少量。
6　暗　褐　色　焼土ブロック・焼土粒子・炭化物少量。
7　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量。
8　暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量。
9　暗赤褐色　焼土ブロック多量・炭化物少量。
10　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
11　明赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。

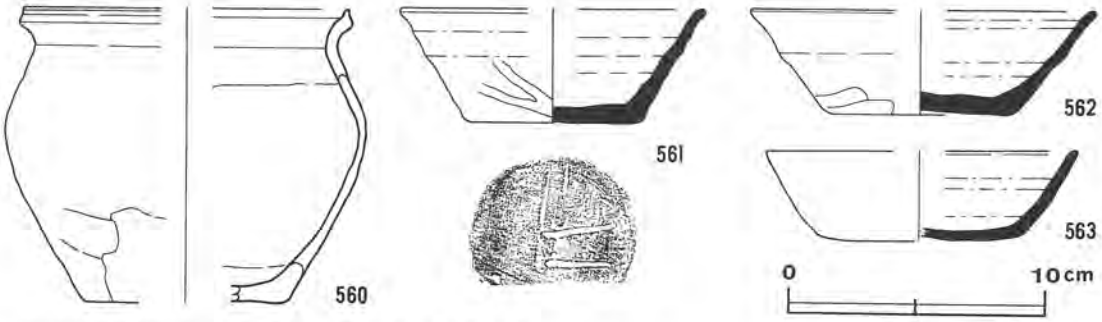
第63号住居跡　土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック多量。
3　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量，炭化物少量。

第153図　第62・63号住居跡実測図

第62号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 560	甕 土師器	A [12.6] B 11.6 C [8.0]	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。頸部は外反して立ち上がる。口唇部を上方に僅かにつまみ出す。	胴部外面下位横位の手持ちヘラ削り。胴部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 明赤褐色 普通	P399 40% 南東部覆土
561	坏 須恵器	A [11.6] B 4.4 C 6.4	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端は手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。底部にヘラ記号。	砂粒・礫 灰色 普通	P400 40% 北東部覆土 ヘラ記号「＝」
562	坏 須恵器	A [13.4] B 4.1 C 7.2	平底。体部は器厚を減じながら内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端は手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 良好	P401 30% 北西部覆土上層
563	坏 須恵器	A [12.0] B 3.6 C [7.6]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P402 10% 北東部覆土上層



第154図　第62号住居跡出土遺物実測・拓影図

第63号住居跡(第153図)

位置　調査区の南西部，Flb_0区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北壁は，第62号住居跡の南壁を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.02m，短軸2.84mの方形を呈している。

主軸方向　N-15°-W。

壁　壁高は22～26cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　東壁下及び西壁下の一部と南壁下からは，攪乱されているため検出されていない。他は，上幅16～18cm，深さ6～8cmで，断面形はU字状を呈している。

床　ローム，褐色土を20cm前後の厚さに貼って，構築されている。凸凹で，あまり硬く踏み固められていない。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径18cm，深さ12cmで出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部に構築されていたと考えられる痕跡が検出されている。

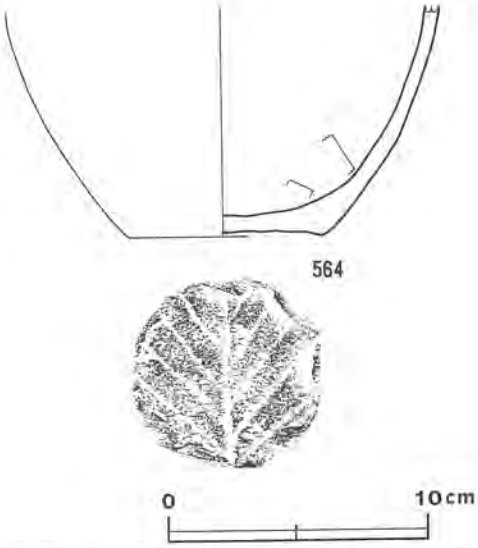
第63号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図 564	甕 土師器	B (9.0) C 7.6	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・礫にぶい橙色 普通	P403 30% 北西部覆土

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中から土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，高台付坏，蓋)片が少量出土している。564の土師器の甕は北西部覆土から出土している。

所見 本跡は，重複関係から第62号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第155図 第63号住居跡出土遺物実測・拓影図

第64号住居跡(第156図)

位置 調査区の南西部，F1c8区を中心に確認されたが，本跡の南西コーナーは調査区域外にのびている。

重複関係 本跡の南東コーナーは第65号住居跡の西コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.58m，短軸4.10mの方形を呈している。

主軸方向 N-15°-W。

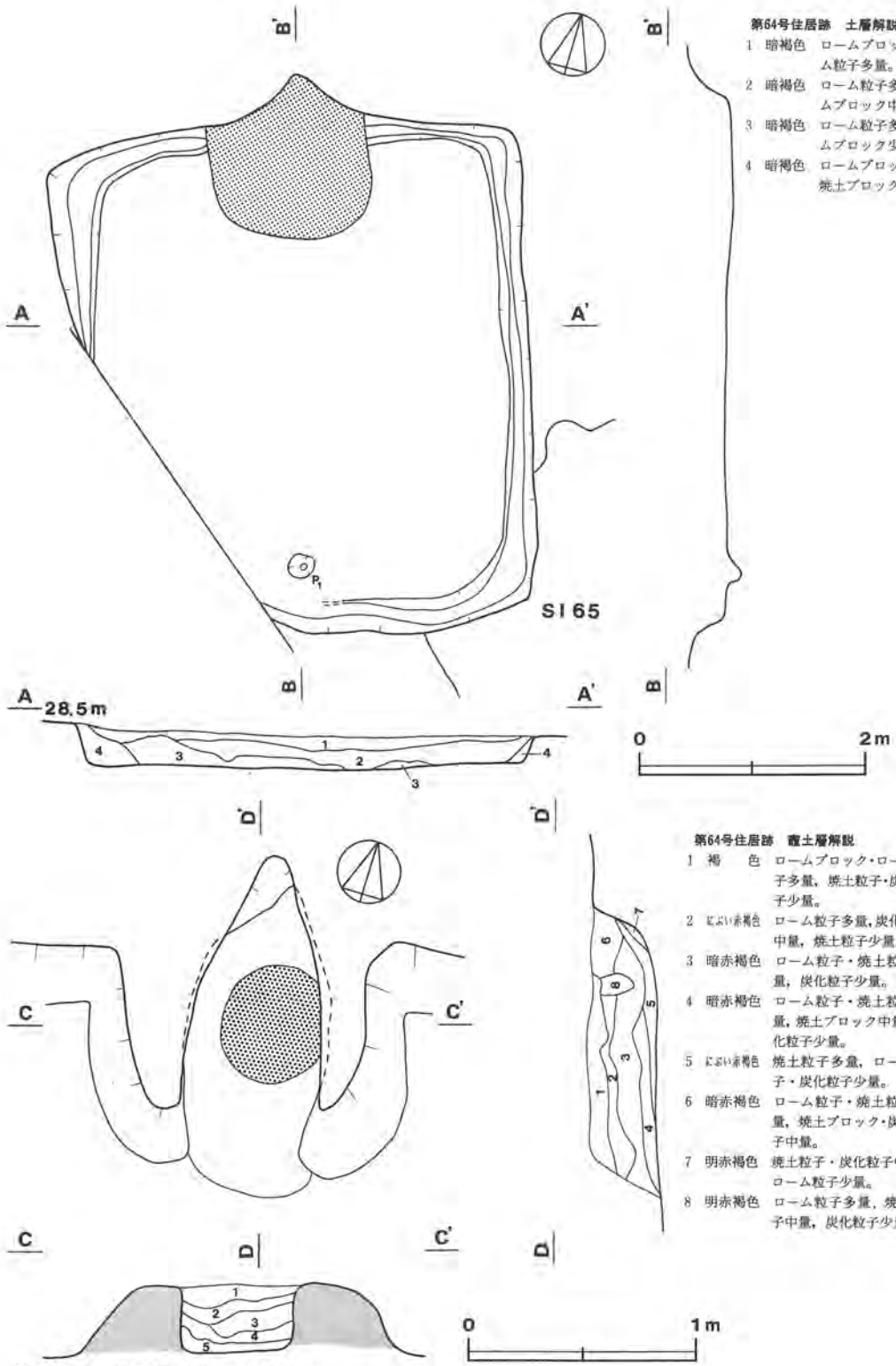
壁 壁高は13～38cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝 南壁下の一部は撹乱されているため検出されていないが，壁下を全周するものと考えられる。上幅14～18cm，深さ6～9cmで，断面形はU字状を呈している。

床 ほぼ平坦で，踏み固められ堅緻である。南東コーナー付近は第65号住居跡を掘り込み，貼床をしている。

ピット 1か所(P_1)検出されている。P_1は，径22～24cm，深さ12cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部の壁を38cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ135cm，141cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床はほぼ平坦である。火床及び袖部の内側は，熱をうけて赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾し



第64号住居跡　土層解説

1 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子多量。
2 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
3 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。
4 暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量。

第64号住居跡　覆土層解説

1 褐　色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2 にぶい赤褐色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，焼土粒子少量。
3 暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，炭化粒子少量。
4 暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
5 にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
6 暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子中量。
7 明赤褐色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量。
8 明赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。

第156図　第64号住居跡実測図

第64号住居跡出土遺物観察表

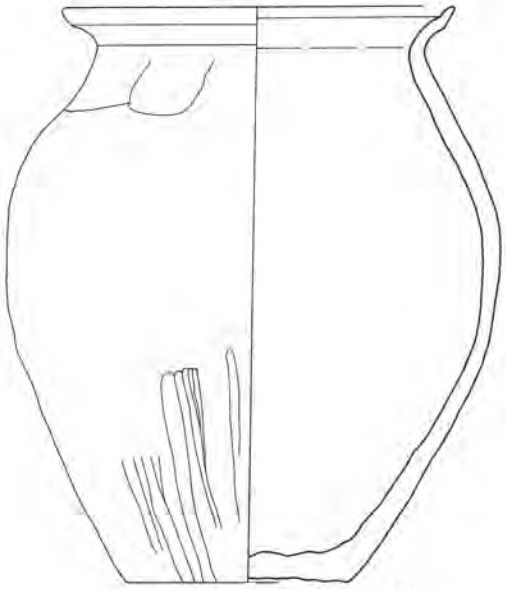
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 565	甕 土師器	A 15.2 B 22.8 C 8.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。上位一部に手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・礫 橙色 普通	P404 90% 竈

て立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中から流れ込みと考えられる縄文式土器片と土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片が少量出土している。565の土師器の甕は竈の焚口付近から潰れた状態で出土している。

所見 本跡は，重複関係から第65号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



565

第157図 第64号住居跡出土遺物実測・拓影図

第65号住居跡(第158図)

位置 調査区の南西部，Fld_0区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西コーナー付近は第64号住居跡の南東コーナーに掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.90m，短軸3.84mの方形を呈している。

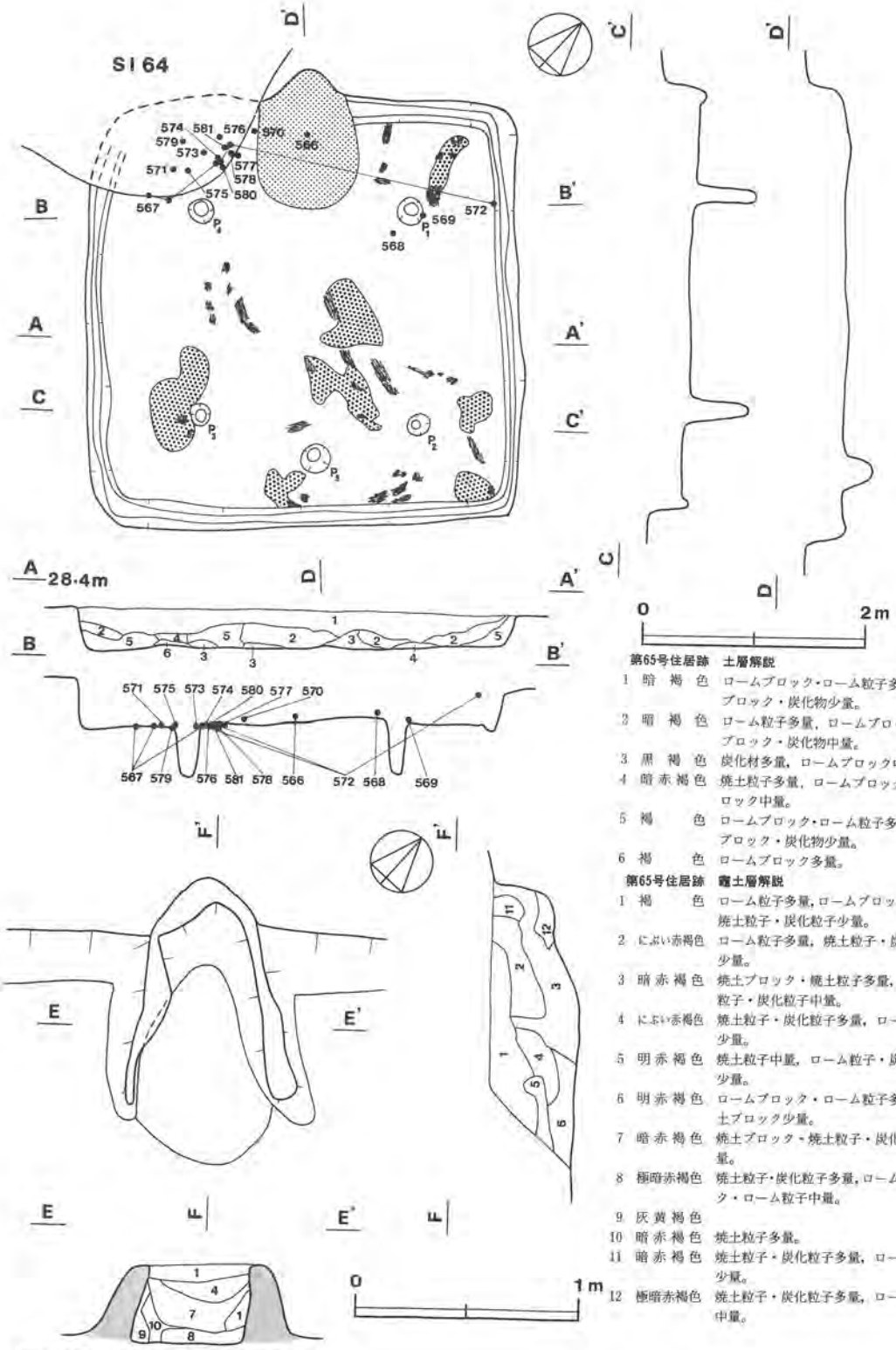
主軸方向 N-45°-W。

壁 壁高は28～32cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 西コーナーの壁下を除き検出されている。上幅8～14cm，深さ6～8cmで，断面形はU字状を呈している。

床 全体的に凸凹で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

ピット 5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径14～22cm，深さ53～77cmで主柱穴，P_5は径26～28cm，深さ30cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。



第65号住居跡　土層解説

1	暗　褐　色	ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2	暗　褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量。
3	黒　褐　色	炭化材多量，ロームブロック中量。
4	暗赤褐色	焼土粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック中量。
5	褐　　色	ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
6	褐　　色	ロームブロック多量。

第65号住居跡　竈土層解説

1	褐　　色	ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2	にぶい赤褐色	ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3	暗赤褐色	焼土ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子中量。
4	にぶい赤褐色	焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子少量。
5	明赤褐色	焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
6	明赤褐色	ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック少量。
7	暗赤褐色	焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量。
8	極暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子多量，ロームブロック・ローム粒子中量。
9	灰黄褐色	
10	暗赤褐色	焼土粒子多量。
11	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子少量。
12	極暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子中量。

第158図　第65号住居跡実測図

竈　北壁中央部の壁を22cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ130cm，幅84cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は遺存している。火床は床面を4cm程掘り窪めており，焼土と灰が薄く堆積している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

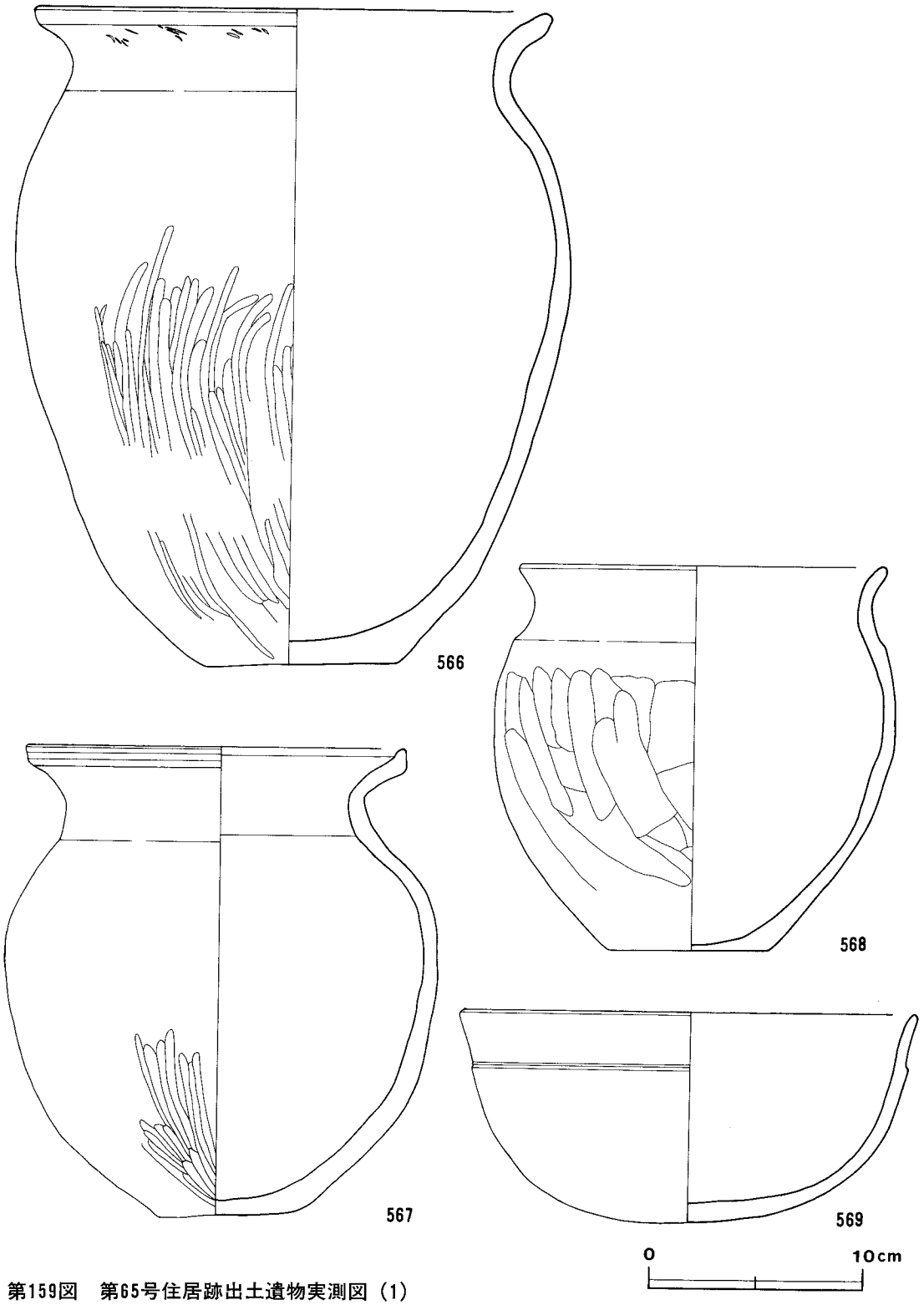
覆土　自然堆積。

遺物　覆土下層から床面の全域にかけて焼土，炭化物が多量に検出されている。竈周辺の床面及び覆土下層から土師器(坏，甕)片が多量に出土している。566の土師器の甕は竈内から正位の状態で出土し，570～581の土師器の坏は竈西側の床面からまとまって出土している。

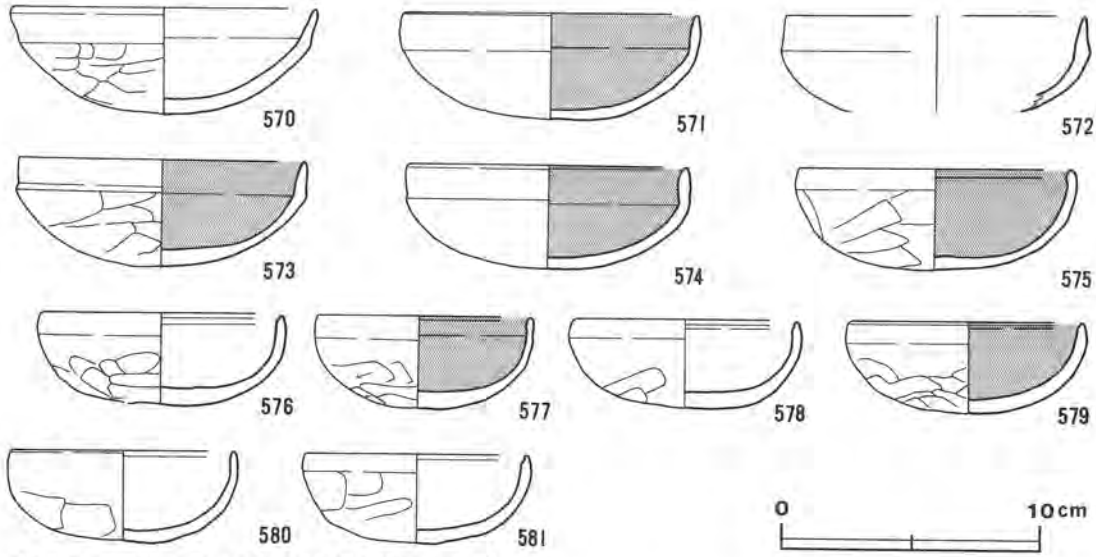
所見　本跡は，重複関係から第64号住居跡より古い時期に構築されている。覆土下層及び床面に焼土と炭化物が多量に堆積していることから焼失家屋であると思われ，遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第65号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159・160図566	甕 土師器	A 24.0 B 31.0 C 8.8	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，頸部はほぼ直立する。口縁部は外反する。	底部ナデ。胴部中位から下位ヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P405 90% 竈
567	甕 土師器	A 17.6 B 22.2 C 6.2	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，頸部は「く」の字状に屈曲する。	底部ナデ。胴部下位ヘラ磨き。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P406 70% 北西部床面
568	甕 土師器	A 17.0 B 18.2 C 7.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外反する。	底部及び胴部外面手持ちヘラ削り。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P407 80% 北東部床面
569	鉢 土師器	A 21.4 B 10.0	丸底。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P408 80% 北東部床面
570	坏 土師器	A 11.9 B 4.2	丸底。体部と口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は僅かに外傾する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P413 100% 竈西側床面
571	坏 土師器	A 11.5 B 4.2	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。口唇部は尖る。	体部外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒 にぶい褐色 普通	P417 90% 竈西側床面
572	坏 土師器	A [11.6] B (3.8)	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は僅かに内傾する。口唇部は尖る。	体部内・外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P418 30% 竈西側床面
573	坏 土師器	A 11.2 B 4.3	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒 明赤褐色 普通	P416 90% 竈西側床面
574	坏 土師器	A 10.8 B 4.1	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒 明赤褐色 普通	P414 100% 竈西側床面
575	坏 土師器	A 10.5 B 4.1	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ後，内面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P409 90% 竈西側床面



第159図　第65号住居跡出土遺物実測図（1）



第160図　第65号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
576	坏 土師器	A 9.3 B 3.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部内側直下に一条の沈線が巡る。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P410 90% 竈西側床面
577	坏 土師器	A 8.2 B 3.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部内側直下に一条の沈線が巡る。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒 にぶい褐色 普通	P415 100% 竈西側床面
578	坏 土師器	A 8.8 B 3.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部内側直下に一条の沈線が巡る。口唇部は尖る。	体部外面は手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	P412 90% 竈西側床面
579	坏 土師器	A 9.0 B 3.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は尖る。口縁部内側直下に一条の沈線が巡る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ後，黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P411 90% 竈西側床面
580	坏 土師器	A 8.6 B 3.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は尖る。口縁部内側直下に一条の沈線が巡る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P419 80% 竈西側床面
581	坏 土師器	A 8.6 B 3.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は尖る。口縁部内側直下に一条の沈線が巡る。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P420 50% 竈西側床面

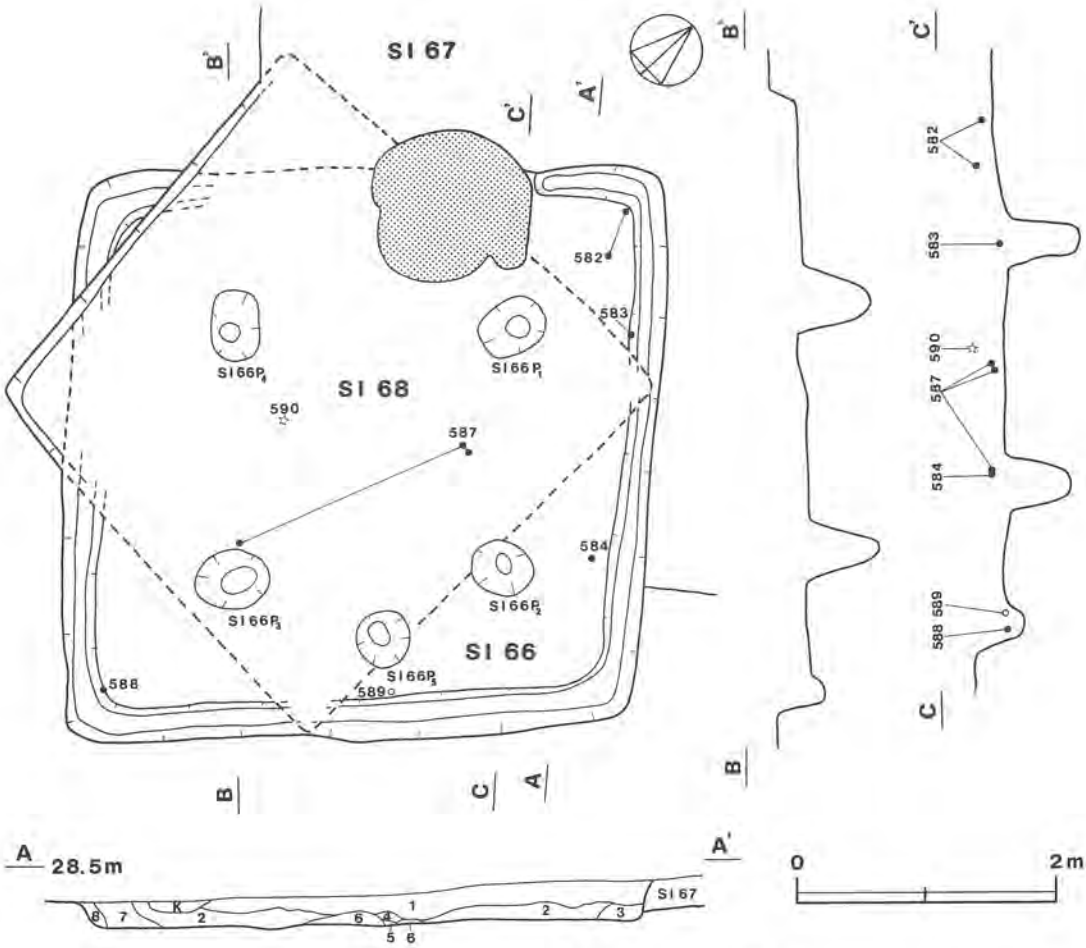
第66号住居跡（第161図）

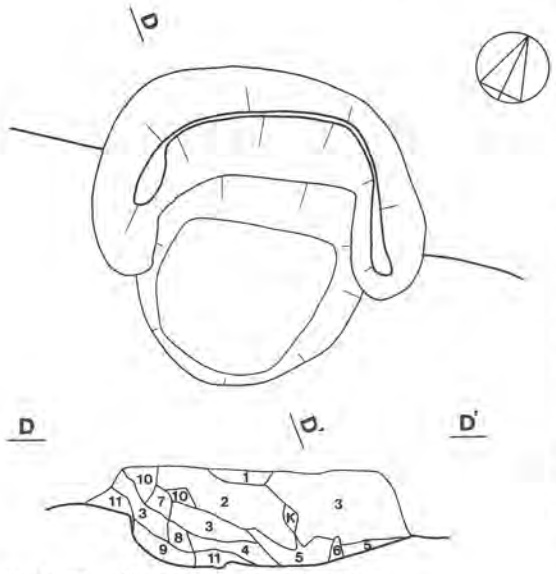
位置　調査区の南西部，E$1i_0$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北コーナーは第67号住居跡の中央部から南コーナーを掘り込み，本跡の上位には第68号住居跡が構築されている。

規模と平面形　長軸4.64m，短軸4.44mの方形を呈している。

主軸方向　N-50°-W。





第66・68号住居跡　土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土ブロック・焼土粒子少量。
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
4　暗 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量。
5　暗 褐 色　ローム粒子中量。
6　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量。
7　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
8　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。

第68号住居跡　竈土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量。
2　極暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック・焼土粒子中量。
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
5　極暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化粒子少量。
6　明赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
7　極暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子中量，焼土ブロック少量。
8　極暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子多量。
9　暗 褐 色　ロームブロック少量。
10　暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量。
11　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック・焼土粒子少量。

0　1m

第161図　第66・68号住居跡実測図

壁　壁高は8～16cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅20～28cm，深さ11～13cmで，断面形はU字状を呈している。

床　凸凹で，ロームブロック混じりの貼床である。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4の規模は，径38～52cm，深さ53～60cmで主柱穴，P_5は，径26～28cm，深さ30cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　重複する第68号住居跡に削平され検出されていない。

覆土　自然堆積。

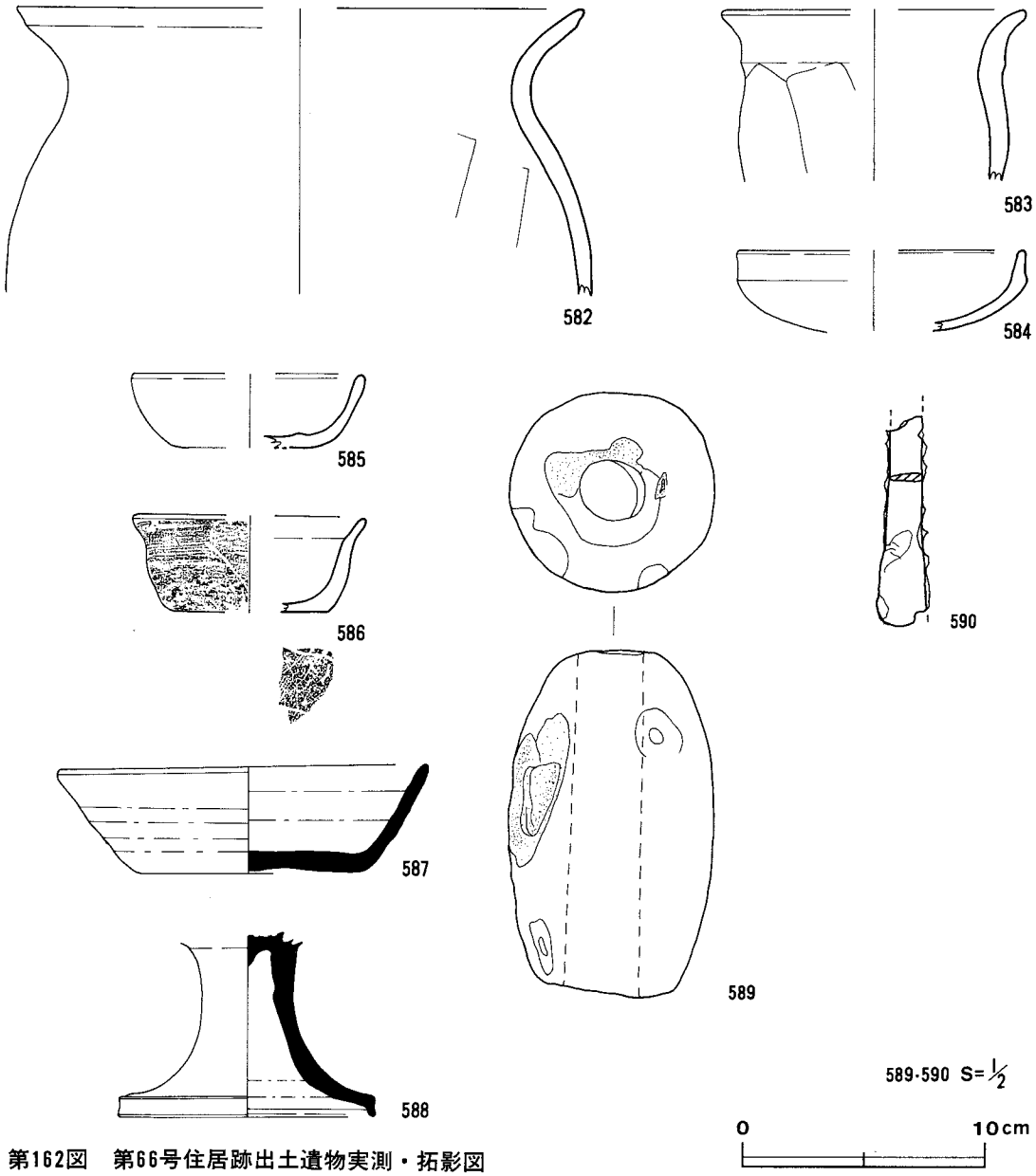
遺物　北コーナー及び南コーナー付近から，土師器(坏，甕，甑)片，須恵器(坏，甕，高坏，盤)片，鉄製品等がまとまって出土している。588の須恵器の高坏は南コーナー付近の床面から横位の状態で，584の土師器の坏は北東部覆土下層から逆位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第67号住居跡より新しく，第68号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第66号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図 582	甕 土師器	A [23.4] B (11.9)	頸部は「く」の字状に屈曲して，口縁部に至る。口唇部を外上方につまみ出す。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P421　5% 北コーナー付近 覆土下層
583	甕 土師器	A [12.3] B (7.2)	張りの弱い胴部で，頸部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外反する。	胴部外面手持ちヘラ削り。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P422　5% 北西部床面
584	坏 土師器	A [11.8] B (3.4)	体部との境に弱い稜をもつ。口縁部は僅かに外傾する。	体部内・外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P423　20% 北東部覆土下層
585	坏 土師器	A [9.4] B　3.1 C [5.6]	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	全体摩耗。	砂粒 灰白色 普通	P424　10% 覆土
586	坏 土師器	A [9.4] B　4.0 C [6.4]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面に木葉痕。	砂粒 灰白色 普通	P425　20% 覆土
587	坏 須恵器	A　15.2 B　4.5 C　9.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P426　70% 中央部覆土下層
588	高坏 須恵器	D　10.4 E (7.6)	脚部は大きく外反して裾部に至る。端部はほぼ直角に屈曲する。	内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 良好	P427　30% 南コーナー付近 床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
589	管状土錘	9.7	5.7	---	20.0	294.3	100	南東部床面	DP116
590	刀子	(5.9)	(1.3)	(0.3)	---	8.0	50	南西部覆土上層	M30



第162図　第66号住居跡出土遺物実測・拓影図

第67号住居跡(第163図)

位置　調査区の南西部，Eli_0区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の中央部から南コーナーにかけては第66号住居跡の北コーナーに，東コーナーは第73号住居跡の西コーナーにそれぞれ掘り込まれ，更に，本跡の上位には第68号住居跡が構築されている。

規模と平面形　長軸 5.14m，短軸5.02mの方形を呈している。

主軸方向　N-40°-W。

壁　残存している北西壁は，壁高22cm を測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　北西壁下及び北東壁下の一部からだけ検出されている。上幅20～24cm，深さ9～10cm で，断面形はU字状を呈している。

床　ほぼ平坦で，竈の前方は特に踏み固められている。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4の規模は，径16～60cm，深さ44～69cm で主柱穴，P_5は径42～52cm，深さ45cm で出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部の壁を20cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ121cm，幅110cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部の一部が遺存している。火床は床面を5cm 程掘り窪めており，熱をうけて赤変硬化している。煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

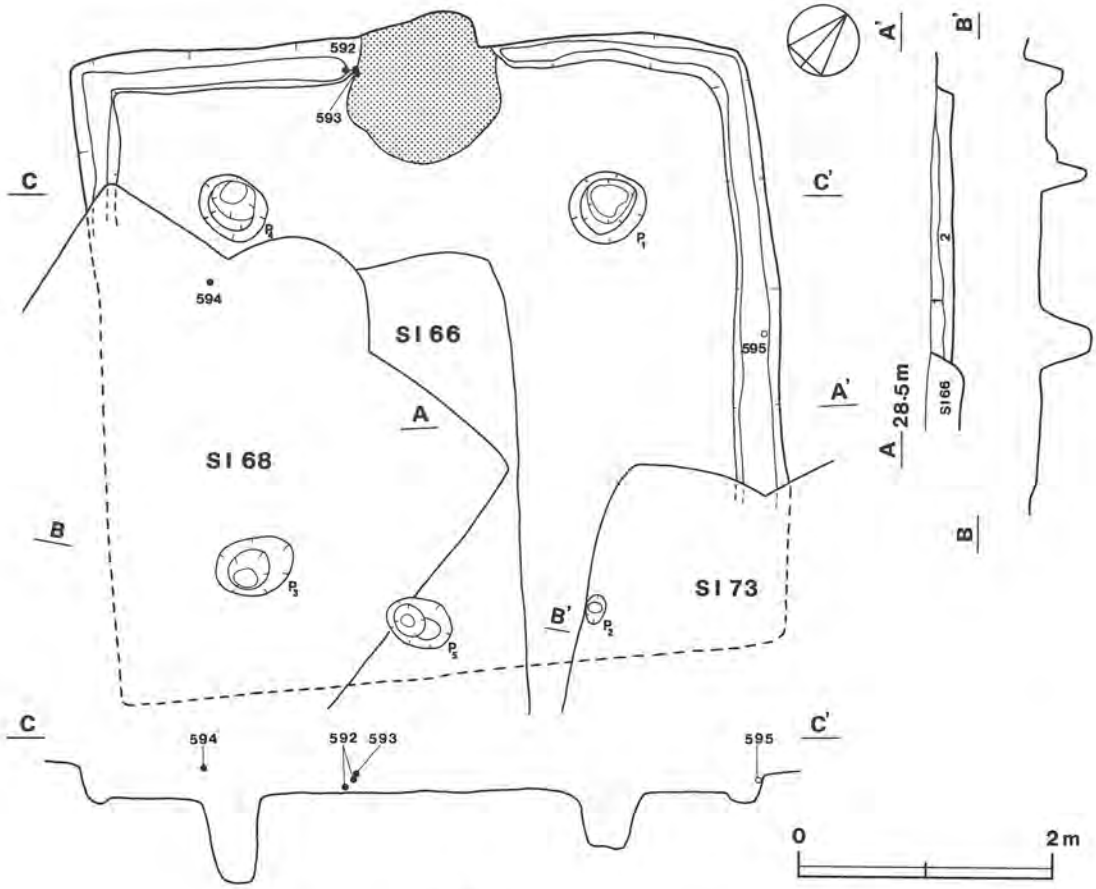
覆土　自然堆積。

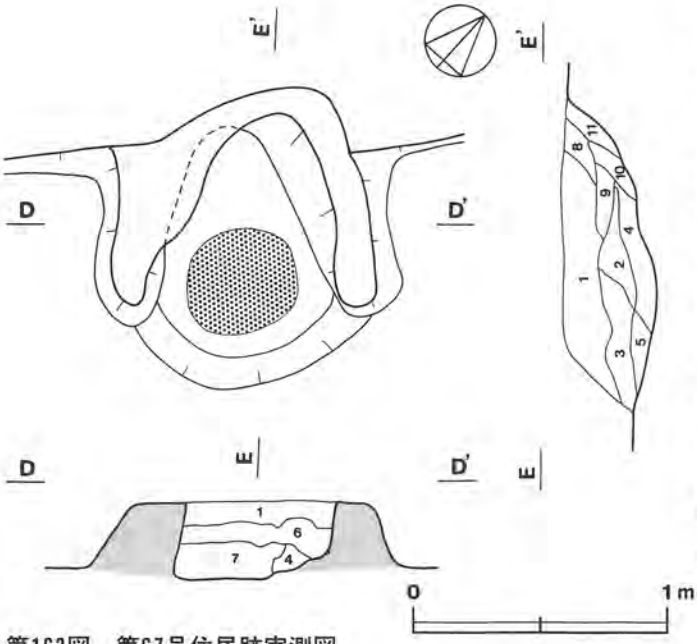
遺物　覆土全域から，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕)片が多量に出土している。593の土師器の坏は竈から正位の状態で出土し，591と592の土師器の甕は同じく竈内から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第66・68・73号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第67号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 591	甕 土師器	A [15.6] B (12.4)	胴部は僅かに内彎しながら立ち上がり，頸部から口縁部にかけて僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P428　10% 竈
592	甕 土師器	B (12.8) C　6.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面摩耗。胴部内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P429　20% 竈
593	坏 土師器	A [14.0] B (4.8)	丸底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P430　40% 竈
594	手捏土器	B (3.9) C　4.2	上げ底気味。胴部は内彎しながら立ち上がり，壺状を呈する。	胴部外面上位手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P431　80% 南西部覆土上層



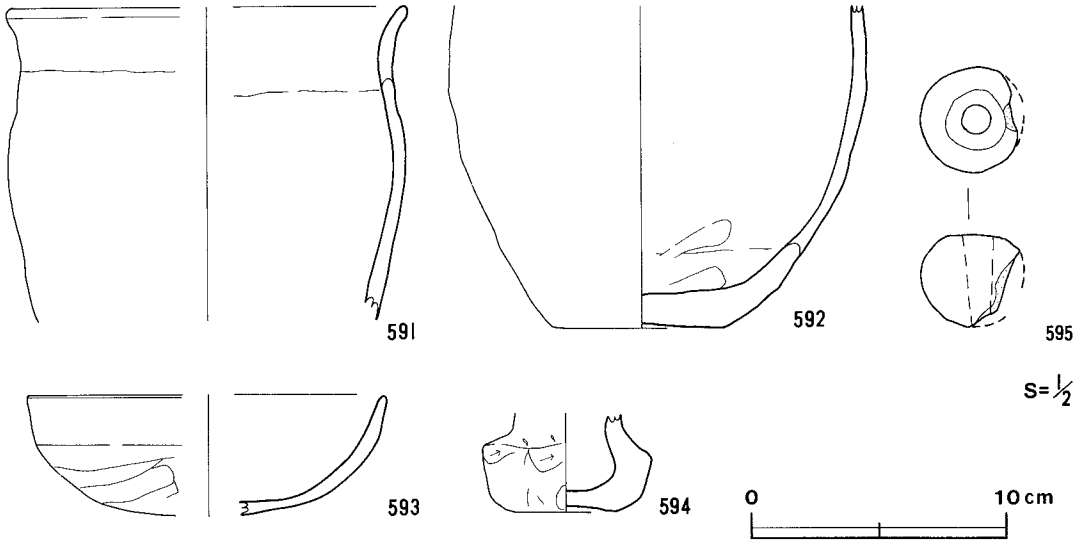


第67号住居跡	土層解説
1 暗 褐 色	ローム粒子多量，ロームブロック中量。
2 暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子少量。

第67号住居跡	竈土層解説
1 にぶい褐色	ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子中量。
2 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3 暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子中量。
4 暗赤褐色	焼土粒子多量，ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
5 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
6 明赤褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
7 にぶい赤褐色	焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
8 暗赤褐色	ローム粒子多量，炭化粒子中量，焼土粒子少量。
9 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量。
10 にぶい赤褐色	ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量。
11 にぶい赤褐色	ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。

第163図　第67号住居跡実測図

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
595	球状土錘	2.5	2.6	---	8.0	13.2	70	北東部覆土上層	DP117



第164図　第67号住居跡出土遺物実測図

第68号住居跡(第161図)

位置　調査区の南西部，E1i₀区を中心に確認されている。

重複関係　本跡は，第66・67号住居跡の上位に構築されている。

規模と平面形　長軸3.86m，短軸3.60mの方形を呈しているものと推定される。

主軸方向　N-0°。

壁　西壁だけ検出されている。壁高は20～22cm を測り，外傾して立ち上がっている。

床　第66・67号住居跡の上位に貼床をして構築されている。中央部はやや盛り上がり，硬化面が残っている。

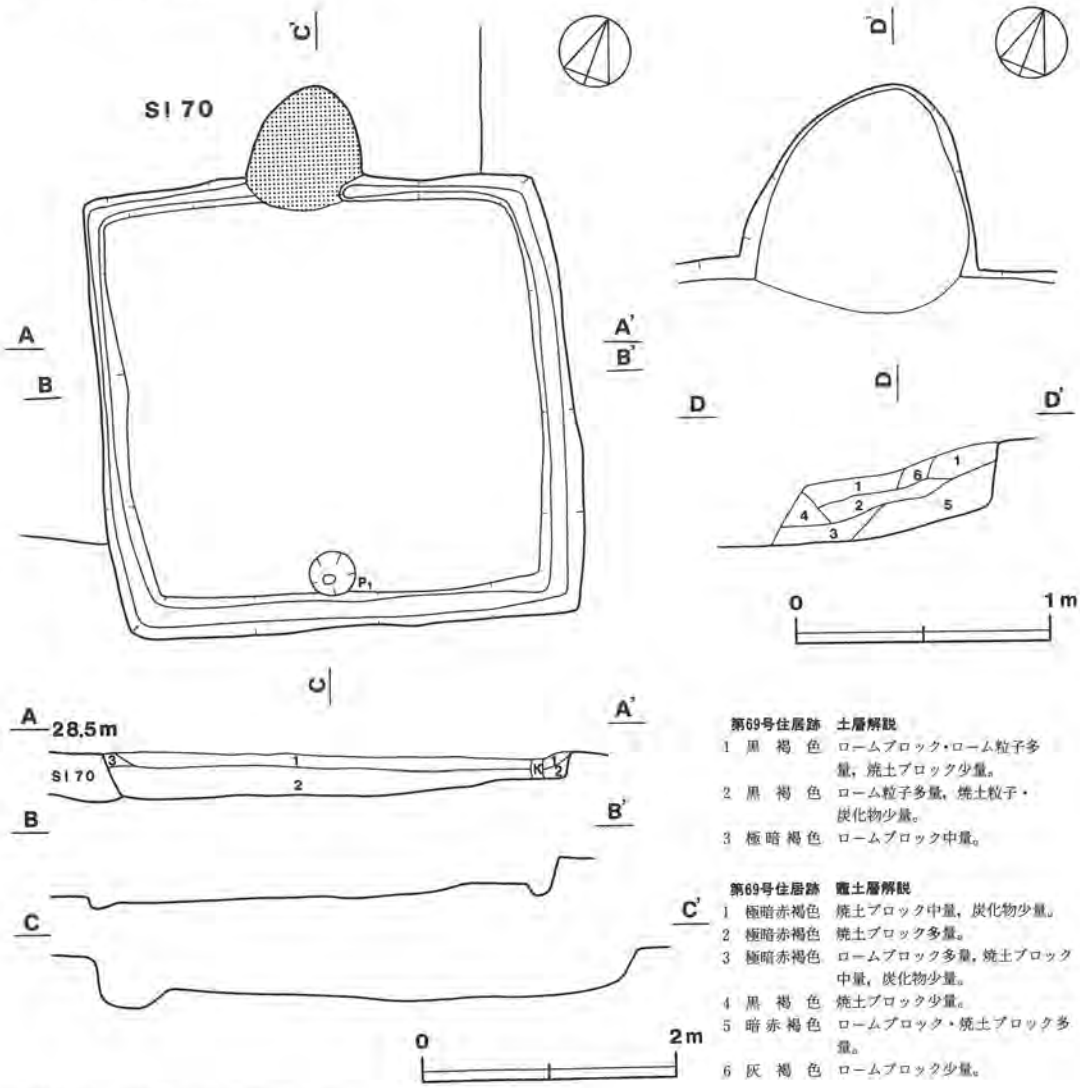
竈　推定プランの北壁中央部の壁を52cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されているが，袖部の一部と浅く掘り窪めた火床が遺存しているにすぎない。規模は長さ126cm，幅113cm 程を測る。火床はあまり熱をうけていない。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層から土師器の甕片が5点，須恵器の坏片が1点出土している。

所見　本跡は，重複関係から第66・67号住居跡より新しい時期に構築され，遺構の形態等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第69号住居跡(第165図)



第165図　第69号住居跡実測図

位置　調査区の南西部，E1d₀区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北西部は，第70号住居跡の南東部を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.72m，短軸3.50mの方形を呈している。

主軸方向　N-16°-W。

壁　壁高は18～38cm を測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅14～20cm，深さ6～8cm で，断面形は逆台形状を呈している。

床　ほぼ平坦で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径34～36cm，深さ19cm で，出入口施設に伴うピッ

第69号住居跡出土遺物観察表

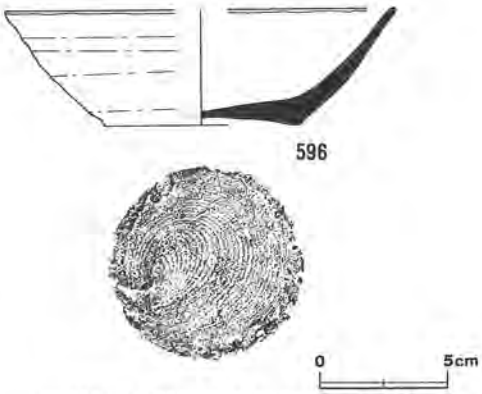
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第166図 596	坏 須恵器	A [15.2] B 4.6 C 7.4	上げ底気味。体部は器厚を減じながら内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部回転糸切り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P432 60% 竈

トと考えられる。

竈 北壁中央部の壁を72cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されていたと考えられる。遺存状態は悪く，僅かに掘り窪められた火床が遺存しているにすぎない。

覆土 自然堆積。

遺物 竈内及び西部の覆土中から，土師器(坏，甕，甑)片，須恵器(盤)片が少量出土している。596の須恵器の坏は竈内から逆位の状態で出土している。



第166図 第69号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は，重複関係から第70号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代後期の住居跡と考えられる。

第70号住居跡(第167図)

位置 調査区の南西部，E1d$_9$区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の竈は，第71号住居跡の南壁の一部を掘り込み，南東部は第69号住居跡の北西部に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.42m，短軸4.58mの長方形を呈している。

主軸方向 N-12°-W。

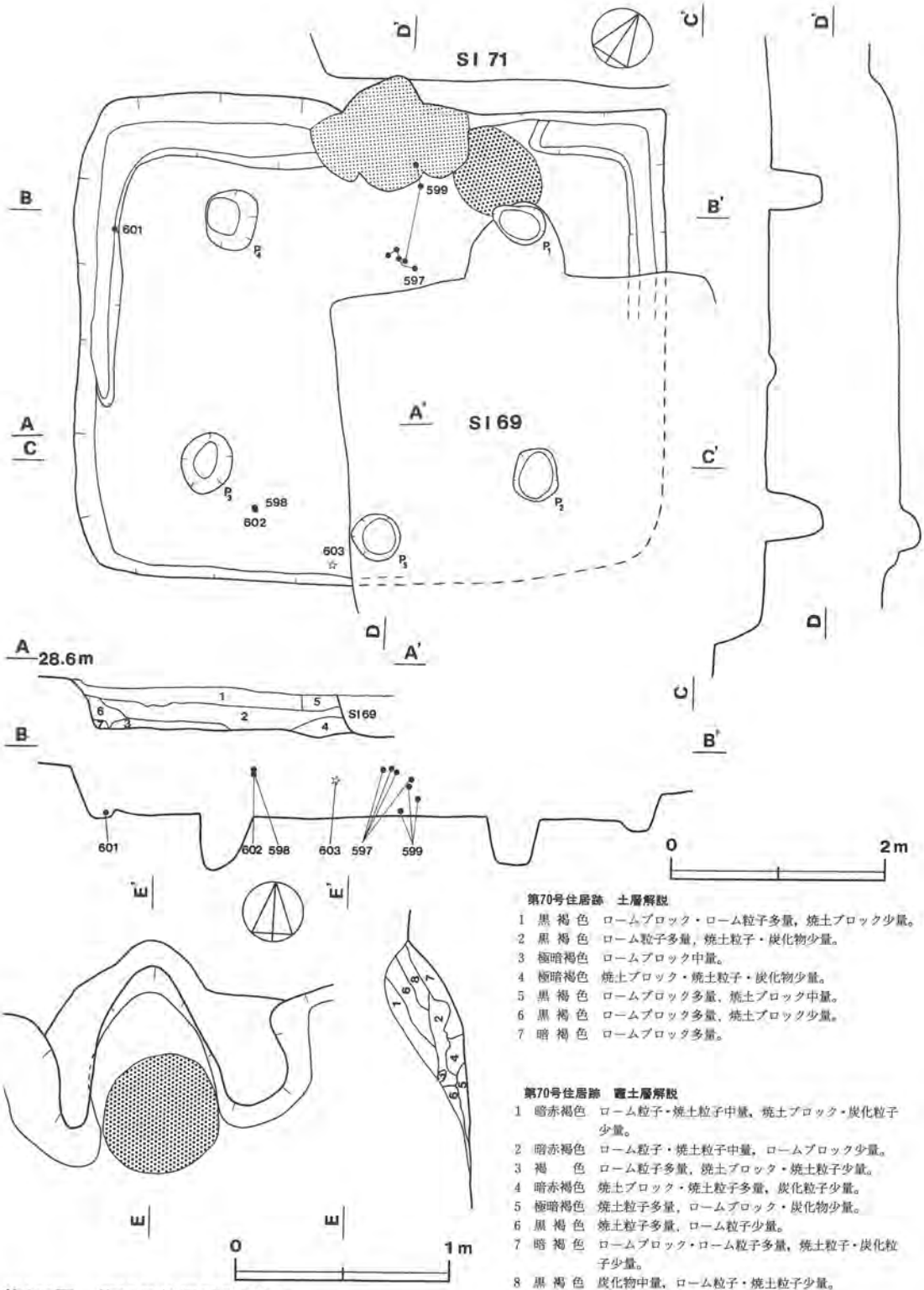
壁 壁高は24～48cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅24～28cm，深さ9～10cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床 凸凹で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

ピット 5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4の規模は，径38～60cm，深さ48～54cmで主柱穴，P_5の規模は径44～46cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部の壁を30cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ110cm，幅130cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を4cm程掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾



第70号住居跡　土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック少量。
2　黒 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量。
3　極暗褐色　ロームブロック中量。
4　極暗褐色　焼土ブロック・焼土粒子・炭化物少量。
5　黒 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量。
6　黒 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
7　暗 褐 色　ロームブロック多量。

第70号住居跡　竈土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
2　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，ロームブロック少量。
3　褐　　色　ローム粒子多量，焼土ブロック・焼土粒子少量。
4　暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子少量。
5　極暗褐色　焼土粒子多量，ロームブロック・炭化物少量。
6　黒 褐 色　焼土粒子多量，ローム粒子少量。
7　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
8　黒 褐 色　炭化物中量，ローム粒子・焼土粒子少量。

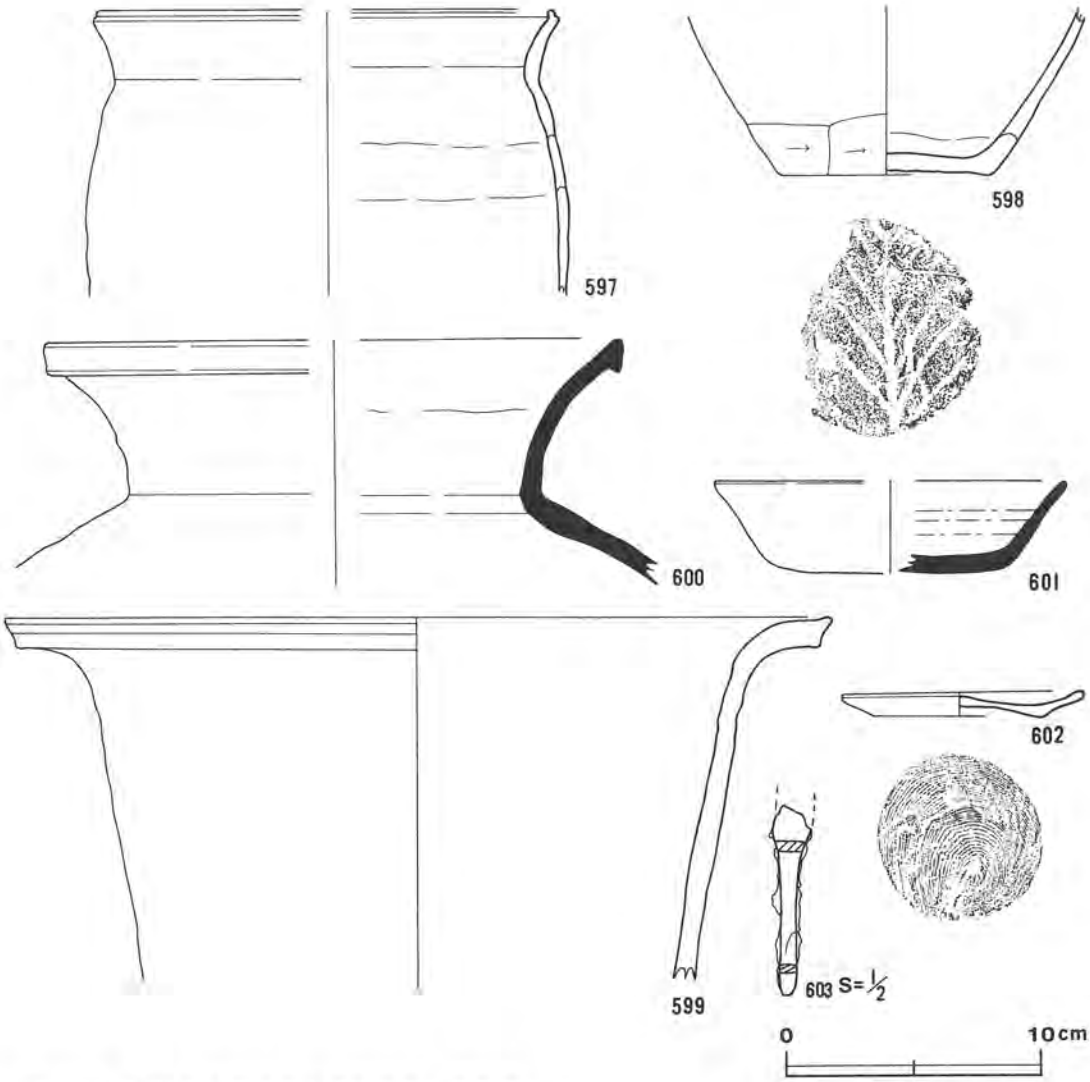
第167図　第70号住居跡実測図

して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層から下層にかけて，土師器(坏，甕，甑)片，須恵器(坏，甕，蓋)片等が少量出土している。599の土師器の甑は竈から，601の須恵器の坏は北西部床面から逆位の状態でそれぞれ出土している。602の土師質土器(皿)は南西部覆土上層から，603の刀子は南西部覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第71号住居跡より新しく，第69号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第168図　第70号住居跡出土遺物実測・拓影図

第70号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第168図 597	甕 土師器	A [17.8] B (11.3)	頸部は外反気味に立ち上がり，口縁部に至る。	胴部内面ナデ。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P433 10% 北東部覆土上層
598	甕 土師器	B (6.7) C [8.4]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位横位の手持ちヘラ削り。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・礫 灰褐色 普通	P434 20% 南西部覆土上層
599	甑 土師器	A 32.6 B (14.6)	胴部は外傾して立ち上がる。頸部から口縁部にかけて水平で，口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 浅黄橙色 普通	P435 20% 竈
600	甕 須恵器	A [22.6] B (9.7)	張りのある胴部で，頸部は外反しながら立ち上がる。口縁部は外下方に屈曲する。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P437 10% 竈
601	坏 須恵器	A [13.8] B 3.7 C [9.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P438 40% 北西部床面
602	皿 土師質土器	A 9.3 B 1.0 C 6.6	上げ底。体部は大きく外傾する。	底部回転糸切り。体部内・外面ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P436 100% 南西部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
603	刀子	(5.1)	(1.1)	0.3	---	(3.2)	30	南西部覆土中層	M31

第71号住居跡(第169図)

位置　調査区の南西部，E1c9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の東壁中央部付近は，第72号住居跡の西コーナーを掘り込み，第70号住居跡の竈に南壁の一部を掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.24m，短軸3.02mの方形を呈している。

主軸方向　N-15°-W。

壁　壁高は8～22cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　東壁中央部下を除き検出されている。上幅12～15cm，深さ4～5cmで，断面形は皿状を呈している。

床　中央部は盛り上がり，踏み固められ堅緻である。

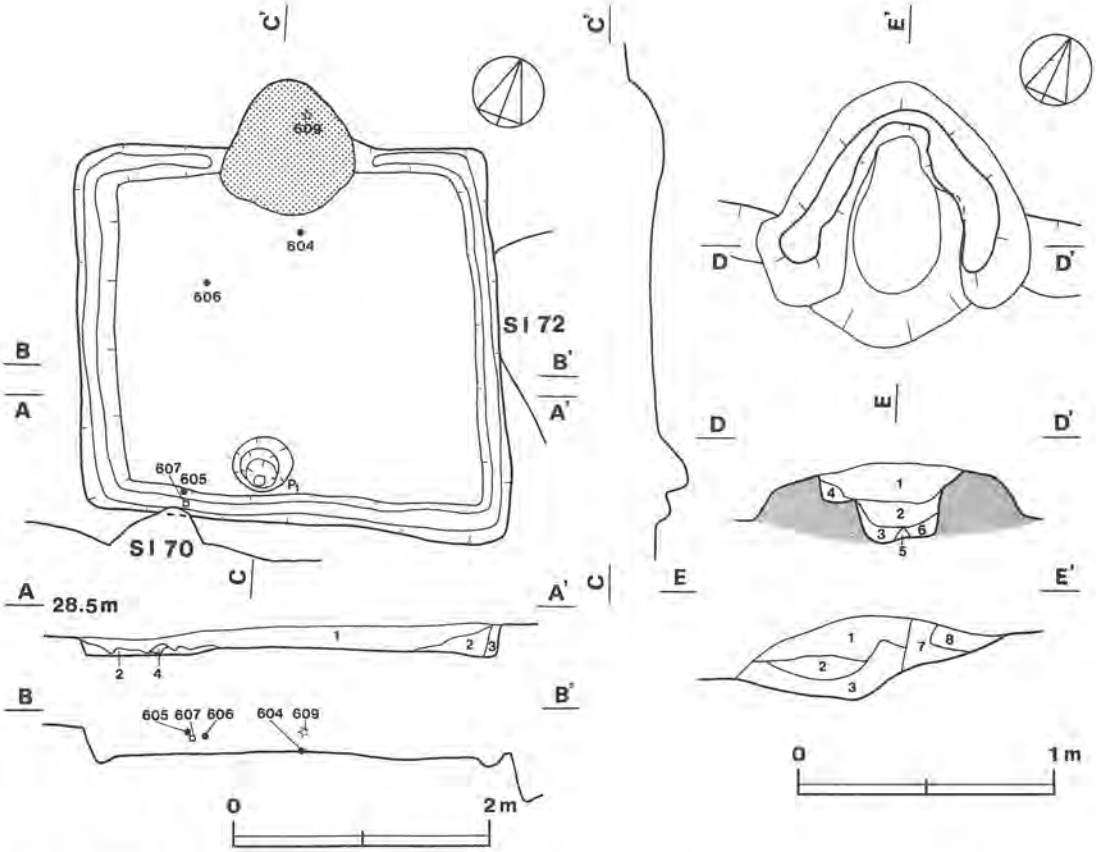
ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径42～44cm，深さ22cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部の壁を52cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ104cm，幅92cmを測る。天井部は崩落し，袖部が僅かに遺存している。火床は床面を5cm程掘り窪めており，焼土と灰が堆積している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈内及び竈周辺の覆土から，土師器(坏，甕)片，須恵器(甕，高台付坏，高坏)片等が極少量出土している。604の須恵器の鉢と609の鉄鏃は竈の前方床面及び竈内から出土している。606は須恵器の坏で北西部の覆土上層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第72号住居跡より新しく，第70号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第71号住居跡　土層解説

1 暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
2 褐　　色　ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
3 極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
4 にぶい褐色　ロームブロック・ローム粒子多量。

第71号住居跡　竈土層解説

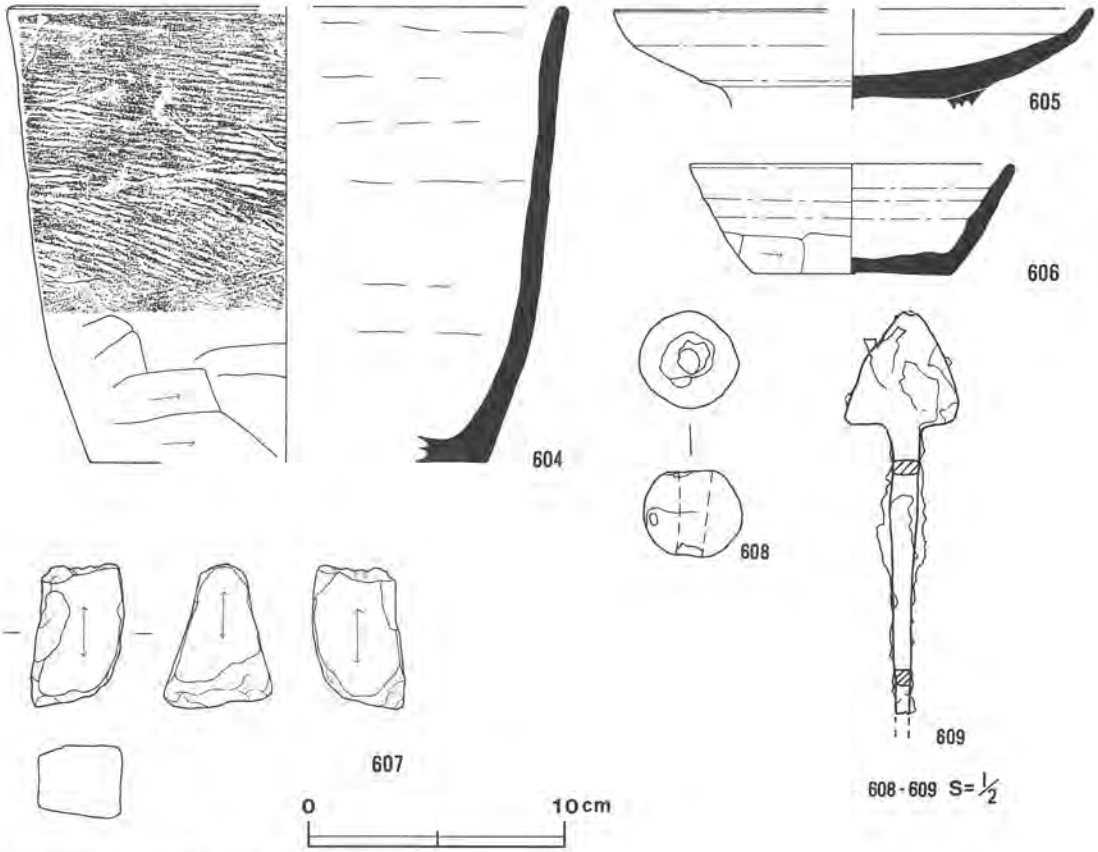
1 極暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子中量。
2 暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量。
3 黒　褐　色　焼土粒子多量・焼土ブロック少量。
4 暗赤褐色　焼土ブロック中量。
5 暗赤褐色　焼土ブロック多量。
6 極暗赤褐色　焼土ブロック中量。
7 灰　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量。
8 灰　褐　色　焼土ブロック多量，炭化粒子少量。

第169図　第71号住居跡実測図

第71号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 604	鉢 須恵器	A [21.4] B 18.0 C [15.6]	平底。胴部は僅かに外傾して口縁部に至る。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。中位から上位平行叩き目。胴部内面上位横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P439 20% 竈前方床面
605	盤 須恵器	A [18.6] B (4.0)	平底。高台欠損。口縁部は体部から内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P440 600 北西部覆土上層
606	坏 須恵器	A 12.6 B 4.4 C 7.7	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端一方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P441 90% 北西部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
607	砥石	(5.7)	3.7	4.3	—	(82.0)	80	南西部覆土上層	Q21 凝灰岩
608	球状土錘	2.3	2.7	—	9.0	13.2	100	覆土	DP118
609	鉄鏃	(10.7)	(3.0)	(0.5)	—	(21.2)	90	竈	M32



第170図　第71号住居跡出土遺物実測・拓影図

第72号住居跡(第171・172図)

位置　調査区の南西部，E2c_1区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の西コーナーは，第71号住居跡の東壁中央部に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸7.12m，短軸6.84mの方形を呈している。

主軸方向　N-41°-W。

壁　壁高は34～44cmを測り，垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅14～18cm，深さ5～8cmで，断面形は皿状を呈している。

床　ほぼ平坦で，中央部から竈の前方にかけて踏み固められ堅緻である。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4の規模は，径40～66cm，深さ74～94cmで主柱穴，P_5の規模は，径32～33cm，深さ26cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

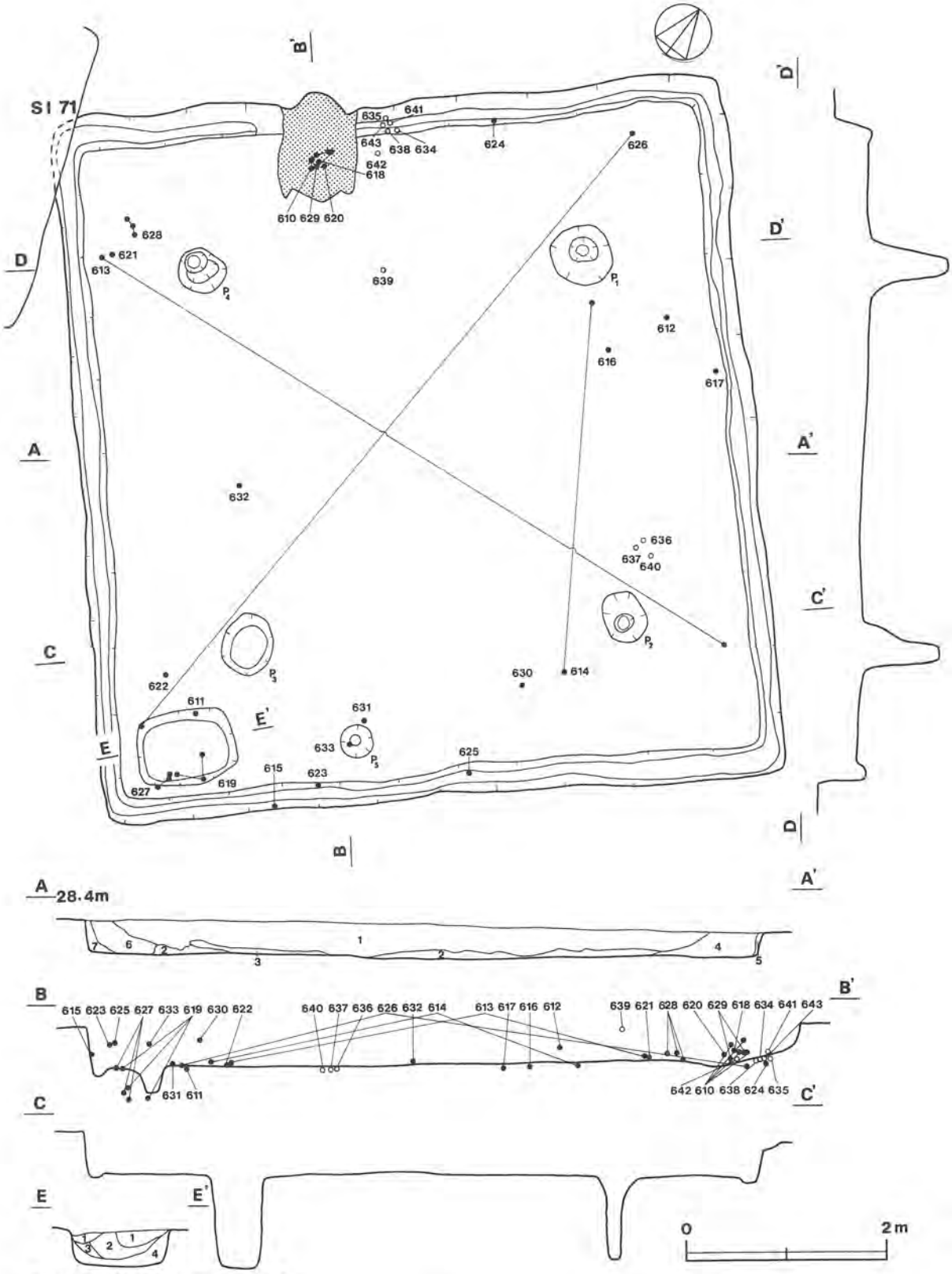
貯蔵穴　南コーナーに付設されている。規模は，長軸98cm，短軸64cmで，深さ41cmを測る。平面形は長方形状を呈している。底面は平坦で，長軸88cm，短軸48cmで，断面形は逆台形状を呈している。

竈　北西壁の中央からやや西寄りの壁を35cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は長さ134cm，幅112cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を3cm程掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床からほぼ垂直に立ち上がっている。

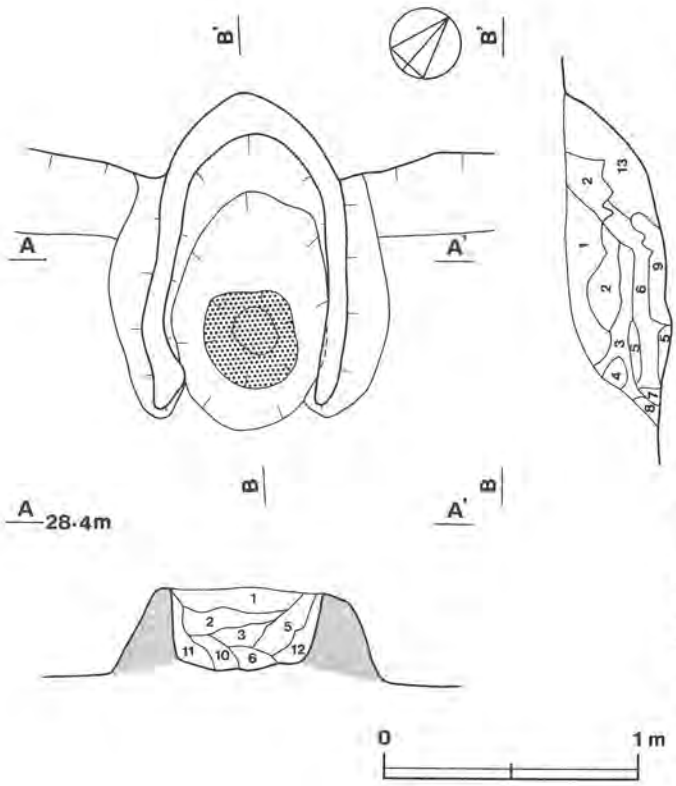
覆土　自然堆積。

遺物　覆土及び床面の全域から，土師器(坏，甕，甑)片を中心に多量の遺物が出土している。616と617の土師器の坏は北東部床面から，622の土師器の坏は南西部床面から，619の土師器の坏は貯蔵穴からそれぞれ正位の状態で出土している。618の土師器の坏と634の紡錘車は竈内及び竈東側底面から出土している。

所見　本跡は，当遺跡では第80号住居跡とともに，貯蔵穴を有する住居跡であり，重複関係から第71号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第171図　第72号住居跡実測図



第72号住居跡　土層解説

1 黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。
3 黒褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
4 褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
5 褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。
6 暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
7 褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量。

第72号住居跡　竈土層解説

1 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
2 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
3 にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・焼土粒子少量。
4 褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量。
5 赤褐色　焼土ブロック多量。
6 極暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
7 暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。
8 褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量。
9 明褐色　ロームブロック多量。
10 暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒子多量。
11 灰黄褐色
12 にぶい赤褐色　焼土ブロック中量。
13 暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量。

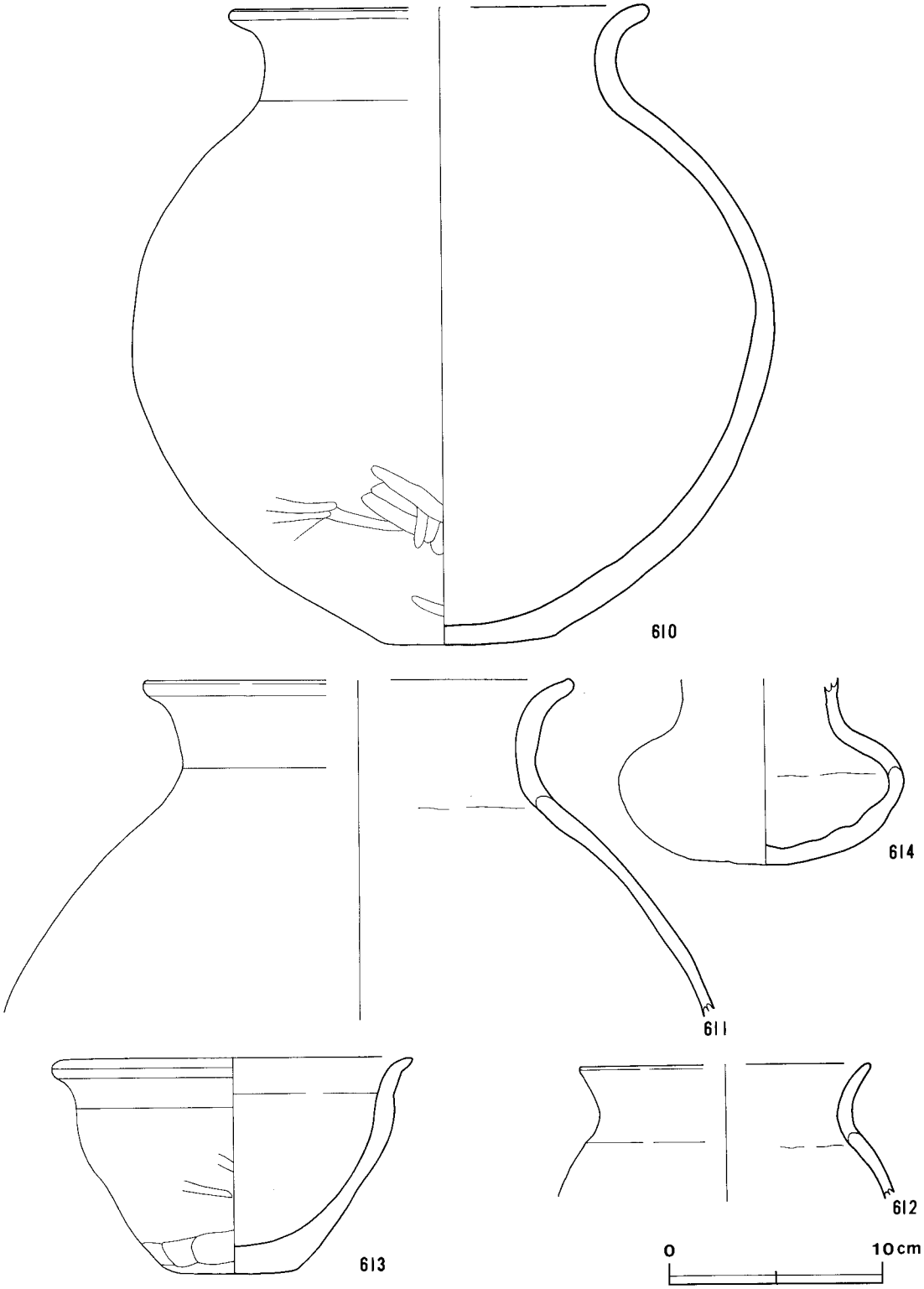
第72号住居跡　貯蔵穴土層解説

1 暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量。
2 暗褐色　ロームブロック多量。
3 暗褐色　ロームブロック・炭化物少量。
4 暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量。

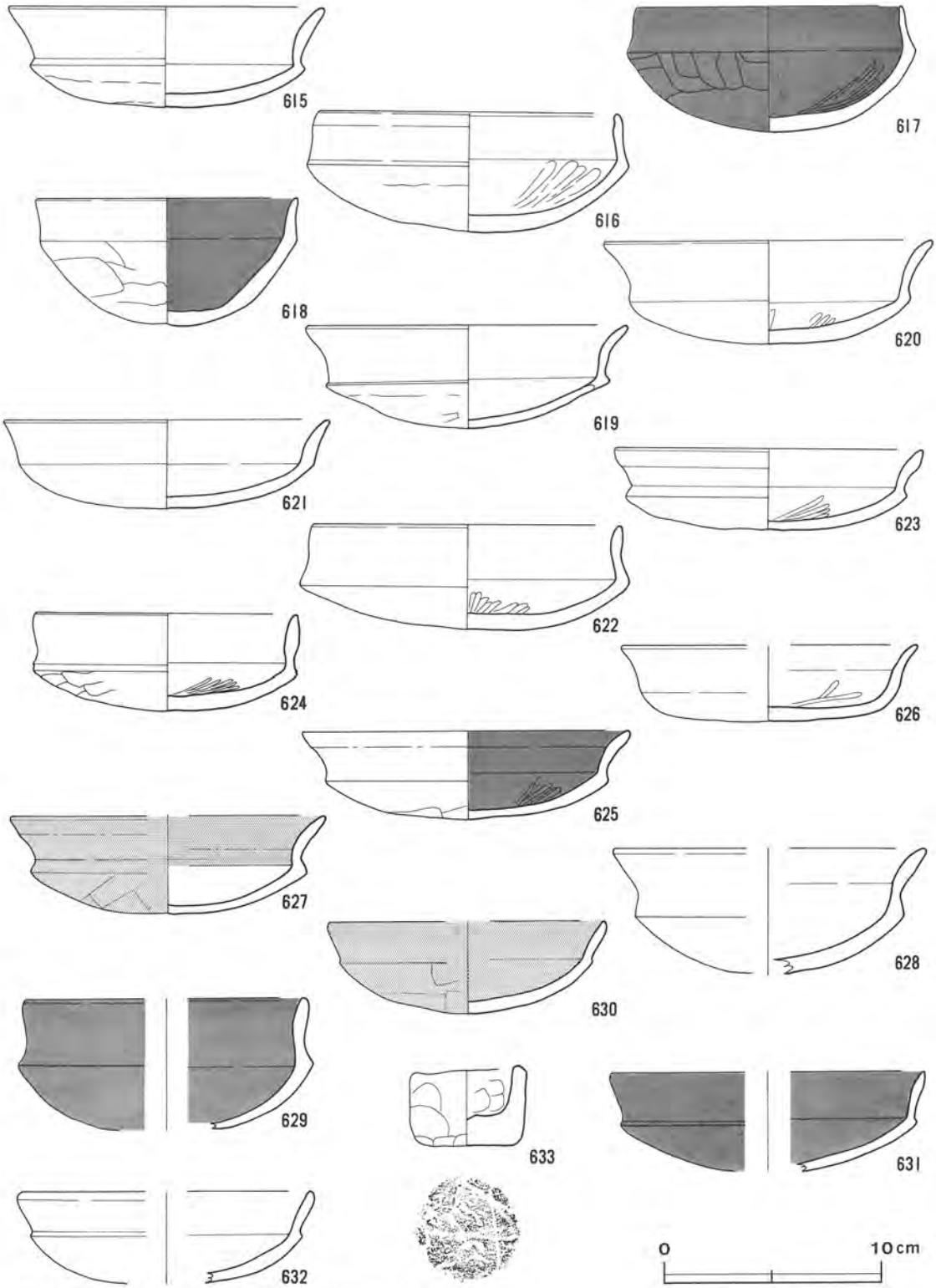
第172図　第72号住居跡竈実測図

第72号住居跡出土遺物観察表

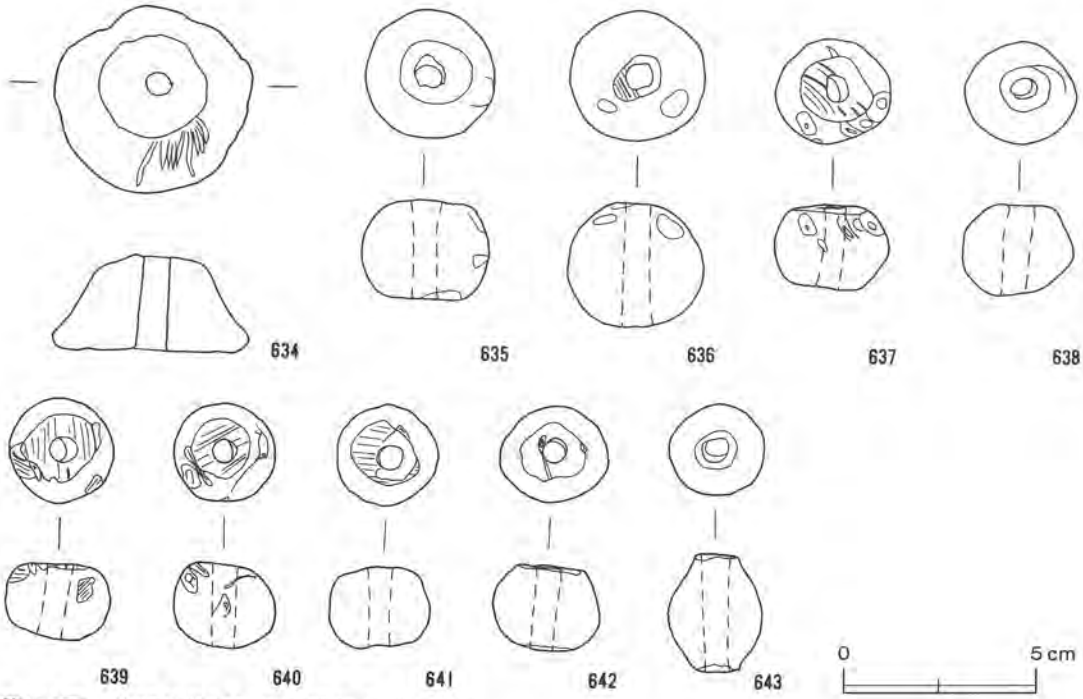
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第173～175図 610	甕 土師器	A [19.3] B 30.0 C 8.1	平底。胴部は球状を呈する。頸部はくびれ，口縁部は外反する。	底部ナデ。胴部外面下位ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P442 70% 竈
611	甕 土師器	A [20.0] B (16.0)	頸部は外反して口縁部に至る。口唇部は丸い。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 良好	P443 30% 貯蔵穴覆土
612	甕 土師器	A [13.6] B (6.5)	頸部は外反して口縁部に至る。口唇部は尖る。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P444 10% 北東部覆土中層
613	鉢 土師器	A 16.6 B 10.1 C 5.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，頸部との境に弱い稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	底部及び胴部外面下位手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P445 80% 床面
614	壺 土師器	B (8.8)	丸底。胴部は大きく内彎して立ち上がり，頸部は内傾する。	胴部及び頸部内・外面ナデ。胴部内面上位ヘラナデ。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P446 40% 床面
615	坏 土師器	A 14.6 B 4.8	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は大きく外反する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P447 100% 南東壁際
616	坏 土師器	A 13.8 B 5.7	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は僅かに内傾する。	体部外面手持ちヘラ削り後ナデ。体部内面放射状のヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P448 100% 北東部床面



第173図　第72号住居跡出土遺物実測図（1）



第174図　第72号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）



第175図　第72号住居跡出土遺物実測図（3）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
617	坏 土師器	A 12.3 B 5.9	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 明赤褐色 良好	P453 70% 北東部床面
618	坏 土師器	A 12.2 B 6.1	丸底。体部は球状を呈し，口縁部は直立する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。内面赤彩。	砂粒・雲母 橙色 普通	P454 90% 竈
619	坏 土師器	A 15.0 B 5.0	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は外傾した後大きく外反する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P455 70% 貯蔵穴
620	坏 土師器	A 15.2 B 4.9	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P452 70% 竈
621	坏 土師器	A 15.3 B 4.2	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反する。口唇部は尖る。	体部外面摩耗。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P449 90% 北西部床面
622	坏 土師器	A 14.3 B 5.0	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面手持ちヘラ削り後，ナデ。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 良好	P451 80% 南西部床面
623	坏 土師器	A 14.3 B 3.8	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は大きく外反する。口唇部は尖る。	体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 良好	P450 80% 南東壁際
624	坏 土師器	A 12.2 B 4.6	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は直立する。口唇部尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面放射状のヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 良好	P457 70% 北西壁際

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
625	坏 土師器	A 15.2 B 4.3	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は大きく外反する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内面赤彩。	砂粒 明赤褐色 良好	P456 60% 南東壁中央付近 覆土上層
626	坏 土師器	A [13.6] B 3.6	平底気味。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 赤色 普通	P459 30% 床面
627	坏 土師器	A [14.7] B 4.7	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部内面を除き黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P461 20% 貯蔵穴
628	坏 土師器	A [14.6] B (6.0)	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は大きく外傾する。	体部外面手持ちヘラ削り後，ナデ。体部外面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P458 40% 北西部覆土下層
629	坏 土師器	A [13.2] B (6.3)	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は外反気味に直立する。	体部外面手持ちヘラ削り後，ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤褐色 良好	P462 20% 竈
630	坏 土師器	A [12.8] B 4.4	丸底。体部と口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は外傾する。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 灰褐色 普通	P460 10% 南東部覆土上層
631	坏 土師器	A [14.4] B (4.7)	丸底。体部との境に強い稜をもつ。口縁部は僅かに外傾した後外反する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 橙色 良好	P463 10% 南東部床面
632	坏 土師器	A [13.8] B (4.3)	丸底。体部との境に強い稜をもつ。口縁部は外傾する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P464 20% 南西部床面
633	手捏土器	A 5.0 B 3.8 C 4.6	平底。体部は直立する。	体部内・外面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒 浅黄橙色 普通	P465 90% 南東部床面

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
634	紡錘車	5.2	(5.0)	2.6	8.0	(53.2)	70	竈東側床面	DP149
635	球状土錘	2.7	3.4	---	9.0	31.0	100	竈東側床面	DP120
636	球状土錘	3.3	3.6	---	8.0	38.0	100	南東部床面	DP121
637	球状土錘	2.3	3.1	---	7.0	19.0	100	南東部床面	DP122
638	球状土錘	2.4	2.9	---	7.0	17.6	100	竈東側床面	DP123
639	球状土錘	2.0	2.8	---	7.0	15.4	100	北西部覆土上層	DP124
640	球状土錘	2.3	2.7	---	7.0	15.2	100	南東部床面	DP125
641	球状土錘	2.2	2.7	---	7.0	15.8	100	竈東側床面	DP126
642	球状土錘	2.3	2.9	---	7.0	16.1	100	竈東側床面	DP127
643	球状土錘	3.1	2.5	---	7.0	16.3	100	竈東側床面	DP128

第73号住居跡(第176図)

位置　調査区の南西部，E2i_1区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の西コーナー付近は，第67号住居跡の東コーナーを掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.86m，短軸3.36mの長方形を呈している。

主軸方向　N-24°-W。

壁　壁高は44～46cm を測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅14～22cm，深さ4～8cm で，断面形はU字状を呈している。

床　ほぼ平坦で，全体的に踏み固められ堅緻である。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径30～44cm，深さ20cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部の壁を62cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ150cm，幅154cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は遺存している。火床は床面を7cm 程掘り窪めており，焼土が厚く堆積している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

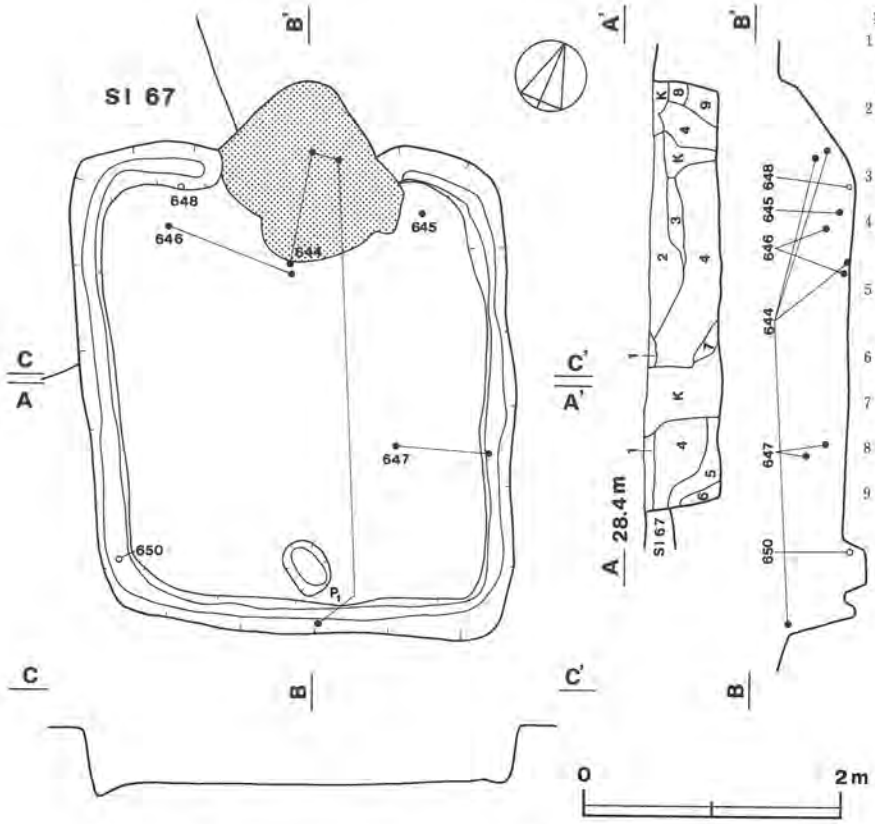
覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層から，流れ込みと思われる縄文式土器片が11点出土している。竈内及び竈周辺の覆土下層から少量の土師器(甕，坏，高台付坏)片，須恵器(坏，甕)片が出土している。644の土師器の甕は竈内から出土している。646は土師器の高台付坏で北西部の覆土下層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第67号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

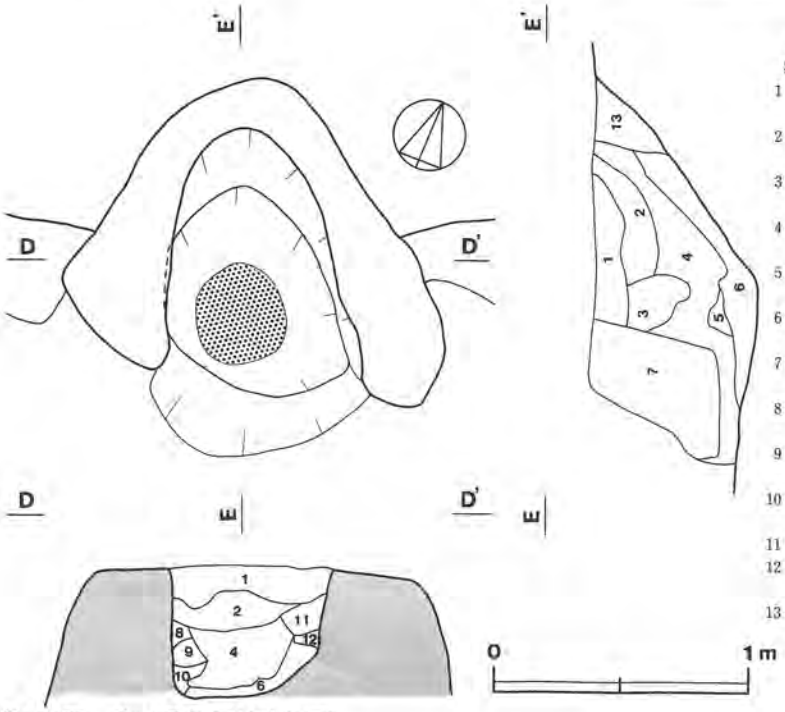
第73号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 644	甕 土師器	A 20.8 B 30.7 C 6.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，長胴を呈する。口縁部は外反し，口唇部を外上方につまみ出す。	胴部外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。底部に木葉痕あり。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P466 40% 竈
645	甕 土師器	A [21.0] B (15.7)	胴部は内彎気味立ち上がり，上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	P467 10% 北東部覆土下層
646	高台付坏 土師器	A [14.0] B 4.6 D [5.8] E 0.9	平底。「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	体部外面横ナデ。体部内面黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 橙色 普通	P468 30% 北西部覆土下層
647	坏 須恵器	A [13.4] B 5.0 C [7.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰白色 普通	P469 40% 南東部覆土上層



第73号住居跡　土層解説

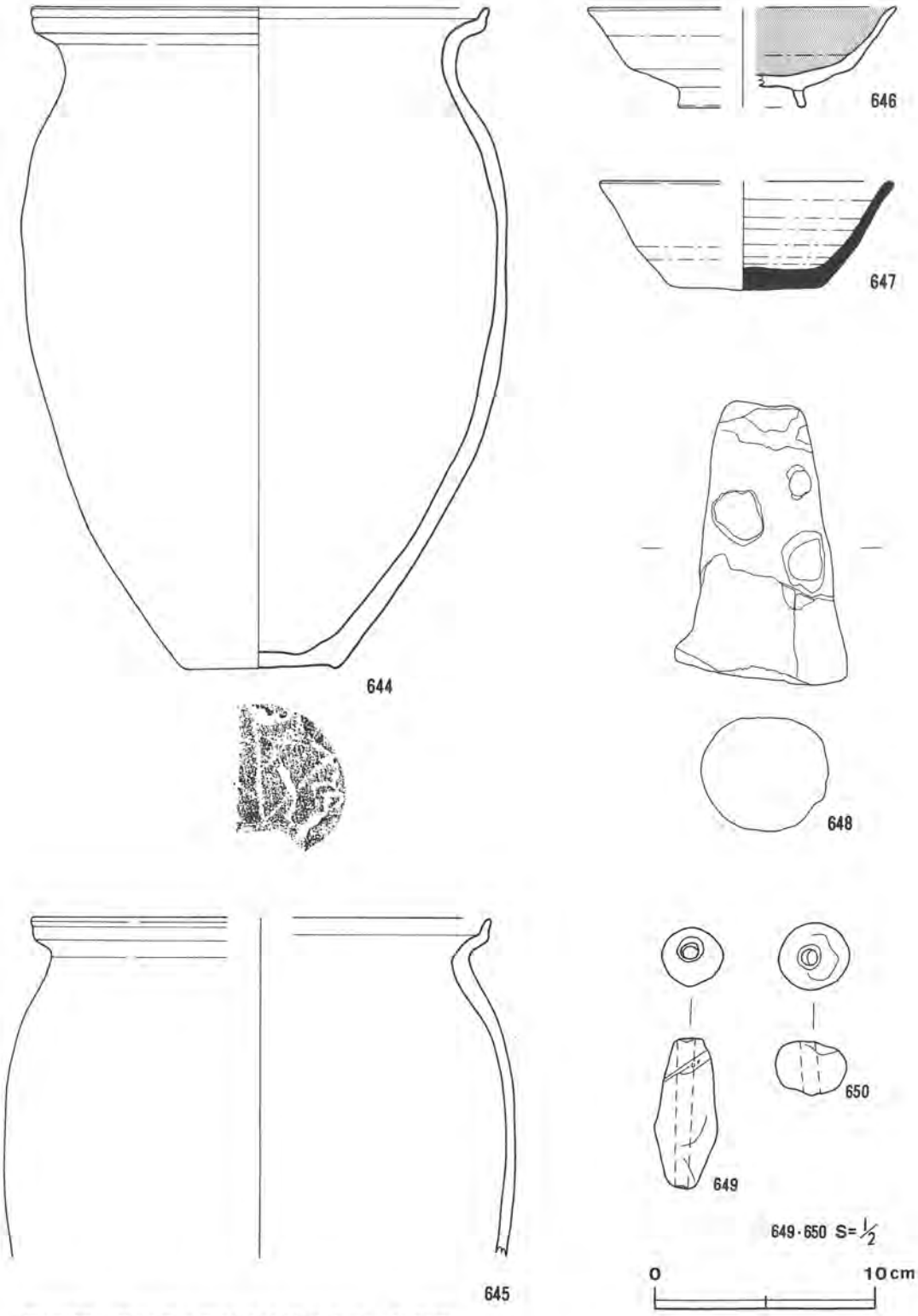
1 暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子少量。
2 暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量。
3 暗褐色　ロームブロック・ローム粒子中量。
4 暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
5 暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
6 暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量。
7 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量。
8 褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。
9 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。



第73号住居跡　覆土層解説

1 暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
2 暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3 極暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
4 極暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
5 暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
6 黒褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子少量。
7 にぶい赤褐色　ローム粒子多量・焼土ブロック・炭化粒子少量。
8 にぶい赤褐色　焼土粒子・炭化粒子中量，焼土ブロック・ローム粒子少量。
9 暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量。
10 極暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子少量。
11 黒褐色　ロームブロック・焼土粒子少量。
12 褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
13 暗赤褐色　ローム粒子多量，炭化物中量，ローム粒子・焼土粒子少量。

第176図　第73号住居跡実測図



第177図　第73号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
648	支脚	(13.3)	(7.9)	---	---	(465.3)	90	北西部床面	DP129
649	管状土錘	4.7	1.9	---	5.0	12.3	100	覆土	DP130
650	球状土錘	1.7	2.2	---	5.0	6.7	100	南西部床面	DP131

第74号住居跡(第178図)

位置　調査区の南西部，E2d_2区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸4.18m，短軸3.86mの方形を呈している。

主軸方向　N-32°-W。

壁　壁高は26～30cmを測り，南壁は緩やかに外傾して立ち上がり，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅18～21cm，深さ6～8cmで，断面形はU字状を呈している。

床　全体的に凸凹で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

ピット　1か所(P_1)検出されている。P_1は，径32～42cm，深さ23cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央からやや西寄りの壁を110cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ160cm，幅137cm程を測る。天井部は崩落し，袖部のほとんどは欠損している。火床は僅かに掘り窪めており，熱をうけて赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

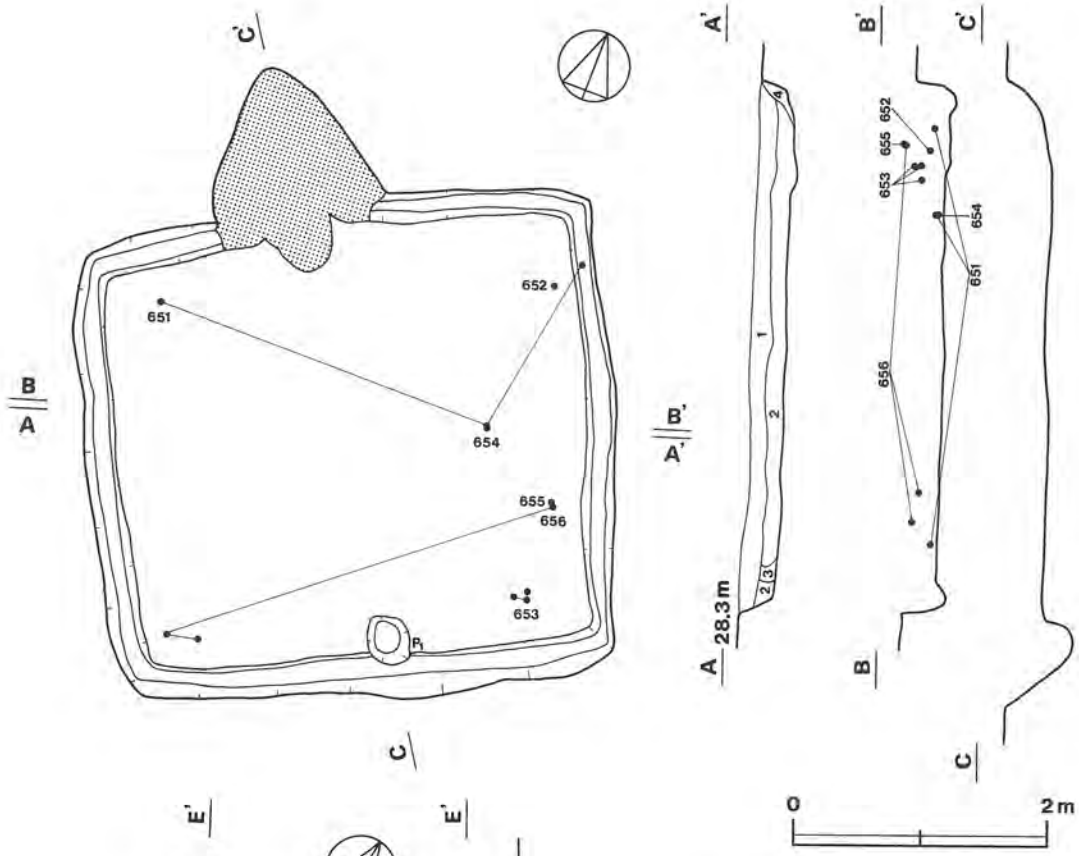
覆土　自然堆積。

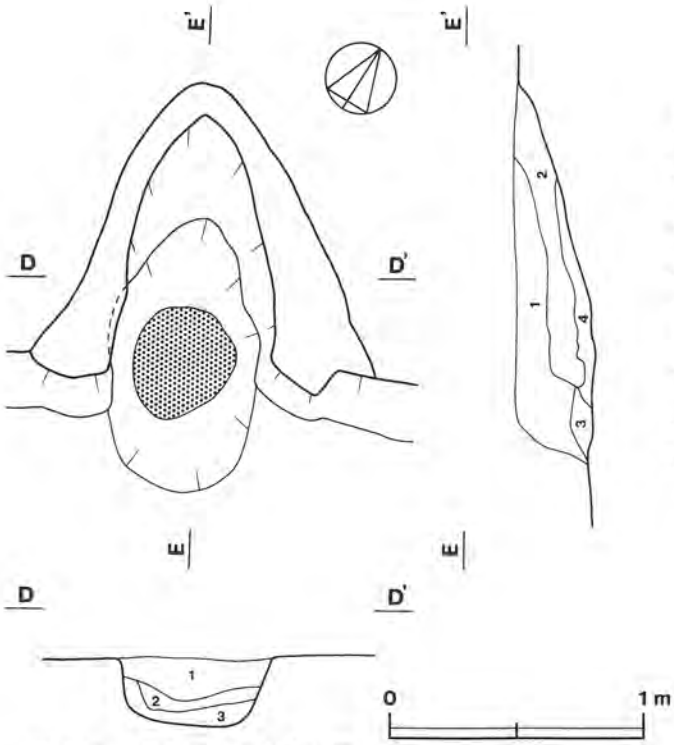
遺物　覆土下層全域から，土師器(坏，甕，甑，高台付坏，皿)片，須恵器(坏，甕，高台付坏，蓋)片が多量に出土している。653の土師器の坏は南東部の覆土上層から正位の状態で出土している。655は底部内外面に「玖」と刻書された土師器の高台付坏で覆土上層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第74号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 651	甕 土師器	B (10.4) C 7.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位横位の手持ちヘラ削り。底部に木葉痕。	砂粒・礫 橙色 普通	P470 30% 覆土下層
652	鉢 土師器	A [23.4] B 11.7 C [4.0]	平底。胴部は大きく外傾して立ち上がり，口縁部は内傾する。	胴部外面ナデ。胴部内面及び口縁部内面横位のヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P475 30% 北東部覆土中層





第74号住居跡　土層解説

1 暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2 黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量。
3 極暗褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック・焼土粒子少量。
4 暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子少量。

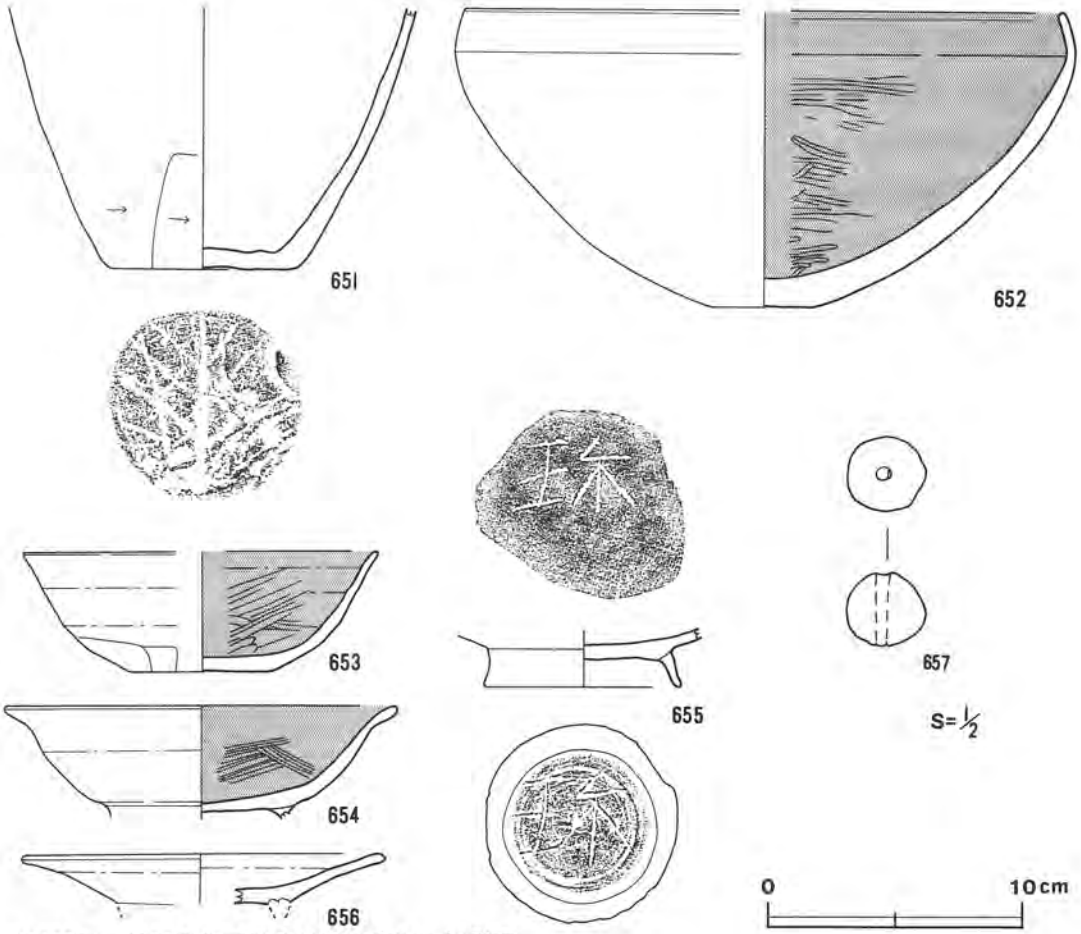
第74号住居跡　竈土層解説

1 にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土ブロック少量。
2 極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
3 暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
4 暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子少量。

第178図　第74号住居跡実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
653	坏 土師器	A [14.0] B 4.7 C 5.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P471 50% 南東部覆土上層
654	高台付坏 土師器	A 15.4 B 4.5	平底で，高台欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	底部及び体部外面摩耗。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 にぶい褐色 普通	P472 70% 南東部覆土下層
655	高台付坏 土師器	B (2.3) D 7.6 E 1.5	平底で，「ハ」の字状に開き端部が尖る高台がつく。	高台貼り付け後，ナデ。底部内・外面刻書。	砂粒 橙色 普通	P473 30% 覆土上層 刻書「珎」
656	高台付坏 土師器	A 13.8 B (2.1)	平底。高台部欠損。口縁部は体部から大きく外傾する。	体部及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P479 30% 南東部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
657	球状土錘	2.0	2.1	—	4.0	7.4	100	覆土	DP132



第179図　第74号住居跡出土遺物実測・拓影図

第75号住居跡（第104図）

位置　調査区の南西部，E1j$_9$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東部は，第40号住居跡の西部を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.66m，短軸4.48mの方形を呈している。

主軸方向　N-10°-W。

壁　壁高は24～36cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。南壁は撹乱されており，他の壁に比べ壁高は低く，外傾して立ち上がっている。

壁溝　南壁下を除き検出されている。上幅24～26cm，深さ10～12cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　中央部はやや盛り上がり，踏み固められ堅緻である。南壁下は撹乱されており，窪んでいる。

ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_3は，径24～46cm，深さ33～70cmで，P_1とP_2は南壁を掘り込んでいる。性格は不明である。P_4は，径18～22cm，深さ36cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央からやや西寄りの壁を42cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ148cm，幅114cm程を測る。遺存状態は悪く，右袖部の一部が遺存している程度である。火床は床面を7cm程掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

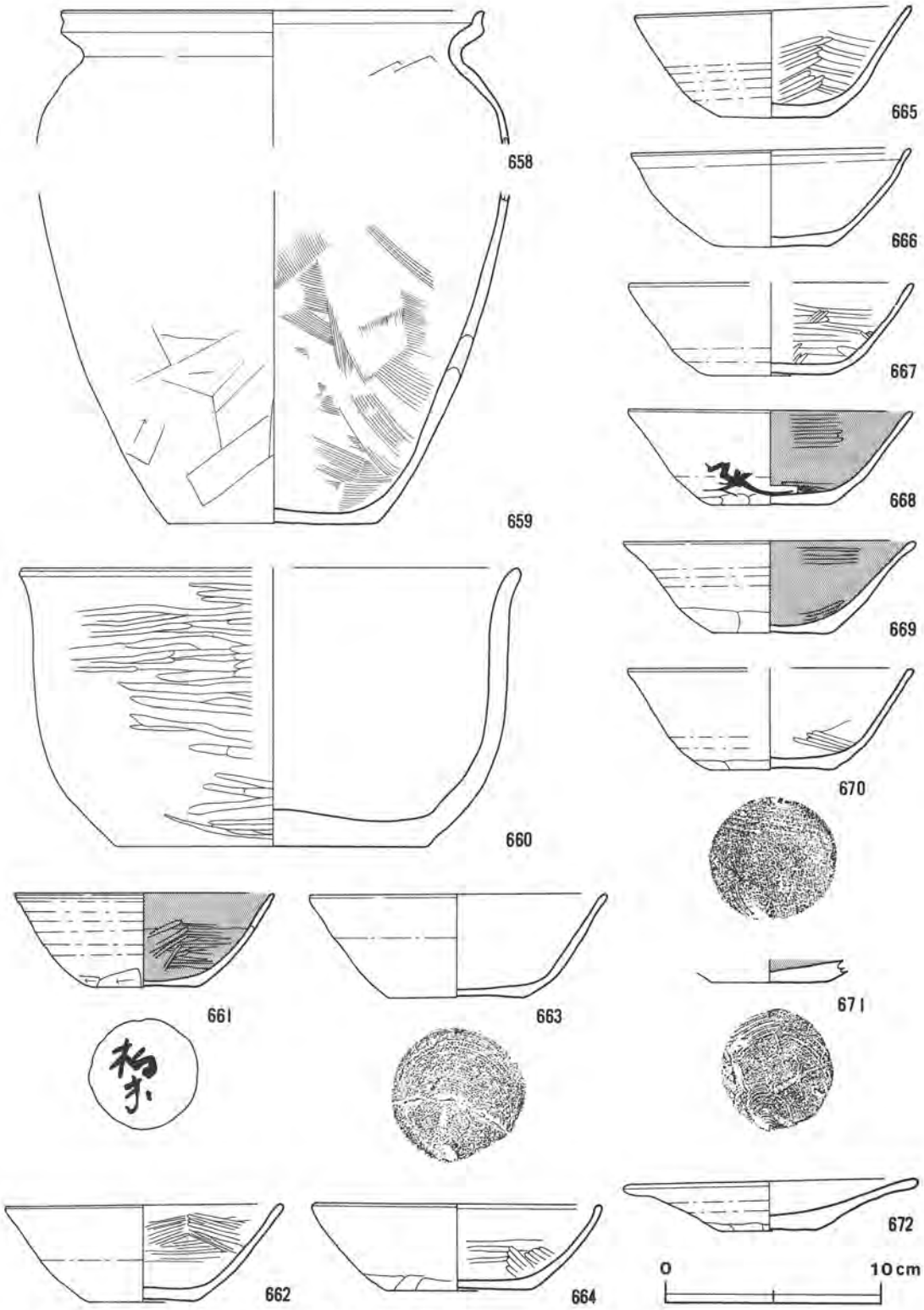
覆土　自然堆積。

遺物　竈内及び覆土全域から，土師器(坏，甕，高台付坏，甑，皿)片，須恵器(坏，甕，高台付坏，蓋)片が多量に出土している。658と659の土師器の甕は竈内から出土している。662から667，670は土師器の坏で同じく竈内から逆位に重なった状態で出土している。底部に「柏木」と墨書された661の土師器の坏は南東部床面から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第40号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第75号住居跡出土遺物観察表

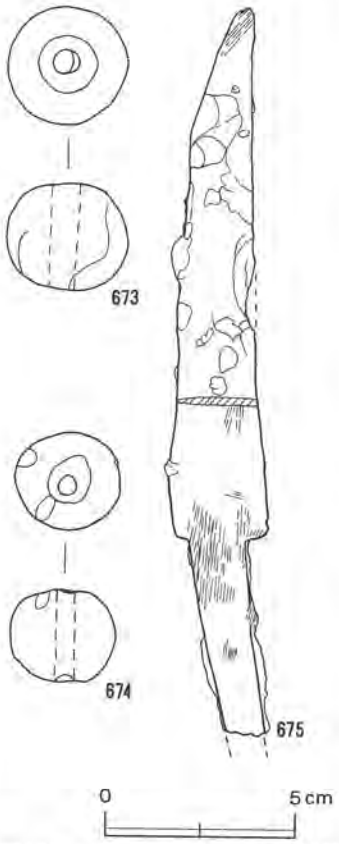
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第180・181図 658	甕 土師器	A [19.6] B (6.3)	張りの強い胴部で，頸部は「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P476 10% 竈
659	甕 土師器	B (15.5) C [9.8]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部ナデ。胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面ハケ目調整。	砂粒・礫 にぶい橙色 良好	P477 10% 竈
660	鉢 土師器	A (23.0) B 13.0 C 14.5	平底。胴部は内彎して立ち上がった後，直立する。口縁部は僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。胴部外面横位のヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良好	P490 40% 覆土



第180図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
661	坏 土師器	A 12.0 B 4.4 C 5.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	底部及び体部下端一方向の手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後,黒色処理。	砂粒・雲母 橙色 普通	P478 100% 南東部床面 墨書「柏木」
662	坏 土師器	A 12.8 B 4.6 C 5.2	平底。体部は内彎気味に立ち上上がる。	底部は一方向の手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 浅黄橙色 普通	P479 100% 竈
663	坏 土師器	A 14.0 B 4.9 C 6.2	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転糸切り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P480 80% 竈
664	坏 土師器	A 13.6 B 4.2 C 6.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 良好	P481 80% 竈
665	坏 土師器	A 13.0 B 5.2 C 5.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がった後，中位から外傾する。	底部一方向の手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P482 80% 竈
666	坏 土師器	A 13.2 B 4.7 C 5.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖る。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P483 70% 竈
667	坏 土師器	A [13.2] B 4.3 C 5.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P484 60% 竈
668	坏 土師器	A 13.1 B 4.4 C 5.9	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部糸切り後,手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P485 60% 北西部覆土上層
669	坏 土師器	A 13.5 B 4.4 C 5.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，中位から器厚を減じながら外反して口縁部に至る。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P486 30% 覆土
670	坏 土師器	A [13.2] B 4.7 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転糸切り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。体部外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P487 40% 竈
671	坏 土師器	B (1.1) C 5.4	平底。	底部回転糸切り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P488 10% 北東部床面
672	皿 土師器	A 13.6 B 2.4 C 4.4	平底。体部は外反気味に立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P489 80% 南西部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
673	球状土錘	2.8	3.2	---	7.0	25.7	100	覆土	DP133
674	球状土錘	2.4	2.8	---	5.0	16.1	100	北東部覆土上層	DP134
675	刀子	(19.4)	2.7	0.2	---	(49.9)	90	竈	M33



第181図　第75号住居跡出土遺物実測図（2）

第76号住居跡（第182・183図）

位置　調査区の南西部，E1f₈区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北部は，第77号住居跡の大半を掘り込み，南壁の一部は第78号住居跡の北壁に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸7.04m，短軸6.94mの方形を呈している。

主軸方向　N-8°-W。

壁　壁高は35～47cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅20～26cm，深さ4～9cmで，断面形は皿状を呈している。

床　ほぼ平坦で，全体的に踏み固められ堅緻である。

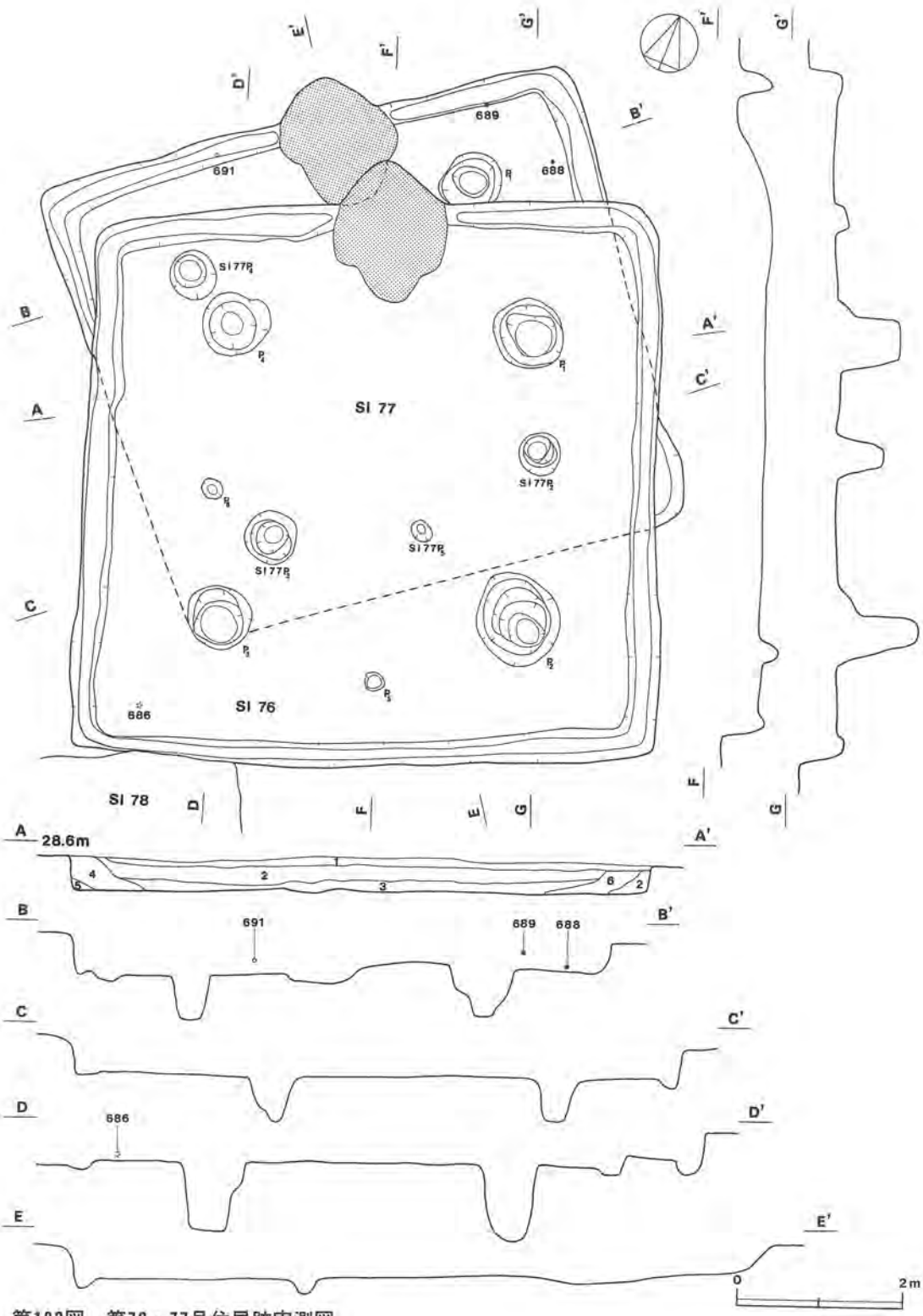
ピット　6か所（P_1～P_6）検出されている。P_1～P_4は，径78～110cm，深さ75～99cmで，規模及び配列から主柱穴である。P_5は，径24～26cm，深さ20cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。P_6は，径26～32cm，深さ49cmで，性格は不明である。

竈　北壁中央部の壁を55cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ172cm，幅141cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を6cm程掘り窪めている。火床及び袖部の内側は，熱をうけレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

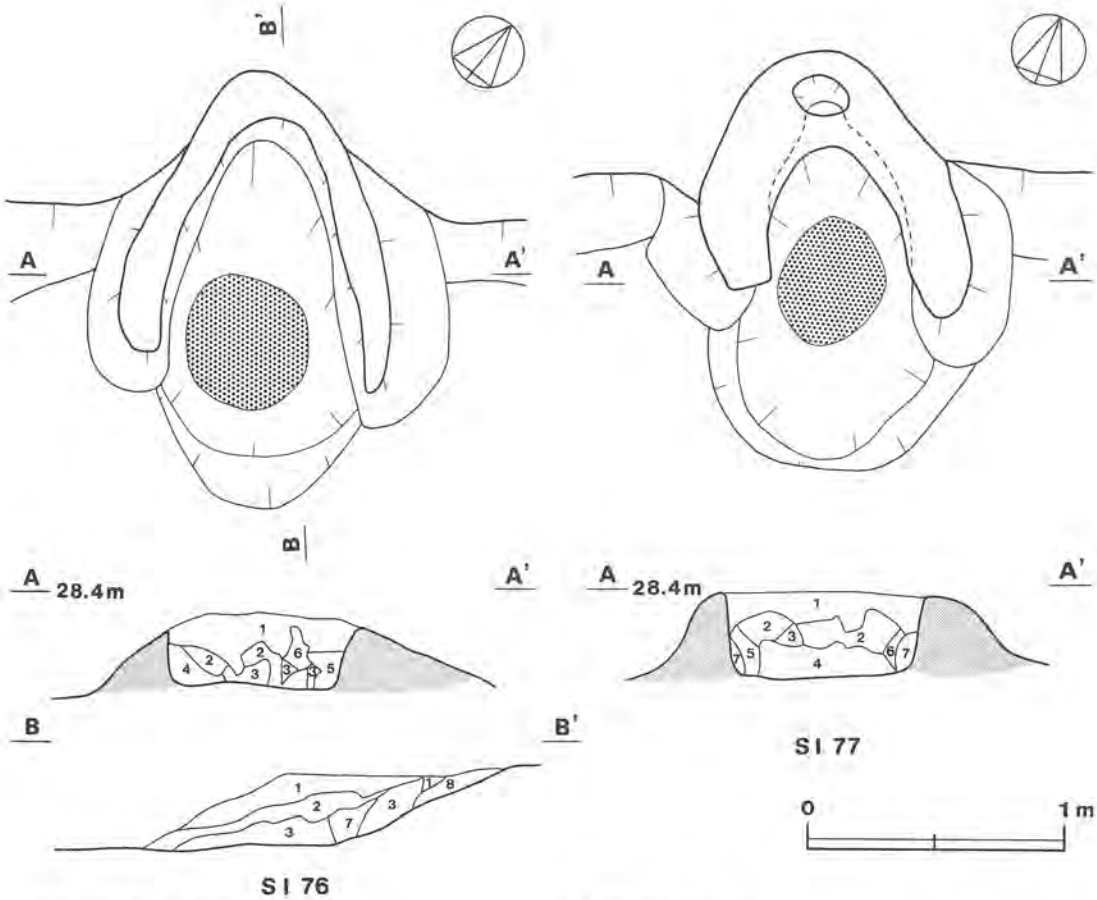
覆土　自然堆積。

遺物　覆土及び床面全域から，土師器（坏，甕）片，須恵器（坏，甕，高台付坏）片等が多量に出土している。677の土師器の甑は南東部覆土下層から，686の刀子は南西部覆土からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第77号住居跡より新しく，第78号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から奈良時代の住居跡と考えられる。



第182図　第76・77号住居跡実測図



第76・77号住居跡　土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
4　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック少量。
5　褐　　色　ローム粒子中量。
6　暗　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。

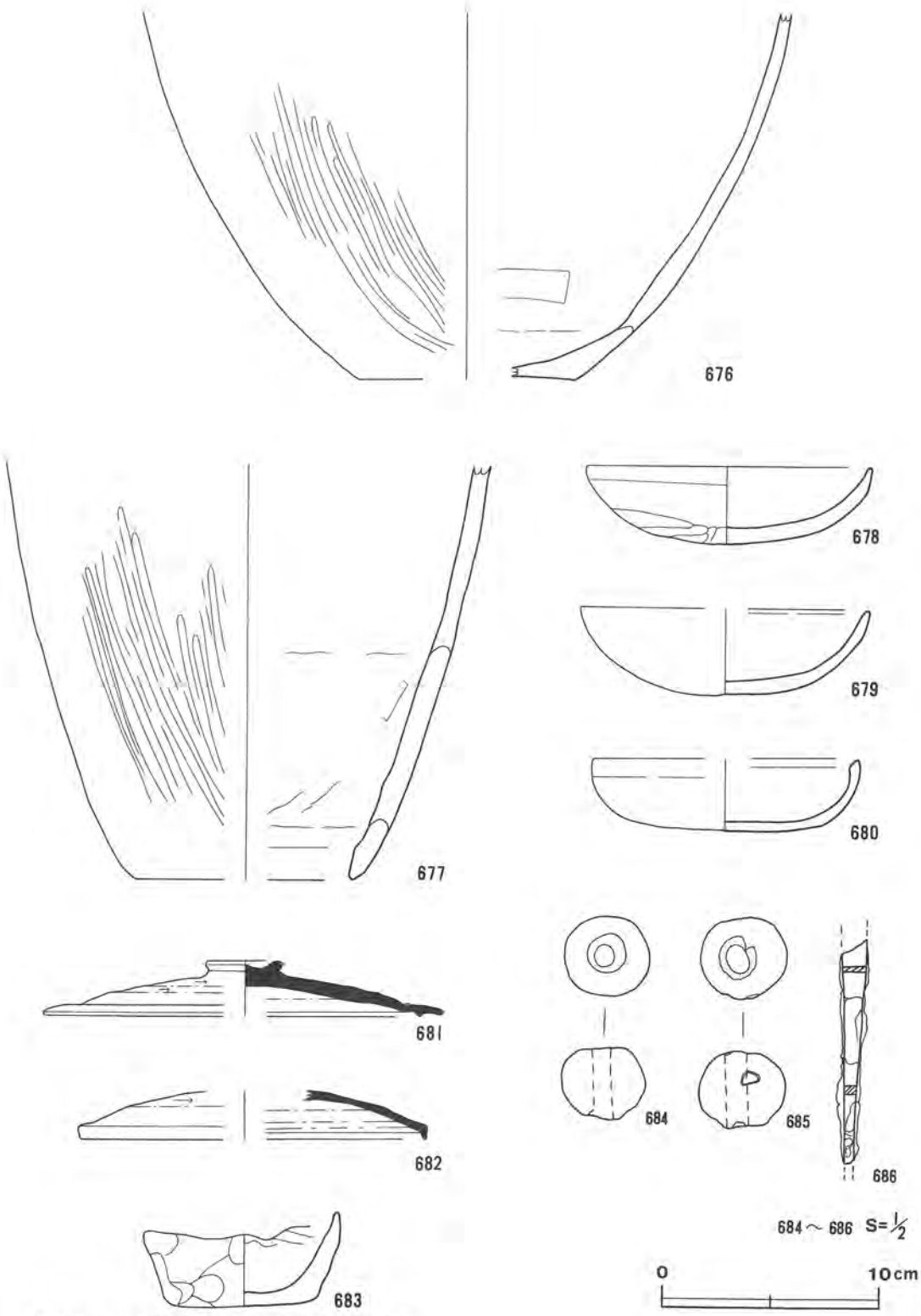
第76号住居跡　竈土層解説

1　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量。
2　極暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量。
3　黒　褐　色　焼土ブロック中量。
4　暗赤褐色　焼土ブロック多量。
5　にぶい褐色　焼土ブロック少量。
6　にぶい赤褐色　ロームブロック多量。
7　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化物少量。
8　黒　褐　色　焼土ブロック中量，炭化物少量。

第77号住居跡　竈土層解説

1　灰　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量。
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量。
3　灰　褐　色　焼土ブロック中量，炭化物少量。
4　極暗赤褐色　焼土ブロック多量。
5　灰　褐　色　焼土粒子少量。
6　黒　褐　色　焼土ブロック中量。
7　赤　褐　色　焼土ブロック・焼土粒子多量。

第183図　第76・77号住居跡竈実測図



第184図　第76号住居跡出土遺物実測図

第76号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 676	甕 土師器	B (17.0) C [10.0]	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部外面下位斜位のヘラ磨き。胴部外面下位ヘラナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	P491 20% 南東部覆土上層
677	甑 土師器	B (19.5) C [10.0]	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。胴部内面下位横位の手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 良好	P492 30% 南東部覆土下層
678	坏 土師器	A [13.1] B 3.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は器厚を減ずる。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P493 70% 南東部覆土上層
679	坏 土師器	A [13.4] B 4.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は尖る。	体部内・外面摩耗。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P494 50% 南東部覆土上層
680	坏 土師器	A 12.4 B 3.5	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は尖る。	体部内・外面剝離。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P495 40% 南壁中央付近 覆土下層
681	蓋 須恵器	A [18.6] B 2.6 G 0.7 F 3.5	天井部は低く，緩やかに傾斜して口縁部に至る。口縁部はほぼ水平で，内側に短いかえりがつく。つまみは扁平で中央部は凹む。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰白色 普通	P497 40% 竈
682	蓋 須恵器	A [16.1] B (2.2)	天井部は低く，丸味をもって口縁部に至る。口縁部は直角に短く屈曲する。	天井部回転ヘラ削り。内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 良好	P498 30% 北東部覆土下層
683	手捏土器	A 8.8 B 4.4 C 6.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	体部内・外面ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P496 100% 南西部覆土上層

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
684	球状土錘	2.3	2.6	---	8.0	12.9	100	覆土	DP135
685	球状土錘	2.5	2.7	---	7.0	14.5	100	覆土	DP136
686	刀子	(6.9)	(0.7)	0.3	---	5.6	50	覆土	M34

第77号住居跡(第182・183図)

位置　調査区の南西部，E1e8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の大半は，第76号住居跡の北部に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸6.74m，短軸5.94mの長方形を呈している。

主軸方向　N-18°-W。

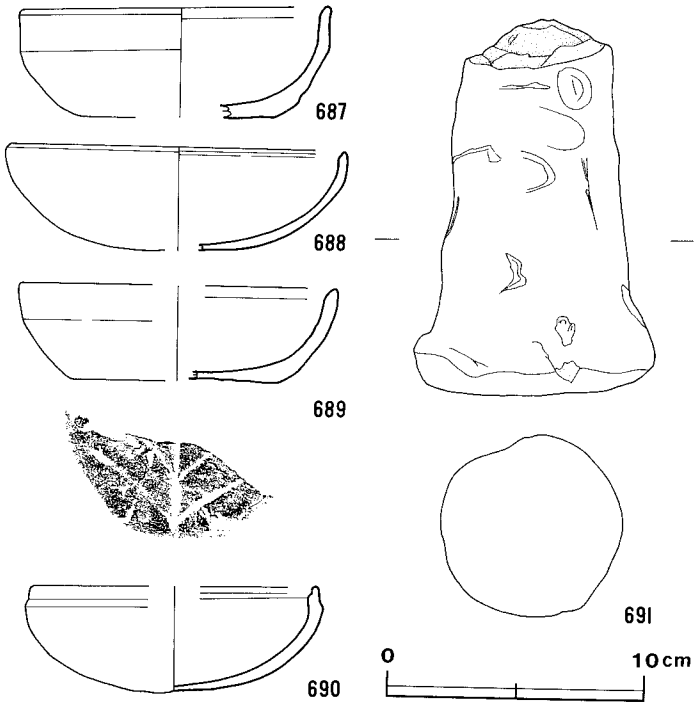
壁　東壁，西壁及び南壁の大半は，第76号住居跡に掘り込まれ，検出されていない。北壁は，壁高45～50cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北壁下は遺存している。上幅11～20cm，深さ4～5cmで，断面形は逆台形状を呈している。

床　北部の一部分が僅かに検出されている。竈付近は踏み固められ堅緻である。

ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_4は，径51～79cm，深さ57～63cmで主柱穴，P_5は，径20～32cm，深さ20cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部の壁を47cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ162cm，幅146cmを測る。天井部の一部と袖部が遺存している。焚口は一部第76号住居跡に掘り込まれている。火床は床面を僅かに掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がり，煙出口に至っている。



第185図　第77号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土　自然堆積。

遺物　竈内及び竈周辺から少量の土師器（坏，甕）片と支脚が出土している。687と690の土師器の坏は竈内から逆位の状態で，691の支脚は北西部覆土中層から横位の状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第76号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第77号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第185図 687	坏 土師器	A 12.0 B 4.5 C［7.6］	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外反気味に直立する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P499 60% 竈
688	坏 土師器	A 13.2 B（3.9）	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部内側直下に一条の沈線が巡る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P500 40% 北東部覆土下層
689	坏 土師器	A［12.4］ B 3.9 C［8.4］	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。底部に木葉痕。	砂粒 明褐灰色 普通	P501 30% 北東部覆土下層
690	坏 土師器	A［11.4］ B 4.2	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口縁部に内側直下一条の沈線が巡る。	体部外面摩耗。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P502 40% 竈

図版番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
691	支脚	(14.9)	(9.4)	---	---	(749.7)	80	北西部覆土中層	DP137

第78号住居跡(第186図)

位置　調査区の南西部，E1h8区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北壁の一部は，第76号住居跡の南壁を掘り込み，西壁は第2号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.52m，短軸3.32mの方形を呈している。

主軸方向　N-90°-E。

壁　壁高は45～48cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅18～22cm，深さ4～6cmで，断面形は皿状を呈している。

床　中央部は僅かに盛り上がり，踏み固められ堅緻である。

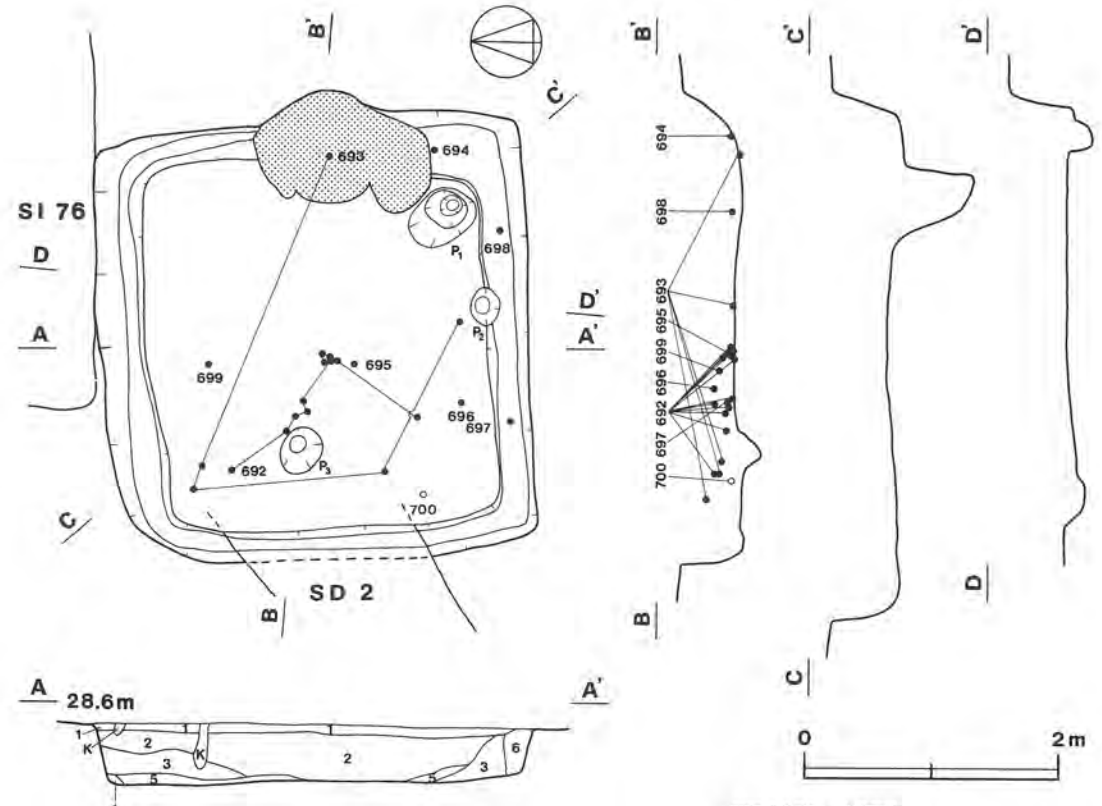
ピット　3か所(P_1～P_3)検出されている。P_1，P_2は，径24～50cm，深さ20～60cmで，性格は不明である。P_3は，径30～38cm，深さ19cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

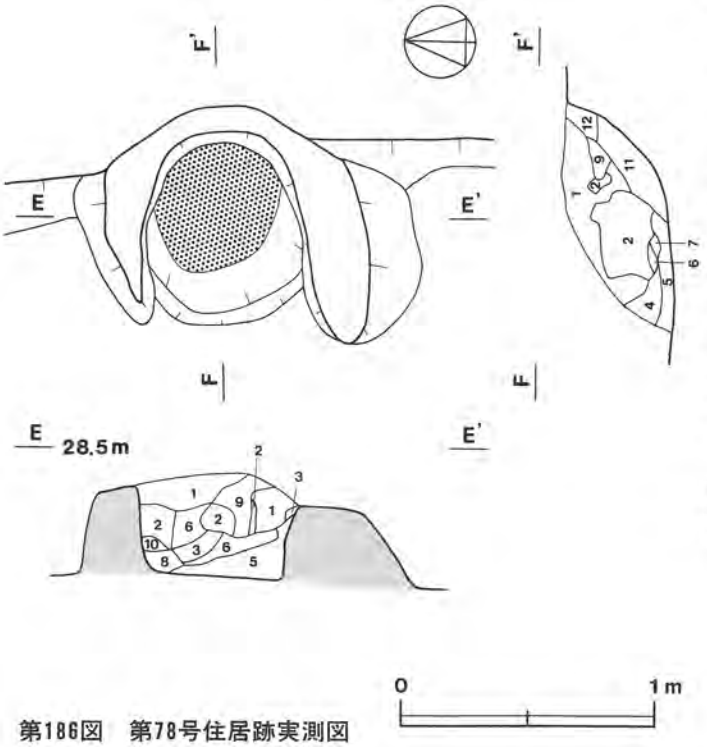
竈　東壁中央部の壁を15cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ87cm，幅129cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を5cm程掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度で立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈周辺及び西部を中心に，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，高台付坏，蓋)片が多量に出土している。698の須恵器の坏は南東部床面から逆位の状態で，692の土師器の甕は覆土下層から潰れた状態でそれぞれ出土している。

所見　本跡は，当遺跡で唯一東壁に竈を有する住居跡であり，重複関係から第76号住居跡より新しく，第2号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から奈良時代の住居跡と考えられる。





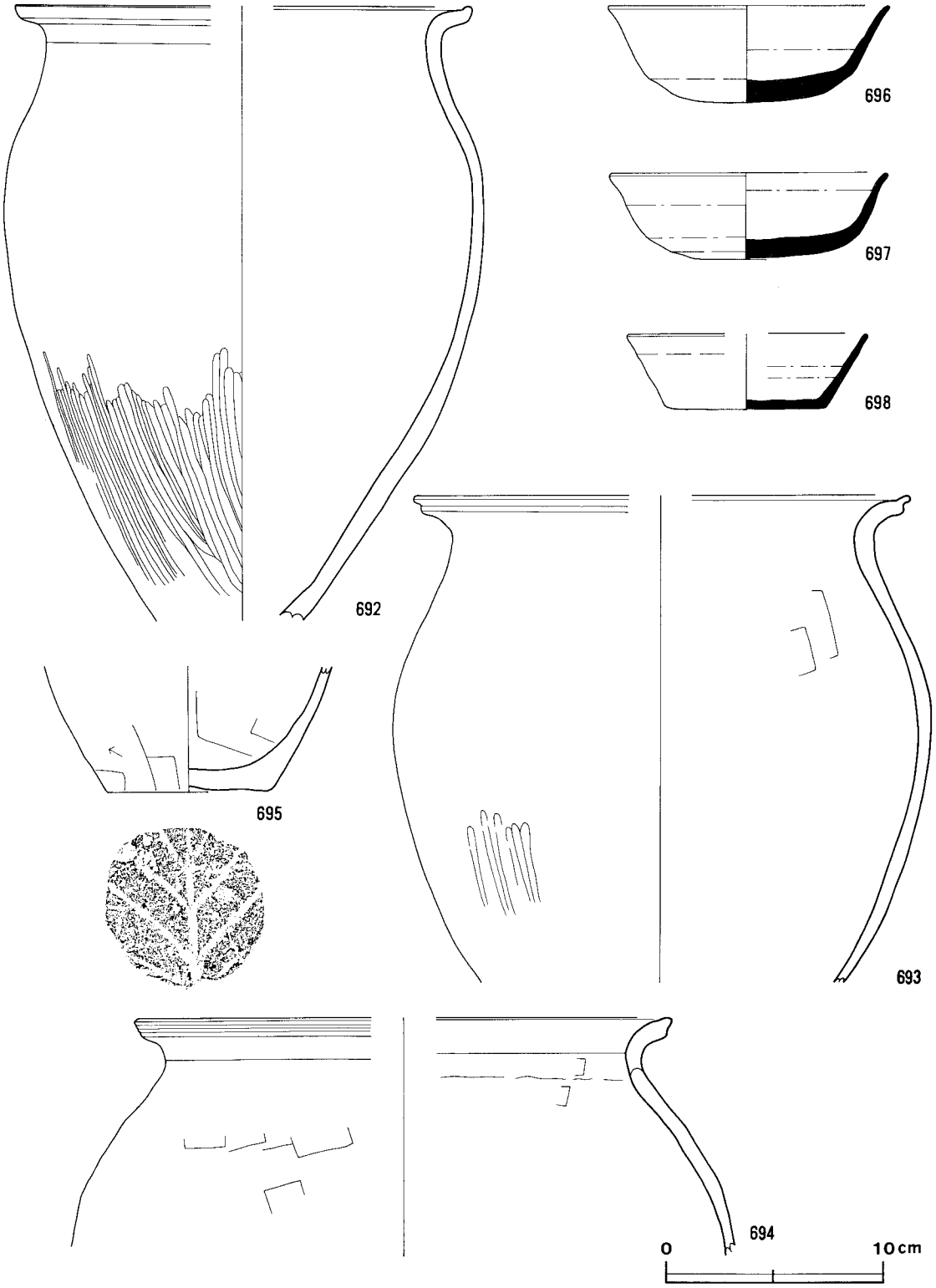
第78号住居跡　土層解説

1　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗 褐 色　焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
4　褐　　色　ローム粒子多量。
5　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量。
6　褐　　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。

第78号住居跡　竈土層解説

1　灰 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量。
2　にぶい黄褐色　焼土ブロック少量。
3　暗赤褐色　焼土ブロック中量。
4　灰 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック中量。
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量。
6　灰 褐 色　焼土ブロック・炭化物少量。
7　黒 褐 色　炭化物多量，焼土ブロック少量。
8　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量。
9　極暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量。
10　暗赤褐色　焼土粒子多量。
11　黒 褐 色　焼土ブロック多量，炭化物中量。
12　灰 褐 色　ロームブロック多量。

第186図　第78号住居跡実測図

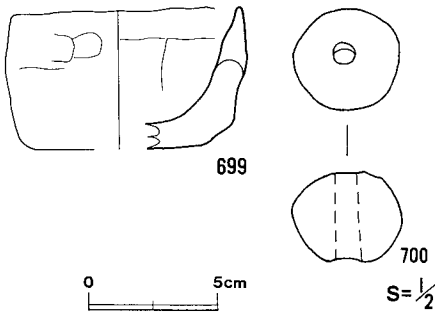


第187図　第78号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）

第78号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第187・188図 692	甕 土師器	A [21.2] B (29.1)	胴部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。口縁部は大きく外反し，口縁部は僅かにつまみ出す。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P503 30% 覆土下層
693	甕 土師器	A [23.0] B (23.0)	胴部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を外上方につまみ出す。	胴部下位ヘラ磨き。胴部内面上位ヘラナデ。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	P504 30% 覆土下層
694	甕 土師器	A [25.0] B (11.3)	張りの強い胴部で上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部はほぼ水平につまみ出す。	胴部内・外面上位ヘラナデ。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P505 10% 南東部覆土下層
695	甕 土師器	B (6.0) C 7.7	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面下位ヘラナデ。底部に木葉痕。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P506 10% 竈
696	坏 須恵器	A 12.8 B 4.6 C 6.7	丸底気味で体部との境は不明瞭。体部は外反気味に立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P508 90% 中央部床面
697	坏 須恵器	A 12.4 B 5.3 C 7.8	丸底気味で，体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 緑灰色 良好	P508 80% 南西部覆土下層
698	坏 須恵器	A [11.1] B 3.6 C 7.4	平底。体部は外反して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 黄灰色 普通	P510 60% 南東部床面
699	手捏土器	A 8.7 B 5.7 C [7.2]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	体部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P507 80% 北西部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
700	球状土錘	2.4	2.9	---	7.0	16.1	100	南西部覆土下層	DP138



第188図　第78号住居跡出土遺物実測図（2）

第79号住居跡(第189・190図)

位置　調査区の南西部，E1g_0区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東壁は，第80号住居跡の南西コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸5.00m，短軸4.40mの長方形を呈している。

主軸方向　N-35°-W。

壁　壁高は34～44cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

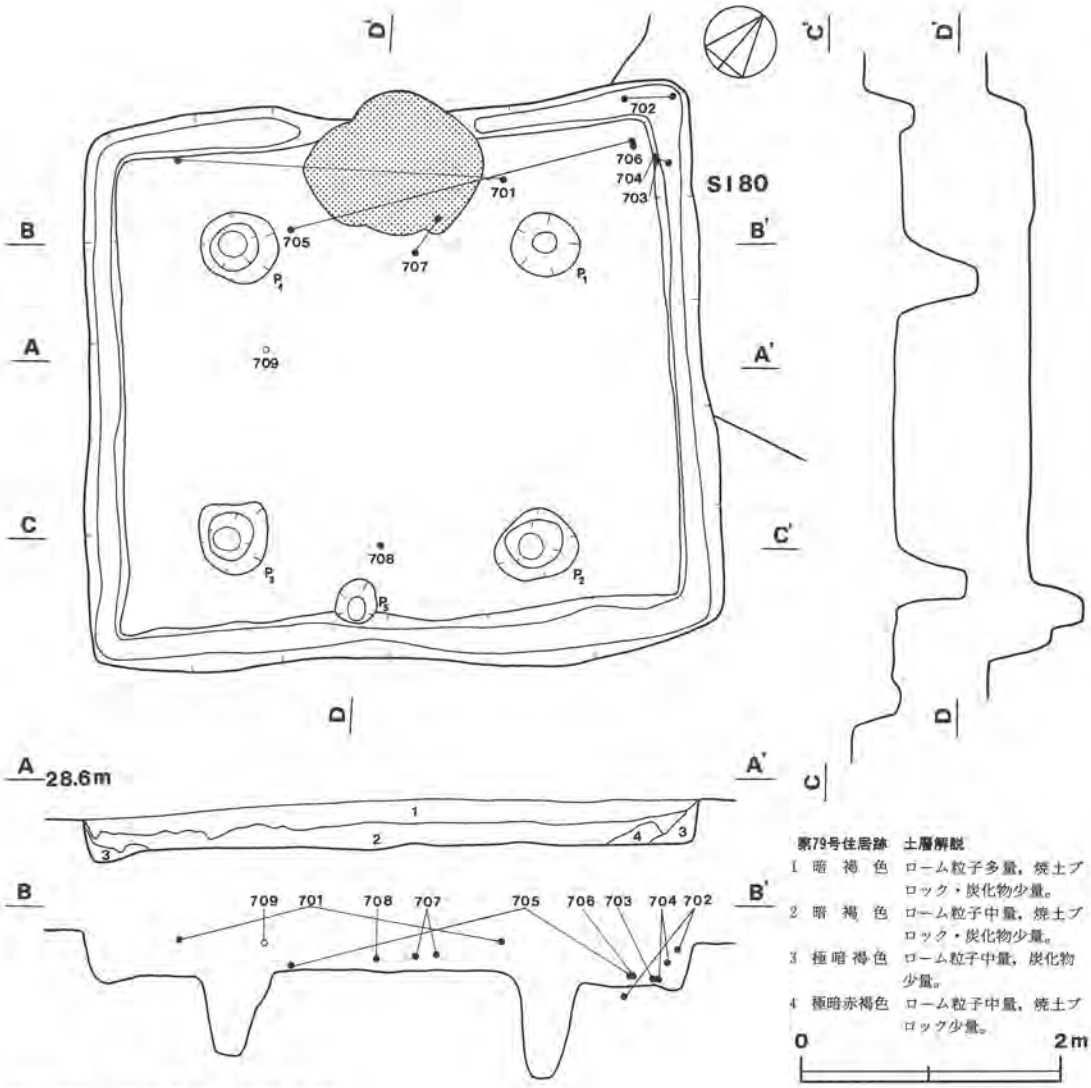
壁溝　壁下を全周している。上幅18～24cm，深さ4～12cm で，断面形は皿状を呈している。

床　ほぼ平坦で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

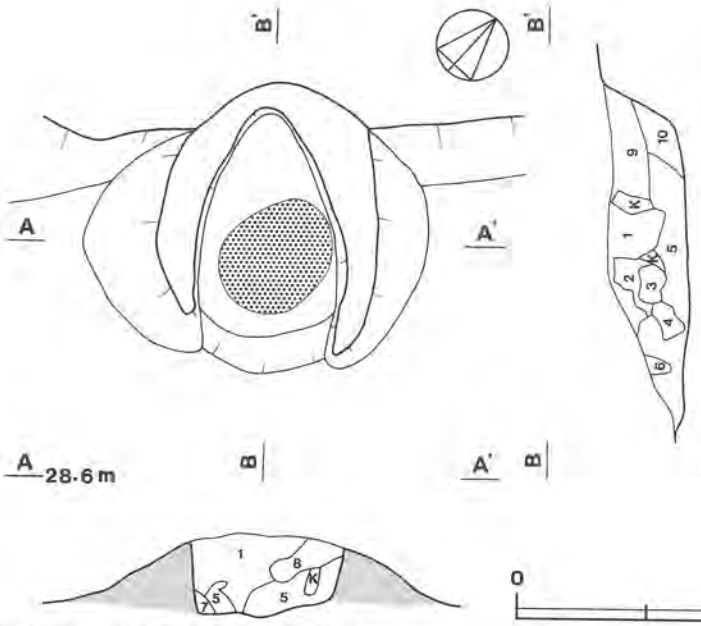
ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径52～66cm，深さ58～81cm で主柱穴，P_5は，径34～36cm，深さ42cm で，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北西壁中央部の壁を19cm 程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土で構築されている。規模は，長さ116cm，幅136cm を測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を6cm 程掘り窪めており，熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から急角度に外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。



第189図　第79号住居跡実測図



第79号住居跡　竈土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量。
2　明赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
3　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
4　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量。
5　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子中量，ロームブロック・ローム粒子少量。
6　暗赤褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
7　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化物少量。
8　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
9　暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量。
10　極暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量。

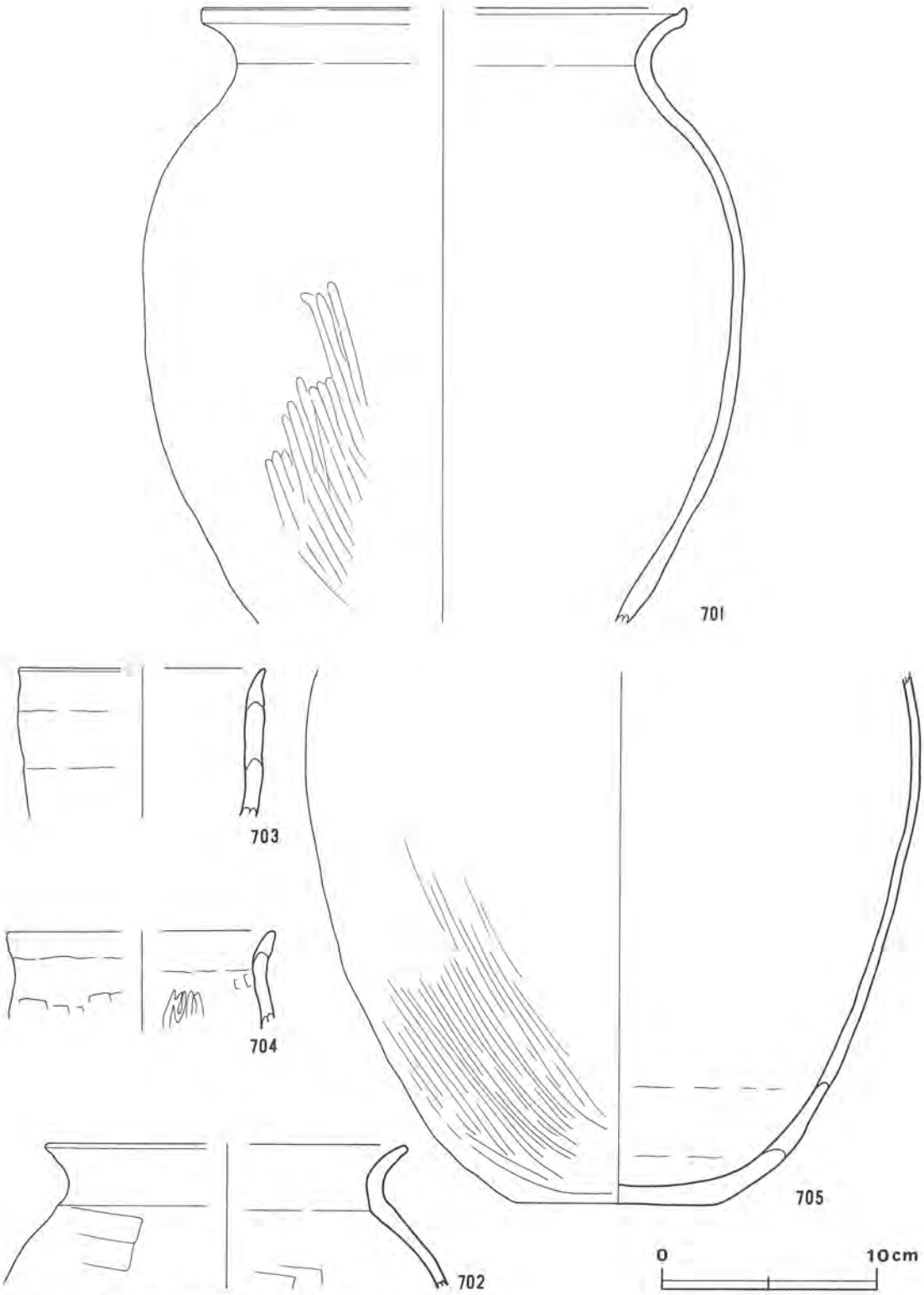
第190図　第79号住居跡竈実測図

遺物　竈周辺及び北東コーナー付近から，土師器(坏,甕)片を中心に多量に出土している。707の土師器の甕は竈から,702と704の土師器の甕は北コーナー付近の覆土からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第80号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第79号住居跡出土遺物観察表

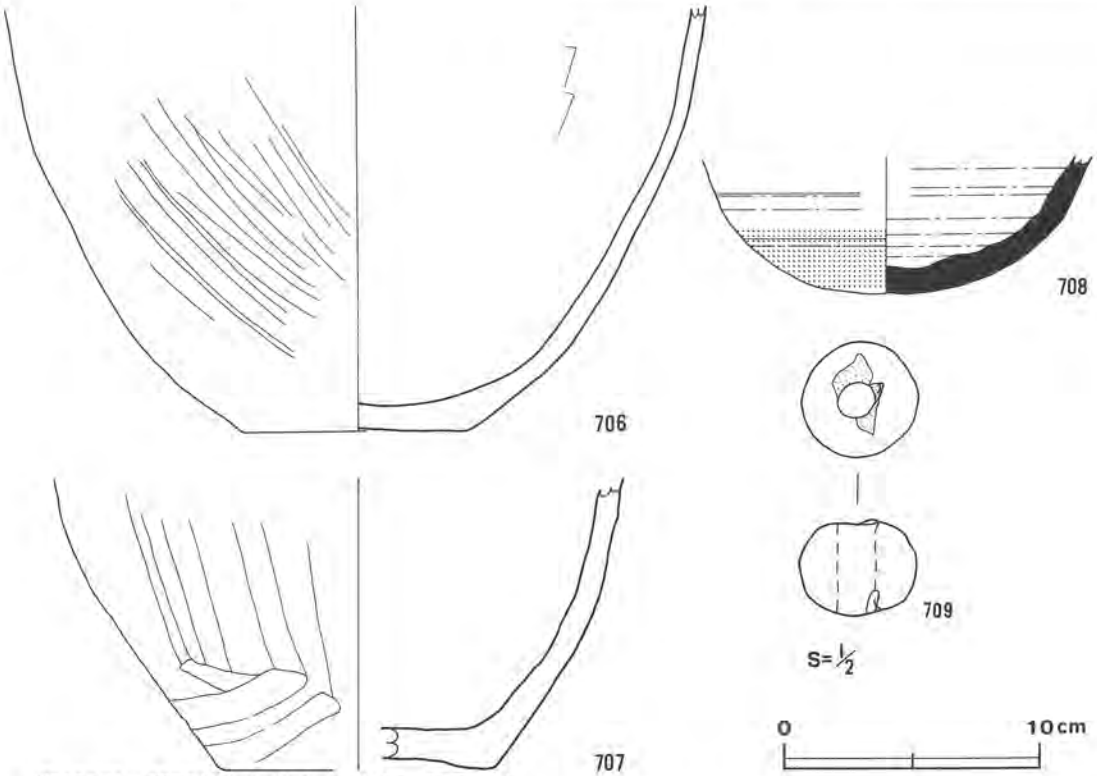
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191・192図 701	甕 土師器	A [22.4] B (29.1)	胴部は内彎しながら立ち上がり上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状を呈し,口縁部は外反する。	胴部外面下位ヘラ磨き。胴部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	P511 30% 覆土
702	甕 土師器	A [16.6] B (6.8)	胴部は内彎し，頸部は「く」の字状を呈する。	胴部内・外面上位ヘラナデ。口頸部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P512 10% 北コーナー付近覆土
703	甕 土師器	A [11.4] B (7.0)	胴部はほぼ直立し，口縁部は器厚を減じ短く外反する。	胴部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P513 20% 北コーナー付近覆土下層
704	甕 土師器	A [12.4] B (4.7)	胴部は僅かに内彎して立ち上がり，頸部は僅かに外反し口縁部に至る。口唇部は丸い。	胴部外面上位ヘラ削り。胴部内面上位ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P517 10% 北コーナー付近覆土上層
705	甕 土師器	B (25.0) C 9.0	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部ナデ。胴部外面下位緩位のヘラ磨き。胴部内面ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P516 40% 覆土下層
706	甕 土師器	B (16.8) C 8.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部ナデ。胴部外面下位ヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・礫 灰褐色 普通	P514 20% 北西部覆土下層



第191図　第79号住居跡出土遺物実測図（1）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
707	甕 土師器	B (11.5) C 10.6	上げ底気味。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面下位手持ちヘラ削り。胴部内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒 にぶい橙色 普通	P515 30% 竈
708	壺 須恵器	B (5.4)	丸底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。釉付着。	砂粒 灰白色 良好	P518 10% 南東部覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
709	球状土錘	2.6	3.1	---	12.0	20.5	100	南西部覆土上層	DP139



第192図　第79号住居跡出土遺物実測図（2）

第80号住居跡(第193図)

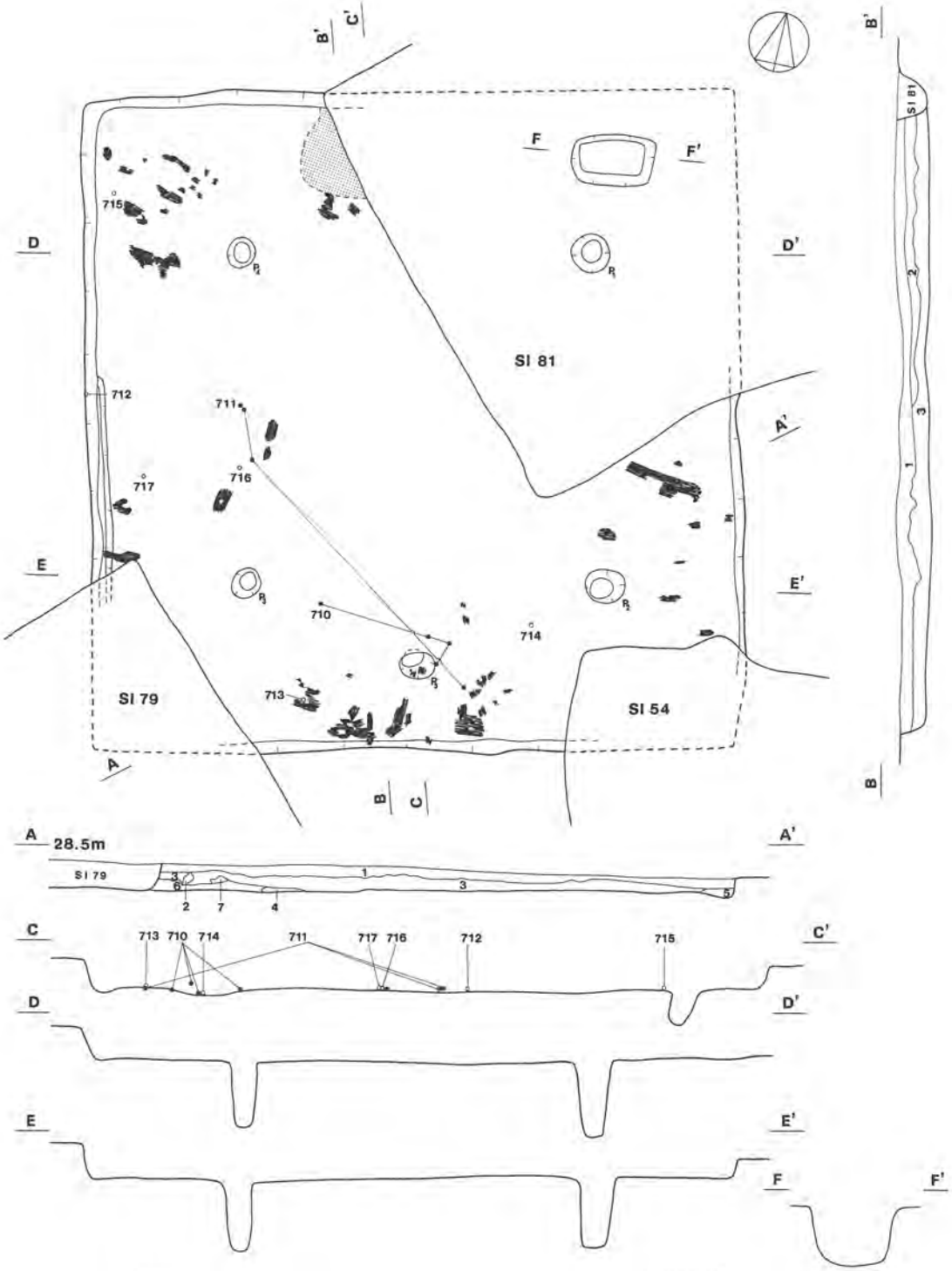
位置　調査区の南西部，E1f₀区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西コーナー付近は第79号住居跡の北東壁に，北東コーナー付近は第81号住居跡の南西壁に，南東コーナー付近は第54号住居跡の北西部にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸8.08m，短軸7.88mの方形を呈している。

主軸方向　N-13°-W。

壁　壁高は26～44cmを測り，外傾して立ち上がっている。



第80号住居跡　土層解説

1 暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量。
2 黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
3 黒　褐　色　焼土ブロック・焼土粒子・炭化物少量。
4 褐　　色　ローム粒子多量，炭化物少量。
5 極暗褐色　焼土ブロック・炭化物少量。
6 にぶい褐色　ロームブロック・炭化物少量。
7 にぶい褐色　焼土ブロック・炭化物少量。

第193図　第80号住居跡実測図

壁溝　南西コーナーの壁下に僅かな落ち込みが検出されているが，規模及び断面形は不明瞭である。

床　ほぼ平坦で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径32～48cm，深さ82～93cmで主柱穴，P_5は，径32～42cm，深さ44cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

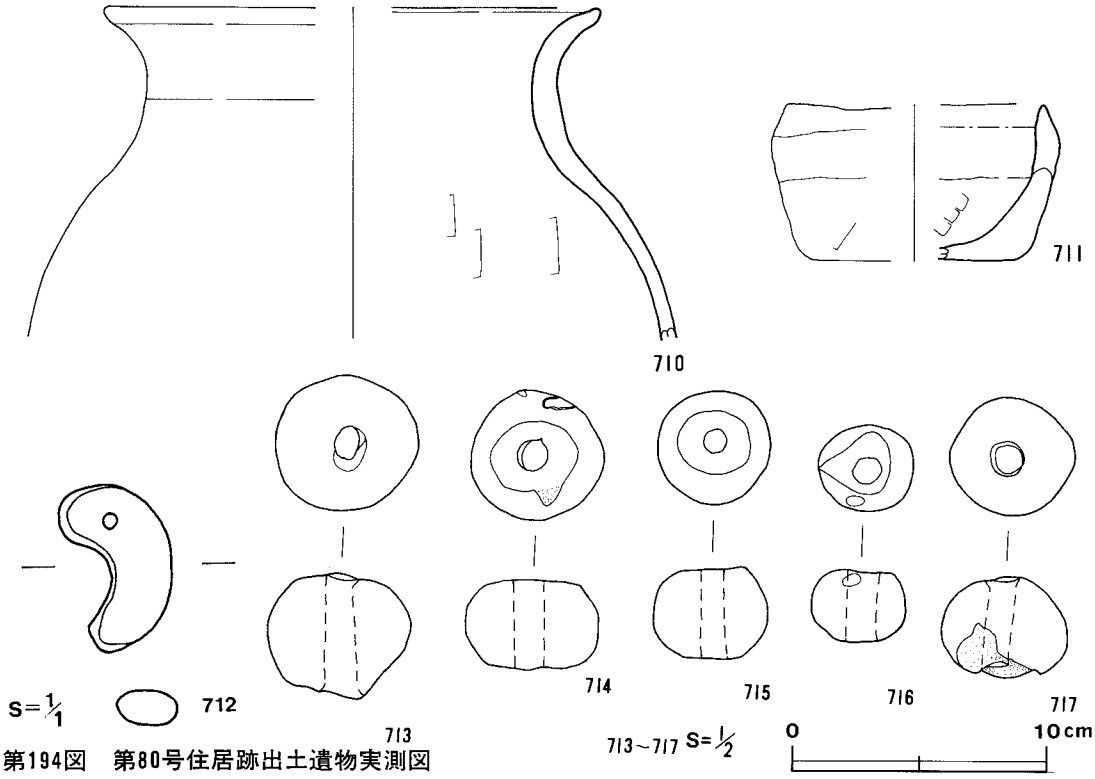
貯蔵穴　竈の東側に付設されている。規模は，長軸98cm，短軸62cmで，深さ70cmを測る。平面形は長方形を呈している。底面は平坦で，長軸68cm，短軸28cmで，断面形は逆台形状を呈している。

竈　第81号住居跡に掘り込まれ遺存していないが，北壁中央付近から竈の構築材料の一部と考えられる砂まじりの粘土が検出されている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土下層から床面にかけて多量の焼土と炭化物が検出されている。南部覆土下層及び床面から，土師器(坏，甕)片等を中心にまとまって出土している。712の勾玉は西壁中央付近の床面から，710の土師器の甕は南西部下層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第54・79・81号住居跡より古い時期に構築されている。覆土下層及び床面から焼土と炭化材が多量に検出されていることから，焼失家屋と考えられる。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第194図　第80号住居跡出土遺物実測図

第80号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第194図 710	甕 土師器	A [19.2] B (13.1)	頸部は「く」の字状を呈し，口縁部に至る。口唇部を上方に僅かにつまみ出す。	胴部外面ナデ。胴部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	P519 20% 南西部覆土下層
711	手捏土器	A [10.0] B 6.2 C 8.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は尖る。	体部外面ナデ。体部内面ヘラナデ。口縁部内面横ナデ。底部に木葉痕。	砂粒 にぶい橙色 普通	P520 40% 北西部床面

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
712	勾玉	2.2	1.5	0.6	2.0	2.4	100	西壁中央際	Q25 滑石
713	球状土錘	3.3	3.8	---	12.0	37.3	100	南西部床面	DP140
714	球状土錘	2.4	3.5	---	8.0	28.2	100	覆土	DP141
715	球状土錘	2.4	3.0	---	7.0	23.5	100	北西部床面	DP142
716	球状土錘	1.9	2.5	---	8.0	10.6	100	南西部床面	DP143
717	球状土錘	(2.7)	3.4	---	9.0	(22.9)	80	南西部床面	DP144

第81号住居跡(第195・196図)

位置　調査区の南西部，E2e_1区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西壁は，第80号住居跡の北東コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸5.94m，短軸5.54mの方形を呈している。

主軸方向　N-38°-W。

壁　壁高は18～20cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅22～28cm，深さ8～12cmで，断面形は逆台形状を呈している。

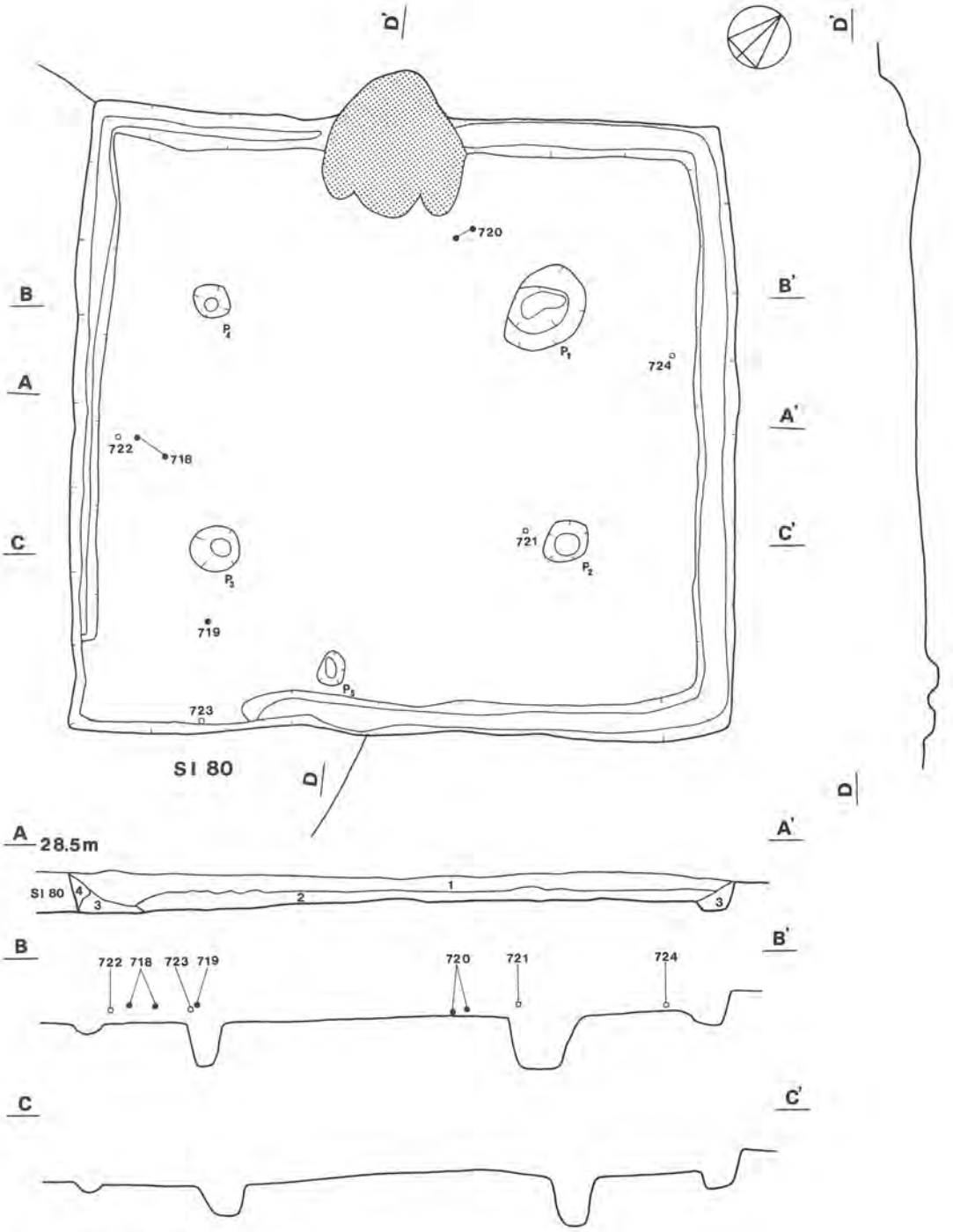
床　やや凸凹で，中央部は特に踏み固められ堅緻である。

ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径32～82cm，深さ32～82cmで主柱穴，P_5は，径22～32cm，深さ11cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北西壁中央からやや南西寄りの壁を45cm程壁外へ掘り込み，砂まじりの粘土とロームで構築されている。規模は，長さ131cm，幅124cmを測る。天井部は崩落しているが，袖部は良好に遺存している。火床は床面を6cm程掘り窪めているが，あまり熱をうけていない。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土全域から，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，甑)片等が少量出土している。720の土師器の坏は北西部の覆土下層から，722の紡錘車は南西部の覆土上層からそれぞれ出土している。



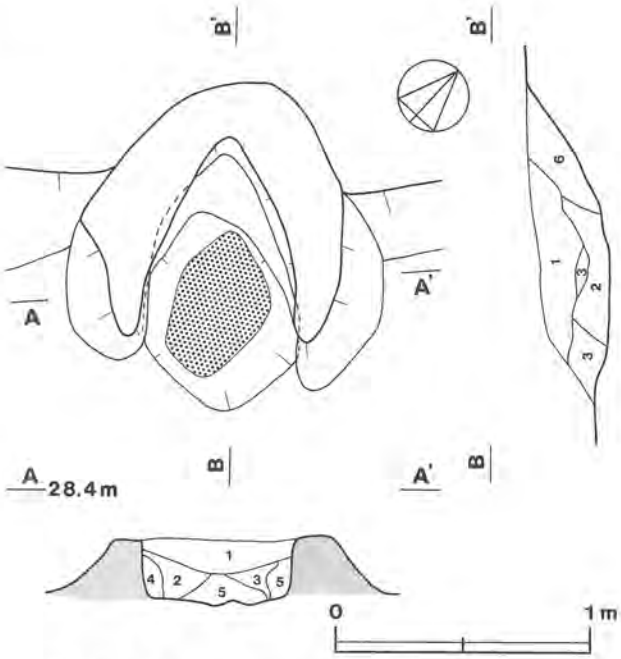
第81号住居跡　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック少量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
3　黒褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック少量。
4　黒褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック少量。

0　2m

第195図　第81号住居跡実測図

所見　本跡は，重複関係から第80号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



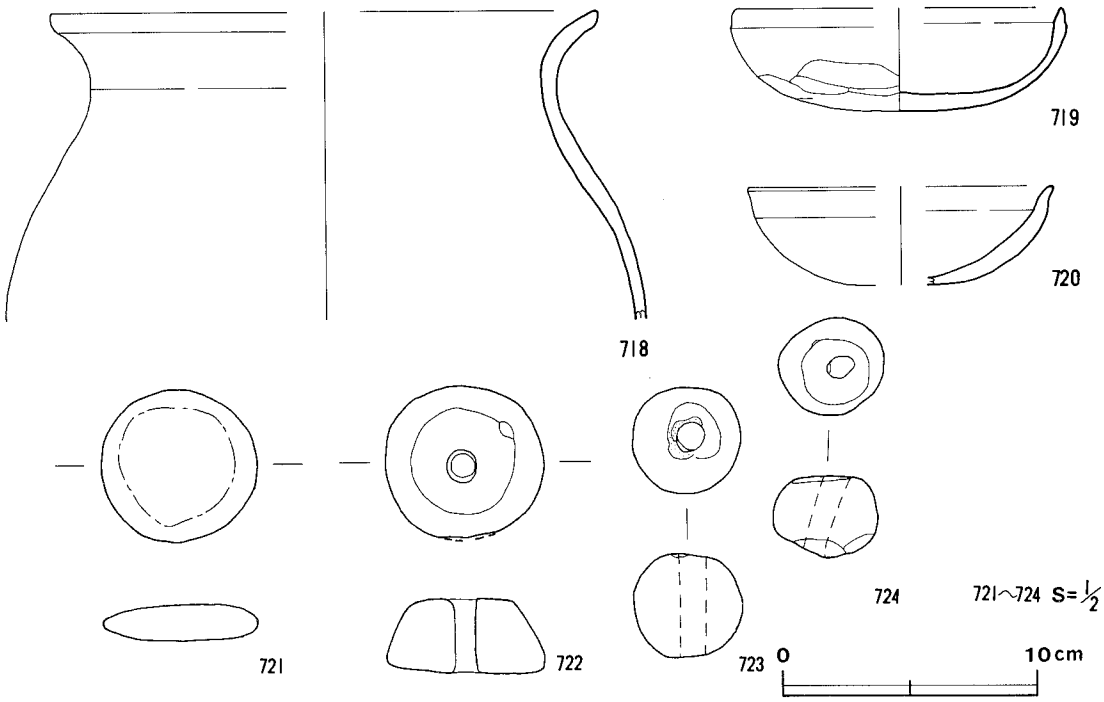
第81号住居跡　竈土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化物少量。
2　極暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量。
3　灰　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量。
4　黒　褐　色　ロームブロック少量。
5　極暗赤褐色　ロームブロック多量。
6　黒　褐　色　焼土粒子中量，炭化物少量。

第196図　第81号住居跡竈実測図

第81号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 718	甕 土師器	A [21.4] B (12.2)	胴部は僅かに内彎しながら立ち上がり，頸部は外反して口縁部に至る。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 淡橙色 普通	P521 10% 南西部覆土上層
719	坏 土師器	A [12.8] B 4.1	丸底。体部と口縁部との境に稜をもつ。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P522 60% 南西部覆土上層
720	坏 土師器	A [12.0] B 3.9	丸底。体部口縁部との境に稜をもつ。口縁部は僅かに外反する。	体部外面手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P523 40% 北西部覆土下層

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
721	不明石製品	4.1	4.2	1.0	---	23.6	100	南東部覆土中層	Q22 砂岩
722	紡錘車	4.2	4.0	---	8.0	32.6	100	南西部覆土上層	DP150
723	球状土錘	2.7	2.9	---	8.0	21.4	100	南東部覆土上層	DP145
724	球状土錘	2.2	2.8	---	7.0	14.0	100	北東部覆土下層	DP146



第197図　第81号住居跡出土遺物実測図

表 2　竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット	炉・竈	履土	出土遺物	備考
1	$B2g_8$	N-5°-W	(方形)	(6.36)×6.50	8～20	平坦	33	竈	自然	土師器片228点（坏,甕),須恵器片123点（坏,甕）	SI-2と重複
2	$B2h_8$	不明	不明	(2.60)×(1.36)	14	凸凹	1	－	自然		SI-1と重複
3	$B2g_2$	N-5°-W	方形	3.06×3.00	8～12	凸凹	－	竈	自然	土師器31点（坏,甕),須恵器8点（坏,甕）	SI-4と重複
4	$B3h_1$	N-14°-W	方形	4.32×3.92	－	平坦	4	竈	不明	土師器片23点(坏,甕)，須恵器片4点（坏,蓋）	SI-3と重複
5	$D2a_2$	N-27°-W	方形	5.14×5.10	12	平坦	4	－	自然	土師器片64点（坏,甕),須恵器片20点（蓋,甕）	SB-4・8，SK-23・27と重複
6	$B3i_2$	N-2°-E	(方形)	4.50×(3.16)	7～18	凸凹	2	竈	自然		
7	$B2i_0$	N-0°	方形	5.10×4.92	10	平坦	4	竈	不明		SI-8,SK-7と重複
8	$B2j_0$	N-8°-W	方形	4.66×4.50	18～22	平坦	5	竈	自然	土師器片36点（坏,甕),須恵器片5点（蓋,盤），土製品1点（支脚）	SI-7,SK-5と重複
9	$C2b_0$	N-19°-E	方形	4.76×4.72	8～16	平坦	5	竈	自然	土師器片191点（坏,甕),須恵器片17点（坏,甕,盤),陶器片1点	SI-11・19と重複
10	$C2a_8$	N-15°-W	方形	4.86×4.70	16～18	平坦	4	竈	自然	土師器片117点（甕),須恵器片44点（坏,蓋,甕）	SI-12・20・41と重複
11	$C2b_9$	N-11°-E	方形	3.28×3.06	16～20	平坦	－	竈	自然	土師器片173点（坏,蓋,甕),須恵器片8点（坏,蓋,甕）	SI-9・12・14・20・26と重複
12	$C2b_8$	N-23°-W	方形	5.22×5.16	6～20	平坦	4	竈	自然	土師器片235点（坏,甕),須恵器片26点（坏,蓋,甕）	SI-10・11・14・20・26と重複
13	$C2c_5$	N-17°-E	方形	4.46×4.46	4～12	平坦	4	竈	自然	土師器片23点（坏,甕),須恵器片4点（甕）	SI-22と重複
14	$C2c_8$	N-11°-W	方形	5.98×5.86	18～40	平坦	5	竈	自然	土師器片278点（坏,甕),須恵器片30点（坏,蓋,甕）	SI-11・12・15・17・26・29・31と重複
15	$C2d_8$	N-12°-W	長方形	5.68×5.00	8～14	平坦	4	竈	自然	土師器片418点（坏,甕),須恵器片63点（坏,蓋）	SI-14・16・29・30と重複
16	$C2e_7$	N-7°-W	方形	4.72×4.64	24～32	凸凹	4	竈	自然	土師器片330点（坏,甕),須恵器片49点（坏,蓋,甕）	SI-15・25・30と重複
17	$C2d_0$	N-19°-W	長方形	4.08×3.12	10	凸凹	1	竈	自然	土師器片94点（坏,甕),須恵器片12点（坏,蓋,甕）	SI-14・18・26・29・31と重複
18	$C2d_0$	N-15°-W	長方形	3.26×2.92	4～12	凸凹	4	竈	自然	土師器片48点（坏,甕),須恵器16点（坏,蓋,甕）	SI-17・19・31と重複
19	$C3c_1$	N-10°-W	(方形)	8.50×(6.40)	20～38	凸凹	2	竈	自然	土師器片549点（坏,甕),須恵器片106点（坏,蓋,甕）	SI-9・18・26・31と重複
20	$C2b_9$	不明	不明	不明	不明	平坦	－	－	－		SI-10・11・12と重複
21	$C2f_3$	N-23°-W	(方形)	4.78×3.96	14	平坦	2	竈	自然	土師器片46点（坏,甕),須恵器片2点（坏）	SI-27・28と重複
22	$C2d_5$	N-7°-W	方形	7.02×6.66	32～70	平坦	4	竈	自然	土師器片860点（坏,甕),須恵器片433点（坏,盤,蓋,甕）	SI-13・23・24,SB-6と重複
23	$C2f_5$	N-22°-W	方形	6.12×6.00	32～40	平坦	4	竈	自然	土師器片494点（坏,甕),須恵器片94点（坏,盤,蓋,甕）	SI-22・24,SB-6,SK-119と重複
24	$C2e_5$	N-20°-W	方形	2.86×2.68	14	平坦	－	竈	自然	土師器片155点（坏,甕),須恵器片78点（坏,蓋,甕）	SI-22・23,SB-6と重複
25	$C2f_8$	N-8°-W	方形	4.74×4.50	34～36	平坦	5	竈	自然	土師器片715点（坏,甕),須恵器片175点（坏,甕,甑）	SI-16と重複
26	$C2c_9$	N-5°-E	方形	6.46×6.22	10～38	平坦	5	竈	自然	土師器片325点（坏,甕,甑),須恵器片17点（甕),陶器片1点	SI-11・12・14・17・19・29・31と重複
27	$C2f_3$	(N-5°-W)	不明	(2.20)×(0.94)	10	平坦	－	竈	自然	土師器片10点（坏,甕),須恵器片7点（甕）	SI-21・28と重複

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	ピット	炉・竈	履土	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)						
28	C2g$_3$	N-22°-W	(方形)	5.88×5.44	14	平坦	—	—	自然	土師器片126点（坏,甕),須恵器片9点（坏),土製品1点（球状土錘）	SI-21・27,SB-3,SK-127・133と重複
29	C2d$_9$	N-22°-W	方形	4.74×4.48	14～18	平坦	4	竈	自然	土師器片150点（坏,甕),須恵器片18点（坏,蓋,甕),土製品2点（支脚）	SI-14・15・17・26・30・31と重複
30	C2e$_8$	N-10°-W	(方形)	(4.56)×(3.02)	不明	平坦	—	—	自然	土師器片8点（甕),須恵器片3点（坏）	SI-15・16・29と重複
31	C2d$_9$	N-20°-W	方形	4.68×4.52	16～20	平坦	4	竈	自然	土師器465点（坏,甕),須恵器74点（坏,蓋,甕）	SI-14・17・18・19・26・29と重複
32	C2j$_4$	N-23°-W	方形	6.78×6.72	10～45	平坦	5	竈	自然	土師器片363点(坏,甕,甑)，須恵器片28点（坏,盤,蓋）	SI-33・34,SB-5・8・9・10,SK-38・177・185と重複
33	C2j$_3$	N-16°-W	方形	5.18×4.78	20～22	平坦	4	竈	自然	土師器片237点（坏,甕),須恵器片70点（坏,蓋,甕	SI-32・34,SB-8・9,SK-185・186・187と重複
34	D2a$_4$	N-12°-W	方形	4.20×4.02	24～26	平坦	1	竈	自然	土師器片85点（坏,甕),須恵器片45点（坏,盤,蓋,甕,甑）	SI-32・33,SB-8,SK-38と重複
35	C2h$_9$	N-11°-W	長方形	6.58×4.50	20～52	凸凹	6	竈	自然	土師器片788点（坏,甕),須恵器片200点（坏,蓋,甕),陶器片4点	SI-42,SB-7,SK-50A・84・181・183・184と重複
36	C2i$_7$	N-7°-W	方形	8.02×7.48	18～54	平坦	5	竈	自然	土師器片1822点（坏,甕),須恵器片190点（坏,蓋,甕,盤),陶器片3点	SI-37・38・39,SB-1・2・5・10と重複
37	C2h$_7$	N-12°-W	方形	5.56×5.54	26～44	平坦	4	竈	自然	土師器片648点（坏,甕),須恵器片65点（坏,蓋,甕),鉄製品1点（釘）	SI-36と重複
38	C2j$_6$	N-11°-W	方形	6.18×6.18	16～38	平坦	6	—	自然	土師器片214点（坏,甕),須恵器片15点（坏,蓋,甕),陶器片3点	SI-36,SB-1・2・5・10と重複
39	C2j$_8$	N-18°-W	方形	4.30×4.14	16～32	凸凹	2	竈	自然	土師器片369点（坏,甕),須恵器片243点（坏,蓋,甕,甑）	SI-36,SB-1・2・7,SK-33と重複
40	E1i$_9$	N-0°	隅丸長方形	3.66×2.82	14～15	平坦	—	竈	自然	土師器片16点（坏,甕),須恵器片6点（甕）	SI-75と重複
41	B2j$_8$	N-0°	(長方形)	(6.80)×6.10	—	凸凹	3	竈	不明	土師器片19点（坏,皿,甕),須恵器片2点（蓋,甕）	SI-10,SK-7・9・10・14・15・16と重複
42	C2h$_9$	N-17°-W	方形	4.62×4.56	22～56	平坦	7	竈	自然	土師器片609点（坏,甕),須恵器片98点（坏,蓋,甕,壺）	SI-35,SB-7,SK-50A・83・84と重複
43	D2e$_1$	N-55°-E	長方形	5.84×5.26	8～16	凸凹	55	炉	不明	土師器片44点（坏,甕),須恵器片9点（蓋,盤）	SI-44と重複
44	D2f$_1$	N-65°-E	方形	5.68×5.94	4～8	凸凹	71	炉	不明	土師器片54点（坏,甕),須恵器片35点（坏,蓋,甕）	SI-43と重複
45	D1h$_0$	N-40°-W	方形	6.48×6.28	18～24	凸凹	8	炉	人為	土師器片60点（坏,甕),須恵器片23点（坏,盤,蓋,甕）	
46	E1b$_7$	(N-25°-W)	(方形)	(4.38)×(3.42)	34～36	平坦	1	—	自然	土師器片117点（坏,甕),石3点	
47	D2j$_3$	N-17°-W	方形	5.24×5.00	58～64	凸凹	6	竈	自然	土師器片1748点（甕),須恵器片906点（坏,蓋,盤,甕,甑,鉢),手捏土器3点	
48	E2a$_5$	N-0°	不明	(3.60)×(2.20)	36	平坦	—	竈	自然	土師器片101点（坏,甕,甑),須恵器19点（坏,盤,甕),土製品1点（管状土錘）	
49	E2b$_4$	N-23°-W	方形	4.46×4.18	24～34	平坦	5	竈	自然	土師器片556点（坏,甕),須恵器片143点（坏,蓋,甕,甑）	
50	E1a$_8$	N-5°-W	方形	4.02×3.86	32～58	平坦	—	竈	自然	土師器片92点（坏,甕),須恵器片40点（坏,蓋,甕,甑）	SI-51と重複
51	E1b$_9$	N-19°-W	方形	3.08×2.98	34～38	平坦	1	竈	自然	土師器片129点（坏,甕),須恵器片71点（坏,甕),土製品1点(管状土錘)	SI-50と重複
52	E1c$_7$	N-13°-W	方形	2.90×2.68	34～38	凸凹	1	竈	自然	土師器片37点（坏,甕),須恵器片47点（坏,甕,壺）	
53	E1d$_6$	不明	不明	不明	15	凸凹	—	竈	自然	土師器片6点（坏,甕),須恵器片2点（甕）	SI-58と重複
54	E2g$_2$	N-10°-W	方形	3.44×3.12	32～36	凸凹	—	竈	自然	土師器片133点（坏,甕),須恵器片28点（坏,盤,蓋,甕,）	SI-80と重複

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	ピット	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)						
55	$E1h_6$	N-13°-W	方形	4.96×4.68	18～34	凸凹	5	竈	自然	土師器片596点（坏,甕),須恵器片38点（坏,蓋,甕）	SI-56,SK-46,SD-2と重複
56	$E1h_6$	N-30°-W	方形	6.02×5.46	5～18	凸凹	5	—	自然	土師器片24点（坏,甕),土製品1点(支脚)	SI-55,SD-2と重複
57	$E1f_6$	N-17°-W	方形	3.88×3.74	20～36	凸凹	4	竈	自然	土師器318点（坏,甕),須恵器75点（坏,蓋,甕),陶器片1点	SI-58,SK-44・45・46と重複
58	$E1e_6$	N-23°-W	方形	6.18×5.88	34～46	平坦	4	竈	自然	土師器片551点(坏,甕,甑),須恵器片17点（坏,盤,蓋),土製品6点(球状土錘)	SI-53・57,SK-45と重複
59	$F1c_9$	N-19°-W	方形	3.58×3.50	36～38	平坦	1	竈	自然	土師器片198点（坏,甕),須恵器片52点（坏,蓋,甕）	SI-60・61,SD-1と重複
60	$F1b_9$	N-2°-W	方形	3.56×3.36	18～40	平坦	—	竈	自然	土師器片146点（坏,甕),須恵器片39点（坏,盤,甕）	SI-59・61と重複
61	$F1b_8$	N-4°-W	方形	4.32×4.08	34～38	平坦	5	竈	自然	土師器片127点（坏,甕),須恵器片20点（坏,蓋,甕）	焼失家屋,SI-59・60,SD-1と重複
62	$F1a_0$	N-0°	方形	2.58×2.52	16～24	平坦	—	竈	自然	土師器片74点（坏,甕),須恵器片21点（坏,蓋,甕,甑）	SI-63と重複
63	$F1b_0$	N-15°-W	方形	3.02×2.84	22～26	凸凹	1	竈	自然	土師器片82点（坏,甕),須恵器片7点（坏,盤）	SI-62と重複
64	$F1c_8$	N-15°-W	方形	4.58×4.10	13～38	平坦	1	竈	自然	土師器片108点（坏,甕),須恵器片33点（坏,蓋,甕）	SI-65と重複
65	$F1d_0$	N-45°-W	方形	3.90×3.84	28～32	凸凹	5	竈	自然	土師器片95点（坏,甕),須恵器片9点（坏,甕）	焼失家屋,SI-64と重複
66	$E1i_0$	N-50°-W	方形	4.64×4.44	8～16	凸凹	5	—	自然	土師器片660点（坏,甕),須恵器片70点（坏,盤,甕),石3点	SI-67・68と重複
67	$E1i_0$	N-40°-W	方形	5.14×5.02	22	平坦	4	竈	自然	土師器片228点（坏,甕),須恵器片26点（坏,甕）	SI-66・68・73と重複
68	$E1i_0$	N-0°	(方形)	3.86×3.60	20～22	凸凹	—	竈	自然	土師器片5点（甕),須恵器片1点（坏）	SI-66・67と重複
69	$E1d_0$	N-16°-W	方形	3.72×3.50	18～38	平坦	1	竈	自然	土師器片217点(坏,甕,甑),須恵器片25点（蓋,甕),土製品1点(支脚)	SI-70と重複
70	$E1d_9$	N-12°-W	長方形	5.42×4.58	24～48	凸凹	5	竈	自然	土師器片416点（坏,甕,甑),須恵器片73点（坏,蓋,甕）	SI-69・71と重複
71	$E1c_9$	N-15°-W	方形	3.24×3.02	8～22	凸凹	1	竈	自然	土師器片27点（坏,甕),須恵器片12点（坏,甕）	SI-70・72と重複
72	$E2c_1$	N-41°-W	方形	7.12×6.84	34～44	平坦	5	竈	自然	土師器片206点(坏,甕,甑),須恵器17点（坏,蓋,甕）	貯蔵穴,SI-71と重複
73	$E2i_1$	N-24°-W	長方形	3.86×3.36	44～46	平坦	1	竈	自然	土師器片708点（坏,甕),須恵器片163点（坏,蓋,盤,甕）	SI-67と重複
74	$E2d_2$	N-32°-W	方形	4.18×3.86	26～30	凸凹	1	竈	自然	土師器片502点（坏,甕,,甑),須恵器片267点（坏,蓋,甕),陶器片2点	
75	$E1j_9$	N-10°-W	方形	4.66×4.48	24～36	凸凹	4	竈	自然	土師器片837点（坏,甕,甑),須恵器片223点（坏,蓋,甕）	SI-40と重複
76	$E1f_8$	N-8°-W	方形	7.08×6.94	35～47	平坦	6	竈	自然	土師器片1890点（坏,甕),須恵器片137点（坏,蓋,甕),手捏土器2点	SI-77・78と重複
77	$E1e_8$	N-18°-W	長方形	6.74×5.94	45～50	平坦	5	竈	自然	土師器片161点（坏,甕）	SI-76と重複
78	$E1h_8$	N-90°-E	方形	3.52×3.32	45～48	凸凹	3	竈	自然	土師器片416点（坏,甕),須恵器片71点（坏,蓋,甕）	SI-76,SD-2と重複
79	$E1g_0$	N-35°-W	長方形	5.00×4.40	34～44	平坦	5	竈	自然	土師器片310点（坏,甕,甑),須恵器5点（坏,蓋,甕）	SI-80と重複
80	$E1f_0$	N-13°-W	方形	8.08×7.88	26～44	平坦	5	竈	自然	土師器片281点（坏,甕),須恵器片6点（坏,蓋,甕）	焼失家屋,貯蔵穴,SI-54・79・81と重複
81	$E2e_1$	N-38°-W	方形	5.94×5.54	18～20	凸凹	5	竈	自然	土師器片769点（坏,甕),須恵器片6点（坏,甕,甑）	SI-80と重複

第3節　掘立柱建物跡

当調査区からは，調査区の北部から中央部にかけて，古墳時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡が13棟検出されている。しかし，これらの掘立柱建物跡は，他の遺構と重複し合っているうえ，第13号掘立柱建物跡のように大半が調査区域外にのびているものもあり，更に，遺構に伴う遺物が少ないこと等から，規模や時期については不明確な点もある。

第1号掘立柱建物跡(第198・199図)

位置　調査区のほぼ中央部，C2a_6区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東コーナー付近の上位には，第36号住居跡の南東コーナー付近及び第39号住居跡の西部が，北部の上位には，第38号住居跡の南部がそれぞれ構築されている。本跡のほぼ全域は第2号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

長軸方向　N-22°-W。

規模　南北3間(約5.1m)，東西5間(約10.8m)の東西棟の建物で，柱間寸法は，桁行1.5～1.9m，梁行1.8～2.4mである。柱穴掘方は，長径1.0～1.5m，短径0.8～1.2mの長方形を呈している。深さは，0.8～1.2mを測り，断面形は方形を呈している。柱痕跡は検出されていないが，P_1，P_4の底面から粘土が検出されており，その上に柱が構築されていたと考えられる。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土を主体に，人為的に埋め戻されている。

遺物　柱穴掘方内の覆土から，土師器(坏，甕)片が極少量出土している。725の手捏土器はP_8の覆土から，726の土師器の坏はP_{14}の覆土から出土している。

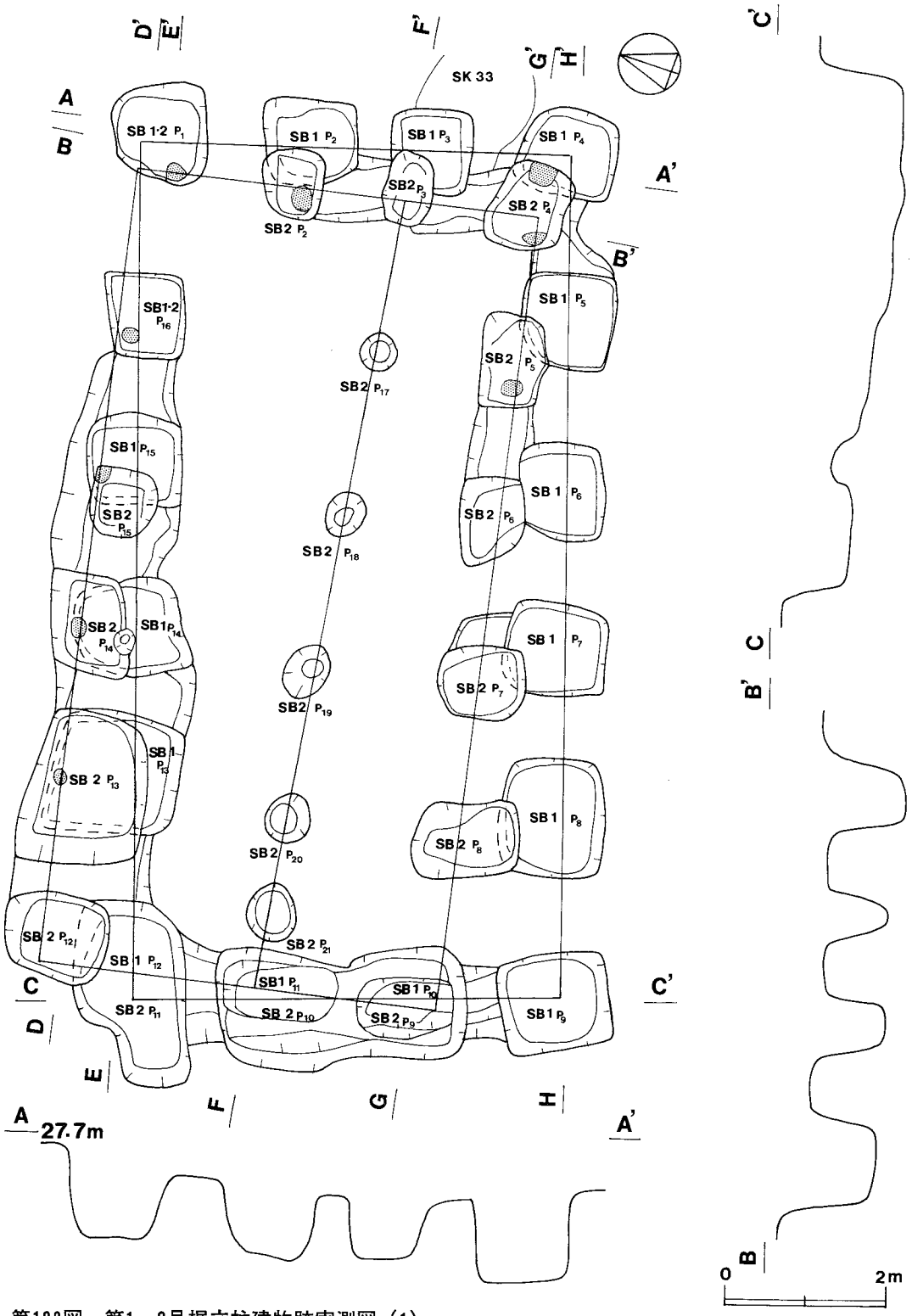
所見　本跡は，重複関係から第36・38・39号住居跡及び第2号掘立柱建物跡より古い時期に構築されている。本跡のP_1，P_{10}，P_{11}，P_{12}，P_{16}が，それぞれ第2号掘立柱建物跡のP_1，P_9，P_{10}，P_{11}，P_{16}と共有すること及び第2号掘立柱建物跡とほぼ同一位置に所在していることから，本跡は，第2号掘立柱建物に建て替えられる以前の建物跡であり，古墳時代後期と思われる第38号住居跡の床下から検出されていることから，古墳時代後期あるいはそれ以前の建物跡と考えられる。

第2号掘立柱建物跡(第198・199図)

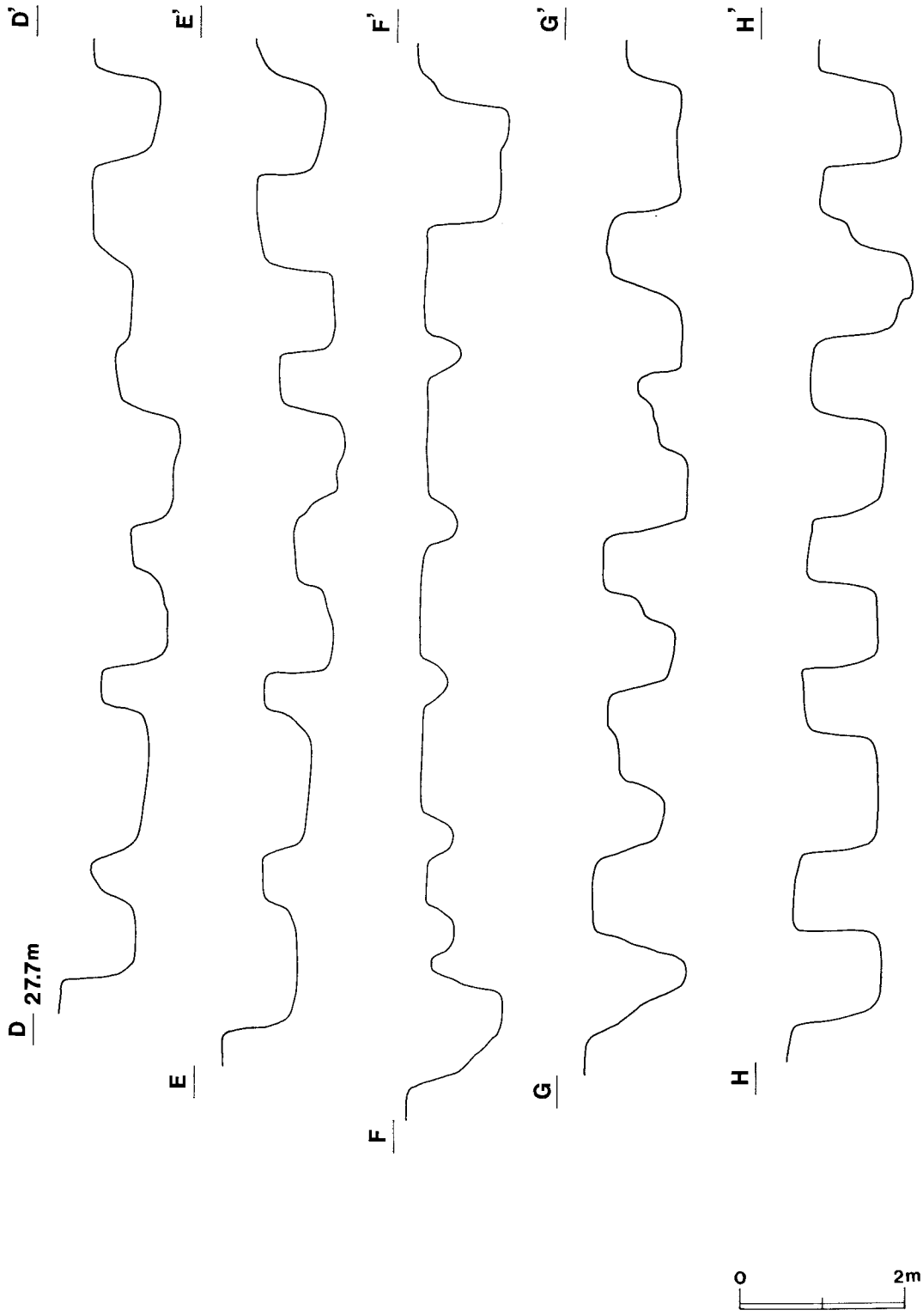
位置　調査区のほぼ中央部，C2a_6区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東コーナー付近の上位には，第36号住居跡の南東コーナー付近及び第39号住居跡の西部が，北部の上位には第38号住居跡の南部がそれぞれ構築され，本跡のほぼ全域は第1号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

長軸方向　N-15°-W。



第198図　第1・2号掘立柱建物跡実測図（1）



第199図　第1・2号掘立柱建物跡実測図（2）

規模　南北3間(約4.4m)，東西5間(約10.0m)の東西棟の建物で，柱間寸法は，桁行1.4～2.8m，梁行1.8～2.0mである。柱穴掘方は，長径0.9～1.9m，短径0.6～1.5mの長方形を呈している。深さは，0.6～1.2mを測り，断面形は方形を呈している。北西コーナー及び南東コーナーの柱穴掘方を連結するように溝状の掘り込みが確認されている。束柱は北側の柱穴掘方と南側の柱穴掘方のほぼ中央から，長軸方向に沿って5か所検出されている。長径0.5～0.7m，短径0.4～0.6mの円形，楕円形を呈している。深さは0.3～0.4mを図り，断面形は皿状を呈している。柱痕跡は検出されていないが，P_1，P_2，P_4，P_5，P_{13}，P_{14}，P_{15}，P_{16}の底面から粘土が検出されており，その上に柱を支えていたものと考えられる。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土及び暗褐色土で，人為的に埋め戻されてよく締まっている。

遺物　柱穴掘方内の覆土から，土師器(坏，甕)片が極少量出土している。728の手捏土器はP_{10}から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第1号掘立柱建物跡より新しく，第36・38・39号住居跡より古い時期に構築されている。本跡のP_1，P_9，P_{10}，P_{11}，P_{16}が，それぞれ第1号掘立柱建物跡のP_1，P_{10}，P_{11}，P_{16}と共有すること及び第1号掘立柱建物跡とほぼ同一位置に所在していることから，本跡は，第1号掘立柱建物を建て替えた建物跡であり，古墳時代後期と思われる第38号住居跡の床下から検出されていることから，古墳時代後期あるいはそれ以前の建物跡と考えられる。

第3号掘立柱建物跡(第200図)

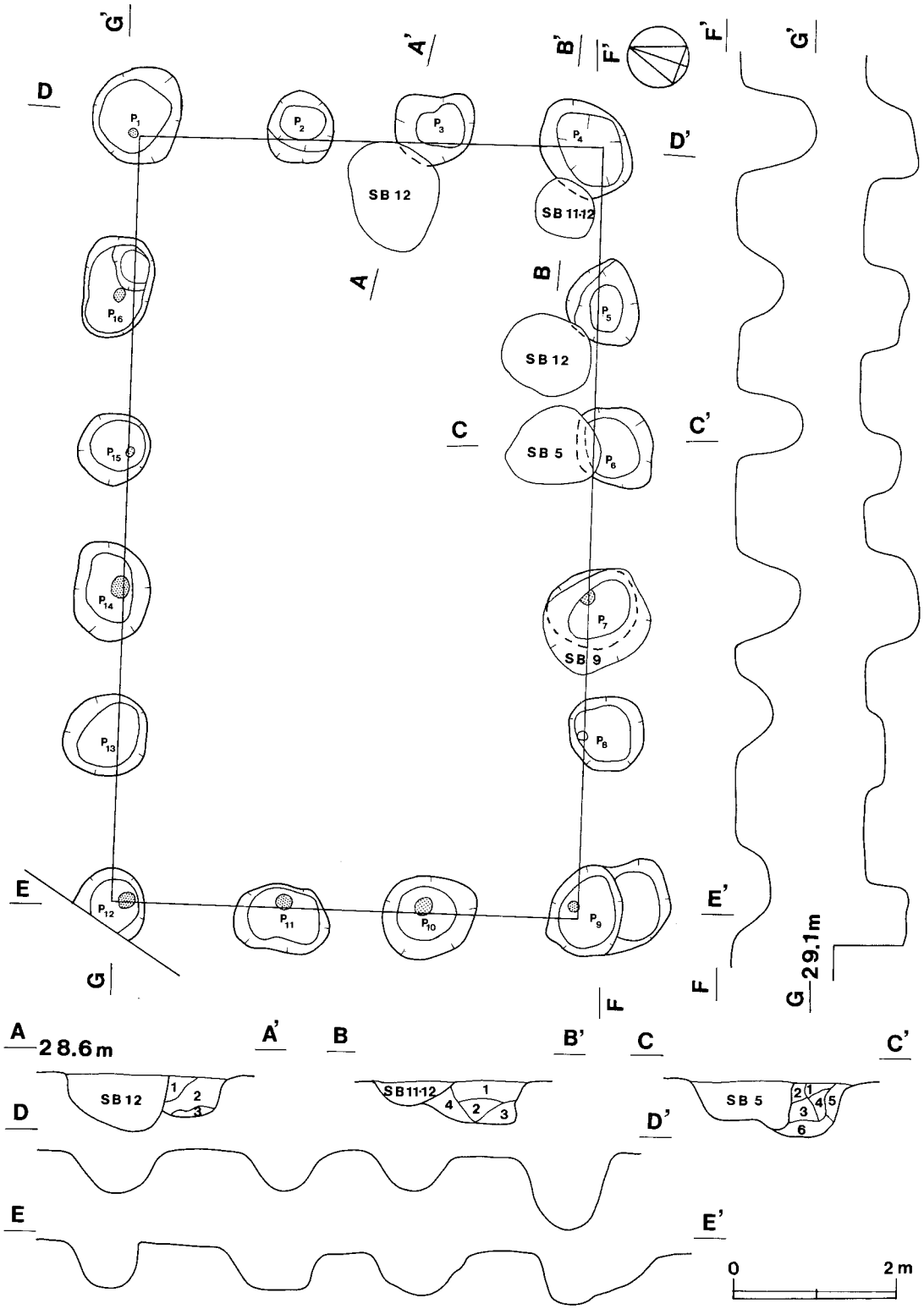
位置　調査区の北部，$C2h_4$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北側の柱穴の上位には，第28号住居跡の東部が構築されている。東部は第12号掘立柱建物跡の全域に，南東コーナー付近は第5号掘立柱建物跡の北西コーナー付近及び第11号掘立柱建物跡の東部に掘り込まれている。本跡の南西コーナー付近と第9号掘立柱建物跡の北東コーナー付近が重複している。

長軸方向　N-19°-W。

規模　南北3間(約5.8m)，東西5間(約9.6m)の東西棟の建物で，柱間寸法は，桁行1.6～2.0m，梁行1.7～2.1mである。柱穴掘方は，長径1.2～1.4m，短径0.8～1.1mの円形及び楕円形を呈している。深さは，0.4～1.0mを測り，断面形はU字状を呈している。柱痕跡は検出されていないが，P_1，P_7～P_{12}，P_{14}～P_{16}の底面から粘土が検出されており，その上に柱を支えていたものと考えられる。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土及び暗褐色土で人為的に埋め戻され，よ



第200図　第３号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡　土層解説　（A－A'）
1　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子中量。
2　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子中量。
3　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。

第3号掘立柱建物跡　土層解説　（B－B'）
1　極暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量。
2　暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
3　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子少量。
4　黒 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量。

第3号掘立柱建物跡　土層解説　（C－C'）
1　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子少量。
2　暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　極暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
5　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
6　極暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。

く締まっている。

遺物　729の須恵器の坏がP_{12}の覆土から出土している。

所見　本跡は，重複関係及び第9号掘立柱建物跡の構築年代から，第28号住居跡及び第5・9・11・12号掘立柱建物跡より古い時期に構築されている。本跡は，古墳時代後期と思われる第28号住居跡の床下から検出されていることから，古墳時代後期あるいはそれ以前の建物跡と考えられる。

第4号掘立柱建物跡（第201図）

位置　調査区のほぼ中央部，$C2b_3$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の大半は第8号掘立柱建物跡の南部，南側の柱穴掘方は第13号掘立柱建物跡と重複し，本跡の南西コーナー付近の上位には第5号住居跡の南東部が構築されている。

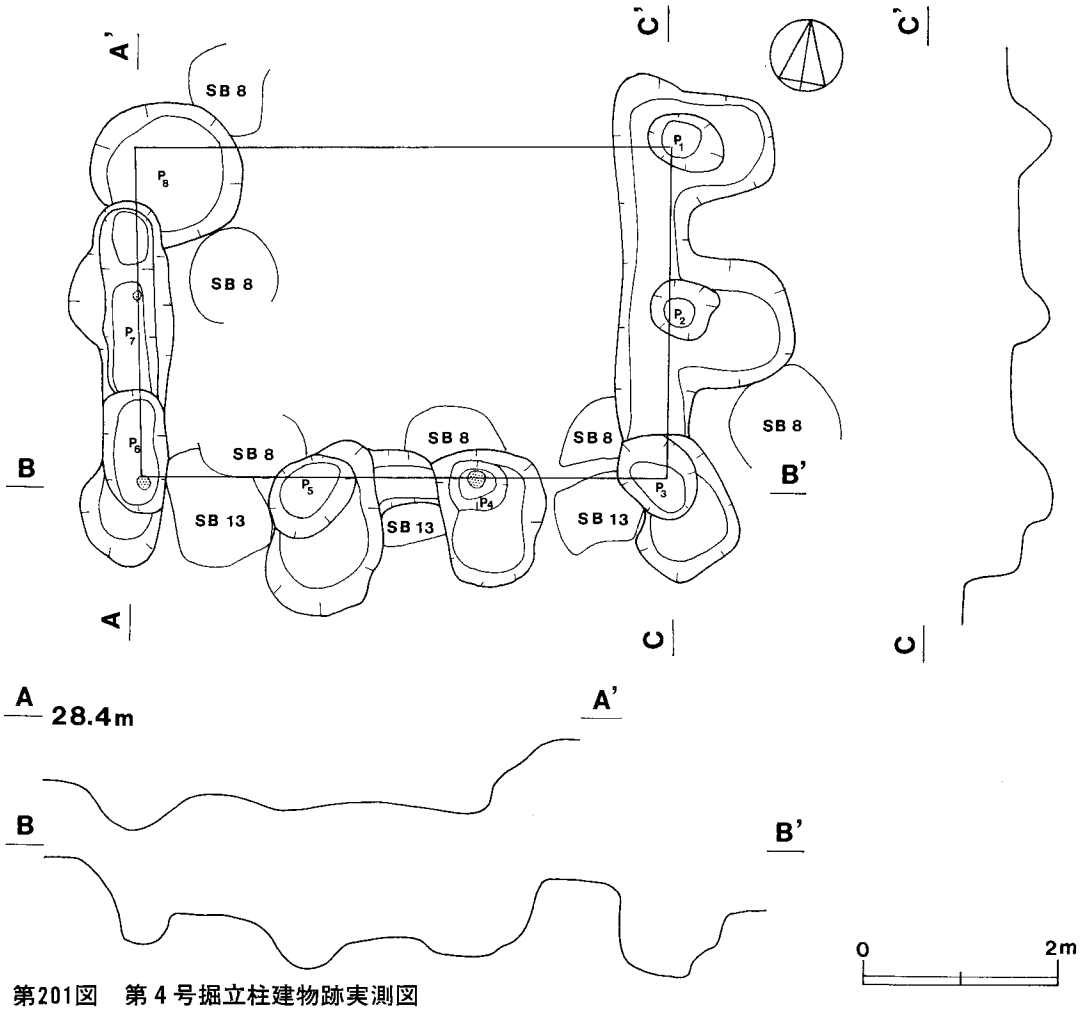
長軸方向　N-11°-W。

規模　南北2間（約3.6m），東西3間（約5.3m）の東西棟の建物で，柱間寸法は，桁行1.8～2.0m，梁行1.7～2.0mである。北側部分を除き，柱列に沿って溝状に掘り込まれている。柱穴掘方は，長径0.8～1.8m，短径0.8～1.4mの長方形，不定形を呈している。深さは，0.5～0.9mを測り，断面形はU字状を呈している。柱痕跡は検出されていないが，P_4，P_6，P_7の底面から粘土が検出されており，その上に柱を支えていたものと考えられる。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土及び暗褐色土で，人為的に埋め戻されている。

遺物　土師器（坏，甕）片が極少量出土している。

所見　本跡は，重複関係から第5号住居跡より古い時期に構築されているが，第8・13号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。本跡は，平安時代前期と思われる第5号住居跡の床下から検出されていることから，平安時代前期あるいはそれ以前に構築された建物跡と考えられる。



第201図　第４号掘立柱建物跡実測図

第５号掘立柱建物跡(第202図)

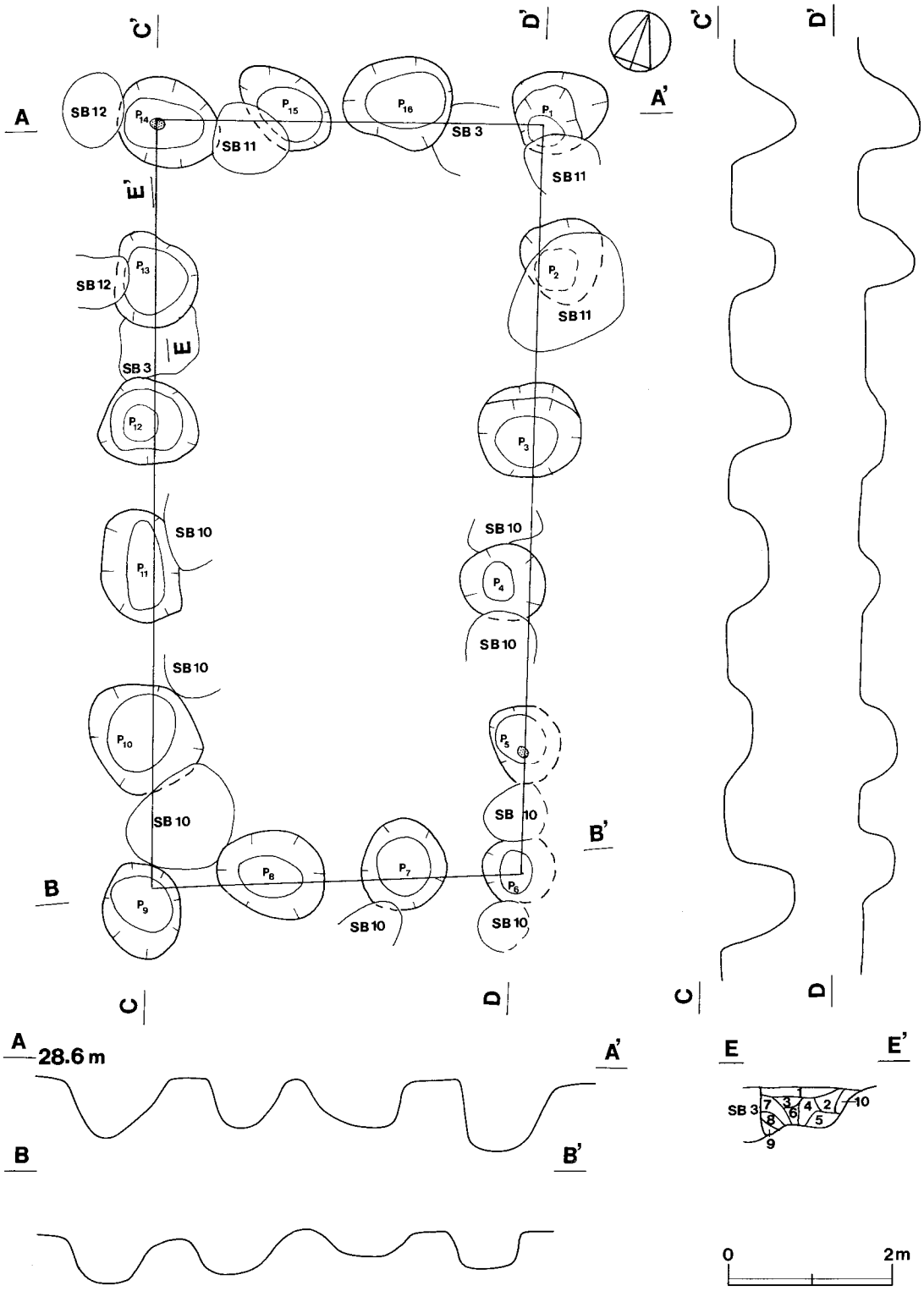
位置　調査区のほぼ中央部，C2i5区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南部は第10号掘立柱建物跡のほぼ全域と重複している。北東コーナー付近は第11号掘立柱建物跡の南部に，北西コーナー付近は第3号掘立柱建物跡の南東コーナー付近を掘り込み，第12号掘立柱建物跡の南部に掘り込まれている。本跡の南西コーナー付近は第32号住居跡の東部を，南東コーナー付近は第36号住居跡の南西コーナー付近及び第38号住居跡の西壁を掘り込んでいる。

長軸方向　N-15°-W。

第5号掘立柱建物跡　土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子少量。
2　暗 褐 色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4　極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子少量。
5　暗 褐 色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
6　極暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
7　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量。
8　極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，炭化粒子少量。
9　極暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
10　暗 褐 色　ローム粒子中量・ロームブロック少量。



第202図　第５号掘立柱建物跡実測図

規模　南北5間(約9.8m)，東西3間(約4.6m)の南北棟の建物で，柱間寸法は，桁行1.5～1.6m，梁行1.8～2.0mである。柱穴掘方は，長径0.9～1.6m，短径0.8～1.3mの円形，不定形を呈している。深さは，0.4～0.8mを測り，断面形は方形，U字状，皿状を呈している。柱痕跡は検出されていないが，P_5，P_{14}の底面から粘土が検出されており，その上に柱を支えていたものと考えられる。

覆土　ロームブロック，ローム粒子混じりの褐色土及び暗褐色土で人為的に埋め戻され，よく締まっている。

所見　本跡は，重複関係及び第10号掘立柱建物跡の構築年代から，第3号掘立柱建物跡，第32・36・38号住居跡より新しく，第10・11・12号掘立柱建物跡より古い時期に構築されている。出土遺物はないが，古墳時代後期と思われる第32・36・38号住居跡を掘り込んでいることから，古墳時代後期以降に構築された建物跡と考えられる。

第6号掘立柱建物跡(第203図)

位置　調査区の北部，$C2f_5$区を中心に確認されている。

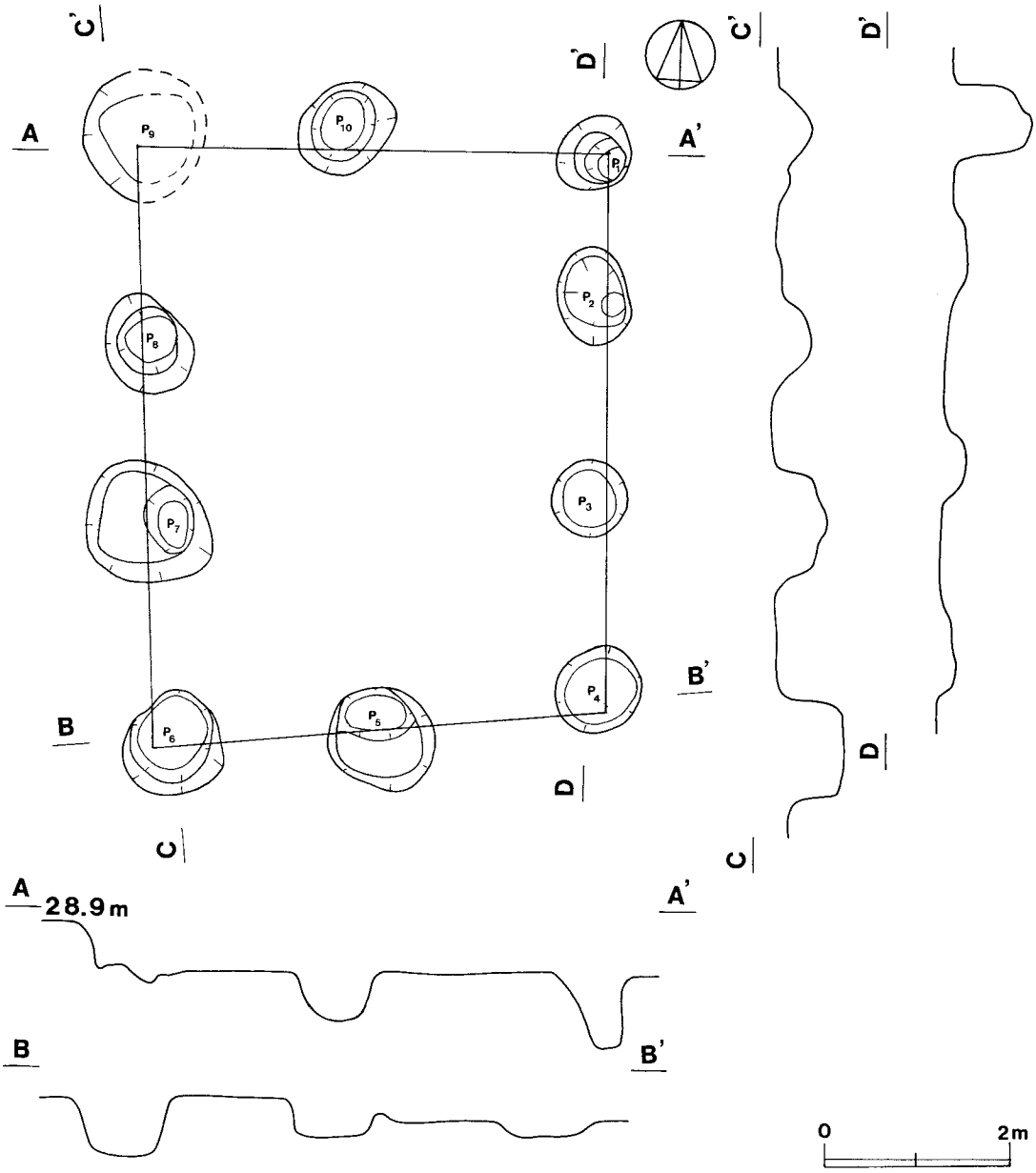
重複関係　本跡は，第22号住居跡の南西部，第23号住居跡の西部及び第24号住居跡の南西コーナー付近を掘り込んで構築されている。

長軸方向　N-7°-W。

規模　南北3間(約6.4m)，東西2間(約4.8m)の南北棟の建物で，柱間寸法は，桁行2.0～2.9m，梁行1.6～2.4mである。柱穴掘方は，長径0.9～1.9m，短径0.8～1.3mの円形，楕円形を呈している。深さは，0.2～0.8mを測り，断面形は方形，皿状，U字状を呈している。柱痕跡は検出されていない。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土及び暗褐色土で，人為的に埋め戻されている。

所見　本跡は，重複関係から第22・23・24号住居跡より新しい時期に構築されている。遺物は出土していないが，平安時代前期と思われる第24号住居跡の床下から検出されていることから，平安時代前期あるいはそれ以降の建物跡と考えられる。



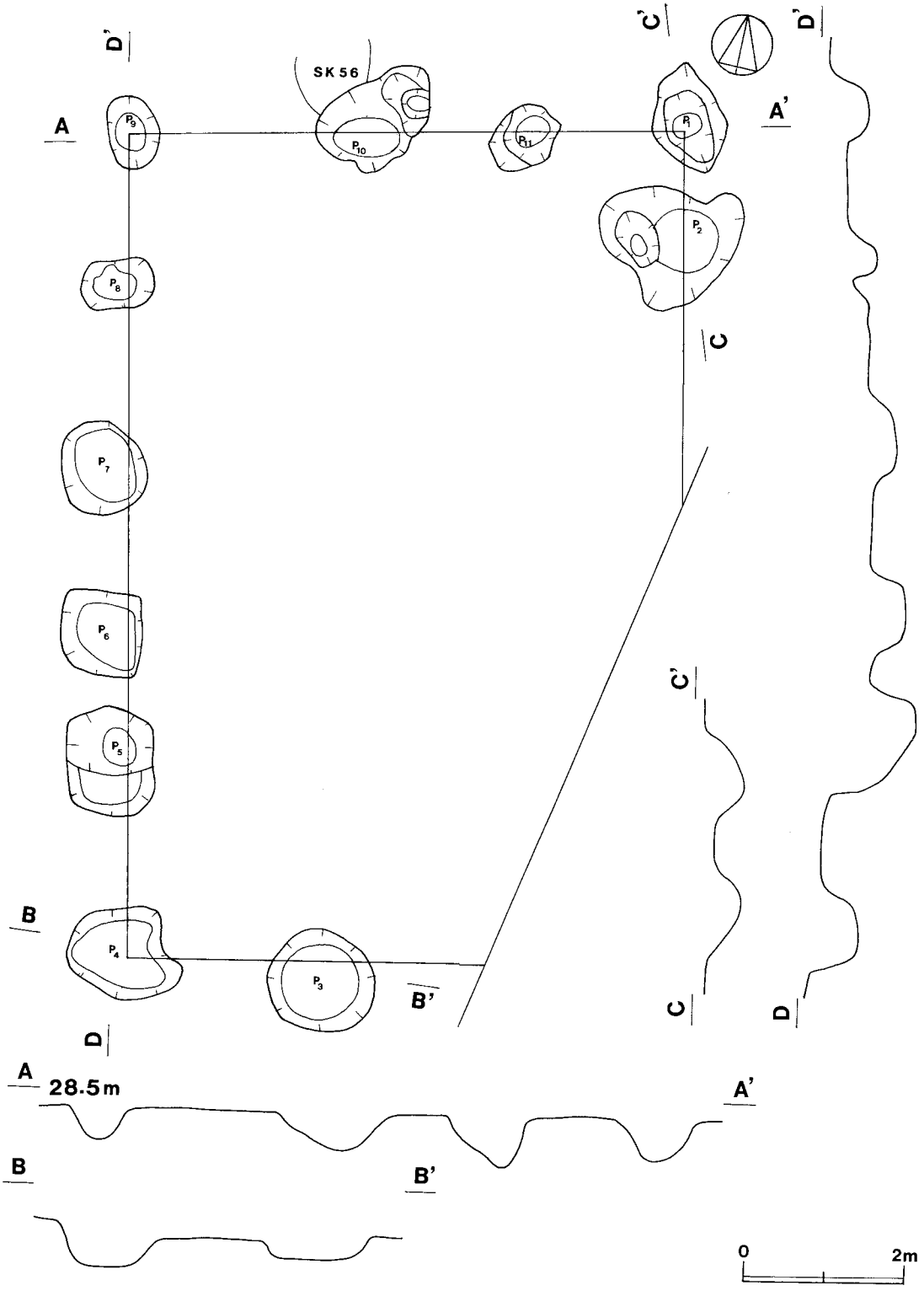
第203図　第6号掘立柱建物跡実測図

第7号掘立柱建物跡(第204図)

位置　調査区の北東部，C2h_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡は，第35・42号住居跡と重複し，南東コーナーは第39号住居跡の北東コーナーを掘り込んでいる。本跡のP_{10}は第56号土坑を掘り込んでいる。

長軸方向　N-11°-W。



第204図　第７号掘立柱建物跡実測図

規模　南北5間(約6.4m)，東西3間(約4.8m)の南北棟の建物で，柱間寸法は，桁行2.0～2.8m，梁行1.9～2.4mである。柱穴掘方は，長径0.9～1.4m，短径0.6～1.3mの円形，楕円形，不定形を呈している。深さは，0.3～1.0mを測り，断面形は方形，皿状，U字状を呈している。柱痕跡は確認できなかった。

覆土　ロームブロック，ローム粒子混じりの褐色土を主体に，人為的に埋め戻されている。

遺物　柱穴掘方内の覆土から，土師器(坏，甕)片が少量出土している。730の須恵器の盤は覆土中層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第56号土坑，第35・39・42号住居跡より新しい時期に構築されており，平安時代前期以降の建物跡と考えられる。

第8号掘立柱建物跡(第205図)

位置　調査区のほぼ中央部，D2a$_3$区を中心に確認されている。北西コーナーは調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の北東コーナーは第32号住居跡の北西コーナー付近を，北東部は第33号住居跡のほぼ全域を，南西部は第5号住居跡の東部をそれぞれ掘り込んでいる。南部は第4号掘立柱建物跡の大半と，北東コーナーは第9号掘立柱建物跡の南西コーナーと重複し，南側の柱穴は第13号掘立柱建物跡の柱穴を掘り込んでいる。

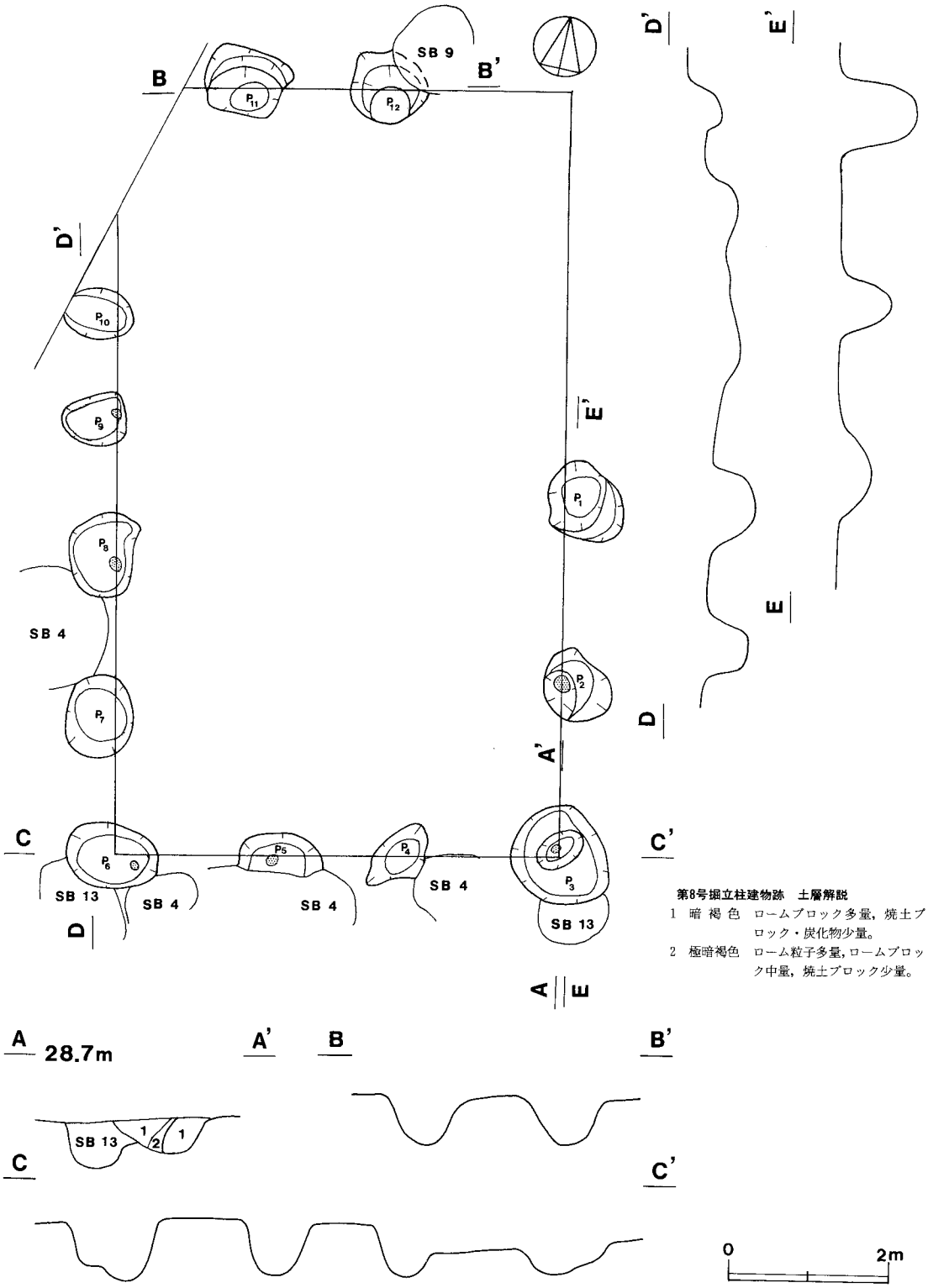
長軸方向　N-13°-W。

規模　北東コーナーと調査区域外の北西コーナーからはピットは検出されなかったが，南北5間(約10.0m)，東西3間(約5.2m)の南北棟の建物と考えられる。柱間寸法は，桁行1.6～1.9m，梁行1.2～2.4mである。柱穴掘方は，長径0.8～1.3m，短径0.6～1.1mの楕円形，不定形を呈している。深さは，0.4～0.9mを測り，断面形は方形，U字状を呈している。柱痕跡は検出されていないが，柱を支えたと考えられる粘土が，P_3，P_4，P_6，P_7，P_9，P_{10}の底面から検出されている。

覆土　ロームブロック，ローム粒子混じりの褐色土で人為的に埋め戻され，よく締まっている。

遺物　柱穴掘方内の覆土から土師器(坏，甕)片が極少量と，P_{11}の覆土から732の須恵器の坏が出土している。

所見　本跡は，重複関係から，第5・32・33号住居跡及び第13号掘立柱建物跡より新しい時期に構築されている。第4号掘立柱建物跡及び第9号掘立柱建物跡との新旧関係は不明であるが，平安時代前期と思われる第33号住居跡を掘り込んで検出されていることから，平安時代あるいはそれ以降の建物跡と考えられる。



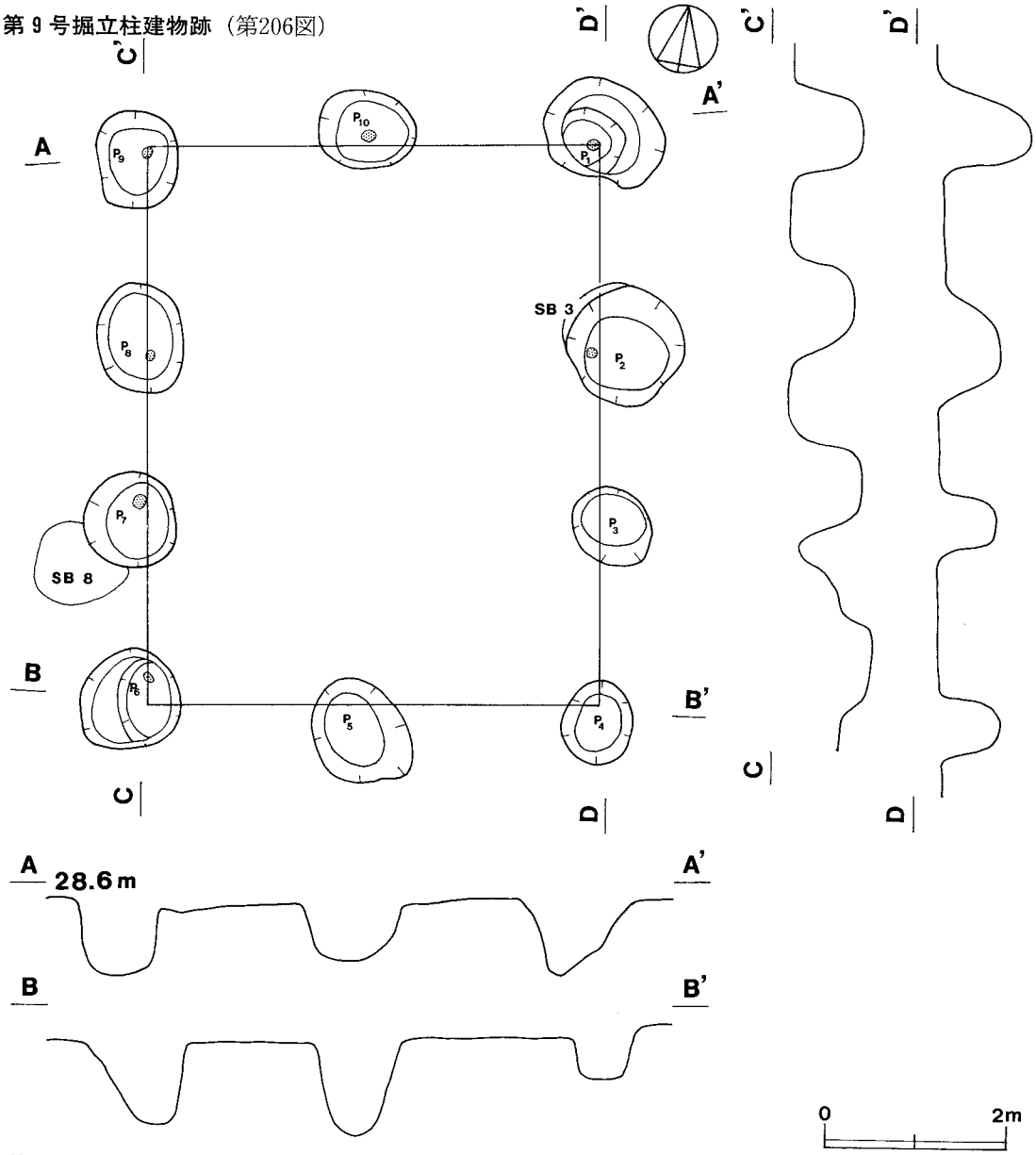
第8号掘立柱建物跡　土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。

2　極暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土ブロック少量。

第205図　第８号掘立柱建物跡実測図

第 9 号掘立柱建物跡（第206図）



第206図　第 9 号掘立柱建物跡実測図

位置　調査区のほぼ中央部，C2i3区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南東側の柱穴は第32号住居跡の北西部を，南側の柱穴は第33号住居跡の北東部を掘り込んでいる。南西コーナーは第8号掘立柱建物跡の北東コーナー，北東コーナー付近は第3号掘立柱建物跡の南西コーナー付近と，南東部は第177号土坑と重複している。

長軸方向　N-10°-W。

規模　南北3間(約6.0m)，東西2間(約5.0m)の南北棟の建物で，柱間寸法は，桁行2.4～2.6m，梁行1.6～2.2mである。柱穴掘方は，長径0.9～1.4m，短径0.7～1.1mの円形，楕円形を呈している。深さは0.6～1.1mを測り，断面形はU字状を呈している。柱痕跡は検出されていないが，P_1，P_2，P_6～P_{10}の底面から粘土が検出され，その上に柱を支えていたものと考えられる。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土及び暗褐色土によって埋め戻されている。

遺物　柱穴掘方内の覆土から，須恵器の甕片が1点出土している。

所見　本跡は，重複関係及び第3号掘立柱建物跡の構築年代から，第32・33号住居跡及び第3号掘立柱建物跡より新しい時期に構築されている。第8号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。平安時代前期と思われる第33号住居跡を掘り込んでいることから，平安時代前期あるいはそれ以降に構築された建物跡と考えられる。

第10号掘立柱建物跡(第207図)

位置　調査区のほぼ中央部，$C2j_5$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡のほぼ全域は第5号掘立柱建物跡の南部と重複している。本跡の東側の柱穴は第36・38号住居跡の西壁を，西側の柱穴は第32号住居跡の北東壁付近を掘り込んでいる。

長軸方向　N-17°-W。

規模　南北3間(約5.0m)，東西2間(約3.6m)の南北棟の建物で，柱間寸法は，桁行1.7～1.9m，梁行1.4～2.0mである。柱穴掘方は，長径0.6～1.4m，短径0.5～0.6mの円形，楕円形，不定形を呈している。深さは0.2～0.6mを測り，断面形はU字状，皿状を呈している。柱痕跡は検出されていない。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土及び暗褐色土で，人為的に埋め戻されている。

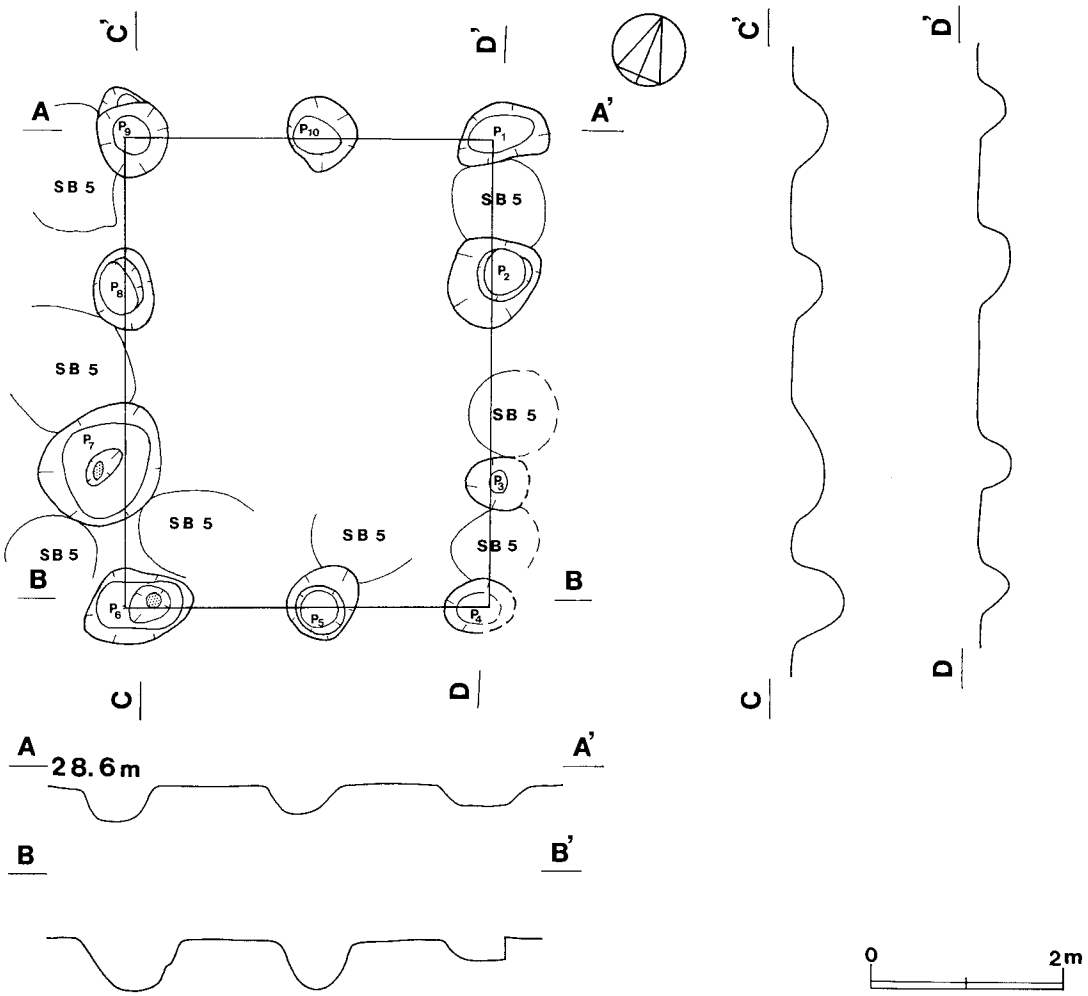
遺物　柱穴掘方内の覆土から，土師器(甕)片が極少量出土している。

所見　本跡は，重複関係及び第5号掘立柱建物跡の構築年代から，第32・36・38号住居跡及び第5号掘立柱建物跡より新しい時期に構築されている。奈良時代と思われる第36号住居跡を掘り込んでいることから，奈良時代あるいはそれ以降の建物跡と考えられる。

第11号掘立柱建物跡(第208図)

位置　調査区北部，$C2h_5$区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の西部は第12号掘立柱建物跡の東部と重複している。本跡の東部は第3号掘立柱建物跡の南東コーナー付近を，南部は第5号掘立柱建物跡の北東コーナー付近をそれぞれ掘り込んでいる。



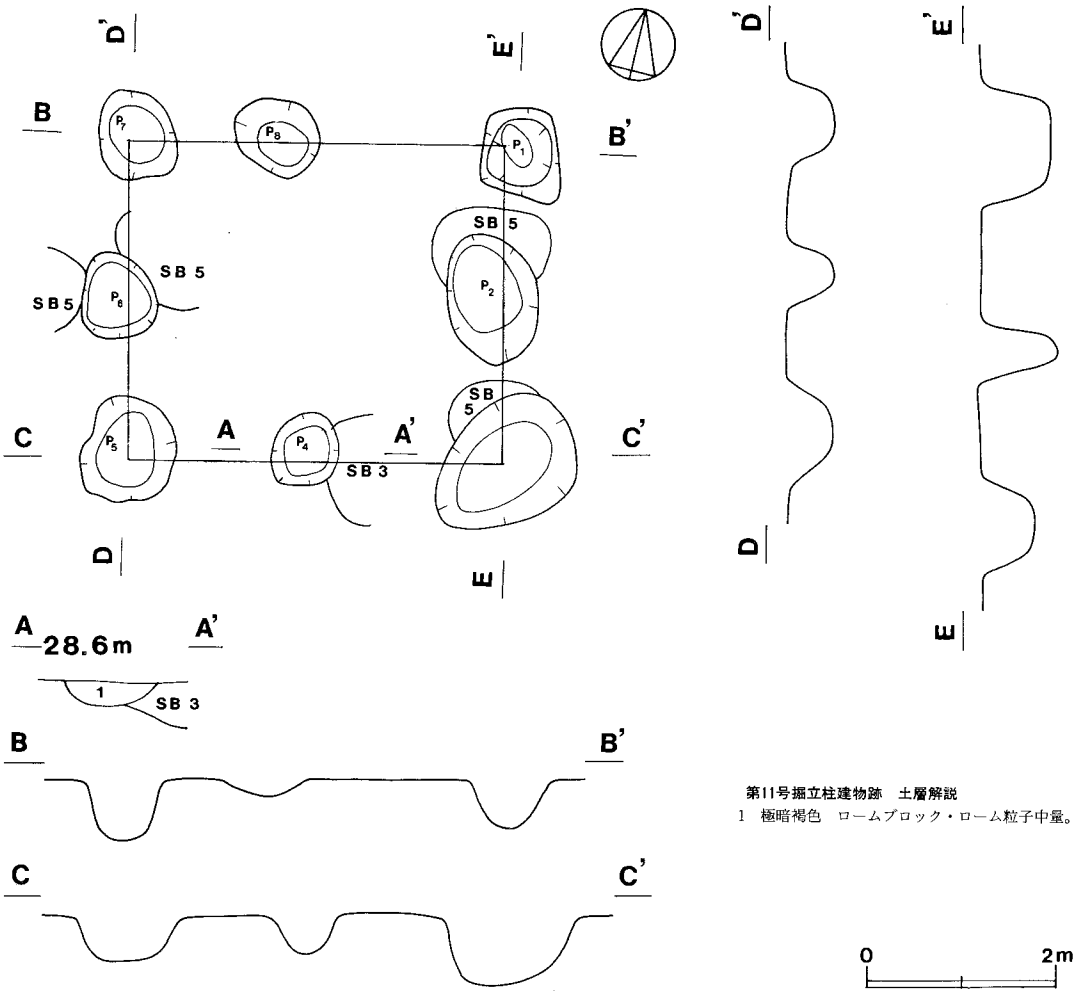
第207図　第10号掘立柱建物跡実測図

長軸方向　N-80°-E。

規模　南北2間(約3.4m)，東西2間(約4.0m)の東西棟の建物で，柱間寸法は，桁行1.6～1.8m，梁行1.6～2.4mである。柱穴掘方は，長径0.8～1.7m，短径0.5～1.2mの楕円形，不定形を呈している。深さは0.2～0.8mを測り，断面形は方形，U字状，皿状を呈している。柱痕跡は検出されていない。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を含む極暗褐色土が1層人為的に埋め戻されている。

所見　本跡は，重複関係から第3・5号掘立柱建物跡より新しい時期に構築されているが，第12号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。遺物は出土していないが，古墳時代後期以前と考えられる第3号掘立柱建物跡を掘り込んでいることから，それ以降の建物跡と考えられる。



第208図　第11号掘立柱建物跡実測図

第12号掘立柱建物跡(第209図)

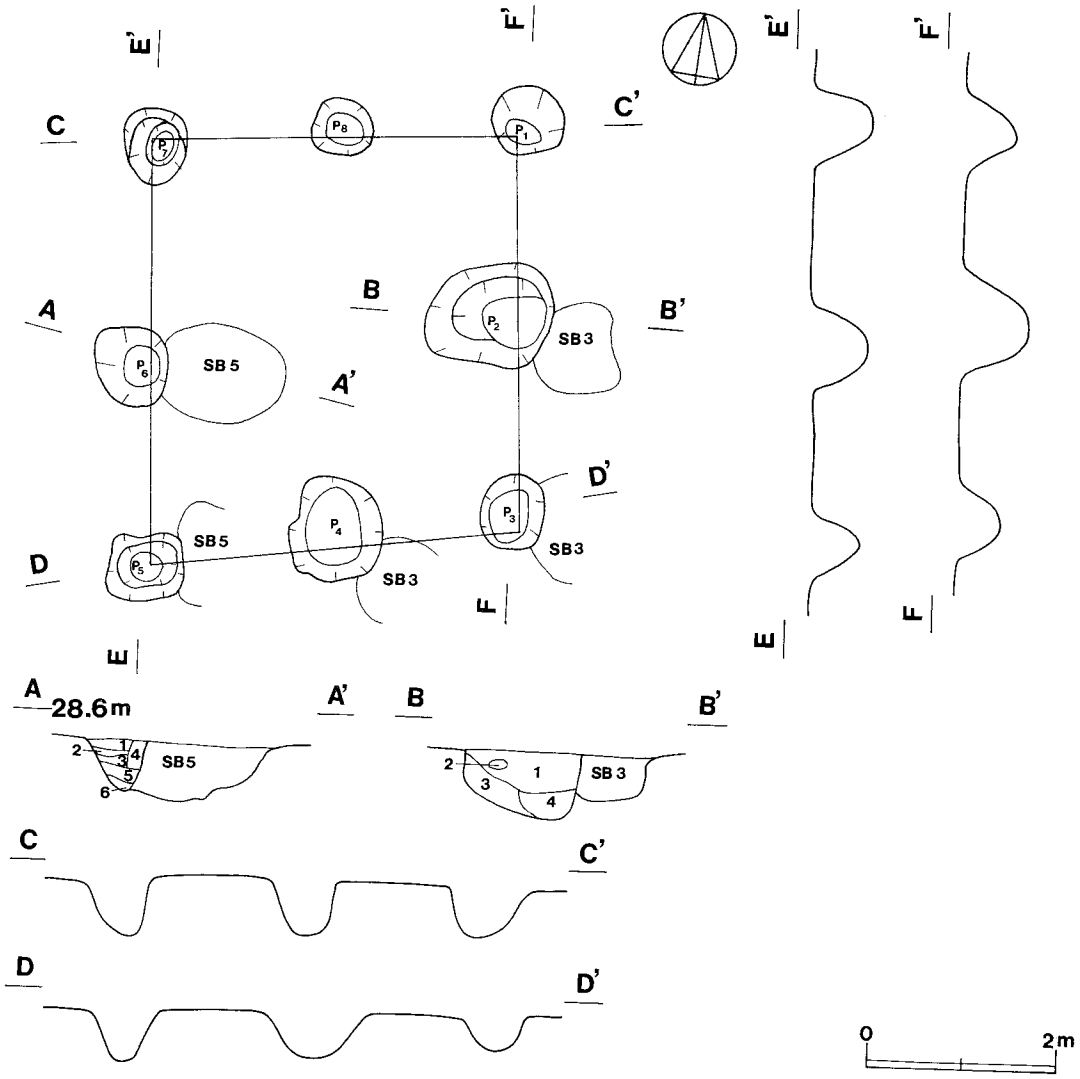
位置　調査区北部，C2h4区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の東部は第11号掘立柱建物跡の西部と重複している。本跡の全域は第3号掘立柱建物跡の東部を，南部は第5号掘立柱建物跡の北西コーナー付近をそれぞれ掘り込んでいる。

長軸方向　N-7°-W。

規模　南北2間(約4.4m)，東西2間(約3.8m)の南北棟の建物で，柱間寸法は，桁行1.7～1.9m，梁行2.0～2.1mである。柱穴掘方は，長径0.7～1.3m，短径0.6～1.1mの楕円形，不定形を呈している。深さは0.4～0.6mを測り，断面形はU字状を呈している。柱痕跡は検出されていないが，柱を支えていたと考えられる粘土がP_4の底面から検出されている。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含むよく締まった褐色土及び暗褐色土を主体に，人



第12号掘立柱建物跡　土層解説（A－A′）

1　極暗褐色　ロームブロック・ローム粒子少量。
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
3　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子中量。
4　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子多量。
5　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量。
6　明　褐　色　ロームブロック・ローム粒子多量。

第12号掘立柱建物跡　土層解説（B－B′）

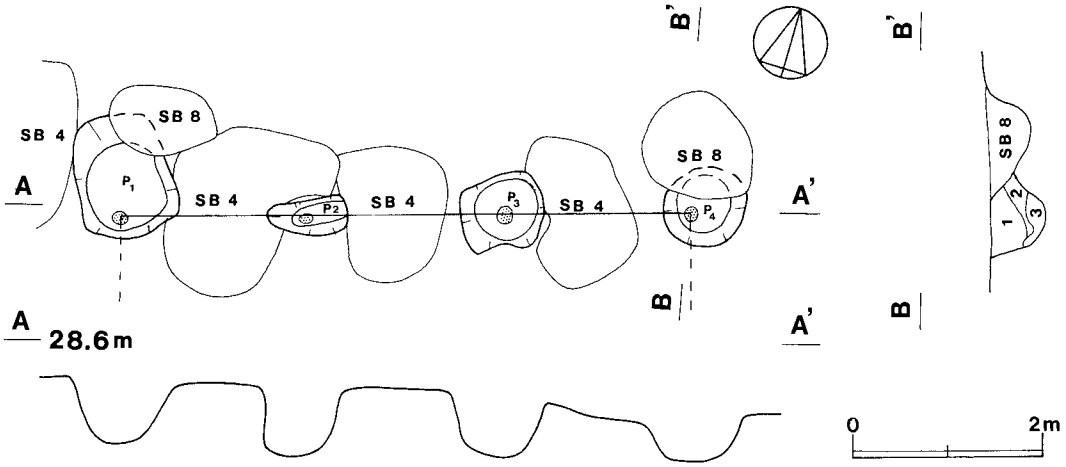
1　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量。
2　にぶい褐色　ローム粒子・炭化物少量。
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
4　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。

第209図　第12号掘立柱建物跡実測図

為的に埋め戻されている。

所見　本跡は，重複関係から第3・5号掘立柱建物跡より新しい時期に構築されているが，第11号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。出土遺物はないが古墳時代後期以前と考えられる第3号掘立柱建物跡を掘り込んでいることから，それ以降の建物跡と考えられる。

第13号掘立柱建物跡(第210図)



第13号掘立柱建物跡　土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2　暗 褐 色　ロームブロック中量。
3　極暗褐色　ロームブロック多量。

第210図　第13号掘立柱建物跡実測図

位置　調査区ほぼ中央部，D2b_3区を中心に確認されている。本跡の大半は調査区域外にのびている。

重複関係　本跡の柱穴は第4号掘立柱建物跡の南側の柱穴及び第8号掘立柱建物跡の南側の柱穴と重複しており，第8号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

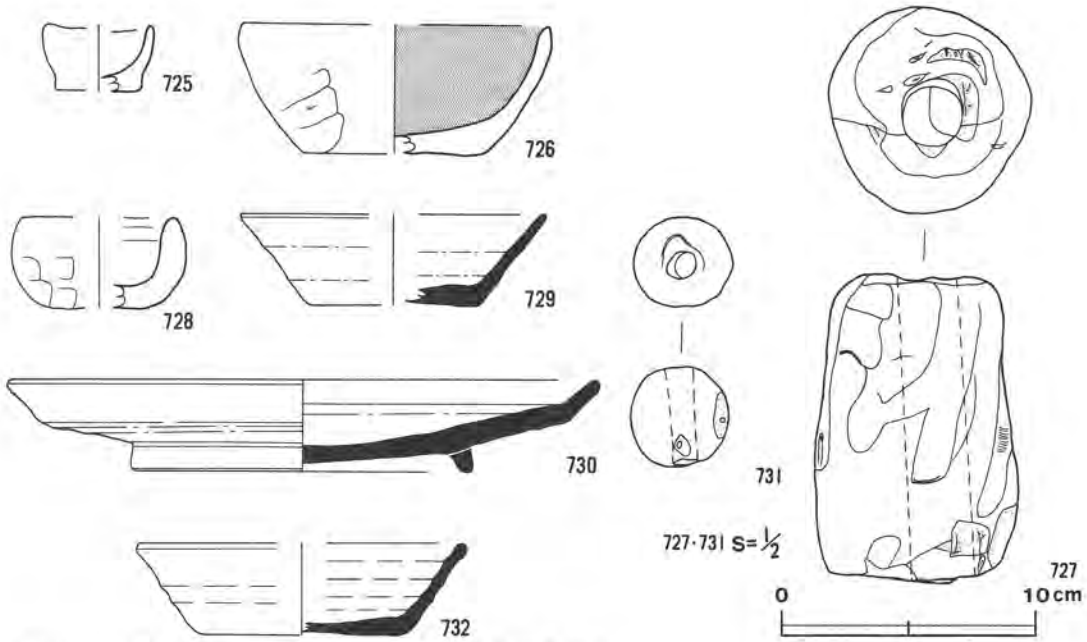
長軸方向　N-10°-W。

規模　東西3間(約6.2m)の部分だけが検出されている。柱間寸法は，1.8～2.0mである。柱穴掘方は，長径0.8～1.0m，短径0.4～1.0mの円形，不定形を呈している。深さは0.5～0.7mを測り，断面形はU字状を呈している。柱痕跡は検出されていないが，P_1～P_4の底面から粘土が検出されており，その上に柱を支えていたものと考えられる。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土で人為的に埋めもどされ，よく締まっている。

所見　本跡の大半は，南側の調査区域外にのびているものと考えられ，当遺跡から検出された他

の掘立柱建物跡から判断して，東西3間の南北2間ないし5間の建物跡と思われる。重複関係から第8号掘立柱建物跡より古い時期に構築されているが，第4号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。出土遺物はないが古墳時代後期以前と考えられる第8号掘立柱建物跡に掘り込まれていることから，それ以前の建物跡と考えられる。



第211図　第1～3・7・8号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第211図 725	手捏土器	A［4.0］ B 2.6 C［3.0］	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P533 20% P_8覆土
726	坏 土師器	A［12.0］ B 5.1 C［7.2］	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	底部及び体部外面手持ちヘラ削り。体部内面黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P530 20% P_{14}覆土

図版番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
727	管状土錘	8.1	5.4	—	17.0	(227.5)	80	覆土	DP151

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第211図 728	手捏土器	A［5.8］ B 3.6	体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P534 30% P_{10}覆土

第 3 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第211図 729	坏 須　恵　器	A [12.0] B　3.6 C [6.6]	平底。体部は中位まで外傾して立ち上がった後，僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り後，ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P536　30% P_{12}覆土

第 7 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第211図 730	盤 須　恵　器	A　22.9 B　3.7 D　13.4 E　1.0	底部は中央が下がり，皿状を呈し「ハ」の字状に開く高台がつく。口縁部は体部から外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台張り付け後，ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	P535　80% 覆土

図版番号	器　　種	法　量　(cm)			孔　径 (mm)	重　量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備　　考
		最大長	最大幅	最大厚					
731	球状土錘	2.7	2.7	---	8.0	(15.1)	90	覆　土	DP152

第 8 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第211図 732	坏 須　恵　器	A [12.8] B　3.6 C [8.0]	平底で中央部は器厚を減ずる。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	P529　30% P_{11}覆土

第 4 節　土坑

当調査区からは，調査区の北部を中心に多数の土坑が検出されている。調査当初，土坑として番号を付した遺構数は計183基を数えるが，調査及び整理の過程で掘立柱建物跡の柱跡として整理したものや，芋穴等の明らかに近・現代に属する掘り込み及び木根痕と判断したものを除いて，最終的な土坑数は45基である。ここでは，45基の土坑のうち，縄文時代の陥し穴と考えられる土坑6基について記述することとし，残る土坑については，その他の土坑として一覧表に記載した。 なお，土坑番号は調査当初に付した番号である。

第 1 号土坑(第212図)

位置　調査区の北東部，B3h_2区に確認されている。

規模と平面形　長径1.62m，短径1.18mの楕円形を呈し，深さ1.82mを測る。

長径方向　N-0°。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面　楕円形を呈し，平坦である。

覆土　ロームブロックを多量に含む暗褐色土で人為的に埋め戻されている。

遺物　覆土中層から下層にかけて,733～739の縄文式土器片と流れ込んだものと考えられる740の不明石製品が出土している。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物等から縄文時代前期以降の陥し穴で，調査区の東側から入り込む小支谷を意識して構築されたものと考えられる。

第7号土坑(第212図)

位置　調査区の北部，B2j_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南東部は第7号住居跡の北西部に，北西部は第14号土坑に掘り込まれ，本跡の上面には第41号住居跡が構築されている。

規模と平面形　長径1.82m，短径1.42mの楕円形を呈し，深さ1.58mを測る。

長径方向　N-65°-W。

壁面　北西壁の上面は第14号土坑に掘り込まれている。南東壁は外傾して立ち上がり，中位で段をなしている。その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

底面　楕円形を呈し，ほぼ平坦である。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層から土師器の高台付坏・甕片が29点，須恵器の坏・盤片がそれぞれ1点ずつ，覆土下層から縄文式土器片が4点出土している。

所見　本跡は，重複関係から第41号住居跡及び第14号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から縄文時代前期の陥し穴で，調査区の東側から入り込む小支谷を意識して構築されたものと考えられる。

第21号土坑(第212図)

位置　調査区の北東部，D2a_9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東部は第33号土坑に，中央部付近は第3号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長径1.58m，短径0.90mの楕円形を呈し，深さ2.62mを測る。

長軸方向　N-30°-W。

壁面　北東側の壁は第33号土坑に掘り込まれ検出されていない。下位で外傾，中位から上位にかけてはほぼ垂直に立ち上がっている。

底面　楕円形を呈し，凸凹している。

覆土　ロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土及び暗褐色土で，人為的に埋め戻されている。

遺物　覆土上層から，土師器の坏・甕片が17点，須恵器の坏・甕片が9点出土している。

所見　出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ，重複関係から第33号土坑及び第3号溝より古い時期に構築されている。本跡に伴う遺物は出土していないが，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴で，東側から入り込む小支谷を意識して構築されたものと考えられる。

第45号土坑（第213図）

位置　調査区の南西部，E1f6区に確認されている。

重複関係　本跡の上面には，第57・58号住居跡が構築されている。

規模と平面形　長径1.44m，短径0.96mの楕円形を呈し，深さ2.12mを測る。

長径方向　N-87°-E。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面　楕円形を呈し，ほぼ平坦である。

覆土　ロームブロック，ローム粒子混じりの褐色土及び暗褐色土で人為的に埋めもどされている。

遺物　覆土上層から，土師器の皿・甕片が18点出土している。

所見　出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ，重複関係から第57・58号住居跡より古い時期に構築されており，本跡に伴う遺物は出土していないが，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第56号土坑（第213図）

位置　調査区の北東部，C2g9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南東部は，第7号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長径1.58m，短径0.78mの楕円形を呈し，深さ1.90mを測る。

長径方向　N-11°-W。

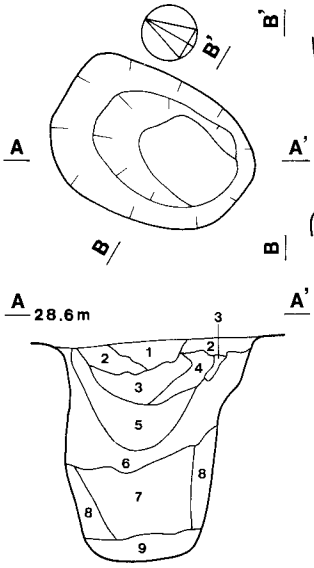
壁面　東壁は外傾して，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

底面　楕円形を呈し，ほぼ平坦である。

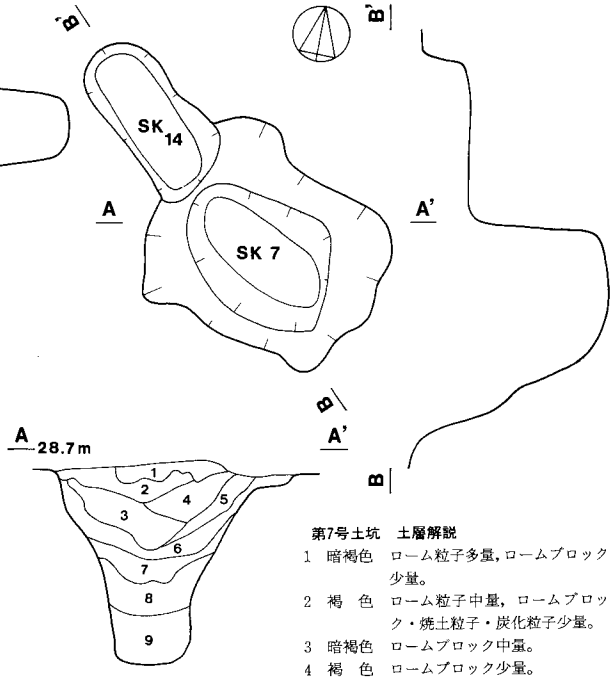
覆土　ロームブロックを多量に含む褐色土で，人為的に埋め戻されている。

遺物　覆土中から，流れ込みと考えられる土師器の坏・甕片が66点，須恵器の坏・甕片が16点出土している。

所見　本跡は，重複関係から第7号掘立柱建物跡より古い時期に構築されている。本跡に伴う遺物は出土していないが，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴で，調査区の東側から入り込む小支谷を意識して構築されたものと考えられる。



SK 1



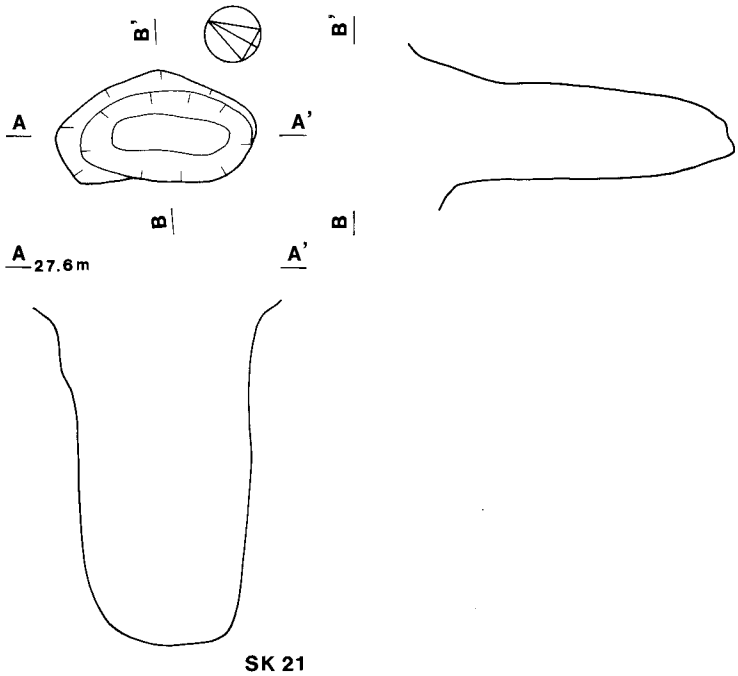
SK7·14

第1号土坑　土層解説

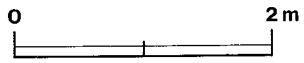
1　褐　色　ローム粒子中量。
2　暗褐色　ローム粒子多量。
3　暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック多量，炭化物少量。
4　暗褐色　ローム粒子中量。
5　暗褐色　ローム粒子・ローム粒子多量。
6　暗褐色　ローム粒子多量。
7　暗褐土　ローム粒子中量。
8　暗褐色　ローム粒子・ローム粒子中量。
9　褐　色　ローム粒子中量。

第7号土坑　土層解説

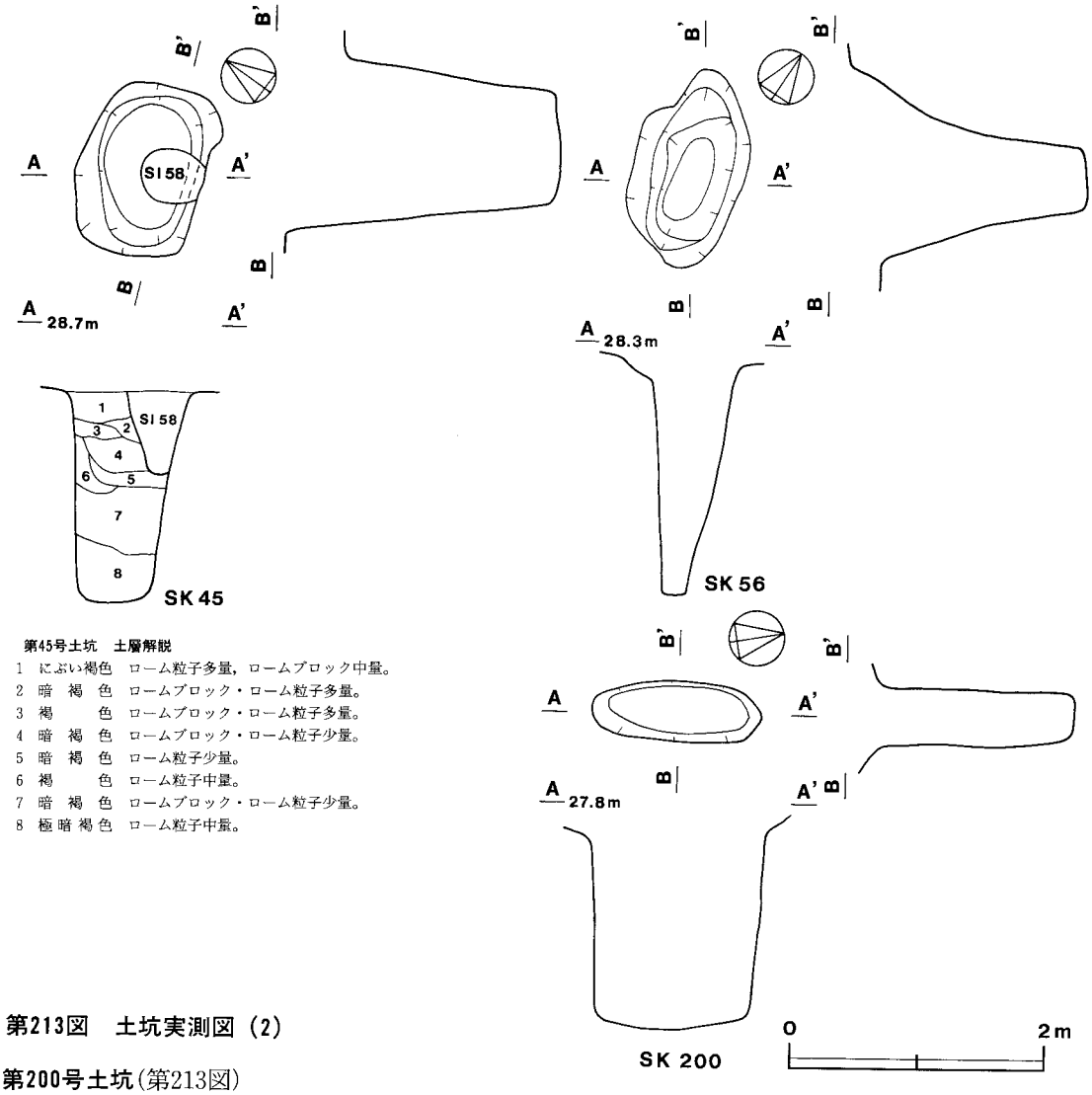
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム粒子少量。
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
3　暗褐色　ローム粒子中量。
4　褐　色　ローム粒子少量。
5　暗褐色　ローム粒子多量。
6　暗褐色　ローム粒子中量。
7　黒褐色　ローム粒子多量，ローム粒子少量。
8　黒褐色　ローム粒子中量，ローム粒子少量。
9　褐　色　ローム粒子中量。



SK 21



第212図　土坑実測図（1）



第45号土坑　土層解説

1　にぶい褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
2　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子多量。
3　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子多量。
4　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子少量。
5　暗　褐　色　ローム粒子少量。
6　褐　　色　ローム粒子中量。
7　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子少量。
8　極暗褐色　ローム粒子中量。

第213図　土坑実測図（2）

第200号土坑（第213図）

位置　調査区の南西部，E2c3区を中心に確認されている。

規模と平面形　長径1.40m，短径0.48mの楕円形を呈し，深さ1.52mを測る。

長軸方向　N-12°-E。

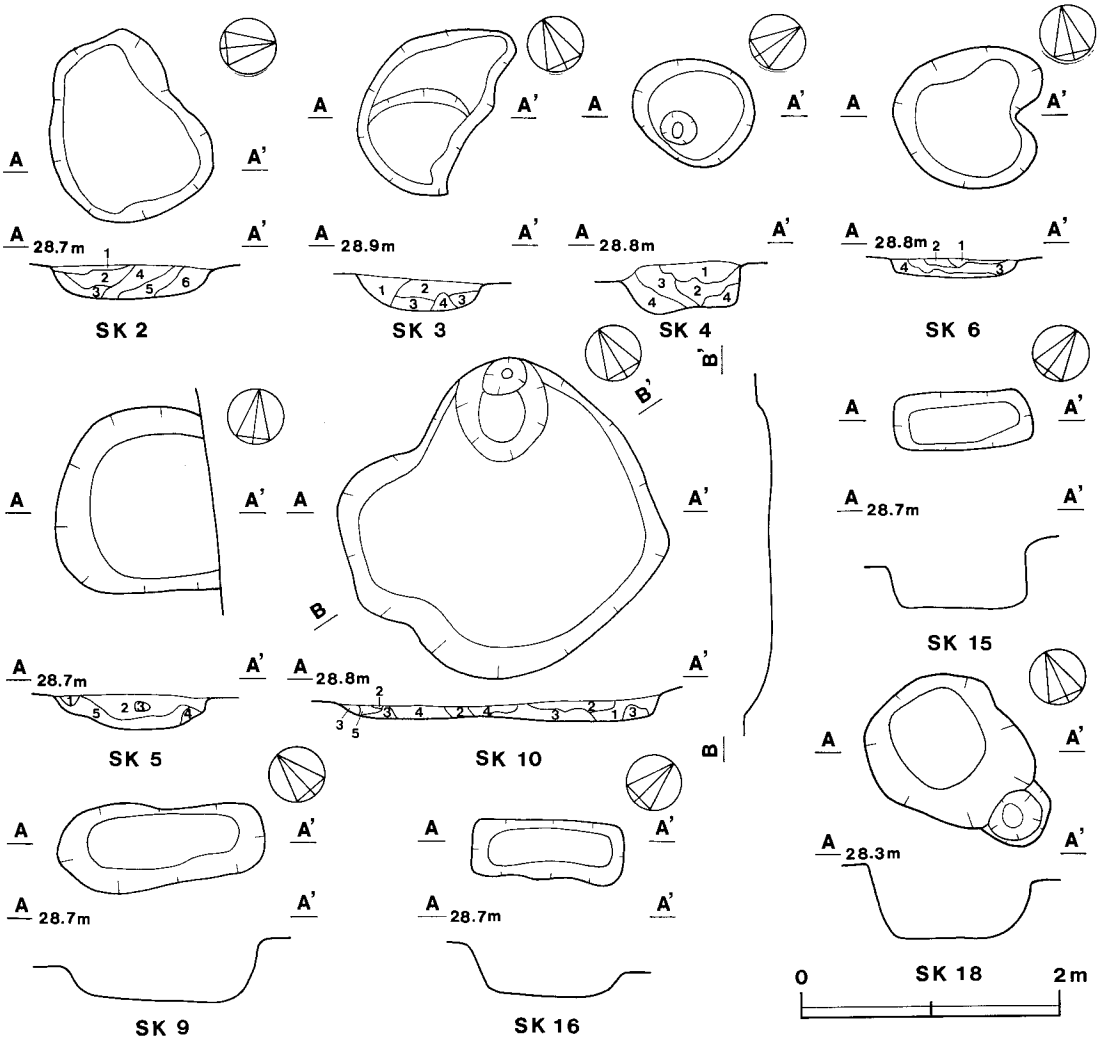
壁面　ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面　楕円形を呈し，皿状に窪んでいる。

覆土　多量のロームブロック，ローム粒子に少量の焼土粒子を含む褐色土及び暗褐色土で，人為的に埋め戻されている。

遺物　覆土上層から，土師器の坏片1点，須恵器の甕・蓋片が3点出土している。

所見　出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ，本跡に伴う遺物は出土していない。遺構の形態等から縄文時代の陥し穴で，東側から入り込む小支谷を意識して構築されたものと考えられる。



第2号土坑　土層解説

1 明　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2 褐　　色　ロームブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3 暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4 にぶい褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
5 褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
6 明　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。

第4号土坑　土層解説

1 明　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2 にぶい褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3 明　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
4 明　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量。

第6号土坑　土層解説

1 褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量。
2 明褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化粒子少量。
3 明褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
4 明褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。

第3号土坑　土層解説

1 明褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2 褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
3 褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
4 褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。

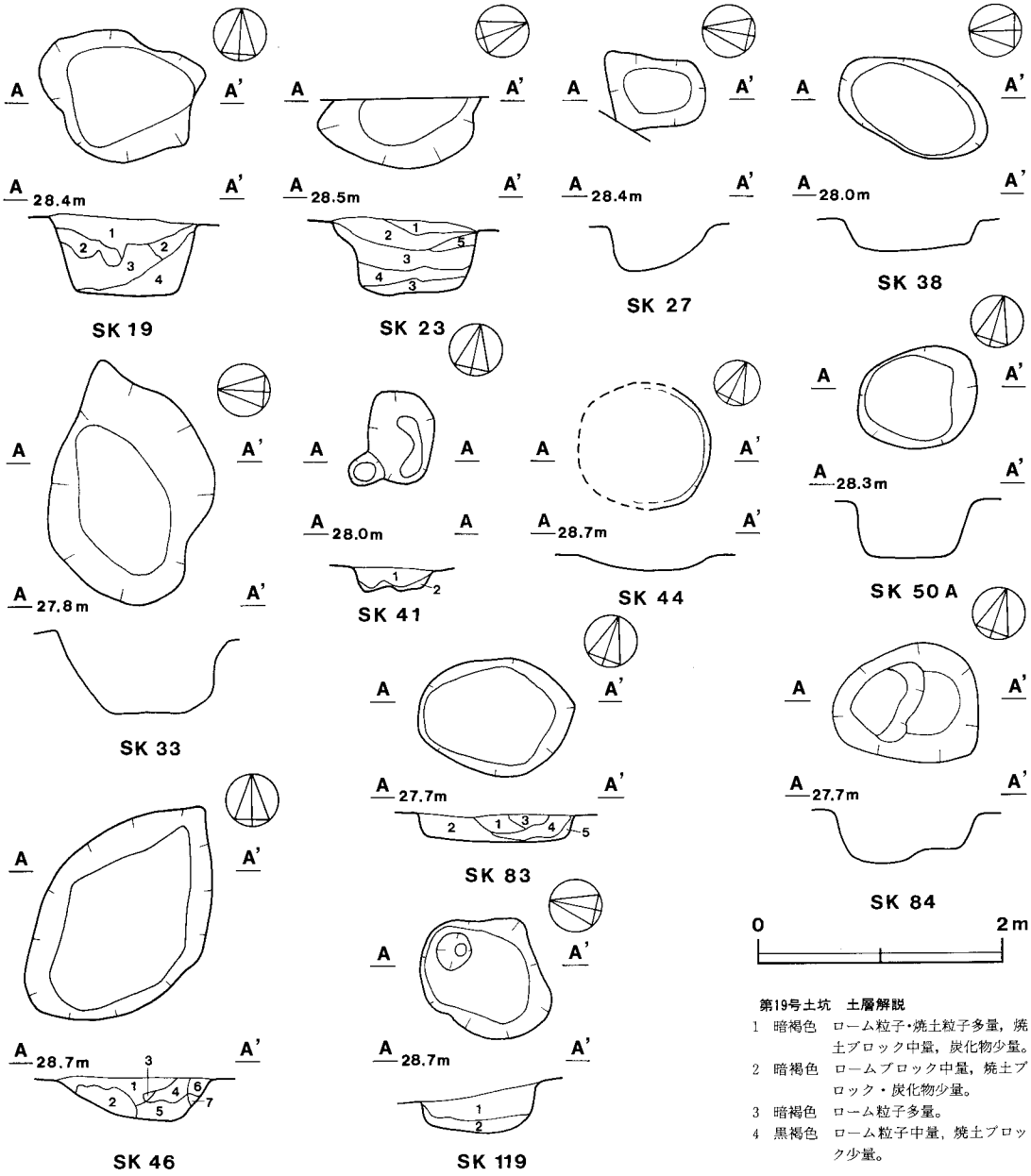
第5号土坑　土層解説

1 暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2 褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量。
3 にぶい褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4 明　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
5 褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。

第10号土坑　土層解説

1 暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
2 にぶい褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
3 橙　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
4 明　褐　色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
5 褐　　色　ローム粒子・炭化粒子少量。

第214図　土坑実測図（3）



第19号土坑　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土ブロック中量，炭化物少量。
2　暗褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量。
3　暗褐色　ローム粒子多量。
4　黒褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量。

第23号土坑　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・ローム粒子多量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量。
3　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量。
4　褐　色　ロームブロック多量。
5　暗褐色　ロームブロック多量。

第41号土坑　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック多量。
2　暗褐色　ロームブロック・ローム粒子多量，炭化物少量。

第46号土坑　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
2　黒褐色　ロームブロック・ローム粒子少量。
3　黒褐色　ローム粒子多量。
4　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量。
5　褐　色　ローム粒子多量。
6　褐　色　ローム粒子少量。
7　褐　色　ローム粒子多量。

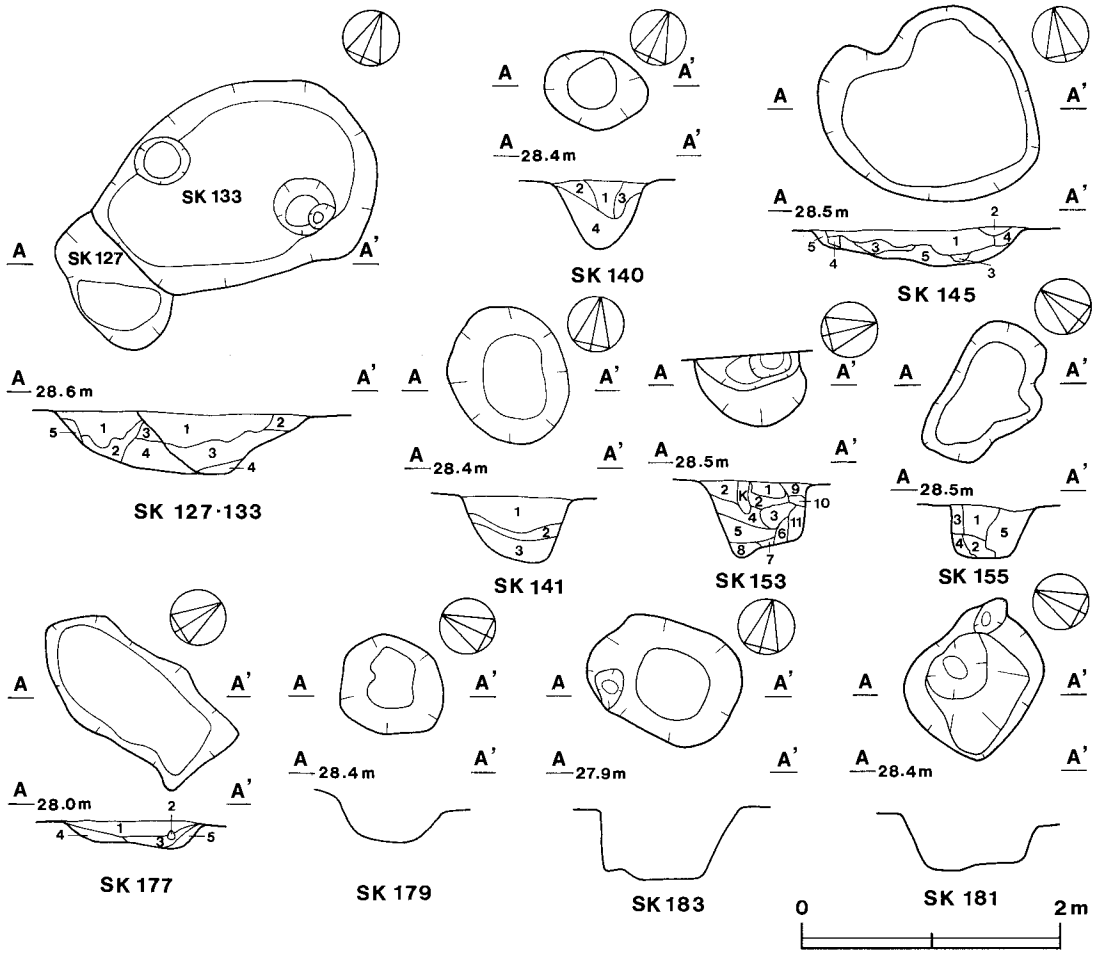
第119号土坑　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
2　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。

第83号土坑　土層解説

1　暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量。
3　暗褐色　ロームブロック中量。
4　黒褐色　ロームブロック多量。
5　明褐色　ローム粒子少量。

第215図　土坑実測図（4）



第127号土坑　土層解説

1　暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子中量。
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム ブロック少量。
3　暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子少量。
4　明褐色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量。
5　褐　　色　ローム粒子中量，ローム ブロック少量。

第133号土坑　土層解説

1　暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子中量。
2　褐　　色　ローム ブロック・ローム粒子中量。
3　褐　　色　ローム ブロック・ローム粒子多量。
4　明褐色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量。

第140号土坑　土層解説

1　極暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム ブロック少量。
3　褐　　色　ローム ブロック・ローム粒子中量。
4　暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子少量。

第141号土坑　土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム ブロック少量。
2　極暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。
3　褐　　色　ローム ブロック・ローム粒子多量。

第145号土坑　土層解説

1　極暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子少量。
2　黒褐色　ローム粒子少量。
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム ブロック少量。
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量。
5　褐　　色　ローム ブロック・ローム粒子中量。

第155号土坑　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量。
3　褐　　色　ローム ブロック中量，ローム粒子少量。
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム ブロック少量。
5　暗褐色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量。

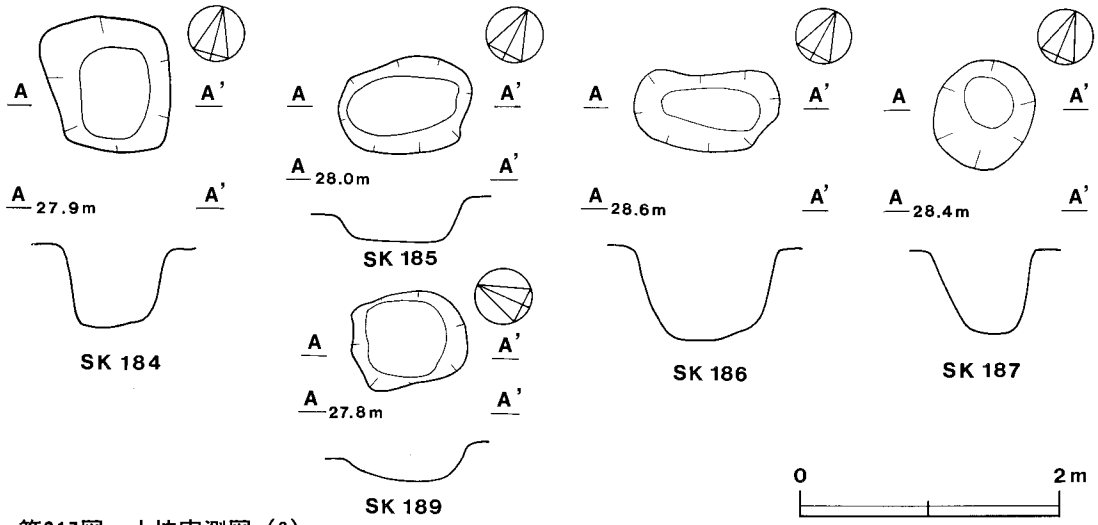
第153号土坑　土層解説

1　褐　　色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム ブロック・焼土粒子少量。
3　褐　　色　ローム粒子多量，ローム ブロック少量。
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
5　褐　　色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量。
6　褐　　色　ローム粒子多量，ローム ブロック少量。
7　褐　　色　ローム粒子中量，ローム ブロック少量。
8　褐　　色　ローム ブロック中量，ローム粒子少量。
9　暗褐色　ローム粒子中量。
10　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。
11　褐　　色　ローム粒子多量，ローム ブロック中量，焼土粒子少量。

第177号土坑　土層解説

1　暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　明褐灰色　ローム粒子少量。
3　暗褐色　ローム ブロック・ローム粒子中量。
4　褐　　色　ローム ブロック・ローム粒子中量。
5　褐　　色　ローム ブロック・ローム粒子少量。

第216図　土坑実測図（5）



第217図　土坑実測図（6）

＜拓影図解説＞

733～738は胎土に多量の繊維を含んでいる。733,737は口縁部片で口唇部断面は角頭状を呈している。いずれも口唇部にキザミ目が付されている。734～736,738,742は胴部片で，734は内・外面に，735は外面に貝殻条痕文が施されている。736は外面に細沈線が斜めに施され，内面はよく研磨されている。738及び742は，単節ＲＬとＬＲで羽状縄文が施されている。739は口縁部片で，外面に強いナデが施され，内面には丁寧なナデが施されている。

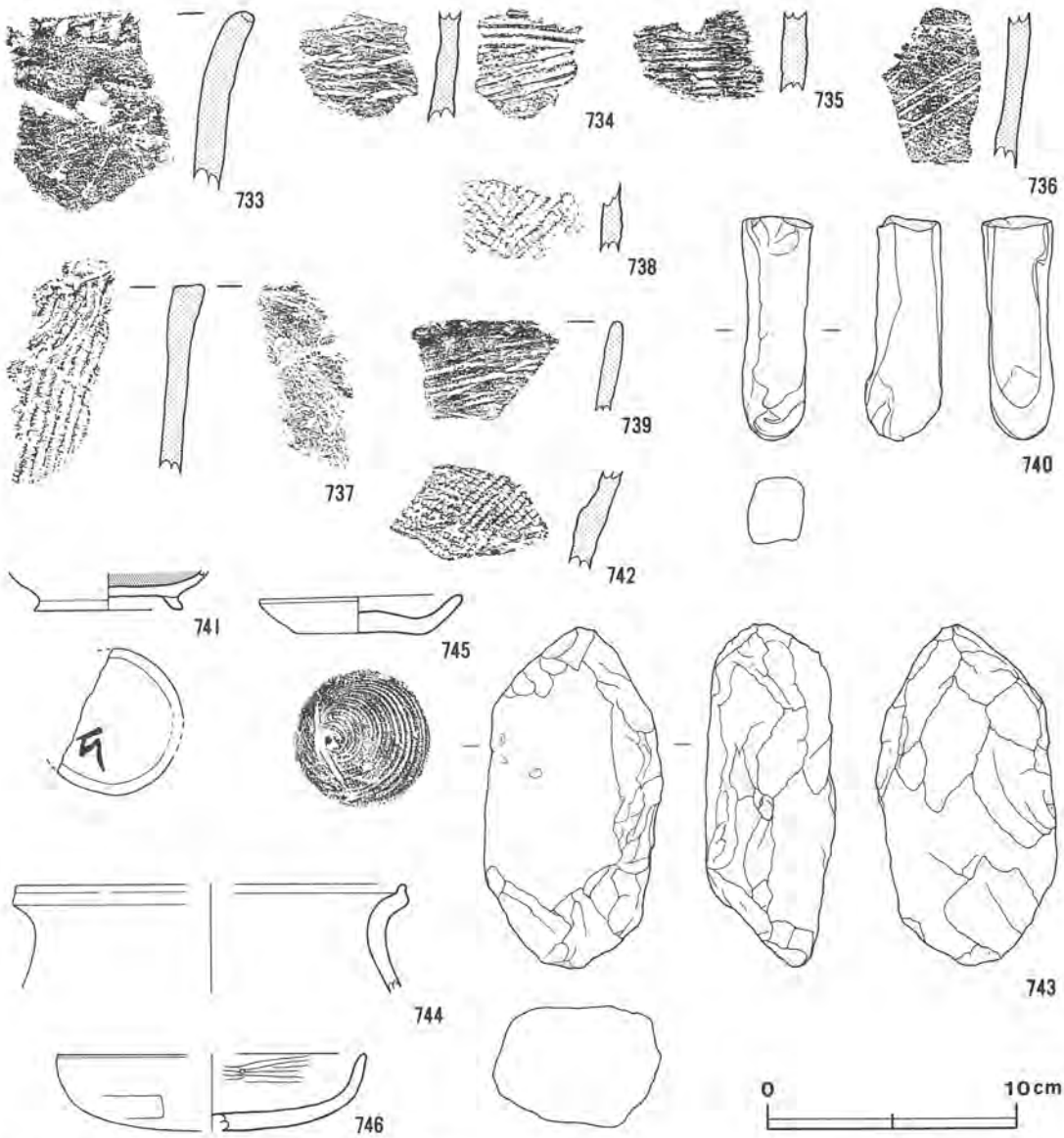
第１号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第218図 740	不明石製品	(9.1)	2.9	3.2	---	(107.0)	30	覆土	Q26 流紋岩

第７号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第218図 741	高台付坏 土師器	B (1.5) D 6.0 E 0.5	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台がつく。	底部高台貼り付け後，ナデ。体部内面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P525 30% 覆土 墨書「万」

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
743	不明石製品	13.8	7.3	5.2	---	727.2	100	覆土	Q27 礫岩



第218図　土坑出土遺物実測・拓影図（1）

第21号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第218図 744	甕 土　師　器	A［15.4］ B（ 4.4）	頸部は「く」の字状に外反して立ち上がる。口縁部を上方につまみ出す。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P528　10% 覆土

第45号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第218図 745	皿 土　師　器	A　7.9 B　1.6 C　5.2	平底で内側中央部は盛り上がる。体部は外傾する。	底部回転糸切り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P531　100% 覆土

第56号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第218図 746	坏 土師器	A [12.4] B 3.1	丸底。体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は尖る。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P532 20% 覆土

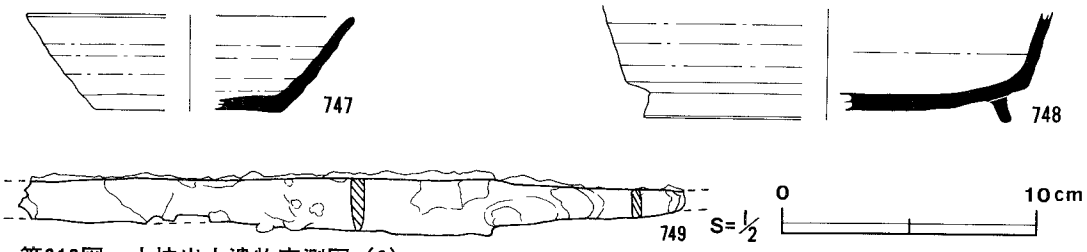
第6号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 747	坏 須恵器	A [12.8] B 3.8 C [7.4]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P524 20% 覆土

第18号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 748	高台付坏 須恵器	B (4.4) D [14.4] E 1.0	底部は皿状を呈し，「ハ」の字状状に開く高台がつく。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・礫 褐灰色 普通	P527 30% 覆土

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
749	刀子	(17.6)	(1.4)	0.4	---	(31.7)	60	覆土	M35



第219図　土坑出土遺物実測図（2）

表3　土坑一覧表（第214～217図）

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) 長径	短径	深さ	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
2	C3b$_1$	N-63°-E	不整楕円形	1.47	1.13	0.37	緩斜	平坦	自然	土師器片6点(坏,甕) 須恵器片9点(甕)	
3	C3a$_1$	N-60°-E	不整楕円形	1.49	0.89	0.26	緩斜	平坦	人為		
4	C2a$_0$	N-50°-E	楕円形	0.95	0.80	0.55	垂直	凸凹	人為	土師器片9点(坏,甕)	
5	B2j$_0$	N-87°-E	不整楕円形	1.83	1.45	0.37	緩斜	凸凹	自然		SI-8と重複
6	C2a$_0$	N-65°-E	不整楕円形	1.24	1.07	0.14	垂直	平坦	自然	須恵器片1点(坏)	
9	B2j$_8$	N-68°-W	不整楕円形	1.55	0.55	0.45	外傾	平坦	自然	土師器71点(坏,甕)	SI-41と重複
10	C2a$_7$	N-57°-W	不整円形	2.60	2.54	0.21	外傾	平坦	人為	土師器片68点(坏,甕) 須恵器片5点(坏,甕) 管状土錘1点	SI-41と重複
14	B2i$_9$	N-55°-E	長方形	1.32	0.55	0.40	外傾	平坦	自然		SI-41と重複
15	B2i$_8$	N-49°-E	長方形	1.04	0.45	0.45	垂直	平坦	自然	土師器片4点(坏,甕) 須恵器片2点(甕)	SI-41と重複

16	B2i$_8$	N-50°-E	長方形	1.17	0.46	0.38	外傾	平坦	自然		SI-41と重複
18	C2b$_0$	N-20°-W	不整楕円形	1.58	1.04	0.60	垂直	平坦	自然	土師器片32点(坏,甕) 須恵器片23点(甕,蓋)	
19	C2b$_9$	N-52°-W	不整楕円形	1.40	1.00	0.62	垂直	平坦	自然	土師質土器7点(皿)	
23	D2b$_1$	N-10°-E	不整楕円形	1.31	0.82	0.52	垂直	平坦	自然	土師器片10点(坏,甕) 須恵器片3点(甕) 陶器片1点	SI-5と重複
27	D2a$_1$	N-25°-E	不整楕円形	0.97	0.50	0.38	外傾	平坦	自然	土師器片4点(坏,甕)	SI-5と重複
33	D2a$_8$	N-73°-E	不整楕円形	2.08	1.88	0.67	外傾	凸凹	自然		SI-39,SB-1,SK-21と重複
38	C2j$_4$	N-25°-E	楕円形	1.25	0.68	0.52	外傾	平坦	自然	土師器片24点(坏,甕) 須恵器片1点(甕)	SI-32・34と重複
41	C2h$_8$	N-32°-E	楕円形	0.78	0.42	0.15	外傾	凸凹	自然		SI-35と重複
44	E1f$_7$	N-70°-W	円形	1.10	1.05	0.11	緩斜	平坦	自然	土師器片2点(坏,甕) 須恵器片1点(坏)	SI-57と重複
46	E1g$_6$	N-30°-E	不整楕円形	2.15	1.35	0.46	外傾	平坦	人為		SI-55・57と重複
50A	C2h$_9$	N-35°-E	不整楕円形	1.05	0.90	0.47	垂直	平坦	自然		SI-35・42と重複
83	C2h$_9$	N-65°-E	楕円形	1.30	1.00	0.24	垂直	平坦	自然	土師器片32点(坏,甕) 須恵器片6点(甕)	SI-42と重複
84	C2h$_9$	N-73°-E	不整楕円形	1.17	1.02	0.30	外傾	凸凹	自然	土師器片17点(坏,甕) 須恵器片5点(坏)	SI-35・42と重複
119	C2g$_5$	N-32°-E	不整楕円形	1.18	1.00	0.40	垂直	平坦	自然		SI-23と重複
127	C2g$_3$	N-58°-W	不整楕円形	1.15	0.75	0.45	緩斜	平坦	人為		SI-28,SK-133と重複
133	C2g$_3$	N-48°-E	不整楕円形	2.20	1.52	0.46	緩斜	平坦	自然		SI-28,SK-127と重複
140	C2i$_5$	N-80°-E	楕円形	0.82	0.64	0.60	外傾	平坦	人為		
141	C2i$_5$	N-23°-W	楕円形	1.10	0.90	0.53	外傾	平坦	自然		
145	C2g$_6$	N-34°-E	不整楕円形	1.80	1.54	0.28	緩斜	凸凹	人為		
153	C2j$_2$	N-10°-E	不整楕円形	0.80	0.60	0.57	外傾	凸凹	人為		
155	C2i$_2$	N-87°-E	不整楕円形	1.16	0.74	0.44	垂直	平坦	人為		
177	C2i$_4$	N-72°-E	長方形	1.62	0.80	0.22	緩斜	凸凹	自然		SI-32,SB-9と重複
179	C2g$_8$	N-15°-E	楕円形	0.89	0.75	0.36	緩斜	平坦	自然		
181	C2h$_8$	N-75°-W	不整楕円形	1.10	0.85	0.45	外傾	凸凹	自然	土師器片7点(坏,甕) 須恵器片1点(盤)	SI-35と重複
183	C2i$_9$	N-83°-W	不整楕円形	1.24	0.90	0.59	外傾	凸凹	自然		SI-35と重複
184	C2a$_7$	N-28°-W	不整円形	1.11	0.93	0.67	外傾	平坦	自然		SI-35と重複
185	C2j$_3$	N-54°-E	楕円形	1.08	0.74	0.30	外傾	平坦	自然	土師器片1点(甕) 須恵器片1点(盤)	SI-32・33と重複
186	D2a$_2$	N-60°-E	不整楕円形	1.21	0.60	0.75	外傾	平坦	自然		SI-33と重複
187	D2a$_2$	N-0°	楕円形	0.85	0.75	0.69	外傾	平坦	自然		SI-33と重複
189	C2j$_9$	N-34°-W	楕円形	0.90	0.72	0.36	緩斜	平坦	自然	土師器片13点(坏,甕) 須恵器片7点(坏,甕) 手捏土器1点	

第5節　溝

当調査区からは，溝が3条検出されている。重複関係からいずれもその他の遺構より新しい時期に構築されたものと考えられるが，出土遺物がないためそれぞれの構築時期や性格をとらえることはできない。

第1号溝(第220図)

位置　調査区の南部，E1・F1区にかけて確認されている。本跡の両端は調査区域外にのびている。

重複関係　本跡は，$F1b_8$区で第59号住居跡の西壁中央から南壁ほぼ中央付近を，$F1c_9$区で第61号住居跡の南西コーナー付近をそれぞれ掘り込み，$E1j_5$区で第2号溝と重複している。

規模と形状　全長は約31.30mで，上幅0.50～1.34m，下幅0.22～0.90m，深さ12～34cmを測る。断面形は皿状を呈し，底面は凸凹している。

方向　$F1d_0$区から北西方向(N-50°-W)へほぼ直線的にのびている。

覆土　ロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体に，人為的に埋め戻されている。

遺物　覆土から，土師器(坏，甕)片，須恵器(坏，甕，蓋)片が極少量出土している。

所見　本跡は，平安時代前期の住居跡と思われる第59号住居跡を掘り込んでいることから，平安時代前期以降の溝と考えられる。性格及び第2号溝との新旧関係は不明である。

第2号溝(第220図)

位置　調査区の南部，E1区に確認されている。本跡の南西端は調査区域外にのびている。

重複関係　本跡は，$E1h_7$区で第55号住居跡の南東コーナー及び第56号住居跡の東コーナー付近から南コーナー付近を，$E1b_7$区で第78号住居跡の西壁をそれぞれ掘り込み，$E1j_5$区で第1号溝と重複している。

規模と形状　全長は約18.40mで，上幅1.00～1.86m，下幅0.58～1.36m，深さ8～12cmを測る。断面形は皿状を呈し，底面は凸凹している。

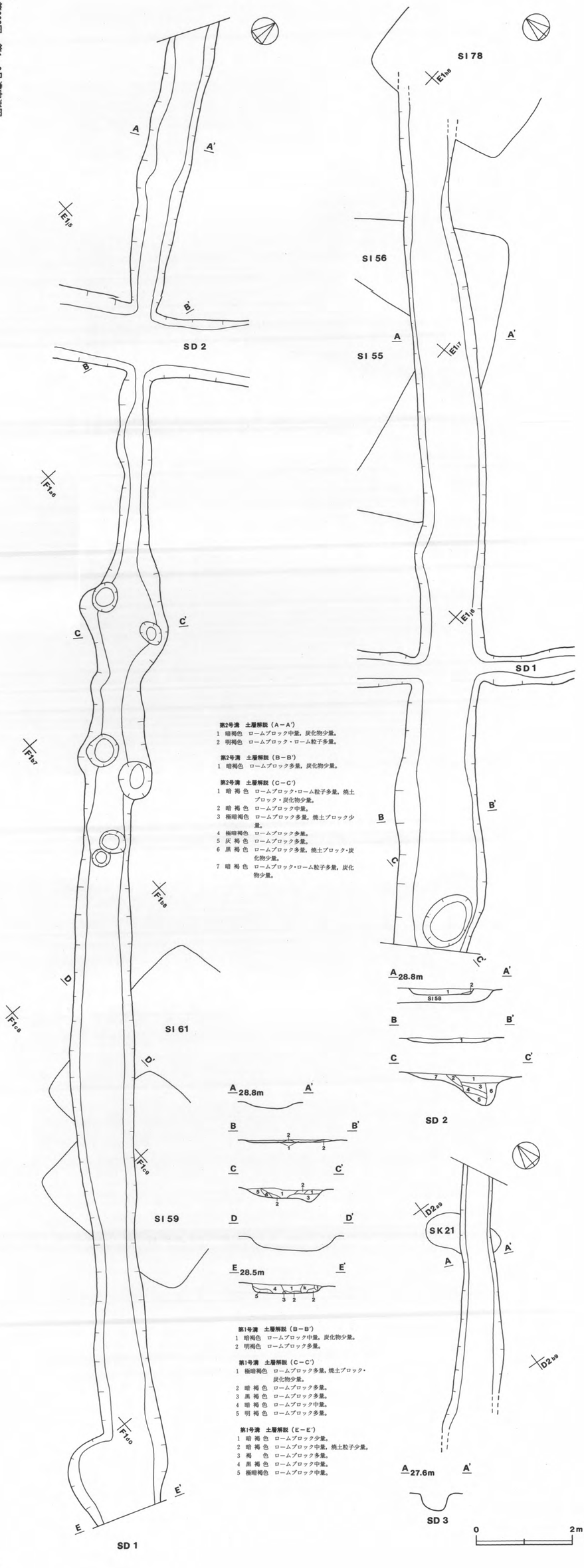
方向　$F1a_4$区から北東方向(N-55°-E)へほぼ直線的にのびている。

覆土　ロームブロックを多量に含む暗褐色土及び極暗褐色土を主体に，人為的に埋め戻されている。

遺物　覆土から，土師器(坏，甕)片，須恵器(甕)片が極少量出土している。

所見　出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ，奈良時代の住居跡と思われる第78号住居跡を掘り込んでいることから，奈良時代以降の溝と考えられる。性格及び第1号溝との新旧関係は不明である。

第220図　第1～3号溝実測図



第2号溝　土層解説（A－A'）
1　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量。
2　明褐色　ロームブロック・ローム粒子多量。

第2号溝　土層解説（B－B'）
1　暗褐色　ロームブロック多量，炭化物少量。

第2号溝　土層解説（C－C'）
1　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2　暗 褐 色　ロームブロック中量。
3　極暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量。
4　極暗褐色　ロームブロック多量。
5　灰 褐 色　ロームブロック多量。
6　黒 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
7　暗 褐 色　ロームブロック・ローム粒子多量，炭化物少量。

第1号溝　土層解説（B－B'）
1　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量。
2　明褐色　ロームブロック多量。

第1号溝　土層解説（C－C'）
1　極暗褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化物少量。
2　暗 褐 色　ロームブロック多量。
3　黒 褐 色　ロームブロック多量。
4　暗 褐 色　ロームブロック中量。
5　明 褐 色　ロームブロック多量。

第1号溝　土層解説（E－E'）
1　暗 褐 色　ロームブロック少量。
2　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子少量。
3　褐　　色　ロームブロック多量。
4　黒 褐 色　ロームブロック中量。
5　極暗褐色　ロームブロック中量。

第3号溝(第220図)

位置　調査区のほぼ中央部，D2区に確認されている。本跡の北東端は調査区域外にのびている。

重複関係　本跡は，D2a_9区で第21号土坑のほぼ中央部を掘り込んでいる。

規模と形状　全長は約5.80mで，上幅0.64～0.96m，下幅0.44～0.76m，深さ30～36cm を測る。断面形はU字状を呈し，底面は凸凹している。

方向　D2b_8区から北東方向(N-45°-E)へほぼ直線的にのびている。

覆土　自然堆積。

所見　本跡は，重複関係から縄文時代の陥し穴と思われる第21号土坑より新しい時期に構築されているが，出土遺物はなく構築時期及び性格は不明である。

第6節　遺構外出土遺物

(1)　縄文時代(第221～225図)

当調査区からは，縄文時代早期から晩期にかけての土器片が表土等から出土している。ここでは，これらの縄文式土器を一括し，時代ごとに記載することにする。

第1群　縄文時代早期の土器

第1類　無文土器

750,751は口縁部片である。口唇部断面は750が角頭状，751が丸頭状を呈する。外面はヘラ状工具による強い横位のナデが，内面は丁寧なナデが施されている。752,753は胴部片で，胎土に砂粒，石英粒を多量に含み，内面はナデ調整を施して平滑にしている。

第2類　縄文時代早期中葉の土器

a種　細い沈線文が施されている土器

754は口縁部片で，口唇部断面は外削ぎ状を呈する。口縁部に細い平行沈線文を横位に巡らせ，内面は横位のナデが施されている。755は胴上半部片で，細く鋭い平行沈線文下に，斜行する沈線を重ねた格子目状の文様が施されている。

b種　太めの沈線文が施されている土器

すべて胴部片である。756～759は太い沈線が横位に，760は2本1単位と思われる太い沈線が斜位及び縦位に，761は短沈線が横位に施されている。

第3類　縄文時代早期末葉の土器

762～765は口縁部片,766～775は胴部片で，すべて胎土に繊維が含まれている。762は口唇部断面は角頭状を呈し，内・外面に貝殻条痕文が施されている。763は口唇部に棒状工具によるキザミ目が付されている。口縁部には6条の沈線が弧状に巡らされ，その下に撚糸文が施されている。内

面には横位に貝殻条痕文が施されている。764は口唇部に細いキザミ目が付され，口縁部には撚糸文が施されている。765は口唇部に細いキザミ目が付され，内･外面に貝殻条痕文が横位に施されている。766～768は単節ＲＬとＬＲで羽状縄文が施され，内面には貝殻条痕文が施されている。769～775は内・外面に貝殻条痕文が施されている。

第２群　縄文時代前期の土器

第１類　縄文時代前期前葉の土器

本類は黒浜式に比定されるもので，胎土に多量の繊維を含んでいる。

ａ種　縄文が施されているもの

776～783は単節縄文が施されている口縁部片である。776～778は口唇部断面が角頭状を呈し，口縁部直下に単節ＲＬの回転縄文が施されているが，777の縄文は撚りが弱い。779～781は口唇部断面が内削ぎ状を呈する。779は口縁部に単節ＲＬの回転縄文が，780は撚りの弱い単節ＬＲの回転縄文が施されている。781は幅2cm程の無文帯をもち，単節ＲＬの回転縄文が施されているものと思われる。782は口唇部に細いキザミ目が付され，口縁部に単節ＲＬの回転縄文が施されている。783は口縁部に単節ＲＬの回転縄文が施され，内面は丁寧にナデられている。784～802は胴部片である。784～790は単節ＲＬの回転縄文が施されている。791～799は単節ＲＬとＬＲで羽状を構成している。800は無節Ｌが，801は無節ＲとＬが施されている。802は附加条縄文で，単節ＬＲの条と同じ方向に無節Ｒを施し，羽状を構成している。

ｂ種　撚糸文が施されているもの

803～810は1本の単軸絡条体の撚糸文が施されている。803は口縁部片で，口唇部断面は角頭状を呈する。内面には横位のナデが施されている。804,806は内面がナデ調整され，805は棒状工具によってよく磨かれている。810,808は胎土，色調から同一個体と思われる。807は単節と無節の撚糸で羽状を構成している。809は多方向に撚糸文が施されている。811，812は木目状に撚糸文が施されている。813～815は2本一対の単軸絡条体の撚糸文が施されている。

第２類　縄文時代前期末葉の土器

816は口縁部片で，口唇部断面は丸頭状を呈する。幅1cm程の無文帯をもち，三角刺突文が2段に施されている。浮島Ⅲ式に比定されるものと思われる。817,818は胎土に砂粒，礫を多量に含む同一個体片である。817は口縁部片で，短沈線が斜位に施された折り返し口縁で波状を呈する。口縁部と隆帯との間を2条の横走する沈線で区画され，区画内に刺突文が充塡されている。818は渦巻き状の沈線と細かな刺突文を2条の横走する沈線で区画している。819,820は長石・石英粒を多量に含み，同一個体と思われる。819は口縁部片で波状を呈し，Ｓ字状の突起を有する。突起及び口縁部直下に刺突文が施されている。820は断面形が「く」の字状に屈曲し，屈曲部との境に刺突

文が施されている。817～820 は大木6式またはそれに併行する時期の土器片と考えられる。

第３群　縄文時代中期の土器

821は口縁部に2条の横走する沈線を巡らす。胴部は撚りの粗い縄文施文後，2列の弧状の沈線で区画している。822,823は同一個体片である。824,825は胴部片で，824は単節ＲＬの回転縄文が，825は単節ＬＲの回転縄文が施されている。821～825は加曽利ＥⅢ式併行の土器と思われる。826,827は微隆起線で口縁部無文帯と胴部とを区画している。胴部は826が単節ＲＬ，827が単節ＬＲの回転縄文が施されている。828～830は胴部片である。828,829は単節ＬＲの回転縄文が施され,830は縦位に磨消帯を施し，区画外に単節ＲＬの回転縄文が充填されている。826～830は加曽利ＥⅣ式に比定されるものと思われる。

第４群　縄文時代後期の土器

831,832は同一個体片で，口唇部断面は角頭状を呈する。口縁部直下に隆帯を貼り付け，指頭による押圧が施されている。胴部は刺突文を地文に斜行する沈線文が施されている。加曽利Ｂ式に比定されるものと思われる。833～835は口縁部片である。833,834は口縁部直下に隆帯を有し，爪形状のキザミ目が棒状工具で付されている。胴部は単節ＲＬの回転縄文が粗に施された後，斜行する条線文が施されている。835は口縁部に瘤状突起を貼付し，横位の沈線文で区画している。区画内にはキザミ目が施されている。833～835は安行Ｉ式に比定されるものと考えられる。

第５群　縄文時代晩期の土器

836は撚りの細い単節ＬＲの回転縄文を地文に，横走する沈線文で区画されている。大洞Ｃ2式に比定されるものと考えられる。

（２）　弥生時代(第225図)

当調査区からは弥生時代の遺構は検出されていないが，弥生時代中期から後期にかけての土器片が極く少量出土している。

第１群　弥生時代中期後葉の土器

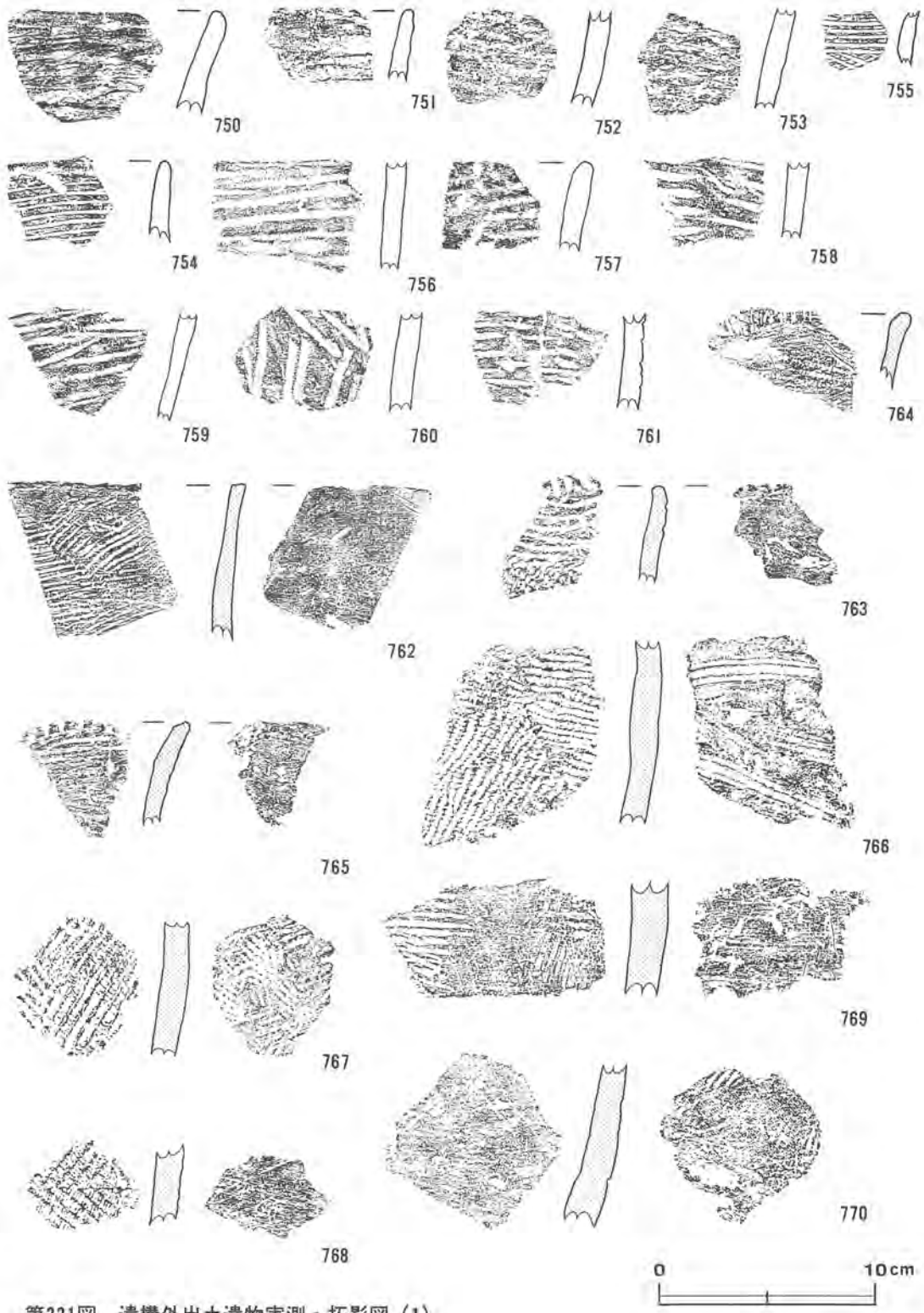
足洗式に比定されるものである。837～841は壺の頸部片である。837は平行沈線文が数段重ねられている。838,839は連続山形文が，840は山形文と撚糸文が，841は弧状の平行沈線文が施されている。842,844は胴部片で，附加条１種の縄文が施されている。

第２群　弥生時代後期初頭の土器

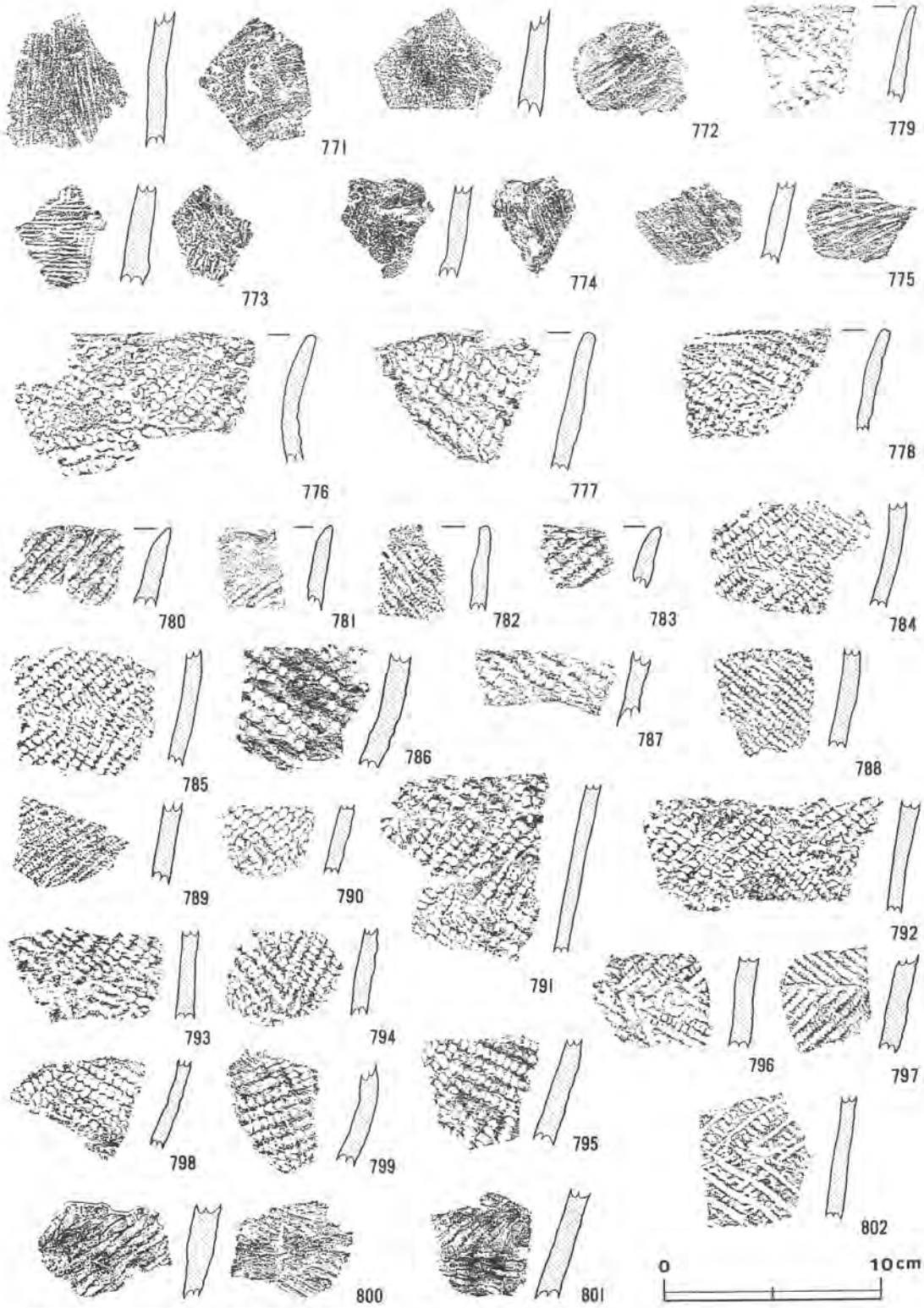
845,846は同一個体の壺の肩部片で附加条１種の縄文が施され，赤彩されている。

（３）　その他

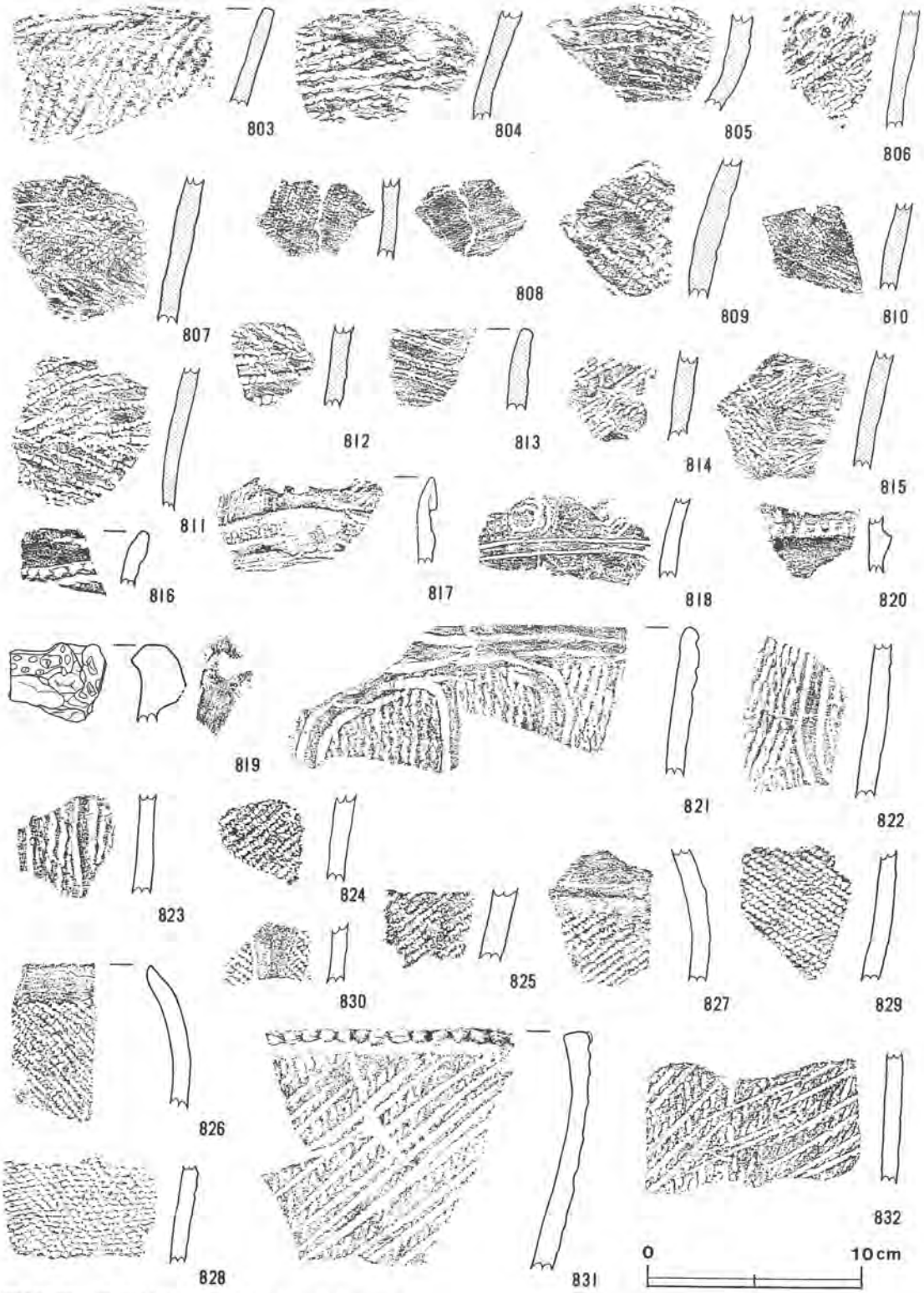
古墳時代後期から奈良・平安時代の遺物が出土している。



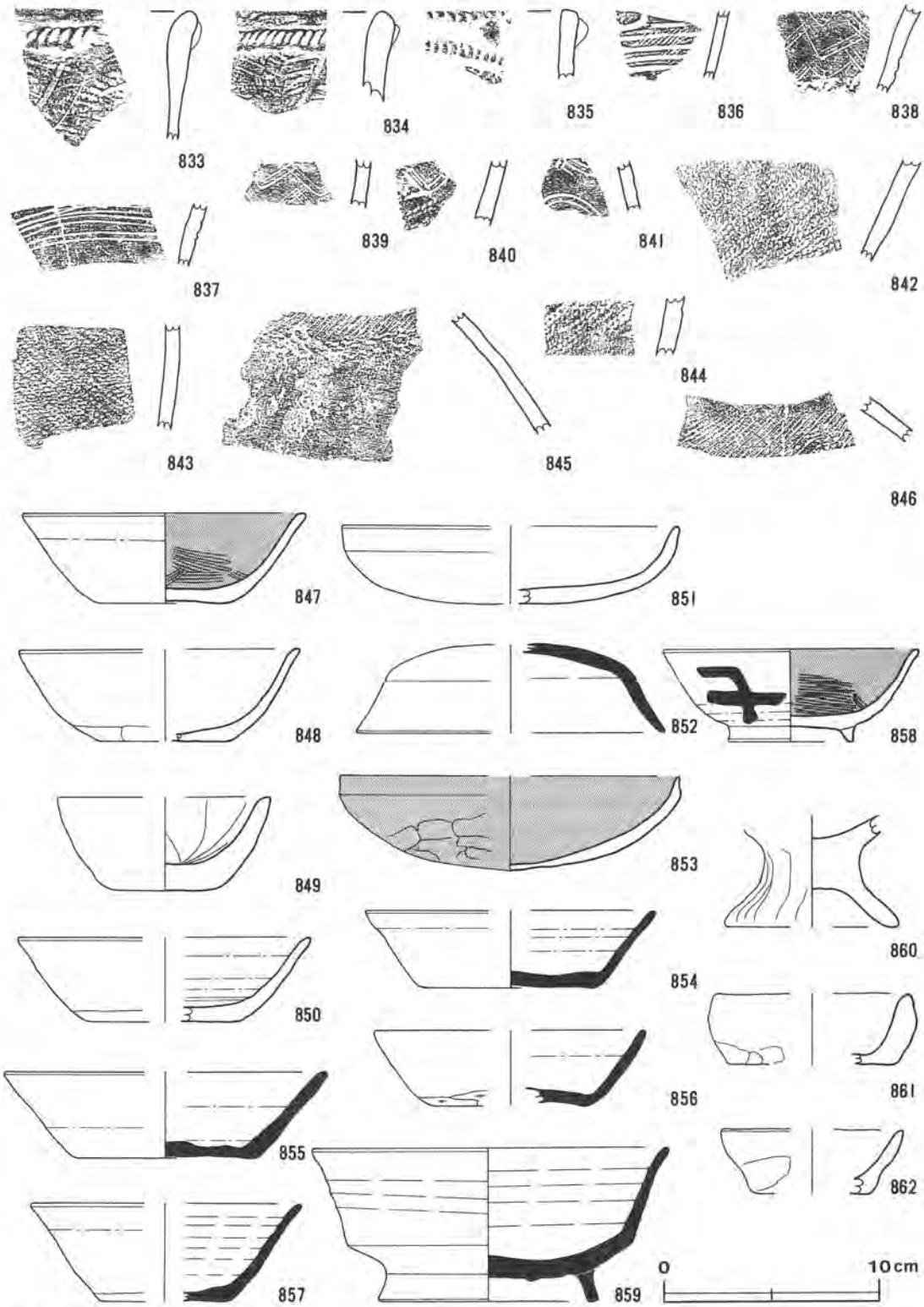
第221図　遺構外出土遺物実測・拓影図（1）



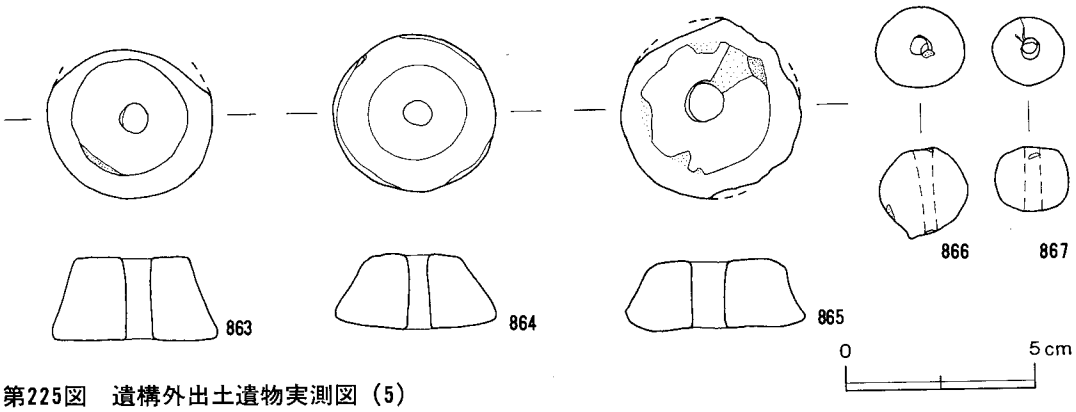
第222図　遺構外出土遺物実測・拓影図（2）



第223図　遺構外出土遺物実測・拓影図（3）



第224図　遺構外出土遺物実測・拓影図（4）



第225図　遺構外出土遺物実測図（5）

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第224・255図 847	坏 土師器	A 13.0 B 4.2 C 6.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部ナデ。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P544 90% 表採
848	坏 土師器	A 12.9 B 4.3 C [6.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P545 40% 表採
849	坏 土師器	A [9.8] B 4.4 C 4.6	平底。体部との境は不明瞭。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び体部外面摩耗。体部内面ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P541 60% グリッド
850	坏 土師器	A [13.6] B 3.9 C [7.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P547 20% 表採
851	坏 土師器	A [15.6] B 3.7	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P540 20% グリッド
852	蓋 須恵器	A [14.4] B (4.1)	天井部は丸味をもち，口縁部は「ハ」の字状に開く。	天井部手持ちヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰白色 普通	P542 20% グリッド
853	坏 土師器	A [15.8] B 4.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は短く直立する。	体部外面手持ちヘラ削り。体部内面及び口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 黒褐色 普通	P546 30% 表採
854	坏 須恵器	A [13.4] B 3.6 C [8.4]	平底。体部は外反気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P549 30% 表採
855	坏 須恵器	A [14.8] B 4.0 C [8.4]	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ナデ。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰色 普通	P550 20% 表採
856	坏 須恵器	A [12.6] B 3.5 C [7.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P537 10% グリッド

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
857	坏 須恵器	A [12.6] B 4.6 C [6.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P548 20% 表採
858	高台付坏 土師器	A 11.8 B 4.3 D 5.8 E 0.7	平底で「ハ」の字状に開く短い高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後，黒色処理。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P543 90% 表採 墨書「七」
859	高台付坏 須恵器	A 16.4 B 7.2 D 10.2 E 1.5	平底で「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，ナデ。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P539 70% グリッド
860	高坏 土師器	B (5.2) D [8.0] E 3.4	裾部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面手持ちヘラ削り。内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P551 30% 表採
861	手捏土器	A [9.0] B 3.3 C [7.6]	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P552 30% 表採
862	手捏土器	A [8.4] B 3.0 C [5.4]	体部は外傾して立ち上がる。口唇部は尖る。	体部内・外面ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P538 20% グリッド

図版番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
863	紡錘車	4.4	(4.0)	2.2	9.0	(44.3)	90	グリッド	Q28 粘板岩
864	紡錘車	4.3	4.2	2.1	7.0	34.0	100	表採	DP154
865	紡錘車	4.8	(4.7)	1.9	10.0	(39.8)	60	表採	DP155
866	球状土錘	2.4	2.4	---	6.0	9.6	100	表採	DP153
867	球状土錘	1.7	2.0	---	5.0	5.4	100	表採	DP156

第5章　考　　察

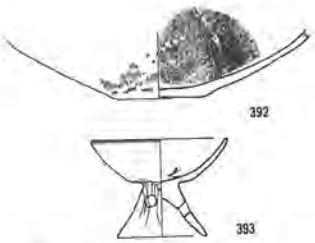
第1節　柏木古墳群における出土土器からみた住居跡の形態と集落について

柏木古墳群から検出された遺構は，出土遺物等から縄文時代，古墳時代，奈良時代，平安時代に大別できる。ここでは，土器をⅠ～Ⅺ期に区分し，各期ごとに住居跡の特徴を述べ，集落についても若干の検討を加えていくことにする。集落については，道路幅という限定された範囲内の調査結果に基づくもので，遺物及び遺構の重複関係に重点を置き，これらの時期区分を行った。縄文時代については，縄文時代早期から晩期の土器片が少量出土しているが，該期の住居跡が検出されていないことから，ここでは省いた。

1　土器の様相について

Ⅰ期(第226図)

本期に該当する遺物は，第45号住居跡から出土した土師器の壺の底部片と高坏の2点である。壺は，底部内・外面にハケ調整が施されている。高坏は，脚部が「ハ」の字状に開き，孔が3か所穿たれている。いずれも，古墳時代前期(4世紀後半)に位置付けられるものと思われる。



第226図　Ⅰ期出土土器

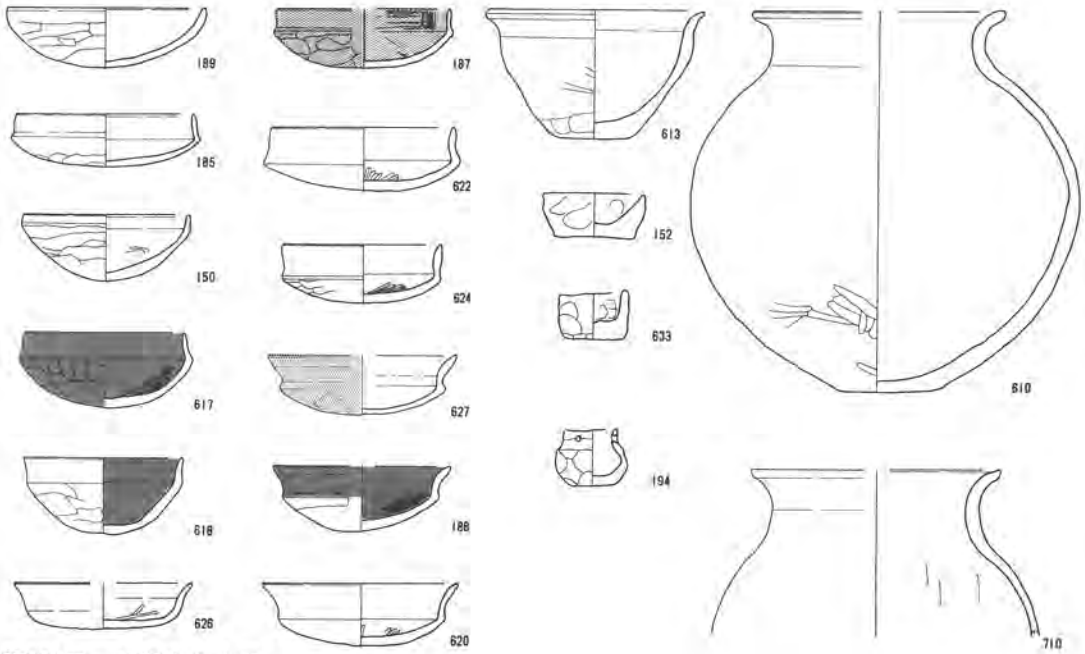
Ⅱ期(第227図)

本期に該当する遺物は，土師器の甕，鉢，坏等である。甕は胴部が球形状を呈し，頸部から口縁部にかけて大きく外反する大形のものと，胴部は僅かに内彎し，頸部がほぼ直立した後，口縁部が外反する小形のものが存在する。鉢は平底で，胴部は僅かに内彎しながら立ち上がり，頸部から口縁部が外反し，最大径を口径にもっている。坏は全体的に大形で，器高の高いものが多い。口縁部の幅は比較的広く，口縁部が直立するもの，内傾するもの，大きく外反するもの等が存在する。内面ヘラ磨き調整の後，赤彩あるいは黒色処理されるものもある。その他，底部に木葉痕をもつ手捏土器が存在する。出土した土器は，いずれも古墳時代後期(6世紀前半)に位置付けられるものと思われる。

Ⅲ期(第228図)

本期に該当する遺物は，土師器の甕，甑，鉢，坏，甑，高坏等である。甕はⅡ期に比べ，胴部最大径を上位に有し，頸部のくびれが弱まるものが存在する。小形の甕は，胴部中位から下位にかけて最大径を有し，頸部は短く，口縁部が外反するものと外傾するものとが存在する。口径は14cm前後を測る。甑は無底式で，僅かに内彎しながら立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反

する。鉢は平底で，胴部がほぼ直線的に外傾して立ち上がり，頸部から口縁部にかけて僅かに内傾するものである。甑は胴部が半球状を呈し，口縁部との境に弱い稜を有している。坏はII期に比べ，やや小振りで，器高も低くなる傾向を示す。口縁部が直立するものと外反するもの，明瞭な外稜を有し，口縁部が外傾するものと内傾するもの等が存在する。高坏は，土師器と須恵器の2種類出土している。土師器の高坏は，脚部が「ハ」の字状に開き，浅い坏部を有する。須恵器の高坏は，透かしのある脚部で，段をなして裾部に至り，端部は外上方に短く屈曲する。出土した土器は，いずれも古墳時代後期(6世紀後半)に位置付けられるものと思われる。



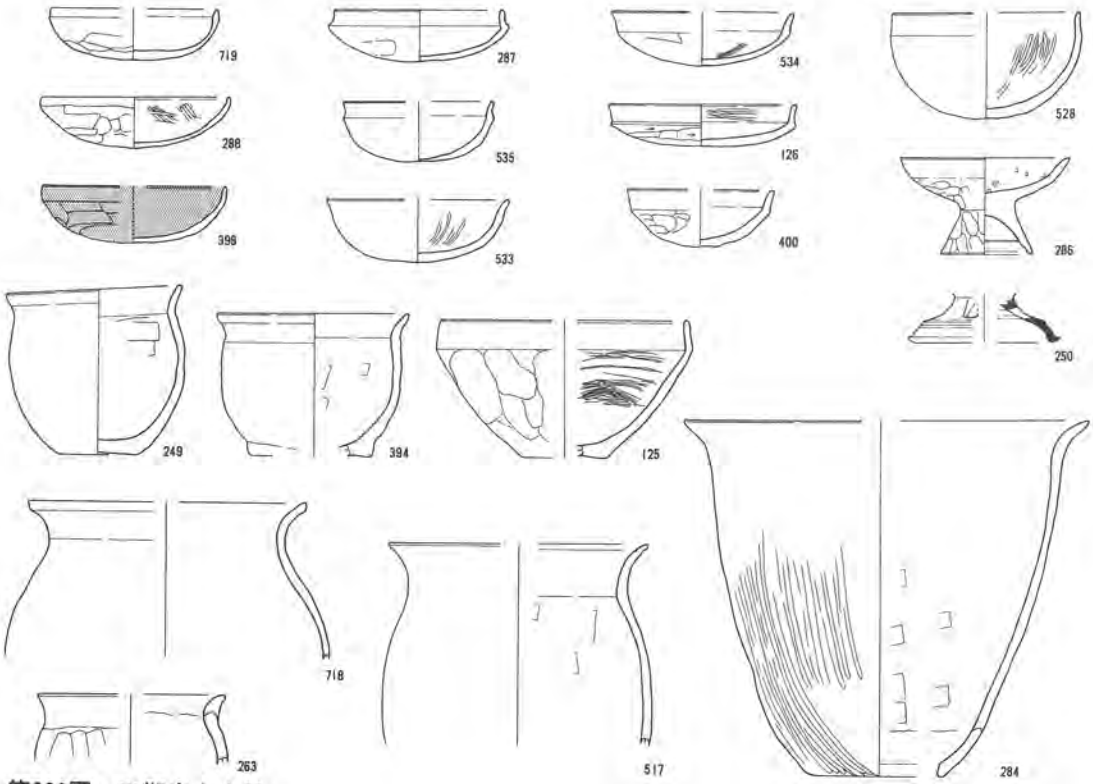
第227図　II期出土土器

IV期(第229図)

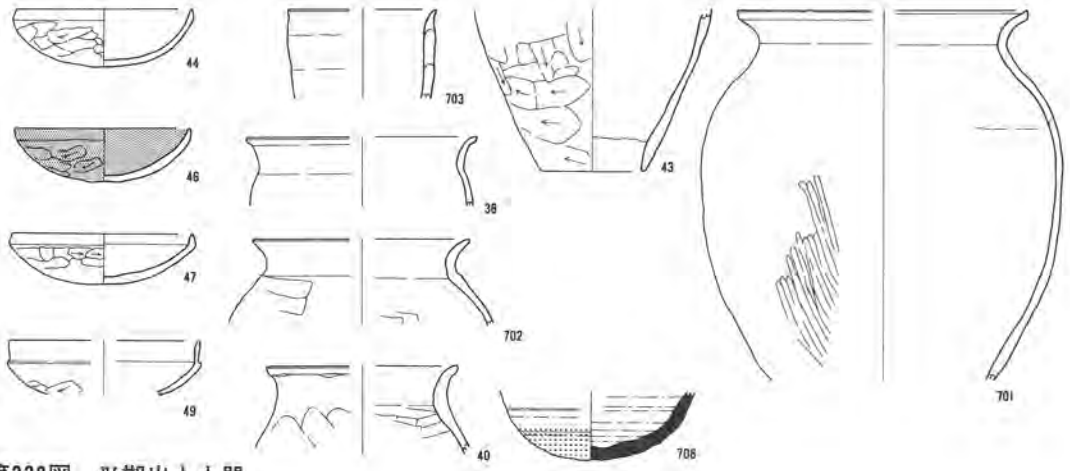
本期に該当する遺物は，土師器の甕，甑，坏等である。甕は，III期とあまり大きな差は認められないが，口唇部が僅かにつまみ出されるものが存在する。小形の甕は，胴部最大径を上位に有し，頸部が大きく外反するものと僅かに外反するもの，胴部が直立し口縁部が僅かに外反するものが存在する。甑は無底式で，胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。坏は，明瞭な外稜を有し，口縁部が直立するもの，外稜が不明瞭なもの等がある。その他，静岡県の湖西窯産の須恵器と思われるフラスコ形長頸壺の底部片が出土している。出土した土器は，いずれも古墳時代後期(7世紀前半)に位置付けられるものと思われる。

V期(第230図)

本期に該当する遺物は，土師器の甕，鉢，坏等である。本期の甕の特徴は，小形の甕の胴部外

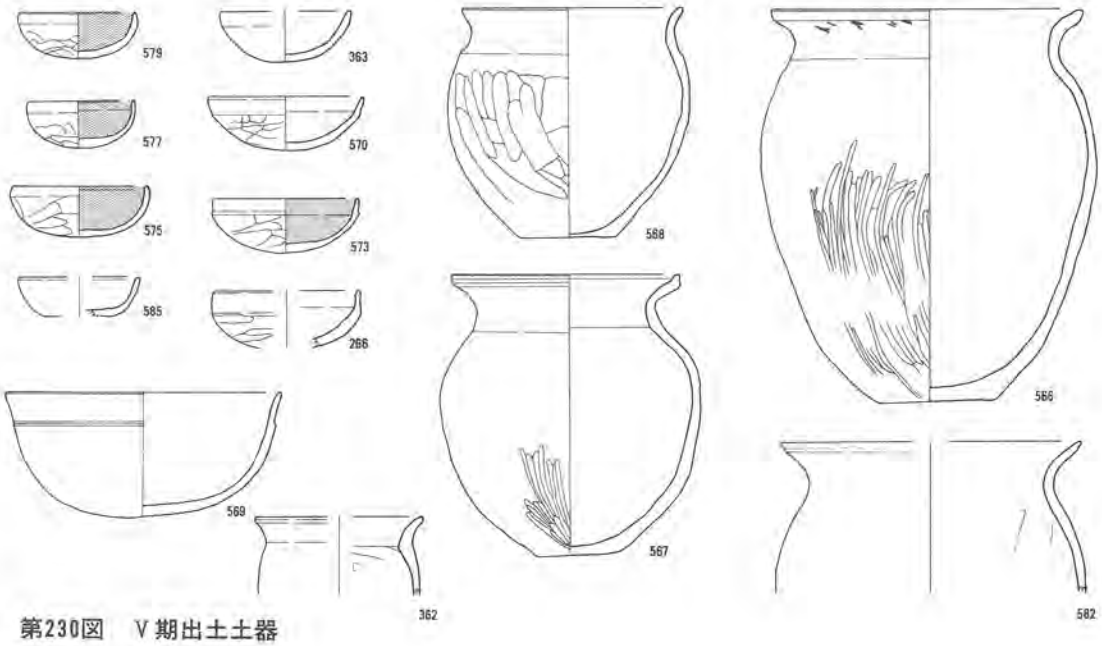


第228図　Ⅲ期出土土器



第229図　Ⅳ期出土土器

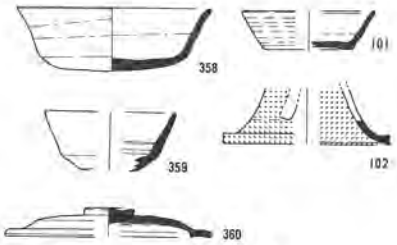
面をこれまでの手持ちヘラ削り調整以外に，ヘラ磨き調整を施し，口唇部を僅かにつまみ出すものが存在することである。鉢は大形で丸底を呈し，外稜を有する。坏は，口径が8cm から11cm 前後で，Ⅳ期に比べ，極端に小形化し，特に8cm から9cm 前後の小振りの坏は，口縁部内面に一条の沈線が施されている。さらに，丸底から平底気味の坏もこの時期に出現する。これらの土器群は，いずれも古墳時代後期（７世紀後半）に位置付けられるものと思われる。



第230図　Ⅴ期出土土器

Ⅵ期(第231図)

本期に該当する遺物は，須恵器の坏，高坏，蓋等である。坏は大形のものと小形のものとが存在する。大形のものは，底部が丸底気味で，体部が外反気味に立ち上がるもので，底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り調整が施されている。小形のものは，上げ底気味で，体部から直線的に外傾して立ち上がるもので，底部が回転ヘラ削り，体部下端は一方向の手持ちヘラ削り調整が施されている。高坏は脚部片と坏部片が出土している。脚部片は，全体に自然釉が付着し，透かしを有する。裾部端部は直角に屈曲する。坏部片は体部下位で大きく外傾した後，角度を緩めて直線的に立ち上がる。体部下端に手持ちヘラ削り調整が施されている。蓋は偏平なつまみがつき，口縁部は水平で，内側に明瞭なかえりを有するものである。本期は，古墳時代後期(7世紀末から8世紀初頭)に位置付けられるものと思われる。



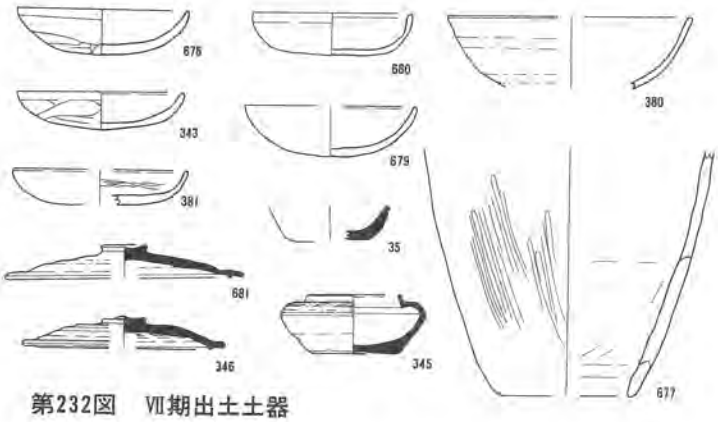
第231図　Ⅵ期出土土器

Ⅶ期(第232図)

本期に該当する遺物は，土師器の甑，坏，須恵器の坏，蓋，壺等である。甑は胴下半部が出土し，無底式で，胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がるもので，胴部外面下位に縦位のヘラ磨き調整が施されている。坏は器高が低く，丸底のものと平底のものとが存在する。

須恵器の坏は平底で，底部と体部との境に丸みを有するものが1点出土している。底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り調整が施されている。蓋は偏平で中央が僅かに突出するつまみがつ

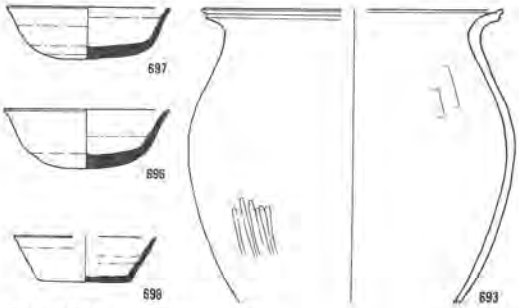
き，口縁部は水平で，内側にかえりがつくが，かえりは前期に比べ短く，消失寸前のものと思われる。壺は小形で，胴部上位で大きく内彎し，頸部は短く「ハ」の字状を呈する。本期は，奈良時代(8世紀前葉)に位置付けられるものと思われる。



第232図　Ⅶ期出土土器

Ⅷ期(第233図)

本期に該当する遺物は，土師器の甕，須恵器の坏等である。土師器の甕は，頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し，口唇部が外上方につまみ出されるもので，胴部外面中位から下位にかけて縦位のヘラ磨き調整が施されている。須恵器の坏は丸底気味で，体部は外反気味に立ち上がるものと，平底で体部が直線的に外傾して立ち上がるものとがある。調整技法は，底部から体部下端にかけて回転ヘラ削りを施すもの，底部及び体部下端に手持ちヘラ削り調整を施すものとがある。本期は，奈良時代(8世紀中葉)に位置付けられるものと思われる。

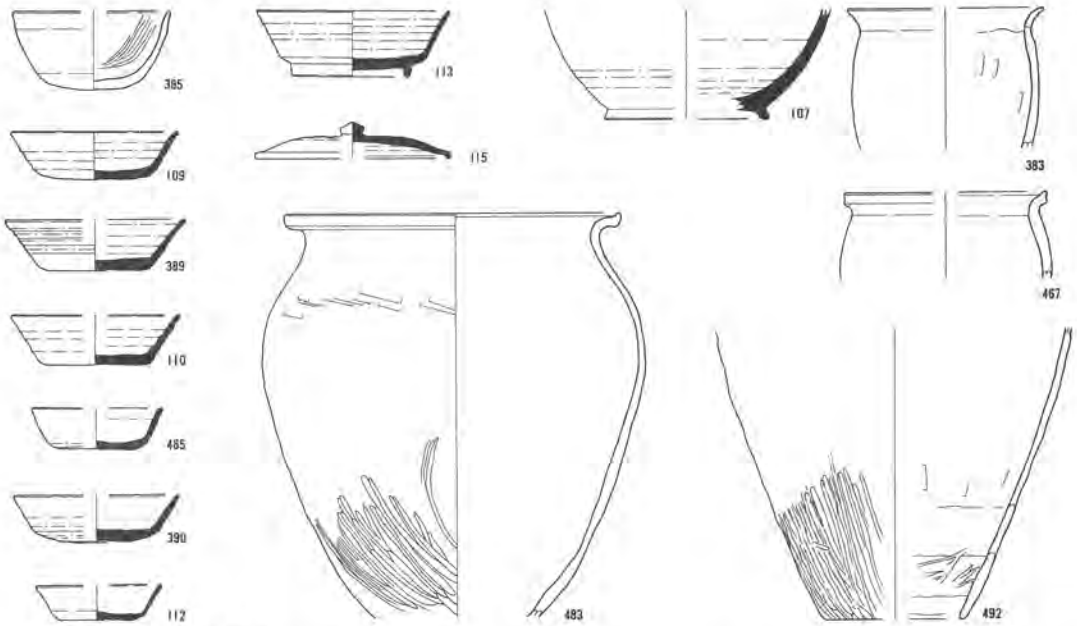


第233図　Ⅷ期出土土器

Ⅸ期(第234図)

本期に該当する遺物は，土師器の甕，甑，坏，須恵器の長頸壺，坏，高台付坏，蓋等である。土師器の甕は，胴部上位に最大径を有し，頸部から口縁部にかけて大きく外反するもので，口唇部を上方に僅かにつまみ出している。胴部外面下位に縦位のヘラ磨き調整が施されている。小形の甕は，同様に口唇部をつまみ出すものと，口縁部が外反するだけのものとがある。甑は胴下半部片であるが，無底式で，胴部は直線的に外傾して立ち上がり，胴部外面下位に縦位のヘラ磨き調整が施されており，胴部下半部についてみるとⅦ期とほぼ同様の様相を呈している。坏の出土量は少ないが，丸底気味で，体部が内彎しながら立ち上がるもので，内面が丁寧にヘラ磨き調整が施されているものが存在する。

須恵器の長頸壺は底部片で，「ハ」の字状に開く短い高台がつくものである。坏は，体部がほぼ直線的に外傾して立ち上がり，底部は回転ヘラ切り後，一方向の手持ちヘラ削りが施されている



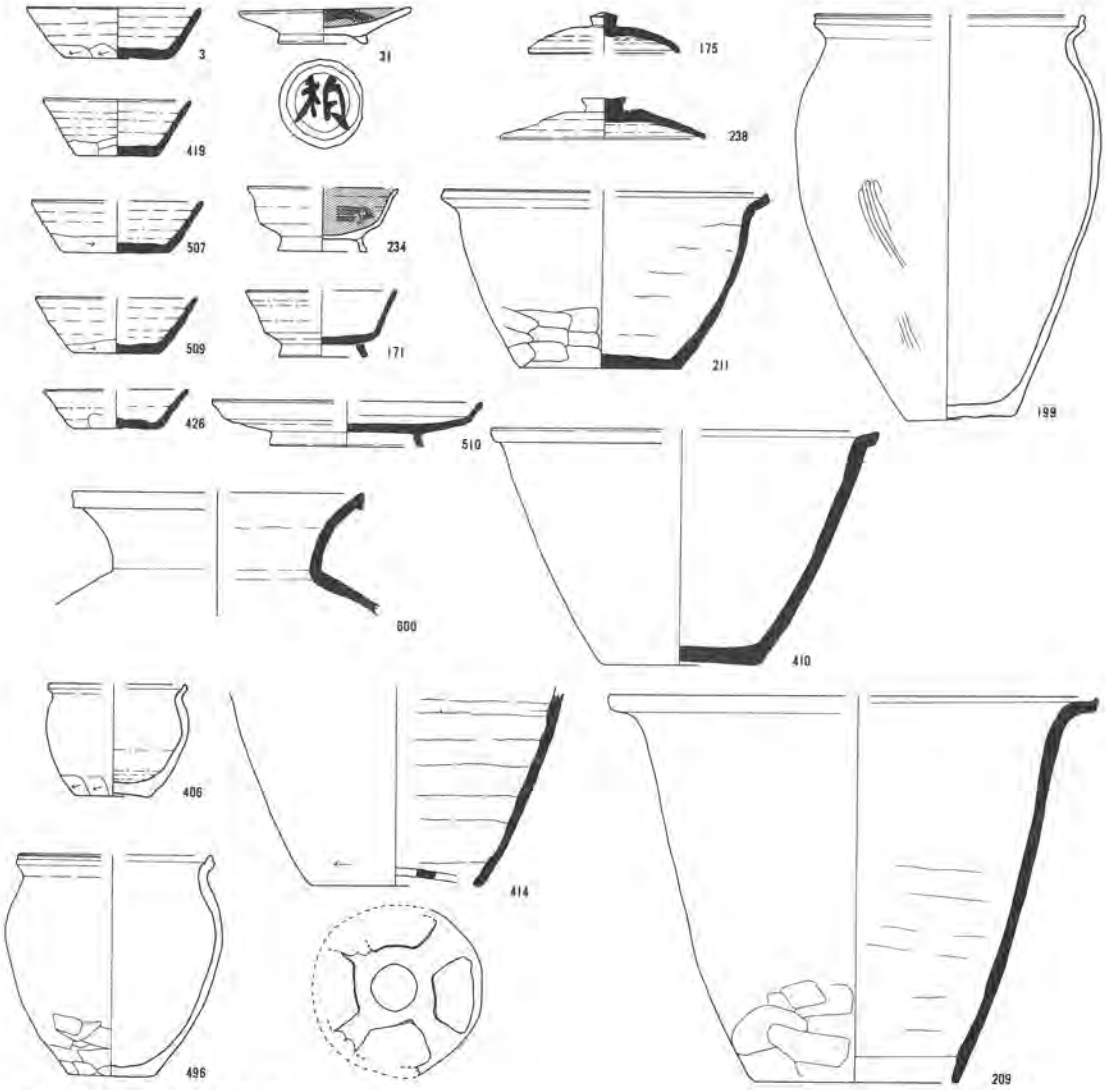
第234図　Ⅸ期出土土器

ものが多い。体部下端は回転ヘラ削り，あるいは，手持ちヘラ削り調整が施されている。口径が10cm 前後の坏と，口径が13cm から14cm 前後の坏と 2 種類存在し，両者とも底部と体部との境が不明瞭なものが多く，口径に対して底径の比率が大きい(底径指数57～64)。高台付坏は，ほぼ直立する短い高台がつき，体部は外傾して立ち上がるものである。蓋は天井部が低く，口縁端部が短く垂下し，宝珠状のつまみがつくもので，天井部は回転ヘラ削り調整が施されている。本期は，平安時代前期(8 世紀末から 9 世紀前葉)に位置付けられるものと思われる。

X 期(第235図)

本期に該当する遺物は,土師器の甕，坏，高台付坏，高台付皿，須恵器の甕，甑，鉢，坏，高台付坏，盤，蓋等である。土師器の甕は,胴部上位に最大径を有し,頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲するもので，口唇部は外上方につまみ出されている。胴部外面中位から下位にかけて，ヘラ磨き調整が施され，底部に木葉痕を残すものもある。小形の甕は短胴で，口唇部はつまみ上げられているものの，胴部外面下位は手持ちヘラ削り調整が施されている。坏は，体部が内彎気味に立ち上がり，口縁部が僅かに外反するものが多い。高台付坏は,「ハ」の字状に開く短い高台がつき，体部は内彎気味に立ち上がるものと，体部下位で一旦外傾した後，内彎気味に立ち上がるものとがある。高台付皿は高台付坏同様の高台がつき，体部は直線的に大きく外傾して立ち上がる。坏，高台付坏，高台付皿は，内面がヘラ磨き調整後，黒色処理がなされているものが多く，底部や体部には墨書されているものもある。

須恵器の甕は，頸部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がり，端部は下方に屈曲する。胴部外面に叩き目が残されている。甑は無底式と 5 孔式があり，無底式のものは胴部が直線的に外傾



第235図　X期出土土器

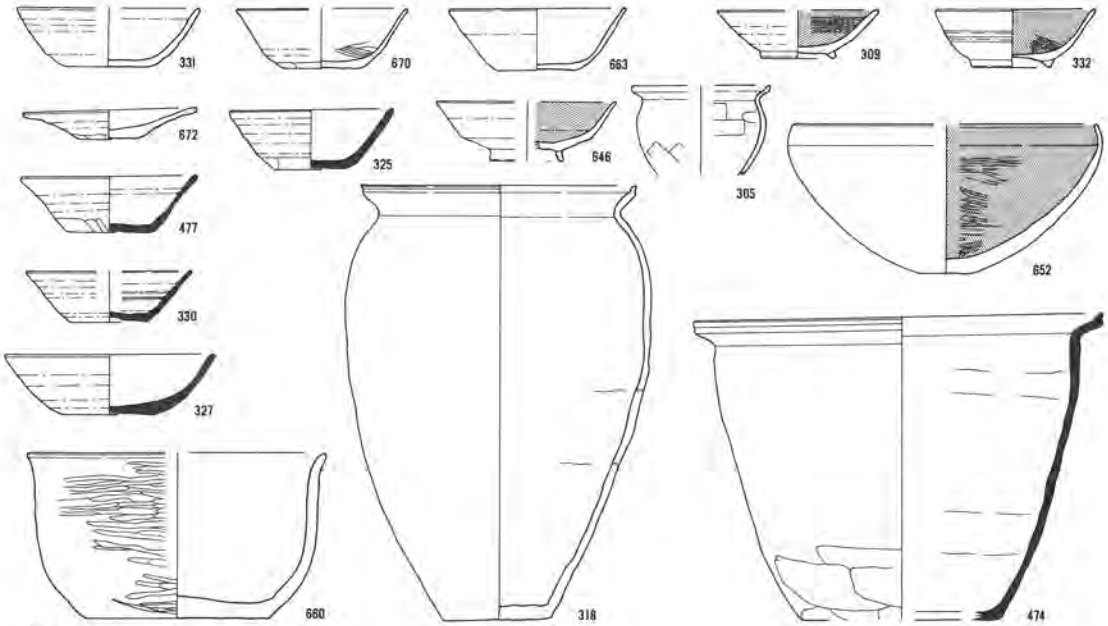
して立ち上がり，頸部から口縁部にかけて大きく外反し，端部が上方に突出するもので，胴部外面下位は手持ちヘラ削り調整が施され，上位には叩き目が残されている。5孔式の甑は，胴下半部片で，無底式のものと器形，調整が類似している。鉢は胴部が外傾して立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外上方に短く屈曲し，端部が僅かに突出するもので，甑とほぼ同様に調整されている。坏は，底径に対し口径の割合が大きくなる傾向を示している(底径指数55～60)。体部が外傾したまま立ち上がるものと，口縁部が僅かに外反するものとがあり，調整技法は底部が回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り，体部下端に手持ちヘラ削り調整が施されるものが大半を占めている。盤は「ハ」の字状に開く高台がつき，口縁部が体部から短く外傾するものである。高台付坏は比較的小振りで，体部が直線的に外傾して立ち上がるものである。蓋は，天井部が平坦でほぼ直線的に口縁部に至り，端部が僅かに垂下するもので，高台付坏の口径とほぼ同じ大きさの小振りな

ものも出土している。本期は，須恵器の出土量及び器種が最も豊富な時期で，平安時代前期(9世紀中葉)に位置付けられるものと思われる。

XI期(第236図)

本期に該当する遺物は，土師器の甕，鉢，坏，高台付坏，皿，須恵器の甕，甑，坏等である。土師器の甕は，前期とほぼ同様であるが，頸部から口縁部にかけて前期に比べ若干強く屈曲し，より長胴化する傾向にある。鉢は小さな底部で，胴部は大きく内彎気味に開いて立ち上がり，口縁部が内傾するもので，内面はヘラ磨き調整後，黒色処理がなされているものと，胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部が僅かに外反するもので，外面に横位のヘラ磨き調整が施されているものとがある。坏は，体部が内彎気味に立ち上がり，底部が回転糸切り後，手持ちヘラ削り調整のものと，回転糸切り後，未調整のものとがある。内面はヘラ磨き調整後，黒色処理を施すものとそうでないものとがあり，墨書されるものもある。高台付坏は，高台が短く「ハ」の字状に開き，体部は内彎気味に立ち上がるものである。内面がヘラ磨き調整後，黒色処理されているものがほとんどを占める。皿は，体部が大きく外傾して立ち上がり，体部下端に手持ちヘラ削り調整が施されている。高台のつかない土師器の皿は本期の1点だけである。高台付皿はX期とほぼ同様の様相を呈している。

須恵器の甕，鉢は，前期とほぼ同様で大きな差は認められないが，口唇部がより明瞭に突出するものがみられる。坏は，口径が底径の2倍以上となるものが大半を占めるが(底径指数45～48)，出土量は前期に比べ激減する。調整技法に，前期との明確な差は認められない。本期は，出土遺物のうち土師器の占める割合が多く，平安時代前期(9世紀後葉)に位置付けられるものと思われる。



第236図　XI期出土土器

2 住居の形態と集落について

（1）古墳時代（Ⅰ～Ⅵ期）

Ⅰ期 古墳時代前期（4世紀後半）

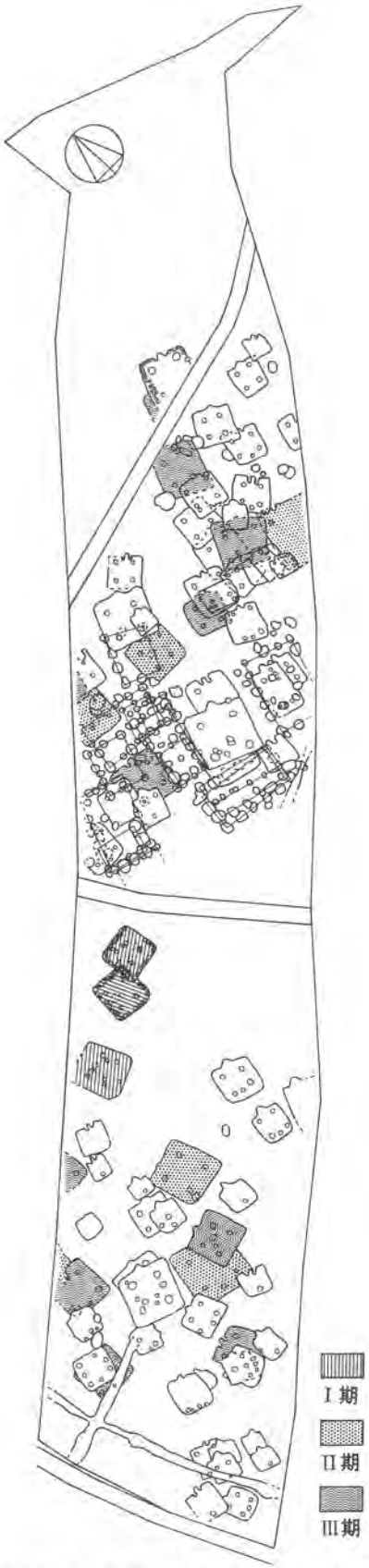
第43・44・45号住居跡の3軒の住居跡が当該期に属する。第43・44号住居跡は，いずれも平面形が方形を呈し，一辺が6mほどの住居跡で，地床炉をもち，壁柱穴を巡らす等，共通点の多い住居跡であるが，第43号住居跡が第44号住居跡を掘り込んでいることから若干の時間差が認められる。第45号住居跡は，重複する第43・44号住居跡の南西約5mに位置しており，平面形は方形を呈し，一辺が6mほどの住居跡である。第43・44号住居跡とは地床炉をもつ点は共通するが，壁柱穴が存在しないこと，出入口を第43・44号住居跡が，南西部に有するのに対し，南東部に有している。3軒の住居跡は，調査区の中央部に東側から入り込む小支谷の谷頭にまとまって検出されており，当該期の集落は，調査区の西側の台地に形成されているものと考えられる。

○ 古墳時代後期の住居跡について

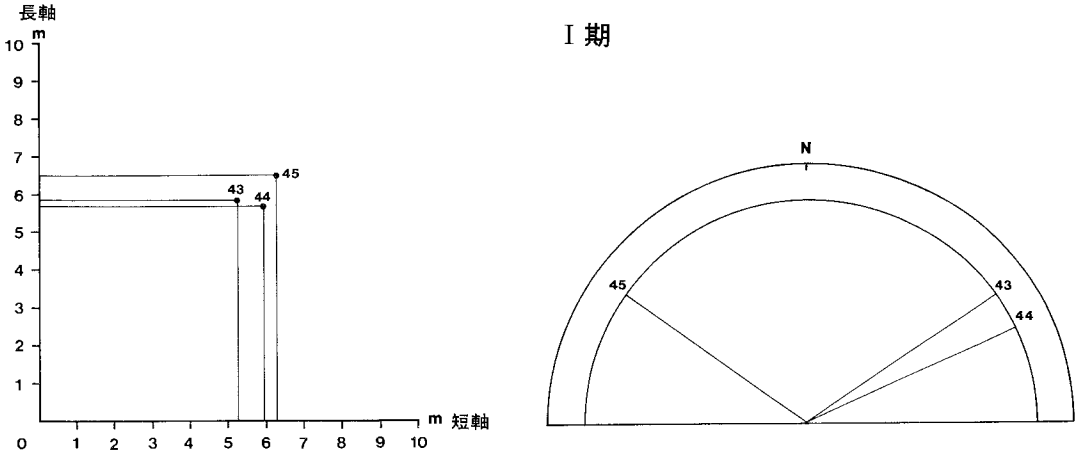
当該期（6世紀前半～8世紀初頭）に属する住居跡は26軒（第2・9・14・16・19・23・26・27・28・29・32・37・38・41・46・53・56・58・65・66・67・72・77・79・80・81号住居跡）検出されている。土器や重複関係から，古墳時代後期をⅡ～Ⅵの5期に区分し，各期ごとに遺構の特徴や集落の変遷について述べていくことにする。

Ⅱ期 古墳時代後期（6世紀前半）

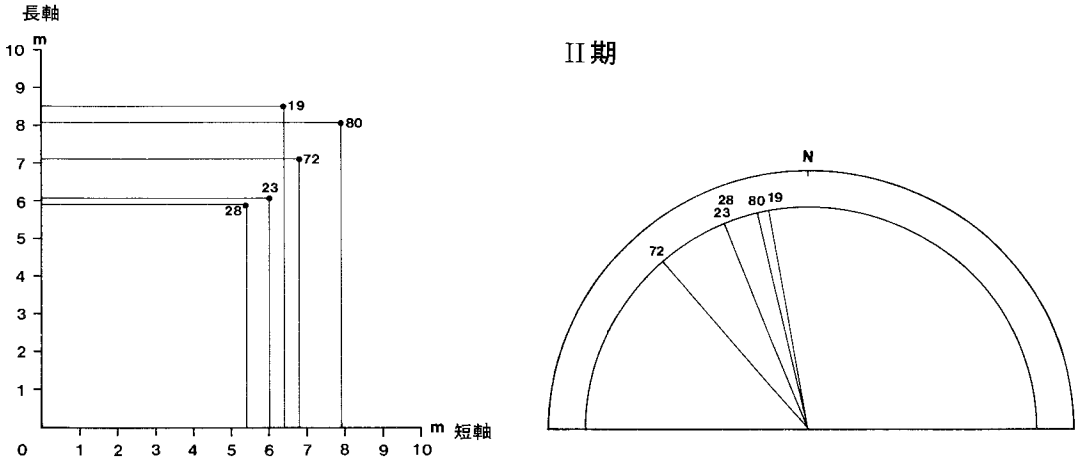
第19・23・28・53・72・80号の6軒の住居跡が当該期に属する。平面形はいずれも方形または方形状を呈し，一辺が6～8m程の大形住居跡である。主軸方向はN－10°～41°－Wで，北西壁に竈が付設されており，第72号・80号住居跡は，それぞれ南コーナー付近・北東コーナー付近に貯蔵穴を有している。主柱穴は4本で，出入



第237図 集落変遷図（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期）



第238図　住居跡規模・主軸方向（1）



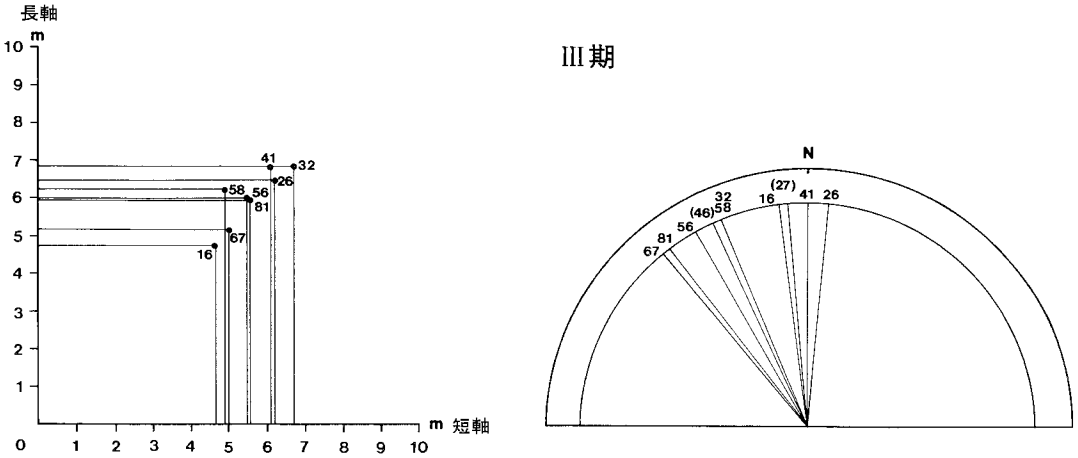
第239図　住居跡規模・主軸方向（2）

口施設に伴うピットが存在するものとしないものとがある。6軒の住居跡は，調査区の中央部に東側から入り込む小支谷を挟んで,北側に第19・23・28号住居跡が，南側に第53・72・80号住居跡が位置している。第72・80号の2軒の住居跡は4mの間隔で隣接し，その間隔からは若干の時間差が窺われる。出土遺物(610･710)からは第72号住居跡よりも第80号住居跡は新しく6世紀前半末のものと考えられる。いずれにしても，この時期の集落は大形の住居跡で，小支谷を取り囲むように形成されていたものと考えられる。

III期 古墳時代後期(6世紀後半)

第2・16・26・27・32・41・46・56・58・67・81号住居跡が当該期に属し，当調査区から検出された古墳時代後期の集落の中で最も軒数が多い。これらの住居跡のうち，遺構全体が調査できた住居跡は，7軒(第16・26・32・56・58・67・81号住居跡)で，平面形は，すべて方形を呈する。規模は一辺が4m台(第16号住居跡)，5m台(第26・67号住居跡)，6m台(第32・56・58・81号住居跡)

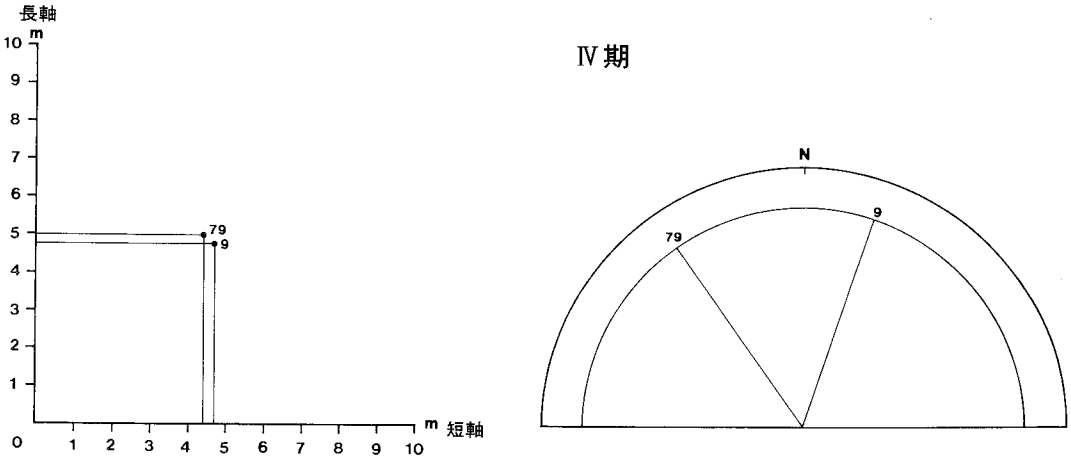
の住居跡である。これらの住居跡は4本の主柱穴を有し，出入口施設に伴うと考えられるピットが存在する。竈は，第26号住居跡で北東壁に付設されているほかは，北西壁に付設されている。これらの住居跡は調査区の北東部に位置する第2・16・26号住居跡を除き，調査区中央部に東側から入り込む小支谷を取り囲むように検出されている。



第240図　住居跡規模・主軸方向（3）

Ⅳ期　古墳時代後期(7世紀前半)

第9・79号住居跡が当該期に属する。平面形は第9号住居跡が方形，第79号住居跡は長方形を呈し，主軸方向は第9号住居跡でN－19°－E，第79号住居跡でN－35°－Wを示すが，ピットはいずれの住居跡からも4本の主柱穴と出入口施設に伴うピットの5か所が検出されている。2軒の住居跡はそれぞれ第9号住居跡が調査区の北東部に，第79号住居跡が調査区の南西部にと，100m程離れて位置している。当該期の住居跡はIII期に比べ当調査区内から検出される数が激減していることはⅣ期の時期に地域社会の構造に大きな変化があったことが考えられる。



第241図　住居跡規模・主軸方向（4）

Ⅴ期 古墳時代後期(7世紀後半)

第29・38・65・66・77号住居跡が当該期に属する。平面形はいずれも方形を呈し，一辺が6m程の住居跡(第38・77号住居跡)と，一辺が4m前後の住居跡(第29・65・66住居跡)で，当調査区内から検出されている各期の古墳時代の住居跡と比べ，比較的小形の住居跡で構成されている。主軸方向はN－0°－WからN－50°－Wの範囲で，北西壁に竈が付設されている。第29号住居跡からは出入口施設に伴うピットは検出されていないが，その他の住居跡はいずれも4本の主柱穴と出入口施設に伴うピットを有する規格性のある住居群である。集落としては調査区中央部に東側から入り込む小支谷を挟んで，北側に第38号住居跡，南側に第77号住居跡と，比較的大きな住居跡が1軒ずつ存在することも特徴的である。

Ⅵ期 古墳時代後期(7世紀末～8世紀初頭)

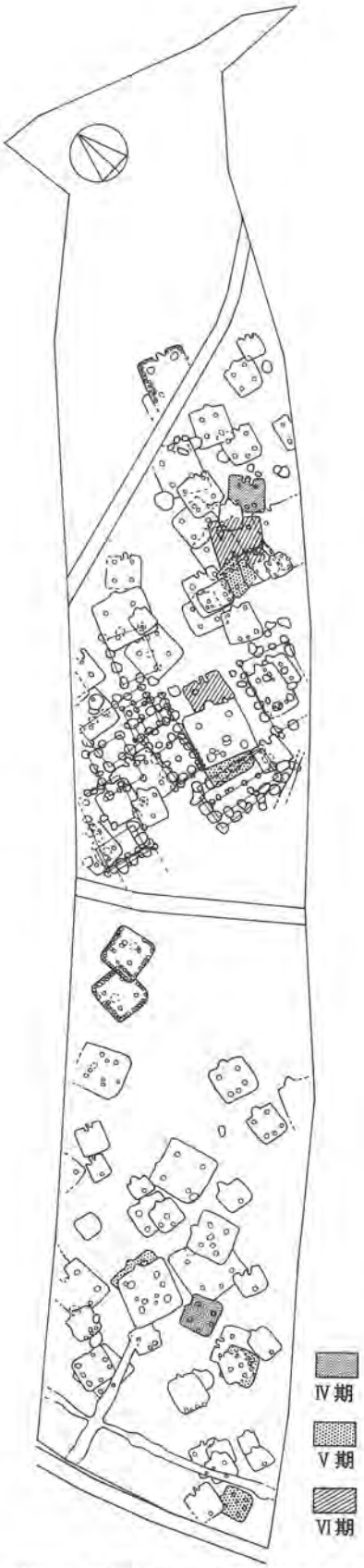
第14・37号の2軒の住居跡が当該期に属する。2軒の住居跡は，平面形が方形を呈し，一辺が5.5～5.9m程で主軸方向はN－11°～12°－Wで北西壁に竈が付設されている。ピットは第14号住居跡で4本の主柱穴と出入口施設を伴うピットの5か所が，第37号住居跡からは主柱穴の4か所が検出されている。いずれも，小支谷の北側に位置し，南側の地区からは本期の住居跡は検出されていないことから，本期の集落は調査区の北側の台地に形成されていた思われる。

(2) 奈良時代(Ⅶ，Ⅷ期)

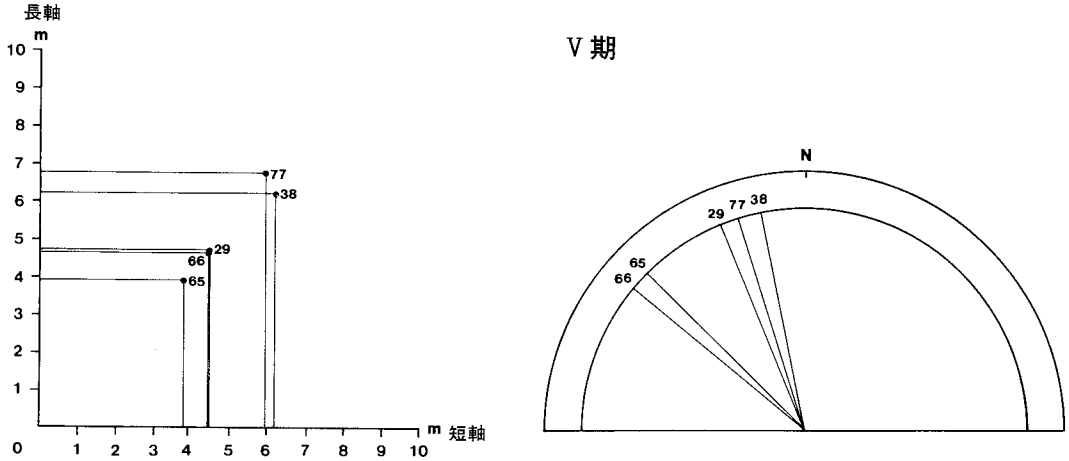
奈良時代(8世紀前葉から8世紀中葉)と考えられる住居跡は5軒検出されており，出土遺物や重複関係等から，5軒の住居跡をⅦ～Ⅷ期の2期に区分した。

Ⅶ期 奈良時代(8世紀前葉)

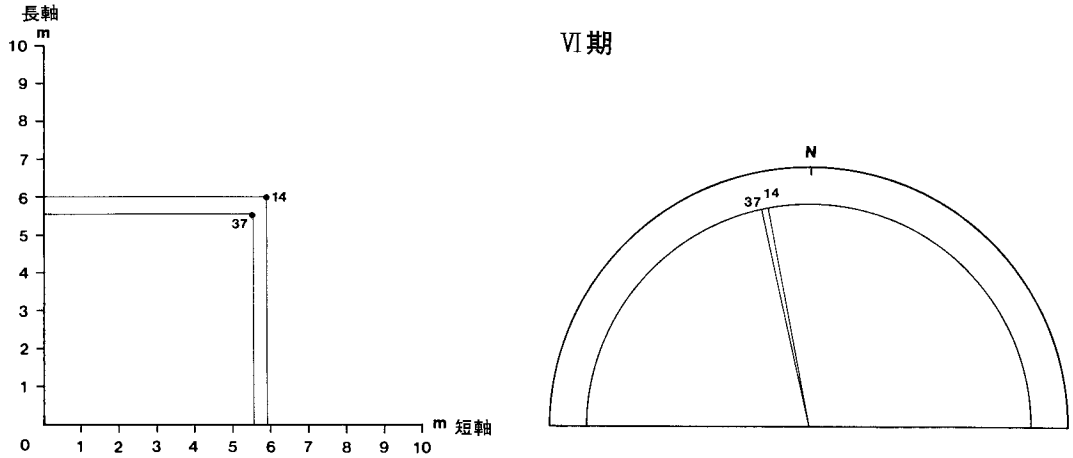
第8・36・40・76号の4軒の住居跡が当該期に属する。平面形は第40号住居跡が隅丸長方形を呈するほかはい



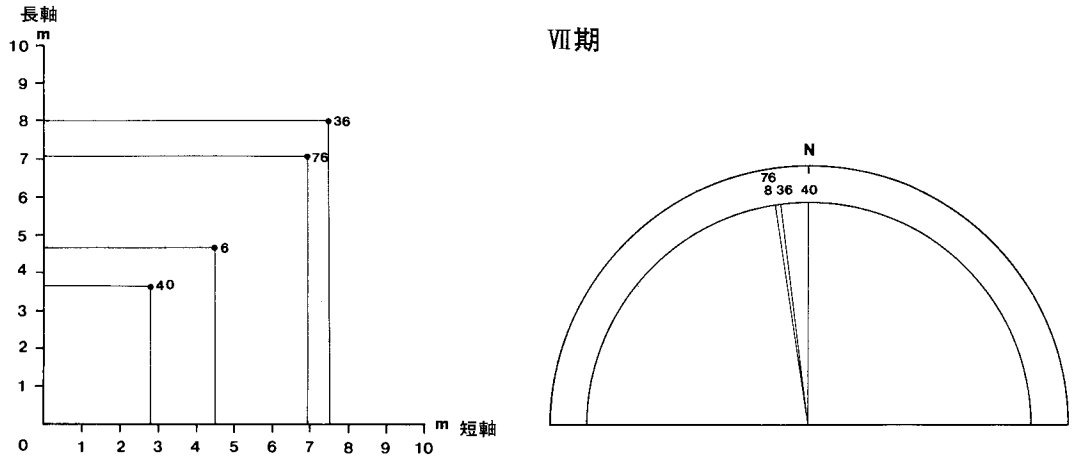
第242図 集落変遷図(Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期)



第243図　住居跡規模・主軸方向（5）



第244図　住居跡規模・主軸方向（6）



第245図　住居跡規模・主軸方向（7）

ずれも方形を呈し，住居の規模は一辺が7～8m台の大形の住居跡(第36・76号住居跡)，一辺が4m台の住居跡(第8号住居跡)，一辺が3m台の小形の住居跡(第40号住居跡)とから構成されている。いずれも主軸方向はN－0°からN－10°－W以内を示し，北西壁に竈が付設されている。ピットは主柱穴と出入口施設に伴うピットの5か所検出されているが，小形の第40号住居跡からは1か所も検出されていない。本期の住居跡は，小支谷を挟んで，北側に大形の第36号住居跡と第8号住居跡が，南側に大形の第76号住居跡と小形の第40号住居跡がいずれも2軒ずつ検出されている。

Ⅷ期 奈良時代(8世紀中葉)

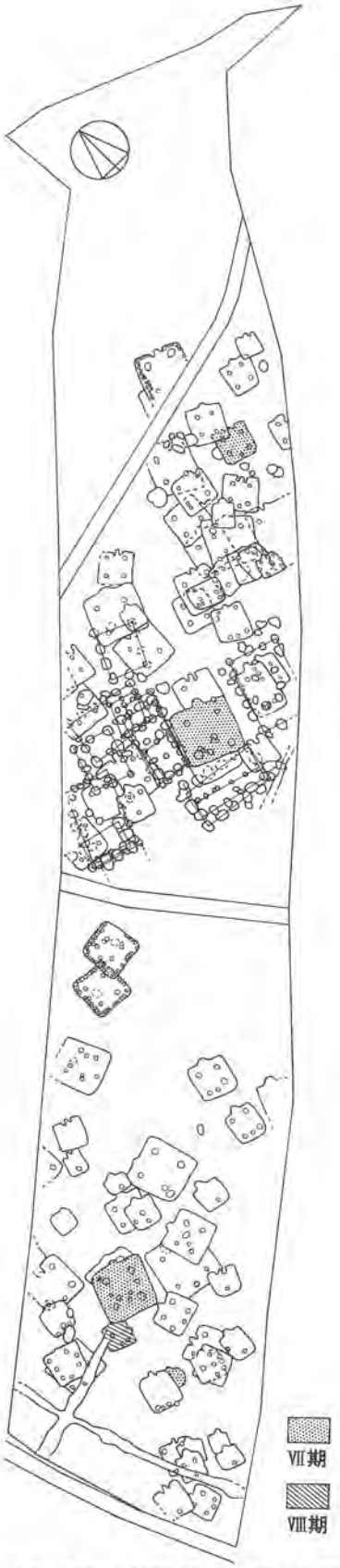
第78号住居跡が当該期に属する。調査区の南西部から検出され，平面形は方形を呈している。一辺が3m台の小形の住居跡で，当調査区内で唯一東壁に竈が付設されている。

（3）平安時代前期(Ⅸ～Ⅺ期)

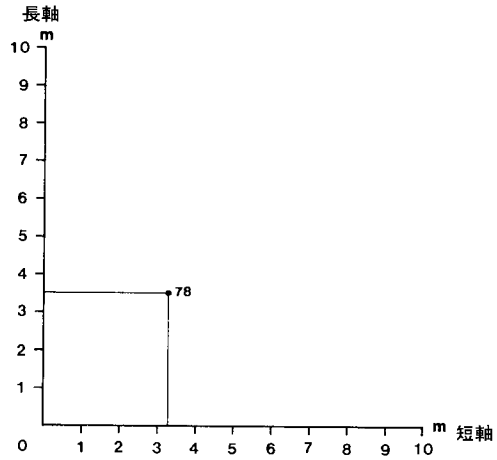
平安時代の住居跡は47軒検出されている。奈良時代の全般を通じて，検出された住居跡は少数であるが，平安時代になるとにわかに検出される住居跡が増加し，当遺跡の全盛期を迎えることが理解できる。これらの住居跡は，いずれも平安時代前期(8世紀末～9世紀後葉)に位置付けられるものである。ここでは，出土遺物や重複関係等から，46軒の住居跡をⅨ～Ⅺ期の3期に区分した。

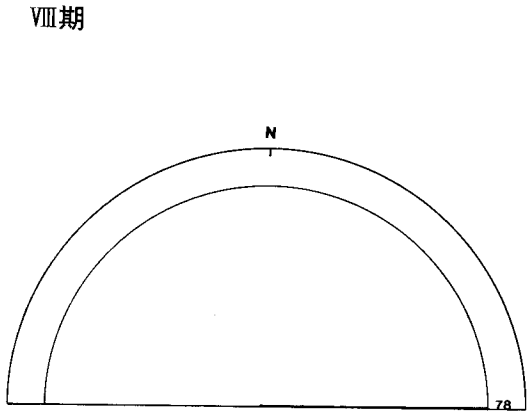
Ⅸ期 平安時代前期(8世紀末～9世紀前葉)

第4・5・6・12・13・15・42・50・52・55・61・64号の12軒の住居跡が当該期に属する。平面形は第15号住居跡を除き，すべて方形を呈している。一辺が4～5m前後の住居跡が大半を占め，一辺が3m台の小形の住居跡(第52号住居跡)も存在している。主軸方向は第13号住居跡がN－13°－Eで北東側を示すほかは，N－27°－

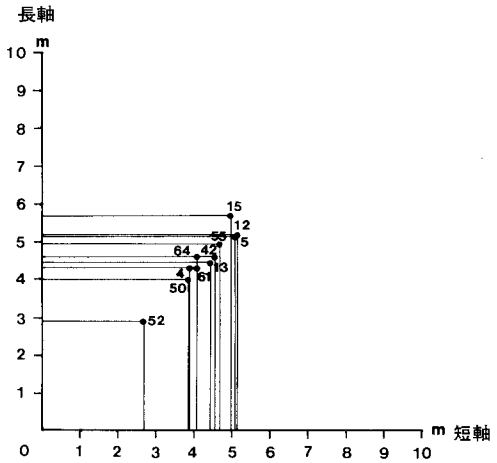


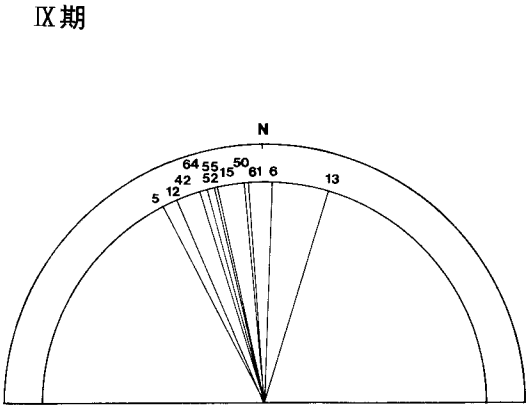
第246図　集落変遷図（Ⅶ・Ⅷ期）



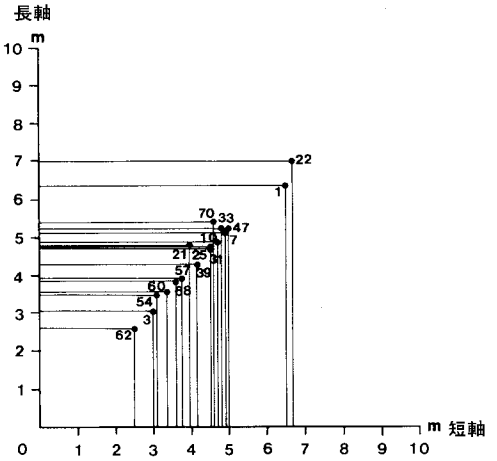


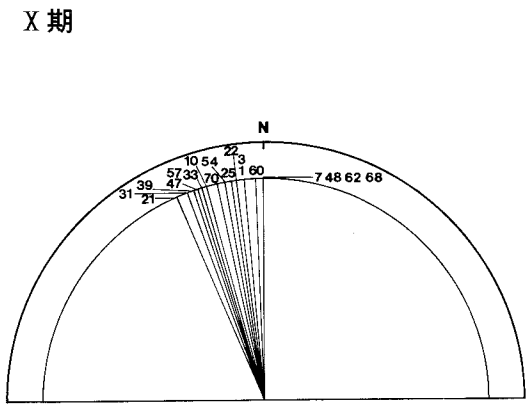
第247図　住居跡規模・主軸方向（8）





第248図　住居跡規模・主軸方向（9）





第249図　住居跡規模・主軸方向（10）

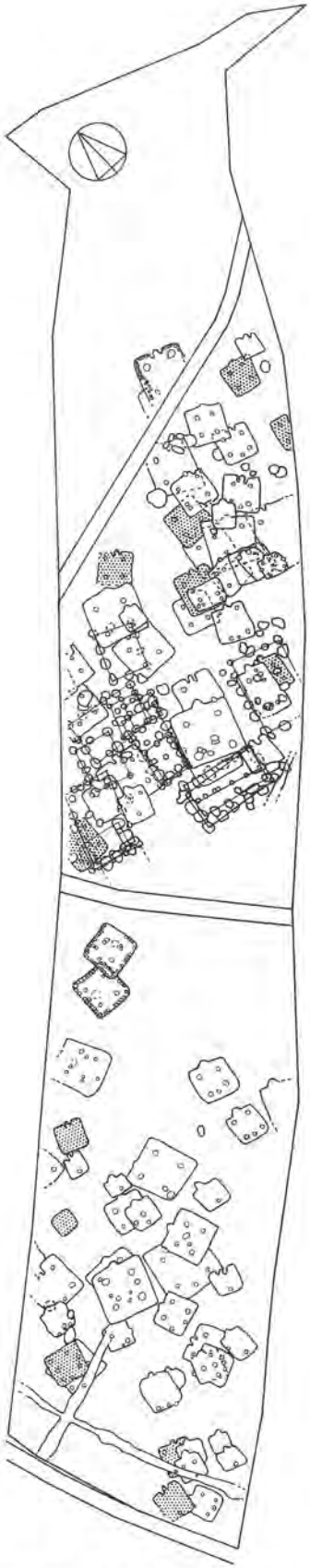
Wの範囲内を示している。これらの住居跡は調査区中央部に東側から入り込む小支谷を挟んで北側に7軒，南側に5軒検出されているが，北側と南側とでは住居跡の構造及び配置に差がみられる。住居跡の構造ではピットが北側の住居跡は，第42号住居跡を除き，主柱穴の4か所だけであるのに対し，南側の住居跡では5か所あるもの，1か所のもの，全くないもの等様々である。住居跡の配置ではいずれも弧状に配置されているが，北側の住居跡は北東部で3～9m間隔で配置されており，南側の住居跡は台地の南西部の平坦部に8～18m間隔で配置されている。

X期 平安時代前期(9世紀中葉)

第1・3・7・10・21・22・25・31・33・39・47・48・54・57・60・62・68・70号の18軒の住居跡が当該期に属する。平面形は第70号住居跡を除き，すべて方形を呈している。規模はIX期までに比べ，一辺が3m前後の住居跡(第3・54・57・60・62・68号)が6軒と小形の住居跡が増加し，住居跡内にピットをもたない傾向がみられる。これまでの各期の集落に比べ，住居跡の方向がより一定方向を示す傾向にあり，主軸方向はN－0°からN－23°－Wの範囲内を示している。本期の集落は，調査区の中央部に東側から入り込む小支谷を馬蹄形状に取り囲むように形成されている。

XI期 平安時代前期(9世紀後葉)

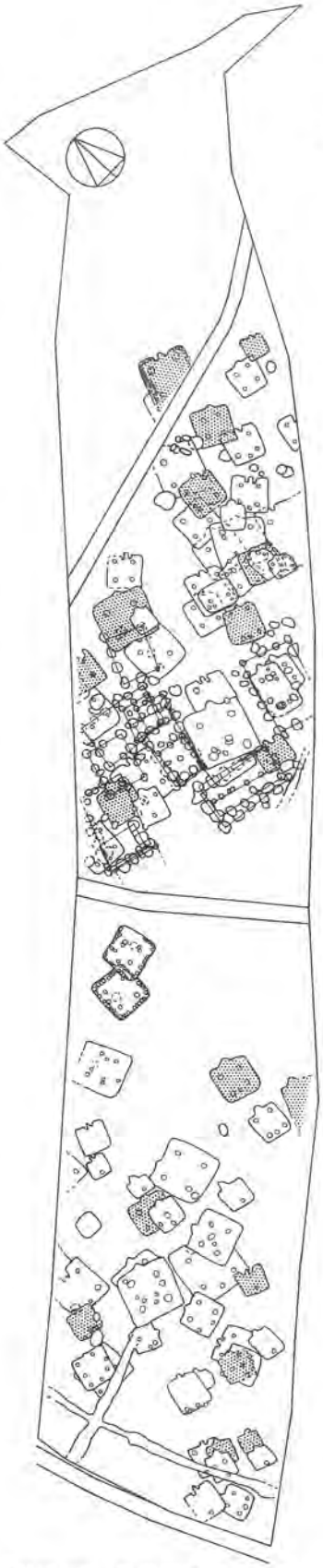
第11・17・18・20・24・30・34・35・49・51・59・63・69・71・73・74・75号の17軒の住居跡が当該期に属する。本期の住居跡は，X期にみられた小形の住居跡の増加傾向が顕著で，ほとんどが一辺2m台，あるいは3～4m台の住居跡で，ピットが出入口施設に伴う1か所だけという住居跡が大半を占めている。主軸方向も前述した第11号住居跡を除き，N－10°～32°－Wの範囲内を示し，各期の集落に比べ，本期の集落の特徴が窺われる。第17・18号住居跡が重複しており，この2軒の住居跡の間には，本期の時間幅の中で，その存続期間内に時間的な隔たりが存在することは明らかである。本期を2期に



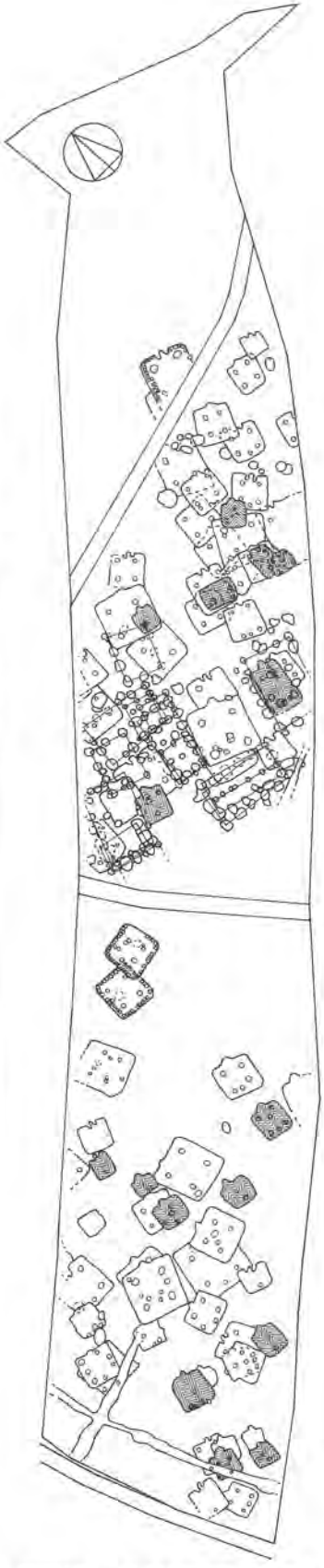
第250図　集落変遷図（IX期）

区分すべきであるが，出土遺物にあまり差異が認められないため，短い期間に建て替えが行われた可能性を考え，あえて区分せず本期に包括した。

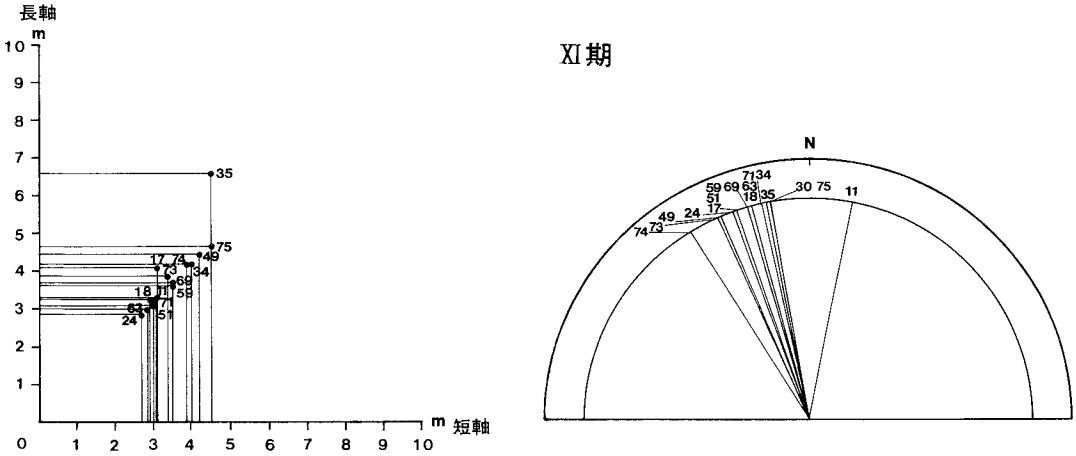
以上のことから，柏木古墳群から検出された住居跡はⅠ～Ⅺ期(4世紀後半,6世紀前半～9世紀後葉)の11期に区分することができ，当台地上には古墳時代前期，そして後期から平安時代前期にわたって集落が形成されていたことが窺われる。初めて，当台地上に集落が形成されるようになるのは，古墳時代前期(4世紀後半)で，その後，古墳時代中期の空白を経て，古墳時代後期には集落が形成されるようになる。古墳時代後期の住居跡は，後期末へと時期が下るにしたがって，一辺が6mを超える大形の住居跡から一辺が4m台の住居跡へと規模が小さくなっている。ピットは4本の主柱穴と出入口施設に伴うピットの5か所を有する住居跡が多い。桜川村内において，



第251図　集落変遷図（Ⅹ期）



第252図　集落変遷図（Ⅺ期）



第253図　住居跡規模・主軸方向（11）

同時期の住居跡が報告されている遺跡は，祭祀に関する遺構，遺物が出土している尾島貝塚やその他，宮の脇遺跡，後九郎兵衛遺跡，立切遺跡があり，当遺跡の北側には，小野川を挟んで江戸崎町の思川遺跡，二の宮貝塚，大日山古墳群が確認されている。柏木古墳群の古墳時代後期の住居跡からは，祭祀に関すると思われる遺物がほとんど出土していないことから，尾島貝塚とは性格の異なる遺跡であると考えられる。この時代の遺物の中には，静岡県の湖西窯跡で作られた須恵器の高坏，長頸壺，瑕等が出土しており，7世紀代には，東海地方との交流があったことが窺われる。

奈良時代になると，検出された住居跡は少なく5軒である。これら少ない住居跡の内，第76号住居跡と第78号住居跡が重複し合って検出されており，集落としての規模は小さいものであったと思われる。この時期の集落における住居跡の構成は，大形の住居跡と小形の住居跡が混在してはいるが，全体的には小形化の傾向を示している。住居の構造では古墳時代後期の住居跡と変化はみられない。当村内で，奈良時代の住居跡が検出されている遺跡は，前述の尾島貝塚で6軒，宮の脇遺跡で3軒と少数である。

平安時代前期になると，検出される住居跡の数が急増し，柏木古墳群における集落が最も隆盛期を迎えたのではないかと思われる。平安時代もⅨ～XI期と期を下るにしたがって，次第に住居跡の規模は小形化し，主柱穴は床面から検出されず，出入口施設に伴うピットの1か所だけとなる。柏木古墳群の所在するこの台地からは，平安時代後期以降の住居跡は検出されていない。当遺跡周辺で，平安時代後期以降の住居跡が検出されている遺跡は，村内の岡ノ内遺跡，江戸崎町の思川遺跡がある。

参考文献(順不同)

(1) 茨城県教育財団　「二の宮貝塚　大日山古墳群　思川遺跡」(上・下)　茨城県教育財団文化財調査報告第65集　1991年

(2) 茨城県教育財団　「尾島貝塚　宮の脇遺跡　後九郎兵衛遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第46集　1998年
(3) 立切遺跡発掘調査会　「立切遺跡」 茨城県東村・桜川村文化財調査報告書　1988年
(4) 史館同人会　「シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器」 1983年
(5) 柿沼　修平他　「房総における鬼高期の研究」 『日本考古学研究所集報Ⅳ』 1982年
(6) 村山　好文　「平賀遺跡群における古墳時代後期土器の再検討」『日本考古学研究所集報Ⅹ』 1988年
(7) 田中　広明　「もう一つの豪族居館 常陸国信太郡浮島の尾島遺跡群にみられる構造的変化」『婆良岐考古　第12号』 1990年
(8) 茨城県教育財団　「神谷森遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第66集　1991年

第2節　掘立柱建物跡について

当調査区から検出された掘立柱建物跡は13棟で，調査区の北部から中央部にかけてまとまって検出されている。時期については，竪穴住居跡との重複関係から，およそ古墳時代前期から後期のものと平安時代前期以降の掘立柱建物跡と考えられる。第13号掘立柱建物跡については遺構の一部しか検出されていないため時期はとらえられない。

1　古墳時代後期以前

古墳時代後期以前に位置付けられる掘立柱建物跡は，第1・2・3・4号掘立柱建物跡の4棟である。第1・2号掘立柱建物跡は，古墳時代後期(7世紀後半)の住居跡と思われる第38号住居跡の床下から，第3号掘立柱建物跡は，同じく古墳時代後期(6世紀前半)の住居跡と思われる第28号住居跡の床下から，第4号掘立柱建物跡は，平安時代前期(8世紀末～9世紀初め)の住居跡と思われる第5号住居跡の床下からそれぞれ検出されている。

規模は，第1・2・3号掘立柱建物跡が南北3間，東西5間，第4号掘立柱建物跡が南北2間，東西3間で，面積は，3間×5間の建物跡で30.7～52.0㎡，2間×3間の建物跡で19.1㎡を測る。柱間寸法は，いずれも，桁行，梁行ともに1.8～2.0m前後で，柱穴掘り方は，第3号掘立柱建物跡で平面形が径1m前後の円形及び楕円形を呈するほかは,平面形が長径0.8～1.9m，短径が0.6～1.5mの長方形の掘り込みを有する。深さは0.4～1.2mで，柱痕跡は検出されていないが，柱を支えていたと考えられる粘土が底面から検出されている。各建物跡は，いずれも東西棟の建物跡で，約10mの間隔を置き，長軸方向をN－11°～22°－Wにもって建てられており，ほぼ同時期に存在していた可能性が考えられる。

当調査区から，古墳時代中期の遺構，遺物が検出されていないため，これらの建物跡は調査区

の東側から入り込む小支谷の谷頭を隔てて検出されている古墳時代前期の住居跡との関連も考えられるが，出土遺物もなく，明確な時期や性格をとらえることはできない。

2　平安時代前期以降

平安時代前期以降に位置付けられる掘立柱建物跡は第5・6・7・8・9・10・11・12号掘立柱建物跡の8棟である。これらの建物のうち，第6・7・8・9号掘立柱建物跡は，それぞれ，平安時代前期の住居跡と思われる第22・35・33号住居跡を掘り込んだ状態で検出されている。

規模は南北5間，東西3間の建物跡が3棟，南北3間,東西2間の建物跡が3棟，南北2間,東西2間の建物跡が2棟で，面積は5間×3間の建物跡で30.1～50.2㎡,3間×2間の建物跡で18.0～30.1㎡，2間×2間の建物跡で13.6～16.7㎡を測る。柱間寸法は桁行，梁行ともに平均で，1.8～2.0mの範囲内におさまる。柱穴掘り方は平面形が，径1m前後の円形及び楕円形を呈するものが大半を占めている。深さは，0.2～1.1mで，柱痕跡は検出されていないが，第6・7・10・11号掘立柱建物跡以外の建物跡からは，柱を支えていたと考えられる粘土が底面から検出されている。粘土が検出されなかった建物跡のうち，第6・10・11号掘立柱建物跡は,3間×2間，2間×2間の規模の小さい建物跡であることから，小形の建物跡の場合は，直接柱を据えたものと考えられる。　これらの建物跡のうち，第5･7･8号掘立柱建物跡は，いずれも5間×3間の南北棟の建物跡で，長軸方向はN－11°～15°－Wとほぼ同一方向を示していることから，同時期に存在していた可能性も考えられる。更に，規模や長軸方向及び検出地点から，第6・9号掘立柱建物跡との同時性，第11・12号掘立柱建物跡の建て替え等も考えられるが，他の掘立柱建物跡と複雑に重複しているため，いずれも推測の域を出ない。各建物跡と調査区の北側から検出されている平安時代前期の住居跡の配置から，両者が同時期に存在していたことは考えにくく，むしろ，住居跡の廃絶後にこれらの掘立柱建物跡が構築されたものと考えられる。

検出された掘立柱建物跡は，古墳時代後期以前のものと平安時代前期以降のものとに大別することができる。両者の間には検出地点，面積，柱間寸法にあまり大きな差は認められないが，前者が東西棟の建物跡であるのに対し，後者は南北棟の建物跡であること，柱穴掘り方は，後者に比べ前者の方が規模が大きく，深い掘り込みを有すること等，異なる点もみられる。出土遺物がないこと,複雑な重複関係にあることから,これらの建物跡と各時期の住居跡との関係をとらえることはできず，詳細については不明である。

また，各建物跡の機能や用途を推定することも難しいが，面積等からみて，2間×2間の建物跡は居住用とは考えにくく，簡単な倉や納屋等の収蔵を目的としたものと考えられる。その他の建物跡については，規模や柱穴の掘り方から，比較的大きく頑丈な建物跡が考えられ，古墳時代後期以前の建物跡については，集落共同の倉庫等の施設，平安時代前期以降の建物跡については，よ

り大きな集団の共同施設や地域の中心的施設を想定することもできる。

第3節　墨書土器について

当調査区から出土した墨書土器の総数は19点で，平安時代の住居跡(第7号住居跡2点，第17号住居跡1点,第22号住居跡4点，第25号住居跡2点，第31号住居跡1点，第34号住居跡3点，第35号住居跡1点，第42号住居跡1点，第75号住居跡2点)から17点，土坑(第7号土坑)と遺構確認面からそれぞれ1点ずつ出土している。刻書土器も1点(第74号住居跡)出土しており，ここでは墨書土器とあわせて記述することにする。

1　土器の種類と墨書(刻書)部位

出土した20点の墨書(刻書)土器の器種の内訳は，土師器の坏6点，高台付坏5点，高台付皿2点，須恵器の坏7点である。土師器の墨書土器13点のうち，半数の7点は内面が黒色処理されたものである。

墨書の部位は，底部が圧倒的に多く14点を数え，次に体部外面4点で，残る2点は体部から底部にかけてと底部内・外面(刻書)であり，文字は縦，横あるいは上下逆に記されているものや，体部から底部にかけて続けて記されているものもみられる。

これらの墨書(刻書)土器は，いずれも，9世紀中頃から末に位置付けられるものと考えられる。

2　墨書(刻書)文字の検討

出土した墨書(刻書)土器のうち，文字の明瞭なもの及び判読が可能なものは17点であるが，墨書(刻書)文字は以下の9種類，5タイプに分類することができる。

(1) 地名を表すもの　　柏木・柏・前平

(2) 所属・所有を表すもの　　毛(カ)

(3) 数または数量を表すもの　　万・七

(4) 吉祥的な意味を表すもの　　珎

(5) 不明のもの　　木・弓三

「柏木」は，柏木古墳群という遺跡名が示すように，現在でも当遺跡の所在する地域は『柏木』という字名で呼ばれており，当時(9世紀中頃～末)には，既に『柏木』という地名が存在していた可能性が高いと考えられる。「柏」は「柏木」と同数出土し，第7号住居跡からは「柏木」と記された高台付坏と「柏」と記された高台付皿が出土していることからも，「柏」は『柏木』という地名を略したものと考えることができる。「前平」については，現在，桜川村及びその周辺をみても，地名として残されている所は見当たらないものの，文字の組み合わせから地名の一部と考えられる。茨城

県内で，遺跡に関連する墨書文字が記された土器が出土した例は，石岡市の茨城廃寺跡の「茨寺」，「茨木寺□」と記された土師器の坏，茨城町の下土師遺跡の「土師神主」と記された土師器の高台付坏等がある。現地名と合致する墨書土器が出土したのは，茨城町の向遺跡から出土した「向」と墨書された土師器の坏がある。

「毛」は4点出土しているが，いずれもほぼ同一器形，整形の須恵器の坏の底部に記されていること，「七」のように見え，記号のようにも受け止められるということから，須恵器の供給地の窯印と考えることもできる。しかし，4点すべてが同一住居跡(第22号住居跡)から出土していることから，その住居跡の所有を意味するものであることも考えられる。道路幅内だけの調査であるため，安易な判断はできないが，いずれにしても所属，所有を表しているものと考えることができる。

「万」「七」は数や数量を表すものと考えられるが，「万」と墨書された土師器の高台付坏は欠損部が多く，「万」の上にも文字が書かれていた可能性もあり，本来は「万」を『 ～ する』というような吉祥的な意味をもつものであることも考えられる。「七」は高台付坏の体部に逆さに記されていることから，単に数や数量を表すだけでなく，何らかの意味を込めたものと考えられる。

「珎」は土師器の高台付坏の底部内・外面に刻書され，文字のもつ意味(珎＝珍→宝)から吉祥的な意味をもつものと考えられる。

「木」「弓三」については意味不明であるが，「木」と記された須恵器の坏が出土した第25号住居跡からは，もう1点判読不能の墨書土器と内面を硯に転用したと考えられる須恵器の蓋が出土しており，この第25号住居跡には，文字を書くことのできる人物が居住していたことが想像される。「弓三」は2点出土しているが，いずれも住居跡内に投棄あるいは流れ込んだ状態で出土している。「木」同様意味は不明である。

一般集落から出土する墨書土器には，吉祥的な意味をもつ文字が記されていることが多く，地名や人名，位を表す文字は少ない例が多い。当遺跡から出土した墨書土器をみると，現在使われている地名と合致する文字が，他の文字に比べ多数みられることや掘立柱建物跡等の存在から，当遺跡は，地域の中心的な遺構を伴う集落，あるいはそれに関連した周辺の集落の可能性が高い。

表 4　出土遺構と墨書・刻書土器

墨書土器

遺構名	釈　文	種　別	器　種	部　位	備　考	図版番号
SI 7	柏　木	土師器	高台付坏	体部～底部	内面黒色処理	29
SI 7	柏	土師器	高台付皿	底　部	内面黒色処理	31
SI17	柏	須恵器	坏	底　部		144
SI22	「毛」カ	須恵器	坏	底　部		163
SI22	「毛」カ	須恵器	坏	底　部		162
SI22	「毛」カ	須恵器	坏	底　部		164
SI22	「毛」カ	須恵器	坏	底　部		165
SI25	木	須恵器	坏	底　部		229
SI25	□	須恵器	坏	底　部	判読不能	228
SI31	柏　木	土師器	坏	底　部		273
SI34	前　平	土師器	坏	体　部		307
SI34	「弓三」	土師器	高台付皿	底　部	内面黒色処理	310
SI34	□	土師器	坏	体　部	判読不能	306
SI35	「弓三」	土師器	高台付坏	底　部	内面黒色処理	333
SI42	柏	土師器	坏	底　部		386
SI75	柏　木	土師器	坏	底　部	内面黒色処理	661
SI75	□	土師器	坏	体　部	判読不能	668
SK7	「万」	土師器	高台付坏	底　部	内面黒色処理	741
表採	七	土師器	高台付坏	体　部	内面黒色処理	858

刻書土器

SI74	弥	土師器	高台付坏	底部内・外面		655

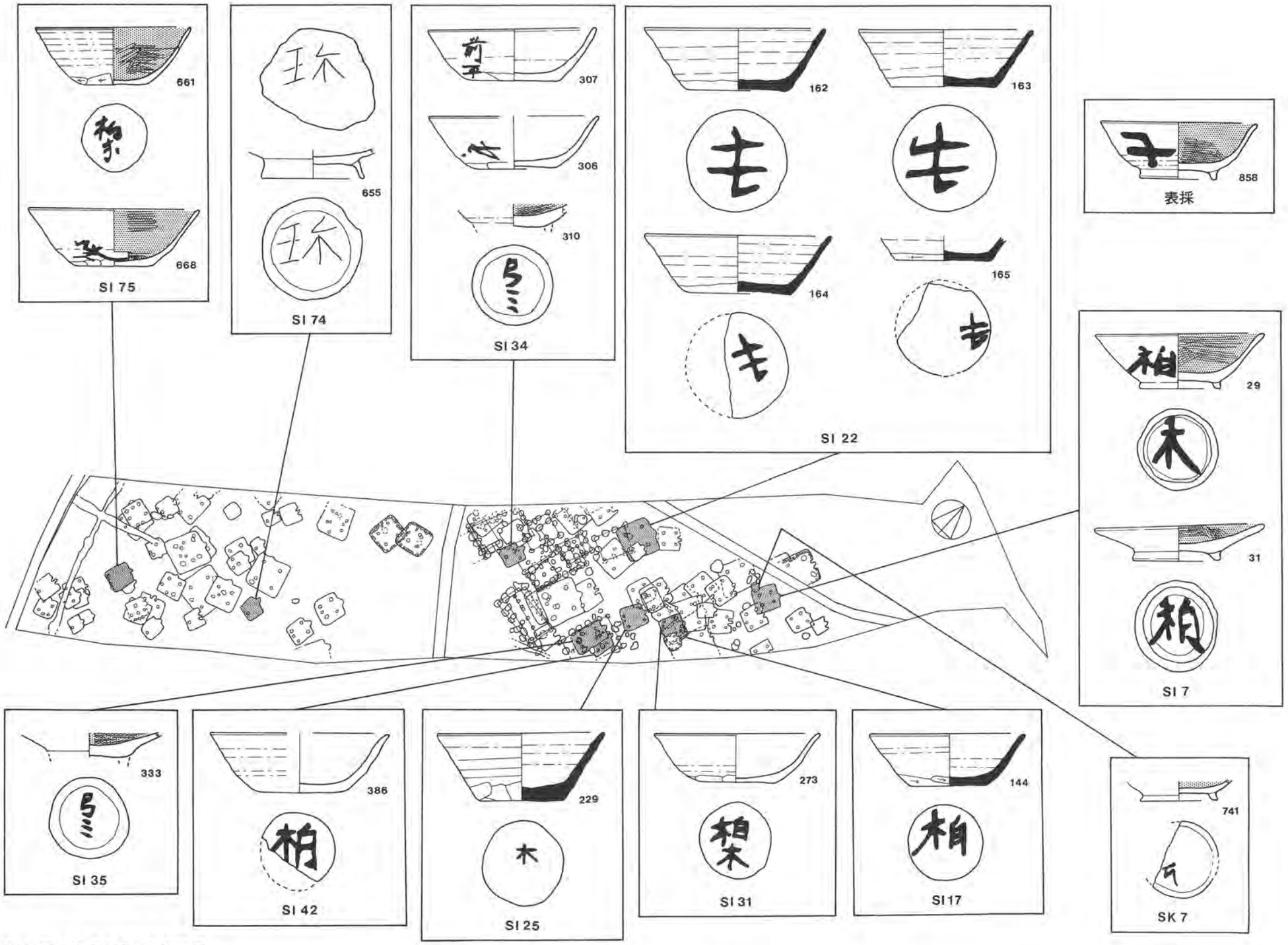
(注)・□は墨書があっても判読できないもの，あるいは欠損部があるため判読できないもの。「　」カ は推定を表す。

参考文献(順不同)

(1) 平川　南他　「古代集落と墨書土器－千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合－」 国立歴史民俗博物館研究報告第22集　1989年

(2) 茨城県立歴史館 「茨城県関係古代金石文資料集成－墨書・箆書－」 学術調査報告書 2　1985年

(3) 茨城町教育委員会 「向遺跡」 1989年



第254図　墨書土器出土位置図

結　　語

一般県道新川江戸崎線の道路改良工事地内に所在する遺跡の調査は，昭和61年度に当茨城県教育財団が実施した桜川地区の尾島貝塚ほか2遺跡の調査をはじめ，昭和63年度には江戸崎地区に所在する二の宮貝塚ほか2遺跡の発掘調査を実施した。今回対象となった柏木古墳群の発掘調査は，昭和63年度から平成元年度の9か月にわたって実施したもので，調査の結果，縄文時代から平安時代の遺構，遺物を検出し，多くの貴重な資料を得ることができた。

柏木古墳群からは，古墳時代前・後期及び奈良・平安時代に属する竪穴住居跡が81軒検出されている。集落は古墳時代前期に形成されはじめ，中期には一時中断し，後期から平安時代前期にかけては継続的に形成されている。集落が隆盛期をむかえるのは，平安時代前期である。その間，住居跡の規模や構造等も変化し，規模は大形のものから小形のものへ，構造については柱を床面に4本もつものから施設外に設けるものへと変化している。その他，縄文時代の陥し穴6基，古墳時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡13棟，土坑39基，溝3条が検出されている。

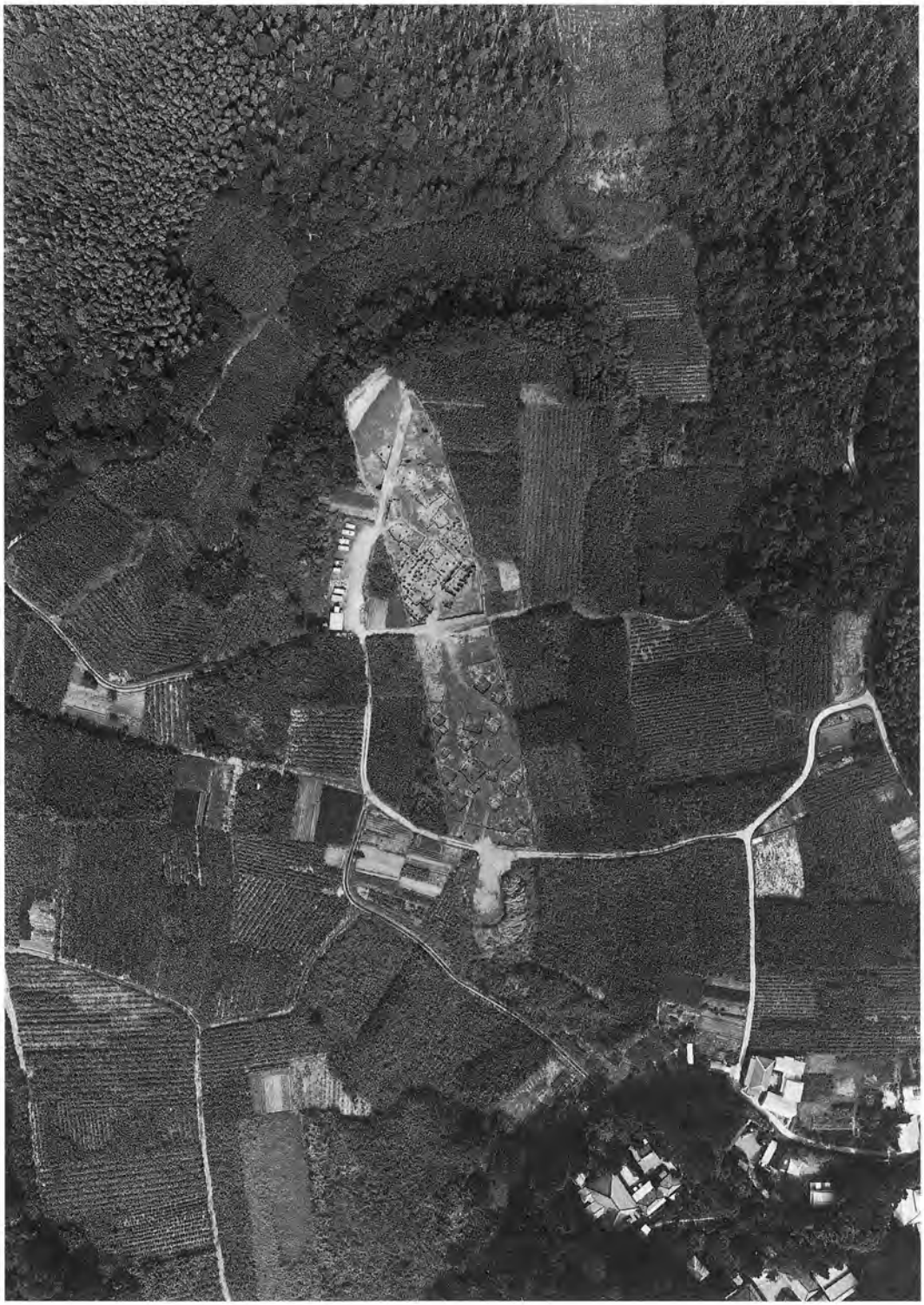
遺物は，土師器，須恵器を中心に豊富に出土している。特に墨書土器，刻書土器が合わせて20点出土しており，その中に現在の地名と合致する「柏木」あるいは「柏」と墨書された土器が出土していることは注目される。その他，東海系の須恵器が少数ではあるが出土している。

平安期に属する掘立柱建物跡の検出，現地名と合致する墨書土器及び東海系須恵器の出土，更には古くから交通の要衝として栄えた古渡地区（信太郡の郡衙跡と言われている下君山は小野川上流に所在している。）を臨む遺跡の立地等を考え合わせる時，柏木の台地に集落を形成し，生活を営んでいた集団は，政治的色合いの濃い，文化的にも高い水準にあったことが窺われる。

最後に，本報告書が，今後，当地域の歴史を解明するうえで，ささやかな一助となれば幸いである。

なお，本報告書をまとめるにあたり，桜川村教育委員会をはじめ，関係機関並びに関係各位から御指導，御協力を賜ったことに対し，文末ながら深く感謝の意を表する次第である。

写　真　図　版



柏木古墳群全景（調査後）

調査前全景（北から）

鍬入れ式

試掘風景

遺構確認状況(1)（中央から南）

遺構確認状況(2)（南から北）

遺構確認状況(3)（北から南）

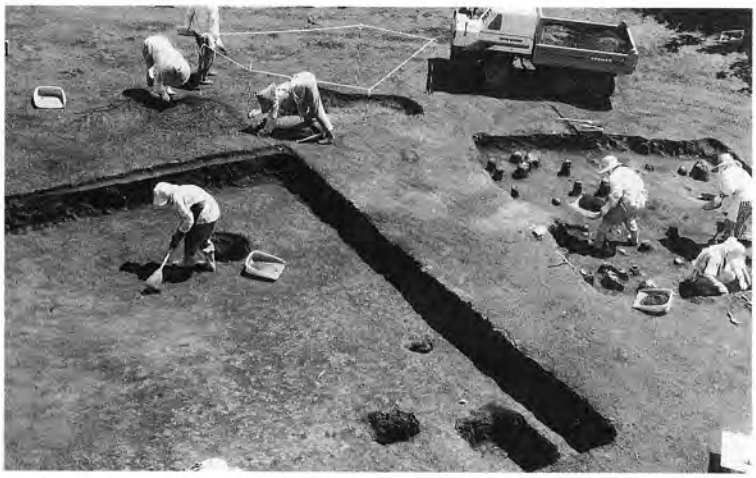
遺構確認状況(4)（中央から北）

試掘状況

遺構確認作業

作業風景(1)

作業風景(2)



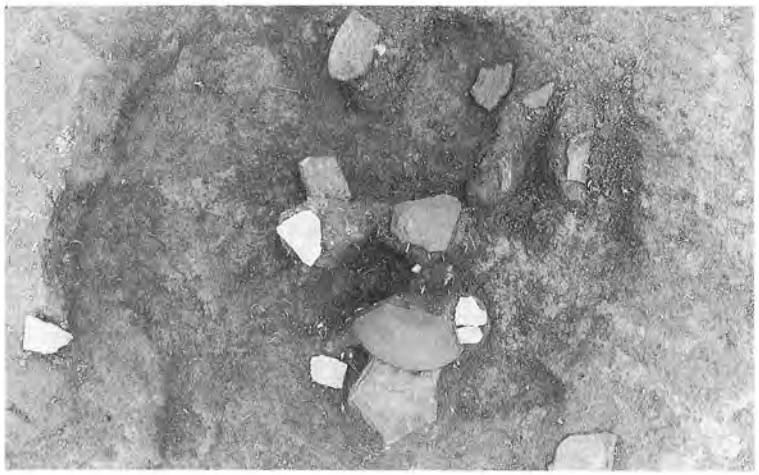
作業風景(3)

見学風景

第1・2号住居跡

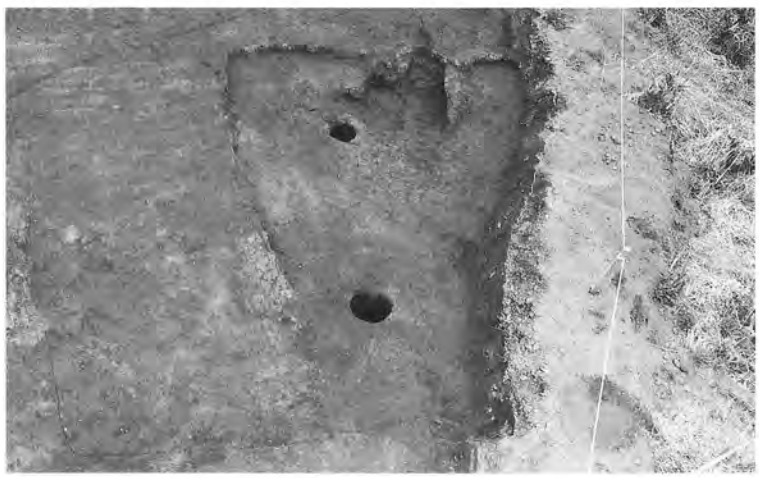
第1号住居跡
遺物出土状況

第3号住居跡



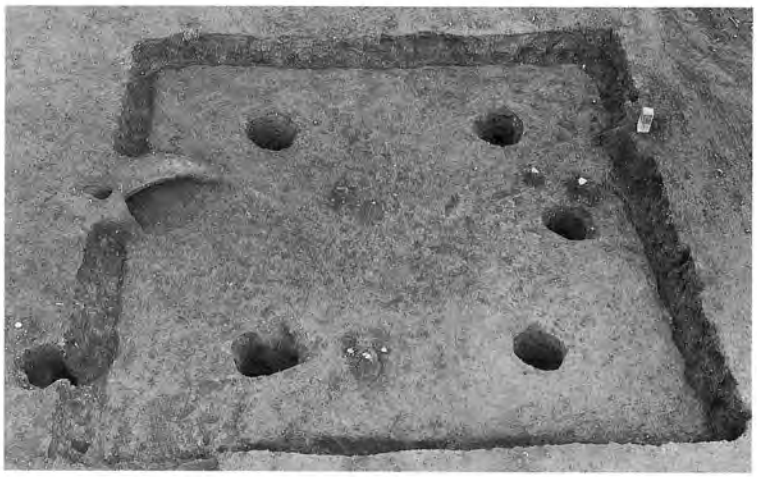
第 3 号住居跡
竈遺物出土状況

第 5 号住居跡



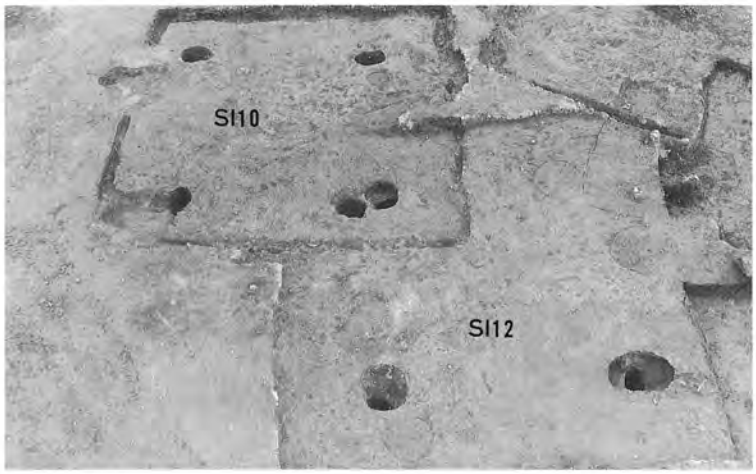
第 6 号住居跡

第７号住居跡



第８号住居跡
遺物出土状況

第９号住居跡
遺物出土状況

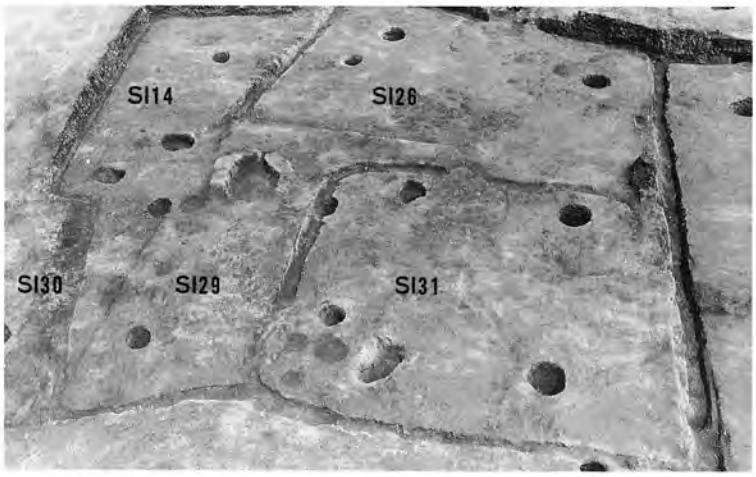


第10・12号住居跡

第11号住居跡

第11号住居跡
遺物出土状況

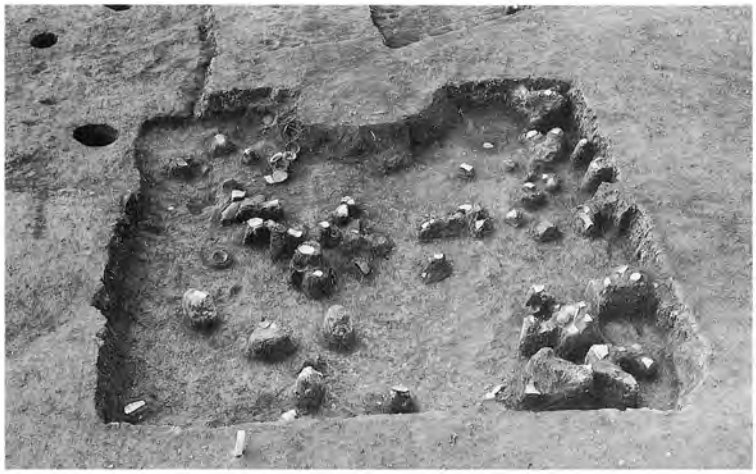
第13号住居跡



第14・26・29・30・31号住居跡

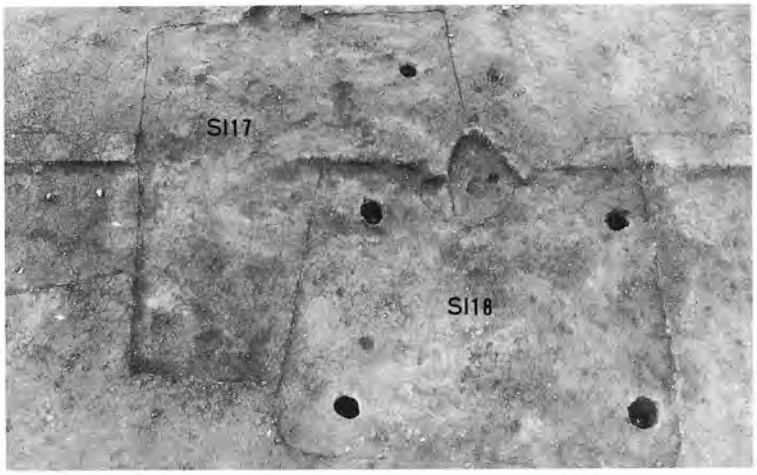
第15号住居跡

第15号住居跡
遺物出土状況



第16号住居跡
遺物出土状況(1)

第16号住居跡
遺物出土状況(2)

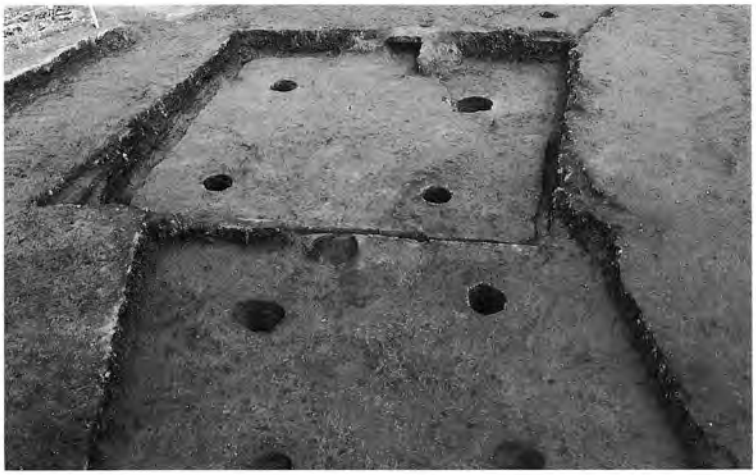


第17・18号住居跡

第17号住居跡
竈遺物出土状況

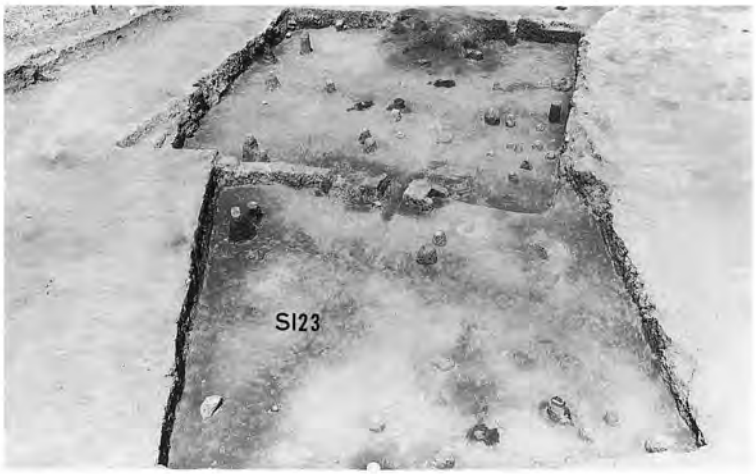
第19号住居跡

第21・27号住居跡



第22号住居跡

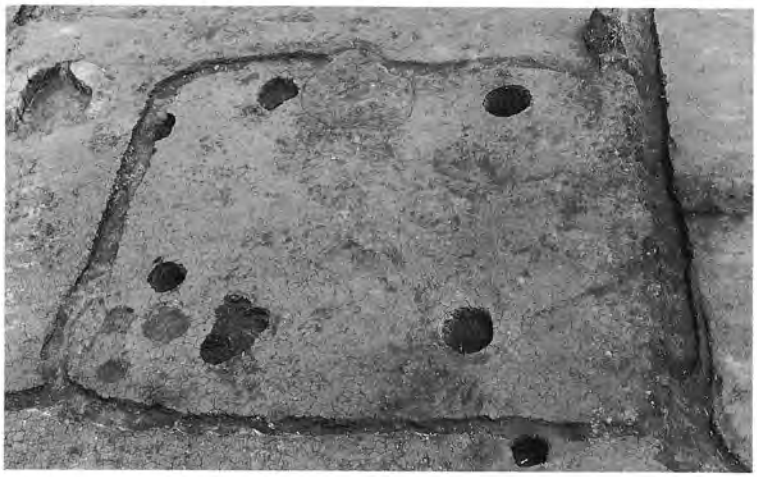
第23号住居跡



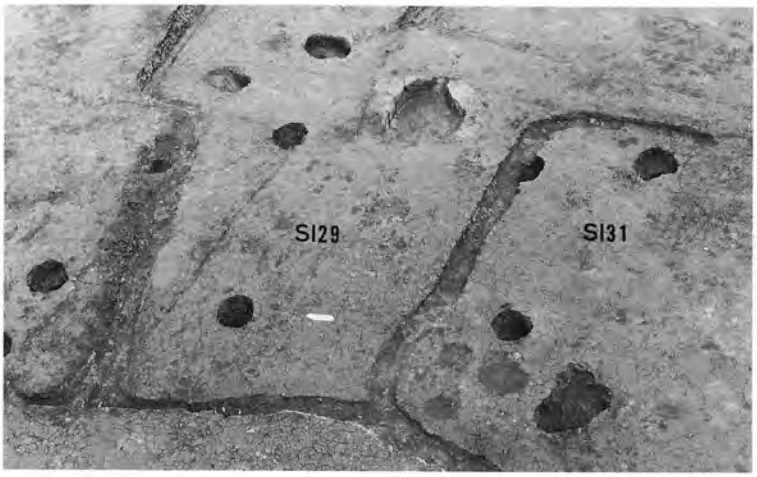
第22・23号住居跡
遺物出土状況

第25号住居跡

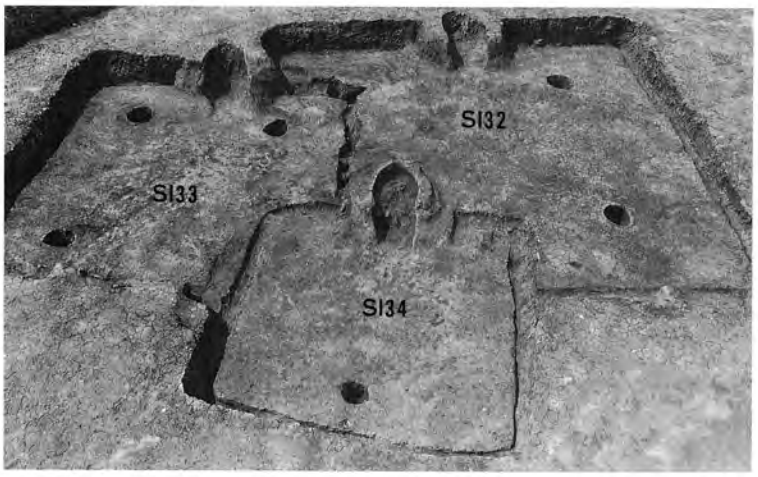
第25号住居跡
遺物出土状況



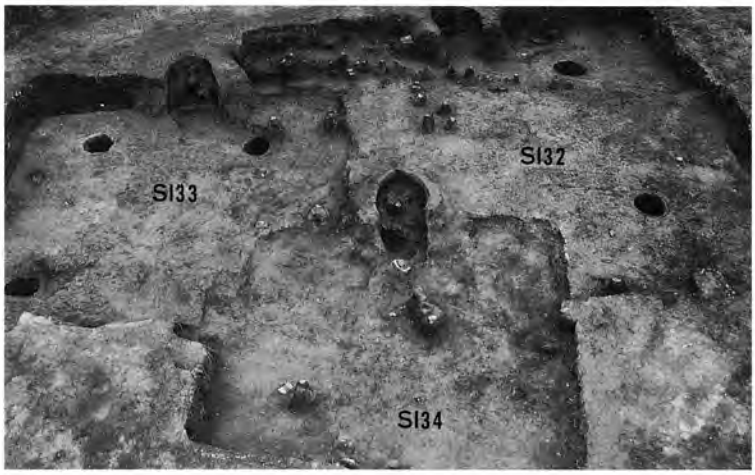
第26号住居跡



第29号住居跡



第32・33・34号住居跡

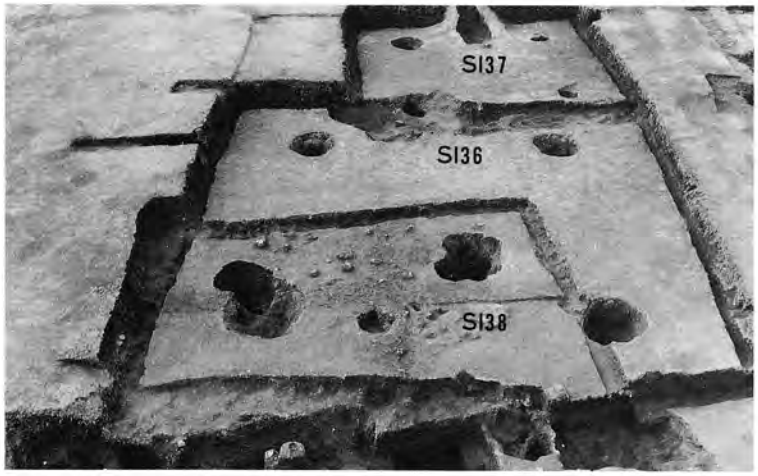


第32・33・34号住居跡
遺物出土状況

第35号住居跡

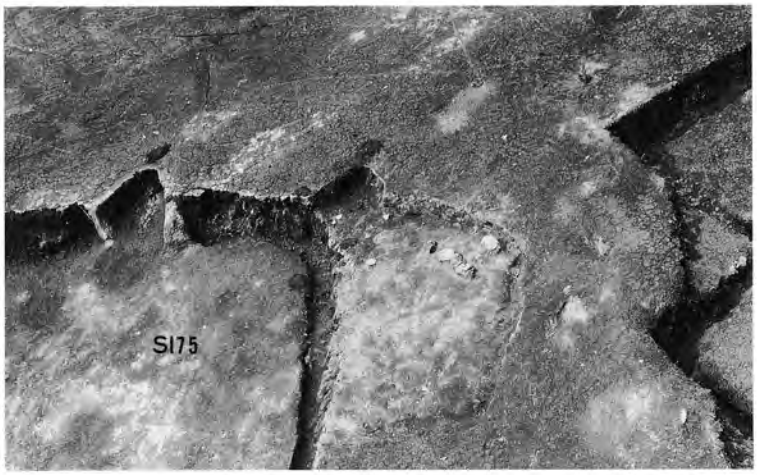
第35号住居跡
竈遺物出土状況(1)

第35号住居跡
竈遺物出土状況(2)

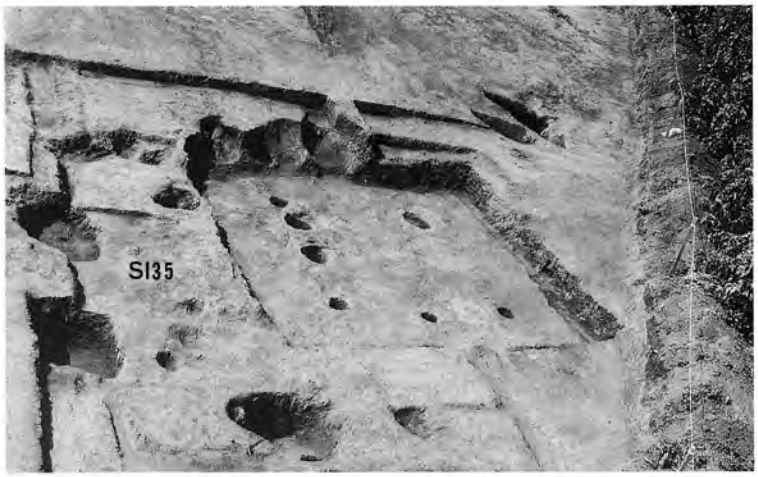


第36・37・38号住居跡

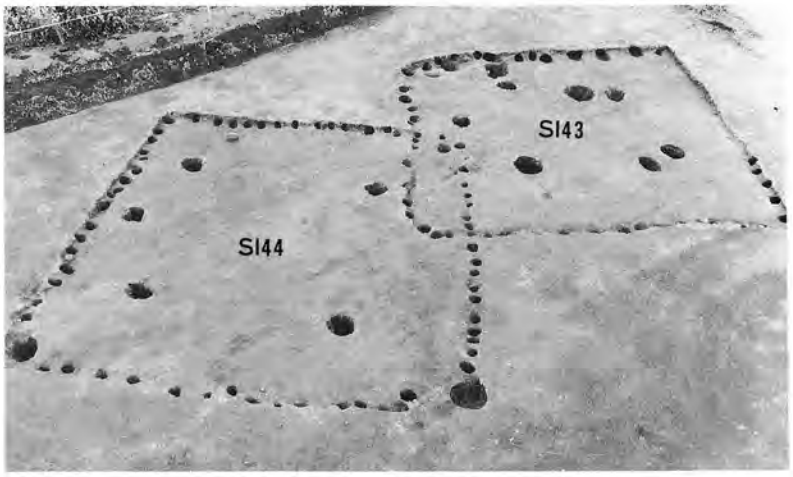
第39号住居跡



第40号住居跡
遺物出土状況

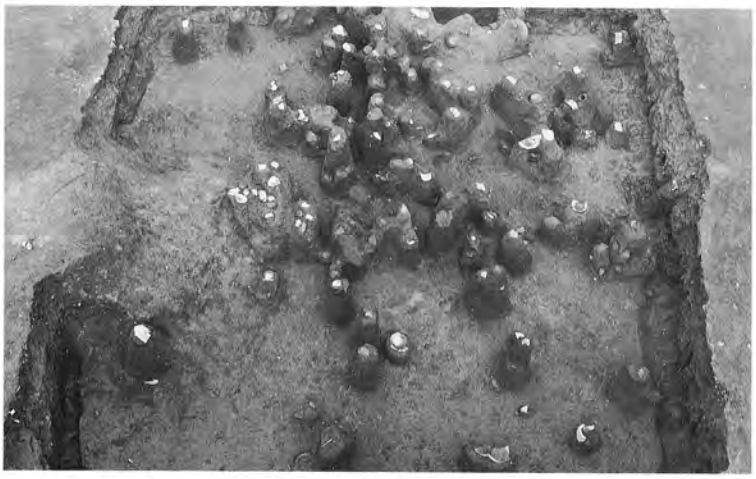


第42号住居跡

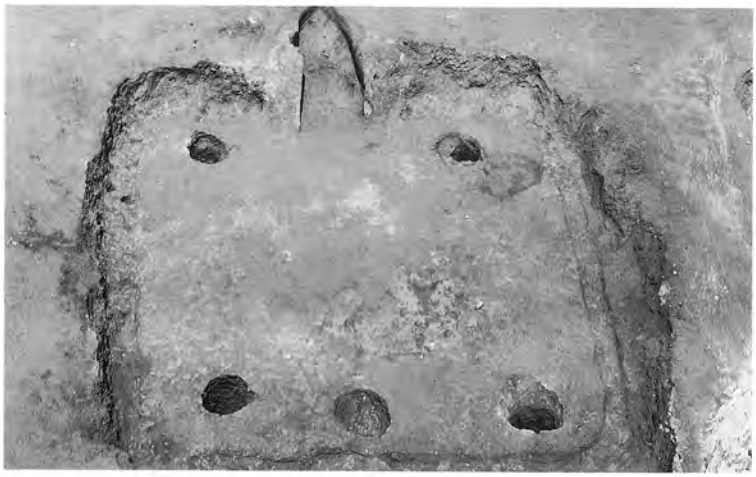


第43・44号住居跡

第47号住居跡



第47号住居跡
遺物出土状況



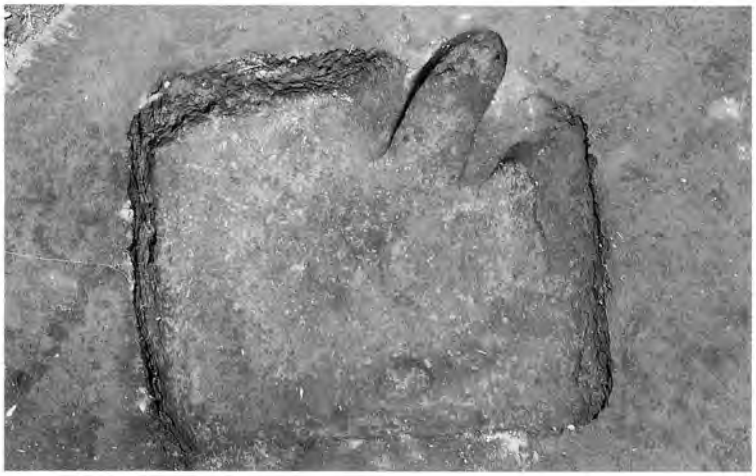
第49号住居跡

第49号住居跡
遺物出土状況

第50号住居跡

第51号住居跡

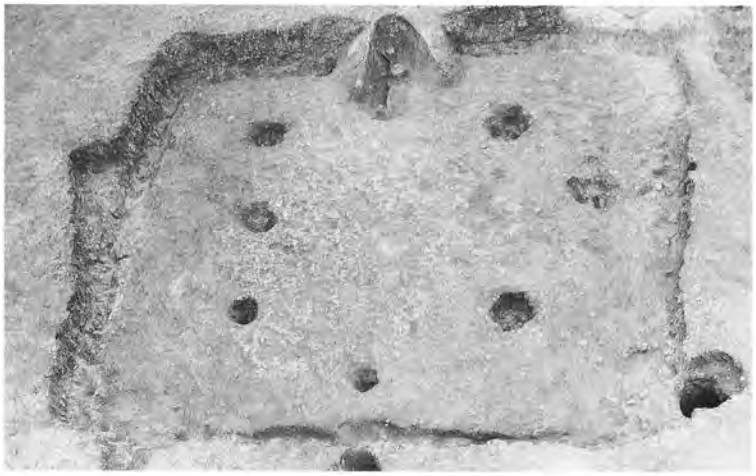
第51号住居跡
遺物出土状況



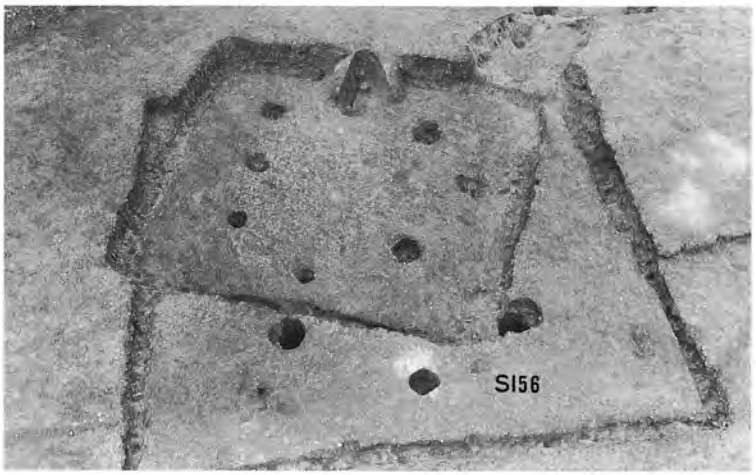
第52号住居跡

第52号住居跡
遺物出土状況

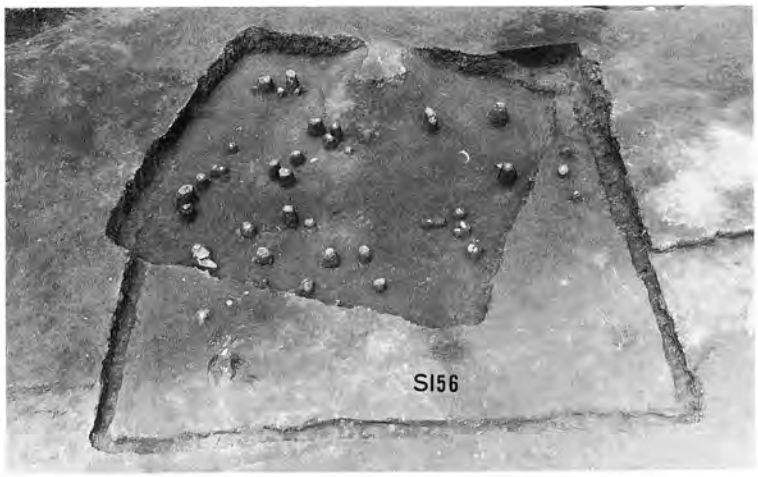
第54号住居跡
遺物出土状況



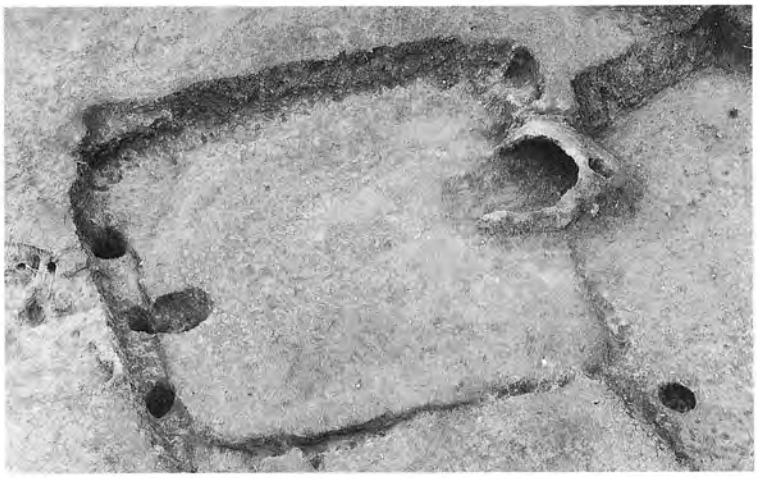
第55号住居跡



第55・56号住居跡

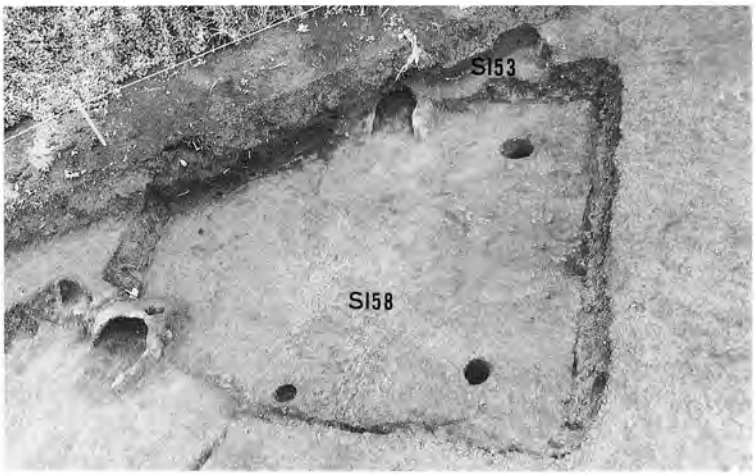


第55・56号住居跡
遺物出土状況



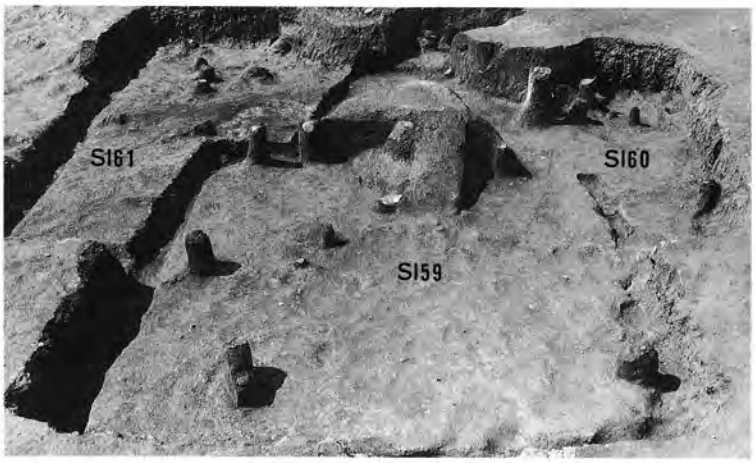
第57号住居跡

第57号住居跡
遺物出土状況

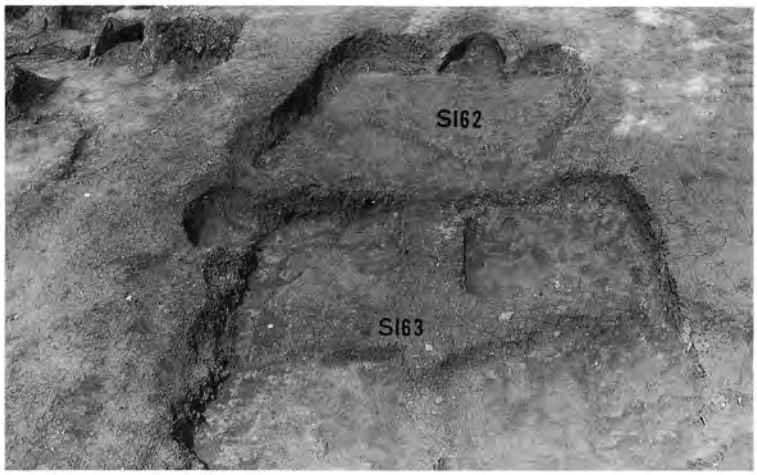


第53・58号住居跡

第58号住居跡
遺物出土状況

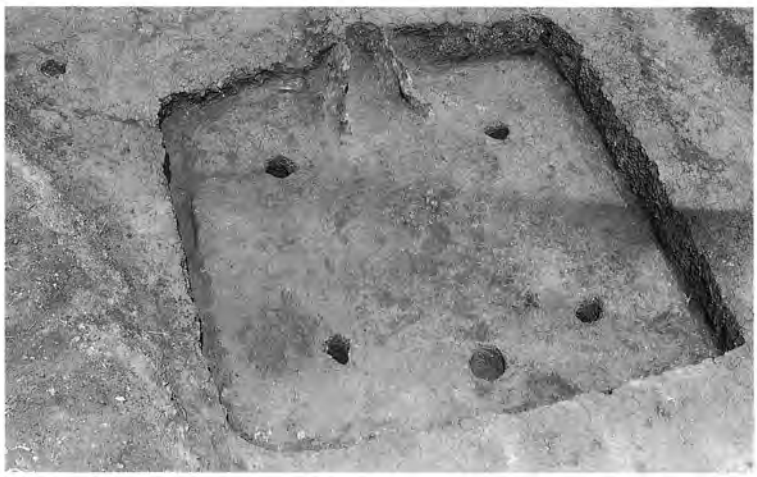


第59・60・61号住居跡
遺物出土状況



第62・63号住居跡

第64号住居跡



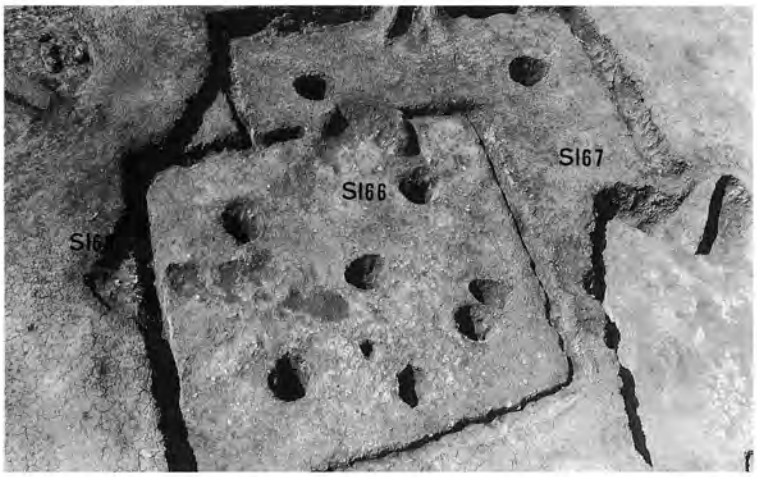
第65号住居跡

第65号住居跡
遺物出土状況(1)

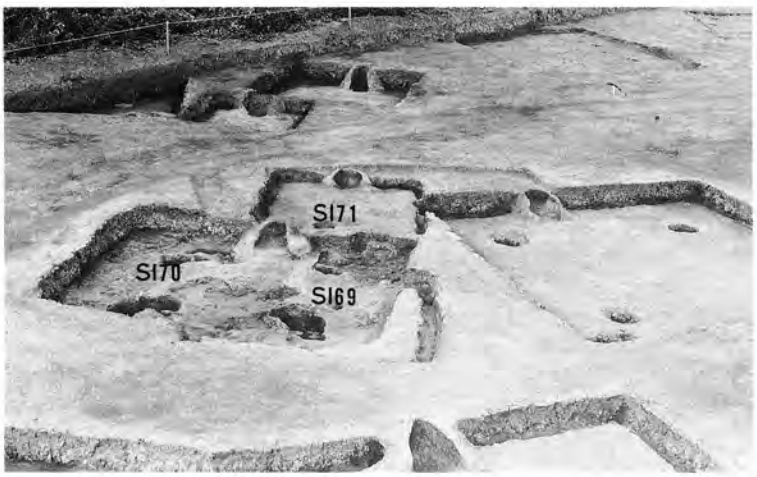
第65号住居跡
遺物出土状況(2)

第65号住居跡
遺物出土状況(3)

第65号住居跡
竈遺物出土状況



第66・67・68号住居跡

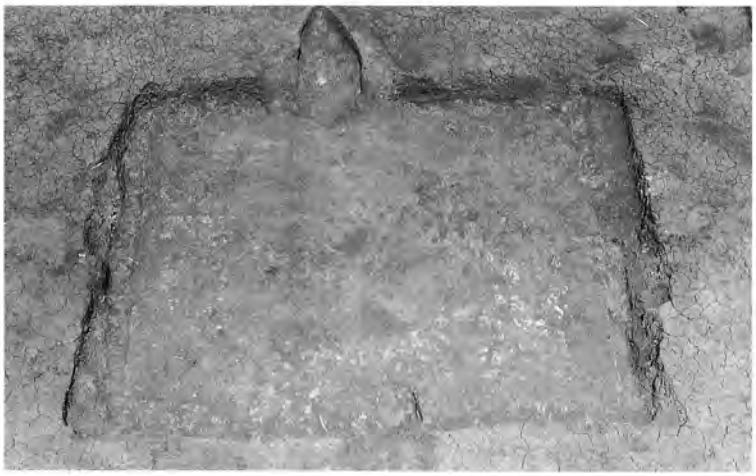


第69・70・71号住居跡

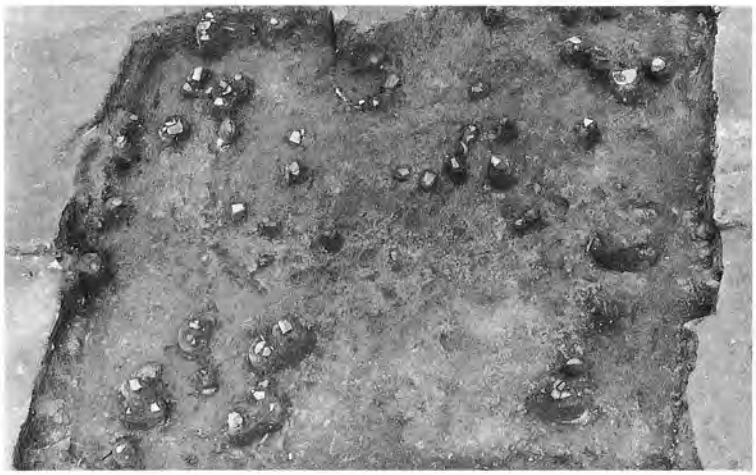
第72号住居跡

第72号住居跡
竈遺物出土状況

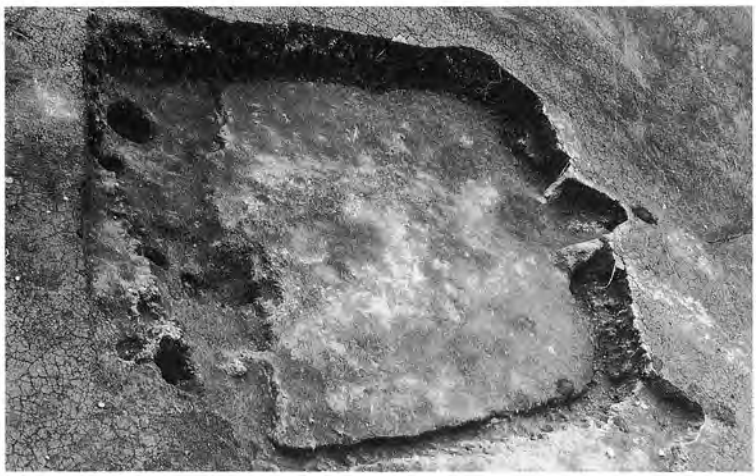
第73号住居跡



第74号住居跡



第74号住居跡
遺物出土状況



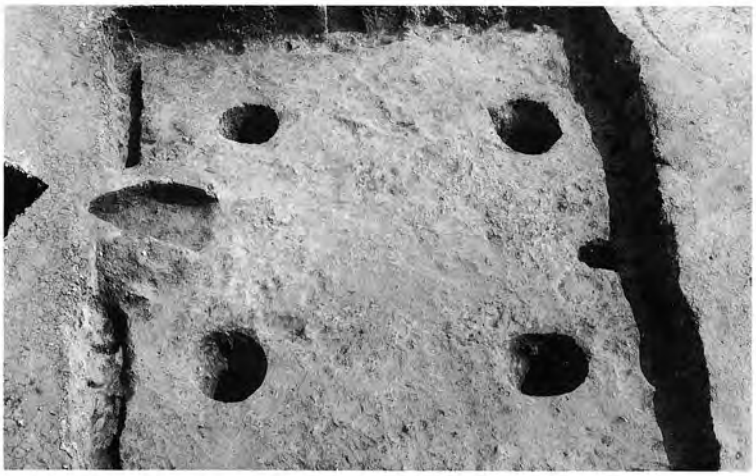
第75号住居跡

第75号住居跡
遺物出土状況

第76号住居跡

第76・77号住居跡

第78号住居跡

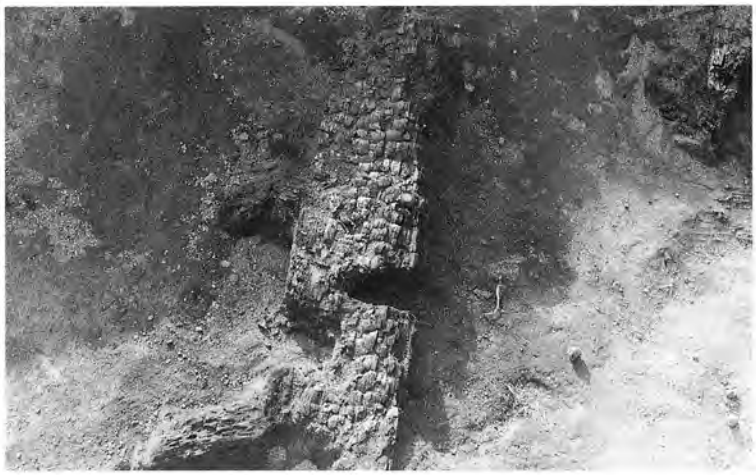


第79号住居跡

第80号住居跡

第80号住居跡
炭化材出土状況(1)

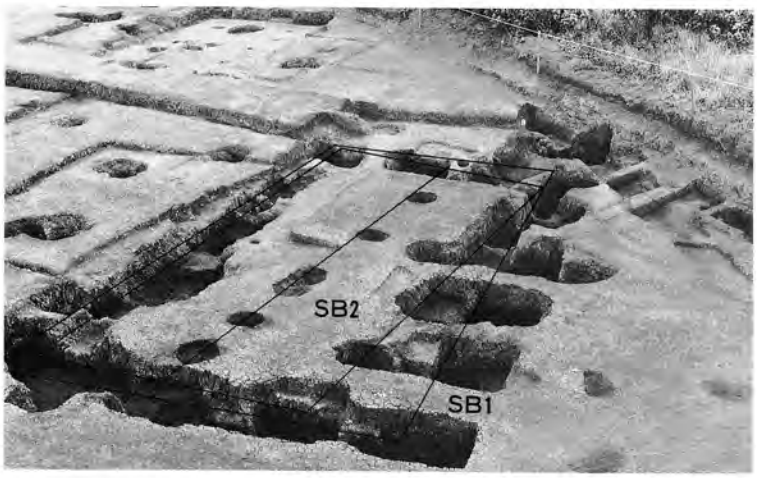
第80号住居跡
炭化材出土状況(2)



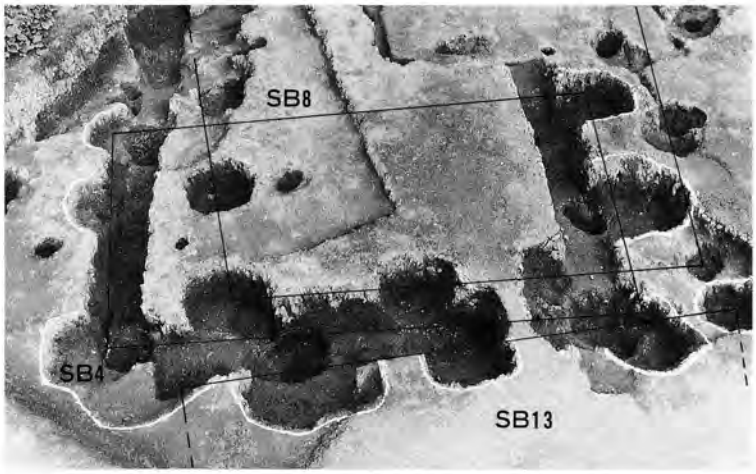
第80号住居跡
炭化材出土状況(3)

第80号住居跡
炭化材出土状況(4)

第81号住居跡

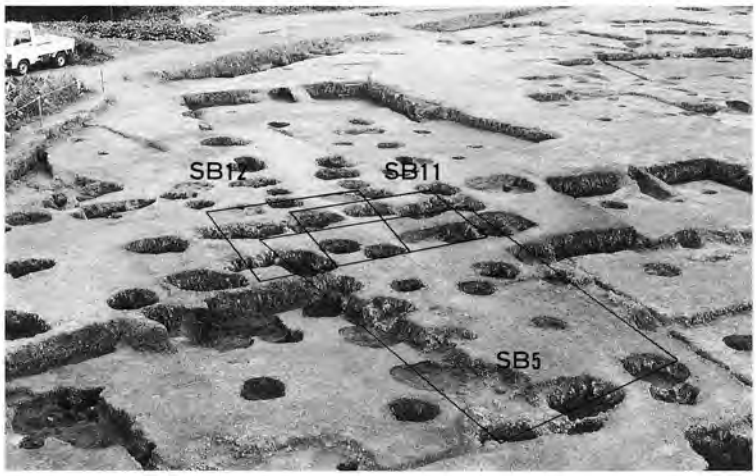


第1・2号掘立柱建物跡



第4・8・13号掘立柱建物跡

第3・6・9号掘立柱建物跡



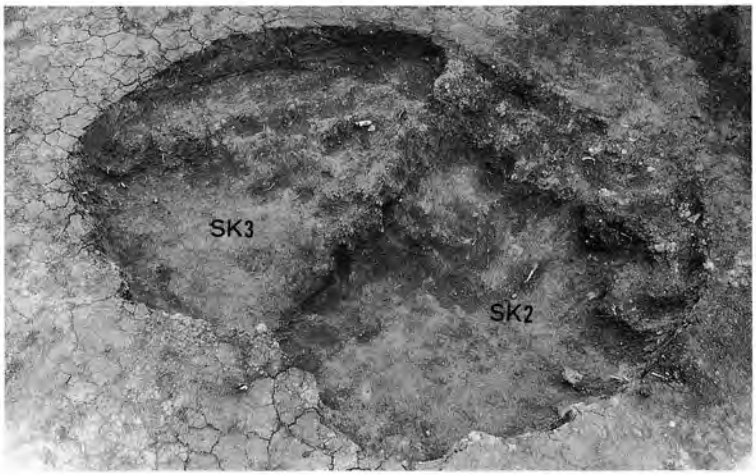
第5・11・12号掘立柱建物跡

第１号土坑（陥し穴）

第７号土坑（陥し穴）

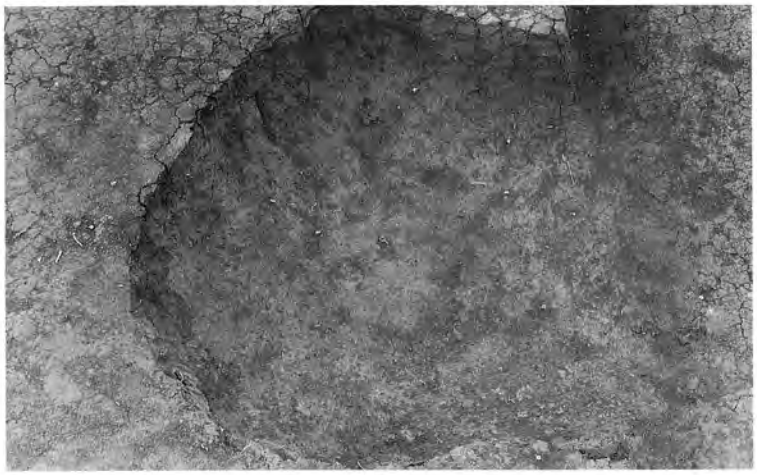
第56号土坑（陥し穴）

第200号土坑（陥し穴）



第２・3号土坑

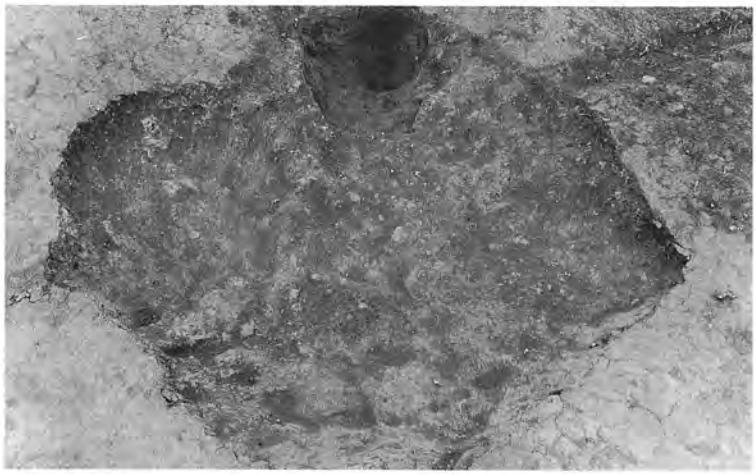
第４号土坑



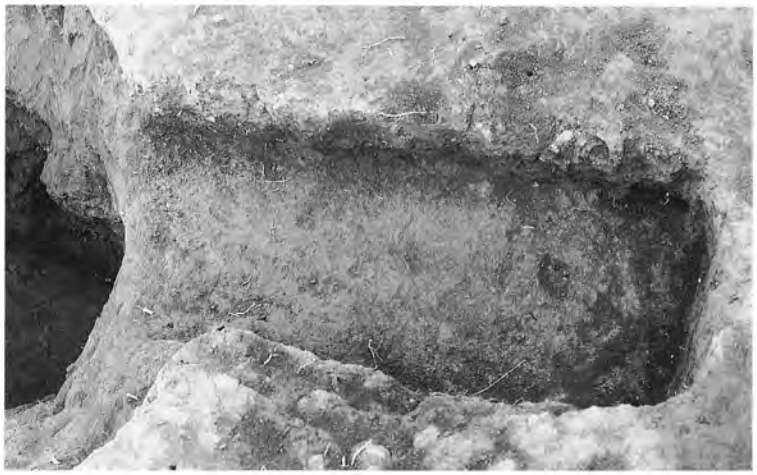
第 5 号土坑

第 6 号土坑

第 9 号土坑



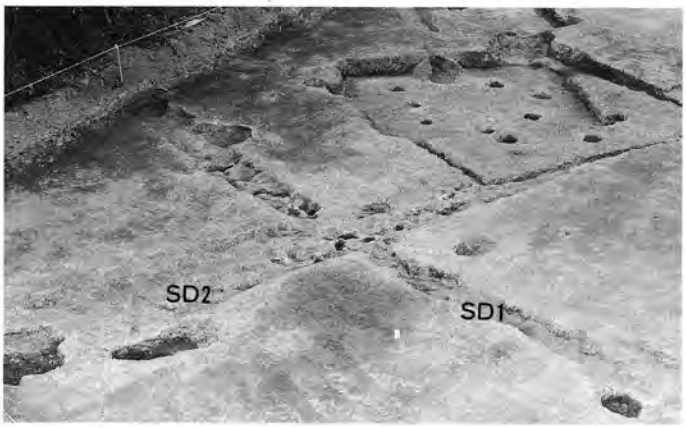
第10号土坑



第14号土坑

第15号土坑

第16号土坑

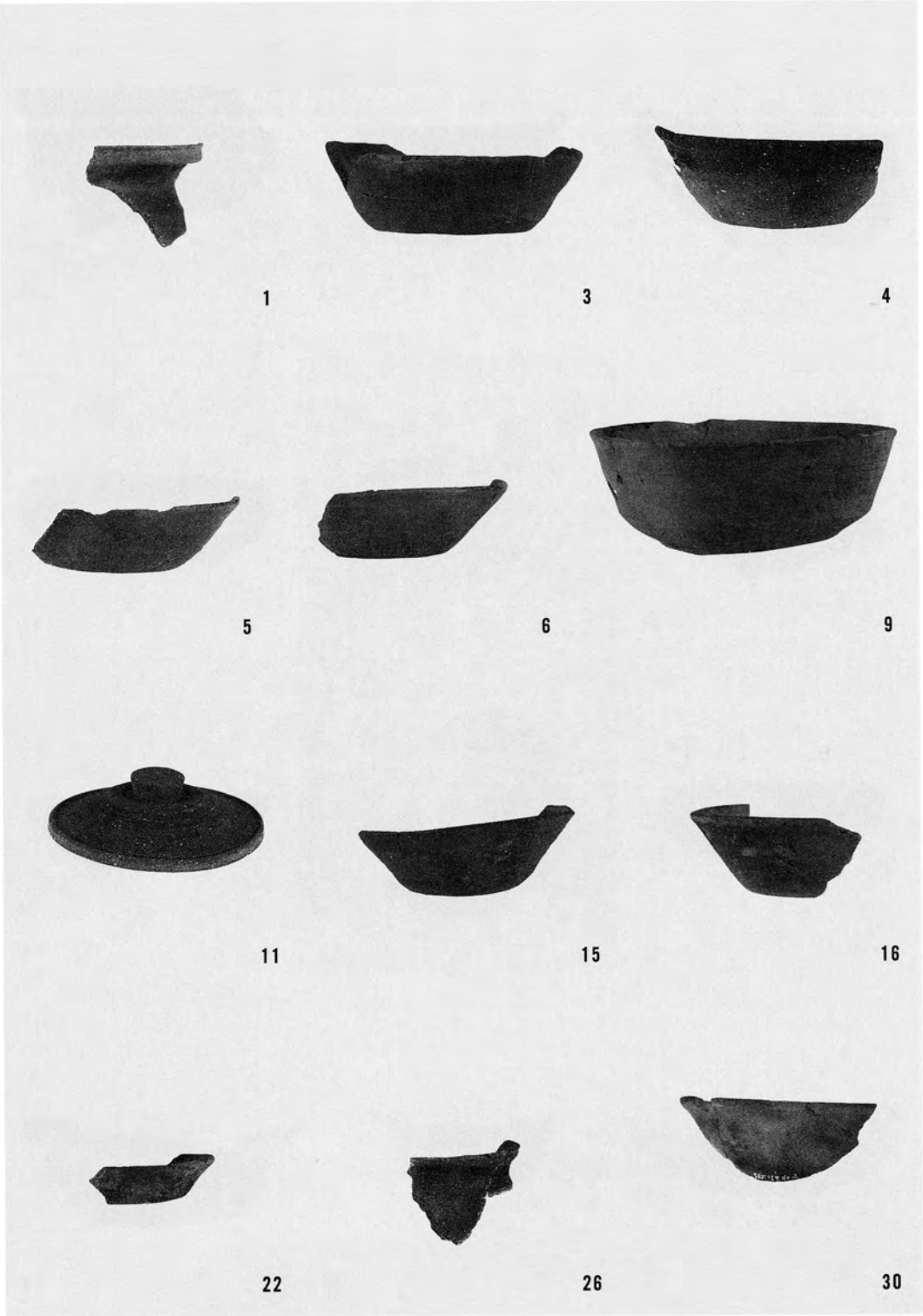


第1・2号溝

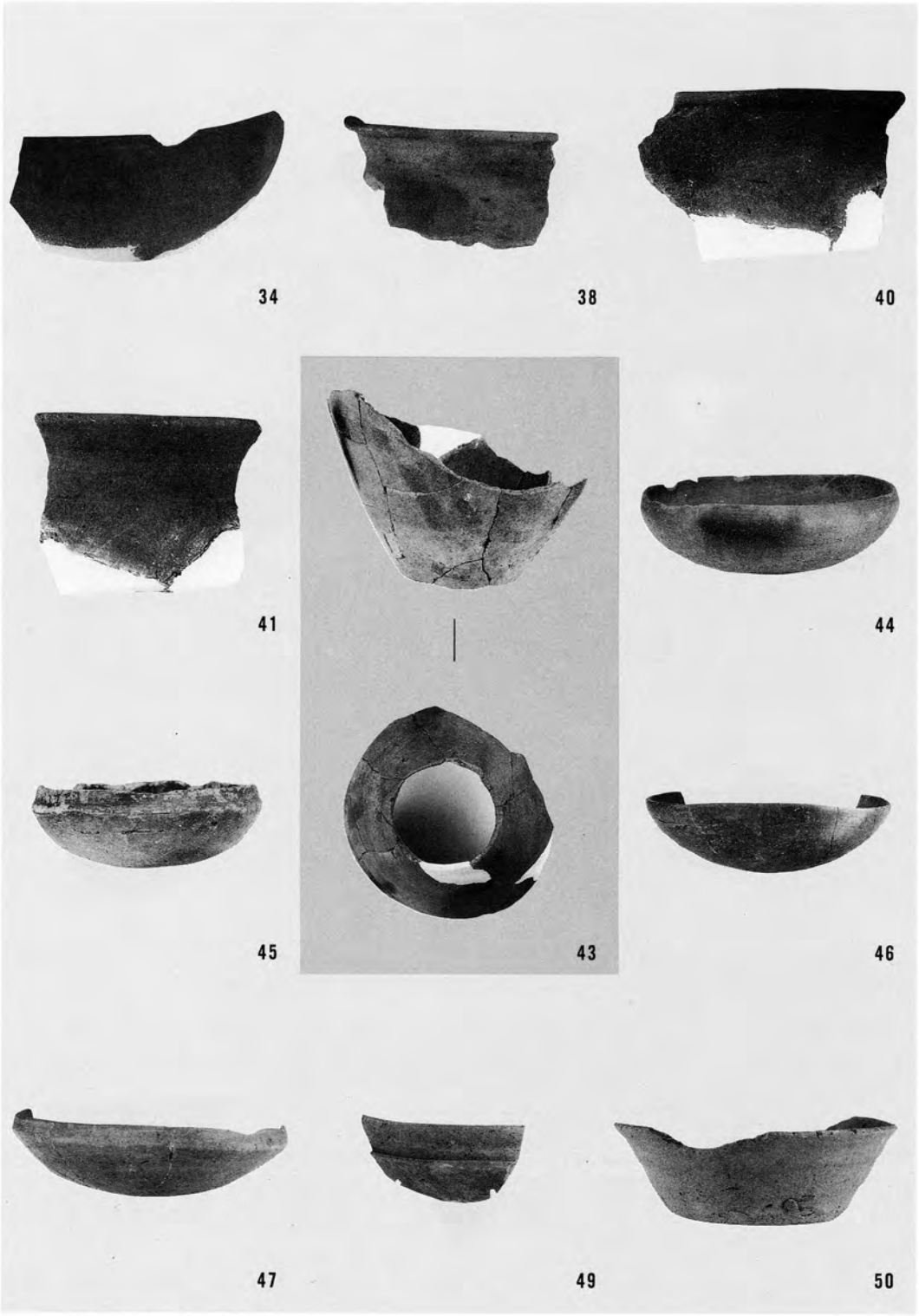
第1号溝

調査後全景（中央から北）

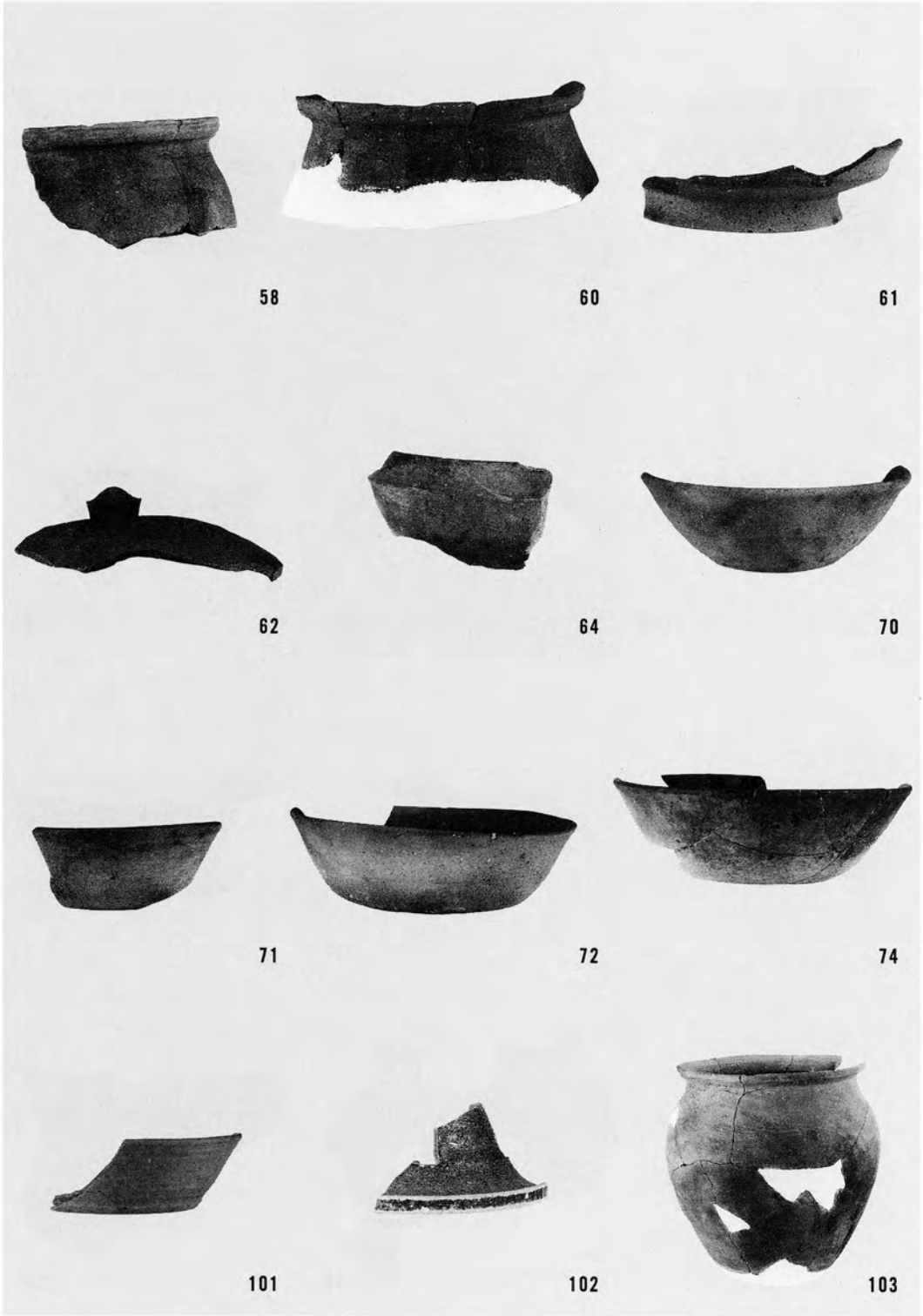
調査後全景（南から北）



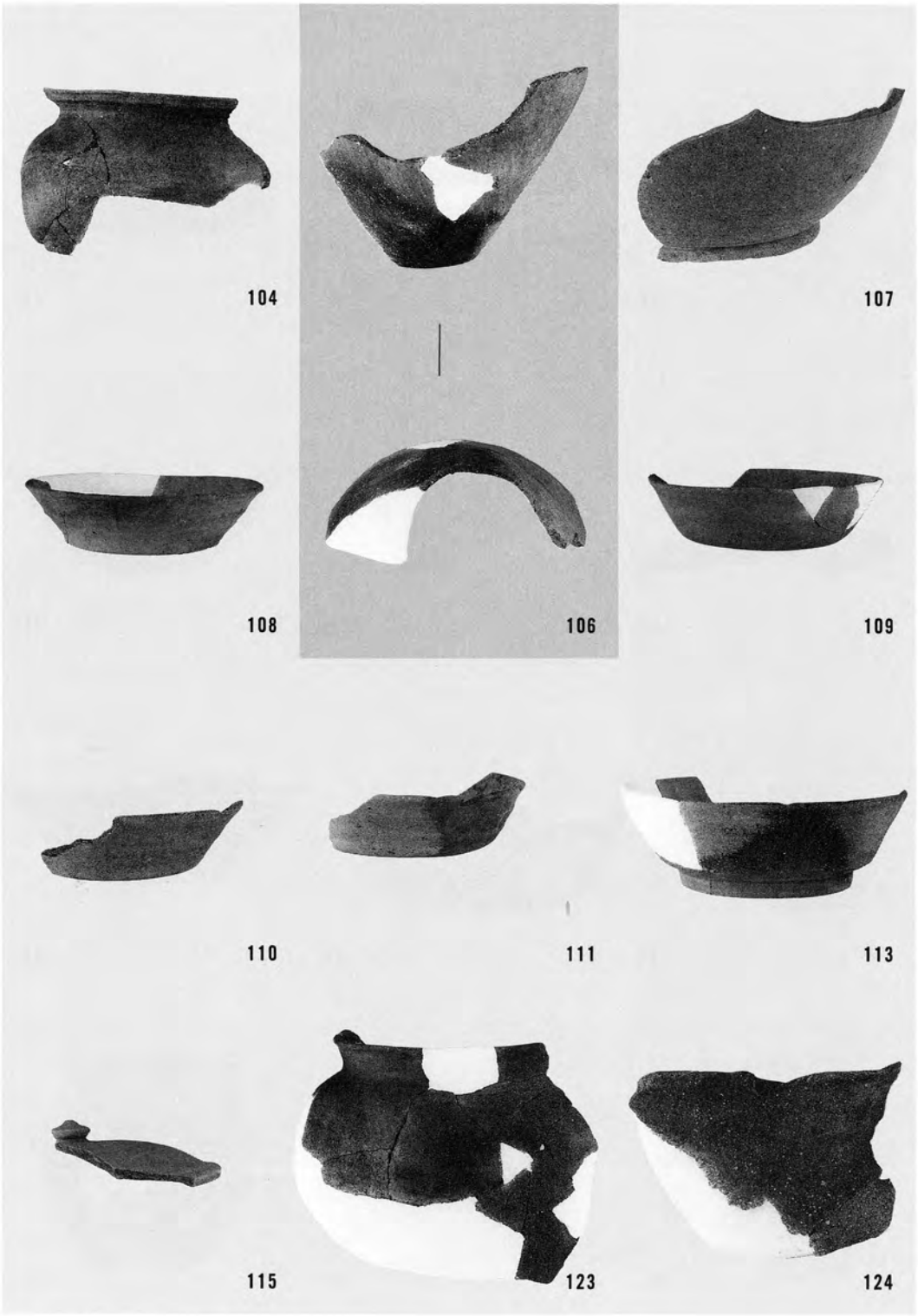
第1・3・5～7号住居跡出土土器



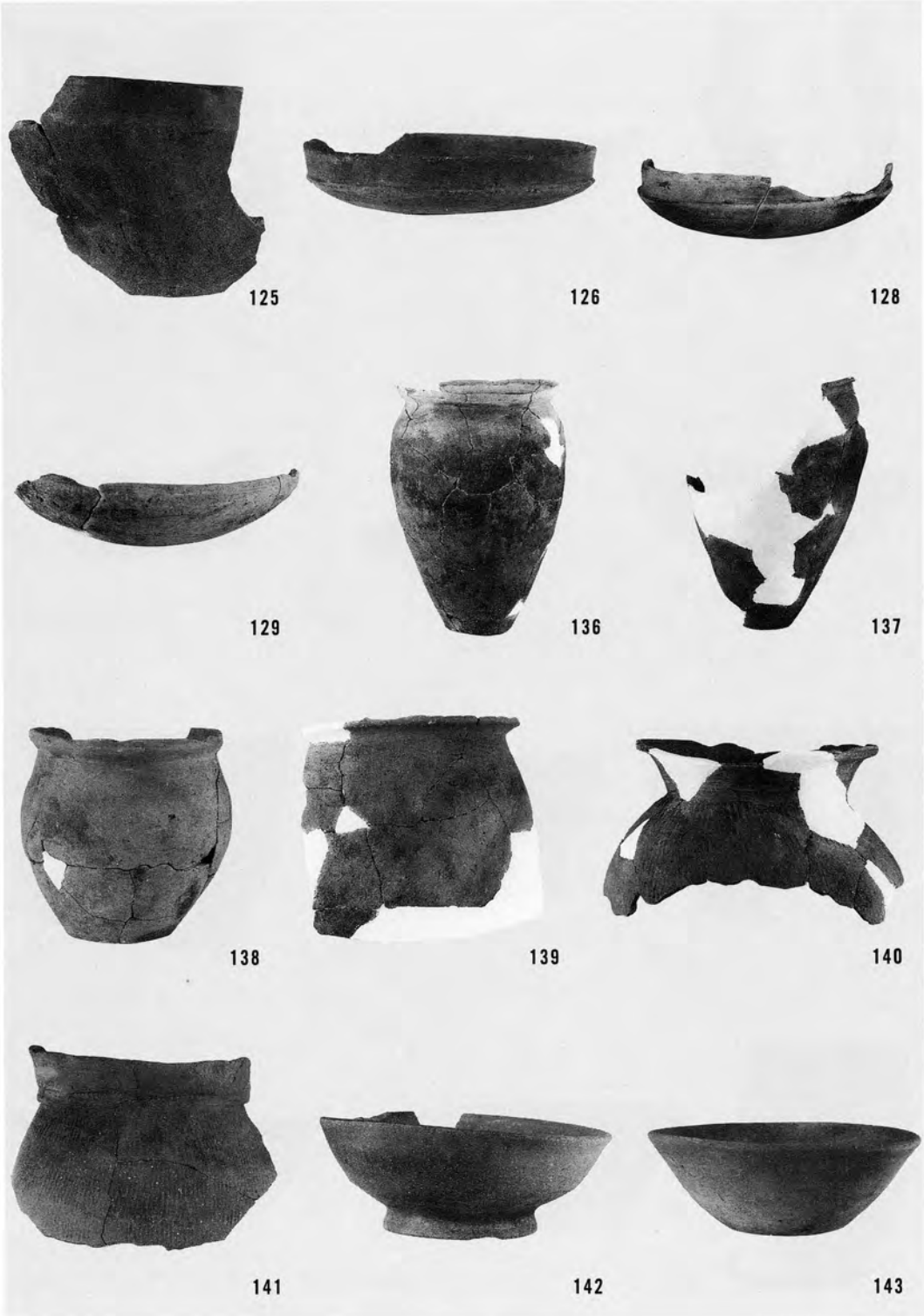
第8・9号住居跡出土土器



第10・11・14・15号住居跡出土土器

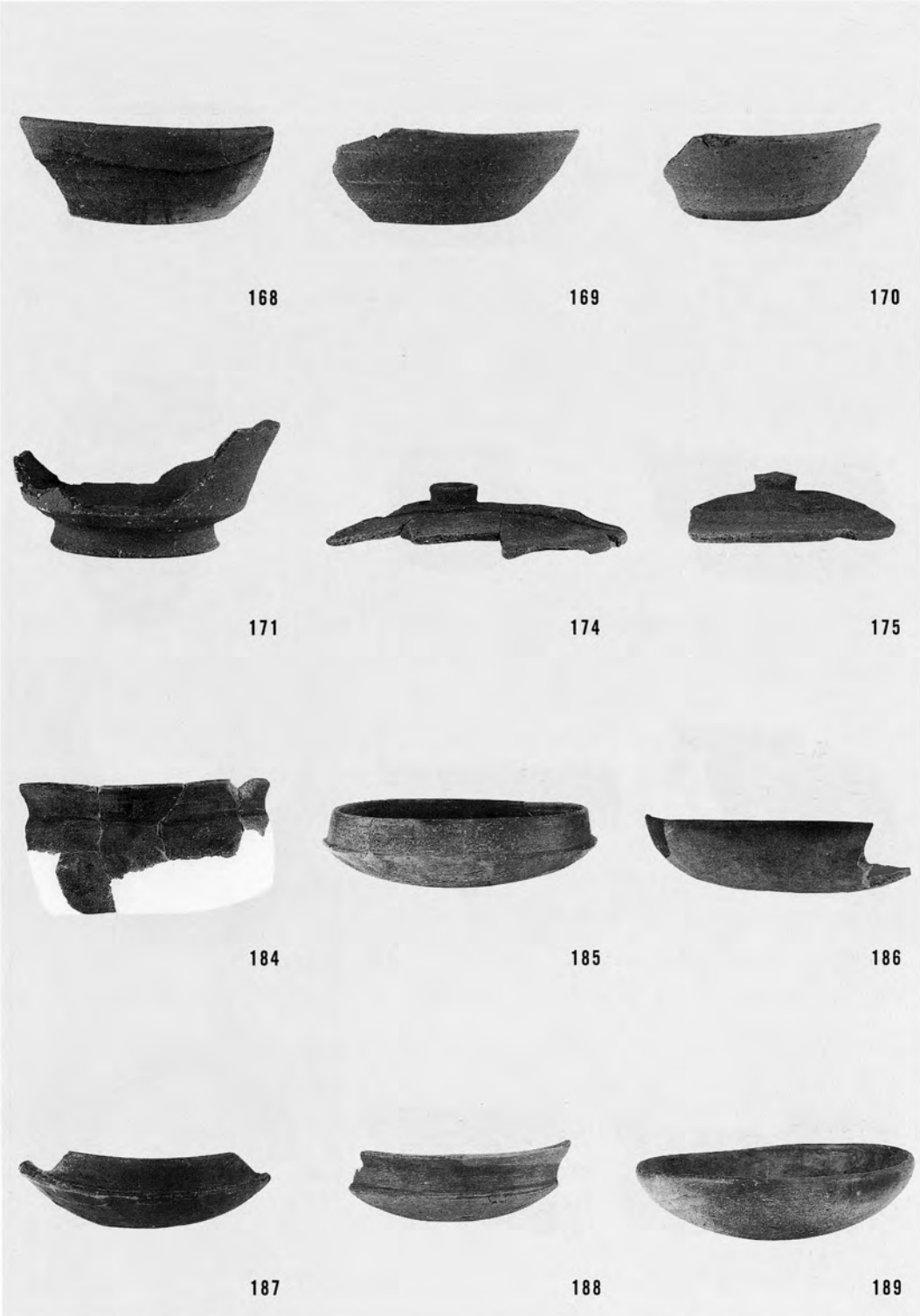


第15・16号住居跡出土土器



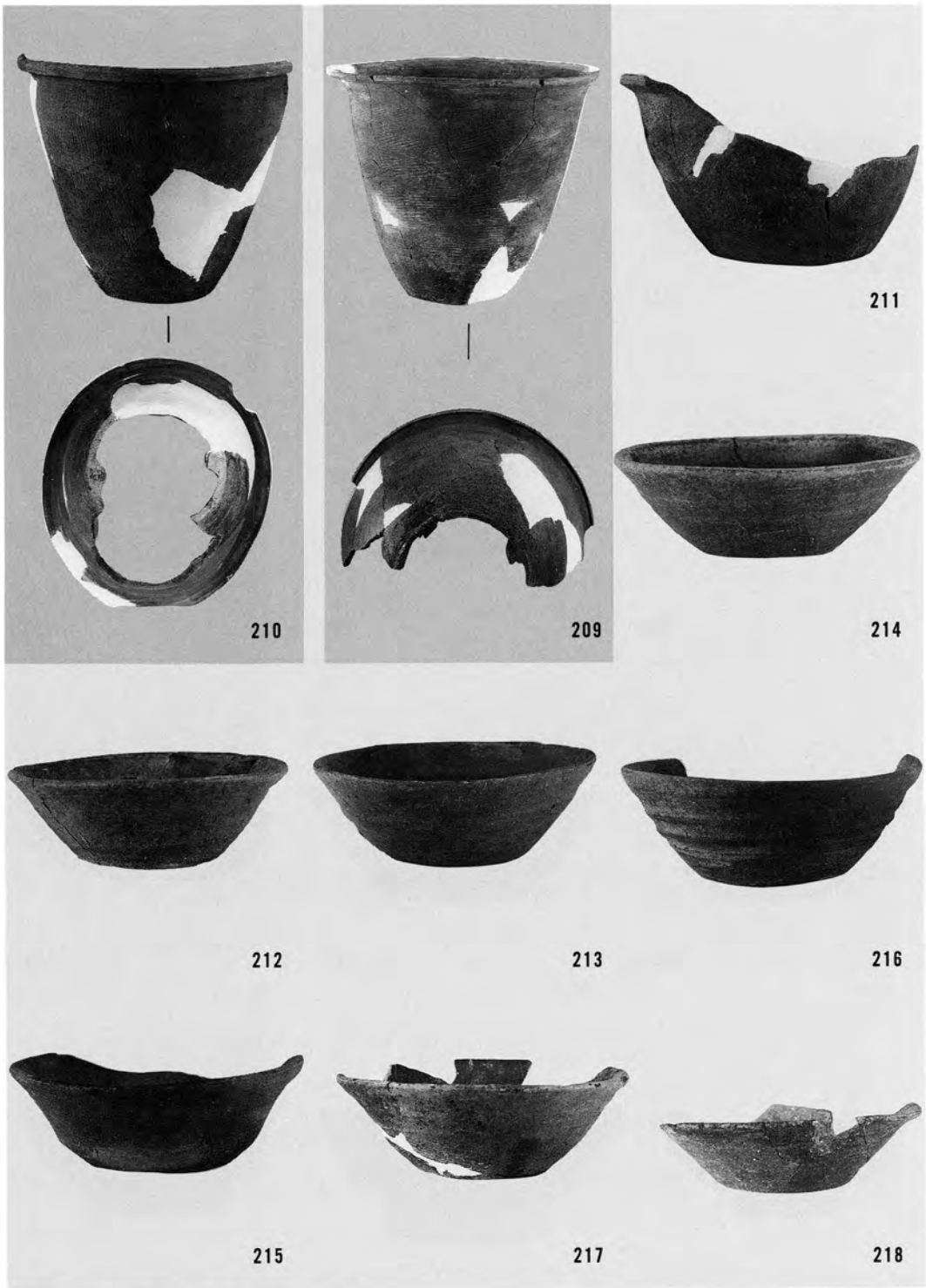
第16・17号住居跡出土土器

第18・19・21・22号住居跡出土土器

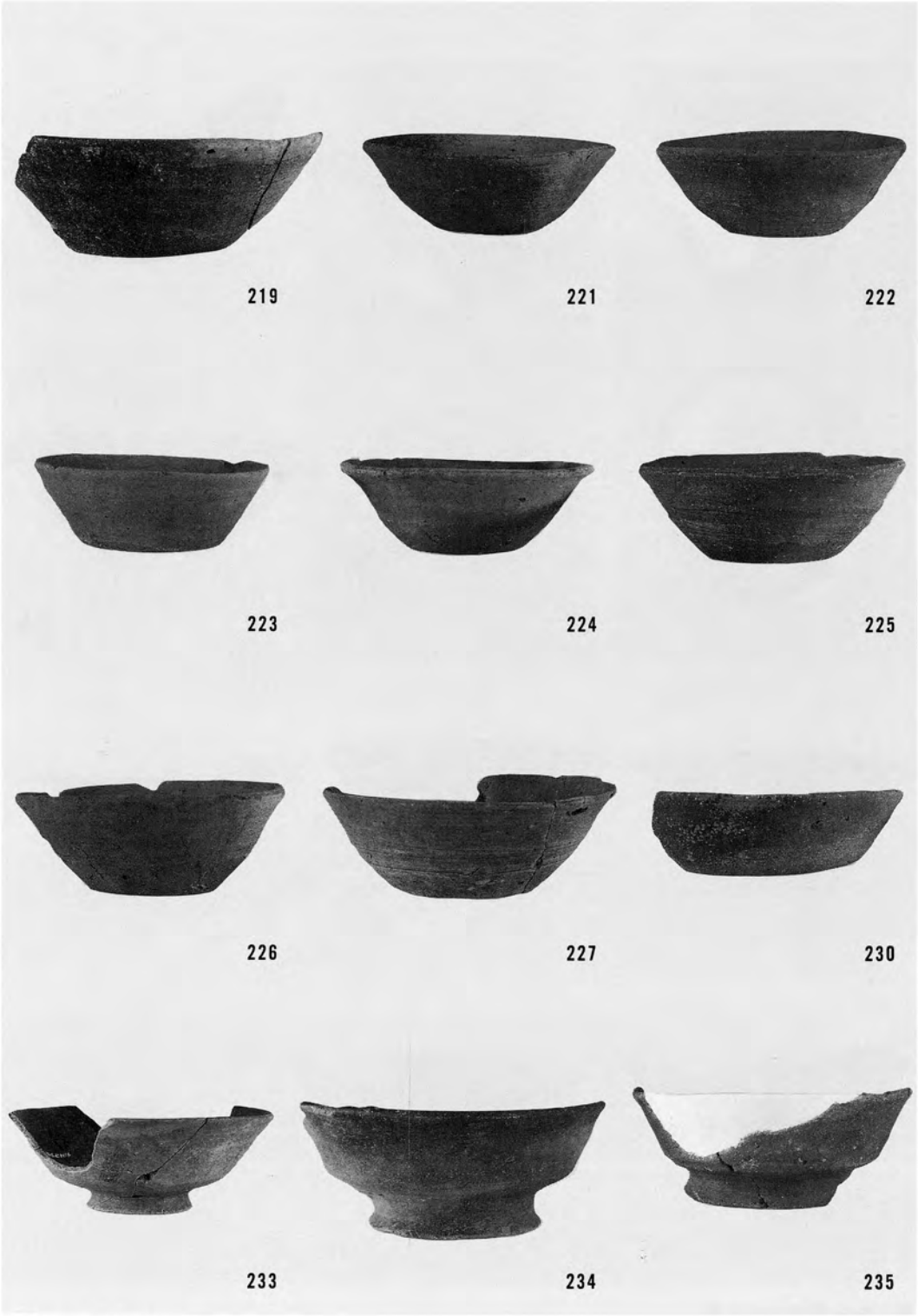


第22・23号住居跡出土土器

第23・25号住居跡出土土器

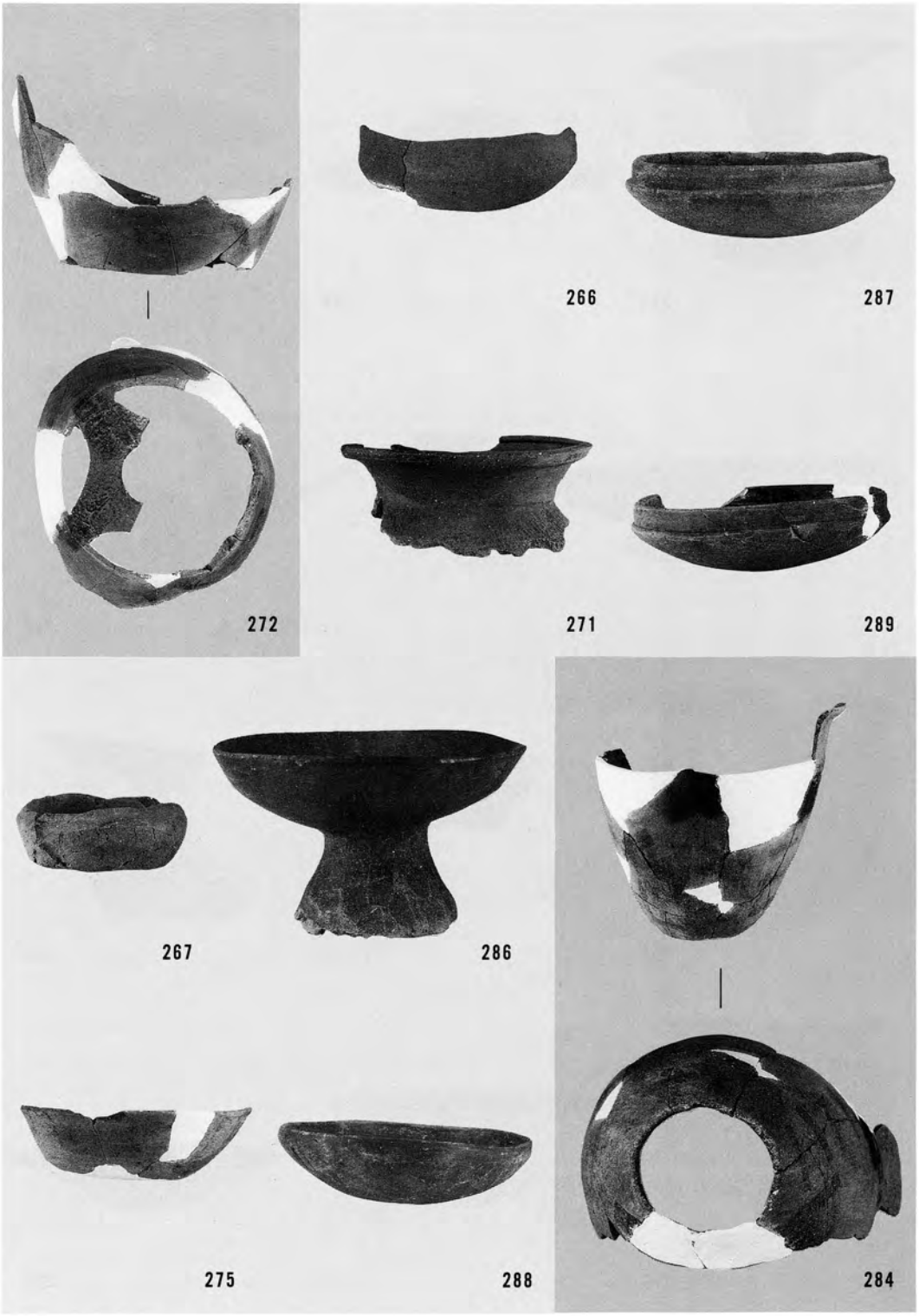


第25号住居跡出土土器

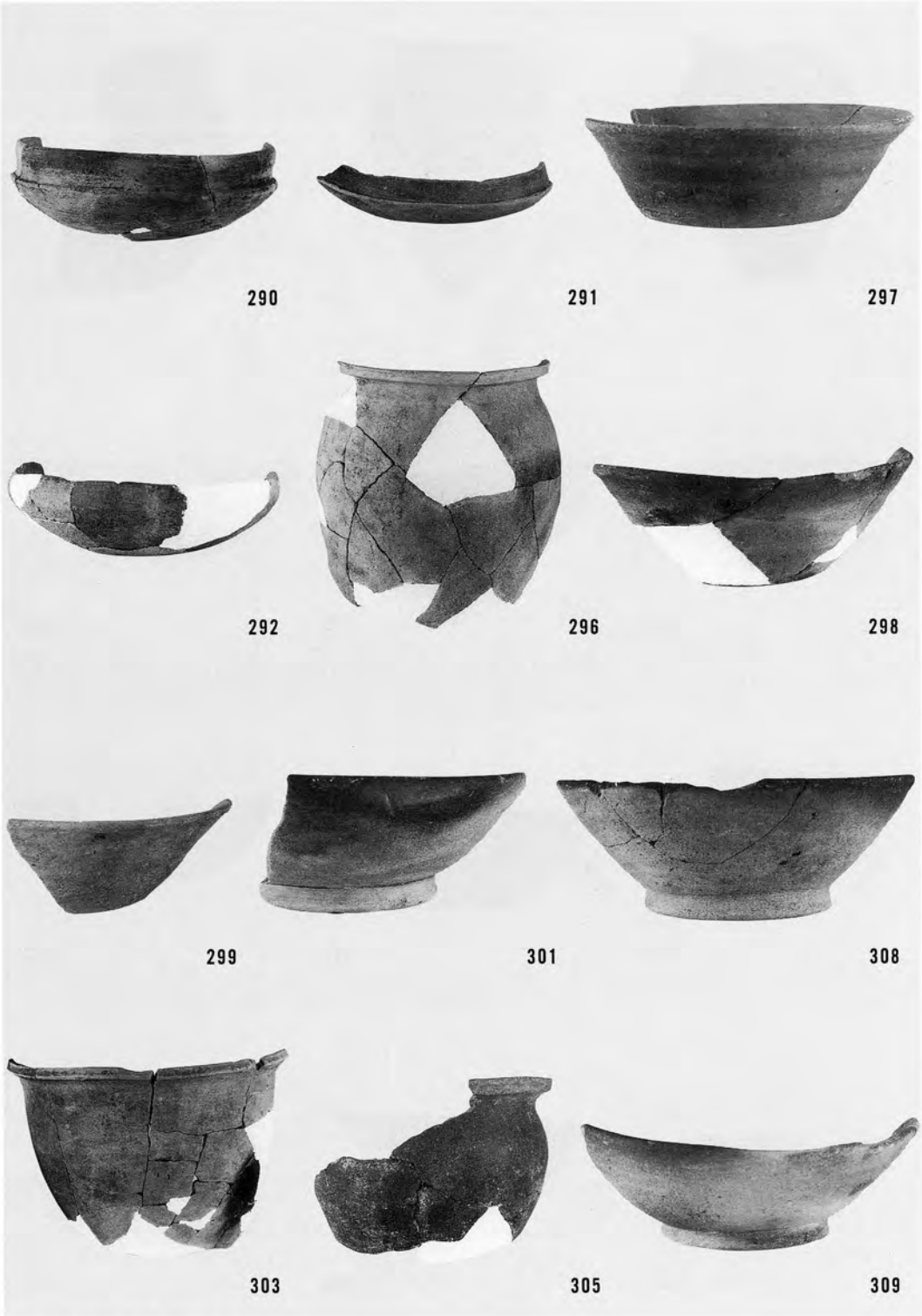


第25号住居跡出土土器

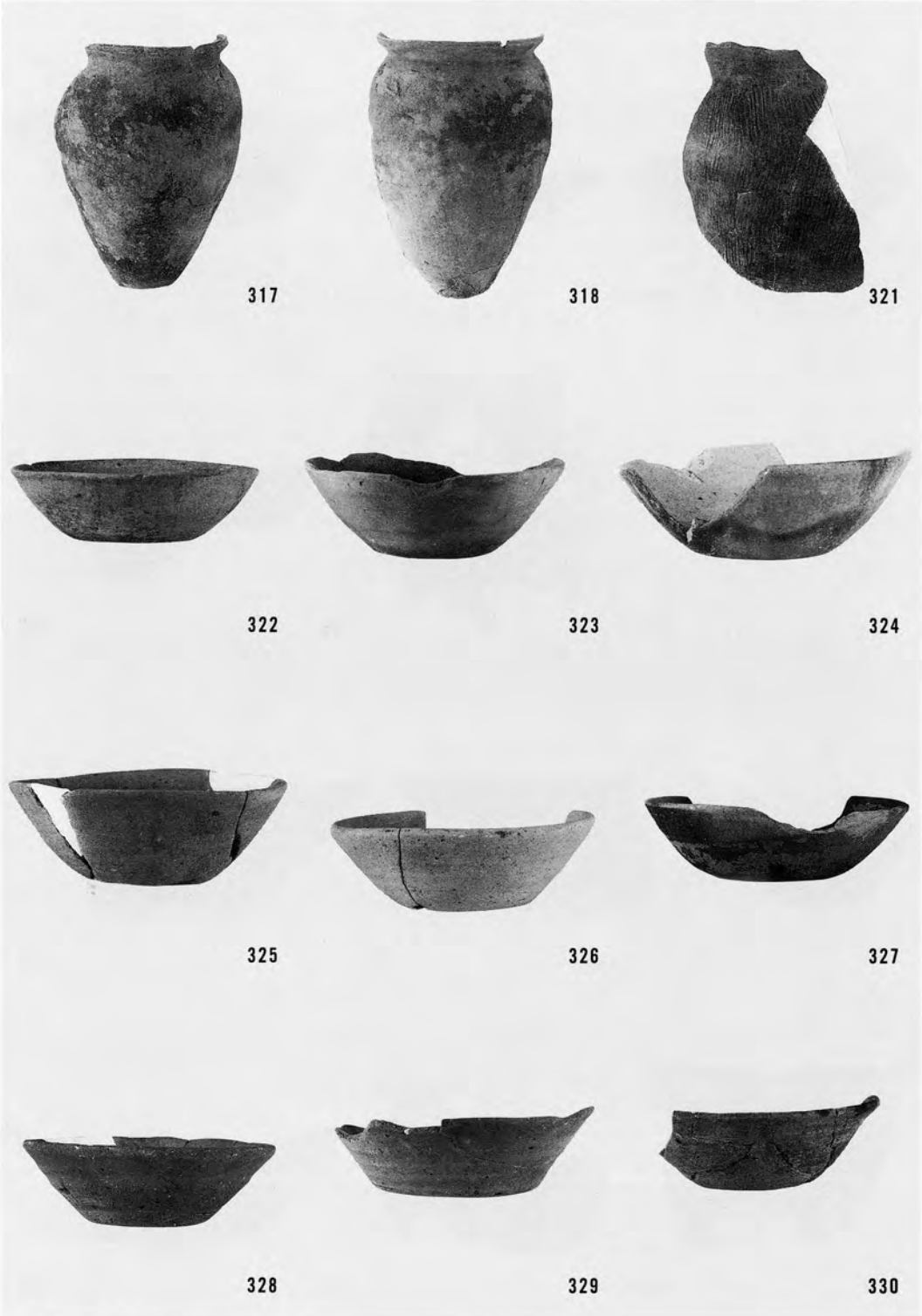
第25・26・29・31号住居跡出土土器



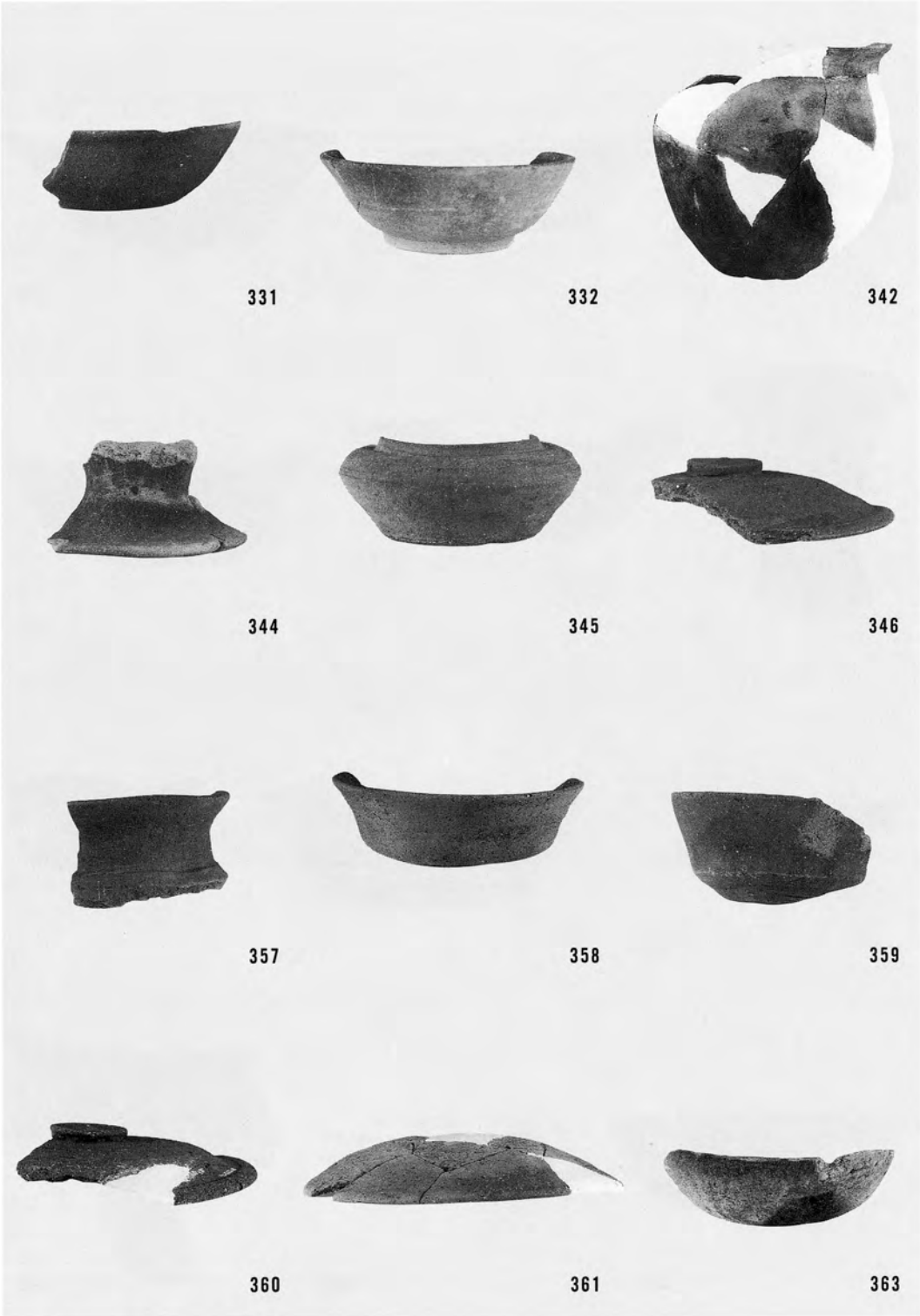
第29・31・32号住居跡出土土器



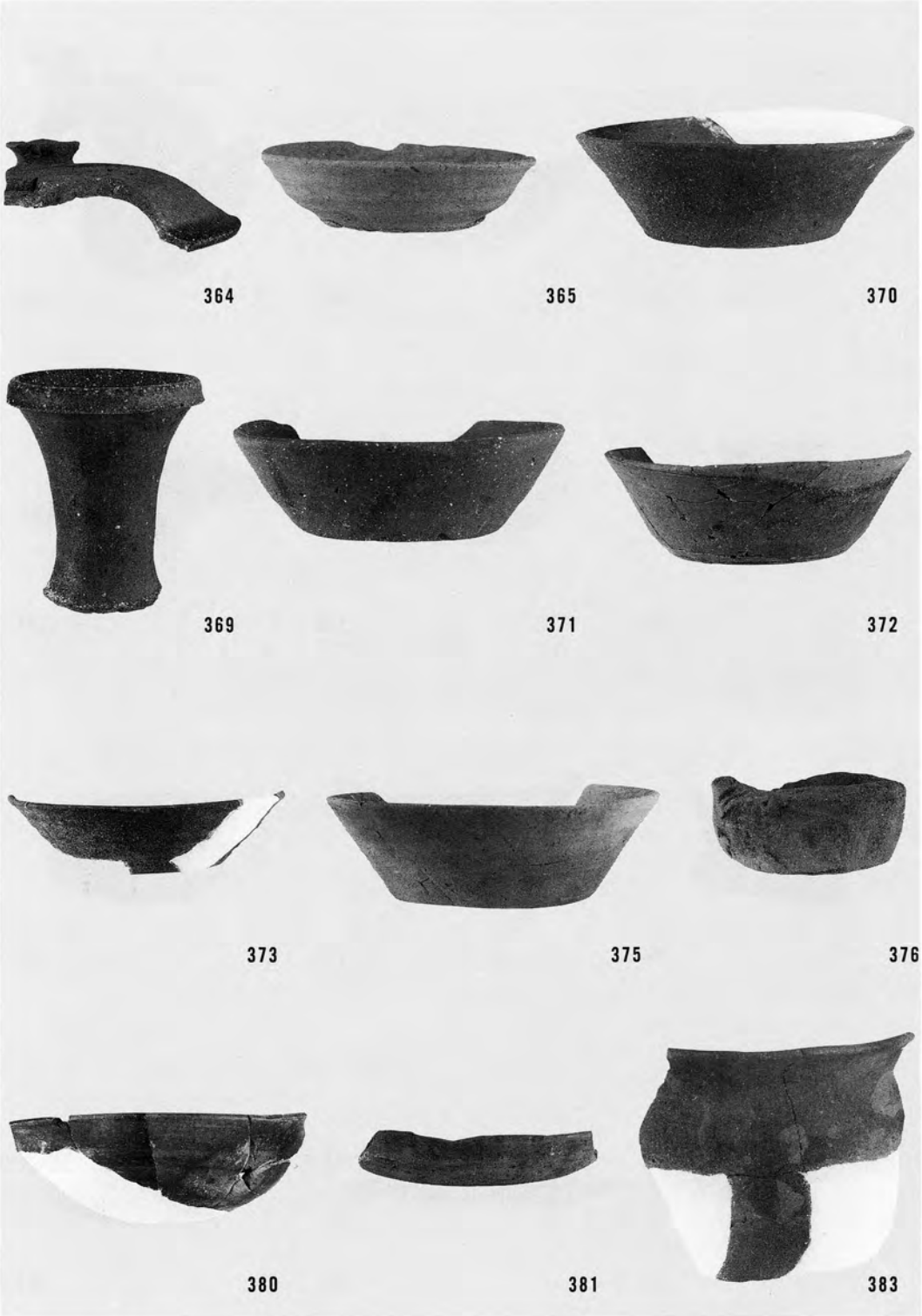
第32～34号住居跡出土土器



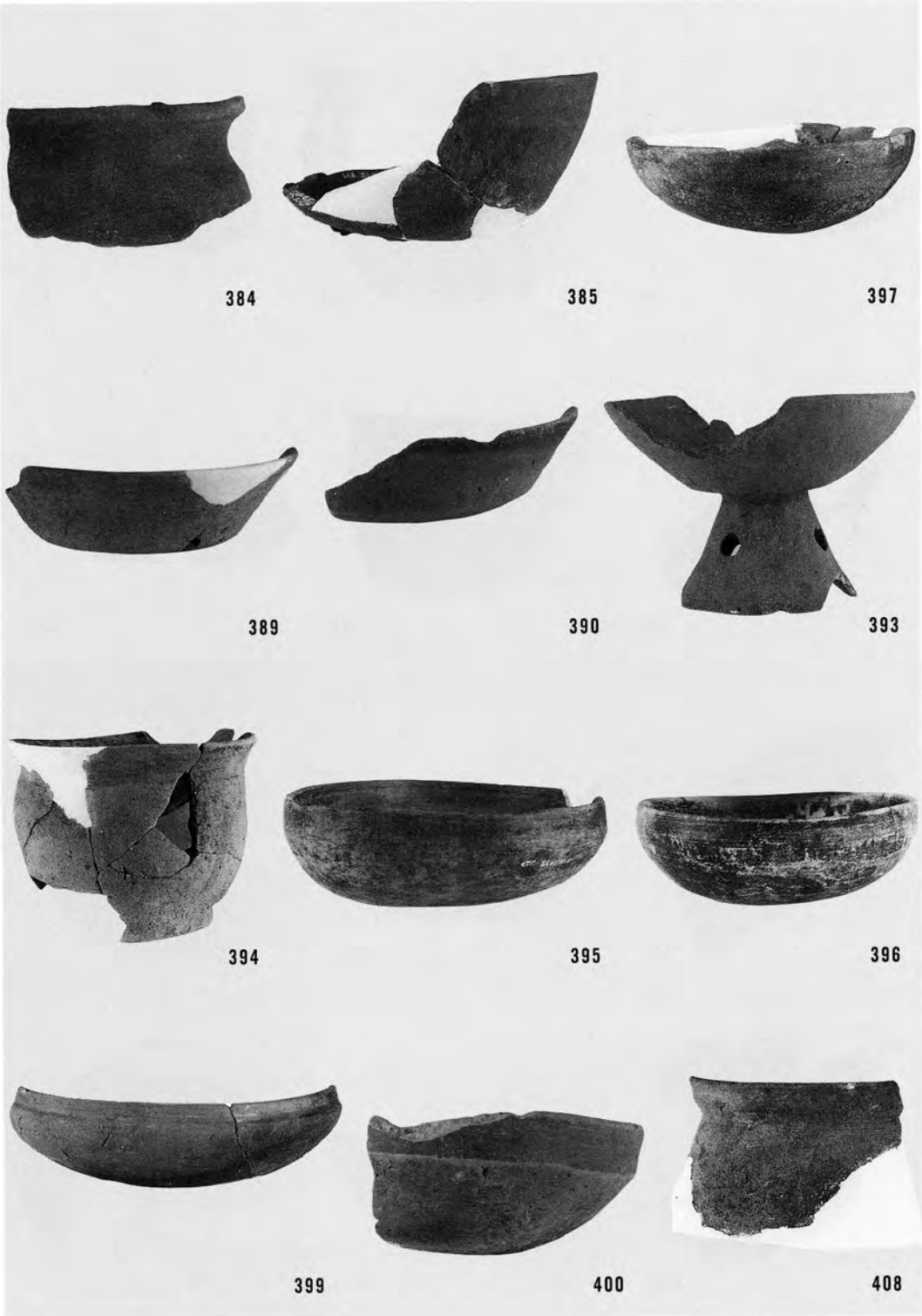
第35号住居跡出土土器



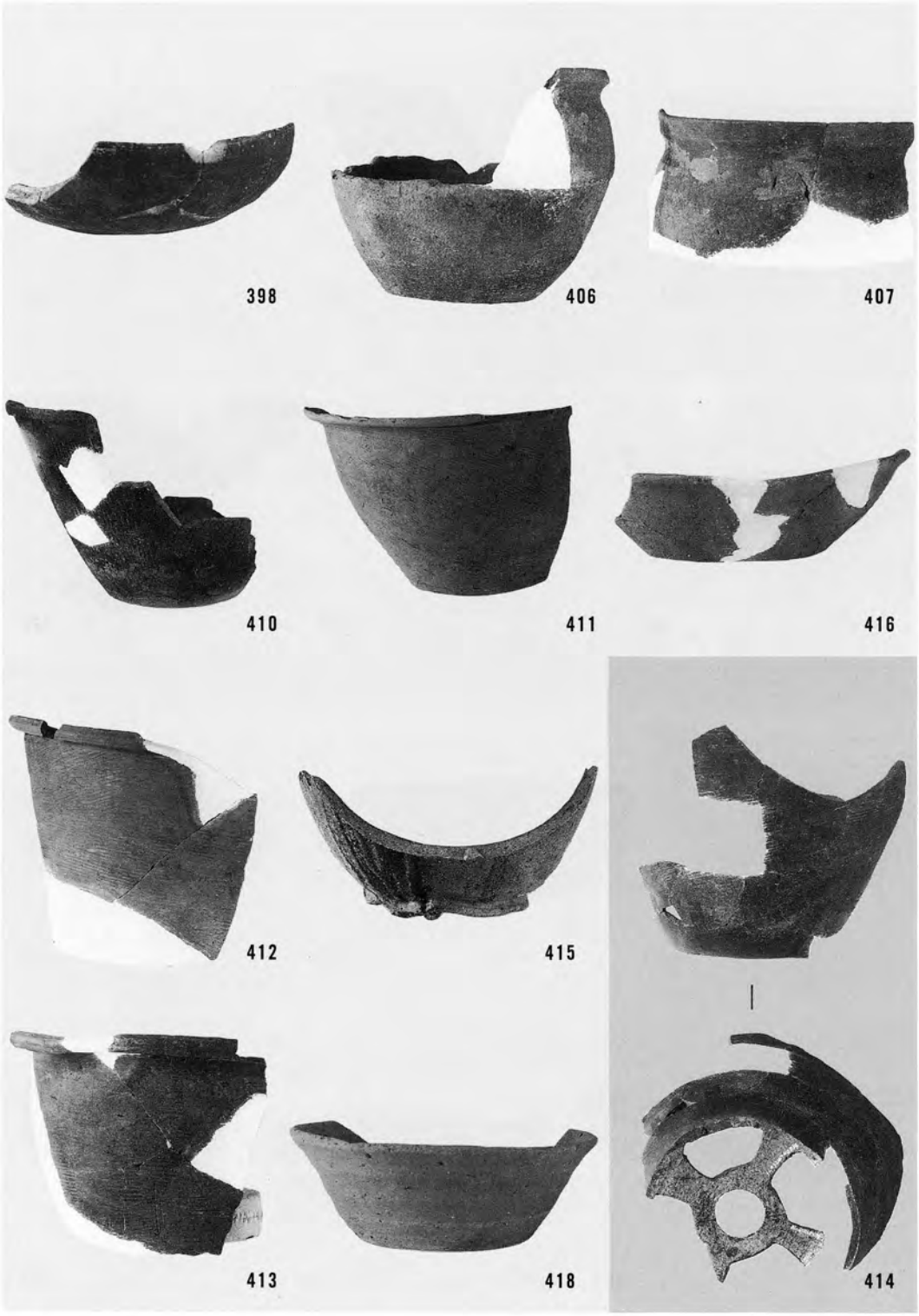
第35～38号住居跡出土土器



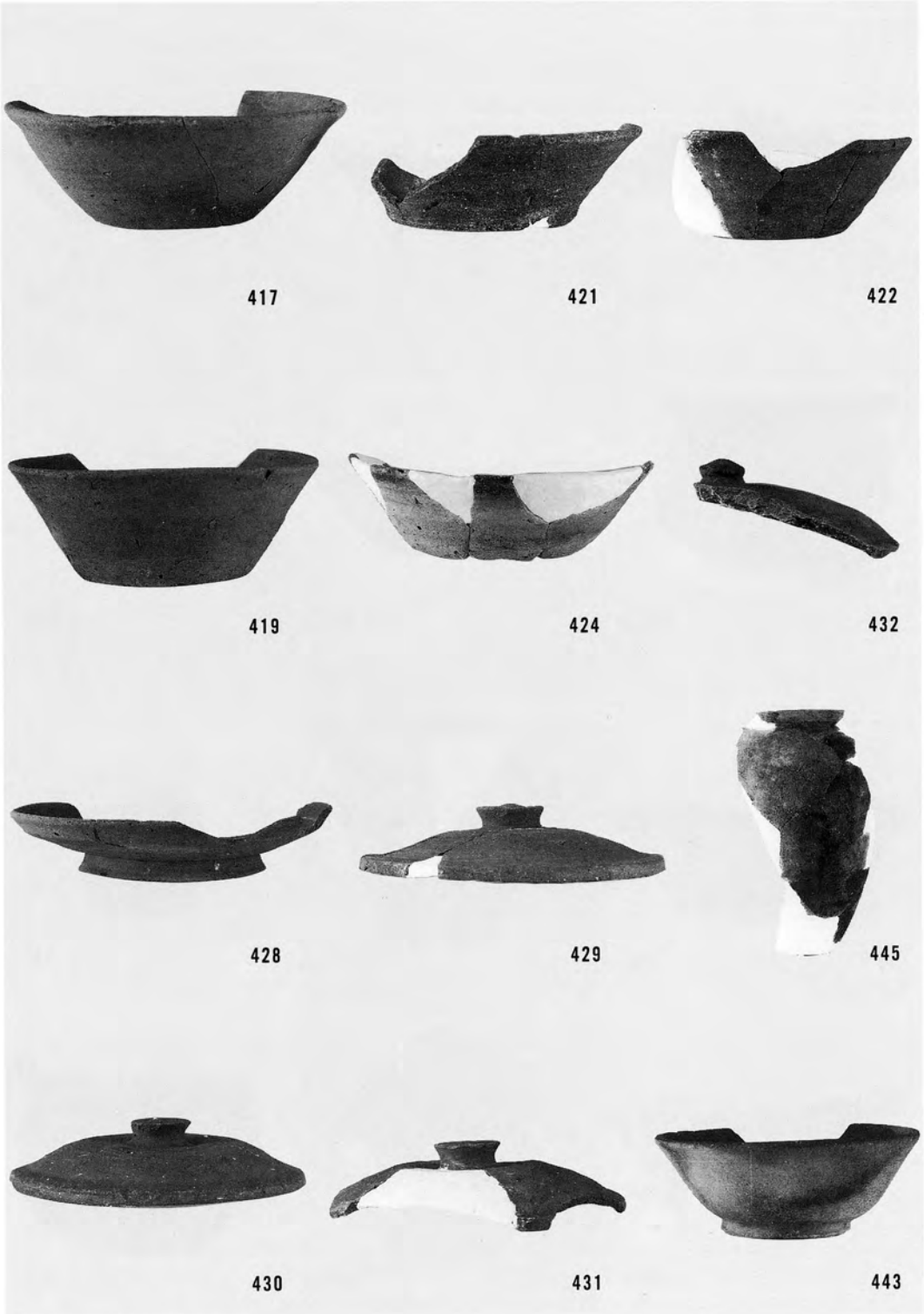
第38～40・42号住居跡出土土器



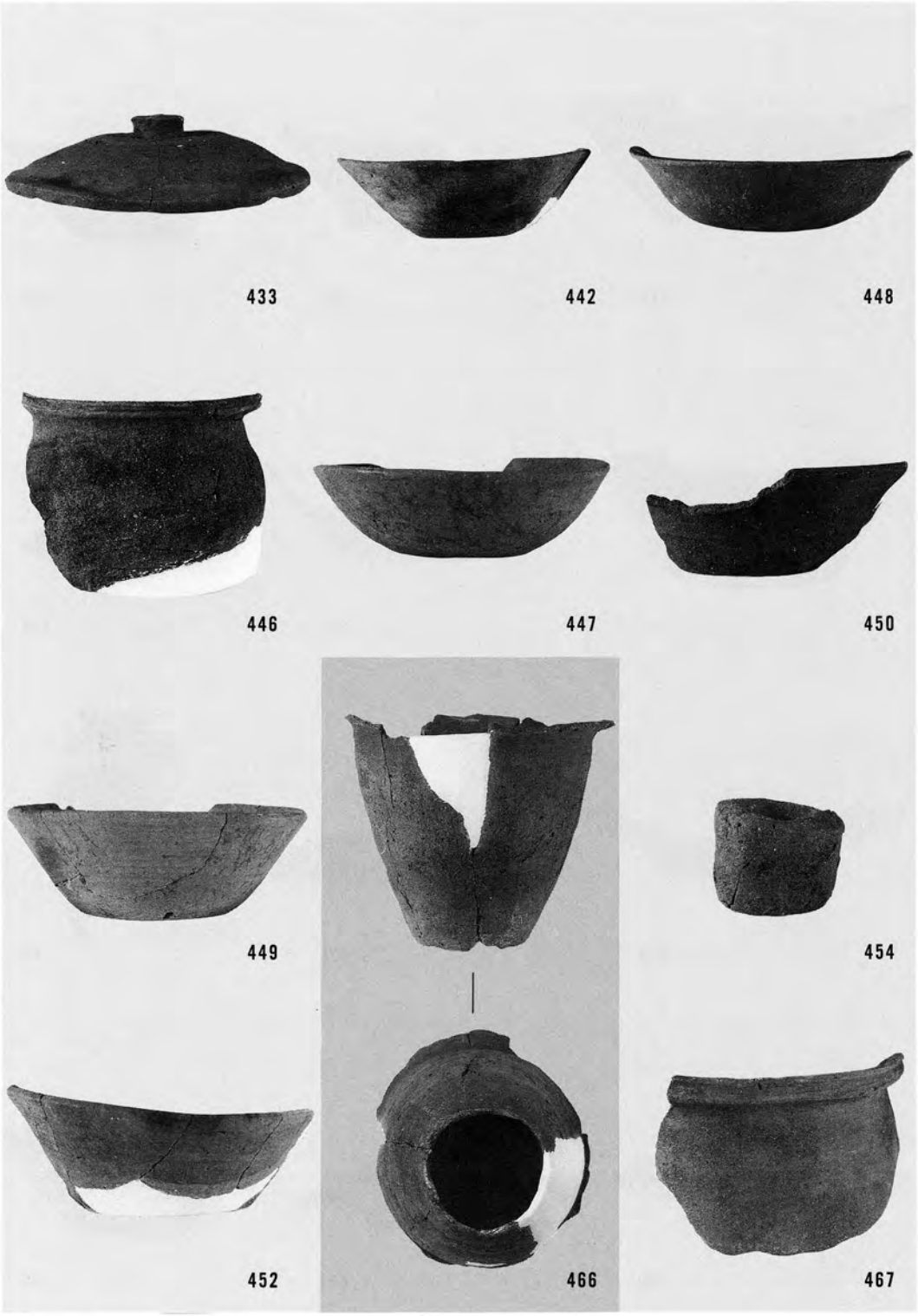
第42・45～47号住居跡出土土器



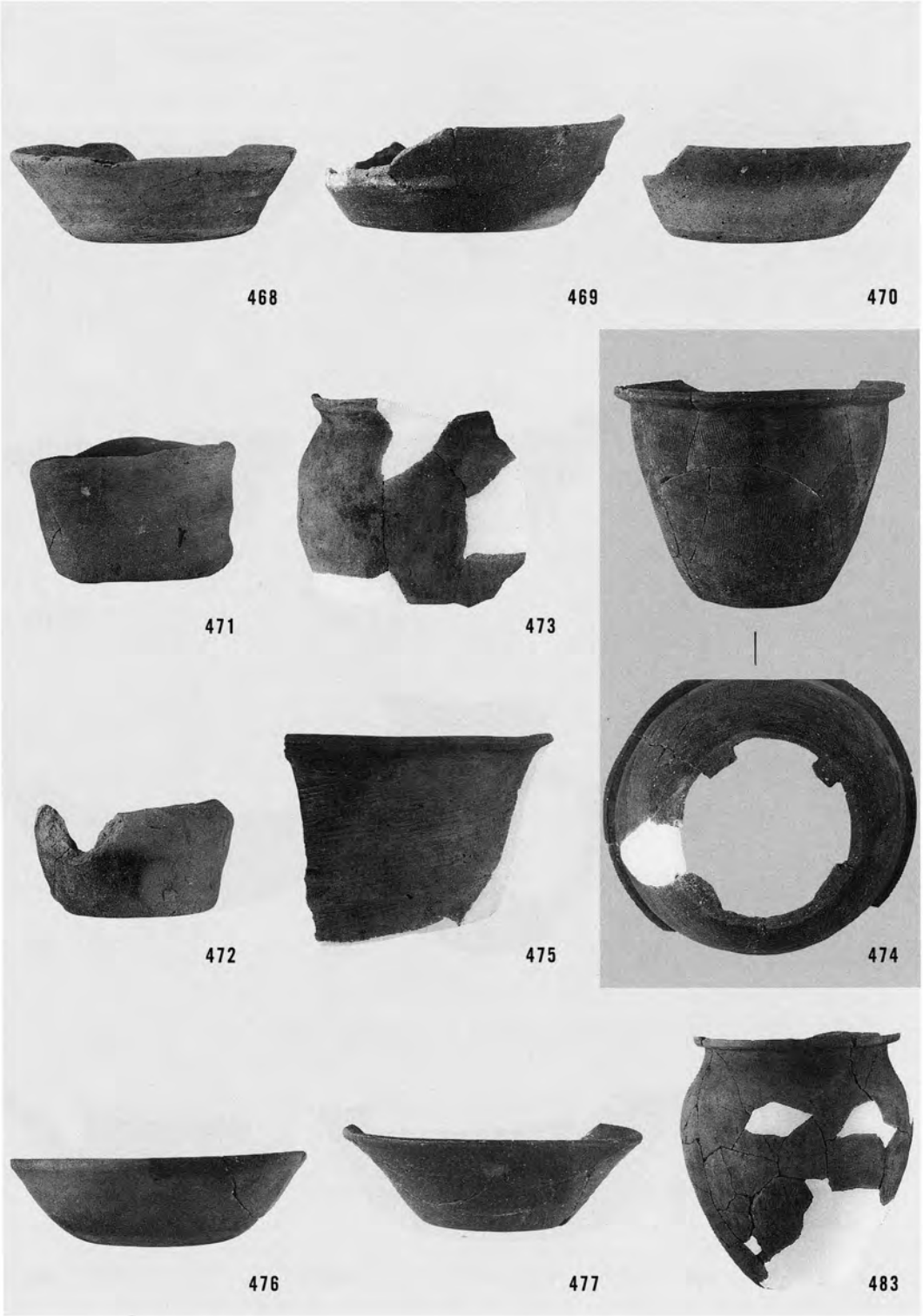
第46・47号住居跡出土土器



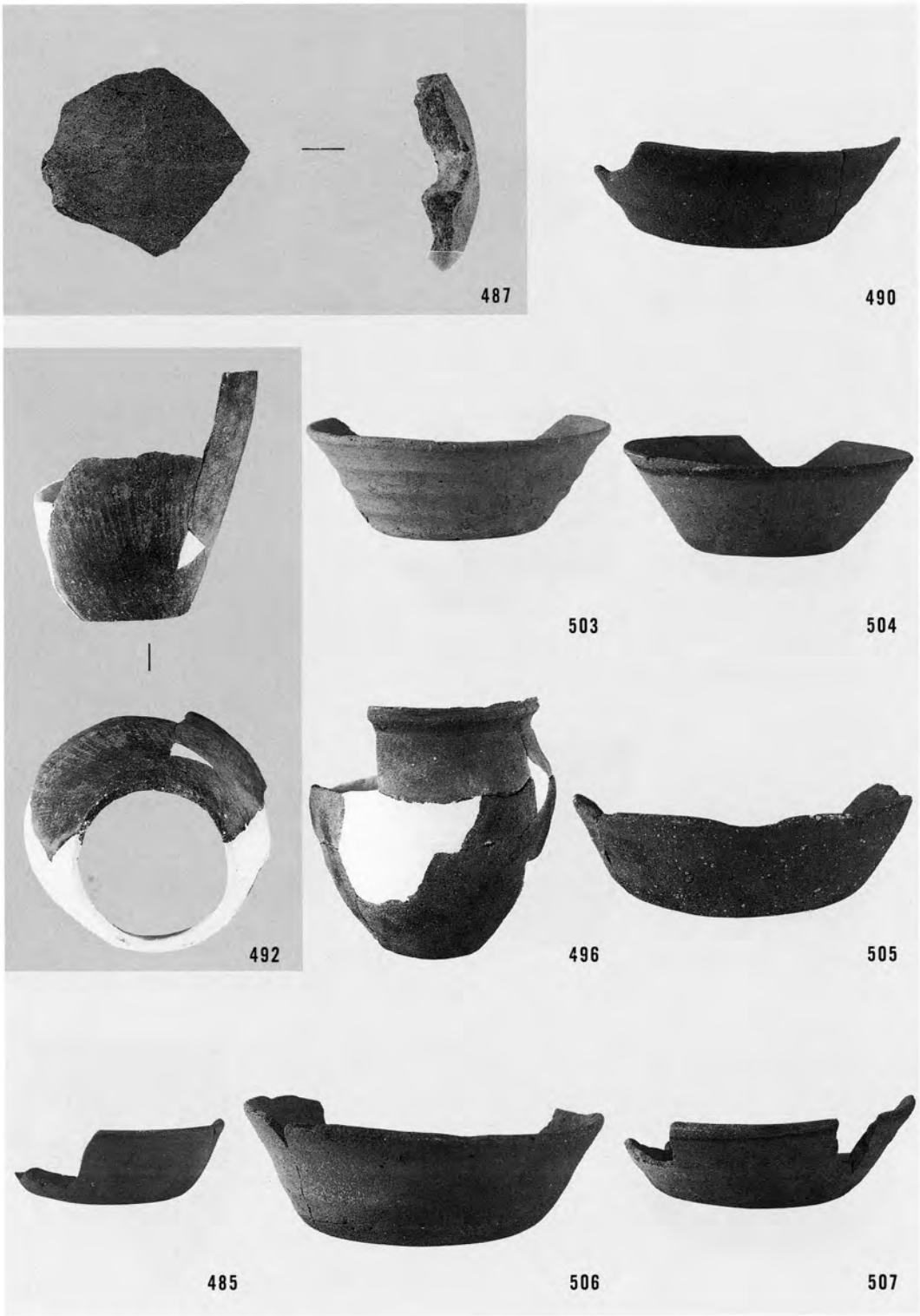
第47～49号住居跡出土土器



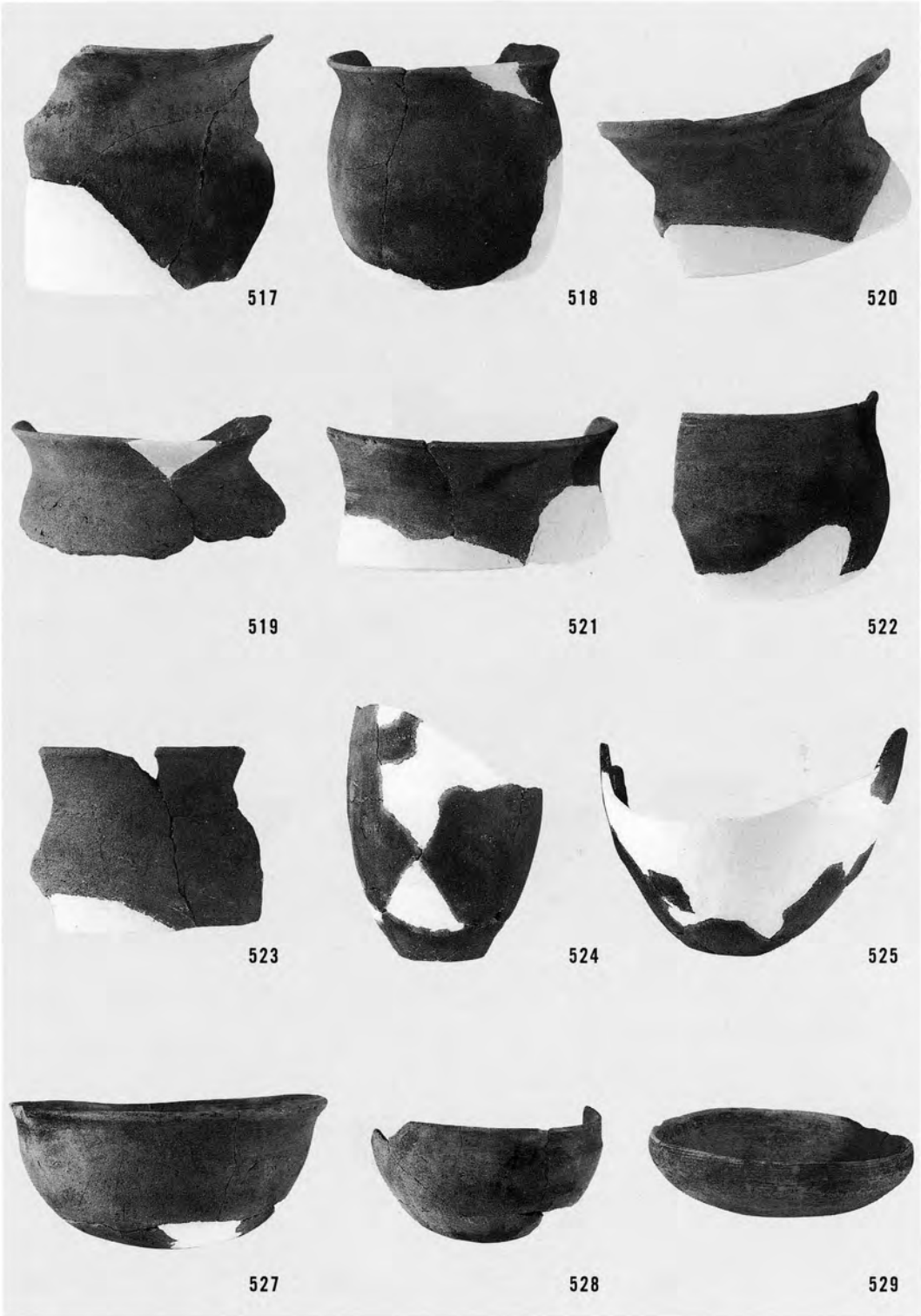
第47～50号住居跡出土土器



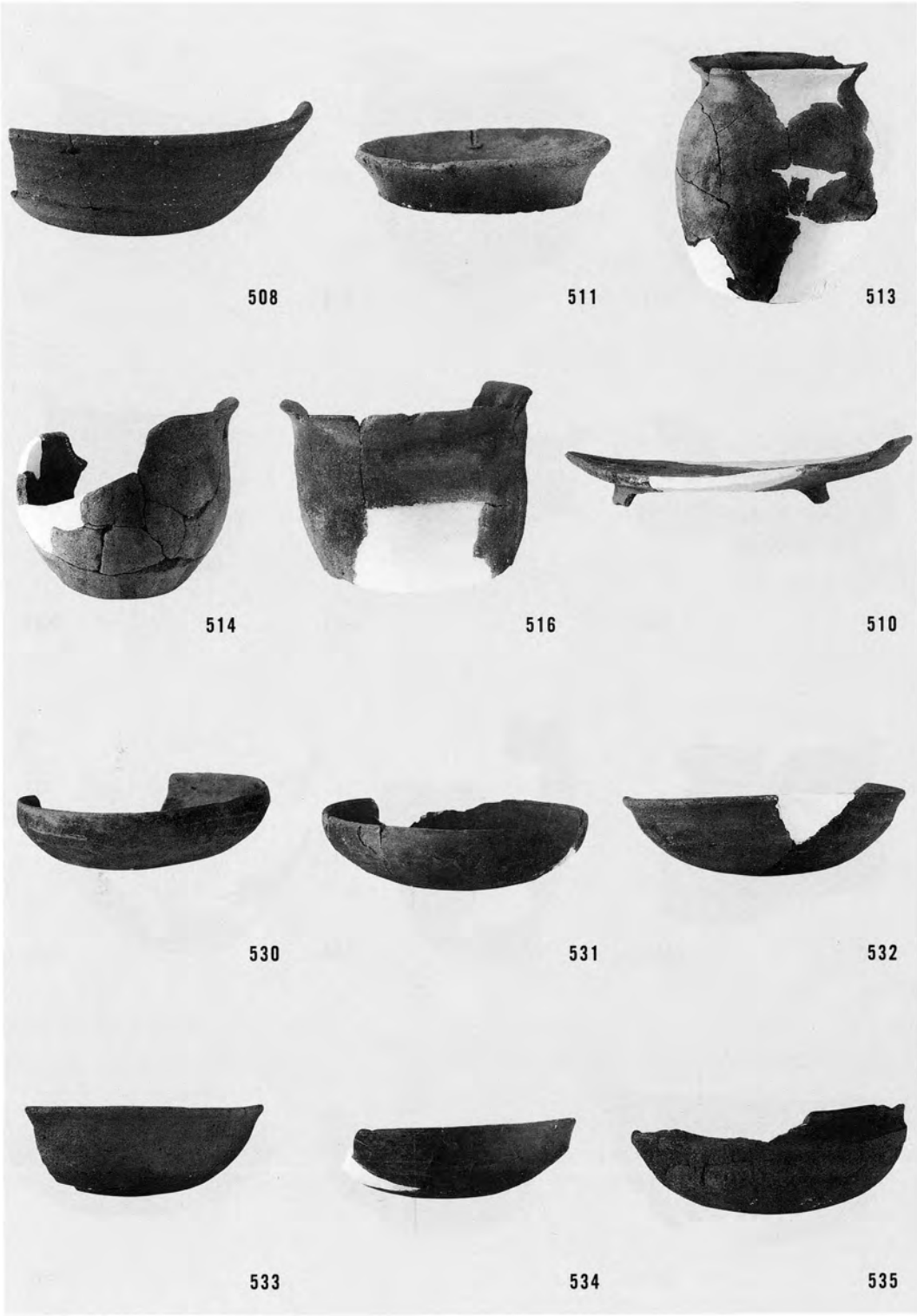
第50～52号住居跡出土土器



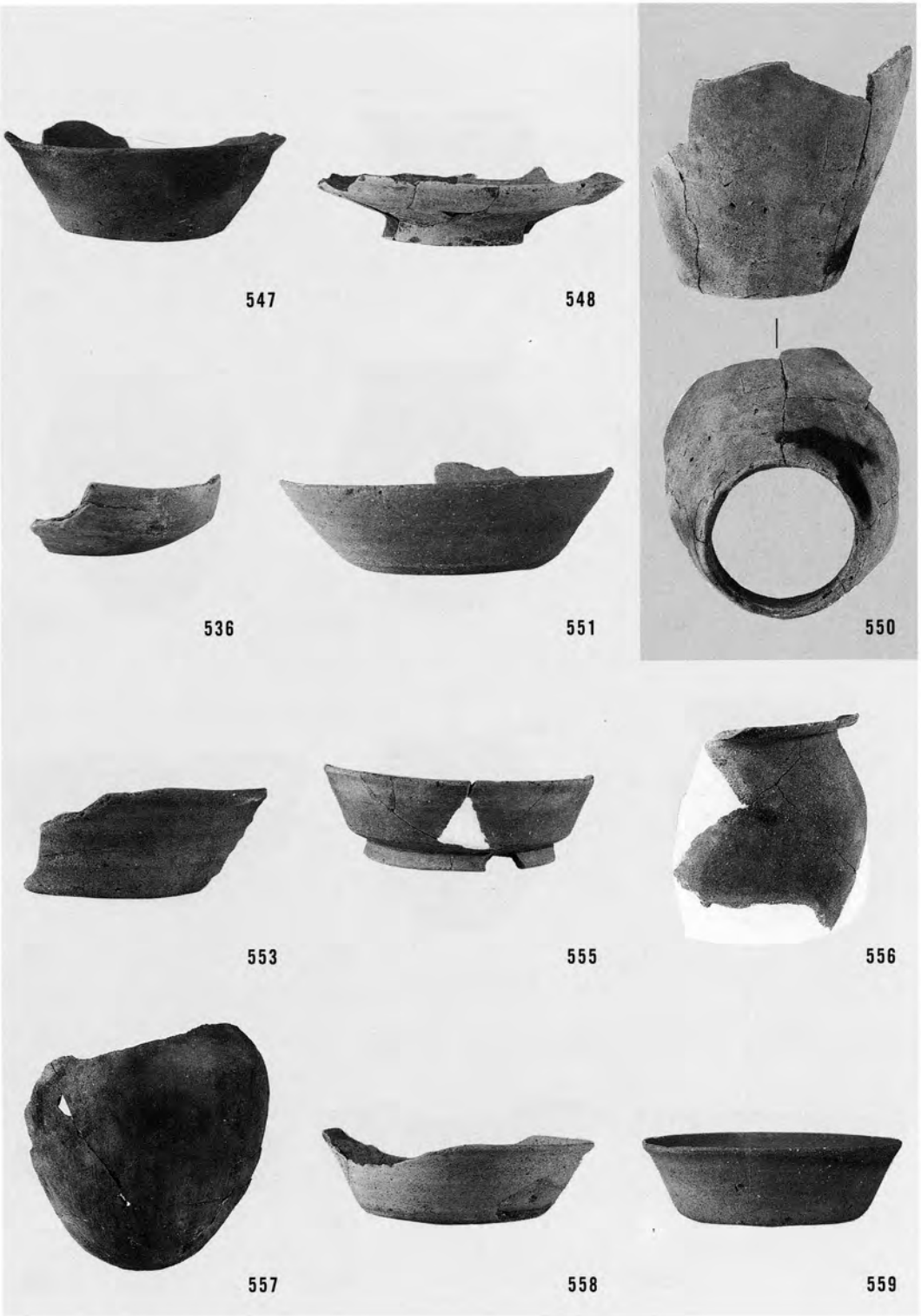
第52・54・55・57号住居跡出土土器



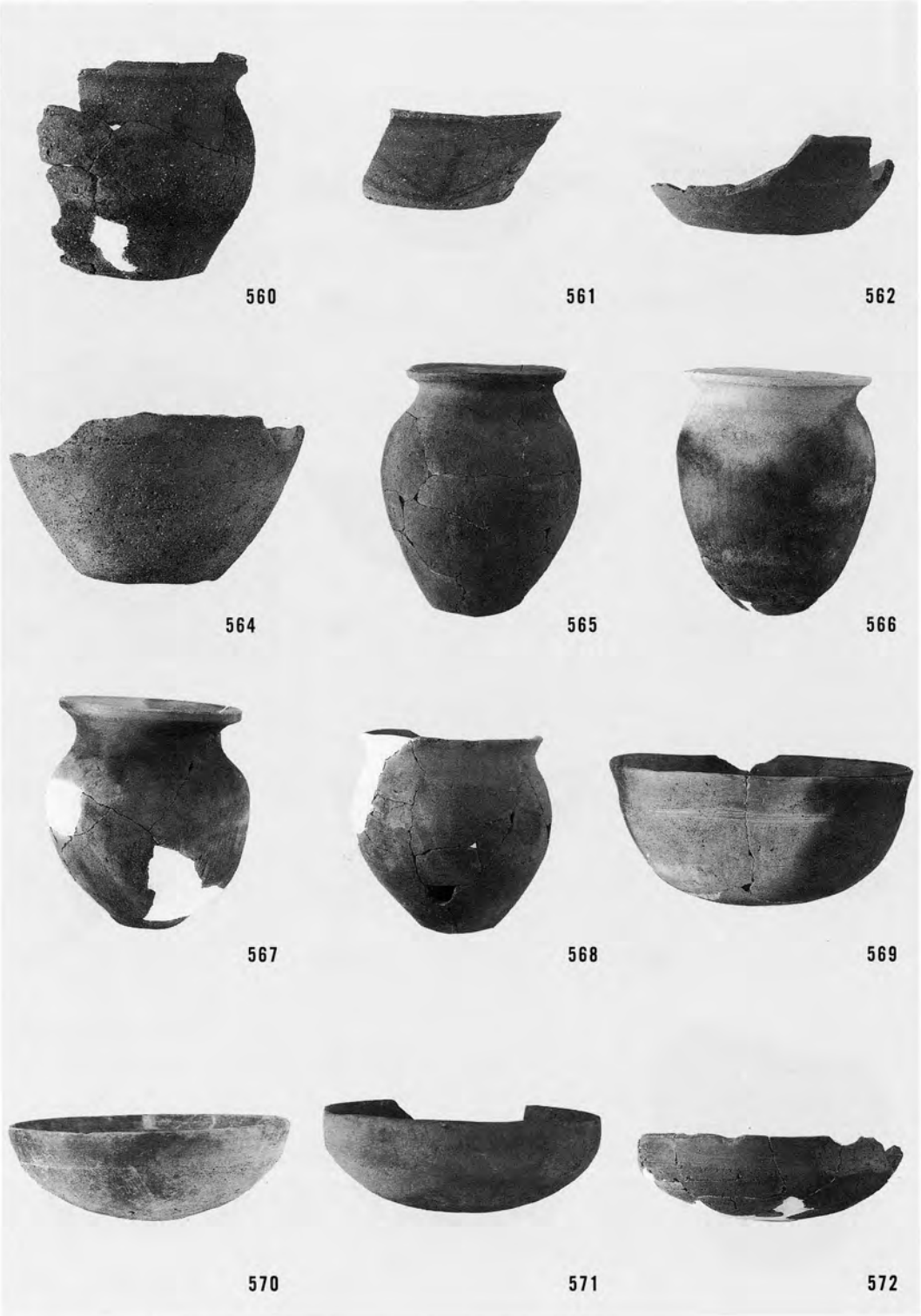
第58号住居跡出土土器



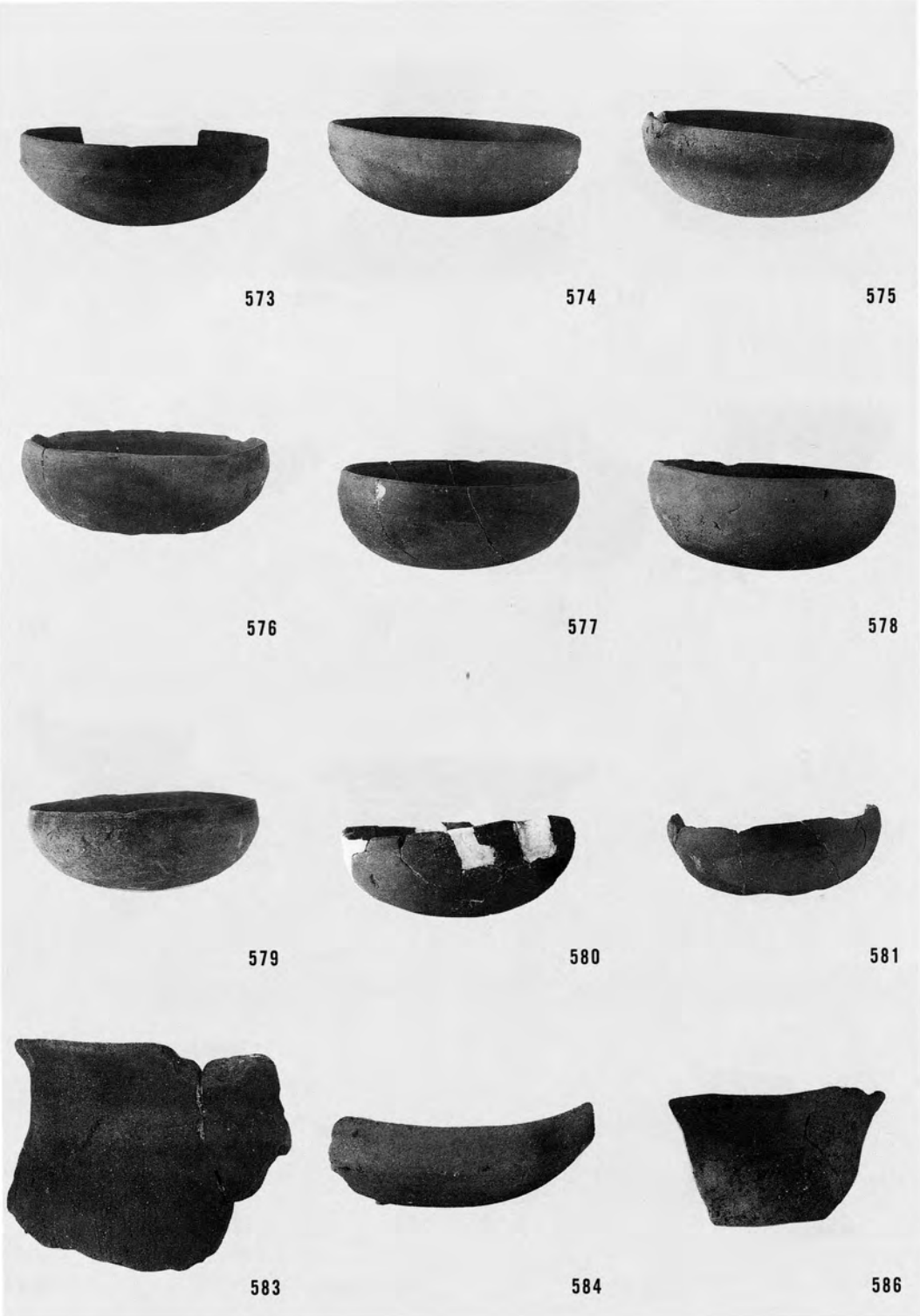
第57・58号住居跡出土土器



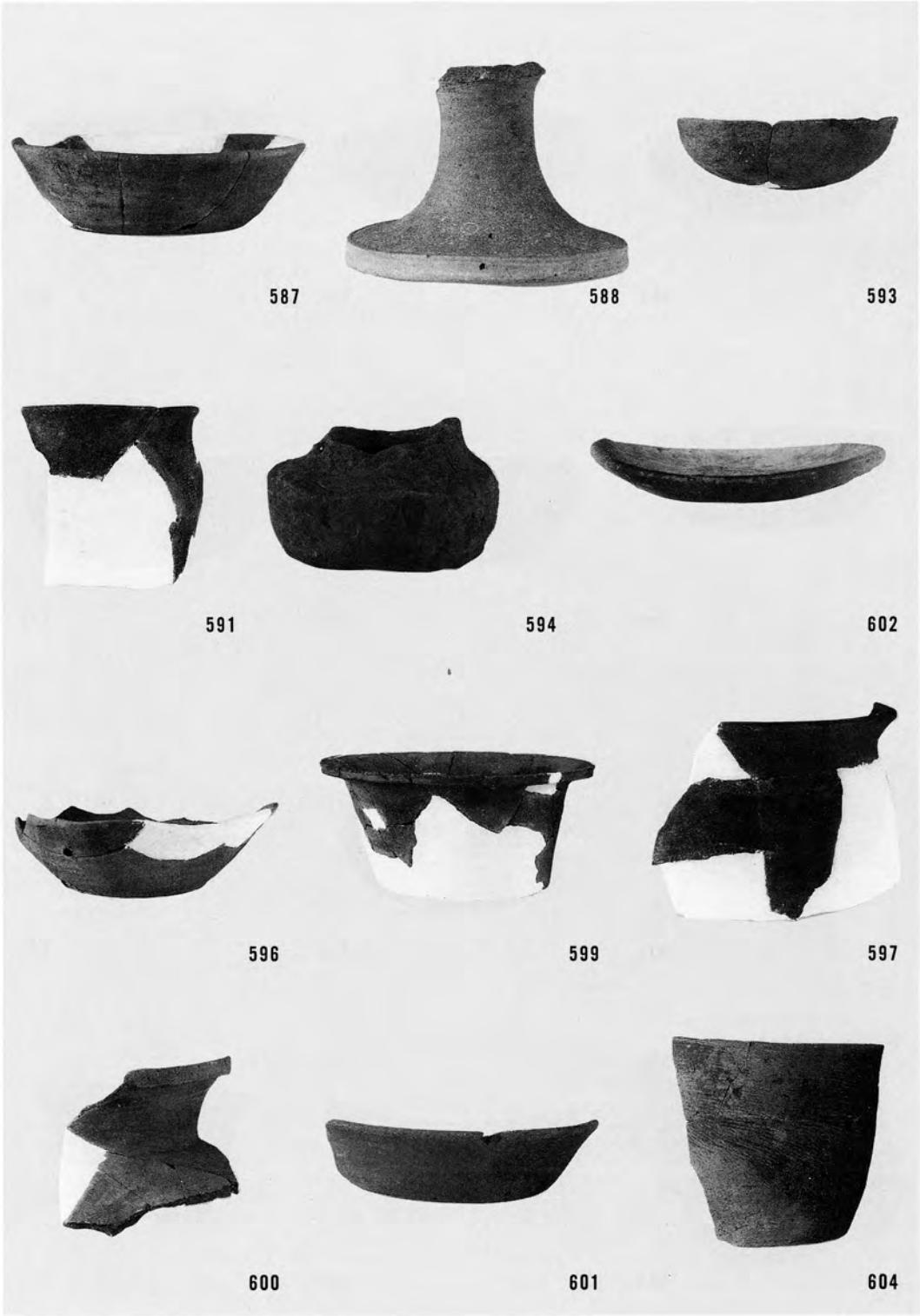
第59～61号住居跡出土土器



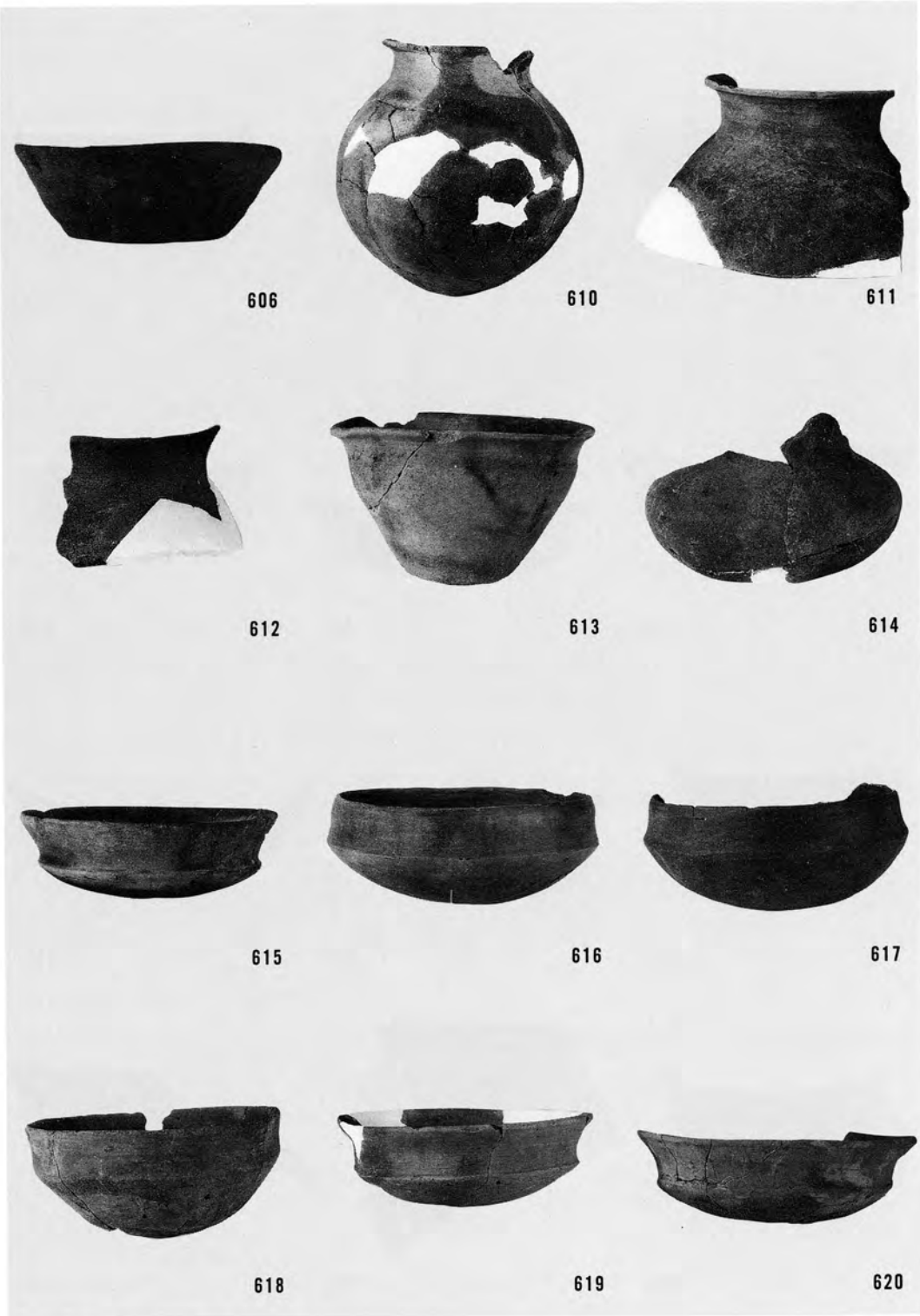
第62～65号住居跡出土土器



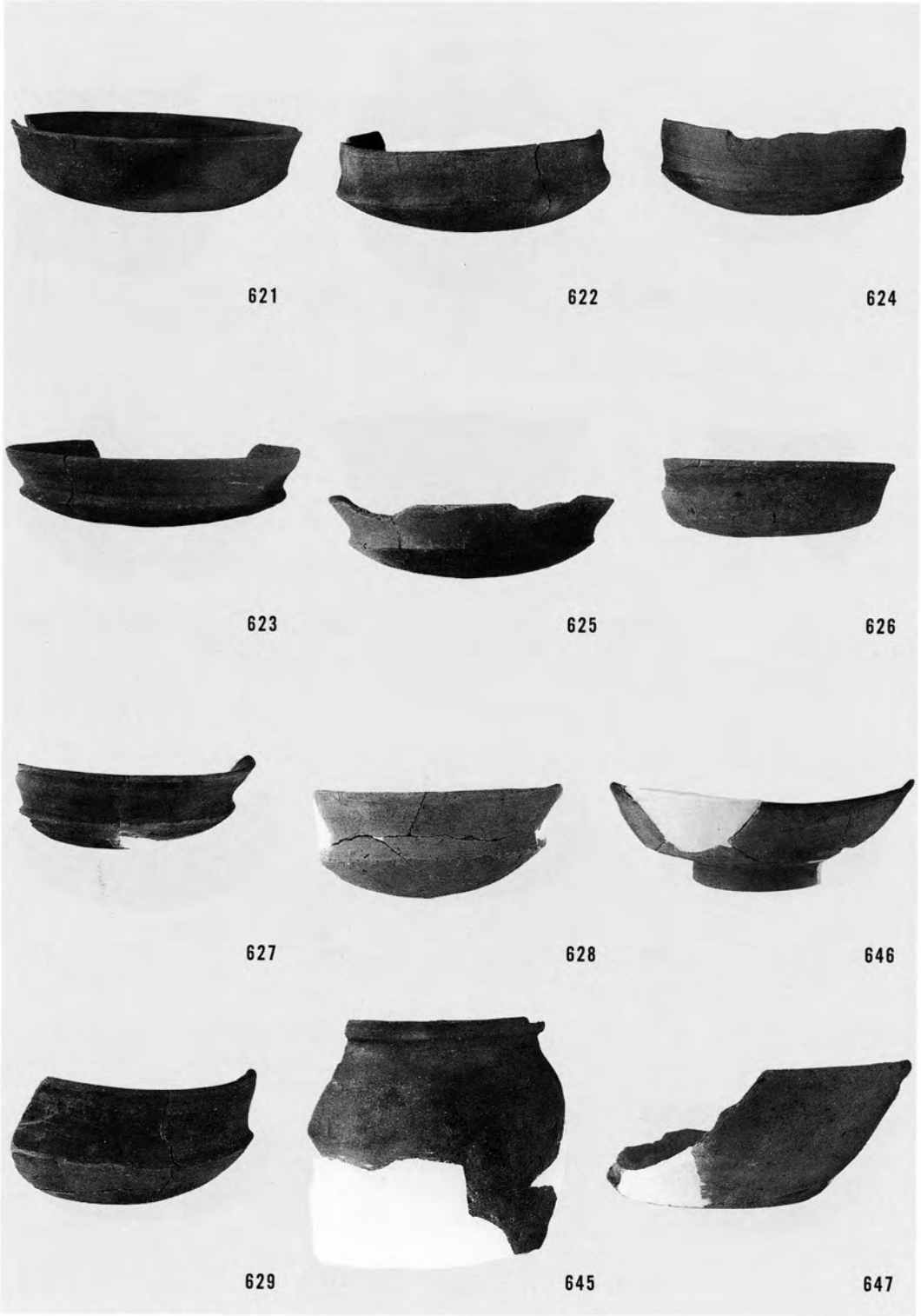
第65・66号住居跡出土土器



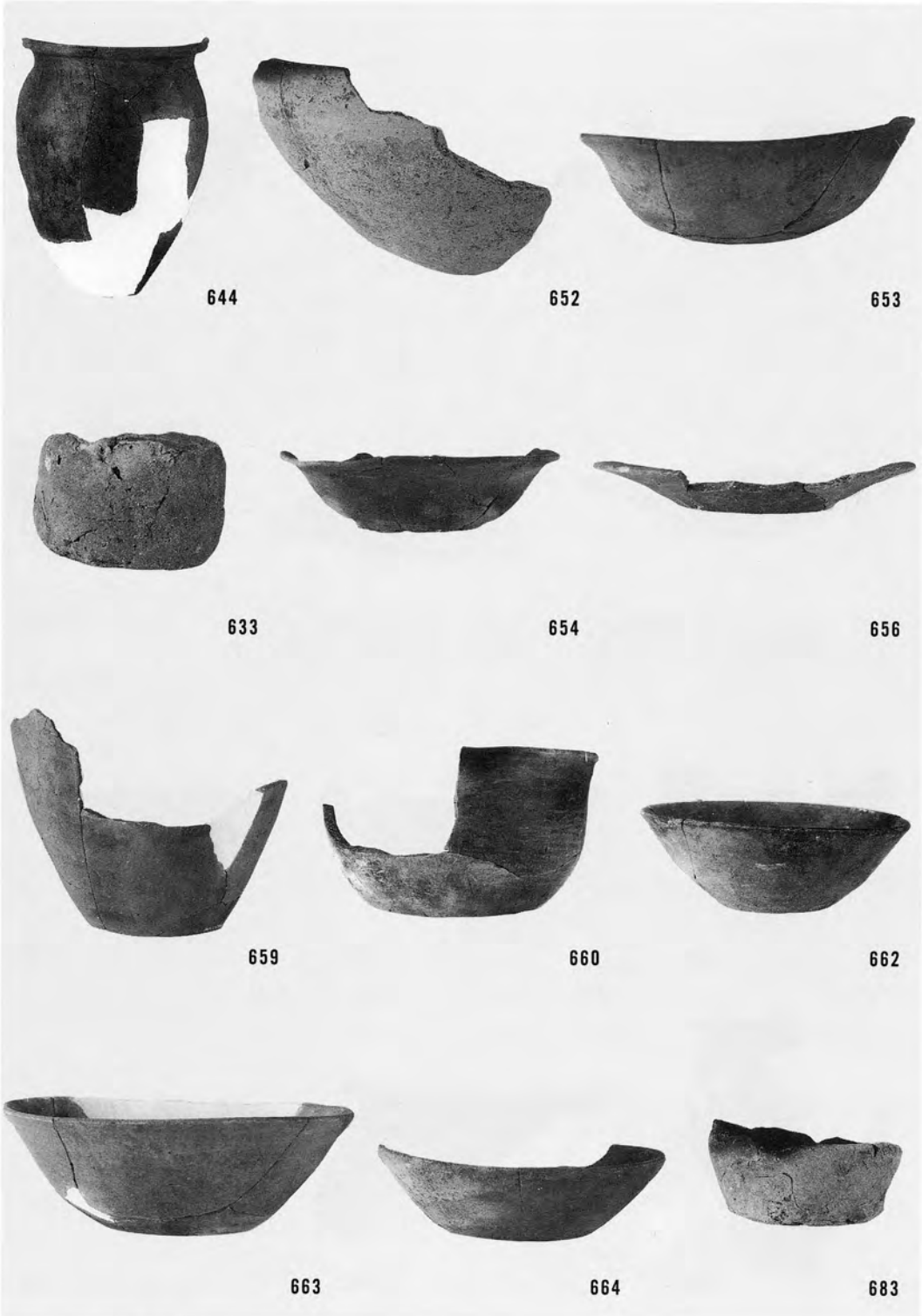
第66・67・69・70号住居跡出土土器



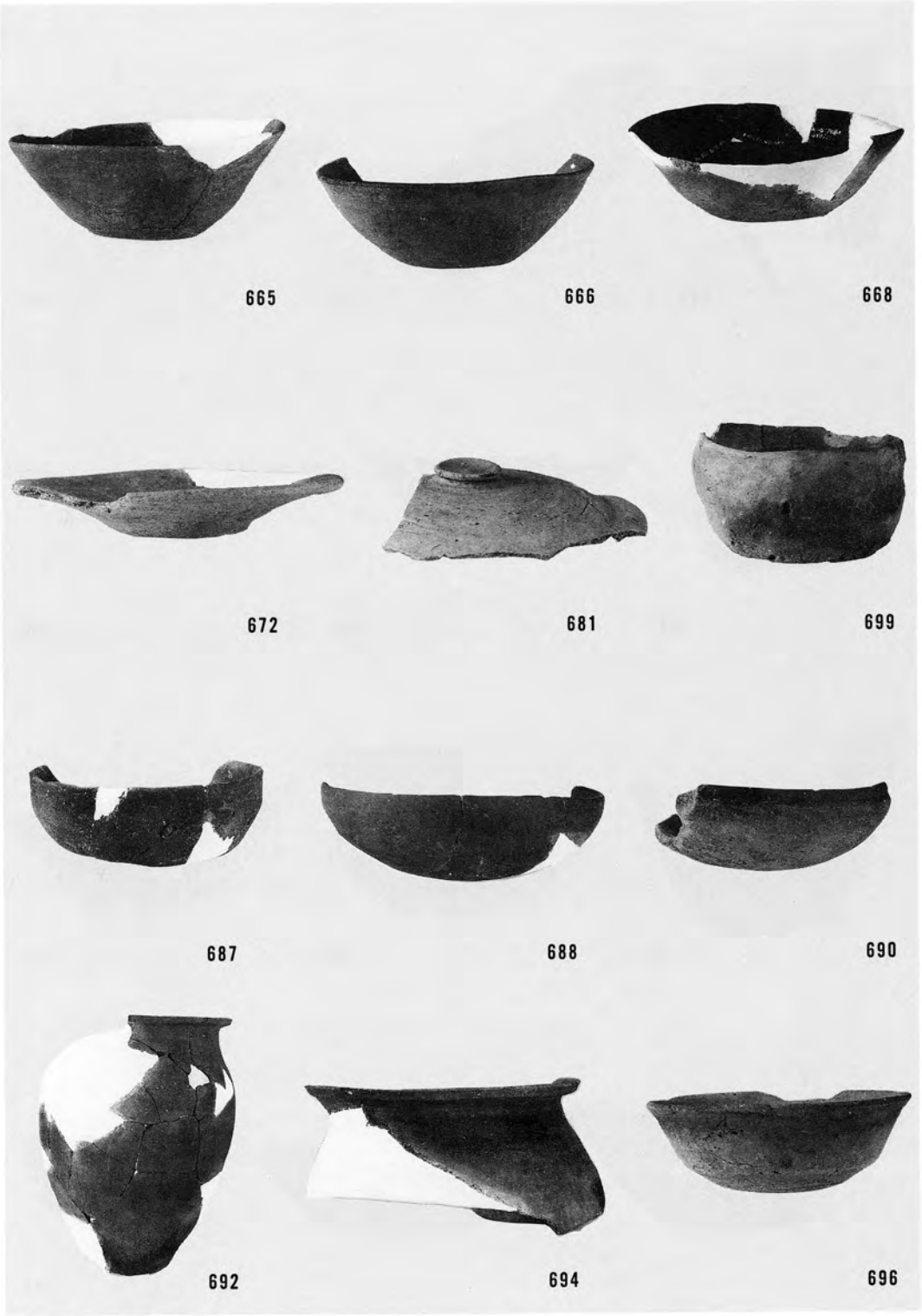
第70・72号住居跡出土土器



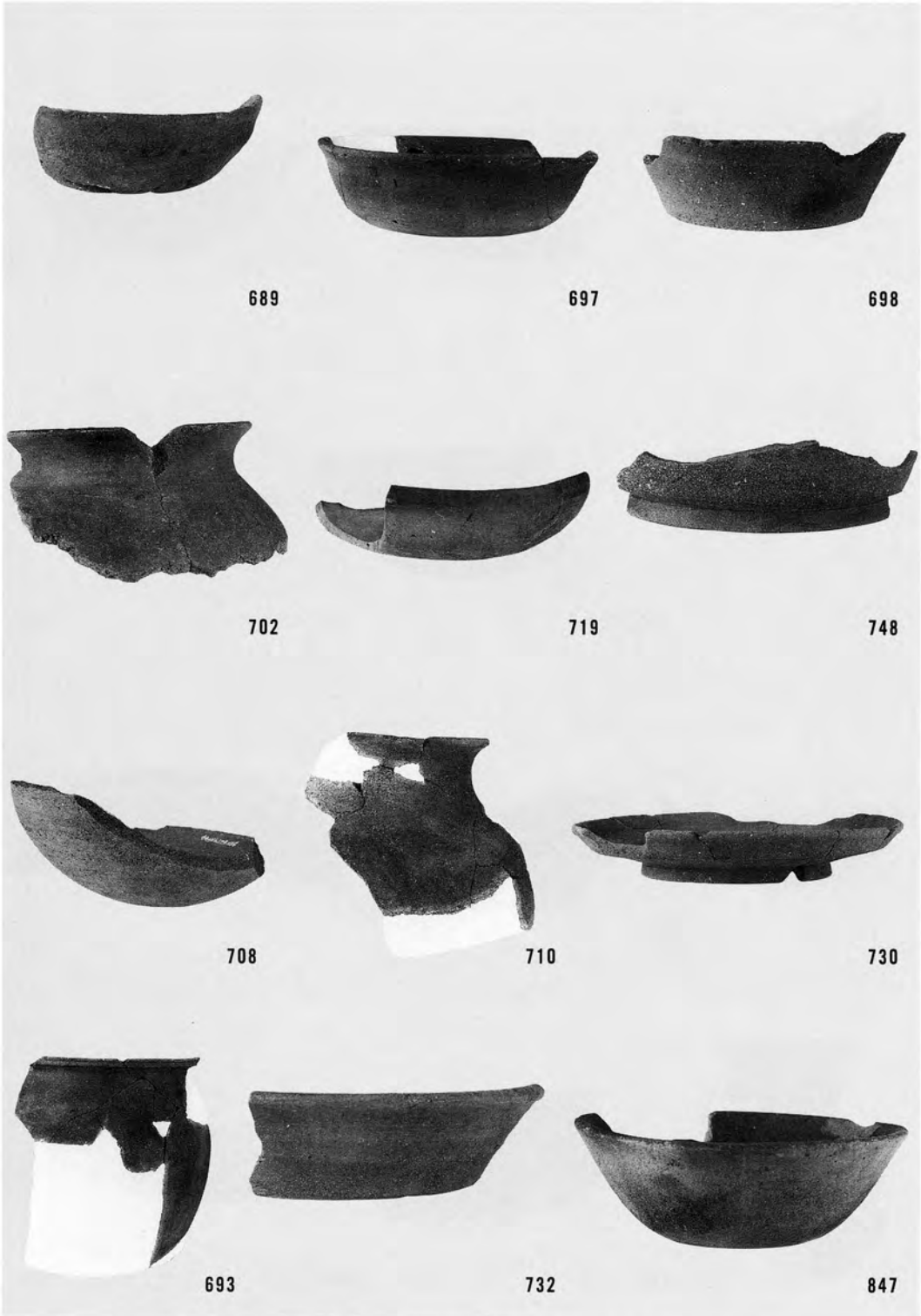
第72・73号住居跡出土土器



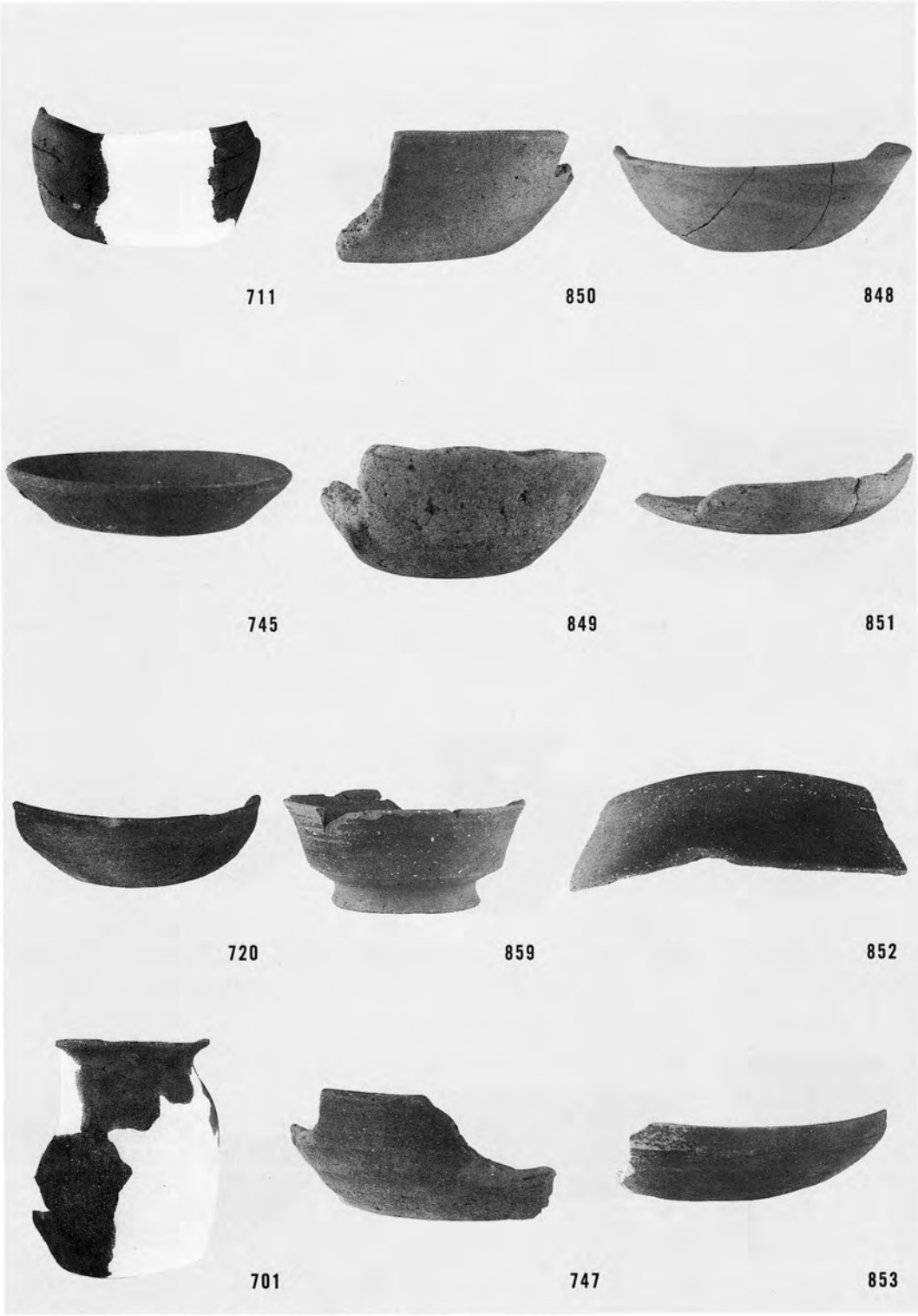
第72～76号住居跡出土土器



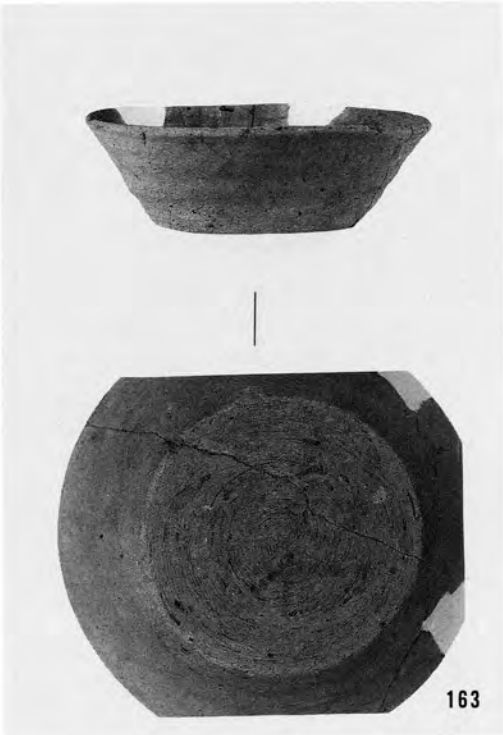
第75～78号住居跡出土土器



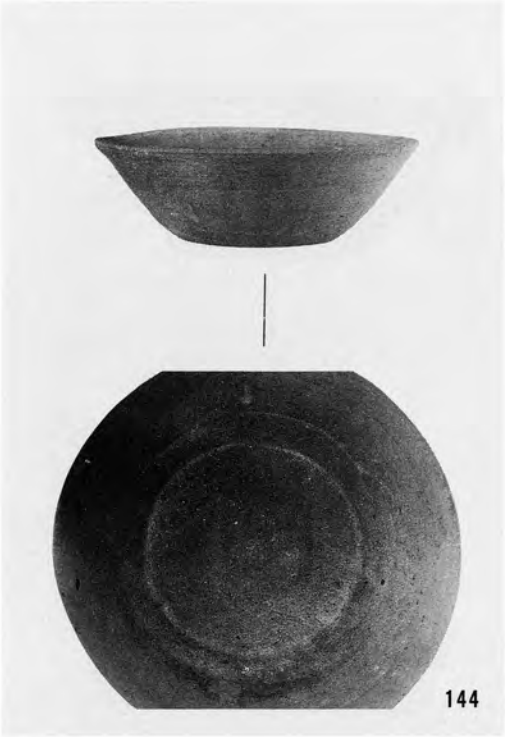
第77～81号住居跡，第18号土坑，第7・8号掘立柱建物跡，遺構外出土土器

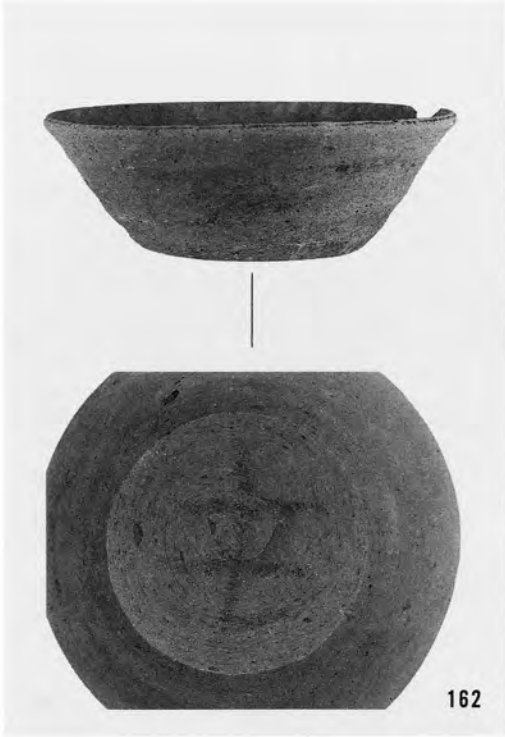


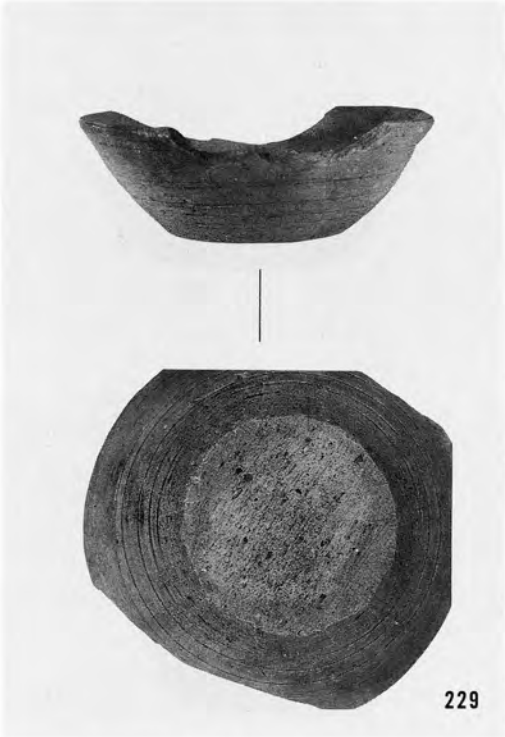
第79～81号住居跡，第6・45号土坑，遺構外出土土器

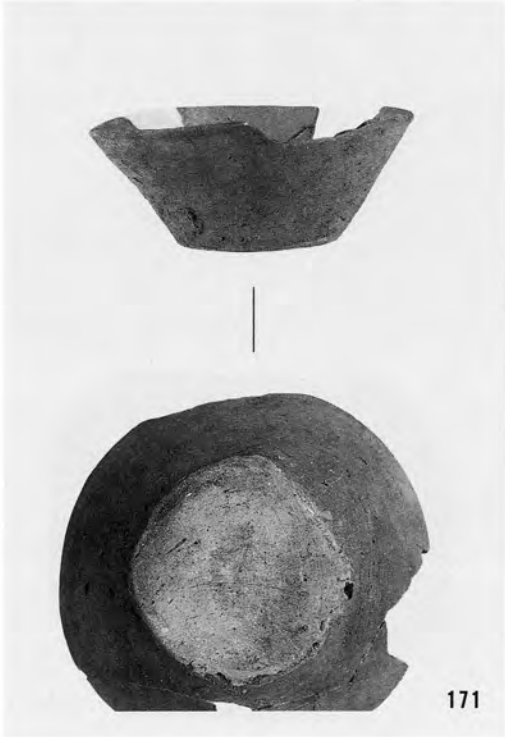


第7・22号住居跡出土墨書土器

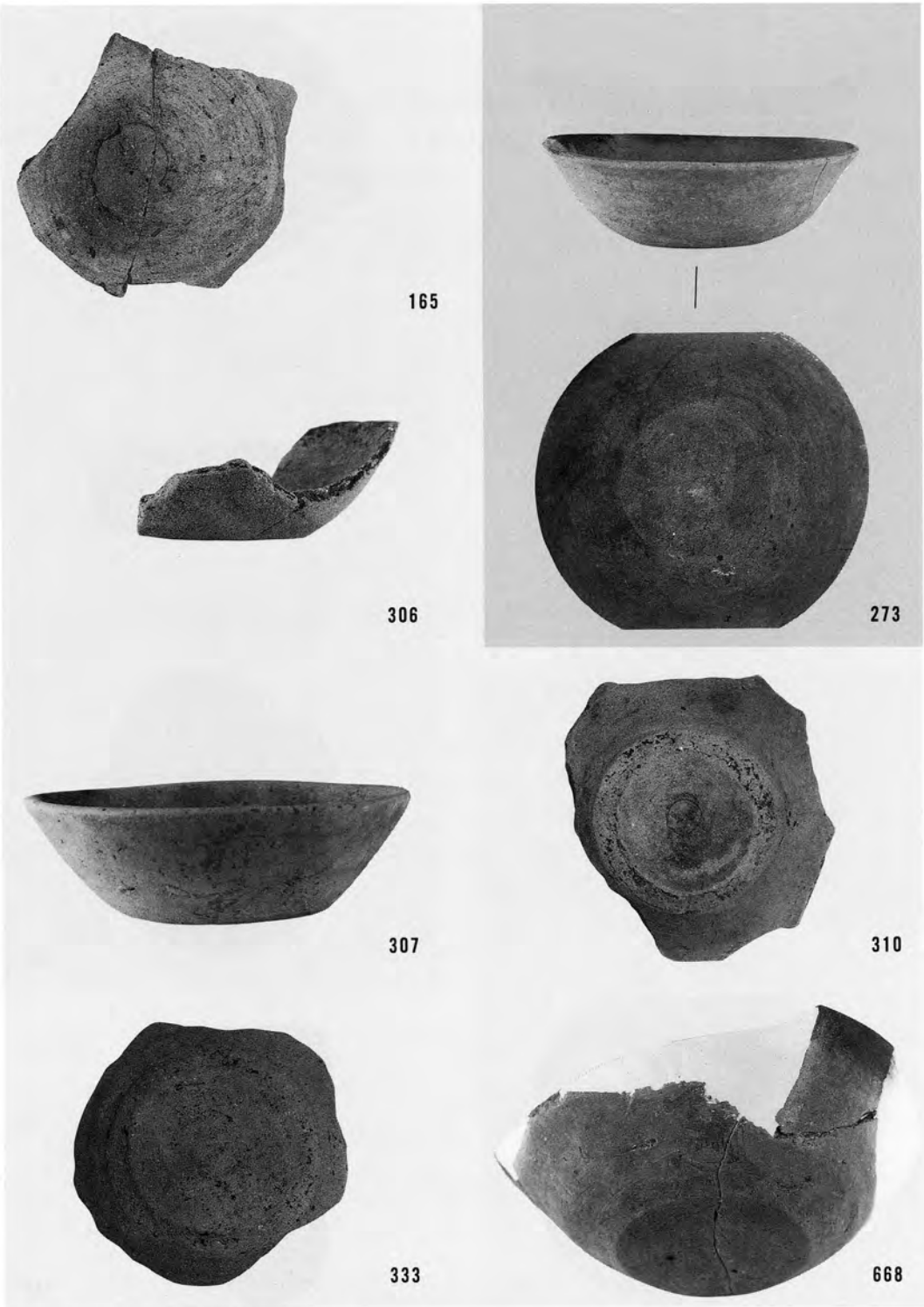




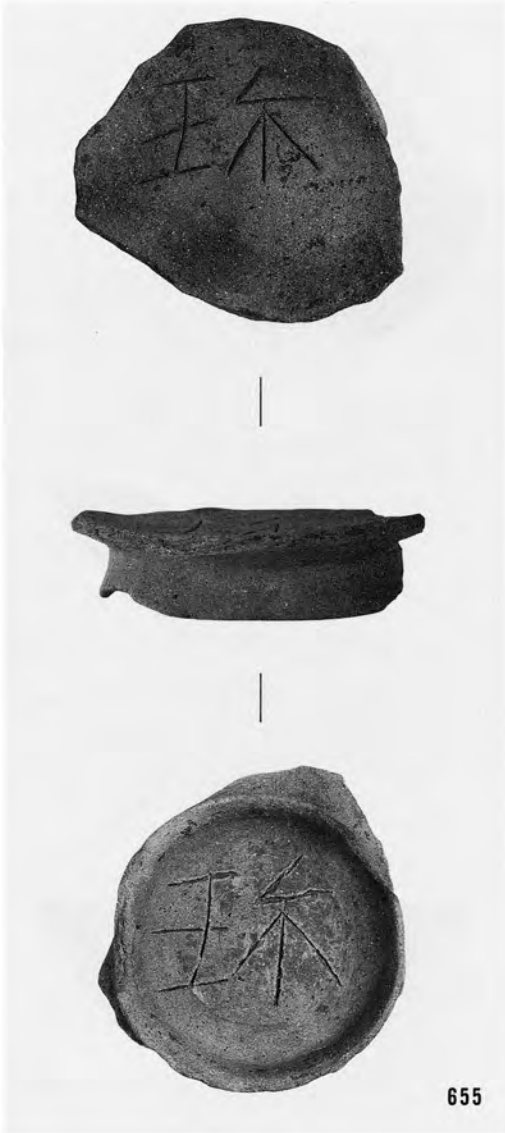


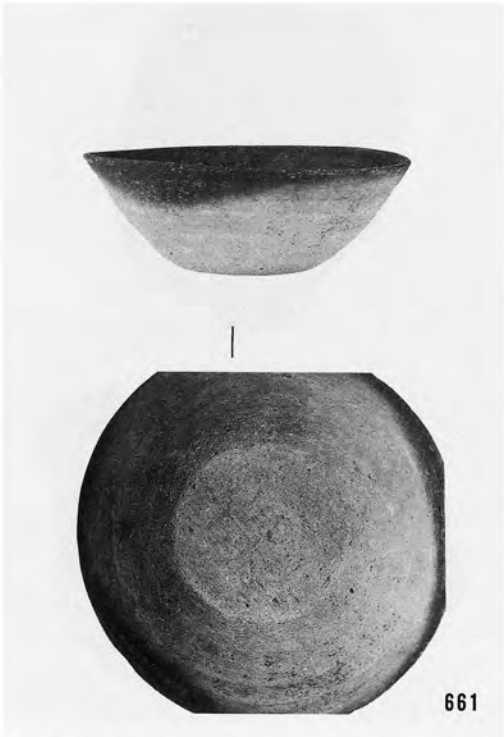


第17・22・25号住居跡出土墨書土器

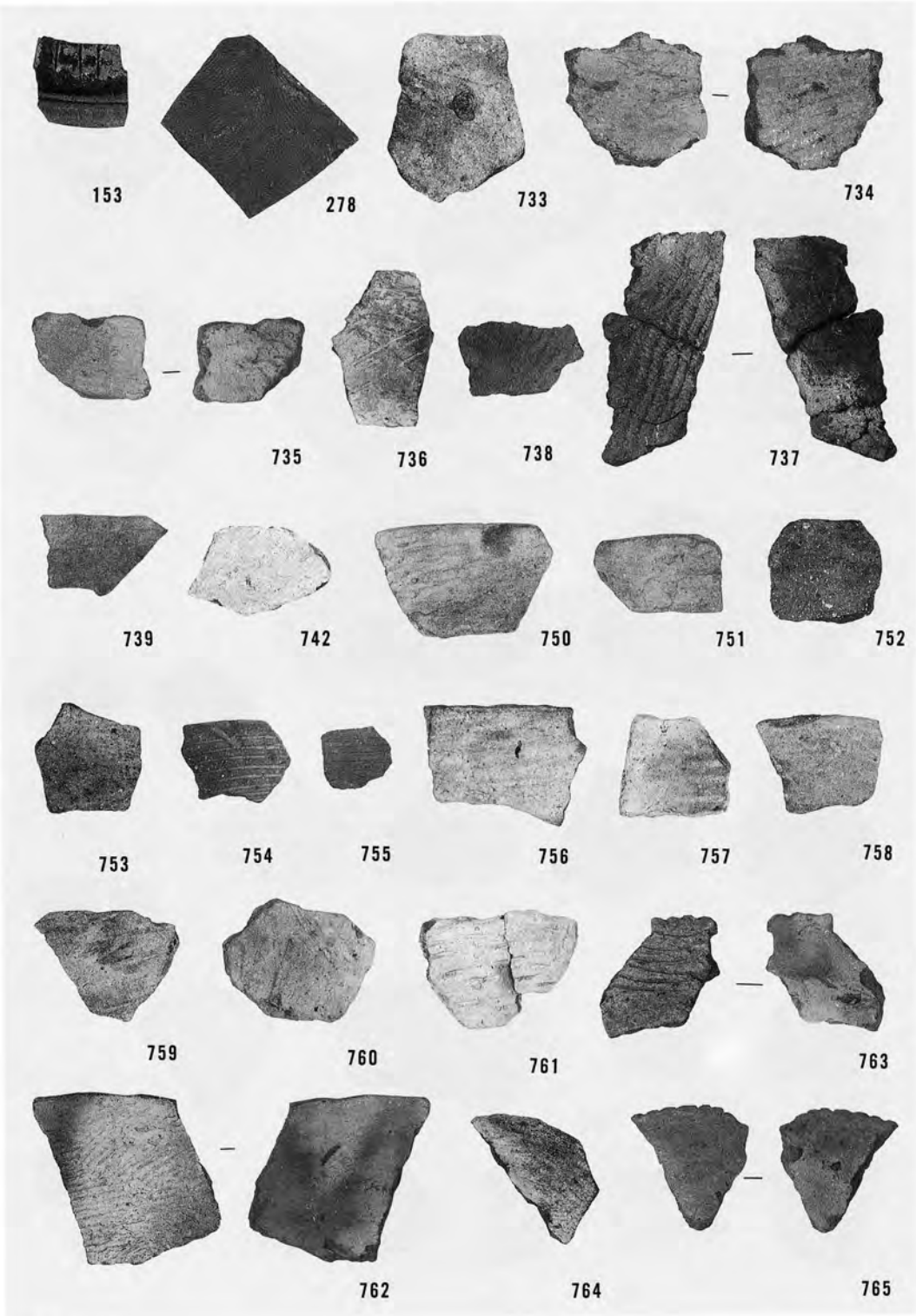


第22・31・34・35号住居跡出土墨書土器

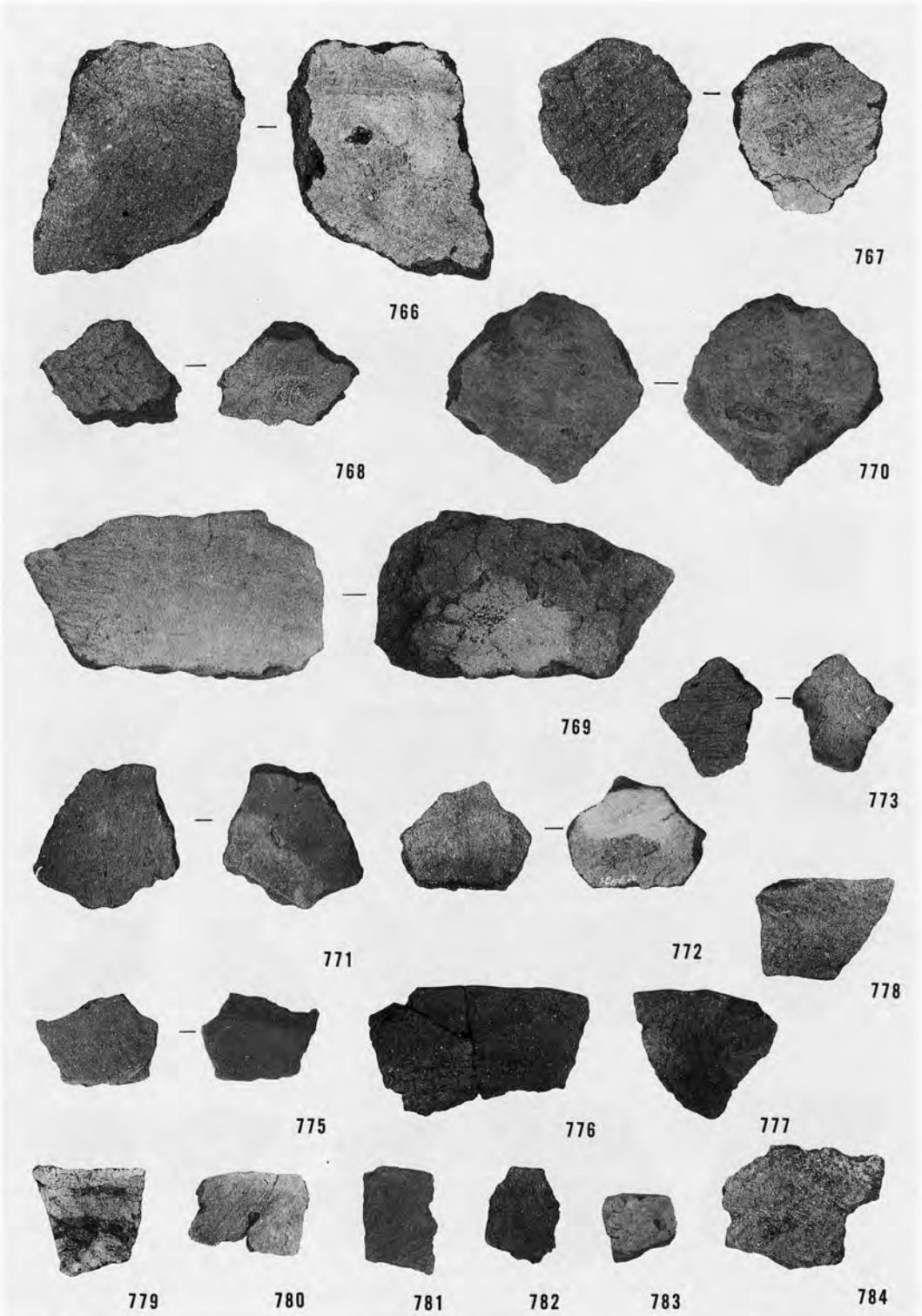




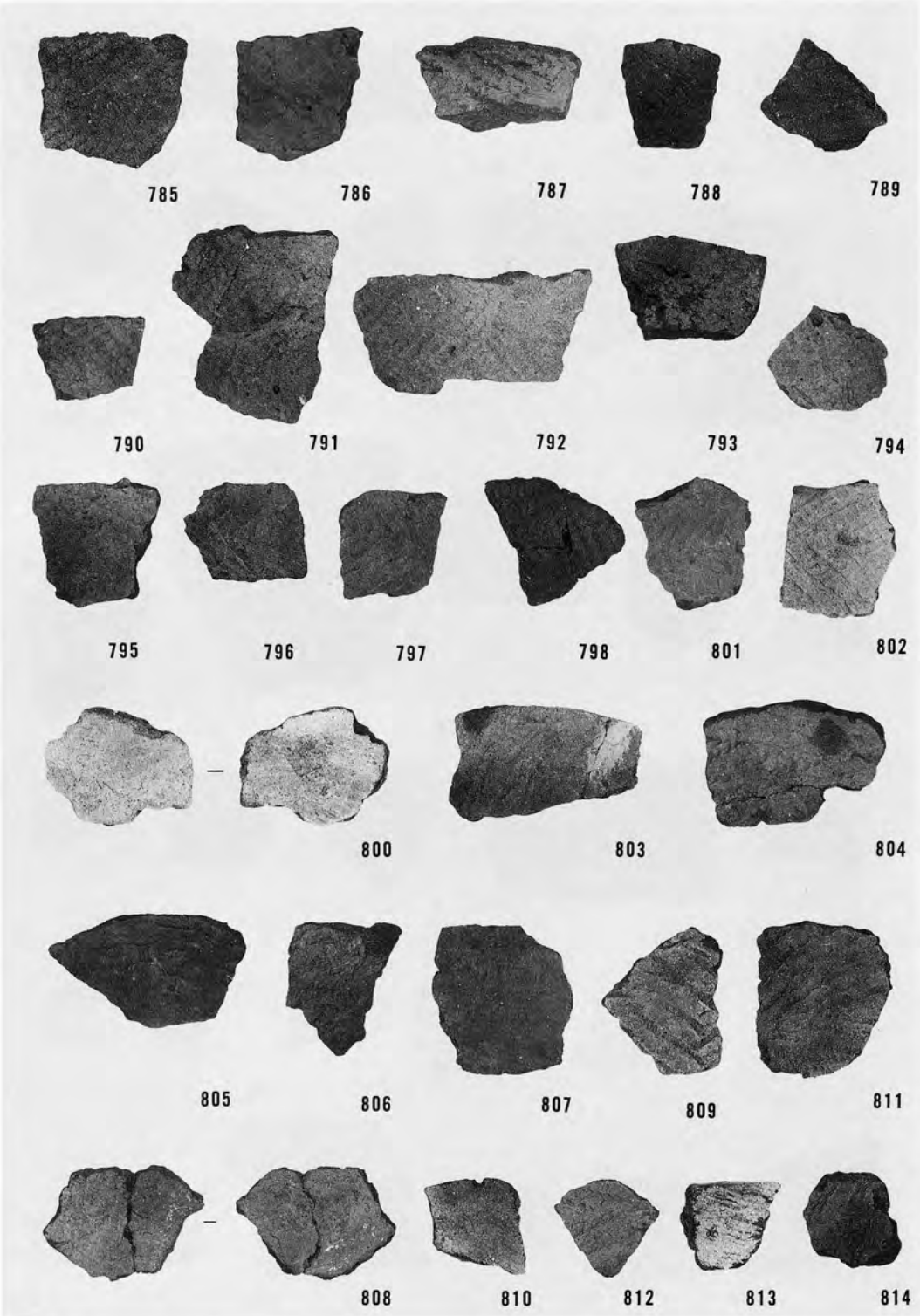
第42・74・75号住居跡，第7号土坑出土墨書・刻書土器


153
278
733
734
735
736
738
737
739
742
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
763
762
764
765

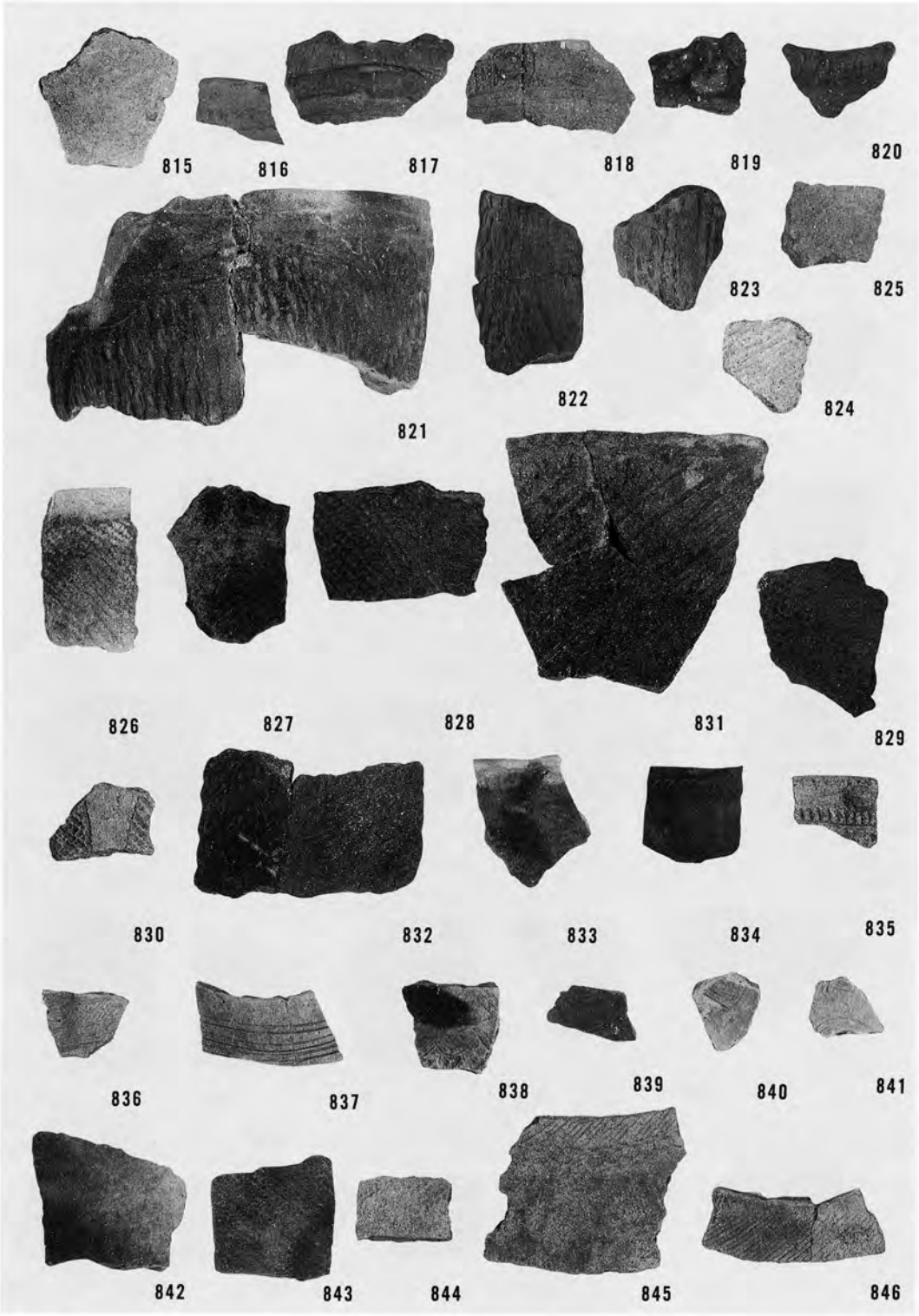
出土土器(1)


766
767
768
769
770
771
772
773
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784

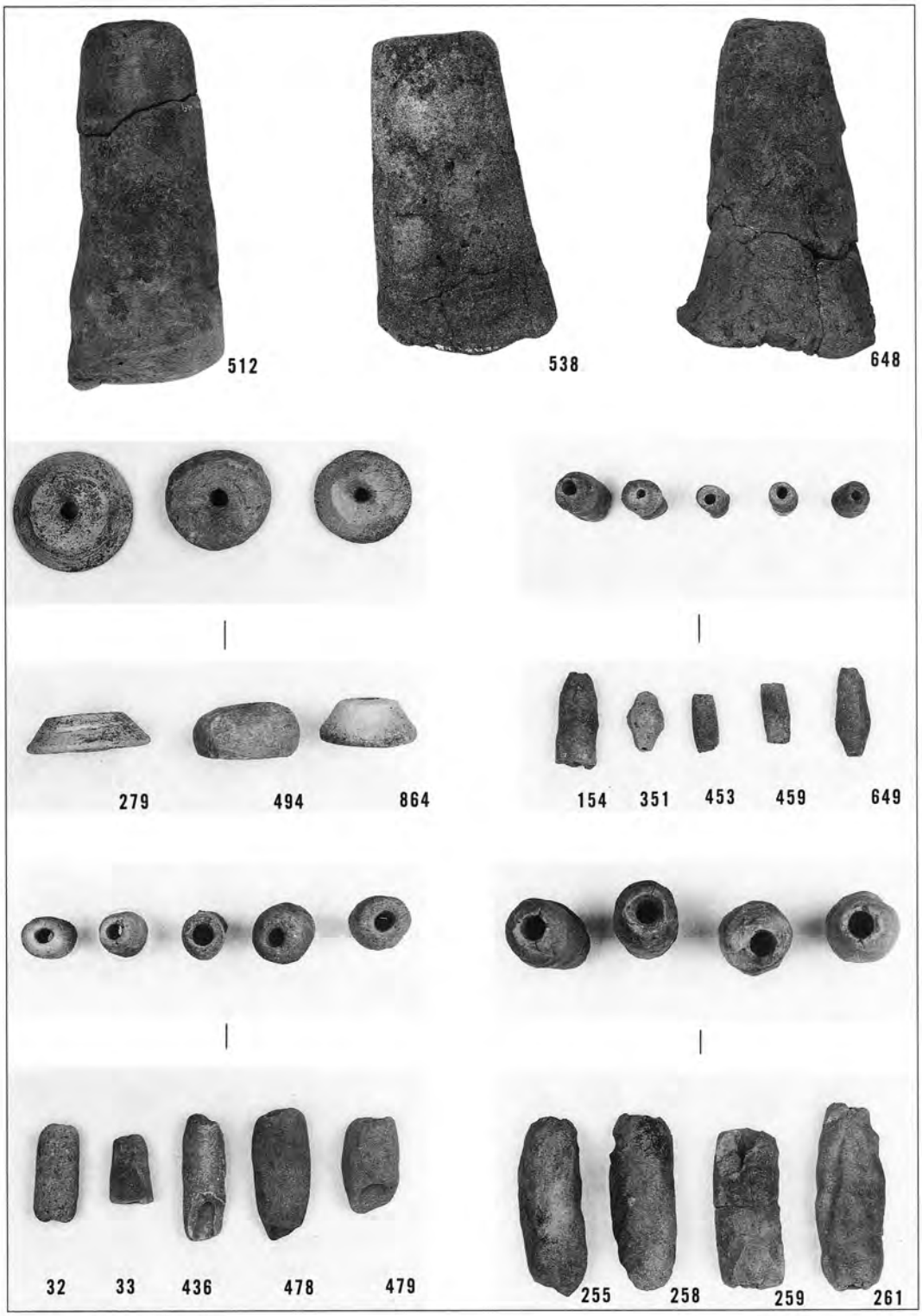
出土土器(2)


785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
801
802
800
803
804
805
806
807
809
811
808
810
812
813
814

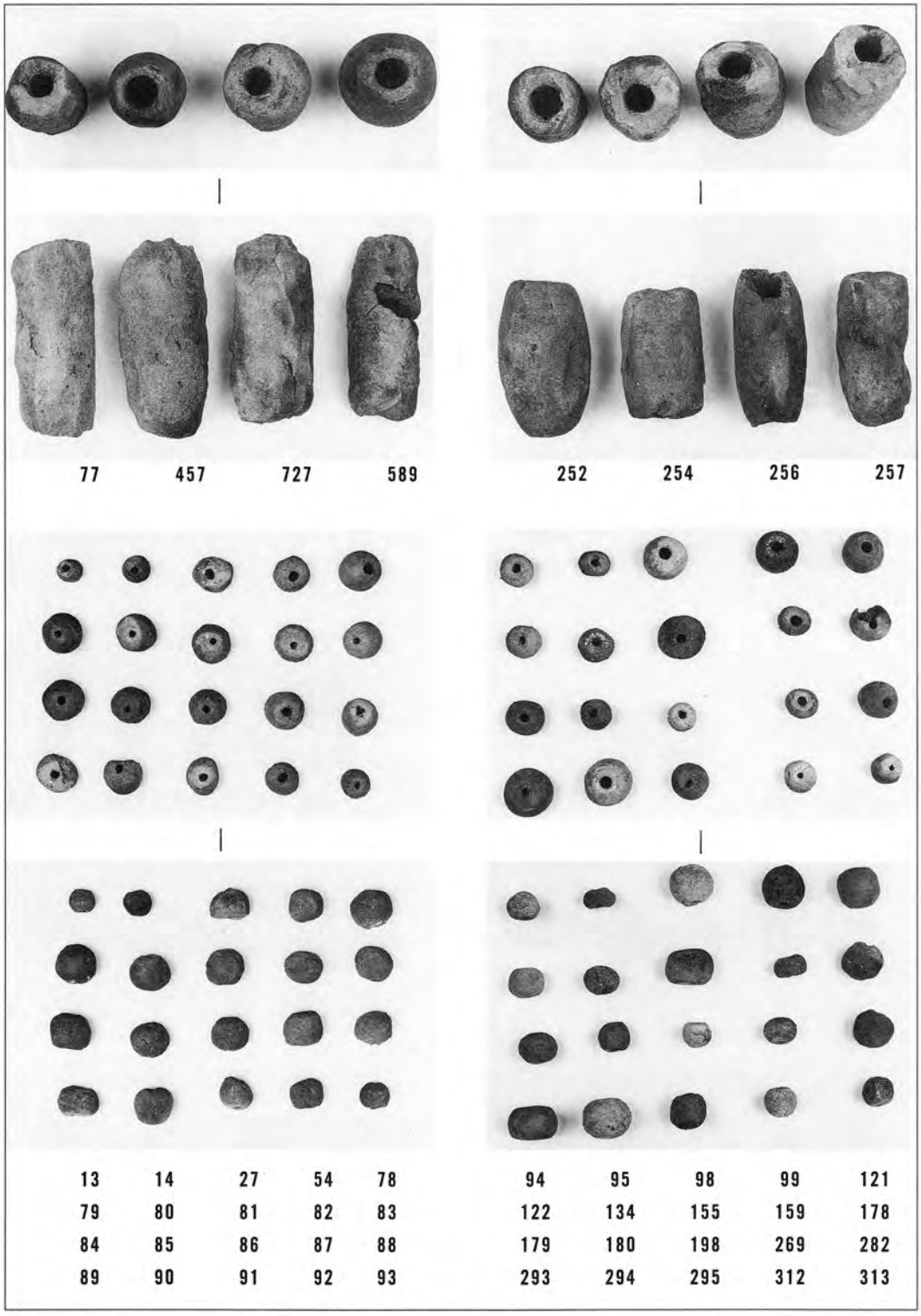
出土土器(3)


815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
831
829
830
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846

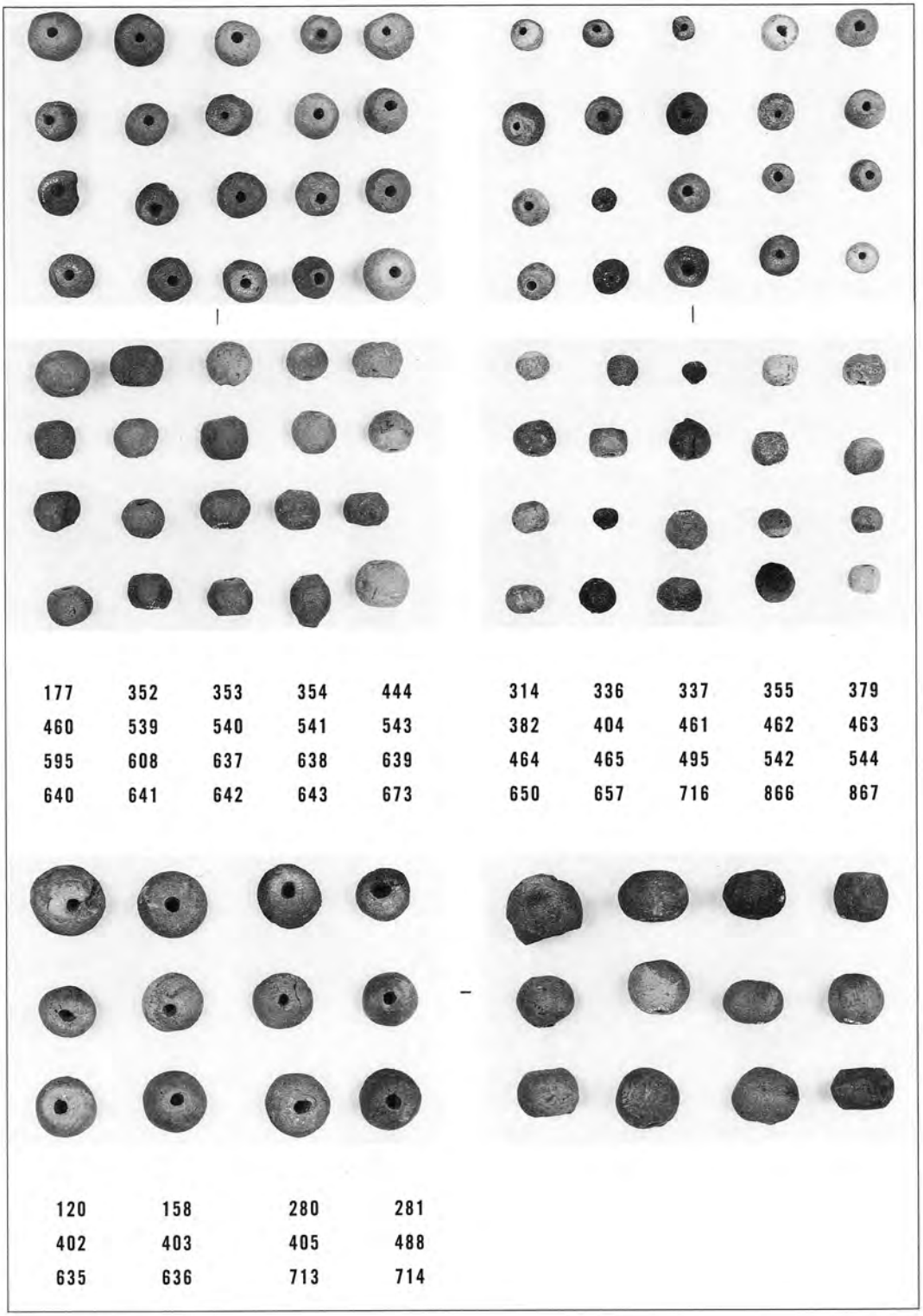
出土土器(4)


512
538
648
279
494
864
154
351
453
459
649
32
33
436
478
479
255
258
259
261

出土土製品(1)


77 457 727 589
252 254 256 257
13 14 27 54 78
79 80 81 82 83
84 85 86 87 88
89 90 91 92 93
94 95 98 99 121
122 134 155 159 178
179 180 198 269 282
293 294 295 312 313

出土土製品(2)

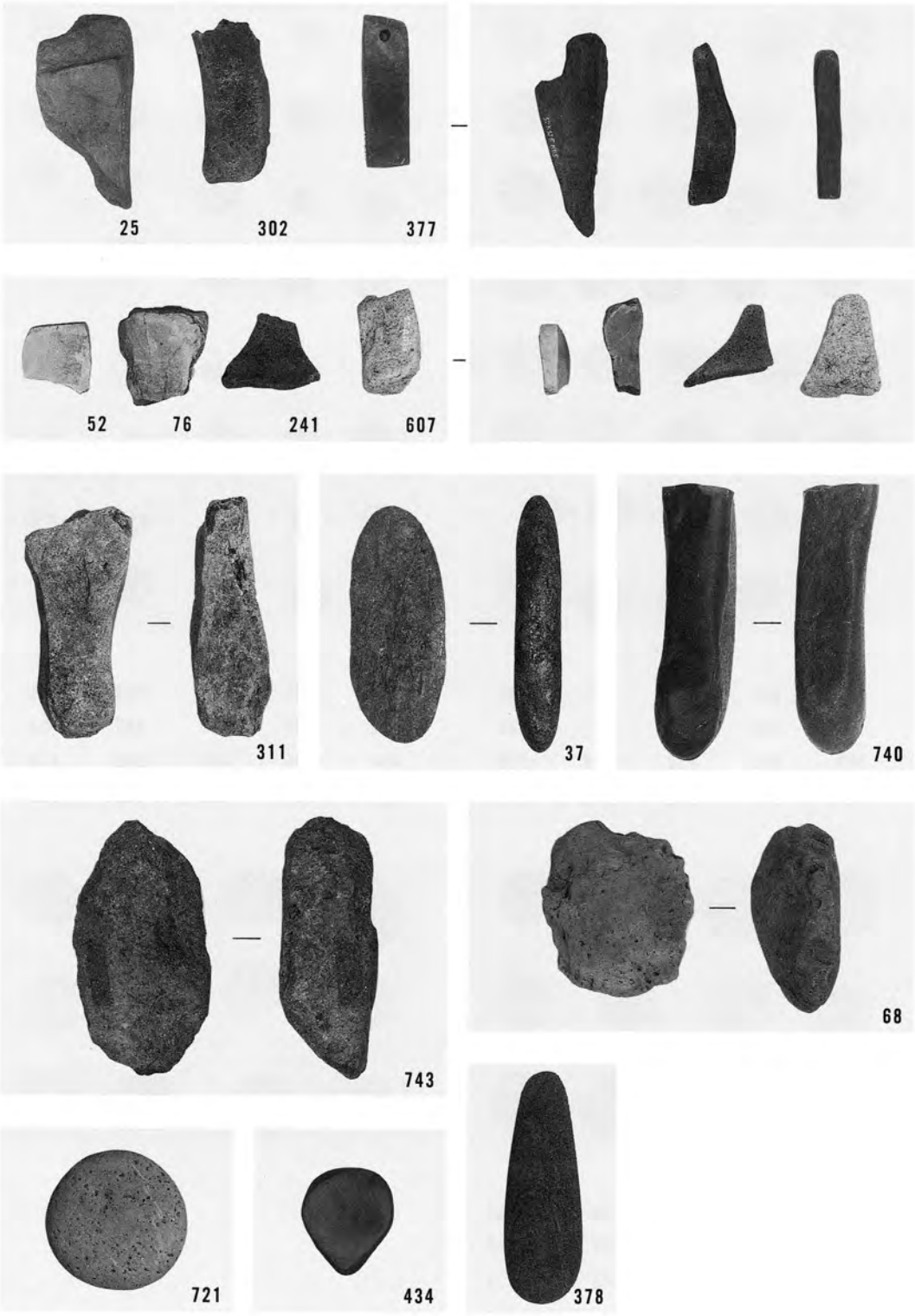


177 352 353 354 444
460 539 540 541 543
595 608 637 638 639
640 641 642 643 673

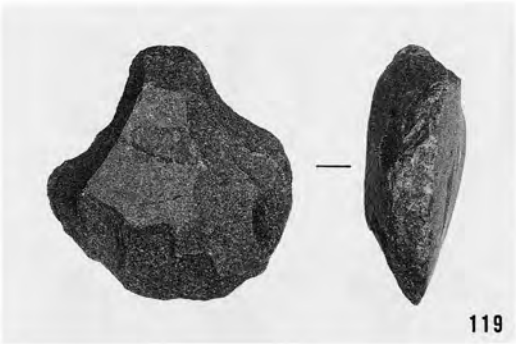
314 336 337 355 379
382 404 461 462 463
464 465 495 542 544
650 657 716 866 867

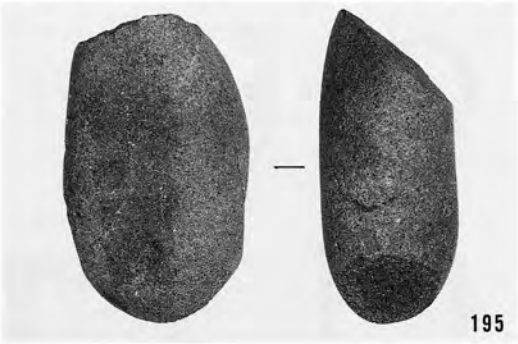
120 158 280 281
402 403 405 488
635 636 713 714

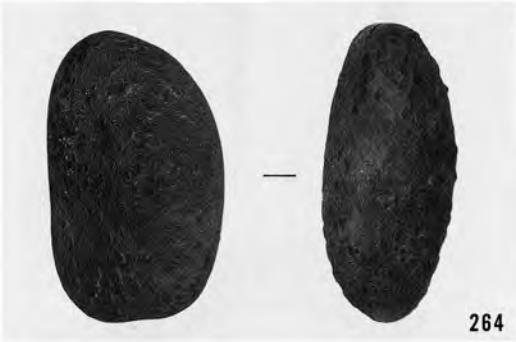
出土土製品(3)

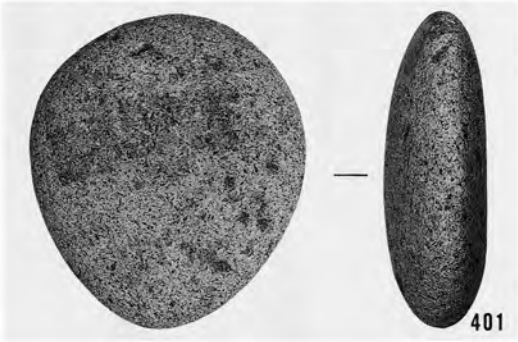


出土石器・石製品(1)

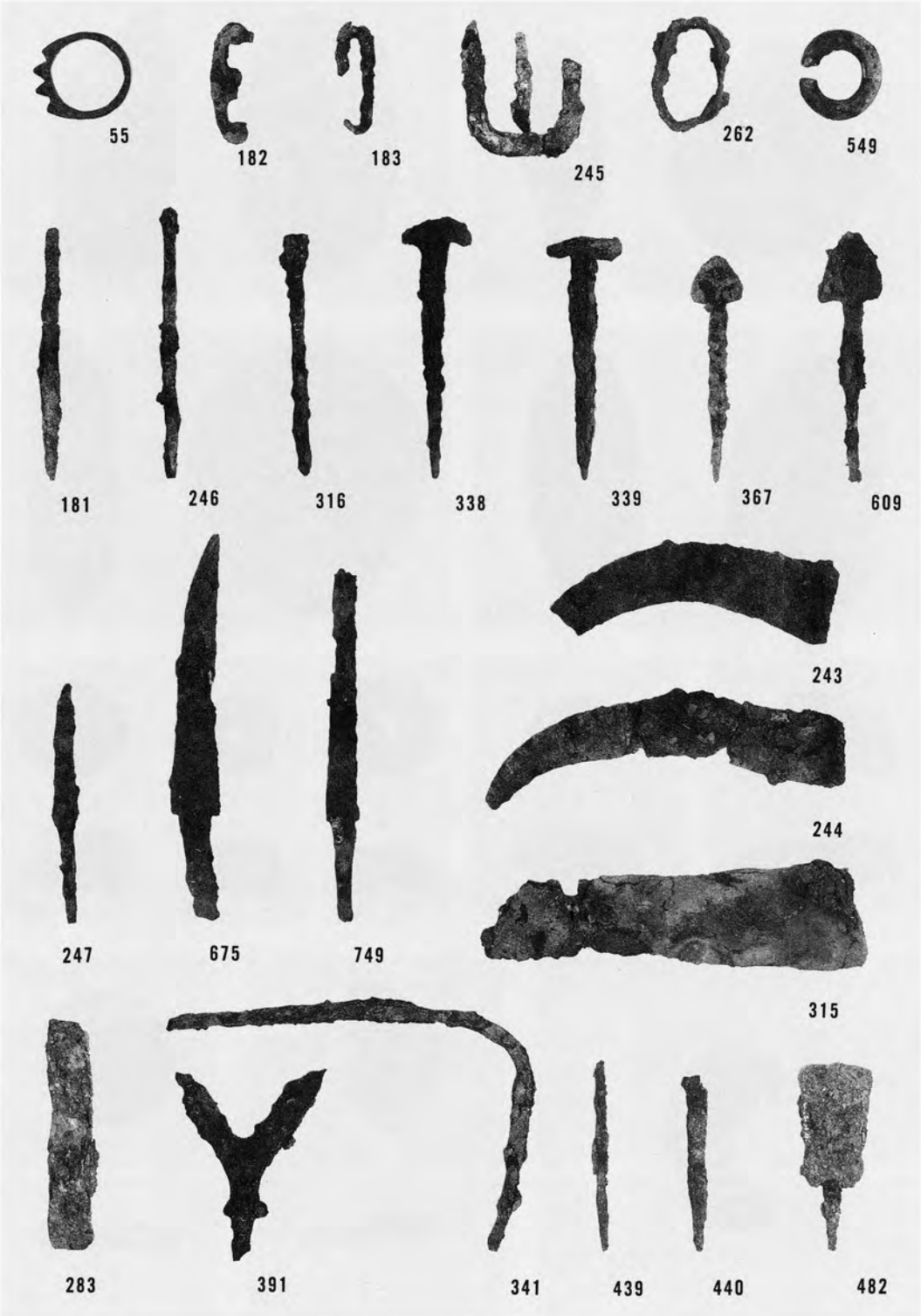








出土石器・石製品(2)


55
182
183
245
262
549
181
246
316
338
339
367
609
243
244
247
675
749
315
283
391
341
439
440
482

出土金属製品

茨城県教育財団文化財調査報告第74集

一般県道新川江戸崎線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

柏 木 古 墳 群

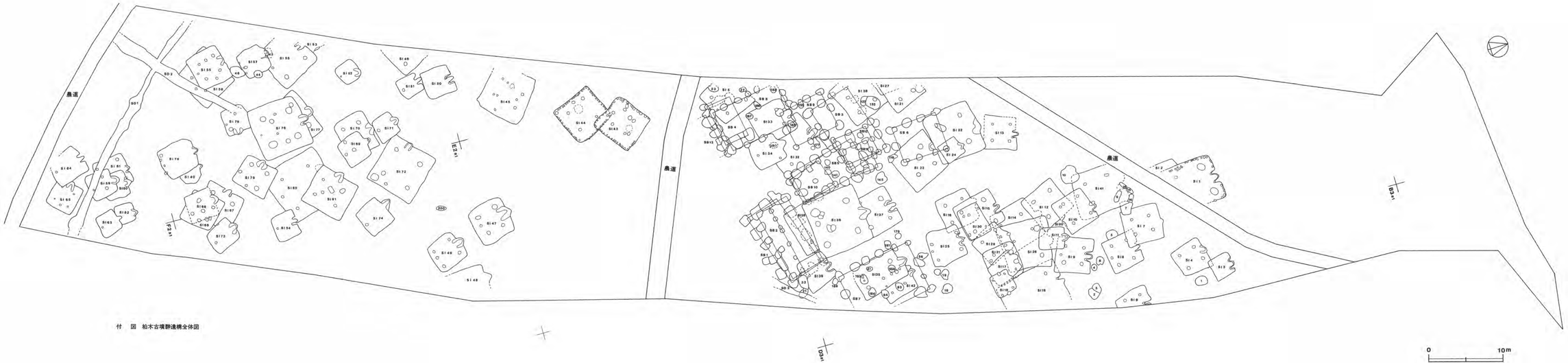
平成４年３月25日印刷
平成４年３月31日発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町３丁目４番57号
ＴＥＬ　0292－25－6587
印　刷　株式会社　三栄印刷
水戸市谷津町１－50
ＴＥＬ　0292－52－6501

付　　図

茨城県教育財団文化財調査報告第74集

柏木古墳群遺構全体図



付　図　柏木古墳群遺構全体図